HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究論集 第25号 全1冊
Citation	研究論集, 25
Issue Date	2026-01-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98755
Type	journal
File Information	00-0_rjgshhs_25_all.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 2435-2799

北海道大学大学院文学院

研 究 論 集

Research Journal of the Graduate School of Humanities and Human Sciences

第 25 号

2026

ISSN 2435-2799

研究論集

Research Journal of the Graduate School of Humanities and Human Sciences

北海道大学大学院文学院

目　次

集団がもつ信念や知識をめぐる論争の概観
── Summativism と Non-Summativism の観点から ── …… 久保田　琉　惟　(1)

生物的目的に根差した予測処理の限界 …… 菅　野　裕　暉　(19)

フッサール『算術の哲学』における数と時間との関係 …… 深　尾　紘　平　(35)

非日常と日常
── スウェットロッジの祈りが喚起させること …… 間　宮　望　恵　(47)

アドルノのテクスト戦略における〈Farbe（色）〉への眼差し
──「形式としてのエッセー」を中心に …… 日　下　雅　貴　(67)

ズレ，歌唱，鈍感な演技
── 賈樟柯の『一瞬の夢』をめぐって …… 王　　泰　睿　(87)

ベラルーシ語における HAVE 動詞 мець
── 譲渡不可能所有を中心に ── …… 孫　　拓　未　(103)

be willing to の語法に関する考察：
コーパスによるアプローチ …… 池　田　拓　誉　(129)

数量詞の付加に伴う限界性解釈による動詞の分類 …… 張　　琴　琴　(147)

台湾華語における語順類型
── 目的語の認定と動詞述語文を中心に ── …… 中　村　真衣佳　(161)

日本語のヴォイス体系における再帰態の妥当性の検討 …… 黄　　銘　君（187）

アラビア語シャーム方言における接辞の意味機能変化についての考察
── フスハーとの比較分析を通じて ── …… アリ　ネスリン（209）

広東省東部揭陽方言の音韻に関する記述的研究 …… 呉　　暁　輝（237）

チャイコーフスキイの交響曲第１番における民謡旋律
── ソナタ形式における展開法の分析とその音楽的意味 ── … 池　田　航　輝（275）

ソーシャルメディアが現代の母親に与える影響
── フェミニズム視点による欧米の研究動向 ── …… 比　嘉　麻　理（297）

──── 以下縦組 ────

『論衡』における漢事に関する考察 …… 凌　　玲　（1）

改作する安部公房「友達」
── その人物造形と共同体概念を巡って ── …… 李　　楚　妍　（13）

「レール」から「曠野の中」へ
── 北川冬彦「長編叙事詩」試論 …… 寺　本　真太朗　（27）

玄鉄絢『少女セクト』論
── ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成 ──
…… 郭　　如　梅　（49）

Contents

An Overview of Debates on Group Beliefs and Group Knowledge:
From the Perspectives of Summativism and Non-Summativism ····· *Rui KUBOTA* (1)

Limitations of Predictive Processing Based on Biological Objection····· *Hiroki KANNO* (19)

Number-Time Relationship in Husserl's *Philosophy of Arithmetic* ····· *Kohei FUKAO* (35)

The extraordinary and ordinary: what the sweat lodge prayer incites ····· *Moe MAMIYA* (47)

Attention to *Farbe*:
Adorno's Textual Strategy in "The Essay as Form"····· *Masaki KUSAKA* (67)

Jia Zhangke's *Xiao Wu*: Disjunction, Singing, and Inexpressive Acting ···· *Tairui WANG* (87)

The HAVE Verb мець in Belarusian: Focusing on Inalienable Possession.···· *Takumi SUN* (103)

A Study on the Usage of be willing to: A Corpus-Based Approach ····· *Hirotaka IKEDA* (129)

A Classification of Verbs According to Telicity Interpretations
Induced by Quantifier Addition····· *Qinqin ZHANG* (147)

The typology of word order in Taiwanese Mandarin
—Predicate constructions with transitive and intransitive verbs—···· *Maika NAKAMURA* (161)

A Study on the Validity of the Reflexive Voice
in the Japanese Voice System ····· *Mingjun HUANG* (187)

A Study on the Semantic and Functional Change of Affixes
in the Shami Dialect of Arabic A Comparative Analysis with fusʿħa ····· *Nesrin ALI* (209)

A Descriptive Study of the Phonology of the Jieyang
Dailect in Eastern Guangdong ····· *Xiaohui WU* (237)

Folksong-melody in Tchaikovsky's 1st Symphony:
Analysis of development technique in sonata form and
its musical meaning ····· *Koki IKEDA* (275)

Social Media and Its Impact on Contemporary Motherhood
— Feminist Perspectives in Western Research — ····· *Mari HIGA* (297)

———— The following is vertically listed ————

An Inquiry into the Han Affairs Discussed in *Lunheng* ····· *Ling LING* (1)

On Character Design and the Concept of Community:
KōbōAbe's Revising *Friends* ····· *Chuyan LI* (13)

From Rail to In the Wilderness:
A Critical Study of Fuyuhiko Kitagawa's
"Long Narrative Poems" ····· *Shintaro TERAMOTO* (27)

The Study of Kenn Kurogane's Shōjo Sect
—Reorganization of Lesbian Pornography in the 2000s ····· *Rumei GUO* (49)

10.14943/rjgshhs.25.l 1

集団がもつ信念や知識をめぐる論争の概観

── Summativism と Non-Summativism の観点から ──

久保田　琉　惟

要　旨

本論文では，集団がもつ信念や知識の分析をめぐり，英米圏の認識論，特に社会認識論という分野でなされている論争を概観し，当該分野の展望を論じる。従来，英米系の認識論では「知識とは何か？」という問いに答えるさい，個人がもつ信念や知識の分析に焦点が当てられてきた。しかし，日常生活において「A 社は，その戦略によって倫理的な問題は生じないと信じている」や「図書委員会は，予算が足りないことを知っている」といった言明に表されるように，企業や委員会といった集団への信念や知識の帰属が行われることは多い。このような場合，当該信念・知識の所有者として，A 社や図書委員会という集団が想定されているように思われる。そこで，個人がもつ知識だけではなく，「集団的信念，集団的知識とは何か？」という問題も議論されている。

集団的信念に関する立場は，「ある集団は，その集団の構成員個人がもつ信念とは別に，信念をもつのか？」という問いへの応答に応じて，summativism と non-summativism の 2 つに大別される。同様にして，上述の問いに対する答え方に応じて，集団的知識に関する理論にも 2 つの立場が存在する。つまり，集団的信念と集団的知識のそれぞれに summativism と non-summativism が存在する。しかし，集団的信念・知識に関する 2 つの立場それぞれに問題点が存在する。本論文では，集団的信念・知識に関するこれら 2 つの立場の主張と問題点を概観し，当該分野の展望を論じる。

1．はじめに

本論文では，集団がもつ信念や知識（以後，集団的信念，集団的知識とする）の分析をめぐり，英米圏の認識論，特に社会認識論という分野でなされている論争を概観し，当該分野の展望を論じる。従来，英米系の認識論では「知識とは何か？」という問いに答えるさい，個人が

もつ信念や知識の分析に焦点が当てられてきた。しかし，日常生活において「A 社は，その戦略によって倫理的な問題は生じないと信じている」や「図書委員会は，予算が足りないことを知っている」といった言明に表されるように，企業や委員会といった集団への信念や知識の帰属が行われることは多い。このような場合，当該信念・知識の所有者として，A 社や図書委員会という集団が想定されているように思われる。そこで，個人がもつ知識だけではなく，「集団的信念，集団的知識とは何か？」という問題も議論されている[1]。より具体的には，「ある集団は，その集団の構成員個人がもつ信念・知識とは別に，集団的信念・集団的知識をもつのか？」といった問題が議論されている。この問題に取り組む認識論は，集団認識論（epistemology of groups，collective epistemology）と呼ばれている。

集団認識論では，集団的信念・知識をどのように分析しているのだろうか。集団的信念に関する立場は，「ある集団は，その集団の構成員個人がもつ信念とは別に，信念をもつのか？」という問いへの応答に応じて，summativism と non-summativism の 2 つに大別される。Summativism においては，上述の問いに肯定的な答えが与えられ，「集団的信念は集団の構成員がもつ信念を集約したものにすぎない」と分析される。一方，Non-summativism においては，上述の問いに否定的な答えが与えられ，「集団的信念は必ずしも集団の構成員がもつ信念を集約したものではない」と分析される。同様にして，上述の問いに対する答え方に応じて，集団的知識に関する理論にも 2 つの立場が存在する。つまり，集団的信念と集団的知識のそれぞれに summativism と non-summativism が存在する。しかし，集団的信念・知識に関する 2 つの立場それぞれに問題点が存在する。本論文では，集団的信念・知識に関するこれら 2 つの立場の主張と問題点を概観してゆく[2]。

本論文の論述の概要は以下の通り。まず，集団認識論が想定する集団がどのようなものかを整理する（第 1 節）。その上で，集団的知識についての summativism の概要と問題点を整理する（第 2 節）。次いで集団的知識についての non-summativism の概要と問題点についても整理する（第 3 節）。最後に，本論文の内容をまとめ，今後の展望について論じる（第 4 節）。

---

[1] 集団が，個人と同様にして信念をもつことができるのかという問題は議論が続いている。この議論においては，2 つの立場が対立している。集団は個人と同様に信念をもつことはできず，集団に帰属される信念は比喩的なものであるか，信念ではなく受容であると考える論者は rejectnist と呼ばれる。一方，集団は実際に信念をもつことができると考える論者は believer と呼ばれる。本論文はこの点に立ち入らないが，この論争の概観については，Gilbert（2002）や Tollefsen（2003），Backes（2021）などを参照。

[2] 近年，Lackey（2016，2021）によって，これら 2 つの立場が抱える難点を克服しようとする理論が提示されている。しかし，この理論にも様々な難点が指摘されている（Kallestrup 2022 など）。紙幅の都合上，本論文はこの議論については立ち入らず，summativism と non-summativism の見解のみを紹介する。

2．集団認識論が想定する集団

本論文の目的は，集団的知識をめぐる論争を概観することである。その準備のために，本節では，集団認識論においていかなる集団が想定されているのかを確認する。まず，集団の存在身分について，集団認識論では，集団の実在論を支持しているように思われる。たとえば，Kallestrup（2022）は集団的知識を論じるにあたり，集団の実在論を支持している。その理由は，日常的な言語実践や社会科学の理論を鑑みると，明らかに集団の存在を前提しているからである[3]。

それでは，集団の実在論を採用するとして，具体的に集団とは何を指しているのだろうか？ひとえに集団といっても，「日本に住んでいるアメリカ国籍の人々」や「札幌駅に向かっている人々」といった，単なる個人の集合[4]だけでなく，「北海道日本ハムファイターズ」や「最高裁判所」，「北海道大学環境委員会」といった，なんらかの構造をもつ，組織立った集団も存在する。集団認識論では一般に，後者の集団がもつ知識を分析の対象としていることが多い（O’Connor 2023）[5]。

組織立った集団については，Ritchie（2013，2015）が詳細な説明を与えている。Ritchie（2015）は，「札幌駅に向かっている人々」といった単なる個人の集合と野球チームといった集団との違いを複数指摘する。それら違いのうち，本論文の議論に重要な 2 点を紹介する。 1 点目は，前者が構造化されていないのに対し，後者は構造化されていることである。札幌駅に向かっている人々という集合は，札幌駅に向かっているという特徴をもつ人々を集めただけである。一方，野球チームにおいては，投手や野手，コーチ，監督といった役割の違いがあり，それぞれが連関しあうことで構造をなし，一つのチームを構成している。Ritchie は，そのような構造は節点（node）と辺（edge）で構成されると表現する。ここで，節点は集団内で個人が果たす役割を，辺は節点どうしの関係を表している。つまり，集団は，構成員個人が果たす役割と，その役割間の関係によって構造づけられている。野球チームの他にも，たとえば生徒会といった集団もそのような観点から説明することができる。ある生徒会では，生徒会長や副生徒会長，書記，

---

[3] 集団が実在することと，集団が実在すると想定することにはギャップがある。しかし，Kallestrup はこの点について深く立ち入っていない。本論文でも，この点については立ち入らない。

[4] Kallestrup（2022）は，このような集団を，特徴集合（feature collectives）や社会種（social kinds）と呼んでいる。特徴集合や社会種は，その構成員がなんらかの特徴を共有している集団とされる。

[5] Kallestrup（2022）は，後述する summativism を支持する論者は，伝統的に集団を単なる個人の集合として理解してきたと指摘している。たしかに，Quinton（1975）は，集団を「社会的全体（social wholes）」として理解し，summativism 的な見解を主張している。しかし，近年の議論では，summativism の擁護者であっても，集団ということで，構造化された集団を念頭に置いて議論している（Broncano-Berrocal 2025）。

会計といった役割を，生徒会の構成員が分担し，それら役割は関係しあっている。一方，「札幌駅に向かっている人々」といった集合を成す個人が，その集合内において一定の役割を果たしているとはいえないし，そのような集合において，役割間の関係も存在しない。

Ritche が指摘する，単なる個人の集合と集団の違いの 2 点目は，前者が集団的志向性（collective intentionality）を要求しないのに対し，後者はそれを要求することである。ここでの集団的志向性とは，集団の目的を果たすために，構成員が共有する志向状態である。集団的志向性をもつがゆえに，集団の構成員は「他の構成員も，集団の目的達成のために各々の役割を果たすという意図をもっている」という信念に基づき自分の役割を果たす意図をもつ。たとえば，野球チームは試合に勝つという目的をもっており，チームの構成員はこの目的を果たす志向性を共有している。また，このような集団的志向性をもつからこそ，チームの構成員は「他の構成員も，試合に勝つために各々の役割を果たすという意図をもっている」という信念に基づき，野手や投手といった役割を果たす意図をもつ。たしかに，「札幌駅に向かっている人々」といった集合を成す個人にこのような集団的志向性が求められるとは思われない。

このような集団理解は，集団的信念について論じている Schmitt（1994）が提示した集団像とも合致する。Schmitt は，集団的信念を論じるさい，集団を chartered group として考えている。Chartered group とは，特定の行為を遂行するために設立された集団である。Schmitt によると，chartered group は集団を律する規則や方針である憲章（charter）と，集団の目的である任務（office）をもつ[6]。たとえば，野球チームには，任務（office）として試合に勝つという目的，憲章としてチーム内規則といったものがあるだろう。Kallestrup（2022）は Ritche（2013，2015）が主張する構造化された集団と，chartered group は，次のように理解することで合致すると考えている。集団がもつ目的に基づき，構造化された集団は集団的志向性をもつ。それゆえ，集団の構成員は「他の構成員も，集団の目的達成のため各々の役割を果たすという意図をもっている」という信念に基づき自分の役割を果たす意図をもつ。さらに，そのような意図をもつことで，構成員は自分の節点（役割）を果たし，辺（役割間の関係）も生ずる。

本節の内容をまとめよう。本節では，集団認識論において集団がどのように理解されているかを確認した[7]。その集団には，固有の目的と，その集団を律する何らかの規則がある。集団の構成員はその目的を果たすために，集団的志向性を共有する。さらに，各構成員は目的達成の

---

[6] Tuomela（2011）は，このような集団の目的をエートス（ethos）と呼んでいる。

[7] Lackey（2021）は，集団認識論が対象とする集団として，構造化されているか否かという区別は有益ではないと主張している。その代わりに，彼女は審議や推論が行える集団（deliberatibe groups）を対象とするとしている。その理由を簡潔に紹介すると，そのような集団に対しては，合理的か否か，責任は問えるかといった規範的な評価を下すことができるからである。ここで論証をすることはできないが，本論文で紹介した構造化された集団は，審議や推論を行える集団であるともいえると筆者は考えている。

ために果たすべきなんらかの役割を担っており，その役割間にはなんらかの関係性がある。本論文の冒頭で，「図書委員会は，予算が足りないことを知っている」という委員会への知識帰属を紹介した。典型的な委員会は，以上のような条件を満たす集団といえるだろう。集団認識論では，このような集団を対象としていることが多い。

3．Summativism とその問題点

本節では，集団的信念・知識に関する summativism という見解を概観する。Summativism には様々な形態があるが，一般的に，集団的信念・知識は，その構成員がもつ信念や知識に還元できると考えられている（Kallestrup 2022，Lackey 2021，Graf and Dang 2025）。つまり，summativism において，集団的信念や集団的知識は，構成員がもつ信念や知識を集約したものにすぎないと考えられている。そのため，集団的信念・知識を説明するために，個人がもつ信念や知識以外のものは必要ないという点で，summativism はデフレ主義であると言われることもある（Kallestrup 2022，Lackey 2016，2021）。Summativism 間で異なるのは，どのように構成員の信念や知識を集約するか，という方法である。たとえば，Lackey（2021）は，集団的信念に関する古典的な summativism として，次のようなものを挙げている：

⑴　ある集団 G が命題 p を信じている　iff　G の構成員の全員あるいは大半が p を信じている。

ここでは，集約の方法として，全会一致か，それに近いものを採用しているといえる。しかし，集約の方法として全会一致を採用することは厳しいように思われる。その理由を考えるために，たとえば，集団 G として Google を，p として「現在開発中の AI には倫理的な問題がある」という命題を想定してみよう。古典的 summativism に従うと，Google が「現在開発中の AI には倫理的な問題がある」と信じているといえるのは，Google の構成員の全員あるいは大半がそのように信じているとき，かつそのときに限るということになる。しかし，この要求は過剰である。Google の受付係といった，AI の開発に携わっていないスタッフが，このように信じている必要があるようには思われない。

そのため，Lackey はより穏健な summativism として，次のようなものを挙げている：

⑵　ある集団 G が命題 p を信じている　iff　G の構成員のなかには，p を信じている者がいる。

これ以外にも，様々な集約方法を考えることができる。その方法として，構成員の過半数がも

つ信念を集約する，主要な構成員がもつ信念を集約する，集団のトップのみがもつ信念を集約するといったものを想定することができる。たとえば，主要な構成員がもつ信念を集約するという方法を採用すると，全会一致よりも，Google が「現在開発中の AI には倫理的な問題がある」という信念をもつことを説明できているように思われる。Google の幹部たちがその信念をもっていれば，Google という集団にもその信念を帰属することができるというわけである。

集団的知識の summativism に関しても，集団的信念の summativism と同様，構成員がもつ知識を集約する方法に応じて，複数の形態がある。たとえば，集団的知識に関する穏健な summativism は次のように定式化されるだろう：

⑶　ある集団 G が命題 p を知っている　iff　G の構成員のなかには，p を知っている者がいる。

以上，集団的信念や集団的知識の summativism には，構成員がもつ信念の集約の方法に応じて，複数の形態があることを確認した。どの集約方法を採用するにせよ，summativism の要点は，集団的信念や集団的知識は，集団の構成員がもつ信念や知識に還元して説明されるということである。本論文では，集約の方法をどのように定めるべきか，という問題には立ち入らずに議論を進める。しかし，Graf and Dang（2025）によると，集約の方法にかかわらず，少なくとも次の 2 点にはあらゆる summativist が同意する：

⑷　ある集団 G が命題 p を信じている（知っている）ならば，少なくとも一人の構成員が p を信じている（知っている）。
⑸　ある集団 G の構成員すべてが命題 p を信じている（知っている）ならば，G は p を信じている（知っている）。

⑷は集団 G が p を信じているための必要条件を，⑸は集団 G が p を信じているための十分条件を表している。本論文では，summativism を，⑷と⑸の両方を採用する立場と理解する。

集団的信念や集団的知識の summativism は，よく知られた難点を抱えている。その難点とは，summativism が，集団的信念・知識と構成員がもつ信念や知識の間に乖離が生じることを説明できないことである。その問題は，乖離論証（divergence argument）によって示される。乖離論証には，⑷を否定するものと⑸を否定するものの 2 つが存在する。⑷の否定を示す乖離論証は，ある集団 G が p と信じている（知っている）にもかかわらず，集団 G の構成員の誰もが p を信じていない（知っていない）という状況があるということを示す論証である。⑸の否定を示す乖離論証は，集団 G の構成員すべてが p と信じている（知っている）にもかかわらず，集団 G が p と信じていない（知っていない）という状況があることを示す論証である。Summativism

では，集団に信念や知識が帰属されるとき，必ず構成員も当該信念や知識をもたなければならないとされる。しかし，乖離論証によって，集団的信念・知識と構成員がもつ信念や知識の間に乖離が生じることが示される。すなわち，集団にある信念や知識が帰属される一方で，構成員は当該信念や知識をもたないという乖離，あるいは，構成員全員がある信念や知識をもつ一方で，集団に当該信念や知識が帰属されないという乖離が生じることが示される。

まず，⑸の否定を示す乖離論証を見ていこう。集団 G の構成員すべてが p と信じている（知っている）にもかかわらず，集団 G が p と信じていない（知っていない）という状況として，次のような状況が想定できる：

（委員会事例）北海道大学には図書委員会と環境委員会があり，２つの委員会は同じ構成員をもつとする。また，それら２つの集団の構成員の全員が「北海道大学図書館は予算不足である」と信じている（知っている）。

⑸で示した十分条件に従うと，図書委員会と環境委員会の両方に対して，「北海道大学は予算不足である」という信念あるいは知識を帰属できることになる。図書委員会に対してそのような帰属が行われることに違和感はない。しかし，環境委員会に対してそのような帰属が行なわれることは直観に反する。

Kallestrup（2025）によると，⑸に関して乖離論証が成り立つ理由の一つは，上で紹介したような summativism は，構造化された集団がもつ特徴を捉えきれていないからである。たしかに，これまでに紹介した summativism は，前節で確認した構造化された集団以外にも適用できる。集団における過半数の構成員が信じていることを集約するとしよう。また，札幌駅に向かっている人々の過半数が「札幌駅には白いオブジェがある」と信じている，あるいは知っているとしよう。すると，summativism によれば，札幌駅に向かっている人々という集団は，「札幌駅には白いオブジェがある」ということを信じている，あるいは知っていることになる。前節で指摘したように，集団認識論で対象とする集団には，その集団固有の目的がある。その目的と関係がないような信念・知識を集団に帰属することはできないように思われる。そこで，⑸に対する乖離論証に対応するために，以下のような summativism を提示できるだろう[8]：

⑹　ある集団 G が命題 p を信じている（知っている）　iff　G には，G の構成員として，p と信じている（知っている）者がいる。

[8] この定式化は Kallestrup（2022，2025）を参考にした。Kallestrup 自身は，集約の方法として「かなりの数の構成員がもつ信念あるいは知識を集約する」というものを採用している。

⑹のように定式化された summativism であれば，どのような集約の方法を採用したとしても，構造化された集団の特徴を捉えることができる。⑹において，集団の構成員は，構成員として信念 p あるいは知識 p をもつことが要求される。これは，構造化された集団には目的があり，構成員には役割があることを反映している。また，⑹では，他の構成員も信念 p あるいは知識 p をもっているという信念あるいは知識が要求される。これは，構造化された集団には集団的意図性があることを反映している。

それでは，⑹が⑸に対する乖離論証にどのように対応するのかを確認しよう。上で挙げた図書委員会と環境委員会の例では，２つの委員会は同じ構成員をもち，構成員の全員が「北海道大学図書館は予算不足である」と信じている，あるいは知っている。⑹に従うと，図書委員会にはその信念あるいは知識が帰属されるが，環境委員会には帰属されないことを説明できる。なぜなら，構成員は「北海道大学図書館は予算不足である」という信念あるいは知識を，図書委員会の目的を鑑み，図書委員会の構成員としてをもつ一方，環境委員会としてはもたないからである。こうして，summativism は⑸に対する乖離論証に対応することができる。

Summativism にとってより深刻な問題となる乖離論証は，⑷を否定するものである。そのような乖離論証は，ある集団 G が p と信じているにもかかわらず，集団 G の構成員の誰もが p を信じていないという状況があるということを示す論証であった。その例として，次のような状況を考えてみよう[9]：

（人事部事例）ある会社の人事部において，誰が昇格するかを決める会議が行われた。数時間の会議ののち，人事部は「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と共同で同意した。しかし，その人事部の構成員の誰もが，そのようには考えていない。人事部の構成員は全員，「X は優秀である」とだけ信じていたのであり，「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と信じているわけではなかった。

人事部事例では，人事部という集団としては，「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と信じているが，その集団の構成員でそのように信じている者は１人もいない。つまり，集団には信念 p が帰属される一方，構成員がもつ信念 p を集約するいかなる方法を採用したとしても，そもそも信念 p をもつ構成員がいないため集約できない。この乖離論証は，集団を構造化された集団として考えても成立する。なぜなら，人事部は誰を昇格させるか決めるという目的をもっており，そのための役割を構成員は果たしているからである。また，このような乖離論証は，集団的知識にもあてはまるだろう。乖離論証に説得される論者は，summativism を否定し，non-summativism を支持する[10]。

---

[9] この事例は，Lackey（2021）を参考にした。

4．Non-Summativism とその問題点

本節では，集団的信念・知識に関する non-summativism という見解を概観する。Non-summativism は，summativism の否定である。つまり，集団的信念・知識は，必ずしも集団の構成員がもつ信念や知識を集約したものとは限らないとされる。これは，summativism の核心ともいえる(4)と(5)を否定する考えであり，構成員の信念や知識は，集団的信念・知識にとっての必要条件でも十分条件でもないことを意味する。したがって，集団的信念や集団的知識にとって，構成員のもつ信念や知識以外の要素が求められ，その点で non-summativism は集団的信念や集団的知識にとってのインフレ主義と呼ばれることもある（Kallestrup 2022，Lackey 2016，2021）。本論文では，その代表的な立場として，共同受容説（joint acceptance account）を紹介する。

共同受容説を主張する代表的な論者として，たとえば Gilbert（1987）が挙げられる。Gilbert は集団的信念に関して，前節で紹介した乖離論証を用いて summativism を否定し，non-summativism を擁護する。つまり，集団に帰属される信念や知識は，必ずしもその集団の構成員がもつ信念や知識に還元されるわけではないと彼女は主張する。そこで，Gilbert は前節で挙げた人事部事例と類似した状況を検討する[11]。人事部事例では，構成員の誰一人として「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」という信念をもたないが，それでも人事部という集団に対して，その信念を帰属できる状況が提示されている。それでは，なぜ人事部に対して信念が帰属できるのだろうか。Gilbert によると，それは構成員が，「X が昇格すべきである」と共同で受容したからである。そこで，Gilbert は共同受容説を次のように定式化する：

(7)　ある集団 G が命題 p を信じている　iff　G の構成員が p を共同で受容している[12]。

では，G の構成員が p を共同で受容することはどのように説明されるのか。それは，以下の通りである：

---

[10] Lackey（2016，2021）は，乖離論証とは異なる問題を提示することで，正当化された集団的信念に関する summativism を否定している。ただし，彼女は正当化された集団的信念についての non-summativism も否定する。

[11] Gilbert（1987）は，人事部事例ではなく，詩の読解グループにおける詩の解釈に関する信念を例に検討している。

[12] なぜ受容されたものが信念になるのかという問題については，論争がある。注 1 で指摘したように，集団は信念をもつことができず，したがって構成員が共同で受容したからといって集団の信念にならないと考える論者と，共同で受容することで集団の信念になると考える論者の間で意見が対立している。しかし，本論文ではこの問題には立ち入らない。

⑻　G の構成員が命題 p を共同で受容している　iff　p を G の見解としてみなすことを構成員たちが公に表明していることが，G 内の共通知識になっている。

⑻を言い換えると，次のようになる。つまり，構成員が個人としてただ p を受容するのではなく，構成員それぞれが，「自分も集団の構成員として p を G の見解として受容する」ということを公に表明していることが集団内で共通知識になっているとき，かつそのときに限って，集団は p を共同で受容している。人事部事例に当てはめて考えてみよう。人事部事例においては，人事部に信念が帰属できるように思われる。人事部事例では，構成員は「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と共同で同意した。しかし，そのようなとき，構成員はなにも表明せずに共同で同意するとは思われない。会議では，構成員自身は「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と信じていなくても，人事部の構成員として，「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」ことを人事部の見解として受容すると表明しており，それが人事部内での共通知識となっていると考えられるだろう。したがって，⑻に従えば，人事部の構成員は「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」ことを共同で受容している。さらに，⑺に従えば，人事部の構成員が「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」ことを共同で受容しているため，人事部は「X が昇格するにもっともふさわしい人物である」と信じていることになる。

以上で説明した通り，共同受容説は典型的な non-summativism であるといえる。なぜなら，共同受容説では，summativism の核心である⑷と⑸のいずれもが否定されるからである。⑷は，ある集団 G が p と信じているならば，少なくとも一人の構成員が p と信じていることを求める。しかし，共同受容説に従えば，集団 G が p であると信じている場合であっても，構成員が p を共同で受容していれば，p を信じている構成員が 1 人もいない場合であっても，集団 G に信念 p が帰属される。また，⑸は，ある集団 G の構成員すべてが p と信じているならば，集団 G は p と信じていることを求める。しかし，共同受容説に従えば，集団 G の構成員全員が信念 p をもっていたとしても，p を共同で受容していなければ，集団 G に信念 p は帰属されない。⑷と⑸の否定は，集団的信念にとって，構成員の信念は必要条件と十分条件のいずれでもないことを意味する。Gilbert 型の共同受容説は，人事部事例によって示される乖離にうまく対応できているように思われる。

しかし，Gilbert 型の共同受容説は即座に問題に直面する。Tuomela（1992）によると，Glibert 型の共同受容説は，構成員が多く，構造が複雑な集団に帰属される信念を説明できないという難点を抱えている[13]。たとえば，Lackey（2021）はその例として次のような状況を提示している：

[13] Tuomela（1992）は他にも，たとえば，⑻の左辺と右辺の両方に共同受容が表れており共同受容の説明が循環している点や，受容にも広い受容と狭い受容があるが，その区別がなされていない点を，

（医学会事例）米国小児科学会の理事会が招集された。そこでは，割礼には健康上の大きな利益があるということが公式見解として決定され，その見解が関係資料すべてに掲載された。しかし，米国小児科学会の構成員たちは，その見解を支持する証拠が決定的でないと気づいており，その信念をもつことを妨げるような疑念を抱いている。

このような場合，米国小児科学会には「割礼には健康上の大きな利益がある」という信念が帰属されるように思われる。Gilbert 型の共同受容説に従うのであれば，米国小児科学会にそのような信念が帰属される場合，構成員たちが共同してその見解を受容していなければならない。しかし，その学会の構成員の多くはその信念を抱いておらず，さらにその見解を共同受容しているとも思えない。それを共同受容しているのは，米国小児科学会の理事会の構成員だけである。このような事例は，日常的にも多々見られるだろう。ある企業が何らかの公式見解を発表したとしても，その企業の構成員の多くはその見解を共同受容していないという状況は容易に想定することができる。この難点は，前節で指摘した，全会一致型の集約方法を採用する summativism が抱える難点に類似しているといえる。共同受容しなければならない構成員が多すぎると，それは過剰な要求であると思われる。

そこで，Tuomela は Gilbert 型の共同受容説に同意しながらも，operative members という考えを導入し，それを改良する。その共同受容説は，大まかには以下のようなものである：

⑼ ある集団 G が p と信じている　iff　G には operative members が存在し，かつ，以下の条件を満たす。

1．Operative members が，p を G の見解として共同受容[14] する。

2．Operative members が，1についての相互信念をもつ。

3．1を受けて，non-operative members が，暗黙的に p を受容する。

4．3が G において相互信念になっている。

本論文では，この Tuomela 型の共同受容説の詳細な説明には立ち入らない。しかし，ここで重要なのは，operative member という考えである。Tuomela（2013）によると，ある集団における operative members とは，その集団における決定権を有する構成員を指す。

医学会事例を参考に，Tuomela 型の共同受容説の利点を考えてみよう。Gilbert 型の共同受容説が抱える問題は，共同受容しなければならない構成員が全員であるということであった。そ

Gilbert による共同受容説の難点として指摘している。

[14] Tuomela（1992）は，共同受容を，「ある見解を受け入れることを共同で同意することを含むもの」として考えている。

こで，Tuomela 型の共同受容説においては，共同受容しなければならない構成員の範囲に制限がかけられる。医学会事例では，理事会に所属する構成員が operative members であると考えるのは妥当だろう。共同受容するのが operative members である理事会の構成員のみであるとすることで，米国小児科学会に信念を帰属できることをうまく説明できている。したがって，Tuomela 型の共同受容説は，Gilbert 型の共同受容説が抱える問題を回避している。

以上で，集団的信念に関する non-summativism として，共同受容説を紹介した。それでは，集団的知識に関する non-summativism はどのようなものだろうか？集団的知識に関する non-summativism を考えるために，英米系の認識論において知識概念がどのように分析されるかを確認しなくてはならない。従来，英米系の認識論では，知識は少なくとも次の 3 条件，すなわち①信念である，②認識的に正当化されている，③真であるという条件を満たさなければならないと考えられてきた[15]（Tuomela 2004 など）。③に関して，本論文では「真である」ことの本性を巡る議論の詳細に立ち入らず，「真である」ということを，事実と合致していることと理解する。②に関して，認識的な正当化の本性に関しても多くの議論があるが，その詳細には立ち入らない。本論文では，認識的な正当化を「ある信念が，まぐれ当たりで真になっているわけではないことの保証」と理解する。たとえば，「明日の天気は晴れである」という信念を，なにも参照せず形成した場合，その信念は真であっても認識的に正当化されていない。一方，その信念を天気予報を参照して形成した場合，その信念は認識的に正当化されている。ある信念が正当化されているとき，その信念は真である可能性が高いといえる。また，本論文において，知識はこの 3 条件を満たさなければならず，したがって集団的知識についても，この 3 条件を満たさなければならないと考える[16]。

集団的信念に関する non-summativism についての紹介は終えている。そこで，non-summativism が集団的知識を説明するためには，少なくとも，正当化された集団的信念についての non-summativism 的な説明を与える必要がある。本論文では，正当化された集団的信念を説明する共同受容説を紹介する。たとえば Shmitt（1994）は，集団的信念が正当化されていることを，次のように定式化する：

⑽　ある集団 G が命題 p を信じることが正当化されている　iff　G が p を信じるためのよい[17] 理由 r をもっており，r のゆえに p と信じている[18]。

---

[15] これらの条件のいずれか，あるいはすべて必要ないという立場も存在するが，本論文ではこの点について立ち入らない。

[16] 認識的な正当化は，信念的正当化と命題的正当化の 2 つに区別することができるが，本論文では信念的正当化を念頭に置いている。

[17] ここでの「よさ」は，認識的なよさ（epistemic goodness）を指す。

[18] Schmitt 自身は，「r のゆえに p と信じている」という条件を定式化に採用していない。しかし，この

⑾ 集団 G が命題 p を信じるためのよい理由 r をもっている　iff　G の構成員が，r を，p と信じるために集団 G がもつ理由であると共同して受容することを公に表明している[19]。

⑿ ある集団 G がもつ，命題 p を信じるための理由 r がよい　iff　G が，信念 p を形成するため，信頼できる信念形成プロセスを行使することで r を共同受容する。

Schmitt 型の共同受容説は，集団的信念に関する Gilber 型の共同受容説である⑺と⑻を踏襲している。そのうえで，集団的信念の正当化の条件として，構成員が，その信念を支持する理由を共同受容することが求められる[20]。また，その理由がよいものであるかどうかは，その信念を形成するプロセスが信頼できるかに依存する。信頼できる信念形成プロセスについて，Schmitt は具体的な説明を与えていない。しかし，一般的に，あるプロセスが信頼できるとき，そのプロセスは高い確率で真理を導くと考えられている（Pritchard 2018）。Schmitt 型の共同受容説では，共同受容する構成員の範囲に制限がかかっていないため，Gilbert 型の共同受容説と同じ難点を抱えてしまうかもしれない。そのため，Tuomela 型の共同受容説のように，共同受容すべき構成員は operative members だけであると制限をかけることもできるだろう。

医学会事例を参考に，正当化された集団的信念がどのようなものかを確認しよう。なお，今回は，米国小児科学会の構成員たちが，その見解を支持しない証拠をもっていないとする。医学会事例では，operative members（理事会の構成員）がどのようなプロセスを経て「割礼には健康上の大きな利益がある」ことを共同受容したのかが不明である。そのため，理事会はその命題を支持する根拠を参照していない可能性がある。よって，「割礼には健康上の大きな利益がある」という信念が真であっても，それはまぐれ当たりである可能性がある。しかし，その命題を支持する根拠が理事会で提示，精査され，その根拠が当該命題を信じる理由になると共同受容されたとしよう。また，その根拠を精査するプロセスは，真理を導く可能性が高いとしよう。この場合，医学会に帰属される信念は，まぐれ当たりで真となっているのではなく，正当化されているように思われる。以上のように，Schmitt 型の共同受容説は，集団的信念の正当化を，構成員がある命題を支持するよい理由を共同受容するという観点から説明する。Schmitt 型の共同受容説は，正当化された集団的信念の説明に適しているようにみえる。

しかし，Lackey（2016，2021）によると，Schmitt 型の共同受容説には問題がある。それは，

条件を採用しなければ，理由と信念のつながりを説明できないため，Lackey（2021）にならってこの条件を追加した。

[19] Schmitt は，この定式化が循環していることを承知している。本論文でも，より理由を共同受容することの詳細な分析には立ち入らない。

[20] Hakli（2011）も，集団的知識の正当化について論じている。Hakli も，理由を共同受容することで集団的信念が正当化されると主張する。しかし，よい理由の説明が Schmitt と異なっている。

共同受容される理由となる根拠を，容易に捏造できるという問題である。次のような状況を考えてみよう：

（タバコ会社事例）あるタバコ会社の幹部たちが会議を行っている。その内容は，開発中のタバコが健康上に深刻な問題を引き起こすかについてである。そのタバコは，もし発売されれば多大な利益をうむと予想される。そこで，幹部 A が個人の判断で，健康上の被害が存在しないという証拠を科学者 B に捏造してもらい，それを会議で提出した。その捏造は，一流の科学者でも簡単には見抜けない。さらに，幹部 A は捏造された証拠に反する証拠を隠ぺいしたため，幹部 A と科学者 B 以外は，それらにアクセスすることができない。会議ではその証拠が信頼できる方法で精査され，結果的に幹部たちはその証拠を理由として「新作のタバコを使用しても，健康上の問題はない」と結論付け，同意した。

タバコ会社事例では，operative members である幹部たちが，捏造された証拠を信頼できる方法で精査し，その証拠が「新作のタバコを使用しても健康上の問題はない」ことを支持する理由になると共同で受容し，結果としてその命題も受容している。Schmitt 型の共同受容説に従えば，このタバコ会社には「新作のタバコを使用しても健康上の問題はない」という信念が帰属され，さらにその信念は正当化されていることになる。つまり，真理へ導かないものを証拠として共同受容することで，ある信念が正当化されていることになる。しかし，これは直観に反する。正当化された信念は真である可能性が高いにもかかわらず，Schmitt 型の共同受容説に従うと，両者に乖離が生じてしまう。

タバコ会社事例で示された問題は，証拠の捏造が容易であるということだった。そこで，Schmitt 型の共同受容説は，証拠の扱いに修正を加えることで対応することができるかもしれない。たとえば，ある証拠に反する，別の証拠が存在しない可能性が高いことを確認出来た場合にのみ，その証拠を理由として共同受容できるという条件を加えることができる。この場合，構成員がどのような証拠をもっているかといった要因が，集団がもつ信念が正当化されているかにとって重要となる。しかし，このような共同受容説は，正当化について non-summativism であるとはいえなくなる可能性がある。なぜなら，構成員個人が様々な証拠にアクセスできていることで正当化が保証されるのであれば，構成員が理由を共同受容していることで正当化が保証されているわけではないからである。以上のように対応すると，共同受容説は，summativism に近づいてしまう。

本節では，（正当化された）集団的信念を説明する non-summaivism の立場を採用する見解として，共同受容説を紹介した。共同受容説においては，集団的信念やその正当化が，構成員のもつ（正当化された）信念に還元して説明されるのではなく，構成員がある命題や，それを支持する証拠を共同で受容することに注目して説明される。集団的信念を説明するために共同受

容というステップが必要となるという点で，共同受容説はインフレ主義といえる。

5．まとめと展望

本節では，これまでの議論を簡単にまとめたうえで，集団的信念や集団的知識という問題群の展望について論じる。

第 1 節では，集団認識論にて対象となる集団がどのようなものかを確認した。一般的に，集団認識論では構造化された集団が対象となっていることを確認した。その集団には，固有の目的と，その集団を律する何らかの規則がある。また，集団の構成員はその目的を果たすために，集団的志向性を共有する。さらに，各構成員は目的達成のための役割を担っている。

第 2 節では，集団的信念や知識に関する summativism という立場を紹介した。Summativism では，集団的信念・知識は，集団の構成員がもつ信念・知識に還元して説明できるとされる。言い換えると，summativism において，集団的信念・知識は，集団の構成員がもつ信念・知識をなんらかの方法で集約したものであるとされる。しかし，どのような集約方法を採用したとしても，summativism には乖離論証によって示される問題がつきまとう。乖離論証は 2 種類存在する。一つは，ある集団 G が p と信じている（知っている）にもかかわらず，集団 G の構成員の誰もが p を信じていない（知っていない）という状況があるということを示すものである。もう一つは，集団 G の構成員すべてが p と信じている（知っている）にもかかわらず，集団 G が p と信じていない（知っていない）という状況があることを示すものである。乖離論証に納得する論者は，non-summativism を支持する。

第 3 節では，（正当化された）集団的信念に関する non-summativism という立場，特に共同受容説を紹介した。共同受容説では，（正当化された）集団的信念にとって，構成員のもつ（正当化された）信念は必要条件でも十分条件でもないとされる。構成員のもつ信念ではなく，集団の構成員が共同で命題や理由を受容することが，（正当化された）集団的信念にとって必要かつ十分であるとされる。しかし，共同受容説は，正当化された集団的信念を説明するにあたり，証拠を捏造できるという問題を抱える。その問題を解決しようとすると，共同受容説は non-summativism ではなくなり，summativism に近づいてしまう。

最後に，集団的信念や集団的知識を巡る問題群の展望について，３点指摘する。集団認識論では，summativism と non-summativism のどちらか一方を採用すべき，という想定のもとで議論が進められていることが多いように思われる。もちろん，non-summativism を支持する論者も，構造化された集団ではない，単なる集合に帰属される信念や知識に関しては，summativism によって説明が与えられることには同意するかもしれない。しかし，構造化された集団に対して帰属される信念や知識に関しては，２つの立場のうち，どちらか一方を採用すべきと想定している論者は多い。筆者は，その想定に対して懐疑的になることもできると考える。なぜなら，

同じ集団を対象にしていても，帰属される知識によっては，summativism と non-summativism のどちらも説明として有効であると思われるからである。たとえば，図書委員会に帰属される，「図書委員会は蔵書に関わることを知っている」という知識を考えてみよう。この知識は，図書委員会の目的を鑑みると当然の事項であり，いわば構成員にとっての常識である。このような知識は，構成員によって共同受容されることで帰属される，と説明することも可能である。しかし，常識が共同受容される必要があるのだろうか。委員会の構成員がもつ，その常識に関する知識を集約する形で，委員会に知識が帰属されるとも考える方が自然ではないか。集団内における常識などを説明するために，共同受容が必要となるのは，過剰にも思われる。したがって，どのような知識が集団に帰属されるかによって，summativism と non-summativism のどちらが妥当になるかが変わるかもしれない。そのため，２つの立場を組み合わせる形で集団的信念・知識を説明する方法を模索できる可能性がある。

２点目は，分業がなされている集団に帰属される信念や知識を，既存の理論は説明できないということに関連する。たとえば，次のような事例を考えてみよう[21]：

（ボランティア事例）あるボランティアグループが，山道の清掃活動を行った。山道は長いので，複数のブロックに分け，ボランティアの構成員を各ブロックに配置した。実際に清掃活動をしてみると，どのブロックにもゴミはまったくなかった。ボランティアの構成員の清掃活動は徒労に終わったのである。清掃活動後，構成員は特に話し合いもせず，解散した。

ボランティア事例では，ボランティアグループに対し，「山道にゴミがなかった」という知識を帰属できるように思われる。Summativism はこの事例を説明することができない。なぜなら，summativism においては，構成員の少なくとも一人が知識をもっていないと集約できないからである。ボランティア事例では，「山道にゴミがなかった」と知っている構成員は１人もいない。そのため，この事例では，non-summativism が説明として適しているように思われる。しかし，共同受容説もこの事例を説明するのに適しているとはいえない。なぜなら，ボランティアグループの構成員は話し合いをしていないため，「山道にゴミがなかった」と共同受容をしていないと考えられるからである。分業がなされている集団においては，構成員の共同受容がなくとも，集団に知識が帰属されるように思われる。そのため，共同受容説とは異なる説明を検討する余地がある。

３点目は，集団認識論において対象とする集団のありかたに関連する。第２節で，集団認識論が対象とする集団は構造化された集団であることを指摘した。しかし，構造化された集団といっても，委員会といった小規模なものから，分業がなされている大企業といった大規模なも

[21] この事例は，Habgood-Coote（2019）を参考にした。

のまで存在する。ボランティア事例で示したように，分業がなされている集団に帰属される知識に対する説明として，共同受容説が適しているとはいえない。このことは，共同受容説とは異なる non-summativism 的な理論の必要性を示唆する以外にも，集団認識論が対象とする集団のあり方についても示唆をもつ。つまり，集団認識論が対象とするものとして，ひとえに構造化された集団であると考えるのではなく，たとえば分業がなされているか否かといった区別を設けて，複数の集団のあり方を対象とすべきではないのか，といった示唆をもつ。

（くぼた　るい・哲学倫理学研究室）

文献表

・Backes, M. (2021). Can groups be genuine believers? The argument from interpretationism. *Synthese*, 199(3–4), 10311–10329.
・Gilbert, M. (1987). Modelling collective belief. *Synthese*, 73(1), 185–204.
・Gilbert, M. (2002). Belief and acceptance as features of groups. *ProtoSociology*, 16, 35–69.
・Graf, S., & Dang, H. (2025). Divergence arguments in collective epistemology. *Philosophy Compass*, 20(6), e70045.
・Hakli, R. (2011). On dialectical justification of group beliefs. In B. Schmid, D. Sirtes, & M. Weber (Eds.), *Collective Epistemology* (119–154). Ontos.
・Kallestrup, J. (2022). Nonreductive group knowledge revisited. *Episteme*, 1–24.
・Kallestrup, J. (2025). Knowledge-qua in groups. *Ergo*, 12(6), 160–184.
・Lackey, J. (2016). What is justified group belief? *Philosophical Review*, 125(3), 341–396.
・Lackey, J. (2020). *The epistemology of groups*. Routledge.
・O'Connor, C., Goldberg, S., & Goldman, A. (2024). Social epistemology. In E. N. Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Retrieved August 28, 2025, https://plato.stanford.edu/entries/epistemology-social/
・Pritchard, D. (2018). *What is this thing called knowledge?* Routledge.
・Ritchie, K. (2013). What are groups? *Philosophical Studies*, 166(2), 257–272.
・Ritchie, K. (2015). The metaphysics of social groups. *Philosophy Compass*, 10(5), 310–321.
・Schmitt, F. (1994). The justification of group beliefs. In F. F. Schmitt (Ed.), *Socializing Epistemology: The Social Dimensions of Knowledge* (257–287). Rowman & Littlefield.
・Tuomela, R. (1992). Group beliefs. *Synthese*, 91(3), 285–318.
・Tuomela, R. (2004). Group knowledge analyzed. *Episteme*, 1(2), 109–127.
・Tuomela, R. (2011). An account of group knowledge. In H. B. Schmid, D. Sirtes, & M. Weber (Eds.), *Collective Epistemology* (75–117). Ontos Verlag.
・Tuomela, R. (2013). *Social ontology: Collective intentionality and group agents*. Oxford University Press.
・Tollefsen, D. P. (2003). Rejecting rejectionism. *ProtoSociology*, 18, 389–405.
・Habgood-Coote, J. (2019). Group knowledge, questions, and the division of epistemic labour. *Ergo*, 6, 925–966.

10.14943/rjgshhs.25.l 19

生物的目的に根差した予測処理の限界

菅　野　裕　暉

要　旨

近年の認知科学分野のトレンドである，脳を予測器官として捉える「予測処理」は，知覚や認知プロセスなどを「予測誤差最小化」の観点から統一的に説明する野心的な理論である。この予測処理の能力はこれまで申し分なく発揮されてきたように思われる。現に，認知科学分野における少なくない研究者たちが，その説明能力に魅了されて，予測処理研究を開拓してきたのだ。だが本稿では，予測処理に基づく多産な研究成果にもかかわらず，その射程には限界があることを明らかにする。本稿の試みによって，予測処理が生物的目的「生物が恒常性を維持すること」を内包していることや，また予測処理の射程は生物的目的により制限されていることが明らかになる。

0．はじめに

近年の認知科学分野のトレンドである，脳を予測器官として捉える「予測処理」は，知覚や認知プロセスなどを「予測誤差最小化」の観点から統一的に説明する野心的な理論である（Clark 2024, Hohwy 2020, Piekarski 2021）。予測処理に依れば，脳はボトムアップ的に感覚入力から特徴検出を行う受動的器官ではなく，「内的・外的環境に関する生成モデルに基づいて，トップダウン的に感覚入力を予測し続ける能動的器官」である[1]。そんな脳は予測を実際の感覚入力に適合させるべくモデル選択（知覚推論）を行うか，または実際の感覚入力を予測に適合させる

[1] 予測処理のトップダウン過程への言及自体は新規的でない。たとえば，プトレマイオスやアルハゼン，ヘルムホルツといった理論家が，判断や推論によって対象の大きさや形，距離などの知覚情報処理を説明してきた（Hatfield 2002）。だが予測処理の「新奇な貢献は，それがこの考え［トップダウン予測］を極端なまでにも強調し，知覚の広範囲に見られる特徴としてトップダウン過程と事前知識の影響を描き出したことにある」（Wiese & Metzinger 2023, p.3 括弧筆者）。

べく行為選択（能動的推論）を行うことにより，予測と実際の感覚入力の誤差（予測誤差）を最小化させることで知覚や運動を生じさせている。そして，これら知覚推論と能動的推論は「無意識的に」「自動的に」達成される。すなわち，脳は無意識的に自動的に予測誤差を最小化させているのである。

予測誤差最小化の観点から「知覚や認知プロセス」を統一的に説明するという，予測処理の能力はこれまで申し分なく発揮されてきたように思われる。現に，認知科学分野における少なくない研究者たちが，その説明能力に魅了されて，予測処理研究を開拓してきたのだ[2]。そんな予測処理研究の成功は，ホーヴィ（Hohwy 2020 Supplementary Material）が示すように，その適用事例の多さ ── たとえば，注意（精度）や学習，情動（ホメオスタシスとアロスタシス），両眼視野闘争，錯覚・幻覚，精神疾患，想像，自己欺瞞，内的表象，脳–身体カップリング，4E 認知などへの適用 ── が物語っている。そして今後の研究において，予測処理の射程は，たとえば有機体の進化と系統発生的改良 phylogenetic refinement や，予測処理に基づいた AI やロボットの実装研究へとますます拡張されていくだろう（Pezzulo et al. 2024）。このように一見して，予測処理は「生物に関わる諸現象」を説明し尽くすかのように思えてしまう。

だが，本稿では「（現状の）予測処理の射程には限界がある」，すなわち「（現状の）予測処理の射程は，脳の大統一原理である自由エネルギー原理の射程に捕らわれる」ことを明らかにしたい。自由エネルギー原理は「自己組織化システム（動物や脳）は好ましい状態を維持するために，刻々と変化する内的・外的環境のなかで自由エネルギーを最小化せねばならない」と主張する（Friston 2010, Friston & Stephan 2007, Parr et al. 2022）。こうした生物の適応・生存に焦点を当てた自由エネルギー原理は「生物が恒常性を維持するため（生物的目的）」の原理だと理解できる。（現状の）自由エネルギー原理から派生した予測処理は，「生物的目的に根差した予測処理」なのであって，その射程は「生物的目的に関する諸現象」に限定される，と本稿は主張する。しかし，自由エネルギー原理は生物的目的のみに拘束されず，そして予測処理の射程は拡張されえることを若干示唆したい。

以下では，まず，自由エネルギー原理から予測処理が派生することを概観したい（第 1 章）。そして，生物的目的に根差した予測処理（第 2 章 1 節）の射程が限界を有することを，いかに生物的目的に根差した予測処理が共同体を説明し損なうのかを示すことで明らかにしたい。そのうえで，自由エネルギー原理は生物的目的のみに拘束されず，そして予測処理の射程は拡張されえることを若干示唆したい（第 2 章 2 節）。

---

[2] 予測処理，自由エネルギー原理や予測符号化，予測誤差最小化などの研究者も含む。

1．予測処理とは

本章では，まず1節にて，予測処理を説明するうえで欠かせない，自由エネルギー原理に対して概略的説明を与える。ここで，自由エネルギー原理は生物にとって何を意味するのか，そして自由エネルギー最小化はいかにして達成されるのかを確認する。2節では，予測処理に対して概略的説明を与える。ここで，いかに予測処理は自由エネルギー原理に基づくか，そして予測処理は生物にとって何を意味するのかを確認する。

1-1. 自由エネルギー原理

（はじめに）において，自由エネルギー原理は「生物が恒常性を維持するため（生物的目的）」の原理である，と述べた。本節では，自由エネルギー原理と生物的目的の密な関係について，自由エネルギー原理の導出過程から確認していく。そして，その導出過程と関連させつつ，自由エネルギー原理は生物にとって何を意味するのか，また自由エネルギー最小化はいかにして達成されるのかを確認していく。

自由エネルギー原理の関心は，「生物は刻々と変化する外的・内的環境のなかで，いかに適応し生存するのか」という問いにある（Friston 2010）。ここで「エントロピー」の概念を導入しよう[3]。エントロピーは，熱力学第二法則に従えば，熱や仕事が環境とやり取りされない閉鎖系にて時間経過とともに増大してゆく「乱雑さ」の指標のことである。すなわち，閉鎖系におけるエントロピーの増大は，流体の真空への自由膨張が不可逆的であるように，ある状態から別の状態への不可逆的変化なのである[4]。だが，これは種特異的な，何らかの好ましい内的・外的状態を維持する生物にとって実に不都合極まりない。空気に満ちた大地に立つ人間が（魚とは異なり）水中でその正常な状態を維持できないように，生物によっては，エントロピー増大は避けるべき事態なのである。というのも，それにより「それらシステム［生物］はそれ自身を環境の種特異的な領域へと制限できず，究極的には相転移（たとえば死）を被るかもしれない」（Friston & Stephan 2007, p.429　括弧筆者）ためである。それゆえに，自由エネルギー原理の関心は，「生物はいかにエントロピー増大に抵抗して，その好ましい秩序を維持するのか」へと言い換えられる。

熱力学第二法則は，雪や石という，熱や仕事が環境とやり取りされない閉鎖系に該当するの

---

[3] 自由エネルギー原理が「生物の適応・生存に焦点を当てた原理」，すなわち「生物が恒常性を維持するため（生物的目的）の原理」であることを強調するため，あえて熱力学第2法則から説明したい。

[4] エントロピーは「不可逆性の定量的な尺度」（田崎 2000, p.104）である。この不可逆性は，ある状態Aから別の状態Bへの変化は可能だが，その逆であるBからAへの変化は起こりえない性質を意味する。不可逆性の具体例としては，牛乳にコーヒーを入れた場合，時間経過に伴ってコーヒー牛乳ができるが，そのコーヒー牛乳は初期状態へと変化できない事態がそうである。

であって，生物はその適用の範囲外である。熱や仕事を環境とやり取りする開放系である生物は，エントロピーを環境と交換することで，また自らの環境での位置やその関係を変化すべく積極的に環境へ働きかけることで，エントロピー増大を防ぐことができる[5]。ここで，非生物と生物の違いを理解すべく，フリストンの例を紹介しよう。

> 非生物的な自己組織化システムの範例として雪片をとり，その雪片が環境に作用できるように翼を授けてみた。通常，雪片は落下していき，その温度によって誘拐が引き起こされるところの境界面に直面するだろう。対して，その高度を維持し，また自らの温度を制御する雪片は，質的に認識可能な形態のままでいつまでも存続するだろう。（Friston & Stephan 2007, p.423）

すべて生物は自らの行為によりエントロピー増大を防いで，好ましい状態を維持している。しかし，生物が自らの秩序を維持すべくその増大を防いでいる，エントロピーとは何か？

エントロピーは「サプライザル」の時間平均である。サプライザルは負の対数証拠，すなわち「ある特定のエージェントとその行為を考慮したときの，ある感覚入力の起こりにくさ」として解釈される（cf. Friston & Stephan 2007）。サプライザルは，証拠が小さな値をとるとき増大するが，これは頻繁に起こる事象の生起を伝える情報よりも，ほとんど起こりえない事象の生起を伝える情報の方が情報量は大きい，というシャノンの情報理論に基づいている（cf. 乾 eat al. 2021）。それゆえに，サプライザルは「ほとんど起こりえない事象（感覚入力）が生じたときの驚き」と理解できる。たとえば，36.5℃前後の体温を維持する人間にとって，「灼熱の曝露による超高温の体温」を伝える感覚信号はほとんど起こりえない事象であり，高いサプライザルを有する。サプライザルの時間平均がエントロピーであるならば，平時サプライザルを低い状態に維持すれば，それに伴ってエントロピーも低下する。それゆえに，エントロピー増大に抗う生物はサプライザル減少に努めねばならない。

だが，すべて生物にとってサプライザルは「直接評価不可能な」情報理論量なのである。というのも，サプライザルは「感覚入力の生起に関わりうる場合すべて」を考慮するのだが，感覚入力は様々な原因で生じるがゆえに，脳の神経回路では計算困難となるためである。そこでサプライザルの代替指標として，生物が直接評価できる「自由エネルギー」がある。そして生物，すなわち「環境と［定常］状態にある自己組織化システムは，自由エネルギーを最小化せねばならない」[6]（Friston 2009, p.1　括弧筆者）。これまでの展開を踏まえるなら，生物は好まし

---

[5] 本稿の「自己組織化システム」は「生物的な自己組織化システム」と解釈されたし。

[6] フリストン（Friston 2009）は定常状態ではなく「平衡」状態とある。だが，生物は環境とエネルギーをやり取りし，また自らの秩序を維持するような「非平衡」「定常」状態である（cf. 吉田 & 田口 2025）。

い状態（秩序）を維持すべく自由エネルギーを最小化せねばならない，となる。この主張こそが「自由エネルギー原理」なのである。

生物が最小化させる自由エネルギーは，「カルバック・ライブラーダイバージェンス（KL 情報量）」と「サプライザル」の和である（cf. Parr et al. 2022）。KL 情報量は「近似事後分布と真の事後分布の差」である。ここで KL 情報量を説明したい。すべて生物はサプライザルを減少させるためにも，自らの内的・外的環境を適切に捉える必要がある。しかし，生物は感覚入力（たとえば光の波長や音波）を受け取るのみであり，感覚入力の原因である隠れ状態（たとえばリンゴやサイレン音）を推論しなければならない。そこで近似ベイズ推論が行われ，生物（の脳）は隠れ状態の近似事後分布を推論して，それを真の事後分布へと近づけていく（Knill et al. 2004）。KL 情報量は近似事後分布と真の事後分布の差であって，それらに差分があるとき正の値をとる（KL 情報量≧ 0 ）。自由エネルギーは，KL 情報量とサプライザルの和であるため「サプライザルの上界」なのである。それでは，いかにして自由エネルギーは最小化されるのだろうか。

自由エネルギーは無意識的推論によって最小化される。より正確に言えば，KL 情報量には「知覚推論」が，またサプライザルには「能動的推論」が関与する。知覚推論は感覚入力をうまく説明できるようにモデル選択を行うことで，能動的推論は予測に合うように感覚入力を選択することで達成される（Friston 2009, Parr et al. 2022）。そこでは「知覚と行為が同じ（推論的）性質をもつという認識にとどまらない。そして，一般に想定されているような 2 つの異なる目的をもつというよりも」，自由エネルギーの最小化に向けて「むしろ知覚と行為の両方が協働すること」（Parr et al. 2022, p.24）が含意されている。そこで以下では，これら知覚推論と能動的推論を詳しく見ていきたい。

まず KL 情報量はモデル選択により最小化される（知覚推論）。すなわち，感覚入力の隠れ状態に関する生成モデル[7] を備えている脳は，感覚入力をうまく説明できるようなモデルを選択することにより，実際の感覚入力に合うような予測を行うことができ，結果として KL 情報量を最小化する。たとえば，仮説 H1「本物のトラが存在する」と，仮説 H2「作り物のトラが存在する」がある。もし脳が H1 を選択していた場合，その形状のほかに運動や音，匂いなどの感覚入力が予測されるだろう。対して，H2 は形状のみ予測をもたらす。ここで H1 が正しいとしよう。この場合，H1 を選択した脳は実際の感覚入力をうまく説明できるが，H2 を選択した脳は運動や音，匂いといった感覚入力を説明できない（そして KL 情報量最小化の失敗へと導く）。以上が，知覚推論による KL 情報量の最小化に関する説明である。それは，KL 情報量の最小化に伴って自由エネルギーを減少させるものの，サプライザルの増減には一切関与していない。

---

[7] 生成モデルとは「原因から観察された結果（データ）への確率的写像」（Friston 2009, p.293）である。脳は生成モデルに依拠して，隠れ状態に関する最も可能性の高い仮説から感覚入力を推論している。

そこで次に，能動的推論の説明へと進むことにしよう。

サプライザルは行為選択により最小化される（能動的推論）。すなわち，脳は行為によって実際の感覚入力を変化させて，予測に実際の感覚信号を適合させることにより，サプライズを最小化させる。能動的推論は「世界に働きかけてデータの生成方法を変えて，自己がもつモデルのもとで最もサプライザルの小さいデータを選択することによって，モデルを目的に適合させる」（Parr et al. 2022, p.25）。何らかの好ましい状態（秩序）内にある生物は，そんなサプライザル最小化した状態を自らの行為によって維持している。たとえば，人間は水中や真空状態（高サプライザル状態）を避けることによって，空気に満ちた大地に立つ状態（低サプライザル状態）を維持している。このように能動的推論はサプライザル自体を最小化する。そうであるならば，知覚推論ではなく，まさに能動的推論が「生物の恒常性を維持すること（生物的目的）」を本質的に担っているといえよう。

これまで自由エネルギー原理の導出過程を概観してきた。エントロピーやサプライザル，自由エネルギーとの関連で問題となったのは，すべて「生物は刻々と変化する外的・内的環境のなかで，いかに適応し生存するのか」という問いだった。つまり，生物が恒常性を維持するため（生物的目的）の方策が繰り返し問題となっていたのだ。そんな生物の適応・生存に焦点を当てた問題に対して，自由エネルギー原理は「知覚推論と能動的推論に基づき，自由エネルギーを最小化させることによって」と答えるだろう。次節では，自由エネルギー原理から派生する「予測処理」を概観したい。予測処理は，知覚推論と能動的推論に着目して，知覚や認知プロセスを「予測誤差最小化」の観点から統一的に説明するのである。

1-2. 自由エネルギー原理から予測処理へ

予測処理は，知覚推論と能動的推論に依拠した，認知活動の中核に「予測誤差」を据える理論である[8]（Clark 2013, 2015, 2023; Hohwy 2013, 2020）。すなわち，予測処理は，知覚や認知プロセスを「予測誤差最小化」の観点から統一的に説明する。予測処理に拠れば，脳は生成モデルに基づきトップダウン的に感覚入力を予測し，その予測と実際の感覚入力の誤差を伝達するボトムアップ信号に考慮しつつ，予測誤差の最小化を試みている。そして，予測誤差が最小化された段階で，認知主体には（程度の差あれど）現実が反映された，身体や外界に関する経験が生じる。予測誤差最小化は「知覚推論」と「能動的推論」により達成される。まず知覚推論は

[8] 認知活動の中核に「予測誤差」を据える理論は，予測符号化や予測誤差最小化，ベイズ脳仮説，能動的推論，予測する心などがある。すべて脳を「予測脳」と看做す点では同じであるが，たとえば予測符号化は能動的推論に関して何も語れず，また予測誤差最小化はホーヴィの過激な神経表象・構成主義的な解釈（Hohwy 2013, 2016）を連想しかねない。対して，予測処理は知覚推論に加えて能動的推論の要素も含み，また立場中立的な理論なのである。これら全体像を把握するためにも，近年の包括的研究として，Hohwy（2020）や Piekarski（2021），Wiese & Metzinger（2023）を参照されたい。

モデル選択により，すなわち「実際の感覚入力をうまく説明し除けるような生成モデルを選択する」ことにより予測誤差を最小化させる。そして能動的推論は行為選択により，すなわち「予測に実際の感覚入力を適合させるべく，行為によって実際の感覚入力を変化させる」ことにより予測誤差を最小化させる。そして予測処理では，これら知覚推論と能動的推論による予測誤差最小化が，知覚や認知プロセスを統一的に説明するのである[9]。

ここで予測処理を適切に理解するため，自由エネルギー原理との同異について言及する。まず予測処理と自由エネルギー原理の共通点は，脳を「能動的な予測脳」と看做す点である。生物の脳は生成モデルに基づく予測と実際の感覚入力（たとえば光の波長や音波）をもとに，隠れ状態（たとえばリンゴやサイレン音）を推論している。それゆえ，脳はもはや感覚入力の特徴検出に秀でた受動的器官ではなく，むしろ感覚入力を予測し続ける能動的器官である。このことに関連して，知覚（知覚推論）と行為（能動的推論）が推論的性質を共有することも，予測処理と能動的推論の共通点として挙げられる。だがしかし，予測処理と能動的推論とで，「何を目的として知覚推論と能動的推論が協働しているのか」は相異なっている。すなわち，予測処理では「予測誤差（KL 情報量）」の最小化が，そして自由エネルギー原理では「自由エネルギー（KL 情報量とサプライザルの和）」の最小化が目的なのである[10]。この相違点は能動的推論に顕著に現れる。たとえば，街中でトラらしき物体に直面した場面を想定しよう。ここで予測処理の場合，もしあなたの脳が当該物体に対する確証を得られていないならば，あなたは当該物体に対する更なる確証を求めて，無謀にも当該物体へと突き進むであろう。対して自由エネルギー原理の場合，もし脳が当該物体に対してある程度確証があるならば，あなたは当該物体から早々と逃げ出すであろう。これらは予測処理と自由エネルギー原理の力点（目的）の相違を示している。

---

[9] より適切に述べるならば，「知覚推論と能動的推論，精度予測に基づく，脳の各階層間において生じる予測誤差の全体的な最小化」が知覚や認知プロセスを統一的に説明するのである。ここで若干であるが，

「階層的予測処理」と「精度予測」に関して説明を与えたい。階層的予測処理とは，N 階層は N－1 階層へと予測を伝達し，N－1 階層は N 階層へと予測を伝達するように，予測処理は各階層間において生ずることを意味する（Lee et al. 2003; Mumford 1991; Rao et al. 1999）。また精度予測とは，予測や感覚入力の孕む偶然性（曖昧さ）に関する推論を意味する（Feldman & Friston 2010; Friston 2009）。偶然性（曖昧さ）の逆数である精度は，それが高いほど予測や感覚入力（予測誤差）の影響力を増大させるもので（逆も然り），予測と予測誤差の均衡を生み出すのに必要である。たとえば，感覚入力（予測誤差）の精度が低いならば，予測誤差の影響力は小さく，多少の予測誤差の存在は無視されるため，予測の影響力が増すのである。

[10] 自由エネルギー原理は「（予測処理の意味での）能動的推論」を持ち出すために言及されることもある。このときは，脳の予測は自由エネルギー（特にサプライザル）の最小化ではなく，「予測誤差の最小化」を目的としている点に注意したい。

ここで上記を踏まえながら，予測処理の議論に頻繁に登場する「幻覚」をケースとして，予測処理を実際の知覚や認知プロセスから理解していく。まず以下の場面を想定されたい。

> ある朝の日，私は滅入る程の山積みの仕事に囲まれながら，いまだ寝室で眠りについていた。そして，物足りなさそうに眠りから覚め，なにか優雅な鳥の囀りをふと耳にした。いや少なくとも，当初，私にはそう聞こえた気がした。しかし，すぐにそれが誤りだと判明した。・・・・・・私は鳥の囀りの幻覚を経験していたのだ。（Clark 2023, p.3）

この「鳥の囀り」幻覚では，まったく鳥の囀りに関する感覚入力を受け取っていないのに，なぜ認知主体は鳥の囀りを経験したのかが問題となる。予測処理に拠れば，この「鳥の囀り」幻覚は予測誤差最小化の観点から説明できる現象なのである。ただし，正常な知覚や認知プロセスの場合とは異なり，異常な予測誤差最小化の過程（仕方）の観点からではあるのだが。そこで，まず正常な知覚プロセス（１から３の繰り返しと４）を確認する。

１．脳は生成モデル（仮説）に基づいて感覚入力を予測する
２．予測と実際の感覚入力を比較する
３．もし予測誤差が生じた場合，予測誤差は予測（仮説）を修正・変更する
４．予測誤差が最小化されたとき知覚経験が生じる

この正常な知覚プロセスでは，もし脳が「鳥の囀り」仮説に基づき感覚入力を予測する場合，予測（「鳥の囀り」感覚入力）と実際の感覚入力（非「鳥の囀り」感覚入力）とで誤差が生じる。この予測誤差は予測（仮説）を修正・変更する。その結果として，脳は非「鳥の囀り」仮説に基づき感覚入力を予測して，予測誤差を最小化する（認知主体は「鳥の囀り」を経験しない）。だが異常な知覚プロセスでは，脳は「鳥の囀り」仮説に対して非常に高い確証度を与えて，予測の影響力を実際の感覚入力の影響力よりも非常に大きいものとした。その結果として，脳は予測誤差の影響力を軽視して，予測誤差最小化の状態を成立させる（認知主体は「鳥の囀り」を経験する）。ただし，認知主体は窓から外を見るなどして，たとえば「鳥がいない」といった，無視できない感覚入力を得ることで，予測（仮説）を修正・変更することができる。すなわち，正常・異常によらず知覚や認知プロセスは，知覚推論と能動的推論による「予測誤差最小化」の観点から説明できるのである。そして，幻覚など異常な知覚や認知プロセスは，ただ予測誤差最小化を達成する過程（仕方）に（程度の差こそあれ）違いがあるに過ぎない。

「鳥の囀り」幻覚の例では，鳥の囀りを原因とする音波といった外受容感覚入力に関して，脳は生成モデルに基づき予測して，予測誤差を最小化することで「知覚」を生じさせていた。すなわち，外受容感覚入力の予測が知覚を生じさせるのである。そして同様にして，関節や筋の

動きに関する固有受容感覚入力の予測は「運動」を，心拍や胃腸の動きに関する予測は「情動」を生じさせる。それゆえに，たとえば情動も，ボトムアップ的に内受容感覚入力を処理することではなく，トップダウン的に内受容感覚入力（と外受容感覚入力）を予測して，予測誤差が最小化されることで生じるもの，と述べれよう（Seth 2013）。そして，幻覚などの知覚障碍が異常な予測誤差最小化の過程（仕方）の観点から説明できるように，「運動障碍」や「情動障碍」も異常な予測誤差最小化の過程（仕方）の観点から説明できる。繰り返しだが，すべて知覚や認知プロセスは予測誤差最小化の観点から理解できるのであって，異常な知覚や認知プロセスはただ予測誤差最小化を達成する過程（仕方）に違いがあるに過ぎない。

これまで自由エネルギー原理から派生した予測処理を概観してきた。前節で見たように，自由エネルギー原理は，知覚推論と能動的推論による「自由エネルギー」の最小化によって，「生物の秩序維持や生存」に対して説明を与える原理であった。また本節では，予測処理は，知覚推論と能動的推論による「予測誤差」の最小化によって，「生物の知覚や認知プロセス」に対して説明を与えるプロセス理論であることが明らかとなった。しかし，自由エネルギー原理と予測処理は，“知覚推論”と“能動的推論”を共有こそすれど，何を最小化しているのか（自由エネルギーか予測誤差）や，何を説明しているのか（「生物の秩序維持や生存」か「生物の知覚や認知プロセス」）に関して相異なっているように思われる。

2．生物的目的に根差した予測処理

本章では，まず１節にて，それぞれの相異なる特徴にも関わらず，いかに自由エネルギー原理から予測処理が派生しており，関連づけられるかを考察する。ここで，それぞれの前提に生物的目的「生物が恒常性を維持するため」があることを明らかにする。２節では，生物的目的に根差した予測処理が共同体を説明し損なっていることを示すことによって，現状の予測処理の射程が限界を有することを立証する。そしてそのうえで，予測処理（更には自由エネルギー原理）の射程が拡張されえることを若干示唆したい。

2-1. 生物的目的に根ざす

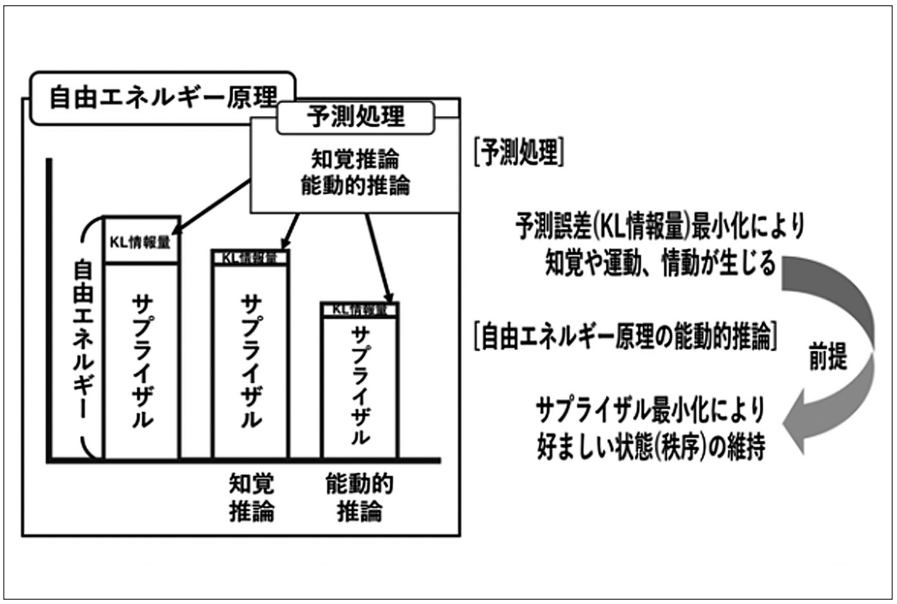
自由エネルギー原理では「生物の秩序維持や生存」を「自由エネルギー」最小化によって，また予測処理では「生物の知覚や認知プロセス」を「予測誤差」最小化によって説明する。このような相異なる特徴ゆえに，自由エネルギー原理が「脳の大統一原理」なのであって，ゆえに予測処理は自由エネルギー原理から派生している，という事実が不鮮明になっている。しかし実際には，明らかに，自由エネルギー原理は予測処理の根元に位置づけられる（cf. Pezzulo et al. 2024）。というのも，

1．すべて知覚や認知は自由エネルギー最小化につながる
2．自由エネルギー原理は知覚や認知に関する諸理論を統合しうる

そうであるならば,「知覚や認知プロセス」に関する理論である予測処理が自由エネルギー最小化に関係していることを示すことで，予測処理が自由エネルギー原理から派生していることが明らかになる。そして同時に，予測処理は自由エネルギー原理の目的，すなわち生物的目的「生物が恒常性を維持するため」を前提とすることが明らかになるだろう。しかし，そもそも予測処理は自由エネルギー最小化に関係しているのか。

そこで，予測処理の「予測誤差最小化」は自由エネルギー原理の「自由エネルギー最小化」に関係しているのか，という問いに答えたい。この問いへの応答として，「自由エネルギーは KL 情報量とサプライザルの和であって，予測誤差は「KL 情報量」である。それゆえに，そもそも予測処理は KL 情報量（予測誤差）を最小化している。」があるだろう。この応答は間違いではないが，しかし完全解でもない。すなわち，自由エネルギー原理と予測処理は，それぞれ別々の目的から KL 情報量を最小化している，といった可能性を排除しきれない。たとえば，哲学書を「日常的な研究のために」読む人と「日常的な教養のために」読む人は，共通する哲学書により関係づけるのではなくて，哲学者と教養人として区別するのがよい。そこで，予測処理は自由エネルギー原理の目的，すなわち生物的目的「生物が恒常性を維持するため」に基づいて KL 情報量（予測誤差）を最小化しているのか，という問いに移ろう。

この問いへの応答は YES である。すなわち，予測処理は生物的目的に基づいて予測誤差を最小化している，と答えたい。第 1 章 1 節では，（自由エネルギー原理における意味での）能動的推論がサプライザルを最小化し，好ましい状態（秩序）を維持していることを確認した。この能動的推論が「生物の恒常性を維持すること（生物的目的）」を本質的に担っているのだ。だがしかし，知覚や運動，情動が「予測誤差最小化」により生じるからこそ，生物は「恒常性を維持するために」（自由エネルギー原理における意味での）能動的推論を行えるのである。すなわち，能動的推論は「予測誤差最小化」を前提としてサプライザルを最小化させている。それゆえに，能動的推論の前提を担保する予測処理は，自由エネルギー原理と同じように，生物的目的を内包している，といえよう。



「予測処理」が生物的目的を内包するゆえに，「正常な予測誤差最小化の過程」と「異常な予測誤差最小化の過程」が生物的目的を内包する，とでも言い換えれよう。というのも，予測処理（予測誤差最小化の過程）自体が生物的目的を内包しているためである。この否定は，たとえばガン患者の「生存する」「好ましい状態を保つ」という目的を否定するのに等しい。そうではなく，ガン患者や遷延性意識障碍の患者でも，ただ「ヒト」であるがゆえに「生存する」「好ましい状態を保つ」という目的を有するのだ。また同様にして，「正常な予測誤差最小化の過程」や「異常な予測誤差最小化の過程」も，ただ「予測処理（予測誤差最小化の過程）」であるがゆえに生物的目的を有するのである。ここで注意すべきことは，生物的目的を内包するのは「異常な予測誤差最小化の過程」であって，「鳥の囀り」幻覚ではない。異常な予測誤差最小化の過程において「鳥の囀り」幻覚は生じる。だが，前者はプロセスであって，後者は現象である。ゆえに，「異常な予測誤差最小化の過程」と「鳥の囀り」幻覚を混同することはカテゴリー錯誤なのである。

これまで予測処理と自由エネルギー原理の関係に関して考察してきた。それにより，予測処理は能動的推論の前提を担保する「ための理論」であることが明らかになった。すなわち，予測処理は自由エネルギー原理のための理論である。これは，自由エネルギー原理が「脳の大統一原理」であること，また予測処理が自由エネルギー原理から派生することを意味する。そして，自由エネルギー原理が予測処理の根元にあるがゆえに，予測処理は「生物的目的に根差した予測処理」なのである。これが意味することは，「予測誤差の階層構造のいちばん上には，生き物の存在［好ましい状態（秩序）の維持］という，その生き物固有のゴール/目的が常にある」

（吉田＆田口 2025，p.185　括弧筆者）ということである[11]。まさに，生物的目的に根差した予測処理は「生物的目的に関する諸現象」を説明する理論なのだ。

2-2. その限界について ── 共同体の観点から ──

現在に至るまで，生物的目的に根差した予測処理（以下，生物-予測処理）は，知覚や運動，情動（ホメオスタシスとアロスタシス），注意（精度），学習，両眼視野闘争，錯覚・幻覚，精神疾患，想像，自己欺瞞，内的表象，脳-身体カップリング，4E 認知といった，数多の知覚や認知プロセスに適用されてきた（cf. Hohwy 2020 Supplementary Material）。そしてこれからも，知覚や認知プロセスに関して，実り豊かな研究が展開され続けていくであろう。しかし，そんな実績十分で前途有望である，生物-予測処理の広大な射程は，その目的「好ましい状態（秩序）の維持」や対象「秩序や認知プロセス」に縛られすぎて，暗黙理に「“生物の”知覚や認知プロセス」の範囲内に限定されている。それゆえに，生物-予測処理は，たとえば認知的ニッチや言語，共同体といった，「生物的目的を超えでる現象（以下，X）」をそれ自体の観点から理解することが非常に困難である。以下では，予測処理と X の関係に関して（かなり思弁的ではあるが）考察していきたい。

これまで生物-予測処理は X（生物的目的を超えでる現象）を論じてはいた。ただし，それらの専らの関心は，いかに生物が X と作用するなかで最適化された予測を行えるかであって，環境（X）の積極的な側面は言及されるだけであった。たとえば，認知的ニッチ（Constant et al. 2019）研究では，生物による環境の「予測しやすい状態」への整えに関心があって，環境自体が予測することにはそれ程関心がいかなかった。また言語創発（Taniguchi 2024; 谷口 2024）研究では，いかに外的表象の共有が行われるのかに関心があって，創発された言語が我々に与える影響はそれ程関心がいかなかった。これら研究は X を X 自身の観点からではなく，「生物的目的」の観点から理解しようとしているのである。

生物-予測処理は X（生物的目的を超えでる現象）を X 自身の観点から理解できるだろうか。生物-予測処理では，知覚や認知プロセスは生物的目的「好ましい状態（秩序）の維持」の観点

[11] 生物的目的は「ホメオスタシス」と「アロスタシス」により達成される（吉田 & 田口 2025）。ホメオスタシスとは「生物の安定性についての静的なメカニズム」である。これは（生命維持に重要な）生理学的な適正値との誤差が生じたとき，あらかじめ設定された適正値に調整するメカニズムである。たとえば，体温が 40℃あるとき汗をかく場合や，血糖値が低いとき食事をする場合など。対して，アロスタシスとは「予測に基づく変化を通した安定性を達成するメカニズム」である。これは適正値との誤差が生じるに先立って「生じるであろう誤差」を予測して，あらかじめ設定された適正値を維持するメカニズムである。たとえば，水中に潜るに先立って「血中酸素濃度の現象」を予測し，潜る前に大きく空気を吸い込む場合など。予測処理はこれらホメオスタシスとアロスタシスにより生物的目的を達成するのである。

から理解された。このことを踏まえるならば，X を「（X の）好ましい状態（秩序）の維持」の観点から眺める必要が生じてくる。それゆえに，X が「なぜ」予測したり，影響を与えるのか，について考えてみる必要がある。

ここで X（生物的目的を超えでる現象）を「共同体」として考えたい。以下で見るように，共同体こそが「好しい状態（秩序）の維持」を無意識的に自動的に行っているように思われる。そんな共同体においては，「敬意を示す」「神様への信仰心をもつ」「空気を読む」といった，共同体自体と関連づければ十分に理解したとは言えなそうな現象が生じる。ここで，共同体の秩序がこれら諸現象により維持されているとしよう。このとき「共同体の秩序維持」からの逸脱 ── たとえば集団主義的な共同体において個人主義的行為（自分勝手な行為）を行こと，また個人主義的な共同体において集団主義的な行為（甘える行為）を行うこと ── を回避しなければならない。そして，たとえば「恥じる」（情動）は，それによって共同体規範への服従と，全体への調和へと本人を仕向けることで集団の崩壊を防いでいる，と理解できる。

共同体的目的に根差した予測処理は，マルコフブランケットを基づいて理解できる。マルコフブランケットのマルコフブランケットによれば，ある階層の自律した個体は，いくつか集まることで高次のまとまりを形成する。たとえば，分子やたんぱく質は集まることで細胞となり，細胞は集まることで人間になり，人間は集まることで社会や国家となる。ここで分子やたんぱく質は「熱力学第二法則」に従う，また生物は「自由エネルギー原理」に従う，文化も「それに相当する原理」に従うと考えてもよいだろう。どうして生物的な自由エネルギー原理によって，共同体を説明し尽くせることができようか。これらを考慮するならば，共同体的目的に根差した予測処理はそれ程不自然な考えではなさそうだ。

3．おわりに

本稿では，導出過程から自由エネルギー原理と予測処理を概観することで，（1）自由エネルギー原理が「生物的目的」を内包することや，（2）自由エネルギー原理が予測処理の根元にあること，それゆえに（3）予測処理も「生物的目的」を内包していることを確認してきた。また（4）生物的目的に根差した予測処理の射程は「生物的目的に関わる諸現象」に限定され，生物的目的を越えでた現象を「生物的目的」から理解すること，だが（5）予測処理は共同体的目的に根差した予測処理へと拡張されうる可能性を秘めていることを明らかにした。

（かんの　ひろき・哲学倫理学研究室）

参考文献

・Clark, A. (2013). Whatever next? Predictive brains, situated agents, and the future of cognitive science.

Behavioral and brain sciences, 36(3), 181–204.
・Clark, A. (2015). Radical predictive processing. The Southern Journal of Philosophy, 53, 3–27.
・Clark, A. (2024). The experience machine: How our minds predict and shape reality. Random House.
・Constant, Axel; Clark, Andy; Kirchhoff, Michael & Friston, Karl J. (2022). Extended active inference: Constructing predictive cognition beyond skulls. Mind and Language 37(3): 373–394.
・Feldman, H., & Friston, K. (2010). Attention, uncertainty, and free-energy. Frontiers in Human Neuroscience, 4, 1–23.
・Friston, K. (2009). The free-energy principle: a rough guide to the brain? Trends in cognitive sciences, 13(7), 193–301.
・Friston, K. (2010). The free-energy principle: a unified brain theory? Nature reviews neuroscience, 11(2), 127–138.
・Friston, K. (2013). Life as we know it. Journal of the Royal Society Interface, 10(86), 20130475.
・Friston, K. J., & Stephan, K. E. (2007). Free energy and the brain. Synthese, 159(3), 417–458.
・Hatfield, G. (2002). Perception as unconscious inference. D. Heyer, D. (ed.), Perception and the Physical World: Psychological and Philosophical Issues in Perception. John Wiley and Sons. 113–143.
・Hohwy, J. (2013). The predictive mind. OUP Oxford.
・Hohwy, J. (2016). The self-evidencing brain. Noûs, 50(2), 259–285.
・Hohwy, J. (2020). New directions in predictive processing. Mind & Language, 35(2), 209–223.
・Parr, T., Pezzulo, G., & Friston, K. J. (2022). Active inference: the free energy principle in mind, brain, and behavior. MIT Press.
・Knill, D. C., & Pouget, A. (2004). The Bayesian brain: the role of uncertainty in neural coding and computation. TRENDS in Neurosciences, 27(12), 712–719.
・Lee, T. S., & Mumford, D. (2003). Hierarchical Bayesian inference in the visual cortex. JOSA a, 20(7), 1434–1448.
・Mumford, D. (1992). On the computational architecture of the neocortex: II The role of cortico cortical loops. Biological cybernetics, 66(3), 241–251.
・Pezzulo, G., Parr, T., & Friston, K. (2024). Active inference as a theory of sentient behavior. Biological Psychology, 186, 108741.
・Piekarski, M. (2021). Understanding predictive processing. A review. AVANT. Pismo Awangardy Filozoficzno-Naukowej, (1), 1–48.
・Rao, R. P., & Ballard, D. H. (1999). Predictive coding in the visual cortex: a functional interpretation of some extra-classical receptive-field effects. Nature neuroscience, 2(1), 79–87.
・Seth, A. K. (2013). Interoceptive inference, emotion, and the embodied self. Trends in cognitive sciences, 17 (11), 565–573.
・Taniguchi T (2024), Collective predictive coding hypothesis: symbol emergence as decentralized Bayesian inference. Frontiers in Robotics and AI, 11, 1–20.
・Wiese, W., & Metzinger, T. (2023). Key Concepts of Predictive Processing. Curado, M., & Gouveia, S. S. (Eds.). Predictive Minds: Old Problems and New Challenges. Vernon Press.
・乾敏朗，＆阪口豊．（2021）．自由エネルギー原理入門：知覚・行動・コミュニケーションの計算 理論．岩波書房.

・田崎晴明．(2000)．熱力学 現代的な視点から．培風舘．
・谷口忠大．(2024)．集合的予測符号化に基づく言語と認知のダイナミクス：記号創発ロボティクスの新展開に向けて．認知科学，31(1)，186-204．
・吉田正俊．＆田口茂．(2025)．行為する意識 エナクティヴィズム入門．青土社．

10.14943/rjgshhs.25.l 35

フッサール『算術の哲学』における数と時間との関係

深　尾　紘　平

要　旨

本論文は，フッサールの初期の著作である『算術の哲学』（以下『算哲』）において論じられている数と時間との関係を，現象学的枠組みから明らかにすることを目的とする。第一に，『算哲』で行われている数の本来的表象についての議論を整理する。第二に，数の本来的表象に時間がどのように関わるとされているかを，『算哲』に即して詳説する。第三に，『算哲』における時間についての議論が，『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論の枠組みで捉えられるかを検討する。『算哲』は現象学が打ち立てられたとされる『論理学研究』以前の著作であるため，通常現象学的であるとみなされない。しかし本論文では，『算哲』における時間についての議論に，のちの現象学的時間論と通ずる点があることを示す。このように現象学的な枠組みで『算哲』の時間についての議論を捉えることは，そこで関連づけられている数と時間との関係を，現象学の立場から扱うことにもつながると言える。

導入

数も時間も，われわれの日常生活において頻繁に考えられている。これらは分けて考えられることもあるが，他方関連づけられることもある。時間について言うと，われわれはそれを日常において捉えようとするとき，数を用いて計ることがある。時計や暦における数の使用がその例である。また逆に数について考えるとき，ある数を時間的な順序をあらわす数として捉えることがある。例えば徒競走における順位を示す数が考えられる[1]。しかしこれらのことから

[1] この例は，時間の順序的な側面を数であらわしていることから，時間を数で示しているとも捉えられる。時間的前後の関係が捨象された数をわれわれが用いることも事実であることから，ここではそのような数も念頭に置きつつ，この例を挙げている。

直ちに，時間が数に，または数が時間に還元されるとは言い難い。例えば数えられたものの個数は，それらの数えられたものの時間的前後に関わらずその個数であるし，また逆に，時間の経過は，「昔から今まで」のようなかたちで，数を用いずとも捉えることができるからである。フッサールの初期の著作である『算術の哲学』[2] は，以上の，少し考えただけでは明らかではない数と時間との関係を扱っている。また，フッサールがそこで（主に当時のフッサールにとって過去の）哲学者や数学者によるこの関係についての学説を取り上げていることから，数と時間との関係は『算哲』以外でも取り上げられてきた題目であると言える。

このように数と時間との関係は，日常的に考えられているのみならず，哲学的に扱われてきた題目でもある。このことから，『算哲』を当の関係についての哲学的議論の系譜に位置づけ，その特徴を明らかにすることは可能である。一方，『算哲』が書かれた年代からして，この著作における数と時間との関係についての議論は，現象学の立場からなされたものと直ちにみなすことは難しい。すなわち，現象学がそこで初めて打ち立てられたとされる『論理学研究』以前の著作であることから，『算哲』における数と時間との関係についての議論は，フッサール自身が現象学という体系を明示して行ったものではなく，ゆえに，完全に現象学的であるとは言い難い[3]。しかし，『算哲』における数と時間との関係についての議論の過程では，『内的時間意識の現象学』[4] 以降で扱われる現象学的時間論と通ずる内容が議論されている。そのため，『算哲』を現象学的な枠組みの中で捉えることは十分可能である。さらに，このように現象学的な枠組みにおいて『算哲』の時間についての議論を捉えることは，そこで関連づけられている数と時間との関係をも，現象学の立場から扱うことにつながると言える。

したがって本論文は，現象学的に数と時間との関係を扱うべくして，『算哲』において考えられている数と時間との関係を明らかにすることを試みる。そのためまず第一節では，『算哲』において数の起源の探究が行われる際に扱われている概念や区別を整理する。第二節では，第一節で整理された数の起源の探究に際して，フッサールが数と時間とをどのように関連づけているかを明らかにする。第三節では，『算哲』においてフッサールが考えていた数と時間との関係

---

[2] 以下『算哲』と略記する。『算哲』からの引用箇所の直後に PA と Husserliana Bd. XII におけるページ数を記載する。本論文における直接引用の邦訳は著者によるものであり，［　］内は著者による補足である。

[3] 事実，『論理学研究』において行われた心理学主義批判が『算哲』へ向けられたものであるとし，『算哲』での議論が心理学主義に陥っているとみなす立場もある。一方『形式論理学と超越論的論理学』においては，『算哲』における数についての議論が現象学的であったと，フッサール自身によって主張される。本論文では，『算哲』のどのような側面が心理学主義的であるかを示すことよりむしろ，『算哲』における数と時間との関係についての探究が，どのような現象学的枠組みで捉えられるかを明らかにすることを主題とする。

[4] 『算哲』と同様に，引用箇所の直後に ZB と Husserliana Bd．X におけるページ数を記載する。直接引用の邦訳も同様に著者によるものである。

を，現象学的時間論の枠組みをもって検討する。結論では，『算哲』における数と時間との関係についての議論が，現象学的時間論の枠組みのうち，特に同時性という関係から捉え直すことができる可能性を手短に示す。

第一節：『算術の哲学』における数の起源の探究

フッサールの『算哲』における主題の一つは，数を「本来的に表象する（eigentlich vorstellen）」とはいかなることかを示すことであると言える。ここで「本来的」とされている表象は，「非本来的な（uneigentlich）」または「記号的な（symbolisch）」表象と区別される。この区別は『算哲』全体にとって基礎的な区別であり，『算哲』の第一部は数の本来的な表象を中心に扱い，第二部が非本来的表象を主題としている。本節では以下の三つを軸に，次節で扱う数と時間との関係が議論されるところのコンテクストを整理する。第一に，数の本来的表象と非本来的表象との区別を明らかにする。次に，数が本来的に表象されるときのその構造を，フッサールが用いる「多なるもの（eine Vielheit）」と「収集的結合（kollektive Verbindung）」という二つの概念を中心に明らかにする。最後に，数の起源の探究を行うに際して，とりわけなぜ多なるものが考えられなければならないかを明らかにする。

数の本来的表象と非本来的表象との区別は，『算哲』の序盤において示されるが，そこでは区別の根拠が深掘りされず，数の本来的表象が扱われた後に区別が詳説される。しかしそこでの区別についての議論も，区別がどのようにして生じるのかということよりもむしろ，区別をすでに明らかなものとし，その区別において分けられた数のうち，非本来的に表象されているものがどのようなものであるかを扱っている。そこでの議論によれば，まず算術における数の表象はほとんど非本来的である。すなわち，「われわれが，数列のわずかな最初の数を超えて持つすべての数表象は，記号的であり，また記号的でしかありえない。このことは，算術の特徴，意味，そして目的を完全に規定する事実である」（PA 190）。ここでフッサールは，算術が非本来的であると端的に断定しているわけではない。本節において後述する，数の本来的表象がいかなるものであるかを受けて，もしそのようなかたちの表象がすべての数について可能であるならば，そもそも算術が完全に不必要になる（PA 191）が，実際算術は行われているということを念頭に置いて，本来的ではない数の表象を認めていると言える。このような『算哲』におけるこの区別にまつわる事情に即して，われわれの数の表象を考えると，ほとんどの数は本来的に表象されえない（PA 191–192）。われわれはすべての数を本来的に表象するための認知能力を備えていないからである（ebd.）。ゆえに，実際に行われている「[...] 算術全体は，ここで言及されたわれわれの知性の本質的な不完全さを乗り越えるための，技巧的な手立ての総体にほかならない」（PA 192）とされる。以上のように，事実として数の本来的表象に限界があるからこそ，また本来的表象それ自体をみることでそのことが示されているからこそ，この区別が考えられると言える。

数が非本来的に表象されており，算術もおおむねそのような数からなるという状況から，数は本来的表象なしに考えられるものであると言えるかもしれない。すなわち，そもそも本来的表象を考えず，したがって非本来的表象との区別も必要ではないと考えられるかもしれない。事実，例えば初等的な算術を考えるとき，単にある記号をある規則に即して操作するものとしてみなすことも可能であり，そのような記号の規則的な操作を，数を本来的に表象せずに考えることは可能であるからである。しかしフッサールはこのような関係を認めない。すなわち，非本来的に表象された数は何らかのかたちで本来的に表象された数を前提している（voraus setzen）のであって，その逆ではない（PA 16）[5]。以上のことから，非本来的表象がすでに考えられており，また事実として算術の大部分が非本来的である以上，それとは区別された本来的表象が必要であるとされる。

以上をまとめると，数の本来的表象と非本来的表象との区別は，それぞれを個別にみることで捉えられる区別であると言える。すなわち，数の本来的表象それ自体をまず考え，その限界をみることが，かえって非本来的表象がいかなるものであるかを明らかにすることにつながる。以上のような事情のもと，まず数の本来的表象を明らかにするために，フッサールが『算哲』において取り扱うのが，「多なるもの」である。多なるものは，数えられるあらゆる対象が，「総体（Inbegriff）」[6] として現れている際の当の総体のことである。例えばわれわれが「感情，天使，月，イタリア」の数を捉えようとするときに，「感情，天使，月，イタリア」をそれぞれ個別の何かとして捉えるのではなく，「規定された諸対象の総体」（PA 16）として，すなわち多なるものとして捉える。それぞれが個別に捉えられているだけでなく，いくつかのまとまりとして捉えられているときのそのまとまりが多なるものである。

以上のように，多なるものにおいてはそれぞれの何かがあるかたちでまとまっている。このようなまとまりにおいて成立している関係が，「収集的結合」である（PA 20）。収集的結合は，まさに多なるものを多なるものたらしめるために成立していなければならない関係であり，次節で確認されるよう，時間に還元されえないとされる。また，収集的結合は「ある新しい，すべてのほかからきっぱり分けられた関係のクラス」（PA 66）とも言われる。まとめられているそれぞれの何かにどれほど時間的な関係を認めても，そのような時間的関係には還元されえない関係がそこに成立しているからである。より立ち入った説明をすれば，収集的結合は「単純

---

[5] 本来的な表象が非本来的表象の前提であることは，第一章ですでに考えられているが，この前提の関係がどのような意味での前提であるかについては，『算哲』を通して触れられていない。もし非本来的に表象された数を，本来的に表象された数とその種類から切り離して考える場合，非本来的に表象された数からなる体系において，どのような数が最も基本的であるかという問いが可能になる。必ずしも数の本来的表象を扱わない数学基礎論的な関心のもとでは，このような問いが考えられる。

[6] 「多なるもの」は「総体」やほかの類義語とほとんど同じ意味で用いられている（PA 14 Anm.）。本論文で多なるものとほとんど同じ意味を持つものは，直接引用を除いて「多なるもの」と表記する。

な（einfach）」，「心的な（psychisch）」関係である（PA 75）。すなわち，多なるものにおける収集的結合はそれが関係づけているところのそれぞれの何かを関係づけているが，関係同士を関係づける高次の関係ではないという意味で単純であり（PA 71），またそれぞれの何か同士の持っている性質に依拠しない関係であるという意味で心的な関係と呼ばれる（PA 73）。特に心的な関係であるという点を，旋律という例をもって考えることができる。旋律においては結びつけられている単音がそれぞれ順序的な関係にある。そのような順序的な関係にあるそれぞれの単音それぞれをみることでは，単音の前後関係を捉えることはできない。このような，そこで関係づけられている何かの内容に関わらず成立している特徴が収集的結合である。次節で述べる通り，時間も必ずしも内容それ自体の規定ではない。ゆえに，収集的結合における関係は，時間と関連づけて論じられることになる。

以上が『算哲』のフッサールによる数の起源の探究において，最初に扱われる内容である。関連して，この探究においてなぜ数それ自体ではなく，多なるものがまず考えられなければならないかが明らかにされなければならない。まず多なるものが考えられなければならない理由は，第一にフッサールが基数を最も基本的な数であるとみなしていたことに由来すると言える。『算哲』の初めにフッサールは基数が最も基本的な数であるとし，議論を進めた。そこでは基数に明確な定義が与えられていたわけではないが，おおむね集合の大きさをあらわすために用いられている数であるとされていた（PA 11）。すなわち，ある集合が基数をもって示されたとき，そこで用いられている基数は集合における要素の順序をあらわしたものではないとされていた。ゆえに多なるものという，そこで捉えられているそれぞれの何かの間に必ずしも時間的な関係が設定されていないようなものが，まず考えられることになったと言える。第二に『算哲』の方向性が関係していると言える。『算哲』の目的の一つは数の起源の「心理学的特徴づけ（psychologische Charakteristik）」とされていた（PA 21）。すなわち，数というすでにわれわれが慣れ親しんだものを分析するというよりはむしろ，それがまさに数として把握される際に必要なものを明らかにすることが，ここで目的とされていた。したがって『算哲』においては，まず個々の数があらかじめ与えられており，それらからの抽象で多性が考えられるという方向ではなく，むしろ数概念や多であることのもととなるような具体的な現象が与えられており，そこからより詳しく規定された多なるものとして，数が得られるという方向で議論が進められていた。このような『算哲』の方向が，まず多なるものという具体的な現象を扱うことを必要にしたと言える。

第二節：『算術の哲学』における数と時間との関係

前節では，『算哲』の主題の一つである数の起源についての探究において中心的な，数の本来的表象を扱った。非本来的なそれと区別されるかたちで数が本来的に表象されるということは，そこで具体的な現象としての多なるものが，収集的結合という関係のもとで成立している

ということであった。また数の起源の探究に際して，多なるものがまず考えられなければならない理由を確認した。多なるものがまず考えられなければならない理由は，『算哲』において数が多なるものの限定であるということがあらかじめ考えられていたからである。これらの内容に加えてフッサールが『算哲』において行う議論は，数（あるいは多なるもの）と時間との関係についてである[7]。そのため本節では，『算哲』における多なるものと時間との関係を明らかにする。フッサールが『算哲』において，多なるものと関連づけて論じる時間の二つの側面は，「同時性（Gleichzeitigkeit）」または「時間的同時（das zeitliche Zugleich）」と「継時性（Sukzession）」または「時間的継起（die zeitliche Aufeinanderfolge）」である。フッサールの主眼は，これらそれぞれがどのようにして多なるものと関係するかという点である。簡潔に言うと，これら二つは多なるものの現れにとって「心理学的前提条件（psychologische Vorbedingung）」であり，また二つは異なったかたちで心理学的前提条件である。以下ではまずそれぞれと多なるものとの関わりを個別にみる。その後，同時性と継時性との心理学的前提条件としての違いを詳説する。

『算哲』第二章において同時性はまず，批判されるべき主張の中に組み込まれるかたちで扱われる。すなわち，多なるものにおいて表象されている個々の対象がそれぞれ同時であり，そのような同時性のみが多なるものを特徴づけている（PA 24）という考えが，批判される主張として扱われる。このような主張は，多なるものから得られる多性概念についても言われる。つまりこの主張にしたがうと，多なるものからの反省によって得られる多性においても，対象の同時性のみがそれを特徴づけているとされる（ebd.）。このような主張を批判するためにフッサールが取り上げるのは，ある対象が同時に表象されることと，同時であるとして表象されることとの区別である（ebd.）。換言すれば，「内容を同時に表象する（gleichzeitig vorstellen）ことは，まだ内容を同時の内容として表象する（als gleichzeitige vorstellen）ことではない」（ebd.）。まず同時に表象することについて，いくつかの対象が同時に表象されていても，それらが異なる時間において捉えられていることがある。その一方，同時の内容として表象される対象はまさに同時であるとされる必要があるが，そのためには（同時に表象する作用とは異なった）「かえって特別な反省が必要である」（ebd.）。以上のことを明らかにするために，フッサールは旋律を例として持ち出す。ある旋律において，それぞれの単音が個別であり時間的に続いて現れるにも関わらず，それらがまとまりを持った旋律として表象される際，それぞれの単音は同時に表象されている（ebd.）。われわれはこの際それぞれの対象としての単音を，同時の内容として表象しなくてもよい。それぞれの単音を同時であると表象することは，旋律が旋律として現れる

[7] この議論は，哲学史上の数と時間との関係についての立場を批判的にみるかたちで行われている。そのため，『算哲』におけるフッサールの議論が，この関係を扱った議論の系譜上でどのように位置づけられるかを考えることも可能である。本論文では，主に第三節で扱うように，哲学史上の位置づけではなく，『算哲』におけるこの議論と現象学的な枠組みとを中心的に扱う。

ことにとって必要ではなく，旋律といった複数の単音の総体は，同時に表象されることで総体たりうるということである。われわれが旋律を聞く際，順次現れるそれぞれの単音がもし同時に表象されていなければ，単音の連続としてすらも捉えることができない。すなわち，順次現れる単音があるまとまりをもって現れず，したがって旋律も表象されない。ここで考えられている旋律が，まさに多なるものである。ゆえに多なるものも，旋律がその複数の単音を同時に表象することで旋律たりうるように，複数の対象が同時に表象されて初めて多なるものたりうる。しかし，複数の対象が同時に表象されるだけでは，多なるものは成立しない。この同時性という現れの条件が満たされたうえで，ある心的作用が成立することで，多なるものは初めてそれを特徴づける集合的結合を持つに至る。以上が同時性と多なるものとの関わりである。

多なるものと同時性との関係について，同時に捉えられる対象の数の限界もフッサールによって示されている（PA 26）。すなわち，多なるものの対象の数は膨大になりがたい。われわれは最大の注意を向けたとき，ある一つのものへしか注意できないが，注意していなくとも，同時に捉えられる対象は限定されている（ebd.）。例えば，無限に続く自然数のすべてを同時に把握することはできない。しかし（下記で詳説する最も限定されたかたちでの対象の継時的な現れのように）「ある同一の瞬間において，一つより多くの内容に決して関わることができないということは，真実ではない」（ebd.）。もしわれわれが瞬間において一つの対象しか捉えられない場合，もっとも単純な関係にすら気づくことができない。なぜなら，一つの項が意識で捉えられているときもう一つの項はその意識において捉えられていないからである。しかしわれわれは関係について考えることも，例えば二つの点を同時に表象することも可能である。ゆえに，同時に捉えられる対象の数には限界があるが，必ずしもそれが一つになるわけではない。

多なるものと継時性との関わりは，上述の同時性についての議論に続くかたちで議論される。フッサールは継時性についても，同時性の場合と同様に批判の対象となる主張をまとめる。そのような主張によれば，「われわれの思考の散漫な性質ゆえに，いくつかのお互いに異なった内容は全く同時に考えられない。われわれの意識はそれぞれの瞬間において一つの対象にのみ関わりうる」（PA 25）。そしてこのことに加えて，多なるものにおけるそれぞれの対象が継時的であることが，多なるものを多なるものたらしめている（PA 25–26）。以上が，フッサールが批判の対象とする主張である。同時性の場合と同様に，この主張においては多なるものから得られる多性においても，継時性がその特徴であると考えられている。この主張に対して，フッサールは「心理学的，論理学的誤り（psychologische und logische Irrtümer）」を指摘する。ここで言及される心理学的誤りとは，同時に捉えられるものの数と関係している。言い換えると，フッサールが批判する主張は，同時に表象することができる対象の数を極端に少なくとっている。すなわち先述の通り，ある現象において一つの対象のみが与えられているとしているため，そもそも対象同士の関係すら成立しえない（PA 26）。このことはわれわれが対象同士の関係について語りうることと「明らかに（evident）」矛盾している。次いで論理学的誤りとは，継時的に対象

が現れるという心理学的な側面を，対象である多なるものにおいて成立している個々の対象同士の関係であるとする点である。確かに多なるものでは（次の段落で言われているように）ほとんどの場合，それぞれの対象が継時的に現れているが，それは現れの構造であって，多なるものにおいて成立している関係ではない。

以上の二つが，継時性を多なるものにおいて成立している関係であるとする主張の，心理学的，論理学的誤りである。以上のようにフッサールは，多なるものを特徴づける関係は継時性であるという主張を退ける。しかし，継時性が多なるものとまったく無関係であるとするわけではない。むしろ以下の引用の通り，同時性も含めて，多なるものとの関わりを明示する。

「したがってわれわれは，時間がわれわれの［多性］概念にとって心理学的前提条件としての役割のみを果たすことに気がつく。そしてその役割は二重の仕方である。

(1) 多なるものや基数の表象において統一されている部分的表象が，われわれの意識に同時にあることは不可欠である。

(2) ほとんどすべての多性表象といずれにせよすべての数表象はプロセスの成果であり，要素からなる継時的に発生した全体である。そうである限りそれぞれの要素自体はあることなった時間的規定を持つ」（PA 32）。

ここでは継時性と同時性の両方が心理学的前提条件であるとされ，どちらとも多なるものが現れる際に，その現れの構造として成立していなければならないものとして扱われる。そのため，それぞれに多なるものを多なるものたらしめるという特徴が付与されることはなくとも，依然として成立していなければならない現れの構造として，多なるものと関連づけられる。以上のかたちで，同時性と継時性はそれぞれ多なるものの現れにとって心理学的前提条件であるとされる。しかしこれらは，全く同じかたちで心理学的前提条件たるわけではない。フッサール自身がそれぞれについての議論をまとめる際に，継時性にのみ特定の限定詞（fast alle）を用いていることからも，このことが確認される。一方で，同時性においては，それぞれの対象が同時に表象されていることは不可欠（unerläßlich）である。すなわち，それぞれの対象が違う時間に与えられていようと，それらが多なるもののうちの一つであると表象されるためには，対象は同時に表象されていなければならない。他方，継時性においては以下のような限定がある。すなわち，「ほとんどすべての（fast alle）」多なるものの表象が，継時的なプロセスの成果である。継時性はこの「ほとんどすべての」である点において，同時性と異なる。この点は，上記引用箇所の直前で説明されていると考えられる。その箇所によれば，同時性と継時性が異なるのは，二つのものや三つのものからなる多なるものにおいては，それらにおいて表象されている個々の対象が継時的に現れていない場合があるからである（PA 27）。例えば目の前の紙に書いた二つの点を表象する際に，適切な距離でそれらを見ると，それらの点を，どちらか一方を先に，もう一方を後にといった継時的なかたちではなく，両方を同時に見ることができる。すなわち，対象の数（フッサールによれば二つか三つ）を含めた適切な条件がそろっている場合において

は，そもそも多なるもののそれぞれの対象が継時的に表象される必要がない。ゆえに，継時性が心理学的前提条件たりうる場合は限定されている。この点が同時性との違いである。

以上が継時性と同時性との，多なるものへの関係である。『算哲』においては，多なるものにおけるそれぞれの対象が継時的であるかそうではないかに関わらず，少なくともあるかたちでの同時性が必ず成立していなければならないことが示されていたと言える。

第三節：数と時間との関係

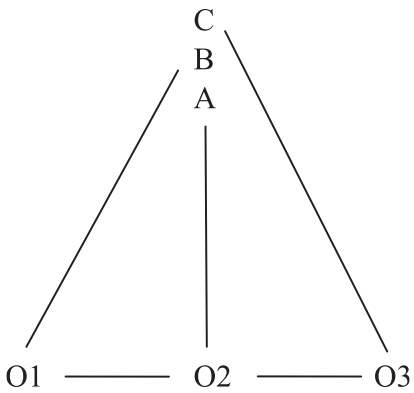
フッサールが『算哲』において，数と時間との関係を明らかにする過程で強調している点は，同時性という時間の一側面が，多なるものの現れにとって成立していなければならない条件であるということである。しかし，同時性は多なるものを捉えるにあたって必要ではあるが，それだけでは多なるものにおける関係を特徴づけられないという主張が，『算哲』においてなされていた。つまり『算哲』では，同時性は多なるものとの関わりに限って議論されている。一方『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論でも，同時性についての議論が行われている。本節では現象学的時間論の枠組みで，『算哲』における同時性についての議論が捉えられることを示す。

前節で明らかになった通り，『算哲』におけるフッサールの同時性についての議論によれば，多なるものは同時性によって可能になるが，それは多なるものにおけるそれぞれが同時であるという意味での同時性ではなかった（PA 24）。つまり，ここで考えられている同時性は，多なるものにおけるそれぞれの対象が同じ時間的規定を持つと捉えられていることではなく，単に同時に現れていることである[8]。また，多なるものにおけるそれぞれの何かが順番に，まず A そして B というかたちで現れていようがいまいが，それらがまとめて多なるものとして捉えられるためには，〈同時〉に現れている必要がある。ここではすでに，対象が継時的であることが矛盾しないと考えられている。つまり，多なるものが現れている際に，それぞれの対象がお互いに前後するという規定を持っている際，多なるもののうちの一つとして捉えられている限り，それらはすべて〈同時〉に捉えられている。多なるものにおけるそれぞれの何かが継時的な規定を持ち，それらが一つ目の対象，二つ目の対象といったように捉えられていても，それらが多なるものという統一において現れている限りでは，〈同時〉に現れているということである。

このような，継時性と必ずしも矛盾しないような〈同時性〉が『算哲』において考えられていた。一方『内的時間意識の現象学』においては，「時間的客体（Zeitobjekt）」として旋律が引き合いに出される（ZB 23）。『算哲』において，〈同時〉に表象することといくつかの対象が同時

[8] 以下ではこのような意味での，あるかたちで同時に現れていることを〈同時性〉と呼び，通常継時的であること相容れないとされる同時性と区別し，議論を進める。〈同時〉の場合も同様の区別を用いる。

であることの違いを説明する途中で持ち出された旋律の例（PA 24）が，明確に時間的客体として示され，そこでは「単に時間においてある統一であるだけでなく，時間的延長をそれ自体に含んだ客体」（ZB 23）という特徴づけがなされる。そこでも『算哲』における旋律の扱いと同様に，それぞれの単音が時間的に前後しつつも，旋律というまとまりの中で捉えられる際に，〈同時〉に捉えられていることが示されている。ここでは〈同時〉に対象を捉えるということについて，それが対象の時間的な前後と矛盾するわけではないことが考えられていたと言える。以上の時間の構造を，『時間構成についての後期テクスト：C 草稿』[9] をもとにしたザハヴィの図[10] にしたがって示すと，『算哲』でも以下と同様の時間の構造が考えられていたと言える。



この図のもととなる『C 草稿』において，同時性は以下のように規定されている。

「流れることの原現象には，同時において私が，今，たった今，ちょうどこれからを分けていることと，この同時の存立は，具体的で現象的な現在と呼ばれる，流れる統一であるということが含まれている」（Hua Mat．VIII 27）。

手短に説明を加えると，今である A において O2 が捉えられつつ，たった今の B において O1 が捉えられ，ちょうどこれからである C において O3 が捉えられている。また，A，B，C はそれぞれ今，たった今，ちょうどこれからとして区別されつつも，〈同時〉を成している。すなわち，それぞれにおいて別々の O が捉えられつつも，O が一つ目，二つ目，三つ目といったかたちで関係づけられている以上，A，B，C はそれぞれのうちにそれぞれで捉えられているものを含みあっており，ゆえに O 同士の関係を捉えることができる。つまり，もし A，B，C のそれぞれが O のそれぞれと単独に関わっている場合，例えば A においては O1 のみが捉えられること

---

[9] 以下『C 草稿』と略記し，引用箇所の直後に Hua Mat. VIII と Husserliana Bd. VIII におけるページ数とを記載する。直接引用の邦訳は著者によるものである。

[10] Zahavi, Dan. Husserl’s phenomenology. Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003, p. 84.

となり，したがって，それに続く O2 がそもそも O1 との関係において捉えることが不可能になる。以上の，A，B，C のお互いの内容をお互いにおいて含みあうという時間の構造が，『算哲』においても考えられていた〈同時性〉である。

『算哲』の多なるものについての経験に即して考えると，多なるものにおけるそれぞれの対象に，旋律のそれぞれの単音におけるような時間的前後関係がある場合，今，たった今，ちょうどこれからからなる同時において，継時的な対象から成る多なるものにおけるそれぞれの対象が〈同時〉に捉えられている。それぞれの対象が時間的な前後関係を持っていることは，図の O1，O2，O3 に相当する。それぞれの対象が時間的な前後をそのうちに持っていることは，それらが〈同時〉に捉えられていることと矛盾せず，多なるものを捉える際にはむしろそれが成立していなければならない条件である。以上のように『算哲』ではすでに，それぞれの対象が時間的前後をそれらの規定として持っていることと，それらが〈同時〉に捉えられていることが両立可能であることが示されていた。『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論の枠組みでも，このような〈同時性〉の議論が維持されていたと言える。

結論

本論文では『算哲』における数と時間とを中心的に扱った。まず『算哲』において，数が本来的に表象されている際には，収集的結合が成立していなければならないという点を確認した後，そのような収集的結合が，結合されているものの時間的な関係に還元されないとされている点を詳説した。その後，現象学的時間論の枠組みで，『算哲』における時間についての議論を捉え直した。『算哲』における多なるものの扱いではすでに，継時性と矛盾しないような〈同時性〉というものが考えられていたと言える。『算哲』においてフッサールが強調していた点は，集合的結合が時間的な関係に還元されないというものであった。そのため，収集的結合を特別な関係として扱っていたと言える。しかし，より根本的な〈同時性〉が現象学的枠組みを介して捉え直された今，そのような〈同時性〉がどのようにして収集的結合と区別されうるかを，改めて考えることが可能になる。

（ふかお　こうへい・哲学倫理学研究室）

文献

Husserl, Edmund. *Husserliana* Bd. X: *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins* (1893–1917), hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1966.

Husserl, Edmund. *Husserliana* Bd. XII: *Philosophie der Arithmetik*. Mit ergänzenden Texten (1890–1901), hrsg. von L. Eley, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1970.

Husserl, Edmund. *Husserliana Materialien* Bd. VIII: *Späte Texte über Zeitkonstitution* (1929−1934) Die C-Manuskripte, hrsg. von Dieter Lohmar, Dordrecht: Springer, 2006.

Zahavi, Dan. *Husserl's phenomenology*. Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003.

10.14943/rjgshhs.25.l 47

非日常と日常
── スウェットロッジの祈りが喚起させること

間　宮　望　恵

要　旨

スウェットロッジとは,「祈りと浄化の儀式」であり，動物の皮あるいは毛布で完全に外の光を遮断したドーム状の空間に，焚火のなかで高温に焼いた石を入れ，そのなかでリーダーのリードに従いながら，歌や自身の言葉を通して，先祖や大地，動植物など私たちを構成し繋がりを持つあらゆる魂に祈りを捧げる儀式である。北米大陸で，民族集団や土地，コミュニティによって異なる神話や異なるモノを用いて執り行われてきたこの儀式は，入植者の同化政策の一環で「宗教的実践」が禁じられていた時代を経た現在でも多くの地域や集団のなかで再構築されながら続けられている。本稿ではアメリカ先住民運動（AIM：American Indian Movement）の運動家デニス・バンクスに弟子として認められた山田圓尚という天台宗の僧侶が日本の一部地域で執り行っているスウェットロッジについて，それが体験者にとってどのような意味で「癒し」となり得ているのか,「非日常と日常」の行き来を念頭に整理する。これまでスウェットロッジについては，アメリカあるいはカナダでの体験について，国内外の研究者によって論じられてきたとともに，そのほとんどの研究のなかで儀式への参加やネイティブアメリカン的思想が代替的医療や社会更生，レジリエンス，癒しとなり得るという視座を含んできた。しかしながら，このような「癒し」であるという視座は参与したことのある人が具体的に考えることのできるものであり，体験したことがない側からは「自分たちとは異なる人びとの営み」として，受け止められてしまう。そこで本稿では，スウェットロッジ体験について，儀式のなかで起きたことのみに着目するのではなく，儀式への参加とそこから離れた日常生活を通じて体験者がどのように視点や考え方を変化させていくのかに着目しながら，改めてそこでの祈りが喚起させるものについて整理する。

1．はじめに

筆者は，2022 年 4 月から 2025 年 8 月のこれまで，10 回以上に渡って日本各地でスウェットロッジと呼ばれる儀式に参加してきた。スウェットロッジについては，コミュニティや伝達者によって少しずつ説明が異なるが，筆者は「祈りと浄化の儀式」であると説明することが多い。これは筆者がはじめて日本でスウェットロッジを体験した際にそのような説明を聞き，体験を通した感覚としても，それが特徴を言い表していると感じたからだ。また，より具体的には「動物の皮あるいは毛布で完全に外の光を遮断したドーム状の空間に，焚火のなかで高温に焼いた石を入れ，そのなかでリーダーのリードに従いながら，歌や自身の言葉を通して，先祖や大地，動植物など私たちを構成し繋がりを持つあらゆる魂に祈りを捧げる儀式である」と説明してきた。そこでは，「ドーム状の空間」や「動物の皮」，「焼いた石」など単に場をつくるモノだけが重要なのではなく，これが北米大陸の先住民族の伝統的儀式であること，つまり「ネイティブアメリカン」や「ファーストネイション」に由来する儀式であり，そのような智慧を日本の人びとにも快く開いてくださった方々やさらにその先祖の方々など，何世代にも渡って紡がれてきたことが重要であり，そのような「つながり」に感謝をしながら，その場にいる「わたしたち」自身のことや関わってきた人びとの「つながり」にも感謝し祈ることが重視される。

スウェットロッジについて，それが正確にいつから実践されてきたのか知ることができないだけでなく，そこには原形的な正しいやり方があるわけではない。というのも，ヨーロッパ人と接触するまで，多くの北米先住民族にはもともと記述文化がなく，民族集団ごとに異なる〈神話〉，〈伝説〉，〈昔話〉と捉えることのできる物語を口伝えで伝えてきたが，口伝えで学ばれるものは，物語の本質や基本的な内容を変えない範囲内で，演者自身の解釈，つまり演者の想像力を介在させながら，演じられる側面があるからだ［横須賀 2002：58-9］。スウェットロッジの起源については，16 世紀初頭のスペイン人宣教師たちによるアステカの temazcalli（テマスカル）あるいは汗浴についての記述やマヤの人びとがメキシコとグアテマラの国境近くに紀元前 900 年以前に建てた Yaxchilan（ヤクシラン）という神殿の 8 つの汗浴場についての話など諸説考えることができる［Bruchac 1993: 17］。しかし西ヨーロッパ文化とは全く異なるこの文化は，長きに渡って，無知で，不健康で，野蛮な風習と解釈されてきた。入植者たちによるアメリカ合衆国建国後，同化政策に伴い，1883 年には “The Code of Indian Offenses” と呼ばれる「インディアン（つまりネイティブアメリカン）」を取り締まる犯罪法が連邦政府によって制定され，このなかには宗教的，文化的儀式を制限する内容が含まれており，一定期間の配給の差し止めや 30 日以内の刑務所収監がペナルティとして設けられた［Wenger 2011］[1]。こうした踊りや宗教的実

[1] 1883 年の犯罪法に関連する取り締まりとして，1921 年にはプエブロ族の人びとの踊りが「性的に不道徳である」として，ネイティブアメリカンが踊りを行う時間帯や年齢に制限を設ける “Circular

践の抑圧は 1934 年の “Circular 2970” によって容認されないものとされたが，最終的には 1978 年の “American Indian Religious Freedom Act”（アメリカ先住民宗教の自由法）が制定されるまで，完全にはその自由が保障されなかった。

現在さまざまな場所で実践されるスウェットロッジは，同化政策の影響で一度淘汰されたコミュニティも多いなかで，ラコタ・スー族の伝統的な形式から復興され，ラコタの人々が宣教師や連邦政府の圧力に屈せず，その伝統を守り伝えたことで残されていたものだとされる［Bruchac 1993: 2］。多くのラコタ族の長老たちが，スウェットロッジの復活を望む他のコミュニティに，彼らの神聖な儀式を惜しみなく伝えたのだと言われている［Bruchac 1993: 2–3］。ラコタ族のスウェットロッジに関しては，Raymond A．Bucko の The Lakota Ritual of the Sweat Lodge［Bucko 1998］が人類学的な著書として挙げられる。Bucko はサウスダコタ州のパインリッジ居留地にて，1978 年と 1979 年の 2 年間オグララ・ラコタ大学に所属し，フィールドワークと講義を行ったが，この著書はスウェットロッジに関する論文として記述した内容を再考して出版されたものである。彼はダコタの民族誌や広く知られているラコタ文献について言及し，儀式自体の歴史的・同時代的な変化の性質からみることのできる原型的な「正しさ」の不確定性について述べ，そこでは体験者の語りのなかで見られる個々人の転向物語や共同体の調和と連帯による社会統合的側面についても説明されている。

そのようにラコタ族の人びとによって再伝承されたスウェットロッジは，国境を越えたヨーロッパの国々や日本でも実践されるようになっている。北米大陸を越えた地域で実践されるようになった大きな要因として，1960 年代から 70 年代の様々な運動と同じ時代に同時多発的に起きた文化の普及がある。1960 年代に先住民固有の権利として民族自決を求める活動が盛んに起きたことや，既存の社会体制に対する批判の原動力により，アメリカ社会で押し出されたカウンターカルチャーのなかから生まれ，70 年代に増加したニューエイジの運動に始まるスピリチュアリティ文化の普及が生じた。つまり，そこにはネイティブアメリカン文化への関心の増大があったのだ。特に筆者がこれまでフィールドワークを続けてきたスウェットロッジを運営する山田圓尚が師事したデニス・バンクスは，アメリカ先住民運動（AIM：American Indian Movement）の指導者だが，この運動組織自体も 1968 年に発足しており，この潮流の只中にあった。寄宿学校で育ち，インディアンゲットーで暮らし，刑務所で過ごした経験を持つ者も少なくない，都市インディアンによって構成される AIM の人々にとって，何を信じ，どのように神聖性を見つけることができるのか定かではなかった［Banks，Erdoes 2004: 95］。そのような状況下で，自分たちにもスピリチュアルな基盤が必要だという信念のもと，バンクスはサウスダコタ州パインリッジに住む，ヘンリー・クロードックのもとを訪ね，そこで体験したスウェッ

1665” という通達が打ち出された［Jacobs 1996］。1934 年にはジョン・コリアによって，“Circular 2970” という通達が発行され，宗教生活や儀式の表現への干渉は容認されないと命じられた。

トロッジを AIM 中心メンバーの一人であるベルコートの協力とともに，若いレオナルド・クロードックをスピリチュアルリーダーとして，実践するようになった［2004：96-103］[2]。

スウェットロッジについては，アメリカあるいはカナダでの体験について，国内外の研究者によって論じられてきたとともに，そのほとんどの研究が儀式への参加やネイティブアメリカン的思想が代替的医療や社会更生，レジリエンス，癒しとなり得るという視座を含んできた［谷口 2022，Drost 2019，Gard 2006，Garrett et al．2011，Garrett et al．2013，Marsh et al．2018］。しかしながら，このような「癒し」であるという視座は参与したことのある人が具体的に考えることのできるものであり，またそれが仮に「癒し」であるとしても，筆者が繰り返し参与してきたコミュニティのように，ネイティブアメリカンではない人々がこの実践に参与し続けているような状況を考慮しきれていない。そのため，スウェットロッジという実践は，体験したことがない側にとって「ネイティブアメリカンの実践」であり，自然や調和を重んじるような「よいイメージ」が持たれても，身近な実践としては想像しづらいため，日本でそれを執り行い参加している人々がいるとなると，「スピリチュアルな文化」が好きな人びと，つまり変わったことをしようとする「自分たちとは異なる人びとの営み」として，受け止められる。しかし，コミュニティに参与してきた筆者の感覚からしても，そのような一面的な理由だけが日本の実践者（リーダー）や参加者をその場所へ向かわせ，継続させていると考えにくい。そこで本稿では，スウェットロッジ体験について，それを単に儀式のなかで起きたことに着目するのではなく，儀式への参加とそこから離れた日常生活への行き来を通じて，そこに参与してきた筆者自身の体験とともに，他の体験者がどのように視点や考え方を変化させていくのかに着目しながら，改めてそこでの祈りが体験者に何を喚起させ，繰り返し参与させるのか考察する。

2．山田圓尚のスウェットロッジ

筆者はこれまでの参与観察の多くを，山田圓尚という天台宗の僧侶が執り行うスウェットロッジコミュニティで行ってきた。まずどのような経緯で山田が日本でスウェットロッジを実

---

[2] バンクスとアードスの著書 Ojibwa Warrior［Banks, Erdoes 2004］のなかには，AIM としてスウェットロッジを執り行い，広めるようになった経緯が記述されている。AIM は多くの賛同を得て，全米に支部が出来，規模が膨らむなかで，活動の中心であり心の拠り処となるような精神性が欠けているのではないかという問題意識をバンクスは持っていた。そこでは以下のように記述される。筆者訳：「「クライド，私たちはアメリカ先住民運動のためのスピリチュアルな方向を探さなければならない。私たちの多くは教会通いで彼らは自分たちのことをクリスチャンだと考えている。私たちはインディアンでそこにはネイティブの宗教がある，私たちの独自の宗教だ。」」原文：“Clyde,” I said, “We have to find a spiritual direction for the American Indian Movement. Many of our people are churchgoers and consider themselves Christians. We are Indians and there is a Native religion out there, our own religion”［Banks, Erdoes 2004: 99］.

践するようになったのか，簡単に整理した上で，体験者が参加するスウェットロッジとはどのようなものなのか，整理したい。

2-1. デニス・バンクスと日本

先述したように，デニス・バンクスは 1968 年にアメリカ先住民運動（AIM）を発足させた中心メンバーの一人であるが，バンクスが生前に山田を含めた日本の人びとにもその教えを開くようになっていたことは，AIM 発足以前に個人的な日本との関わりがあったことも関係していると言えるだろう。

バンクスが日本へ初めてやってきたのは，1954 年に空軍のアメリカ兵（GI）として日本に配属されたときだ。翌年 1955 年の砂川事件では，基地の拡張に反対する非暴力なデモ隊に襲い掛かる警官と非暴力に祈り続ける仏教僧を目の当たりにしていた［森田 1989：89–90］。日本人女性まち子さんとのあいだに子どもを授かるも，共産党との繋がりを疑われ，1957 年にはアメリカに帰還させられてしまう［森田 1989：64–102］。日本ではネイティブアメリカンであるために差別を受けたことがなく，つながりを感じるようになっていた彼は，やがて GI としてではない形で，まち子さんや家族とともに日本に暮らしたいと考えていた［森田 1989：86, 92–3］。しかし，日本から強制送還させられた当時，退職金が一度に支払われることがなく，経済的に困難かつ白人の町で感じていた侮蔑の眼差しによる精神的ストレスから，アルコール中毒となり，日本へ戻る希望を叶えることができなかった［森田 1989：100–6］。

その後，20 年余りが経ち，AIM 活動家としてカリフォルニアの DQ 大学[3] で教育に携わっていた 1977 年の時期には，日本から来た仏教徒が活動に携わり始め，それを機に日本山妙法寺主の藤井日達[4] との交流が始まった［森田 1989：246］。河本和朗のインターネット上の記録によると，河本は日本山妙法寺の峰松上人とともに，DQ 大学でスウェットロッジを執り行うバンクスのもとを訪ね，1978 年に行われた大陸横断行進，「ザ・ロンゲスト・ウォーク[5]」に参加し，峰松上人にそのレポートを送ると，彼の師である藤井日達上人の目に触れた。その歴史的意義を理解した藤井日達が，さらに峰松上人と安田法尼にも大陸横断行進への参加を命じたのだという[6]。藤井からは，5000 ドルの寄付金と手紙，4 人の仏教僧と尼僧の派遣がされたが，横断行

---

[3] DQ 大学とは，最初のネイティブアメリカンの自治管理による短期大学のこと。

[4] 藤井日達は，日本山妙法寺主だが，ガンジーとも交流のある平和活動家としても知られる。

[5] 「ザ・ロンゲスト・ウォーク」とは，1977 年に反インディアン的な議会の動きが活発化していた際に，先住民側の自治と権利を縮小，剥奪しようとする法案が上程されるなかで，そのような法案に反対する抗議活動の一環として行われた北アメリカ大陸横断行進のことである。最初のザ・ロンゲスト・ウォークは，1978 年に行われ，約 5 か月をかけて，サンフランシスコのアルカトラス島からワシントン DC までを行進し，スタート時に約 400 人だった行進団は，賛同する人々が加わり，最後には約 4000 人に膨れ上がったという［森田 1989：239–45］。

[6] 河本和朗の大陸横断や平和活動への従事に関する記録は，次のサイトを参照。1978 年ロンゲスト・

進の中盤以降には藤井自身も 96 歳という歳でありながらもアメリカへ渡り，途中から行進に参加した［森田 1989：246–8］。藤井が DQ 大学を訪れたそのときには，バンクスが行っていたスウェットロッジにも参加し，ザ・ロンゲスト・ウォーク終了後には，バンクスは日本，インド，スリランカを訪れ，仏教の世界を学んでおり，藤井に宛てた手紙でも，仏教と彼に対する尊敬の念を示している［森田 1989：250–6］。また，藤井とその弟子たちこそが，砂川事件で祈っていた仏教僧たちであったことに気づき，特別な絆を感じるとともに，彼らがこれまで国境を越えて行ってきた平和活動に共鳴し，同じように非暴力で世界平和を目指そうとする意向を示している［森田 1989：250，253，287–8］。このような日本での生活経験や藤井日達との出会い，仏教とのつながりは，その後もデニス・バンクスが日本人との交流や日本での活動に積極的であったことにつながっていくきっかけを作っていたと考えることができる。

2–2. 山田圓尚とデニス・バンクス

山田圓尚がデニス・バンクスに出会ったのは，1999 年に東京の代々木公園で行われた環境問題を考える「レインボーパレード[7]」でのことであり，山田は和太鼓集団の演者として参加し，バンクスがネイティブドラムとともに歌っている様子を目撃し，衝撃を受けたことから交流が始まったと聞く[8]。山田は 1996 年から比叡山で仏道修行を開始していたなか，バンクスとの出会いをきっかけに，2003 年よりアメリカでのサンダンス[9] にも参加するようになり，大陸横断の平和行進にも参加しながら，バンクスの弟子となっていった。また，日本では 7 generations walk[10] を立ち上げ，平和のための行進を実施したり，環境保護運動に携わったりしながら，持続可能な社会を目指してきた[11]。自身の暮らしにも自然農法を取り入れている[12]。2011 年には，

ウォークへの経過と最初の 48 時間ノンストップ行進. http://www.osk.janis.or.jp/~kazkawa/longestwalk1978.htm

7 レインボーパレードについては，次のサイトを参照。レインボーパレード. https://rainbow.gr.jp/data/memorial.htm. 2022 年 12 月 2 日参照。

8 主に筆者が山田に尋ねた話による情報。また，山田圓尚の活動に関する略歴は，次のサイトを参照。山田圓尚. 7Generations walk. 代表山田プロフィール. http://www.7gwalk.org/7gwalk/yamada.html

9 サンダンスは，スウェットロッジと関係の深い儀式である。神話として伝えられる話では，「白いバッファローの仔の女」が，7 つの神聖な儀式を伝えたとされ，その 7 つの儀式については諸説あるが，谷口のサンダンスに関する記述によると，サンダンス，スウェットロッジ，パイプセレモニー，ヴィジョンクエスト，命名式，治療の儀式，親戚として受け入れる儀式の 7 つであるという［谷口 2017：81］。デニス・バンクスや山田圓尚と親交の深い日本人によると，スウェットロッジをリードする人物は，サンダンスに 4 年ほど参加し続けるなかで，サンダンサーとして認められた人物が，そのリードを認められると聞く。他の部族伝来の場合でも条件の詳細は異なるが，サンダンサーとして認められる必要があるという。

10 「7 世代先の子供達の為に生きよ」というインディアンの教えから名づけたという。

11 主に筆者が山田に尋ねた話による情報。また，山田圓尚の活動に関する略歴は，次のサイトを参照。

バンクスや彼の開いたサンダンスのメンバーたちに認められ，山田自身もサンダンサーとなり，現在では日本各地でスウェットロッジを執り行い，毎年現地のサンダンスに参加しながら，活動し続けている[13]。活動の一環として 2013 年には，Dennis Banks Japan tour を企画・運営し，日本でのバンクスによるトークや歌の披露，交流会が実現し，その後も繰り返し行われた[14]。他にも，仏教勉強会や断食修行，アニシナベの聖なる教えを学ぶ会を実施している。

デニス・バンクスは，2017 年に亡くなったが，山田はバンクスの弟子としてその意思を継ぎながら，彼に習った方法でスウェットロッジを執り行っている[15]。彼は時にはバンクスとのエピソードを語りながら，参加者にその教えを伝え，明るく冗談を交えた話術で場を盛り上げ，参加者たちの緊張を解きほぐすような人物である。参加者のなかには，彼の仏教勉強会や断食修行などの他のイベントにも参加している者も少なくない。山田を尊敬し，彼のスウェットロッジに毎年参加するリピーターも多い。天台宗の僧侶でもある山田は，宗教者として仏教という宗教についての知見を持つ一方で，バンクスのもとで習ったアニシナベの価値観に敬意を持ち，平和で持続可能な社会の実現のためにも重要な教えとして，日本で伝えている。

バンクスは，ネイティブアメリカンたちが経験してきた差別や抑圧を乗り越えるために AIM を設立し，平和の実現に向けて活動してきたが，その思いや知恵はネイティブアメリカンではない人々に対しても分け隔てなく伝えられてきた。山田によれば，バンクスは，ヒッピーなど純粋に興味を持ってくれた人々が，例え AIM やバンクスのコミュニティのことを深く知らなかったとしても，暖かく迎え入れる人だったのだという[16]。また山田は，自身の作成した資料において，ネイティブアメリカンの考えるスピリチュアリティ（精神性）と宗教との違いについて，バンクスの教えから引用し，自身の作成するテキストで以下のようにまとめている。

> **精神的であるということは宗教的であることとはちがう**：精神性とは人間と人間が，人間と自然が，人間と母なる地球が，ひとつの環（サークル）となって互いの生命を敬いつつ生きることに他ならない。ネイティブアメリカンは環の力を信じている。サークルは地上に生きるすべての物が，互いに深くつながりあって生命を営んでいることの象徴である。それはどこまでも生を肯定する。だから私たちは，この生命のつながりの環が切れることのないように祈りを捧げるのだ。**宗教の教義にとらわれるのではなく，この生命の環の一部となって，他者を敬い，鳥を，木を，大地を敬うことが，精神性（スピリチュアリティー）**

山田圓尚. 7Generations walk. 代表山田プロフィール. http://www.7gwalk.org/7gwalk/yamada.html

12 同上。

13 同上。

14 同上。

15 筆者のスウェットロッジ体験より（2022 年 4 月–7 月）。

16 2022 年，筆者が山田に尋ねた話による情報。

の意味するところである[17]。

ネイティブアメリカンの生き方は，宗教的な教義に囚われるものではなく，互いの生命を敬いつつ生きるなかで，すべてのものとのつながりの環のために祈りを捧げることで守られるような精神性に支えられたものであるとバンクスは考えていたのである。

2-3. スウェットロッジの概要

山田のスウェットロッジは，神奈川県逗子，京都府綾部，徳島県海陽町，北海道，兵庫県淡路島など毎年各地で時期をずらして，複数回（各 2 回ほど）行われており，筆者は前日の設営準備を含めた参加や当日のみの参加も併せて少なくとも 10 回ほど体験してきた。山田のスウェットロッジは，主に知り合いを通じた協力によって，各地での実施が可能となっており，参加費も場所の費用や食事の代金を考慮し，必要に応じて一人当たりの目安料金を参加者用のフェイスブックグループページに記載するが，基本的にドネーション方式であり，個々人の裁量に任せている。スウェットロッジの運営に携わる中心人物はリーダーの山田や場所を提供する協力者となるが，参加者もまた儀式の一員であり，この儀式の場は相互扶助で成り立っているという認識のもと，それぞれが納めたい金額を封筒に入れて渡す。会場までの道中や帰り道に送迎が必要な場合には，同じ場に集まる仲間として，初対面にも関わらず，快く相手を車に乗せたり，持ち物を貸し借りしたりすることを厭わない。筆者もまた，儀式で出会った人々に度々送迎してもらったり，前日には家やテントをお借りして宿泊させてもらったりしてきた。そのような共生空間のなかで，互いを知らない参加者同士も儀式を終えて帰るときには，家族のような距離感で名残惜しそうに帰路につく。

2-4. スウェットロッジのスケジュール

山田の開催するスウェットロッジは当日の体験そのものだけでも，一日掛かりであるが，前日の設営についても会場によっては，ドーム状の空間の骨組みとなる竹を切りだすところから始まり，ティピ[18] を建てる作業もあるため，一日掛かりである。前日の設営準備と当日の流れはおおよそ以下の通りである[19]。

---

[17] 山田圓尚 2023『アニシナベ族に伝わる聖なる 7 つの教え冊子』非売品。

[18] ティピとは，ラコタ由来のテントのような空間のことである。

[19] 山田圓尚が作成したフェイスブックのイベントページより。

表 1：スウェットロッジのスケジュール

前日準備	当日
10 時 現地集合	9 時半 火入れ
10 時半 竹切	10 時～11 時 お話
12 時 食事	11 時半 スウェットロッジ
13 時 ティピ建て	12 時 シェアリングとアドバイス
15 時 トークサークル	13 時 食事
17 時 終了	16 時 解散

スウェットロッジには，竹切やティピ建て，炊事，ロッジ（ドーム状）の空間づくりなど，参加者全員での共同作業が付き物であり，また食事の時間，トークサークル，お話，シェアリングとアドバイスの時間のように互いの身の上話や儀式に向けての意気込みや感想，今後の思いなどを共有する機会がある。同じ儀式の参加者としての共同作業は，自身の役割を自覚させる。また互いの話を聞き合うことは，受け入れ，受け入れられている信頼関係を構築させる。当日は，火の番を担当するファイアーキーパーが火入れを行うが，一度ロッジの前に焚火が始まると，精霊（スピリット）の通り道が出来，そこからはロッジとその周辺は神聖な空間となる。参加者は，「男子はトランクスのみの裸，女子は T シャツとロングスカート［谷口 2022：127］」，あるいは「丈の長いドレス［浜 1998：67］」に着替える。ロッジに入る前に，互いの心境や身の上話を共有し，儀式を行う場やそれぞれの方角に感謝し，歌とともに祈りを捧げる。ロッジに入るときには，セージを燃やし，その際に出た煙を身体にくぐらせて，浄化をしてから，年齢が高い人から順に四つん這いになってドーム状の空間のなかへ，時計周りに奥へ向かい，順に座っていく。各回の合間に休憩や給水を挟みながら，４つの方位に向かって，象徴する動物を意識した歌を歌い，同時にそれに対する個々人の祈りの言葉も捧げていく。儀式を終えたあと，再び輪になって，感想や心情を共有し合い，互いをたたえ合うようにして歌を歌い，挨拶をしたあとで，食事をし，それぞれの都合に合わせて徐々にその場を離れ，解散する。

2-5. 儀式の流れと神話的な意味

スウェットロッジには，ネイティブアメリカンの思想[20] に基づいた神話があり，儀式において象徴的な物や歌，言葉がその空間を形づくる。ここでは，儀式中の流れも汲みながら，フィールドワークで見聞きしたこと，先行研究，山田の作成する資料をもとに，その説明を試みる[21]。以下は山田の配布する資料に使用されるイラストと体験時に撮影した写真である。

[20] 本研究の事例だとラコタ族とアニシナベ族を掛け合わせたもの。

[21] 先行研究の記述で共通する事項は，それぞれの文末に記した文献と参照ページを参照されたい。

2023 山田の資料より[22]

2022 年 4 月 徳島県海陽町で撮影

資料のイラストのように，ドーム状の空間の前に置かれた薪に火が付くと，ドームと火の間は聖なる魂（スピリット）の通り道とされるため，横切ってはいけない［浜 1998：68］。儀式に使われる火は，聖なる火として，火の番人役（ファイヤーキーパー）によって，その火が絶えぬよう維持される［谷口 2022：132］。また，ロッジに入る前には，杉（セージ）を燃やし，その煙で身体全体を浄化する［浜 1998：68］。入る際には，入口で煙草をくべて，膝をついて這いつくばりながら，入口から時計回りに奥へと順に入っていく［谷口 2022：127，浜 1998：68］。ロッジのなかでは，焚火で高温に焼いた石を入れ，その石に水が打ちかけられ，ロッジ内に水蒸気が充満する［谷口 2022：132，浜 1998：69］。

儀式が始まるとリーダーは，「大いなるもの」と自身を教え導いた師匠，先祖に祈りの言葉を捧げ，その後引き続きリーダーの導きに従いながら，参加者も歌い，祈るが，この歌と祈りの工程は 4 回（ラウンド）繰り返し行う［谷口 2022：127，浜 1998：69］。山田によるデニス・バンクス伝来のスウェットロッジでは，西，北，東，南の順に祈り，それぞれバッファロー，熊，鷲，狼を象徴するとされ，それぞれの動物がアニシナベにもたらした知恵に感謝し祈る。アニシナベの教えでは，バッファローは尊敬を体現し，生きとし生けるもの全てに対して，尊敬の念をもって接することの大切さを教えるとされる。熊は勇気やバランスを表し，恐れずに自分自身と向き合うことの大切さを教える。鷲は愛を象徴し，上空から平和と愛について教え，狼は謙虚さを象徴し，上下関係のない輪と調和の大切さを教える。それぞれのラウンドでは，その動物に因んで作られた部族語の歌を歌うが，このときスウェットロッジをリードする人物（筆者のフィールドワーク先では山田）が，鹿やバッファローなどの動物の皮と柔らかい材質の木

[22] 山田圓尚 2023『アニシナベ族に伝わる聖なる 7 つの教え冊子』非売品。
薪に火が付くと，スピリットの通り道が生じ，聖なる空間となるため，写真撮影をしてはならない。そのため，資料で用いられるイラストを活用した。

で作られたドラムで拍を取り，参加者全員がこのドラムの音を聞きながら，祈りを込めて歌う。ドラムは心臓[23]の音を表しており，心臓は愛と炎，イーグルと「大いなるもの」と繋がっていると説かれる。歌だけでなく，個々人が先祖や生命への感謝や祈り[24]をそれぞれの言葉にして捧げる。

儀式の前後やロッジでの祈りの合間に，パイプに詰めたタバコを吸うが，このとき使われるパイプは，エネルギーを生み出す聖なるパイプとされる。交代で輪になってそのエネルギーを分かち合いながら，祈りとしてあらゆる魂に捧げる［Bruchac 1993: 39–41］。この聖なるパイプは，他の儀式や日常的に祈る際に使われることもある。

日本での山田のスウェットロッジは，物質的な部分で，アメリカで行われるものと違い，柳などの柔らかい木ではなく竹を用いること，ロッジに入れる石は富士山付近，神鍋高原，鳥取県など日本にあるものであることなどの違いがある。このことについて山田に尋ねたところ，本来生活に根差した儀式であり，その土地のものを使うことで循環すると考え，「意識にない部分で土地のバイブレーションをダイレクトに受ける[25]」という考え方によりこの物質的違いに矛盾はなく，むしろ調和や循環というネイティブアメリカン的思想に支えられているという。

3．筆者にとってのスウェットロッジ

筆者がはじめてスウェットロッジに参加したのは，2022 年 4 月の徳島県でのことだった。ネット上で知り合ったアメリカ在住の日本人女性の紹介で，山田圓尚という天台宗の僧侶でもある方がリーダー（儀式の進行役，いわゆる実践者）を務めるスウェットロッジに関わって徳島県の会場を取りまとめされている女性あきらさん（仮名）とあいさん（仮名）とメッセンジャー上でやり取りをし始めた。まだお会いしてことがないのにも関わらず，持ち物や服装，宿泊情報，バスなどの交通機関の情報を丁寧に確認くださり，知らない人との連絡で緊張している筆者がとても温かな気持ちになるほどに，お二人は何かに気付いては連絡をくれた。スウェットロッジに初めて参加するときの筆者は期待と不安と少しの疑いが織り交ざっていたが，現地の環境や人びとの温かさに触れ，儀式が終わる頃には「何かがまだ分かっていないから，分かりたい」と考えるようになった。はじめてのスウェットロッジ体験だった筆者にとって，それは確かに生きる気力が湧いてくるような元気になる体験だったが，リーダーの山田の指示や歌，

[23] 心臓は血液とカロリー，火と水，男性性と女性性の融合で鼓動し，命の力の源である。

[24] この個人的な祈りのなかでは，自分の弱さや危うさをさらけ出すことが許されており，安心安全な場所と捉えられている［谷口 2022：127］。

[25]「その土地のバイブレーションを受ける」とは，その土地に宿るエネルギーに影響を受けるということと山田は説明していた（2022 年 8 月に zoom 上で質問をした際の返答から）。

そこにいる人々の真似をしながら自身の祈りの言葉を必死に探すような体験でもあった。そのため，翌月の神奈川県逗子での開催，その後の京都府綾部での開催にも積極的に参加しながら，この体験はどのように言語化し得るものなのか模索した。

3-1. 祈りによる「つながり」が筆者にもたらした感情

参加を始めて間もない頃の筆者にとってのスウェットロッジ体験は，「世の中のすべてが可能性に満ち溢れている。自分にしかできない人の役に立つことがあるはずだし，誰とでも協力し合えるはず！」というポジティブな感情が大きく，「この体験を聞いてくれそうな人に早く話したい！」という思いが強かった。

儀式が始まる前，ファイアーキーパーが時間をかけて積み上げた焚き木に火入れをすると，そこにスピリットが宿る。スウェットロッジのなかに入る石はその焚き火のなかで燃やされていく。高温に焼くため，木が燃え崩れてもよく焼けるように工夫して積み上げられるだけでなく，その後もファイアーキーパーが真剣に火の様子を見ながら木を継ぎ足していく。儀式の前に，参加者全員で集まり，自己紹介，現在の心境や参加した理由などを話し，山田によりスウェットロッジの捉え方やデニス・バンクスとのエピソード，その教えに基づく神話と考え方（どのような対象や象徴を意識して祈るか）など話されていくと，いよいよ儀式が始まるのだという空気感になっていく。山田やその近くにいる参加者がドラムを叩き，リーダーの掛け声とともに歌を歌うという動作はこの時点から始まる。スウェットロッジにおける儀式の場では，この全員で「ネイティブソング」とも呼ばれる，アニシナベ語やラコタ語の歌を歌うのだが，歌うことは参加者の意識を一つにまとめ，祈りに集中させることに導いてくれる。着替えを終え，セージで身を清め，歌を歌いながら西，北，東，南に向かって祈ると，中に入る準備が整う。一人一人が順に，膝をついてなかに入っていき，20 人以上もの参加者が真っ暗な狭い空間一つに収まる。山田のリードに従って，それぞれの方角と動物に因んだエピソードが共有され，歌を歌い，焚火で焼いた石がそれぞれなかに運ばれ，水がかけられ，蒸気が充満していく。タイミングを見計い，山田の合図で，参加者が一人一人順に祈りの言葉を捧げていく。

儀式そのものがどのように進行するのか，わからない時期は，筆者自身が祈るべきことと，祈りたいことはいったい何なのか，考えながら必死に場に合わせた言葉を紡いでいたように思い出される。儀式に慣れていくと，「色んな人や環境の輪の中に自分自身をもっと委ねたい」という気持ちが起き，いつも心に浮かんでいくその時どきの悩みや葛藤とともに，願いたいことを祈ったこともあった。このように振り返ると，どのような祈りでもスウェットロッジに適しているように思われ，実際にどんな語りや言葉でも肯定し合うような場づくりがなされてもいる。しかし，この「祈りの場」が促すのは，単に自身の願望を祈ることではなく，先祖とのつながりや生きていることに感謝し，自分自身の，あるいは家族や身のまわりの大切な人の肉体的，精神的に癒えない傷や病を癒すような祈りでもあったように筆者は感じる。ドーム状の

真っ暗な空間のなかで，山田がバンクスなど過去にスウェットロッジや「ネイティブアメリカン」としての教えを伝えてきた人びとへの感謝やその場に集まった人びとのために祈りの言葉を聞かせるとき，参加者それぞれが自分自身に向き合うこととなる。そこでは自ずと過去の記憶の断片が思い起こされ，家族との関係や今生きている自分自身だけではない，先祖や直接見ることのできないあらゆる存在とのつながりを意識する。参加者が一人一人，自分自身の言葉で祈っていくうちに，偽りのないそのままの「わたし」でいることが許されているような感覚になっていく。また歌声が共鳴していく瞬間には，その空間を過去，現在，未来や今いる場所など，どこまでも境界を越えて，「つながる」ことを可能にさせるような広がりを感じさせる。自分自身に向き合い，身の回りや先祖とのつながりに思いを馳せて祈ったあと，最終ラウンドでは，その場に集まった者全員で生きている喜びを表現していくようなそんな空気感に変わっていく。大きな声で参加者全員がめいっぱいに歌ったあと，儀式が終わってロッジから出る。しばらくは外で寝転がり，緊張が解けた状態で，ぼーっと，木や，太陽や，鳥の鳴き声や，風に身も心も委ねて過ごす。

体験後のシェアリングでは，身体に余韻が残った状態で，しかし気持ちは新たに，中で感情的になった場面から切り替えて，落ち着いた心持で儀式を体験して何を感じたか，あるいはどう変わったか，どうなっていきたいかなど，それぞれが山田や他の参加者に共有したいことを話していく。そこでは，儀式の前に行った自己紹介を含めたお話のときよりも，希望に満ち溢れた表情や許し合えるような優しさで溢れていくような空気感と言葉をみることができる。この感情は書き言葉では表現しきれないほどに，穏やかで嬉しくて，かけがえのないポジティブな感情だったように思われる。

3-2. 情動的な「癒し」の体験としてのスウェットロッジ

上述したような体験のなかで感じてきた，筆者にとっての祈ることで「つながり」を実感するとは，要約すると，先祖や身の回りの存在に思いを馳せ，自分自身や他者の存在を許し，その可能性を信じて，心を委ねてもよいと思えるようなポジティブな感情だった。

スウェットロッジは，ネイティブアメリカンの思想と生き方を体現した儀式だが，西洋化された日常の文脈にはない儀式であるという意味では，宗教的体験に近しいものと考えられる。現代の日本人は，全体性の回復となるような宗教的体験をする機会が少なく，「心を病む」ことがあれば，「癒し」を必要とするため，スウェットロッジ体験は，宗教的体験における「癒し」の性質を持ったものとして考えることができる。

「癒し」とは何か。精神科での医療行為を「心の治療」というように，「治療」には「西洋医学」による病院での治療行為という意味があり，それ以外の場所での心や体の状態の改善に「癒し」が用いられる傾向がある［上田 1997：215］。上田は，「癒し」について，人類学と宗教的な視点から，「現実の人間関係の全体性」と「宗教的なコスモロジーにおける全体性」の二つのレ

ベルの再編成が全体性を回復させ，それが「癒し」につながるとしている[26]［上田 1997：218–20］。宗教においては，「人間が苦難の出来事から解放され，生きられるのは出来事として和解し，やすらぎを与えられたとき」であり，出来事が一般的に説明されるのではなく，「私の出来事」の意味ある個別的説明が行われるとき，人は癒されると考えられる［上田 1997a：218］。それは，宗教の教説が「いわれなき苦しみ」に「合理的」な意味を与えるといった「知的」な「救い」ではなく，むしろ知的な把握では得られない，情動的な世界との和解，「感動にうち震え，涙がこぼれ，言葉を失う」体験こそ「癒し」であるのだ［新屋ほか 1995］。

このように考えてみると，スウェットロッジ体験は「喜び」を増大する，知的に説明されない，「感動にうち震え，涙がこぼれ，言葉を失う」，「癒し」の体験となっている。また，情動の伴った生き生きとした体験であり，情動的な世界と和解する体験でもある。

情動の原語は「エモーション emotion」と「アフェクト affect」だが，このうち後者の概念で情動を捉え，「アフェクト的な世界」のなかで，自然のなかの様々な個体が相互に「影響・作用され，影響・作用する（アフェクトされ，アフェクトする）」視座から情動を扱った民族誌的記述や哲学的考察を行う感覚研究の領域がある［西井・箭内編 2020］。

ドゥルーズのスピノザ論では，変様（アフェクティオ）は，他の物体や身体との出会いから生じる，触発された身体の状態を示し，触発された体の現前を必然的に伴うものであり，こうした各状態（変容状態）が，それを先行する状態に結び付け，後続する状態へと向かわせる一定の持続，つまり完全性の連続的変移が「情動」であり，感情（アフェクトゥス）のことであると説明される［ドゥルーズ 2002：182–4］。つまり，アフェクトゥスは，ひとつの状態から他への移行を示し，相手の触発する体の側の相関的変移が考慮に入れられる［ドゥルーズ 2002：184］その上でアフェクトゥスは，「身体自身の活動能力がそれによって増大あるいは減少し，促進あるいは阻害されるような身体の変様［ドゥルーズ 2002：182–4］であり，増大する場合には「喜び」として，減少する場合には「悲しみ」として生きられると考えられる［西井・箭内編 2020：417］。そのような活動能力を増大させるような「アフェクトし，アフェクトされる」体験は個々人の肯定的な社会との繋がりや自己意識を形成することができるのだ。

---

[26] 人間関係の修復を目的とするのであれば，世俗的なパーティに参加すること，また，仏教的コスモロジーの伝達についても，誰かにその話を聞いたり，本で読んだりすることによって可能と考えることもできる［上田 1997a：221］。しかし，そのような方法で，癒しが起こらないとすれば，それは意識の変容状態[27] が体験されるような「宗教的体験」による癒しが必要なのだと考えられる［上田 1997a：221–2］。つまり，人間の共同性の根源，コスモロジーの根源は，われわれの深層意識の領域における全体性，一体感のイメージにあり，その表層のイメージが損なわれたときに人間は病み，そのイメージの回復によって癒されるのである［上田 1997a：223］。

4．非日常とスピリチュアリティは関連付けられるべきか

情動的な「癒し」の体験としてスウェットロッジを説明してみると，それはたしかに「感動にうち震え，涙がこぼれ，言葉を失う」体験であり，喜びの伴う生き生きとした体験でもあった。しかし，上述したような「癒し」としてスウェットロッジ体験を説明するとき，それが日常の文脈にはないことを前提とし，「非日常である」[27] ことを意味してしまう。

また，スピリチュアリティ文化に関心を持つ人が少なくないなかで，自分自身もそれについて関心を持っていることに気付くと同時に，ネイティブアメリカン文化そのものがスピリチュアリティ産業と連動した消費文化のなかで語られているという側面を度外視することができなかった。同時に，それをスピリチュアリティ文化の延長として向き合おうとすると，周りから異質に捉えられているような感覚を持つことが避けられなかった。

たしかに 1960 年代のカウンターカルチャーや 1970 年代のニューエイジの運動によって，スピリチュアリティ文化への関心が高まり，日本でもそのような書籍コーナーのなかにネイティブアメリカンに関する出版物も設けられるようになったという歴史的な流れがあるだけでなく，スウェットロッジに集まった人びとが関心を持つ，「ヒーリング」「セラピー」「ティク・ナット・ハン」「禅宗」「魂（スピリット）」「ヒッピー」など[28] は，スピリチュアルな文化のキーワードとしてメディアやスピリチュアリティ研究のなかで扱われることも多い。

しかしながら，筆者は繰り返しスウェットロッジに参加し，アメリカでのサンダンスにも参加するなかで，非日常的儀式であることが本来意図されているわけではないのではないかと考えるようになった。参与し続けていると，知っている顔ぶれが増え，サポーターの一人としてその場を整えることがより意識されるようにもなる。また，そうしたなかでそれぞれの祈りは儀式にのせるだけでなく，祈りたい気持ちと場所が整えばどこでもしてよいものなのだと考え

---

[27] 文化人類学では時間の境界性を前提とした儀礼論で儀礼や儀式などを分析することがあるが，ヴィクター・ターナーは儀礼論のなかでいう過渡の際にコムニタス（反構造）をみることができると分析し，この特徴として非日常性があるとした。より具体的には，ファンヘネップは『通過儀礼』［2012］において，儀式の全容を始めから終わりまでの連続体に着目し，儀礼を分離・過渡・統合に分類したが，ターナーは『儀礼の過程』［2020］で，ファンヘネップの通過儀礼のカテゴリーにおける「過渡（リミナリティ）」に着目し，儀礼を通過する者があいまいな状態となるこのときの現象について，権威者ではない平等な個人で構成される未組織の，ないしは組織が完全でない，相対的に未分化な社会関係の様式をコムニタス（反構造）とし，日常における社会的役割や地位を伴う構造（ストラクチャー）と対になると考えた。そのように儀礼論の視点から，スウェットロッジ体験の場で感じたものを言語化すると，異なる場所や動機から集まった人びとが一つの場でお互いの地位や境遇など関係なく，感情を吐露し合い，受け止め合うという意味でこの儀式は非日常性を持っているものとすることもできるだろう。

[28] 2022 年 8 月 30 日から 9 月 7 日に山田のスウェットロッジに体験したことのある人々に筆者が行ったインタビュー調査で話された内容をもとにしたキーワードの例を挙げている。

るようになった。非日常的に捉えられるスウェットロッジは日常的体験として捉えることは可能なのだろうか。

5．参加者にとっての非日常と日常とは何か？

日本で実践されるスウェットロッジは果たして本当に非日常的体験なのか，日常的な実践として捉えてみる必要があるのではないか。この問題意識を検討するために，筆者は 2025 年 6 月に 6 名の体験者にスウェットロッジの非日常性と日常性について質問をした。以下が質問内容と返答である。

①メッセンジャーを通じて質問した内容

「スウェットロッジ体験で感じる非日常性と日常性は？非日常だったものが日常になっていく感じってありますか？（体験する回数が増えるに連れ，むしろそれはいつもあると思うこととか）」

②受け取ったお返事

6 名に質問をしたところ，3 名からメッセンジャーでお返事をいただいた。このうちリトルベアさんとハイビスカスさんには，後日 8 月中旬に札幌でお会いして，改めてお話をお伺いした。3 名にはお送りいただいた内容を本論集に投稿することを承諾いただいた。以下がその内容である。内容のなかで特徴的だった箇所やキーワードを含んでいるところを太字や下線によって強調している。

リトルトリーさん（仮名），女性

「感覚を言葉にしてみるきっかけをありがとう。**自分の世界（日常）の外にある，特別な体験だったスウェットロッジが，いつのまにか，自分の世界の続きになったような感覚**，私もしばらく前に感じましたね。わたしはよく，**歌の CD** を聴きながら，セレモニーに向かっていたんだけど，初めの頃は，**CD を聴くと，スウェットロッジの場のエナジー，雰囲気を思い出す**，という感じだったの。それは自分の日常とは，異世界な感覚。道すがら，歌を聞いていると，再び，その世界に入っていって，自分にとってのセレモニーの準備がはじまる，という感覚。それが**ある時，CD 聞いても，なんの違和感なく，異世界感もなくなってた**。その時，**あ，周波数が，同じになったのかなあ**，と感じました。**今でももちろん，スウェットロッジの場は，特別**だし，渦巻くエネルギーや，スピリットがやって来ているのを感じるし，みんなと交わす交流の深さも，日常のレベルではない。**でも，それは日常の“続き”になってる**。スウェットロッジを支える世界観が，私の世界観に重なってきたのだろう，と感じているよ！」

リトルベアさん（仮名），男性

「スエットロッジという**非日常の状況に身を置くことで日常で見過ごしていたことの「有難さ」を体感する**ことは毎回あります。目で見ることができること，水の恵み，火の有難さと怖さ，先祖からの繋がり，人々や他の生命との繋がりなど，その時々で強く感じることは異なります。ただ**日常生活に戻るとその感覚は徐々に薄まっていきます。**その時に七つの聖なる教えが役に立ってます。そこに出てくる**スピリットアニマルや天体などを目にした時に，それらが象徴するものの有難さを身近に感じ，思い出すことができるようになって来た**気がします。**同じ景色を違ったメガネで見る**ことが出来るようになる感じ。僕の場合，**朝，外でタバコを吸う際，煙が上がって行く時に先祖との繋がり，太陽の有難さを感じるようになりました。北斗七星を見ると熊の象徴とする癒し（自分のハートとの繋がり）や勇気を思い出します。**」

ハイビスカスさん（仮名），女性

「スウェットロッジセレモニーの**非日常性は，ある程度の人数が集まって，セレモニー，祈り合わせに集中する時間を共に持つというところ**かと思っています。今の日本の日常の中で，**人の祈りに耳を傾けたりする時間って，中々無い**と思うので，そういう意味で特殊な状況ですよね。**特にドームの中で，真っ暗な中，蒸気を浴びるという特異な環境も相まって，非日常性がある**と思います。私は最近ほぼ毎日瞑想をしているのですが，スウェットロッジは，**瞑想の感覚に似ている**と思っています。**自分達を根底で支えている世界や本来はある繋がりに意識を向ける**ところなどですね。そういう意味でスウェットロッジは瞑想的なチューニングだと思っています。**人間は意識しないと本来ある繋がりからどんどんズレていってしまう生き物なので（スピリットからマインドの方に傾いてしまうともいえますね。）日々のチューニングが必要ですね。**そういう意味で，スウェットロッジは，**日常的な物であり得る，日常的に行うことに価値があるもの**と思っています。瞑想が集団で行うとよりパワーを持つのと同じように，スウェットロッジも集団で行うことでより集合意識や場のエネルギーを整えるのに大きな効果を発揮するのではないかというのが，今まで体験してきての私の体感です。」

5-1. 回答から浮かび上がること

スウェットロッジ体験で感じる日常と非日常について，3 人はそれぞれに異なる回答をした。最初のリトルトリーさんは，スウェットロッジでも歌われる歌の CD が媒介となり，日常と非日常が連続するものと捉えるようになった。リトルベアさんは，非日常の状況に身を置くことで日常を見過ごしていたことの有難さを体感すると言っていたが，日常で目にするものがスウェットロッジで象徴していたものを思い出させるというように，非日常と日常の視点の違い

を行き来するような捉え方をしていた。ハイビスカスさんは，スウェットロッジの場の特異な環境がつくる非日常性を感じながらも，そこで得るつながりの感覚を日常化しようとすることに価値があると捉えていた。その後リトルベアさんとハイビスカスさんには札幌で改めて話を伺った。スウェットロッジ体験そのものの非日常性を認めつつも，そこで感じたことや考え方を日常のなかで捉え直そうとお二人は意識するようになっているようだった。

5-2. 非日常的体験は日常的体験として連続していく

スウェットロッジ体験は非日常として捉えられることが多いが，参加し続ける人にとっては，日常と非日常の連続性が意識されるようになっているのかもしれない。一人目のリトルトリーさんは歌，二人目のリトルベアさんは象徴する動物や天体を見たとき，三人目のハイビスカスさんは瞑想的な感覚でチューニングをして偏りすぎないようにすることが体験と日常生活を連続させるきっかけとなっていた。また，リトルベアさんとハイビスカスさんとともに話を深めていくと，儀式そのものを日常と捉えられるほどに実践しているのは，実際には実践者（リーダー）の山田だけであるかもしれないが，むしろその恩恵を受けることによって日常生活を捉え直すきっかけを得ているという話にもなった。日常を捉え直す上で，儀式で感じたこと，「アニシナベの教え」から学んだことを意識して自分なりに実践しようとすることが継続して参加し続ける人びとにとっては重要であるということをお二人は話していた。リトルトリーさんが最初に「自分の世界（日常）の外にある，特別な体験だったスウェットロッジが，いつのまにか，自分の世界の続きになったような感覚」とおっしゃっていたが，それぞれが語りのなかで，儀式そのものが身近に感じられなかったことを認めつつも，そこで印象に残ったもの，大切にしたいと思ったものが日常生活のなかでも意識されてしまったり，意識されるときに儀式の場やデニス・バンクスの伝えた「アニシナベの教え」を思い出したりすることで，「自分の世界の外」であったものが連続するようになっていくのだ。

6．祈りが喚起させること

現在日本では何名かの実践者（リーダー）により，北米先住民族の人びとから伝えられたスウェットロッジという儀式が執り行われている。本稿では，ネイティブアメリカンの運動家デニス・バンクスに学んだ山田圓尚の執り行うスウェットロッジに参加し続ける筆者自身の体験と他の参加者の語りから，この儀式がなぜ参加者を繰り返し参与させ続けるのか，儀式の場を離れた日常生活の視点から捉え直そうと試みてきた。

筆者はこれまでのスウェットロッジ体験で，先祖や身の回りの存在に思いを馳せ，自分自身や他者の存在を許し，その可能性を信じて，心を委ねてもよいと思えるようなポジティブな感情を抱いた。しかし，その感情は「癒し」の体験として言語化しようとすると，非日常性を持

つものであることが前提とされてしまう側面があり，さらにスピリチュアリティ文化とのかわかりのなかで捉えると，消費文化のなかで語られる異質なコミュニティとして位置付けることにもなってしまう。筆者の質問に対する他の参加者の語りから考えることができたのは，歌，象徴する動物，意識を集中させることがそれぞれ，儀式をつくる性質を持ちながらも，ありふれた日常生活のなかで，歌うこと，たばこを吸うときや星を見るとき，瞑想や意識を集中させることを通しても意識されるようになり，そこでは連続性が感じられるようになるということだった。日本でのスウェットロッジ体験はたしかに非日常性を持ちつつも，体験での記憶の断片は儀式の場を離れた日常生活のなかでみることができる。

スウェットロッジの儀式の場で祈るということは，たしかに日本のどこででも体験できるわけではない，特別な体験である。それは実践者（リーダー）の存在や他のサポーターの存在，設置可能な場所，石や竹，毛布などのモノ，歌を歌える参加者がいることなど，様々な要素によって支えられている。それらは儀式特有の環境をつくっている。しかしながら，祈りとは日常生活とのつながりのなかで意識させられるものでもある。儀式のなかで先祖や周囲を思い，祈ることは，儀式の体験だけで可能になるものではなく，日常生活のなかでの記憶が関わるものでもあるということだ。ハイビスカスさんは，スウェットロッジやサンダンスに参加するようになってから，自身の先祖とルーツについて考えるようになったという話も聞かせてくださったが，体験者たちはただ他地域の儀式を拝借してその場で祈っているというのではなく，自分自身にとっての祈りを模索しながら，まだ見ぬ幾つものつながりに向き合おうとしているのかもしれない。筆者は一人の参加者としてハイビスカスさんと同様に日常のなかから自分自身の祈りを考えると同時に，人類学者として，日本とネイティブアメリカン運動家コミュニティを繋ぐこの儀式がどのように存在し続け，越境先の日本で何を受け止めて未来に繋いでいくことができるのか考え続けていきたい。

（まみや　もえ・文化人類学研究室）

参考文献

新屋重彦，島薗進，田邊信太郎，弓山達也編　1995『癒しと和解―現代における CARE の諸相』成蹊大学アジア太平洋研究センター。

上田紀行　1997「癒し」青木保，内堀基光，梶原景昭，小松和彦，清水昭俊，中林伸浩，福井勝義，船曳建夫，山下晋司編『文化人類学　第 11 巻　宗教の現代』岩波書店。

ドゥルーズ，G．2002『スピノザ―実践の哲学』鈴木雅大訳，平凡社ライブラリー。

ターナー，V.W．2020『儀礼の過程』冨倉光雄訳，ちくま学芸文庫。

谷口智子　2017　カナダ先住民クリー族のサンダンス儀礼　―― サスカチュワン州ホールレイク居留地の事例 ―― 愛知県立大学外国語学部紀要（49）。57-87。

――――― 2022「浄化と共感の儀礼」としてのスウェットロッジ　愛知県立大学大学院国際文化研究科

論集（23）。125-144。
西井涼子，箭内匡編　2020『アフェクトゥス―生の外側に触れる』京都大学学術出版会。
浜由美子　1998　現代に生きる北米インディアンのスエットロッジ　十文字学園女子短期大学研究紀要 29。67-77。
ファンヘネップ，A．2012『通過儀礼』綾部恒雄，綾部裕子訳，岩波文庫。
森田ゆり　1989『聖なる魂』朝日新聞社。
横須賀孝弘　2002「北米インディアン口承文学の伝統と『ブラックエルクは語る』―不断に変容する伝統」西村頼男，喜納育江編『ネイティヴ・アメリカンの文学―先住民文化の変容』ミネルヴァ書房 pp.58-74。
和田光弘　2014『大学で学ぶアメリカ史』ミネルヴァ書房。
Banks, D and Erdoes, R. 2004. *Ojibwa Warrior: Dennis Banks and the rise of the American Indian Movement*. University of Oklahoma Press.
Bannan, J. 2002. The New York Times. Indian Ritual Taken to a Wider Audience. https: //www. nytimes. com/2002/09/15/nyregion/indian-ritual-taken-to-a-wider-audience.html. 2025 年 5 月 29 日閲覧.
Bucko, R. A. 1998. *The Lakota Ritual of Sweat lodge*. University of Nebraska Press.
Bruchac, J. 1993. *The Native American Sweat Lodge: History and Legends.* The Crossing Press.
Drost J. L. 2019. Developing the Alliances to Expand Traditional Indigenous Healing Practices Within Alberta Health Services. *Journal of alternative and complementary medicine (New York, N.Y.)*, *25*(S1), S69−S77. https: //doi.org/10.1089/acm.2018.0387
Gard, J. 2006. *Creating health in a native american sweat lodge: The production of an alternative healing space*. Available from ProQuest Dissertations & Theses Global. (304909692). Retrieved from https://www.proquest.com/dissertations-theses/creating-health-native-american-sweat-lodge/docview/304909692/se-2（2022 年 11 月 4 日）
Garrett, M.T., et al. 2011, *Crying for a Vision: The Native American Sweat Lodge Ceremony as Therapeutic Intervention*. Journal of Counseling & Development, 89: 318−325. https://doi.org/10.1002/j.1556−6678.2011.tb00096.x
Garrett, M. T. et al (eds). 2013. Invited Commentary: Fostering Resilience Among Native American Youth Through Therapeutic Intervention. Journal of Youth and Adolescence, 43(3), 470−490. https://doi.org/10.1007/S10964−013−0020−8
Harvard University. Pluralism Project Archive. n. d. Commercialization of Native American Sweat Lodges Creates Differing Opinions. https: //hwpi. harvard. edu/pluralismarchive/news/commercialization-native-american-sweat-lodges-creates-differing-opinions. 2025 年 5 月 29 日閲覧.
Jacobs, Margaret D. “Making Savages of Us All: White Women, Pueblo Indians, and the Controversy Over Indian Dances in the 1920s.” Frontiers: A Journal of Women Studies 17, no. 3 (1996): 178−209. https://doi.org/10.2307/3346887. 2025 年 9 月 4 日閲覧.
Marsh, T. et al. 2018. *The Sweat Lodge Ceremony: A Healing Intervention for Intergenerational Trauma and Substance Use*. International Indigenous Policy Journal. 9. 10.18584/iipj.2018.9.2.2.
Wenger, Tisa. 2011. Indian Dances and the Politics of Religious Freedom, 1870−1930. *Journal of the American Academy of Religion* 79(4): 850−878. https://doi.org/10.1093/jaarel/lfr061. 2025 年 5 月 29 日閲覧.

10.14943/rjgshhs.25.l 67

アドルノのテクスト戦略における〈Farbe（色）〉への眼差し

――「形式としてのエッセー」を中心に

日　下　雅　貴

要　旨

本稿はドイツの芸術論者テオドール・W・アドルノの「形式としてのエッセー」を精読し，芸術批評における彼のテクスト戦略を〈色彩の救出〉というモチーフから解明する試みである。近代以降，芸術は理性＝言語の次元から分離され，概念的理解を拒む性格を獲得していった。その結果，芸術を言語で論じる美学は出発点において自己矛盾を抱えることになる。この美学上のアポリアに対し本稿はアドルノの「エッセー（試論）」という形式にヒントを求める。第１節では，エッセーが「正統」に対する「異端」として規定されることが確認される。その規定は，事象と観念の同一性を前提としない〈認識論的異端〉，体系的叙述を拒否する〈方法論的異端〉，「永遠なるもの」に優位を与えず，「移ろいゆくもの」を対象とする〈存在論的異端〉の三点に要約される。第２節では，アドルノの初期の仕事に遡り，彼の真理概念が検討される。アドルノは真理の基準を論理的一貫性ではなく「豊かさ（Fruchtbarkeit）」という美的契機に見出していることがそこで確認される。第３節では，アドルノの社会批判を通してエッセー形式の備える意義が明らかにされる。等価交換原理に支配された近代市民社会は，質的差異を量的関係へ還元し，結果として世界を貧困化させ，「灰色」に覆ってしまう。これに対しエッセーは質的契機（＝色）の救出に取り組み，社会の均質化に抗する批判のモメントとなる。本稿後半では，その具体的な方法に迫るため「形式としてのエッセー」における視覚的比喩の構造が検討される。エッセーにおいて概念は事物を言語の次元に媒介する「媒質（レンズ）」として，理念は概念の「光源」として位置付けられる。以上の作業を通してエッセーは，概念的理解を拒む芸術の質的契機＝〈色彩〉を，理念の光のもとで言語の次元に救出し，社会批判として機能する形式であることが結論される。

序

本稿はドイツの芸術論者テオドール・アドルノ（Theodor W. Adorno, 1903–1969）の「形式としてのエッセー」を手掛かりに，芸術と言語の関係について考察する。

現代日本を代表する美学者の小田部が「芸術の脱ハビトゥス化」と名付けた，近代的芸術観の根底をなす状況は今日なお存続しているといってよいだろう。小田部は現代までに受け継がれる近代的「芸術」概念が成立するためには，芸術と学問の分離が必要だったとする。アリストテレスからバウムガルテンに至るまで「芸術」は，それを支える規則が学問的に認識可能だとされていた点で，知的営みと連続していた。言い換えれば，主に感性の次元に属する芸術と，言語（理性）の次元に属する学問は地続きのものと見なされていたのである。しかし 18 世紀中葉には，芸術を芸術たらしめる法則が普遍的に（言語によって）伝達されるとする前提意識は薄れ，その法則はただ「天才」によってその都度発見されるものと考えられるようになる。「芸術」は記述可能，反復可能な既存の法則（ハビトゥス）の軛から脱し，知的領域の外側へ居所を定めたのである[1]。ところで，こうした事情は芸術を対象とする学問にとって重大な意味を持っている。というのも，近代的「芸術」概念が言語の次元から逃れていくことを一要素とするとすれば，芸術を言語の次元において考察しようとする学問的営み（＝美学）は，出発点においてすでに矛盾しているからである。竹内敏雄の表現を借りれば，「[…] 美学は，それ自身の学としての規定とその認識対象の本性とのあいだに存する根本的背反関係のために，はじめから挫折すべく運命づけられた企て」と言えるのである[2]。

本稿はこの難問（アポリア）に対する一つの応答をドイツの哲学者にして美学者・芸術論者でもあったテオドール・アドルノの著作のうちに求めたい[3]。そもそも芸術論者としてのアドルノは，アルノルト・シェーンベルクらの前衛音楽，カフカの散文作品，サミュエル・ベケットの不条理劇などを擁護したことで知られ，その批評活動は概念的理解を真っ向から拒む作品を哲学的に理解するという，まさしく二律背反的な試みだった。私たちは以下で「形式としてのエッセー」（1954–1958 年）を中心に，アドルノのテクスト戦略を分析することで，芸術と言語の分離を乗

1　小田部胤久『芸術の逆説』東京大学出版会，2001 年，「プロローグ」参照（特に 6–14 頁）。

2　竹内敏雄『美学総論』弘文堂，1979 年，3 頁。[ ] は筆者による補足，[…] は省略を示す（以下同様）。

3　以下，アドルノからの引用はすべてドイツ語版全集 *Gesammelte Schriften*, Bd. 1–20, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1970–1986（以下 GS と略記）に拠る。同全集からの引用箇所は巻数とページ数を本文中に示し，その際原文ページ数と参照した邦訳のページ数とをスラッシュを挟んで併記する（例：GS5, 100/120 は，全集第 5 巻，原文 100 頁，邦訳 120 頁を意味する）。また原則として本稿における訳文はすべて筆者による訳出である。ただし，既存の訳に多くを学び，優れた表現のいくつかはそのまま取り入れさせていただいた。ここに記して，先行訳者の諸氏に感謝申し上げる。

り越えるためにアドルノが執った方策を再構成する。アドルノは 1954 年から 58 年にかけて執筆した同論において，芸術批評を含む自身の言語表現の方法論をデカルトに代表される伝統的な学問の方法論に対置させる形で提示した。簡潔に言えばアドルノは，普遍性・永遠性を志向する理性に立脚した西洋の伝統的形而上学の諸前提を批判し，その下で抑圧されてきた特殊な感覚的なもの（美的なもの）を救出する方法を模索したのである。

しかしそれは具体的にどのような手続きを執るのだろうか。本稿はアドルノが提示するこの方法論の具体的内実を，「形式としてのエッセー」における視覚的比喩の構造を追跡することで明らかにする。すなわち同論において〈理念（ユートピア）―概念―事象〉の関係が〈光―媒質―色〉の関係として叙述されていることを示す。「形式としてのエッセー」に関する研究では，アドルノの方法が伝統的な学問的方法に対するアンチテーゼであることは確認されてきたが[4]，この比喩構造に着目し，事物と言語の美的交流という局面に踏み込んで解釈されることは稀であった。というのもこの交流の局面は修辞的次元において展開されるため，同論考を事実確認的（コンスタティヴ）に読解しようとするとき見落とされがちになるからである[5]。それに対して本稿は「形式としてのエッセー」の比喩構造にまで踏みこんで解釈を試みることで，最終的に，〈事物の色彩は，理念の光を通して概念という媒質に反照する〉というアドルノ芸術批評のダイナミズムを明らかにする。

本稿の議論の道筋は以下の通りである。第 1 節では「形式としてのエッセー」を読解するための基本作業として，同論の骨格ともいうべき対立構造 ── 思想の「異端」と「正統」の対立 ── を整理する。第 2 節では 1931 年の講演「哲学のアクチュアリティ」を取り上げ，アドルノの真理概念を検討する。アドルノが伝統的な「無矛盾性」ではなく「豊かさ」という感性的契機を真理の基準に据えていることがここで確認される。第 3 節ではアドルノの社会批判へと視野を広げ，エッセーという形式に託された射程を見極める。続く後半部では「形式としてのエッセー」の具体的な読解に取り掛かり，そこに働く比喩の構造と含意を汲み出すことが目指される。第 4 節では「媒質」としての概念が，第 5 節では概念の「光源」としての理念が主題化される。これらの考察を通して，従来否定的なイメージで語られてきた批評家アドルノの肯定的な像を描き出し，その営みが芸術と言語をめぐる生産的関係の実例であることを示し，結論とする。

---

[4] 「形式としてのエッセー」に関しては Weber Nicholsen, Shierry, *Exact Imagination, Late Work: On Adorno's Aesthetics*, Cambridge, MA: MIT Press, 1997, pp. 105–110 や藤野寛「哲学の表現形式としてのエッセイ：アドルノ「形式としてのエッセイ」を読む」『國學院雑誌』125 巻，2 号，2024 年，106–124 頁が読解の基本線を提示している。

[5] 「形式としてのエッセー」に関わらず，修辞的次元に着目したアドルノ読解はあえて避けられてきたとも言える（守博己『その場に居合わせる思考 ── 言語と道徳をめぐるアドルノ』法政大学出版局，2020 年，8–9 頁，脚注 6 を参照）。確かに守が示唆するように，アドルノの文体における修辞の綾への注目は，アドルノの概念的理解を疎かにする危険性がある。しかし，その逆もまたしかりと言うべきであり，重要なのはアドルノにおける概念的側面の体系的理解と修辞的側面への配慮を共存させながら ── いわば両輪で ── その読解を試みることである。

1　「異端」としてのエッセー

「形式としてのエッセー[6]」においてアドルノはエッセーを「思想の正統」に対する「異端（Ketzerei）」と特徴づける（GS11, 33/31）。同論におけるアドルノの基本的な立場を確認するためにも，私たちはまずこの対立構造の内実を把握する必要がある。エッセーがいかなる理由で「異端」と呼ばれるかは，以下の記述から具体的に確認することができる。

> エッセーは，組織化された学問と理論のルールともいうべき，事象の秩序と観念の秩序は同一であるというスピノザの命題に従わない。諸概念の隙間のない秩序は存在するもの（das Seiende）と同一ではないのだから，エッセーは演繹的にせよ帰納的にせよ，完結した構成を目指したりしない。それはとりわけ，移ろいやすく儚いものは哲学の対象に値しないという，プラトン以来根を下した教条 ── 移ろいゆくもの（das Vergängliche）を概念において弾劾するこの古来の不正に，叛旗をひるがえす。（ebd., 17/12）

「〜ない（nicht）」という否定辞の繰り返し，「叛旗をひるがえす（revoltieren）」という動詞によって強調されるのは，エッセーが伝統的な哲学的思考の三つの前提を拒否する異端的試みであることである。ここでエッセーの第一の矛先となっているその前提とは，スピノザの『エチカ』に由来する事物と観念の同一性に関する認識論的命題 ──「観念の秩序と連関は，事物の秩序と連関と同一である[7]」── である。事物（身体）の秩序と観念（精神）の秩序が並行関係にあるというよく知られたスピノザのこの命題は，アドルノによれば，西洋の知的営みにおける原則として機能してきた。しかしエッセーはこの命題を暗に支えている幻想，すなわち「単純で，根本においてそれ自体論理的な世界という幻想を払いのける（abschütteln）」（ebd., 23/19）ことで，同一性命題そのものを拒否する。反対に，エッセーはむしろ世界や対象が複雑で入り組んでいること，そして論理に回収されない側面を備えていることを ── たとえそれが哲学的認識にとって都合が良くなくとも ── 尊重する。観念の秩序から逃れていくものに対する鋭敏な意識，すなわち「非同一性の意識」（ebd., 17/11）こそ，第一にエッセーの異端的精神を特徴づける。私たちはこれをエッセーの〈認識論的異端〉と名付ける。

第二の論点は，引用文にて「エッセーは，演繹的にせよ帰納的にせよ，完結した構成を目指したりしない」と述べられているように叙述の形式（方法）に関わる。アドルノによれば，伝統的な哲学的思考は，デカルトは言うに及ばず，ベーコンの経験論でさえ「多かれ少なかれ不

6　»Der Essay als Form«, in: GS11, S. 9–33.「形式としてのエッセー」三光長治訳『文学ノート 1』三光長治・恒川隆男・前田良三・池田信雄・杉橋陽一訳，みすず書房，2009 年，3–33 頁。

7　スピノザ『スピノザ全集Ⅲ エチカ』上野修訳，岩波書店，2022 年，62 頁。

変なものと想定された認識の諸条件を論究し，あたう限り断絶のない連関のなかで認識を展開するものである限り，体系的であることに変わらない」（ebd., 16–17/11）[8]。認識の条件を確立し，個別のあらゆる現象をその原理へと紐づける方法は，その叙述に一貫性と完結性を与える。しかし〈認識論的異端〉であるエッセーは，現象のうちに原理へと回収され尽くさないものを覚知するため「反体系的な衝動を自身の方法に取り入れ」（ebd., 20/15），「体系に対する批判」（ebd., 16/11）となる[9]。したがってエッセーは，ある認識と別の認識を，それらに共通する原理に収斂させることで獲得される叙述の連続性や一貫性を犠牲にする。つまりエッセーは「断片において思考し」，まさしく「非連続ということが本質的」なのである（ebd., 25/21）。このように非連続的に認識を展開していくエッセーの方法を，アドルノが「方法的に非方法的（methodisch unmethodisch）」（ebd., 21/16）と表現していることから，私たちはこれをエッセーの〈方法論的異端〉と呼ぶことにしよう。

エッセーが「思考の正統」に対して向ける第三の矛先はプラトンである。先の引用を借りてより正確に言えば「移ろいやすく儚いものは哲学の対象に値しないという，プラトン以来根を下した教条」が第三の標的である。「移ろいゆくもの（das Vergängliche）」とは感覚（感官）の対象となるもの ── 色，味，匂い，音，肌理など ── であり，それは「いま・ここ」にのみ現前する特殊なものであるため，普遍性を志向する哲学の対象たり得なかった[10]。反対に哲学（理性）の対象とされてきたのは，時間による変移を免れた「永遠なるもの（das Ewige）」であり，伝統的哲学は「移ろいゆくもののうちに永遠なるものを探り出して分留する（abdestillieren）」ことを目指す（ebd., 18/13）。というのも，現象の抽象化を通して獲得された「永遠なるもの」すなわち「概念」や「理念」には，束の間のうちに消えていく現象に比して「存在論的な尊厳」が備わっているからである。が，アドルノは概念の永遠性（普遍性）を声高に主張するこの種の思想傾向を「ドグマ」と断罪し，感覚的現象を軽視するその「無法さ」を告発する（ebd., 17/12）[11]。むしろアドルノの擁護するエッセーは，「いま・ここ」に現前する「移ろいゆくもの」をこそおのれの認識対象とし，「移ろいゆくものを永遠化すること（das Vergängliche verewigen）」を目指す（ebd., 18/13）。この言葉の含意は以下で明らかにされていくが，とりあえず私たちはここで，「永遠なるもの」に存在論的優越を認めないエッセーのこの態度を〈存在論的異端〉と名付けよう。

主観と客観，観念と事物，精神と身体の同一性を前提（仮定）しないという〈認識論的異端〉，個々の認識を統制・統合する唯一の原理に執着しないという〈方法論的異端〉，存在の階梯にお

---

[8] Vgl. GS3, S. 23（ホルクハイマー，アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳，岩波書店，2007 年，29 頁）.

[9] Vgl. GS11, 24/20.

[10] 周知のように感覚的なもの，すなわち美的なもの（das Ästhetische）が哲学の対象となるには 18 世紀中葉の「美学」の成立を俟たねばならなかった。

[11] Vgl. GS11, 18/13.

いては，永遠に存在し続けるものこそ，時間とともに消滅していくものより価値があるという主張を認めない〈存在論的異端〉。第一に，「形式としてのエッセー」において，エッセーはこのように「思想の正統」に対するアンチテーゼとして規定される。実際，「形式としてのエッセー」に関する研究の多くが，エッセー形式の孕む同一性哲学（原理）批判の側面を指摘しており[12]，ここまでの本稿の解釈と一致する。とはいえ，このことは言い換えれば，この時点でエッセーは思想の正統の外部に位置するという規定しか受け取っていないことを意味する。だが同論においてエッセーは単にアンチテーゼとして否定的（外在的）に規定されているばかりではない。見極めなければならないのは，エッセーという形式そのものに賭けられているものである。エッセーの外在的（否定的）規定ではなく，エッセーの肯定的規定を私たちは以下で探ることになるだろう。

2　思考の新たな真理基準 ──「豊かさ」の契機

この点を明らかにするためには，いくつかの回り道を挿む必要がある。そもそも，伝統的な哲学の方法を拒絶することは，その下で保証されてきた真理の観念をも拒否することを意味する。したがって私たちはまずアドルノの真理概念について考察を加える必要があるだろう。

目下確認した伝統的な哲学に対するアドルノの批判は，「形式としてのエッセー」において初めて表明されたわけではなく，その発想はごく初期の思想にまで遡ることができる。1931 年，アドルノがフランクフルト大学に私講師として着任した際の記念講演「哲学のアクチュアリティ[13]」は，「アドルノの哲学的プログラムの開陳」と指摘されるように[14]，その後のアドルノの多方面にわたる仕事の源泉とも言うべきものである。とりわけ自らの哲学の方法論を打ち出したという点において，後年の「形式としてのエッセー」の原型とも言うべき存在である。このことを示すには講演冒頭の発言「思考の力によって現実の総体を把握できるという幻想を断念しなければならない」あるいは「総体としての存在に対する思考の適合性は崩壊している」を引けば十分だろう（GS1, 325/2-3）。これは私たちの議論がすでに〈認識論的異端〉と名付けたアドルノの哲学的立場である[15]。そして同講演にてアドルノは最終的に自らの哲学的方法を，

---

[12] 例えば Weber Shierry, *op. cit.*, p. 106；藤野，前掲論文，114-115；119-122 頁。

[13] »Die Aktualität der Philosophie«, in: GS1, S. 325-344.「哲学のアクチュアリティ」『哲学のアクチュアリティー ── 初期論集』細見和之訳，みすず書房，2011 年，2-38 頁。

[14] 細見和之『アドルノ ── 非同一性の哲学』講談社，1996 年，74 頁。

[15] 当然ここで，そもそもアドルノがなぜこのような立場を採るのかという問いが浮上してくるが，これに明確に答えることは容易でない。なぜなら世界の非論理性を前提としつつ，「世界は思考によって完全に把握できない」ということを証明することは，世界の非論理性を論理的に捉えるという自己矛盾に陥ってしまうからである。したがってアドルノのこうした発言は，哲学的認識に基づくと

「第一哲学」や「大きな哲学（die große Philosophie）」に対する「小さな形式」としての「美学的エッセー（der ästhetische Essay）」として打ち出す（ebd., 342–344/34–36）。これは「形式としてのエッセー」における対立構造 ── 思想の正統に対する異端としてのエッセー ── に概ね対応すると見てよいだろう。またエッセーが「美学的/感性的（ästhetisch）」と形容されるのは，それが，歴史を超えて存続する永遠なものではなく，一回限りの歴史と密接に結びついた具体的で個別的なものを対象とする（＝存在論的異端）からである（ebd.）。

同講演において注目すべきは，アドルノが自身の哲学的立場に対する反論を想定し，それを通じて自らの方法の正当性を主張するその仕方である。ここにアドルノの打ち出す新たな真理概念の輪郭が透けて見えているのである。そもそも「形式としてのエッセー」におけるアドルノが認めているように，〈非同一性の意識〉，〈非連続性（断片性）〉，〈移ろいゆくものの優位〉といったタームによって特徴付けられるエッセーは，必然的に「確実性の欠如を代償としなければならない」（GS11, 21/17）。この意味で，アドルノが想定するハイデガー学派からの異論 ──「私（わたくし）アドルノは，[…] 哲学からあらゆる恒常的な基準（jeder konstante Maßstab）を取り払っている」（GS1, 342–343/34）という異論は，その内容に関して適切である。アドルノは自身の立場のこのような弱みを自覚して「なるほど，みなさんの多く，ひょっとすると大半は，わたしがこの場で申し立てていることに同意されていないということを，わたしは承知しています」（ebd., 342/33）と述べながら，「しかし」と以下のように続ける。

> しかし，自分自身のうちに孤立した整合性（Stimmigkeit）を目指すのではなく，事象との結びつき（Sachbeziehung）を目指す思考は，声高に唱えられている異論を論破したり，自分自身を反論不可能だと主張することによって，自分の存在する権利を証明しようとはしません。そうではなく，事象との結びつきを目指す思考は，自分自身の稔り豊かさを，ゲーテが用いた意味での稔り豊かさ（Fruchtbarkeit）を通じて，自らの存在権を証明しようとするのです。（ebd., 342/33–34）

アドルノの鮮やかな反駁に対する私たちの期待は裏切られる。端的に言えば，アドルノは「反論に対しては反論しない」と表明しているのである。通常，哲学的思考にとっては，自己の主張に矛盾がないこと，言い換えれば整合性がとれていることが，真理性の一つの指標であった。反論は自己の立場の矛盾を検討するきっかけを提供し，思考は反駁を通してその矛盾を解消し，〈真なるもの〉としての自己の正当性（存在権）をいっそう強固に主張する。しかし，そもそも認識（命題）の首尾一貫性ではなく「事象との結びつき」を優先する哲学（＝美学的エッセー）

いうよりも彼の歴史的感性が下す判決と呼ぶべきである。そしてその歴史感覚は第二次世界大戦の経験を経て決定的なものとなったと言える。

にとっては，自己矛盾を解消するための反駁は積極的な意味を持ち得ない。つまりアドルノが反駁を企てないのは思考にとっての真理の指標が「整合性」に存しないからである。「稔り豊かなものだけが真実である（Was fruchtbar ist, allein ist wahr）」── 引用文にて示唆されているゲーテの詩句は「遺訓」におけるこの言葉であろう[16]。すなわちアドルノは真理を完結した論理の次元ではなく，「豊かさ（肥沃さ）」という美的次元，あるいは「生産性（Produktivität）」（ebd., 343/36）という生成の次元において捉える。したがって思考の真理性は，歴史的・具体的なものとの「交流（Kommunikation）」を通して，現実を新たに，生き生きと開示していくことにこそ存するとされる（ebd.）。アドルノはこうして，現実の対象との交流の局面における思考の生産性，そして交流を通して「新鮮に開示された現実」（ebd.）に，自身の哲学的立場の存在権を訴えるのである。

このようにアドルノは自身の哲学的立場を擁護する際に，思考内部の「整合性」ではなく，現実をどれだけ生き生きと開示させるかという思考の「豊かさ/肥沃さ」を新たな真理基準として持ち出す。そしてこの基準は論理性に力点が置かれていない点，また創造性という契機を含むという意味で美的基準と言える。このことを裏付けるように，アドルノが他の哲学者を評価する際は，その論理的正確さよりも，その「豊かさ」または「貧しさ」に判断の基準が据えられている。例えばアドルノはヘーゲル哲学の論理的瑕疵を絶えず指摘しつつも「いかなる哲学も，これほどの底知れぬ豊かさ（Reichtum）を有しなかった」（GS5, 294/103[17]）と極めて高く評価する。そしてむしろ論理的欠陥は真理そのものによって付けられた「傷痕」とされ（ebd.），真理の顕現のための場と化す。一方，ハイデガー哲学に関しては，それが使用する「被投性」「不安」「死」などのカテゴリーが「狭隘（Enge）」であり，「生きているものの豊かさ」に見合っていないことが批判される（GS1, 331/13）[18]。細見が指摘するように，アドルノのハイデガー批判は主張内容に向けられる以前に，その哲学の用いる語彙や文体の「審美的」な次元に向かっているのである[19]。これらの事実からは，理性の次元における完結性（閉鎖性）は，ともすると，思考自身の貧困，そして思考のうちに表象される現実の貧困化へとつながりかねないという，アドルノの問題意識を読み取ることができる。自律的理性（ラ チ オ）の圏域に閉じた哲学的思考は，

---

[16] 「哲学のアクチュアリティ」の訳者である細見の指摘に従った（「哲学のアクチュアリティ」38 頁，訳註 18 を参照）。引用は Goethe, Johann Wolfgang, »Vermächtnis«, in: *Goethes Werke. Hamburger Ausgabe*, Bd. 1: *Gedichte und Epen*, hrsg. von Erich Trunz, Hamburg: Christian Wegner, 1956, S. 370 に拠る。

[17] 『三つのヘーゲル研究』渡辺祐邦訳，筑摩書房，2006 年。

[18] Vgl. GS6, S. 116（『否定弁証法』木田元・徳永恂・渡辺祐邦・三島憲一・須田朗・宮武昭訳，作品社，1996 年，136 頁）. この箇所ではハイデガーの思想を明確に「貧しさ（Dürfigkeit）」というカテゴリーによって批判している。

[19] 細見和之『アドルノの場所』みすず書房，2004 年，84 頁。したがって細見はアドルノのハイデガー批判をある意味で「理不尽」とする（同上）。

現実との生産的な交流を失い，質的に新しいものを結実させる可能性を減じていく。なぜならそのような哲学は「同じもの，同一的なもののなかで，巨大な分析判断でもするかのように同じことを繰り返し述べるばかりで，質的に新しいものを受け入れる余地はない」からである（GS6, 158 /189）。自己にとって異質なもの＝他者を含む現実を全的に排除することではじめて可能となる純粋な同一性を，アドルノが「死」と呼ぶ所以もここにある。「アウシュヴィッツは純粋な同一性という哲学命題が死であることを証明している。」（ebd., 355/439-440）

3　社会批判としての「色」の救出

次のような疑問が生まれるだろう。── このように「豊かさ」を真理の基準に据えるアドルノの哲学的立場は，彼自身のテクスト戦略にどのように反映しているのだろうか。あるいは，思考の「豊かさ」はテクストの次元において如何にして現れるのだろうか。論理的整合性が真理を保証しないとすれば，テクストレベルにおいて「豊かさ」としての真理を保証するものとは何か。例えば，「豊かさ」という言葉に含まれる「多さ」という意味より推して，単に数として多くの哲学的テクストを生み出すことが，ある思考の豊かさを証明することになるのだろうか。おそらくそれは誤りであろう。先に確認したように，豊かな思考は「新たに開示された現実」をもたらす一方，貧しい思考には「質的に新しいものを受け入れる余地がない」と述べられていることから，アドルノが想定する豊かな思考とは，質的な多様性に満ちたテクストを生成する源泉と言える。「形式としてのエッセー」においてアドルノが「エッセーの対象は，まぎれもなく新しいもの，既存の諸形式の古い枠組みに再翻訳することのできないものである」（GS11, 30/28）と述べるとき，そこにはエッセーが確実性の欠如という代償を払いつつも，質的に新しいもの，つまり思考にとって異質なものをテクストの次元で結実させる試みとして，積極的な規定を受け取っているのである。

しかし私たちはここで，アドルノの同一化原理批判をさらに広い視野の下で考察する必要に迫られる。というのも，アドルノがエッセーに託する〈質的契機の救出〉は，哲学の領野にとどまらず，一種の社会批判をその射程に収めているからである。そもそもアドルノにとって同一化原理は思考の領域に限定されるものではない。『啓蒙の弁証法』によれば，文明の担い手である啓蒙は，同一性，すなわち「等式そのもの」を「物神」として崇めることによってカオスの呪縛から逃れてきた（GS3, 33/45）。それは自己同一性を脅かす「通訳しきれないもの（das Inkommensurable）を切り捨てる」ことによって，あらゆるものを均一化し，「日の下に新しきものなし」と宣言することを理想とする（ebd., 28-29/37-38）。しかしこの原理によって形成される「文明」世界は，質的多様さを犠牲として成り立つ均質な世界であり，アドルノ＝ホルクハイマーによれば，その一つが，交換原理に隅々まで支配された近代市民社会である。

> 数が啓蒙の規範（Kanon）となった。市民的正義と商品交換を同一の方程式が支配している。[…] 市民社会は等価なもの（das Äquivalent）によって支配されている。市民社会は，分母の異なるものを，抽象的量に還元することによって比較可能にする。啓蒙にとっては，数へ，結局は一へ解消されないものは仮象となる。[…] 神々と質との滅却が強固に主張される。（ebd., 23-24/30）

アドルノがここで批判しているのは，質的に異なるものを量的比率（例えば 3 : 2）という抽象的関係へ還元し，それによって異質なものを比較可能にし，等価交換を行う思考様式である ── りんご三個とみかん二個は等価であるという風に。数比に基づく比例関係を通じてはじめて，質的に異なるものは等価なものとして合理的に交換される[20]。言い換えれば，とりわけ経済の分野で近代市民社会を支配するこうした等価交換原理は，数への抽象化によって，あらゆるものを特定の目的を遂行する操作の客体，代替可能なものとし，その固有な質を切り捨てることと言える。そしてアドルノ＝ホルクハイマーはこの抽象化作用が経済の領野に限らず，近代市民社会のさまざまな領域（法，科学，哲学など）にまで及んでいると見なし，結果，そのうちに生きる「大衆」の「思考と経験双方の貧困化（Verarmung）」をもたらしていると判断する（ebd., 53/78）。「質の除去，質の機能への換算は合理化された労働方式によって科学から大衆の経験世界へと伝染し，その世界をふたたび両生類が経験する世界と傾向的に似たものへと同化させる。」（ebd.）

使用価値の交換価値への転換に典型的に見られる〈質の量への機能転換〉が世界経験の貧困をもたらすという洞察は，『ミニマ・モラリア』の「商店（Kaufmannsladen）」と題された一節（146 番）で具体的に描出される（GS4, 257-259/358-360[21]）。アドルノは，大人になるにつれてなぜ人生は味気なく単調なものになっていくのか，という問いを入り口として，大人の知覚が「等価形式（Äquivalentform）」によって麻痺していく様を，色彩豊かな子供の世界経験と対比させて浮き彫りにする。そもそも子供は，例えばサーカスの一団の芸を眺めるとき，彼らが自身の華やかな活動を労働時間という交換可能な抽象形態に還元し，生活をやりくりしているという考えには及ばない。子供は，サーカスの提供する使用価値（質）をそのまま享受するのであり，その意味で子供の世界経験は即自的，直接的である。一方で大人の知覚は「[子供のように] 感覚的なものをそれだけ切り離して把握するのではなく，色彩なり，音なり，運動なりについ

---

[20]「交換価値は，さしあたり，使用価値がたがいに交換されうる量的比率としてあらわれる。このような比率においては，これらの使用価値は同一の交換量をなしている。だからプロペルティウス詩集第一巻とかぎたばこ八オンスとは，たばこと悲歌というまったくちがった使用価値であるにもかかわらず，同じ交換価値でありうるのである。」（マルクス『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳，岩波書店，1956 年，23 頁）

[21]『ミニマ・モラリア』三光長治訳，法政大学出版局，2009 年。

て，それ自体のために存在しているのか，それとも他のために存在しているのかを察知する」。すなわち「商品世界」の住人である大人の世界経験においては，固有な質は，それがほんとうに固有なのか，それとも他のものによって媒介されているのか，という視点が無意識のうちに働く。そして一見するとそれ自体において多様で多彩だと思われる世界は，ことごとく「自己保存」というただ一つの目的のために存在していることに気づき，「やがて感覚器官は偽りの多彩さに疲弊し，一切を灰色の中に浸してしまう。」知覚を麻痺させられた大人の感覚に立ち現れるのは，先に「両生類の世界」と呼ばれた世界，つまり人間の感覚に見合った彩りを失った灰色の世界である[22]。

さて，「商店」においてアドルノは子供の行う「無目的の行為」すなわち「遊び」のうちに，等価形式に支配され，独自の質を失った〈灰色の世界〉に対抗する手段を見出す。というのも遊びにおいて事物は社会的に規定された特定の有用性から自由になり，交換関係に回収されない「それらの物が持っている人間にとって好もしい側面」が救い出されるからである。目的地を指定されていないおもちゃの車は，社会から均一に課され，それゆえに代替可能な「役割」から解放された存在の「アレゴリー」となる。そして「幸福と遊びが，エッセーにとって本質的である」（GS11, 10/4）と語られるエッセーという文章形式もまた，等価形式によって色彩を奪われた世界に対する一つの抵抗の実践であるといえよう。このことは以下の二つの引用に明確に認められる。

> 同一性の強制からの解放は，エッセイにときおり，公式的な思考からはこぼれ落ちてしまうもの，消し去ることのできない要素 ── 消し難い色（die untilgbare Farbe）を齎らす。（ebd., 26/22-23）

> ［…］エッセーの最も内奥の形式法則は異端ということである。思想の正統に抵触することによって，正統の客観的目的が秘密裡に不可視（unsichtbar）にしていたものが，事柄において可視化（sichtbar）されるのである。（ebd., 33/31）

ここでエッセーに賭けられたものが，視覚的語彙によって表現されていることに注意したい。先にエッセーは同一性原理によっては捉えることの叶わないもの，つまり概念と共約不可能な「質」を救出する試みであることを確認した。これらの引用文をもって，エッセーの目的はより正確に次のように言えるだろう。すなわち，エッセーは同一性原理に根ざした社会に対する批

[22] Cf. Richter, Gerhard, “Fade to Grey: Colour, Greyness and Utopia in the Work of Art（Adorno）,” in: *Grey on Grey: At the Threshold of Philosophy and Art*, ed. by Kamini Vellodi and Aron Vinegar, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2023, pp. 350-351.

判として〈色彩の救出〉を試みる。それ故，テクスト上にもたらされる「消し難い色（die untilgbare Farbe）」は，思考の「豊かさ」をテクストレベルにおいて示す美的契機であると同時に，均一化を強制する社会を批判するモメントとなる。「代替可能な交換の世界に対する抵抗にあっては，世界の色彩（die Farbe der Welt）が無と化すことを欲しない瞳の抵抗こそ抹消され得ない（untilgbar）」（GS6, 396–397/499）とするアドルノ哲学の根本的姿勢 ── 美学と社会批判の融合は，このように，エッセーにおいてこそ具体化される。以下，ここに表明された〈色彩の救出〉あるいは〈テクストへの色の取り込み〉の具体的方法を，「形式としてのエッセー」において使用される視覚的比喩の構造を追跡することで明らかにすることが，私たちの課題となる[23]。

4　概念，媒質（メディウム）

すでに確認したように，エッセーの対象は伝統的哲学の対象とする「永遠なるもの」ではなく〈いま・ここ〉に現前する「移ろいゆくもの」あるいは「美的なもの」である（＝存在論的異端）。具体的には「特殊な精神的形象」あるいは「人工物（die Artefakte）」（GS11, 9/3–4；22/18），すなわち，自然物に対置されるところの文化がエッセーの対象である。文化は人間によって作られ，それ自体で生命を持つわけではないが，エッセーはそのうちに自然＝生命を見出すことを目指す。「エッセーは，対象が単なる対象ではなく，それ自体の生命を宿した諸契機（die Momente）へと分離する（sich dissoziieren）まで，対象の『いま・ここ』（hit et nunc）を追跡する」（ebd., 22/18）[24]。

さて，エッセーによるこのような生命なき事物の救出は「概念」を「媒質（Medium）」として遂行される（ebd., 11/5）[25]。換言すれば，言語の次元に属するエッセーが，次元の異なる事象に接近するための具体的な道具（メディア）が概念である。そもそも概念とは，さまざまな事象の間に共通する要素を取り出すための思考の単位である。すなわち，アドルノが多大な影響を受けたヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りるなら「もろもろの事物を要素へと分離するものこそ，概念である[26]」。カオスに満ちた事象は概念というレンズ（媒質）を通過することではじめて，思考の

---

[23] アドルノにおける「色（Farbe）」の概念を主に芸術論の観点から幅広く検討した近年の研究として Richter, *op. cit.*があるが，「形式としてのエッセー」は論じられていない。

[24] 『プリズメン』所収のベンヤミン論における次の記述も参照。「エッセーという形式の本質は，歴史的なもの，客観的精神の顕現，すなわち『文化』を，あたかもそれが自然であるかのように観照する（anschauen）能力のうちにある。」（GS10–1, S. 242,『プリズメン』渡辺祐邦・三原弟平訳，筑摩書房，1996 年，385 頁）

[25] Medium は「媒体」とも訳せるが，後述するように「形式としてのエッセー」において概念が Medium と言われるとき，そこに「光」を捉えるものという比喩が託されているため本稿では「媒質」と訳す。

[26] Benjamin, Walter, *Ursprung des Deutschen Trauerspiels*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 1–1, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1974, S. 213–214.『ドイツ悲劇の根源（上）』浅井健二郎訳, 筑摩書房, 1999 年, 31 頁。

要素（契機）として弁別される[27]。この意味で概念はあらゆる知的営みに不可欠の道具であり，その点に関してはエッセー形式も変わらない。が，「形式としてのエッセー」が綱領とする概念の使用法は慣例に反している。以下，この点について確認しよう。

（1）定義と文脈

エッセーは，通常の学問的方法に反して，自身の用いる諸概念にあらかじめ定義を下さない（ebd., 19/14）。学問は，概念それ自体を「白紙状態（タブラ・ラサ）」と見なし，定義を与えることによってはじめて意味が確定されると考えるが，それは「迷妄」である（ebd., 20/15）。というのもあらゆる概念は事象によって媒介されており（ebd., 17/12），「実際にはすべての概念が，置かれている文脈（die Sprache[28]）によって暗黙のうちにすでに具体化されている」（ebd., 20/15）からである。つまり，概念に厳密な定義を下すことは「概念のなかに生きている事象にまつわる刺激的なものや危険なものを取り除く」（ebd., 20/15–16）ことを意味し，それは事柄に対する観念の支配権を主張することと同義である。それに対してエッセーは，第一に，概念を定義づけという加工を施さずに「無媒介に導入」し（ebd., 20/15）[29]，第二に，概念の置かれている具体的な文脈（事象関係）のなかを模索する。「文脈において暗黙のうちに名づけられている通りのものとして，概念の具体的な意味を反省的に受け取ろうとする」（ebd., 20/15）。つまりエッセーにとって概念は思考が能動的に定めるものではなく，文脈によってすでに定まっているものである。したがってエッセーは，自身の用いる概念が置かれている具体的な事象関係との対話を通して，その意味を「受け取る」という態度をとる[30]。

エッセーと概念の関係をより具体的にイメージしてみよう。エッセーが概念の意味を「受け取る」方法について，アドルノは異国の地で新しい言語を習得する場面に準えて説明する[31]。

---

[27] 「もろもろの現象は[…]要素においてのみ，救出されて，理念界に入り込む。」（ebd., S. 213, 邦訳 30 頁）

[28] 「die Sprache」は通常「言語」と訳されるが，本稿では三光長治による邦訳に倣い「文脈」という訳語を用いる。というのもアドルノの用語法において Sprache は言語領域にとどまらず，事象と事象がある特定の関係を取り結ぶとき，その総体（系）を指し示す概念だからである（その典型が音楽である）。すなわち要素が互いに結びつく関係そのものに焦点が置かれている場合「文脈」と訳すのが適切なのである。

[29] アドルノにとってこの方法の好例はヘーゲルである。アドルノはそのヘーゲル論において，ヘーゲルのドイツ語に方言がまざっていることを強調するが，それはまさしくヘーゲルが自身の概念を「そのまま」導入したことを物語っている（vgl. GS5, 350/225）。

[30] まさしくこれはアドルノが「形式としてのエッセー」というエッセーにおいて実演していることでもある。つまりアドルノは「エッセー」概念を最初から定義づけすることなく，「エッセー」という形式の特質をドイツの知的伝統という具体的文脈において把握しようとする。つまりドイツにおける「学問」や「芸術」などの他の知的形式との関連のなかで，エッセーという概念の実質的意味を受け取ろうとするのである。

[31] Vgl. GS5, 341/205.

「エッセーが諸概念をわがものとする方法は，［…］異国にあってその国の言語を喋らざるを得なくなった人の方法に最も親和性があるかもしれない」（ebd., 21/16）。この比喩で重要なのは，彼が知らない単語を習得・発話する際，いちいち辞書を引く余裕がないということである。彼はしたがって当然，はじめて目にする単語が何を意味するか十分に理解することができないし，その適切な使用方法も明らかでない。しかし，その単語にさまざまな具体的「文脈」（この場合は単語や文のつながりと同時に生活上のコンテクストも意味する）のなかで幾度も出会うなかで，彼は辞書を引いて確認するよりも単語の意味を鮮明に習得することができる。というのも，辞書に記載された意味はさまざまな文脈に対応できるほどの幅を持たず，また一つの文脈において概念が受け取る個別のニュアンスを表現するのには，一般的過ぎるからである（ebd., 21/17）。

要するに，エッセーにおいて概念ははじめから手中に収められるものではなく，いわば未知のものであり ── まるで異国者が他国語を習得するように ── 時間経過とともに失敗と成功を繰り返しながら，徐々にその具体的意味を獲得していく。その意味でエッセーのテクストは，学問のそれのように，すでに整然と整えられた内容を無時間的に論証していく静態的なものではなく，テクストそれ自体が「精神的経験の現場（Schauplatz）」（ebd., 21/16）という動的な性質を備えているのである。エッセーにとっての媒質（レンズ）としての概念は，こうした能動的かつ受動的な営み（模索と反省）を通じて，事象の凹凸に密着することが可能となる。その柔軟なレンズを通してはじめて，事象はきめ細やかな要素に分割される（屈折する）のである。

（2）諸概念の関係 ── 星座

ところでエッセーが用いる概念は一つではない。エッセーはさまざまな概念を媒質とすることで対象の現前に迫っていくが，それら諸概念の関係はどのようなものであるべきか。

> エッセーのすべての概念は，互いに支え合うように提示されねばならない。すなわち，それぞれの概念は，他の概念との布置（Konfiguration）に応じて自らを表現する。その中では相互に区別された諸要素が，ひとつの可読的なもの（ein Lesbares）としてまとまる。エッセーは，足場も建築物も構築しない。（ebd. 21/17）

概念と概念は区別されつつも「お互いを支え合い」，その相互的関係によって形成された諸概念の「布置（配置，配列，構成）」のなかで各々の意味が確定する。第一に確認すべきは「互いに支え合う（einander tragen）」という表現である。ここにはエッセーにおける諸概念の相互扶助性，ひいては，諸概念をそのもとに包摂する上位概念の不在が示唆されている[32]。引用文にて

[32]「エッセーは諸概念を，事柄の力の平行四辺形におけるそれらの機能に即して互いに調整する一方で，諸概念を一括して従属すべきとされる上位概念（Obergriff）を敬遠する」（GS11, 25/21）

「足場」と呼ばれているのは，テクストの論述を根底から支える上位概念（あるいは生成原理）であり，「建築物」とはそれに基づいて獲得された論理系（体系）── そのなかで諸概念はヒエラルキー化される ── と解釈することができる。諸概念の力学的関係が一方向になりかねない論証的方法を拒否するエッセーは，そのことによって，「精神的経験の過程における概念の交互作用（Wechselwirkung）を促進する」（ebd., 20–21/16）。

したがって，ある概念と別の概念は互いに異質なものとして区別され，その差異が保持される。言い換えれば，それらは同質なものへと溶解しただ一つの均質な連続体を構成するのではなく，いわばモザイクのガラス片のように，互いに密接しながらも明確に区別される。そして区別された概念を通して思考が受け取る事象の構成要素も「分散した事象の概念的諸断片」（ebd., 31/28）として，互いの間に不連続性を保っている[33]。しかしそれは決してエッセーがいかなる統一も目指さないことを意味しない。重要なのはエッセーにおいて諸概念は無秩序に散らばっているわけではなく，まとまりを構成してある種の客観性を狙うことである。「諸要素は運動を通じて布置として結晶する」（ebd., 21–22/17）と述べられるように「布置（Konfiguration）」や「星座（Konstellation）」（ebd., 26/22）と名付けられるものが[34]，エッセーが最終的に目指す要素間の統一形式である。そして「星座」という言葉が示唆するように，この統一形式は一種の記号という意味で「可読的なもの」である。しかしアドルノがベンヤミンから継承したこの「星座」という概念は「形式としてのエッセー」において十分に説明されてはいない。したがってその統一形式の特異な点を検討するために，「暗い人あるいはヘーゲルをどう読むか」の次の記述を参照しよう。

> 諸契機の布置（Konfiguration）としての哲学の規定性は，その布置における各契機の明瞭性（Eindeutigkeit）とは質的に異なる。というのも，この布置そのものは諸契機の総体以上のもの，別物だからである。星座（Konstellation）は体系ではない。あらゆるものは和解せず，一つに溶け合うことなく，しかし，互いに光を投げかけている。そして個々の契機が共に形づくる図形は規定された記号であり，読むことができる文字（lesbare Schrift）である。（GS5, 342/208）

---

[33] この点もまた「形式としてのエッセー」において実演されている。例えば同論文の中心的な概念は当然「エッセー」であり，「学問」や「芸術」がそれに隣接する概念である。しかしながら，それらの概念はより上位の概念によって包摂されることはない。共通する要素が取り出されて同質化・均質化が進行することはなく，反対に，互いに異質な性格が際立たせられる。なおこの三項関係については藤野，前掲論文，113 頁以下に詳しい。

[34] Konfiguration は，複数の要素が互いに関係し合って形成される「構成」を指し，特に天文学用語としては「星位」の意をもつ。

要点は，アドルノの理想とする哲学的叙述の統一性（客観性）は，個々の要素の単なる総体を意味しないことである。全体の規定性は，要素が配列されている次元とは異質なレベルで獲得される。換言すれば，エッセーの客観性と諸要素の連関との間には創発的関係が確認されるのである。星座においてその図像は，星々とは無関係な外側から付与されるように，あるいはモザイクにおいて形象はガラス片の与り知らぬ背後から立ち現れるように，エッセーが結晶させる「まとまり」もまた，諸概念（と，そのうちに捉えられた諸要素）の領域とは別の場所からやってくる。

5　理念（ユートピア），光

いくつかの疑問点が残るだろう。まずは議論を整理しよう。私たちは前節でエッセーの用いる概念とそれが目指す統一の形態について検討した。エッセーにおいて概念は（1）事象に接近するため出発点において定義されず，（2）対象にまつわる具体的な文脈のなかを動き，同時に（3）異質な概念との相互関係において自らの位置価（意味）を確定させる。（4）獲得された概念の位置取り＝布置において事象の諸要素は結晶化し，（5）エッセーは一種の客観性を外部から受け取ることで「可読的なもの」「文字」となる。

私たちが解決すべき問題は次の三点に集約される。すなわち，（ⅰ）エッセーがそこから客観性を受け取るとされる「外部」とはどこか。（ⅱ）その客観性はなぜ「可読的なもの」「文字」「記号」と呼ばれているのか。（ⅲ）すでに 3 節で明示したように，エッセーがテクストに取り込むものが「消し難い色」だとすれば，獲得された客観性としての「文字」はそれに矛盾するのではないか。というのも色は特殊な質を意味し，文字はあくまで普遍を目指すからである。

（ⅰ）概念の光源 ── ユートピア

「形式としてのエッセー」において，概念が「媒質」と呼ばれていたことは理由のないことではない。概念は事物の色をテクストに取り込むためのレンズ ── すなわち言語と事象という異質な次元を仲介する媒質 ── であり，それが十全に機能するためには「光」を必要とする。というのもレンズは事物から跳ね返ってきた反射光を捉えることによって，はじめてそのうちに色の感覚を生じさせるからである。「形式としてのエッセー」においてやや唐突に現れる次の一節は，このような比喩構造を念頭に置いたうえではじめて了解可能となる。

> エッセーの用いる諸概念は，その光を明らかな出発点（terminus a quo）からではなく，彼自身にとっての隠された到達点（terminus ad quem）から授かり（empfangen），この点において，エッセーの方法そのもののユートピア的な志向が表現されている。（GS11, 21/17）

方法論的異端であるエッセーは，ある一つの原理（例えば神，理性，自我など）を出発点に据

え，そこからあらゆる事象を認識（あるいは産出）するという方法を採らない。出発点に絶対的原理を据えることは，いわば認識の角度をはじめから固定することを意味し，したがってその原理と適合する事象の一側面だけが肯定（措定）される一方，それ以外の側面は影のなかへ退けられるという暴力性と隣り合わせである。エッセーの諸概念にとっての光源 ── すなわち同一化原理によって抹消された事象の側面（＝質的契機）を照らし出すもの ── は思考の出発点に人工的に設定されるのではなく，むしろ到達点に据えられる。しかしその到達点は隠された場所と呼ばれており，エッセーはこの「どこにもない場所（ユートピア）」に辿り着くために暗闇の中を彷徨うのである。あるいは，そこから光の溢れてくるという秘密の場所を探り当てるために，エッセーはまるで子供のように概念（レンズ）の遊戯に興じるのである。

ギリシャ語に由来し「どこにもない場所（ou-topos）」を意味するユートピアは，アドルノにおいて，この世の塵芥を離れた桃源郷を意味するわけではない。アドルノの力点はギリシャ語の否定辞「ou（*οὐ*）」が示している否定作用，すなわち「この世にはない」というユートピアの否定性である。理想の「名」であると同時に，それがこの世に存在しないことを告げているという二面性において，ユートピアはアドルノが「負の記号」と呼ぶ「理念」の在所でもある。「諸々の理念は，事象がそうであるべきだと要求されている姿と，現にある姿との間にある空洞を生きている。」（GS6, 153 /183）したがってエッセーは決して肯定的に設定された桃源郷を直接目指すわけではない。その到達点は実体化されておらず，不明瞭なままただ憧憬としてのみ望まれるに過ぎないため，そこに文字通り到達することは不可能である。しかしエッセーは，同一化原理の生み出した灰色の世界に抵抗するために，あの三種の否定性（第１節）を通じて「どこにもない場所」すなわち別世界を模索する。そして概念がユートピアからの光を「授かる」とき，すなわちユートピアが事象と取り結ぶ光角に入り込むとき，エッセーの歩みは時宜を得て停止する。その概念的結晶体のなかで，諸要素に屈折した事物が「消し難い色」をテクスト上に投げ返すからである。概念というレンズに映じるその色こそ，別世界の遠近法に参入した証左，認識の果実なのである[35]。アドルノが「形式としてのエッセー」に掲げたエピグラフはこうだった。──「光そのものでなく，光に照らされたものを見るべく定められ」（ゲーテ『パンドラ』より）。

（ii）幸福の否定的シニフィアン

「エッセーの客観性はなぜ『可読的なもの』『文字』『記号』と呼ばれるのか」という第二の問いは，この時点で半分答えられたことになる。これまでの議論から明らかなように，諸概念の運動を通して探り当てられたある地点において，諸要素は星座的布置として結晶し，そのときエッセーは全体としてある客観的意味 ── 要素の総体以上の ── をユートピアから授かる。そしてエッセーの獲得する客観性が「文字」や「記号」と呼ばれているのは，その客観的形態す

[35] Vgl. GS4, 281/391-392；GS6, 66/74.

なわち星座的布置が，一種のシニフィアンとして，ユートピアに住まう理念を表象（指示）しているからである。

しかしながらここで改めて問うべきは，エッセーにとっての理念とは如何なるものか，という点である。というのもエッセーは，一般に受け入れられているプラトンによる理念の規定 ── 生成や消滅から免れ，永遠に同一のものとして存在するもの ── に従わないからである（ebd., 32-33/30）。これはすでに確認した存在論的異端の内容と合致する。とはいえエッセーは決して現象にその身を売り渡すわけではない。「エッセーは現に存在するものの重みに屈服するわけでも，単に存在するものにへりくだるわけでもない」（ebd., 33/30）。エッセーにとっての理念を素描するために，アドルノは『権力への意志』から「幸福」に関するニーチェのアフォリズム（第 1032 番）を引用する（ebd., 33/30-31）。それは「すべての生存に対して然りと断言」する幸福の瞬間においては，それを可能にした「全永遠」が「私たちが然りと断言するこのたった一つの瞬間において是認され，救済され，正当化され，肯定された」と主張する一節である[36]。アドルノの引用意図は，エッセーが「幸福」という理念に関わること，そしてその理念は全永遠がそのうちに結集する「瞬間」のうちに成就すること（を望むこと），この二点である。重要なのはエッセーにとっての理念はその力学を，各瞬間（現世）からの抽象という〈上昇〉ではなく，一瞬のうちに宿るという〈下降〉へと反転させていることである。すなわち「幸福」という理念は，各エッセーのうちに結晶する個別の星座的布置＝シニフィアンにおいて自らをそのつど顕現させようとするのである。

しかしアドルノは即座に次のように付け加え，ニーチェとのわずかな，しかし決定的な差異を際立たせる。

> ただし，エッセーはニーチェのような正当化や肯定を信じない。ニーチェにとって神聖であった幸福を，エッセーはただ否定的な名としてのみ知っている。幸福を表現する精神の最高の顕現（Manifestation）でさえ，精神が単に精神にとどまる限り，常に幸福を裏切るという罪に巻き込まれている。（GS11, 33/31）

ここには「幸福」についてのアドルノ独特の禁欲的態度が表明されている。「ニーチェのような正当化や肯定」とは，幸福の瞬間においてそれまでの全ての時間（と，そのうちに含まれる全ての出来事）に「然り」と述べることであるが，アドルノは世界を肯定する契機としての幸福

---

[36] ニーチェ，フリードリッヒ『権力への意思（下）』原佑訳，筑摩書房，1993 年，511 頁より引用。アフォリズム原文は Nietzsche, Friedrich, *Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe*, Abt. 8: *Nachgelassene Fragmente Herbst 1885 bis Herbst 1887*, Bd. 1, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin: Walter de Gruyter, 1974, S. 315-316 を参照。

の臨在を信じない。というのも，もしも現実世界が幸福でないにも関わらず，幸福が純粋精神の領域で肯定的に表現されれば，その瞬間に理念の純粋性が毀損されるからである。幸福の理念は，具体的な形を持ったとき，その理念の要求する姿から見れば不完全なものへと必然的に堕落する ── にも関わらず，それが真の幸福であると強引に見なすことは，幸福に対する，また，それを純粋な姿で希求する現実に対する裏切りなのである。一方で幸福という理念を「否定的な名としてのみ知っている」エッセーは，その具体的表現を慎むことで，かえってその理念に対して忠誠を誓う[37]。エッセーは幸福の訪れ（具体化）を拒み続けることで，その理念と否定的関係を取り結ぶ。ニーチェにあって現実のものとなる幸福は，アドルノにあって外部へと遠ざけられる。永遠なるものが凝縮するその瞬間は，この世の一点に据えられることなく，「ユートピア」へと霧散する。したがってエッセーの星座的布置は，幸福の理念を肯定的に表象するわけではない。つまりそれは，彼方に押しやられた幸福をいまだ実現せざるものとして，その距離を保ったまま表象する。すなわちエッセーの統一形態としての「文字」は，幸福の否定的シニフィアンである。

（iii）肯定性と否定性の共存

しかし注意しよう。私たちはこの点から，エッセーの否定性を結論づけてはいけない。重要なのは以下の事実である。諸概念の結晶体は，星座的布置として幸福の否定的シニフィアンである（＝（ii））と同時に，事象と密着するレンズとして「消し難い色」を表象してもいる（＝（i））ということである。言い換えれば，諸概念は理念との関係においては否定的シニフィアンであり，事象との関係においては消し難い色を映じるレンズである。この次元の差異に注目することで，すでに提起した第三の問い「エッセーの獲得する『文字』という言語的契機は，それが救出するとされる『色』という美的契機と矛盾するのではないか」は解決することができる。すなわち，星座的布置の関係においては，理念の次元と要素間の次元は創発的関係にあるため，理念の領域に属する文字と，要素の領域に属する色は矛盾することなく共存するのだ，と。

星座的布置という戦略が可能にする美的契機と理念的契機の共存によって，美学的エッセーは同時に，社会批判の形式として有効に機能することが可能となる。もしも全体としての否定性のみがエッセーの唯一の内容であれば ── 私たちに幸福は与えられていないという ── それは社会批判というよりも絶望の表明となるだろう[38]。反対に質的契機の救出に汲々とすること

---

[37] これは肯定的理念を扱う際のアドルノの論理の一種の型である。例えばアドルノはオーストリアの作曲家シェーンベルクを擁護した『新音楽の哲学』において，その音楽における不協和音は，それを協和音によって解決しないこと，言い換えれば協和音を実体化しないことで，むしろ調和（ユートピア）という理念を遵守していると主張する（GS12, S. 85.『新音楽の哲学』龍村あや子訳，平凡社，2007 年，125 頁）。この点に関しては竹峰義和『〈救済〉のメーディウム ── ベンヤミン，アドルノ，クルーゲ』（東京大学出版会，2016 年）の第 4 章「芸術の認識機能」を参照。

[38] 藤野，前掲論文，119 頁参照。

に終止してしまえば，理念への眼差しを失い，社会への呼びかけというモメントを喪失する。社会は未だ完全ではないと理念の否定的シニフィアンを通じて呼びかけつつ，同時に，その社会が失った質を救出することで幸福のかすかな可能性を顕現すること。あるいは，事物が幸福の理念に照らされたときにのみ見せる色彩を捉えることで，社会がいまだその幸福の状態に達していないことを呼びかけること。この二重の営みによって，社会は幸福の手触りを実感しつつ，それを現実世界で実現するために必要な意志＝希望を育むことが可能となる。そのどちらかが欠けることは許されない。「いかなるものにも解消しがたい絶対的に個別的なものを見ることによってのみ，まさしくこのものがかつて存在し，また未来にも存在することを希望することができる」（GS6, 366/457）。

結

本稿は，アドルノの「形式としてのエッセー」を精読し，芸術批評における彼のテクスト戦略を〈色彩の救出〉というモチーフを手掛かりに明らかにしてきた。以上の考察を通して見えてくるのは，批評家アドルノの営みが一般に指摘されるようにあらゆる基準の単なる否定や解体にとどまらず，芸術（文化）と社会を豊かに開示し直す肯定的契機を孕んでいるという点である。例えばアドルノのよき読者の一人であったエドワード・サイードは『新音楽の哲学』の結論部が音楽の消滅に対して一切の妥協を許していないことを（トーマス・マンの『ファウスト博士』との比較を通して）暗に批判している[39]。しかし重要なのは，アドルノがシェーンベルクらの音楽について「その響きは，聴かれぬまま，こだまもなく，消えていく」と述べるその瞬間に，「絶対的忘却」に向かう音楽が〈消し難い音〉としてテクスト上にしかと捉えられている，永遠化されていることであろう（GS12, 124/185）。エッセーは同一性原理に抗して，〈一瞬のうちに忘却される質的契機を理念の光を通して言語の次元において救出する形式〉であり，その営みは美学と社会批判の融合として理解されるべきである。そしてそれを可能にしたのが，星座的布置という，言語的（理念的）次元と美的次元を共存させる戦略であったことを確認し，本稿の結論とする。

（くさか　まさき・芸術学研究室）

[39] サイード，エドワード・E『故国喪失についての省察 2』大橋洋一・近藤弘幸・和田唯・大貫隆史・貞廣真紀訳，みすず書房，255-257 頁。

10.14943/rjgshhs.25.l 87

ズレ，歌唱，鈍感な演技
── 賈樟柯の『一瞬の夢』をめぐって[1]

王　　泰　睿

要　旨

賈樟柯映画について語る際，長回しのカメラワーク，音響，そして素人俳優といったキーワードがよく提起される。しかし，これらの要素を一貫して「リアリズム」的スタイルとして論じるのは早計である。とりわけ，長回しと音響編集とのあいだに生じる数々のズレを単なる技術的な瑕疵とみなすのではなく，そこにいかなる映画的な事実が生成されているのかを問う必要がある。本稿では，こうしたズレを「連続的映像」と「断片的音響」という構造として捉え，画面の細部を精査することによって，従来作家性として語られてきた賈樟柯映画の要素を再検討する。そして，その隙間に潜む新たな感動の可能性を明らかにすることを目的とする。まず第１節において，編集上の問題点として音響と映像の接合に生じるズレの例を取り上げて検証する。それを単なる問題提起の操作にとどめるのではなく，その裏にある賈樟柯の創作意識に潜む「ヒロイズム」との関係を明らかにし，その実践レベルのリスクを指摘する。第２節では，「音楽映画」という側面から素人俳優の演出に注目する。詩的な長回しの中に現れる登場人物の歌唱を評価すると同時に，より重要になるのは，彼らの身体がカメラの前にそのまま露出するという事実である。ここでは演技指導の帰結という以上に，俳優と監督が同時にカメラ＝映像を「信じる」ことが示されている。このことは，第１節で論じた叙情的な編集の問題と呼応している。第３節では，賈樟柯映画における「金銭」という潜在的なテーマ，すなわち歌唱と金銭の運動を結びつけて考察する。それは単に物語の進展を支えるモチーフではなく，登場人物の「鈍感さ」を描き出す演出とも深く関わっている。

---

[1] 本稿は，2024 年 8 月 31 日に北京大学で開催された「International Doctoral Student Forum of Art Studies Peking University」における口頭発表：*Revisiting the Early Films of Jia Zhangke: Long Takes and Sound, or Body and Money* の原稿に翻訳・加筆したものである。

はじめに

中国の第六世代映画監督，賈樟柯（ジャ・ジャンクー）[2] の『一瞬の夢』（1997 年），『プラットホーム』（2000 年），および『青の稲妻』（2002 年）からなる，いわゆる「故郷三部作」は，「薄汚い」とも形容される風景を映画空間に取り込みつつ，登場人物の友情や恋愛物語と社会的変化との関係を捉える点で，多くの映画評論家や研究者から高い評価を得てきた。これまでの賈樟柯作品に対する論評は，概して「社会的側面」への言及に終始している。たとえば，中国国内の研究者は，北京電影学院出身の監督を中心とした世代的系譜や映画史的文脈に依拠し，賈樟柯を第六世代の一人として位置づけ，その「社会記録派」としてのスタイルを論じる傾向が強い[3]。他方，欧米や日本などの国外の研究者は，イデオロギー的観点から中国の映画検閲政策に関心を寄せ[4]，国際映画祭や非公式上映で活躍した第六世代の映画作家をインディペンデント映画（あるいは underground cinema）の担い手として評価している[5]。

端的にいえば，従来の評価の枠組みにおいては，長回し，音響，素人俳優といった「賈樟柯的」な形式は主に社会文化的な徴候として把握されてきた。とりわけ長回しは，アンドレ・バザンの理論を援用しつつ，1990 年代中国の映画研究に安易に接続される中，「風景＝社会的リアリティ」を可視化する技法として単線的に理解されがちである[6]。また，「リアリティ」という概念から，当時の流行曲やラジオ放送など，現実空間に遍在する音響要素に偏って注目が集まる[7]。しかし，多くの作品の細部，あるいは制作上の痕跡は，これ以上の考察を促している。たとえば，長回しのカメラ運動の中で，登場人物が「歩く―止まる―また歩く……」という軌跡に沿って気ままに空間を移動する一方で，画面外の音が絶えず画面の内部へと無秩序に挿入されている。また，記号的次元の音声だけではなく，素人俳優が歌を口ずさむ場面は，むしろ「声＝身体」の現れとして捉えられるべきだろう。

したがって，本稿が問題とするのは，長回しと音響の構造によって強調される時間感覚のあ

2　中国の人名は，初出時に漢字と音読を併記し，以降は音読のみとする。

3　以下の文献を参照されたい。鄭洞天「「第六代」電影的文化意義」，『電影藝術』2003 年第 1 期，42-43 頁。聶偉「「假領子」，底層奇觀與大銀幕生産 ── 近年來第六代電影創作的幾個側面」，『南方文壇』2011 年第 1 期，141-144 頁。張旭東「消逝的詩學：賈樟柯的電影」王欽訳，『現代中文學刊』2011 年第 1 期，52-59 頁。

4　中山大樹著『現代中国独立電影―最新非政府系中国映画ドキュメンタリー＆フィクションの世界』，講談社，2013 年。

5　Valerie Jaffee. *Bringing the World to the Nation: Jia Zhangke and the Legitimation of Chinese Underground Film*. Senses of Cinema, no.32 (July 2004). https://www.sensesofcinema.com/2004/feature-articles/chinese_underground_film/.（2025 年 6 月 2 日アクセス）

6　郝建「安德烈・巴贊在中國：被言説與被消減」，『當代電影』2008 年第 4 期，13-17 頁。

7　姚睿「時代的記憶與反諷 ── 論賈樟柯電影中的音樂」，『藝術評論』2010 年第 3 期，75-81 頁。

り方にある。言い換えると，「社会的側面」として論じられてきた賈樟柯の作家性には，「断片的音響」と「連続的映像」という異なる位相の要素が同時に進行し，相互に対立を孕む構造が潜在しているのではないか。さらに，こうした視覚と音響のズレによって生じる隙間に，素人俳優のパフォーマンスがいかに関与しているのかを，従来の評価枠組みでは捉えきれない側面から再検討する。

1．物質的な瑕疵：映像と音響の「パラドックス」をめぐる検証

四方田犬彦と倪震（ニイ・チェン）による共著『日中映画論』では，賈樟柯作品における音響要素を社会的現実に還元する視点が示される。たとえば，四方田は『一瞬の夢』におけるシャオウー（小武）の逮捕場面に響くポケベルの鳴り音を「ノイズ側からの獰猛な逆転」と捉え，記号論的観点から雑音の意味作用に注目する[8]。一方，倪震は作品内の「方言」「サウンドトラック」「ヒット曲」といった音響要素をドキュメンタリー映画的文脈に位置づけて解釈する[9]。このように，日中映画批評を代表する二人による分析は，その時代の中国映画をめぐる評価の枠組みに深く結びつき，賈樟柯作品に対する教科書的な解釈として定着している。

ここで想起されるのは，ジル・ドゥルーズが「クロースアップ」論において批評家（ひいては彼らの用いる精神分析や言語学そのもの）に向けた次の指摘である。「批評家たちは，部分対象という観念を受け入れるとき，クロースアップに分断ないし切断の表徴を見ている。そして，批評家たちの一方は，分断ないし切断の表徴と映画作品の連続性とを調停しなければならないと言い，他方は，反対に，その表徴が映画作品の本質的な非連続性の証拠になると言っている。」[10] ドゥルーズが指摘するように，批評家が映画を意味論的枠組みで解釈する際には，映像自体の構造的複雑性や連続性を単純化するリスクがある。本稿はこの認識を踏まえ，『一瞬の夢』における映像と音響との〈パラドックス的構造〉に焦点を当て，賈樟柯の初期作品に潜在する視聴覚表現の問題系を検証する。

まず『一瞬の夢』は主人公小武（シャオウー）（王宏偉（ワン・ホンウェイ））の行動線に沿って，物語が展開される。映画前半では，シャオウーがカラオケ店でホステスの梅梅（メイメイ）（左百韜（ズオ・バイタオ））と出会う場面では，メイメイが一人で歌うが，シャオウーは鈍い反応を示す。会計時に金銭をめぐるトラブルが生じ，その解決策として，カラオケ屋の女将は二人の（店外）デートを促す。しかしその後，性的な展開には至らず，ただ街を散策する，最終的にメイメイがシャオウーにキスをする，というロマン

8　四方田犬彦・倪震著『日中映画論』阿部範之，韓燕麗，垂水千恵訳，作品社，2008 年，221-222 頁。
9　前掲書，241-244 頁。
10　ジル・ドゥルーズ著『シネマ 1 ＊運動イメージ』財津理，齋藤範訳，法政大学出版局，2008 年，169 頁。

ティックな場面に至る。

注目すべきは，この場面の直後に続く，約 5 分間のセリフのないシークエンスである。賈樟柯がここで狙うのは，音響による叙情的な展開である。薬店を起点に，シャオウーは道端，映画館前の広場，市場のバルコニーへと順に移動する。ここで描かれるのは物語の進行というより，メイメイとの身体的接触を経たシャオウーの行動，すなわち「恋に落ちた男」のパフォーマンスである。この演出を支えるのは，素人俳優による身体の不自然な動きである。こうした演出上のミスと即興的な演技の共存は特筆に値する。実際，賈樟柯は『一瞬の夢』演出ノートにおいて，このシークエンスを「シーンの決定，五」として次のように記している。

> 小武が二階でまだ青いリンゴをかじっていると，下では思春期に入った弟分とその彼女がうつむきがちににぎやかな昼下がりの街角を歩いてゆく。『狼 男たちの挽歌・最終章（喋血双雄）』の一シーンの音楽が聞こえてくる。
> これはわたしが二〇年間の県城生活の中では常に享受していた時間である。とある陽光のあふれる昼下がり，見慣れた人をじっと見つめていると，突然何かが胸にこみ上げ，一切が新しく思えてくるのである[11]。

この記述から，賈樟柯がシナリオ段階から映画化の過程に至るまで，音響による叙情性を強く意識していたことは明らかである。しかし，その強い作家的意図が，編集上の破綻を露呈させる要因となっている。監督自身が「音楽が聞こえてくる」と述べる一方，その叙情的志向は視覚的イメージより音響側へと重点を移行させてしまう。

この場面では，香港アクション映画監督呉宇森（ジョン・ウー）の『狼 男たちの挽歌・最終章』（1989 年，以下『狼』）の音響素材が再編集・挿入される。その結果，時空間の直線的進行は一時的に撹乱される。具体的には，シャオウーが複数の空間を移動する映像に，通常の BGM や同期音声ではなく，『狼』の音響素材がモンタージュ的に重ね合わされている。こうした映像素材（『一瞬の夢』）と音響素材（『狼』）の接合によって，視覚と聴覚の間に明確なズレが生じる。

このズレは物語の進行を妨げるものではないが，美学的には違和感がある。たしかに技術的未成熟とも関連している点では瑕疵といえなくもない。だが，これは単なる制作上の瑕疵ではなく，むしろ作品自体の美学的かつ構造的な問題を顕在化させている重要な細部だ。よって作品全体のリズム感，音響と映像の接続の精度を踏まえて，さらなる検討が必要になる。

薬店の場面では，シャオウーが電灯を修理する。しかめた顔で椅子に立った彼は，電灯が再び光を放つ瞬間，子どものような笑顔を浮かべる。この表情からは，あたかも「この電灯を直した俺は，恋に落ちたのだ」というメッセージが読み取れるかのようだ。しかし，友人ゲンシェ

---

[11] ジャ・ジャンクー著『「映画」「時代」「中国」を語る』丸川哲史，佐藤賢訳，以文社，2009 年，21 頁。

ンは無関心にあくびを返す。素人俳優である二人が「笑う⇔あくびする」という演出は，俳優の即興によるものである。カメラがこの瞬間を捉えた点も，演出上の達成として評価される[12]。

しかし，ゲンシェンのあくびのタイミングで『狼』の銃撃音が挿入される[13]。これは偶然の操作というより，正反対の効果が同時に現れる一種のパラドックスとして捉えられる。すなわち，暴力的で混乱を伴う音響素材が意味不明とも言える編集によって介入してくる。その結果，俳優の演出が進行する中で，画面上に成立していたバランスは崩れる。しかし，賈樟柯は映画批評家林旭東（リン・シュイトン）との対談において，このような編集を肯定的に評価している。

> このことはまさにわたしが映画で，画面外にジョン・ウー（呉宇森）の『狼 男たちの挽歌・最終章（喋血双雄）』の音響を配したことの目的はそうした異化効果を創り出すことでした。[14]（傍点引用者）

この証言と演出ノートに記された抒情的志向は，『狼』の音響素材を「引用」する正当性を裏づけるものである。実際，賈樟柯初期作品には，香港アクション映画の痕跡がよく見られる。とりわけその特徴的なヒロイズム的主題は，物語の前提として機能する。たとえば『青の稲妻』（2003）における集団喧嘩の場面がその例である。とはいえ，こうした嗜好が『罪の手ざわり』（2013）以降，本格的に銃撃や犯罪といった暴力場面へと変化することについては，別稿に委ねたい。

さておき，ヒロイズム，すなわち「義」に基づく物語構造は先行研究においても繰り返し論じられてきた。本稿はこの議論に依拠せずに，そのヒロイズム的な枠組みの中で音が果たす機能を再考する。

たとえば，シャオウーが親友シャオヨンの結婚祝い金を工面するため，テープレコーダーの屋台前で財布を盗む場面を考えてみよう。このとき，画面右側から『覇王別姫（はおうべっき）』[15]という曲が流れ出す。しかし，財布を盗もうとする瞬間に音楽が途切れ，直後に再生される。その歌詞が強調するように，シャオウーは自らを英雄と認識し，「三斤分の札束を結婚祝いに渡す」と大見得を切った約束をどうにか果たそうとする。だが結局，この「不義の金は要らない」と，シャオヨンに断固として拒絶される。このエピソードは，賈樟柯作品に通底するヒロイズムの両義性

---

[12] この場面については劉洋も言及しているが，彼の分析は「他者」の問題系へと発展させている。劉洋「『一瞬の夢』論―他者の饗宴あるいは開かれた世界―」，『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第9号，96頁。

[13] 『狼 男たちの挽歌・最終章』（中国語吹替版）における刑事（ダニー・リ）と犯罪者の取引場面である。通りかかったパトロール警官が臨時検査を行い，その直後に銃撃戦へと発展する。

[14] 『「映画」「時代」「中国」を語る』，61頁。

[15] 本稿で触れた映画作品中の歌名については，初出時は筆者による直訳と音読を提示する。

を端的に示す。

では，『狼』の音響素材が用いられていることによって生じるパラドックスの事例を，以下に整理して説明する。

第一に，画面内の〈あくび〉（＝演出）と画面外の〈銃撃音〉（＝編集）の間に顕在化している，制作＝編集上の破綻。この事例では，映画の技術的次元においてパラドックスが端的に露呈している。むろん，このような分析が映画テクストの細部に対する過度な精査に陥る可能性については，筆者自身も自覚している。しかしこの試みは，あくまで問題提起にとどまるものである。この前提のもとで賈樟柯の一次資料を参照するならば，彼の抒情的な創作志向とヒロイズムの嗜好に接続された物語構造は，より広い意味でこのパラドックスの存在を予告しているように見える。とりわけ，長回しという連続的な時空間の内部において，叙情的な音響編集が画面を断片化しながら物語の進行に侵入する構造が確認される。

第二に，「リンゴ」の出来事である。モーター修理店の前に小武が立っている。自転車やオートバイ，通行人が次々とフレームを横切り，また通行人が撮影中のカメラに視線を向ける。この撮影現場の偶発的な瞬間がそのまま映り込んでいる一方で，シャオウーが三輪車に積み込まれたリンゴを取った瞬間，『狼』のもう一つの場面から抽出された音響素材が挿入される。該当する場面は，①教会での対話，②ジェニー（葉蒨文（サリー・イェー））による『浅醉一生（センスイイッショウ）』（ほろ酔いの一生）の歌唱，③銃撃という三つの映画時間で構成される。言うまでもなく，この場面におけるサリー・イェーの歌声の使用は，前述した賈樟柯の抒情的志向を端的に示すものである。しかし，ここで画面上に滑稽な出来事が生起する。リンゴ売りの男が戻り，シャオウーの前で立ち止まり，視線を交わすものの，直接的な争いは生じず，場面は平穏に収束する。リンゴ売りの男の表情に注目すると，彼が身を翻す瞬間に，罵声を吐いているかのような表情が捉えられていることがわかる。

要するに，約 1 分 14 秒の長回しは，シャオウーが何を考えているのかを観客に宙吊りのままに提示する。すなわち，シャオヨンの拒絶に落胆しているのか，それともメイメイから受けた人生初めてのキスを楽しんでいるのか，いずれにせよ，これは長回しによって生成される映画における思考の時間であり，シャオウーにとっての決定的な瞬間である。しかし，すべてが賈樟柯の抒情的志向，あるいは，美しい歌＝『浅醉一生』によって覆い隠されてしまう。

第三に，この『浅醉一生』の歌声が流れる中，シャオウーは広場へ移動し，友人ウーパンズが彼のリンゴを奪うことで，二人の追走シークエンスが始まる。ここで，音響素材は再び『狼』の刺殺シーンの銃撃音へと切り替わる。この追走は，約 1 分 23 秒に及ぶ長回しのパンショットによって捉えられる。ウーパンズは体型が逞しく，動きも速い。翻って，シャオウーの運動能力の低さが際立つ。しかし，彼が全力で走る様子が強調されている。シャオウーが友人のふざけた行為に対して怒りを抱き，これまで一貫して示されてきた「惚ける，立つ，座る，盗む」といった静的な身体の姿を超えて，全力で走るという様子が長回しの持続時間によって顕在化

している。

もう一つの類似場面を見よう。シャオウーが警察官からシャオヨンの結婚情報を第三者経由で知らされた。次のショットでは，彼が友人・ウーパンズの前で進行中のビリヤード対戦を中断させ，ボールを奪い，詰問する。ウーパンズから差し出されたタバコを拒絶し，「うるせえな」と一喝してボールを投げ捨てる。リンゴの場面と比較すると，シャオウーは自分の物を奪われると激しく怒り，全力で取り戻そうとする一方，自分のメンツを損なった際には，逆に友人の物を奪って怒りをぶつける。つまり，映画のヒロイズム的枠組みのなかで，こうした自己中心的な反応は彼の過敏な内面を露呈させ，現実レベルで挫折に直面したときにその主題との短絡を示している。

続いて，画面転換，二人の「喧嘩」が終わり，リンゴが手元に戻る。シャオウーが市場の階段を上って，手すりの壁に寄りかかりながらリンゴを弄る。このとき，『狼』におけるジェフリー（チョウ・ユンファ）が海辺でジェニーに電話をかける場面の音声が挿入される。カメラはシャオウーの視点で，泥棒少年三兎（サントウ）と恋人が街を歩く様子を捉え，二人が小路の奥へ進むと，カメラはシャオウーの背後に戻り，彼はリンゴを食べる。その後，音響の内容は再び変わる，冒頭で挿入された警察官による検査シーンの銃撃戦の音が加える，これにより，このシークエンスで繰り返し挿入されてきた『狼』の音響素材が，長回しの映像に侵入するという処理はここで完結する。

以上の分析を整理すると，『一瞬の夢』には，「断片的な音声」と「連続的な長回し」との構造における「ズレ」，あるいは物質的な瑕疵が，明らかに編集上の痕跡として存在している。つまり，笑う，あくびをする，そしてリンゴをめぐる一連の行動といった，素人俳優の顔から手，足に至るまで，長回しによる繊細な演出が施されている一方で，物語と直接関係のない音響は，観客がシャオウーの動機や行動に共感する「時間」を奪うというパラドックスが生じている。

端的にいえば，これは「リアリズム」と「ヒロイズム」という二つの主題の間に生じる「ズレ」である。たとえば，『一瞬の夢』のシャオウーと仲間たち，『青の稲妻』の小済（シャオジィ），斌斌（ビンビン）という登場人物は，香港アクション映画のキャラクターを模倣し，喧嘩やナンパ，戯れなど行動を通じて身体のエネルギーを放出する[16]。その裏には，賈樟柯自身がこのような「ヒロイズム」を信じているという創作の意識があり，それが演出に還元されることで，長回しによる「リアリズム」時空間にパラドックスが生まれる。

---

[16] 賈樟柯：「わたしは無数の香港のアクション映画を見ました（中略）身体のエネルギーを放出する場がなく，ホールを出ると何かと理由をつけて喧嘩をしました。中学を卒業した時，また一つの境界線が引かれ，多くの同級生は進学せず，一部は軍隊に入り，多くの者は街に出ることになりました」（『「映画」「時代」「中国」を語る』，81 頁）

2．素人俳優の身体としての歌唱

前節では，賈樟柯映画における音声の意味論的分析を超え，映画自体に内在するパラドックスを明らかにした。ただし，他にも検討するべき重要な音声の場面が残っている。俳優の歌唱がそれだ。実際，方言も含まれているその歌唱は，素人俳優たちの演技により直接関わる音声ともいえるのであり，映画の演出に不可欠な要素と見なされるべきである。したがって，本節では『一瞬の夢』における歌唱のシーンに焦点を当て，賈樟柯自身による撮影現場での発言を参照しつつ，シャオウー役の王宏偉（ワン・ホンウェイ）の演技を考察する。

まず，『一瞬の夢』の一場面を取り上げる。映画中盤，シャオウーがメイメイの家を訪れた直後，次のショットでは，銭湯でシャオウーが歌う約 3 分 25 秒に及ぶシーンが展開する。その構成は以下の通りである。

解体工事の音が聞こえる休憩ホールで，シャオウーは画面右側を向き，服を脱いでいる。手持ちのカメラは彼の横顔を捉え，動作に合わせてわずかに揺れる。このとき，シャオウーはすでに眼鏡とジャケットを外しており，赤色のセーターベスト，シャツ，靴下，最後にズボンを脱ぐ。約 45 秒間続く静かな場面で，カメラはこれらの動作を省略することなく丁寧に記録する。次いで，シャオウーは立ち上がり，全身裸のままで浴場へと移動し，カメラは後方から追う。

これまでの映画進行に見られたパラドックスとは対照的に，午後の光が左上の窓から射し込み，場面全体のリズムが一時的に静まる点が注目される。この自然光の中で，シャオウーが身体を大胆にカメラの前に晒す光景は，間もなく到来するクライマックスを静かに予告している。とりわけ，カメラが裸体を正面から丁寧に捉えるこの演出は，中国映画史を概観しても極めて大胆な事例である。しかし，より重要なのは，この場面に潜む俳優演技の細部である。

その浴場は，カビの生えた壁，老朽化した水道管，そして汚れた小便器に囲まれた，不機嫌な空間である。シャオウーは口笛を吹きながら三つの池の水温を順に確かめ，中央の池の縁に腰掛け，足から胸，首へと湯を浴びる。続いて立ち上がり，画面左側へ歩いた後，再び縁に戻ってタオルを取り，中央に座る。小柄な体格の彼は歌を口ずさむ。ここで初めて，シャオウーはメイメイが歌っていた『心雨（しんう）』（心の雨）を歌い出す。

> 私の辛い気持ち／わかりっこない／でも心の嵐はもう静まっているの／雨が降るといつも／あなたを思い出す

この場面で，カメラは歌声の音調に合わせて上昇する。左上の窓から自然光が射し込むと同時に，お湯の水蒸気も上昇する。最後，カメラは浴場の天井で止まる。水墨画を思わせるカビの生えた壁を背景に，カメラ＝水蒸気の上昇運動という「小さな」風景は，中国の唐代詩人李白（リー・バイ）

の『廬山の瀑布を望む』における「日は香炉を照らし紫煙生ず」という詩句を想起させる。

同様に，メイメイの家で彼女が『天空』を歌い泣く一方，シャオウーが対応に迷う場面では，背後の窓からの光がタバコの煙に屈折効果を与え，煙はより際立って見える。その濃密な煙の塊が，ゆるやかにメイメイの方へ偏りながら上昇していく。ここも「小さな」風景として評価すべきだ。さらに，その後の宴会シーンでのシャオウーの酒気は，いずれも歌あるいは素人俳優の歌声に繋がっている。すなわち，空間を満たす光の下で，煙，水気，酒気といった気体の表象が，長回しによって立ち現れているのだ。

これは，緩慢な上昇運動であり，シャオウー（＝ワン・ホンウェイ）の身体はどこか軽やかさを帯びている。長回しの中で，彼は『心雨』や『愛江山更愛美人』（江山を愛するよりも美人を愛する）[17] の歌声に包まれながら，タバコや白酒を楽しみ，メイメイの温もりを受け取っている。こうした映画時間は，前節で触れた「三斤分の札束」という約束，香港アクション映画に基づく「ヒロイズム」への想像，そして四方田による「リアリズム」的な雑音とは異次元で展開している。

シャオウーが人生の挫折に直面した際に示す「怒り」ではなく，『愛江山更愛美人』が提示する「酔うまで飲もう」という「歓楽」の姿勢を通じて放たれるのである。このように，義と裏切り，喜びと悲しみといった対立概念を一時的に脇に置き，ただカメラを信じて，俳優の身体を「薄汚い」とも言える空間に預けるのが賈樟柯の真骨頂だ。また，賈樟柯は演出ノートで次のようにも述べている。

> 登場人物たちのやむことのない会話，おもしろみのない歌，機械的なダンスの背後に，我々は見出す（中略）混乱した街路，騒がしい物声，そして維持しきれない関係はすべて人があてもなく疾駆する理由を持っている。汾陽のあの取り壊されつつある古い家屋の中の変わった歌声に耳を澄ますと，我々は突然信じるのだ。自らが視聴覚の面でなすことがあるのだと。[18]（傍点引用者）

と強調されているのは「信じる」という姿勢だ。あういは，長回しのシーンの中に潜む詩的な美しさと生命の本質が，まるで「日は香炉を照らし紫煙生ず」という詩句を想起させるほどに，映画的に映し出されている。

次いで，演技について触れる。『一瞬の夢』の助監督である顧峥は，「王宏偉はクラスで演技が最も苦手だと先生に評価され，出演の経験もない（中略）賈樟柯監督は彼のイメージに合わ

---

[17] 浴場のシーンに続き，カラオケではシャオウー，メイメイ，女将と他のホステスが踊る。さらに，宴会でシャオウーが白酒の燗を手にして飲む場面では，『愛江山更愛美人』が流れている。

[18] 『「映画」「時代」「中国」を語る』，19 頁。

せてシナリオを作成し，彼には予定されたシーンでの精神状態を持ち込んで行動するよう求めた」[19] と述べている。

また，侯孝賢（ホウ・シャオシェン）は「わたしは『一瞬の夢』を見た時，役者やテーマに対する処理に，ある種の直感があることがわかりました（中略）『一瞬の夢』の後は，頭を使って考えたものを出そうとして，人をどう置くとか，空間はこうするとか，形式から入ったようで，かえって力が入り，浮き上がっていたようです」[20] と語り，本作における「直感」的なものを評価している。つまり，ここで評価されているのは演技指導というより，撮影現場において俳優とカメラを「信じる」姿勢にほかならない。その一例が浴場のシーンである。ここでワン・ホンウェイが自分の身体をカメラの前に晒すことは，保守的な自己像を克服しようとする試みである。賈樟柯が次のように述べている。

> わたしは事前に王宏偉に裸になるように話し，かれはわかったといいました（中略）くれぐれもかれがその場になって投げ出すようなことはないように，よくかれに話さなければならない，と。しかし，わたしはかれという人間を知っていました。いかに多くを話していないとしても，かれを信頼すれば，かれはその信頼を感じ取ってくれるだろう（中略）その日の朝の前までずっと何も語らずに，その時になって非常に自然に始めました。それから，撮影は順調に進み，ワンテイクで済んだのでした。[21]（傍点引用者）

ここで賈樟柯が捉えたと述懐しているのは，俳優の内面的な爆発の瞬間そのものだろう。逆に言うと，シャオウーというキャラクター，ないし彼を演じるワン・ホンウェイには，「羞恥心」の問題が介在している。たとえば，カラオケの場面でのシャオウーは，メイメイから「歌おう」と曖昧に誘われても，彼女が提案する歌をいずれも「だめだ」と断っていた。このやり取りは，シャオウーのキャラクター設定に加え，それを演じるワン・ホンウェイ本人の性格にも根ざしているといえる（実際，ワン・ホンウェイは歌唱力を「上手」と評されてもいた[22]）。シャオウー＝ワン・ホンウェイが，浴場という特定の空間で，羞恥心という心理的障壁を突破し，その身体を撮影現場から切り離すかのように歌声を発する。

この点は，賈樟柯と是枝裕和の特別対談でも触れられている。是枝は，「そういう普通の人たちが，しかし素晴らしく的確な演技をしているのに感心したんです。それをどうやって引き出

19　賈樟柯著，趙静編『小武』，山東画報出版社，2010 年，51-52 頁。中国語の翻訳は拙訳。

20　『「映画」「時代」「中国」を語る』，170 頁。

21　前掲書，54-55 頁。

22　賈樟柯は「かれは確かに踊れませんが，歌はとても上手ですよ（中略）かれは自らの気持ちを人前で表すこと恥ずかしがる人間です。かれが歌を歌うのも，入浴する時だけで，がらんとした浴場で，自分一人で歌って一人で聞くわけです」と述べている。（前掲書，56 頁）

したのか」[23] と問いかける。だか，賈樟柯は「いや，僕も演技指導について良くわかっていません。ただ，職業的な俳優ではない，一般の人たちだからこそ持っているものを，彼らの方で出してくれたのだと思います」と答えている。確かに，このような即興的演出は，俳優の自発的行動に委ねることで成立している。

従来の賈樟柯映画論は，意味論やイデオロギーの側面に偏り，素人俳優とカメラの関係性への考察を欠いてきた。しかし，撮影現場における即興性やそれに基づく演出方法は，賈樟柯の作家性において最も重要な要素である。

浴場のシーンについての話に戻すと，中国独立系ドキュメンタリー映画作家である王兵（ワン・ビン）の代表作『鉄西区』（2003）には労働者の入浴場面が頻出する。そして第 1 部『工場』編の中には『心雨』の歌唱場面もある。簡単に言えば，浴場という空間は，まず工場労働者が仕事でついた埃を洗い流す場所として存在する。『一瞬の夢』に登場する銭湯と同じように，不安な雰囲気の中，汚れた壁や濁ったお湯とともに映し出される本作の浴場は，厳しい労働環境や生活の困難を実感させる。そこで王兵のカメラは，プライバシーへの配慮をしないまま労働者を追いかけ，彼らの身体や悪口までも捉えている。

> 王兵がデジタル撮影の「貧しさ」をことさらに強調しているかというと，それも違うといわなければならない。複雑に入り組んだ工場の内部で展開する『鉄西区』の第一部は，とりわけ視覚的な驚異の連続である（中略）そのなかで巨大な機械が駆動し，作業着姿の，あるいは無防備な裸体のさまざまな世代の男たちが匿名的な人影としてよぎっていく（中略）われわれは，次にどのような画面が来るかを予想することもできないまま，ただただ目を瞠っていることしかできないのである。[24]

藤井仁子が指摘するように，『鉄西区』における裸体は一種の衝撃的な表象として捉えられる。これらの映像は演出ではなく，実際の労働環境をドキュメンタリーとして記録したものである。これに対し，『一瞬の夢』は素人俳優による演技であり，その演出はメロドラマ的である。創作の方向は異なるが，いずれも工場労働者（『鉄西区』）や泥棒（『一瞬の夢』）といった社会的下層の人びとの裸体にカメラを向けることで，彼らの汚れた身体を画面上に映し出している。

---

[23] 是枝裕和，賈樟柯「特別対談　是枝裕和×賈樟柯　アジア発インディペンデント映画の地平はいま」『キネマ旬報』，キネマ旬報社（1298），1999 年，85-86 頁。

[24] 藤井仁子「王兵という（試し）『鉄西区』から『収容病棟』まで」，土屋昌明，鈴木一誌編集『ドキュメンタリー作家　王兵現代中国の叛史』，ポット出版プラス，2020 年，198 頁。

3．俳優の歌唱や演技にみられる「鈍感」── 金銭が絡む場合

前述の通り，『鉄西区』と『一瞬の夢』の浴場シーンでは，労働者やシャオウーの裸体が観客に提示される。これらの身体の露出は，物語の進行を超えて映画全体の構造の中で感動を喚起する要素として機能している。そして，その美的とは言いがたい身体の動きに呼応するのがフレーム外から響く「解体工事」の音である。この「崩壊」の音は，賈樟柯と王兵の作品に共通する「労働」や「金銭」という主題を浮かび上がらせると同時に，登場人物たちの身体が物語の中でどのように変化していくのかという問題を提示する。

『一瞬の夢』における金銭というテーマは，スリの頭目であるシャオウーが，シャオヨンへの結婚祝い金，メイメイへのカラオケ代，兄への結婚支援金といった一連の出来事を通じて，自らの犯罪行為と結び付けられていく点に端的に示されている。とりわけ，シャオヨンとメイメイの場面では，登場人物の台詞や紙幣の映像といった金銭の表象が繰り返し提示される。

川崎公平は「労働」という視点から，賈樟柯初期作品における登場人物の歌唱やダンスなどのパフォーマンスを分析している。とりわけ『一瞬の夢』では，メイメイとシャオウーの関係の進展を「音楽の交換」として捉え，こうした関係を「労働／労働外」という区分に基づき位置づけている[25]。もちろん，これらの歌唱場面はいずれも金銭的交換の図式に還元しうる。しかし同時に，素人俳優による演技のなかでその「鈍感さ」が際立つことも示されている。

具体的には，四つの場面が挙げられる。①シャオウーがシャオヨンへのお祝い金を渡した後，屋台で酒を飲み，その後カラオケでメイメイと初めて出会う。②シャオウーがメイメイの家を訪ねる。③前節で論じたように，シャオウーが入浴中に『心雨』を歌う。④シャオウーとメイメイがカラオケで再会する。これらの場面において，ホステスとしてのメイメイはカラオケで２回，家で１回，計３回歌うことになる。本節では，最も長い時間を占める場面①に焦点を当て，メイメイ（＝ズオ・バイタオ）の演出を検討する。

まず，メイメイはカラオケのテレビ画面の歌詞を確認しながら歌い始めるが，リズムや発音は不安定である。途中，視線をテレビ画面から外して，ヒーターに移動する際に呼吸が乱れ，さらにソファに腰掛けると，テレビ画面を見ないまま，彼女の発音が次第に混沌としていく。要するに，ホステスとしてのメイメイは歌詞の内容に自信をもっておらず，その演技はやや「鈍感」な印象を与える。

次いで，伴奏音楽が流れる中，メイメイはシャオウーの側に近づき，足を組んで太ももまで露出する。このとき，カメラは仰向けで大笑いするシャオウーを捉える。メイメイは，ふたたびシャオウーの方へ身を傾ける。テーブルの高さに据えられたカメラは，二人の膝上を映す。

---

[25] 川崎公平「表演/労動 ── 賈樟柯“故郷三部曲”中的歌舞」趙陽，靳麗芳訳，『電影藝術』，2013 年，第 350 期，121-123 頁。

桃色のライトに照らされた空間において，メイメイの太ももは目立つのだが，その曖昧な雰囲気でシャオウーは無頓着なままタバコを吸いながら笑っている。メイメイはシャオウーの気分を配慮しつつ，身体的な接近は無理だと気づく。そこで「お客が歌わない，カラオケなんて」と不満を述べ，『心雨』をリクエストする。次のショットでは，シャオウーがマイクを受け取って席を少しずらして，距離を置く。さらに，彼はその提案した歌に「ダメだ」と返答する。その後，約 25 秒間の沈黙が続く。結局，定価「50 元」（人民幣）のサービスを描くこのシーンは，そこで終結する。

さらに，映画の進行は金銭が絡む場面へと移行する。メイメイは大胆な行動を示すが，シャオウーは恥ずかしさを覚える一方で，歌の名前さえ知らずに対応できない。また，「歌を聴くために金を払っているのに，歌えよ」と述べ，二人の関係の根底にある金銭交換を強調する。結局，メイメイはホステスとして十分な歌唱を行わず，シャオウーも誘いを繰り返し拒否するため，二人の間で「金銭-歌」という交換がスムーズに成立しない[26]。

次の会計場面で，シャオウーはカラオケ屋の女将に，「50 元を払って，座っているだけだ」と不満を表明する。一方でメイメイは「だって歌を誘っても，踊りを誘ってもダメ」と反論する。これは，客-ホステスという関係における金銭交換のトラブルを明確に示している。しかも利益優先の女将は「言ったでしょ，私の身内同様の人なんだ，あんたが歌って，踊りもあんたがリード，にぶい娘だねえ！」とメイメイを怒る。最後，シャオウーはカラオケ代の「100 元」を支払った。女将は表向き「身内からお金は受け取れない，これじゃ申し訳なくて」と謝りつつも，実際にはその「100 元」を受け取る。そして代わりにメイメイへ「じゃ，シャオウーと出かけておいで，気晴らしに付き合うの」と指示し，さらに「でも夜明けまでに，私もバカだね，日が暮れる前に送って来てよ」と含みを持たせた話をする。こうして二人は外出することになり，結果としてお釣りに相当する「50 元」分のサービス時間が延長される。

しかし二人は，歩く→電話する→歩く→サロンに行く，という行動線に沿って，ひたすら「時間を潰す」だけである。この映画時間は物語上，一種の「鈍感さ」として捉えられるだろう。すなわち，メイメイの歌唱，シャオウーの対応，そして金銭交換関係のトラブルが映画全体の「鈍感な」リズムを際立たせる要素として機能している。

また，『青の稲妻』のラストシーンにおいても，このような「鈍感」な場面が見られる。シャオウーの運命と同様に，主人公・斌斌（ビンビン）は銀行強盗の罪で警察に逮捕される。しかもカメラの運動は長回しで，最初にはテレビ画面はニュースの放送映像である。カメラは左から右へと緩慢に移動し，ビンビンと警察が並んで座っている様子を捉える。

このとき，警察は「名前，年齢，住所」と厳しく質問する。突然，「そっちで歌ってみろ，行けって，歌え」と命令する。続いて，カメラは右に移動し，手錠をかけられたビンビンは立ち

[26] 川崎公平，前掲論文，122 頁。

上がる。ビンビンが「何を」と聞き返すと，「得意なのを歌え」と警察は呵責する。こうしてビンビンは自らの意志に反して歌うことを強いられ，約 1 分 29 秒にわたり『任逍遥（ニンショウヨウ）』（心のままに逍遥する）を歌うことになる。しかし，伴奏音楽はなく，彼の無愛想な表情と相まって，それは歌唱というよりも歌詞の暗唱に近い印象を与える。この場面について，蓮實は次のように述べている。

> 警察に捕まり手錠をかけられたビンビンが，警察に促され，直立不動のまま真正面を向いて歌う。やくざと別れる決心をしたチャオチャオが，いきなりウィッグをはずして舞台にたち，真剣な顔で踊るのは別の曲だが，そのつど「表情の零度」がきわだち，目には見えない「現在」に彼らがからめとられてゆくさまが痛ましく画面を震わせる。[27]

蓮實が「故郷三部作」における登場人物の「零度の表情」として指摘するものは，おそらく本節の関心点である，素人俳優の演技にみられる「鈍感さ」にほかならない。

一方で，このラストシーンを「労働」の視点から分析する川崎は，「この歌は，労働ではない。しかしもちろん，そこに開放感のようなものは微塵もない。ここで歌は，いわば「拷問」と化している。警官の命令によって，無報酬でパフォーマンスを強いられているのである。「労働」とも「労働外」ともいえない，きわめて悲惨なパフォーマンスだといえるだろう」[28] と述べ，より重要な点，すなわち歌唱行為の「拷問」性を的確に指摘している。

ここでいう「零度の表情」や「拷問」とは，ビンビンが警察の命令で歌詞を口に出す，すなわち「やらされる」行為を指す。それは，歌唱という行為ではなく，暗唱という下位のレベルに格下げされ，歌自体が持つ旋律的要素を剥奪された演技である。言い換えれば，ビンビンはある種の反抗として，歌詞をそのまま口に出すことを演じている。しかしこの反抗は，強固な意志に基づく能動的行為ではなく，むしろ弱者としての立場から示される「鈍感な」抵抗にすぎない。

ビンビンの「鈍感な」演技とは異なり，メイメイはカラオケの場面において，別のレベルの「鈍感さ」を示している。彼女はホステスとして一定の社交スキルを備えているものの，歌唱は不得手であり，さらに金銭のために自らの身体を差し出さざるを得ない状況に置かれている。逆に，シャオウー（＝ワン・ホンウェイ）は実際に歌うことができるが，メイメイの前では何もできず，ただライターを押して音楽を聴かせるにとどまる。このように，単なる金銭交換の図式では回収しきれない次元において，若者たちの内面に根ざした「鈍感さ」が露呈している

---

[27] 蓮實重彦「「表情の零度」またはポストモダン中国のハードボイルド　ジャ・ジャンクー『青の稲妻』」『映画時評 2009-2011』，講談社，2012 年，151-152 頁。

[28] 川崎公平，前掲論文，128 頁。

のである。

また，賈樟柯の物語における一つの倫理として，金銭という事実は変更不可能として反復されている点である。そして，物語の進展においては，登場人物が次にどのような行動や選択をするのか重要なモチーフとなる。しかし，この瞬間に観客が期待する答えや結果は，賈樟柯の映画では提示されない。なぜなら，登場人物自身にも，具体的な答えや解決策は存在しないからである。

端的に言えば，これは賈樟柯映画における不器用な登場人物に残された，唯一の選択肢である。というのも，彼らは到底，映画内の出来事，特に金銭のことに直面した瞬間，自分の内面的な思いを行動に転換できず，具体的な行動を取ることができないからである。ここで，第2節で論じたシャオウーの歌唱が「音楽映画」的な「歓楽」の側面を備えているのに対し，メイメイやビンビンの歌唱は，ただ暗唱する行為にとどまっている。

おわりに

最後に，再びあくびの例を取り上げて結論としたい。第1節で指摘したあくびのショットは，撮影現場での偶発的な出来事と編集上の瑕疵とのズレを抱えつつ，画面上の「重要なこと」の優位性を奪うという問題提起を含んでいた。言い換えれば，それは長回し，素人俳優，音楽という三つのキーワードを通じて生成される賈樟柯映画が孕む「パラドックス」の表れである。

『青の稲妻』においても，あくびのショットが現れる。ショウジイの父が銀行でドルを人民元に両替する場面では，ショウジイが怒りをあらわにする一方で，父はただあくびをするだけである。そして，ショウジイが巧巧（チャオチャオ）に呼び出され，車内で対決する場面でも同様のモチーフが示される。チャオチャオは「私，昨日中絶したばかり，やれる？」と問いかけると，ショウジイは「やれる」と答えるが，何の行動も起こさずに，彼女の顔を見つめるだけだ。これに対して，チャオチャオはタバコの煙を吸い込みながら彼の首を抱き寄せ，突然キスをし，その直後「近づかないことね」と叱責する。外では歌が流れている。その響きは次のショットへとつながる。ビンビンを抱いてバイクで帰るショウジイの「鈍感な」行動の背後には，シャオウーと同様，人生初めてのキスという内面的衝撃が潜んでいる。

【謝辞】本研究は，JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものである。

（おう　たいえい・映像・現代文化論研究室）

10.14943/rjgshhs.25.l 103

ベラルーシ語における HAVE 動詞 мець

── 譲渡不可能所有を中心に ──[1]

孫　　拓未

要　旨

本論文の目的は，先行研究によって充分に分析されていなかったベラルーシ語の HAVE 動詞 мець による譲渡不可能所有について，コーパスから採集した言語データを分析・考察することである。従来の先行研究では，HAVE 動詞 мець がどのような状況において使用されるのかについてを論じたものが多数であり，譲渡不可能所有に焦点を置いたものは少なかった。そして，本論文では HAVE 動詞 мець について次の 2 点を明らかにした。(i) 親族名称では，卑属＞結婚相手＞兄弟姉妹＞尊属の順に мець と共起しにくくなるということを明らかにした　(ii) さらに，譲渡不可能所有全体では，HAVE 動詞 мець が共起する可能性は，親族名称＞身体部位＞家畜＞属性の順に弱まることを明らかにした。

1．はじめに

1.1　研究の背景

ベラルーシではベラルーシ語とロシア語の両言語が国家語として認められている。2019 年に行われたベラルーシの国勢調査によると，家庭内でベラルーシ語を使用している人は約 240 万人に対し，ロシア語を用いていると回答した人は 670 万人であった（全人口約 940 万人）。また，ベラルーシ語は UNESCO によって危機言語と認定されている（清沢 2012：75）。

---

[1] 本論文におけるグロスの略号とその定義は以下の通りである。
１：１人称，２：２人称，３：３人称，ACC：対格，DAT：与格，F：女性形，GEN：属格，LOC：前置格，M：男性形，N：中性形，NOM：主格，PART：助詞，PL：複数形，PRS：現在形，PST：過去形，SG：単数形

ベラルーシ語において叙述所有表現を表す構文は 2 つある。それは HAVE 動詞 мець による構文（以下 HAVE 所有構文）と，BE 動詞 быць による構文（以下 BE 所有構文）である。以下の例文（1）が HAVE 所有構文であり，例文（2）が BE 所有構文である。

ベラルーシ語：

（1） Ён　　мае　　машіну.
he.SG.NOM　have.3SG.PRS　car.F.SG.ACC
「彼には車がある。」（Кравицкий et. al 1990: 312）

（2） У　яго　　ёсць　　кніга.
at　he.SG.GEN　be.PRS　book.F.SG.NOM
「彼には本がある。」（Кравицкий et. al 1990: 310）

周辺に位置しているロシア語やポーランド語を見てみよう。これらの言語においても叙述所有表現に使用される動詞として BE 動詞と HAVE 動詞はあるものの，たいていはそのうちの一つのみが主に使用されている。ロシア語においては BE 所有構文が，ポーランド語においては HAVE 所有構文が主に使用される。

ロシア語：

（3） У　меня　　есть　　машина
at　I.SG.GEN　be.PRS　car.F.SG.NOM
「私には車がある。」（Danylenko 2009: 1）

ポーランド語：

（4） Ta　　osoba　　ma　　brodę.
that.SG.NOM　person.SG.NOM　have.3SG.PRS　beard.F.SG.ACC
「その人には髭がある」（森田 2022：150）

表す意味が同じで，異なる 2 つの言語形式を有していることは，言語の経済性という観点からみれば奇妙な現象であると言わざるを得ない。スラヴ諸語における所有表現の古典的研究である Mrázek（1973）や Isačenko（1974: 44）では，ベラルーシ語（Isačenko はこれ以外にも，ウクライナ語とポーランド語も加えている）を，BE 言語から HAVE 言語に移行している可能性があると指摘している。また，スラヴ諸語における BE 動詞と HAVE 動詞の文法化に関する論考を著した Danylenko（2009）によると，言語類型論的にベラルーシ語とウクライナ語は BE 動

詞と HAVE 動詞が併存している言語であるという。

しかし，近年の研究では，BE 所有構文と HAVE 所有構文の間に差があることが明らかになった。特に，４章にて詳述する Mazzitelli（2012）の研究が代表的である。Mazzitelli（2012）は，ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець を体系的に分析している。ベラルーシ語における叙述所有表現の研究が進んだこともあり，Mrázek（1973）や Isačenko（1974）などの古典的な研究を見直すきっかけとなると思われる。

1.2　研究の目的

本論文は，どのような譲渡不可能所有が，HAVE 動詞 мець の目的語となることができるのかについて，主にコーパスから採集した例文をもとにして計量的な分析を行うことが目的である。

Mazzitelli（2012）では，ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець の用法を仔細に分析していると言える。しかし，譲渡不可能所有については，詳細に立ち入った議論は行われていない。特に譲渡不可能所有は，所有表現のプロトタイプとみなされている（cf. Heine 1997, Langacker 1995 etc.）。

このテーマを論じるにあたって，初めに譲渡不可能所有や叙述所有に関する問題を見ていく。その後に，Mazzitelli（2012）などのベラルーシ語における HAVE 動詞についての先行研究について論じる。

さらにベラルーシ語には２つの言語規範が存在する。一つは公式規範であり，もう一つはタラシケヴィチ規範である。前者の公式規範はソ連時代を通じて確立され，ベラルーシの公的領域や学校教育などで用いられる。一方でタラシケヴィチ規範は一部のベラルーシ語メディアや民族意識の高いベラルーシ語話者の間で用いられる（清沢 2021：2）。本論文では公式規範によって書かれたテクストを対象としたコーパスを使用して調査を行った。

2．叙述所有と譲渡不可能所有

2.1　HAVE 型叙述所有について

叙述所有は，動詞的所有とも呼ばれる。名称が示しているように，動詞を用いて所有を表現する形式である。これとは別に，限定所有が存在するが，こちらは名詞句の内部で所有を表現するものである（Heine 1997: 25–26）。意味的には，限定所有は所有されていることが前提条件として立っているが，叙述所有は所有そのものに焦点を置いているところに違いがある。本論文のテーマは叙述所有である。

叙述所有構文にはさまざまなパターンが見られる。英語やドイツ語など，ヨーロッパの諸言語でよく見られる HAVE 構文や，ロシア語やトルコ語などで見られる BE 構文などがある。

Heine（1997）や Stassen（2009）などの研究は，世界の言語における叙述所有構文を仔細に分類している。前者は認知言語学に基づいた考察で叙述所有構文を 8 つに分類し，後者は構文的特徴によって 4 つに分類している。ここでは HAVE 所有構文以外の構文は詳細に述べることはせず，Heine（1997）と Stassen（2009）の HAVE 構文についての論考を比較していきたい。

Heine（1997）によると，所有表現は何をするのか（Action），どこにあるのか（Location），誰といるのか（Accompaniment），何が存在するのか（Existence）に関する基本的な経験に関係しているという（Heine 1997: 45）。これらに基づき，以下の表 1 に示されている 8 つのイベントスキーマが区別される。

表 1　Heine による叙述所有表現の 8 つのスキーマ

叙述所有構文の形式	スキーマの名称
X takes Y	Action（行為）
Y is located at X	Location（位置）
X is with Y	Companion（随伴）
X's Y exists	Genitive（属格）
Y exists for/to X	Goal（着点）
Y exists from X	Source（起点）
As for X, Y exists	Topic（主題）
Y is X's（property）	Equation（等式）

Heine（1997: 47）の表を一部改変

この表の中で，Action（行為）スキーマが，一般に言及される HAVE 所有構文であり，Location（位置）スキーマが，BE 所有構文である。HAVE 所有構文の述語動詞は，ゲルマン諸語やイタリック諸語などでは，「掴む」や「取る」といった動詞から派生したケースが多いという（Heine 1997: 50）。

一方，Stassen（2009）は世界の言語に見られる所有構文は 4 つに還元[2] できると指摘しており，その一つに HAVE 所有構文（HAVE-Possessive）が認められている。特に Stassen（2009）は，所有者と所有対象の文法的機能によるコード化のみが所有構文の分類基準であるとしている。ここでは紙幅の都合上，HAVE 所有構文のみを取り扱う。Stassen（2009: 62）によると，HAVE 構文は他の所有構文とは異なり，他動詞構文を形成する。所有者が主語となって，所有

[2] Stassen（2009）の 4 つの分類は以下の通りである。
（ i ）場所的所有（Locational Possessive）
（ ii ）随伴的所有（With Possessive）
（iii）主題的所有（Topic Possessive）
（vi）HAVE 所有（Have-Possessive）

対象が HAVE 動詞の目的語となって現れる。

2.2　譲渡不可能所有について

数ある所有カテゴリーの中でも，譲渡不可能所有はプロトタイプの位置を占めている（cf. Heine 1997, Langacker 1995 etc.）。Nichols（1988: 568）によると，譲渡不可能所有とは生得的で，生まれながらにして持っているものである。一方でその対になる概念である譲渡可能所有は，所有権に関わることであり，社会的や経済的に付与されるものである（Nichols 1988: 568）。日本語の所有動詞について研究した角田（2009）も，上記と同じような解釈を行っている。所有表現について全般的な研究を行なった Heine（1997）は，譲渡不可能所有には，（１）親族関係，（２）身体部位，（３）空間的な概念，（４）物体の一部分（全体部分の関係），（５）属性や精神的状態，（６）名詞句（限定所有句）が含まれていると指摘している。

また，Nichols（1988: 572）は言語によって譲渡不可能所有・譲渡可能所有が異なることにも言及している。そして，（１）親族名称や身体部位，（２）全体部分関係や空間関係，（３）文化的基本所有物（家畜など）の順に譲渡不可能性が弱まることを指摘している。しかし，一部の言語では身体部位は譲渡不可能所有に含まれないなど，それぞれの言語においてその解釈に若干の違いが見られることも示唆している。

また，角田（2009）では譲渡不可能性階層が示されている。その階層によると，身体部分＞属性＞衣類＞（親族）＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物の順に譲渡不可能性が弱まることを指摘している。しかし，角田（2009：128–129）が述べている通り，この所有傾斜は絶対的なものではなく，言語によって修正することが妥当な場合がある。

ここで，本論文で分析する譲渡不可能所有について示す。本論文では，Nichols（1988）や角田（2009）などの先行研究を踏まえ，親族名称，身体部位，家畜並びに属性を調査対象とする。

3．ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець について

ベラルーシ語の所有表現を体系的に研究した論考は，Mazzitelli（2012）を除くと少ない。特にベラルーシ語の教科書の一部分に所有表現に言及したものが多少あるのみである。ここでは，ベラルーシ語の教科書における言及と，Mazzitelli（2012）を概観し，ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець について見ていく。

なお，HAVE 動詞 мець の議論から少しそれるが，ベラルーシ語の BE 所有構文についても触れておこう。BE 所有構文では，BE 動詞を入れる場合と入れない場合があり，その両者は意味論的に重要な区別がある[3]。BE 動詞を入れない場合は，所有の事実を強調せず，所有対象に焦

[3] 例えば，例文（A）は「私には青い目をしていないという事実はなく，確かに青い目をしている」と

点が置かれる。一方で BE 動詞を入れる場合には，所有の事実そのものに焦点が当てられる（Mazzitelli 2012: 104）。また，Мразек（1990: 45）によると，東スラヴ諸語の現在時制では，所有の事実がコミュニケーションの中心になる場合は，BE 動詞が常に現れるという。つまり，ベラルーシ語の所有構文では，BE 所有構文では BE 動詞を明示するか，しないかについての選択を行うことができる。一方で HAVE 所有構文は，BE 所有構文のように動詞を省略することはできない。従って，BE 所有構文で表現可能な対立―所有の事実に焦点を置くか，所有対象に焦点を置くか―が表現できないということも指摘しなければならない。

3.1　ベラルーシ語の教科書における мець の記述

ここではベラルーシ語の教科書として，Кравицкий et al.（1990, 1994）を取り上げる。これらは全て公式規範に依拠したものである。

Кравицкий et al.（1990）は，ロシア語話者を対象としたベラルーシ語の教科書であり，ロシア語との対照を随所に取り入れている。Кравицкий et al.（1990）では主に BE 所有構文における BE 動詞 ёсць の省略に割かれている分量が多いが，HAVE 所有構文と BE 所有構文との比較も記述されている。мець が許容されるのは，譲渡可能な抽象名詞と，譲渡可能な具体的名詞および譲渡不可能な抽象名詞であると指摘している（Кравицкий et al. 1990: 311–312）。しかし，譲渡不可能な抽象名詞と譲渡可能な抽象名詞の定義が曖昧であると言わざるを得ない。

Кравицкий et al.（1994）もロシア語で著されたベラルーシ語の教科書であるが，その一節にベラルーシ語の譲渡不可能所有について言及された箇所がある。そこでは，ベラルーシ語の BE 所有構文と HAVE 所有構文を対照する形で記述されている。それによると，ベラルーシ語において，譲渡不可能な名詞を HAVE 所有構文で表すことは不可能であると論じている（Кравицкий et al. 1994: 219）。

しかし，Кравицкий et al.（1990: 311–312, 1994: 219）の一連の教科書は，HAVE 所有構文と BE 所有構文の違いを最低限のレベルで論じているに過ぎない。このような記述を行う背景として，ロシア語にはこのような使い分けが存在していないことが原因であると思われる。しかし，実証的な検証を経て論じられているわけではなく，あくまでもロシア語話者にとって，BE

いうように，所有の事実を強調している。一方で例文（B）は，所有の事実ではなく，所有対象に焦点が当てられている（Mazzitelli 2012: 104）。

（A）　У　мяне　ёсць　сінія　вочы.
　　at　I.SG.GEN　be.PRS　blue.PL.NOM　eye.PL.NOM
　「私には青い目がある。」（Mazzitelli 2012: 104）

（B）　У　мяне　сінія　вочы.
　　at　I.SG.GEN　blue.PL.NOM　eye.PL.NOM
　「私には青い目がある。」（Mazzitelli 2012: 104）

所有構文と HAVE 所有構文には差があることを記述しているに過ぎない。これは，教科書という性質上，致し方ないように思われる。

3.2 Mazzitelli（2012）の調査[4]

Mazzitelli（2012）は，ベラルーシ語およびリトアニア語の叙述所有表現を比較・対照した論考である。そしてこの論考では，Heine（1997）にて提唱されている所有スキーマや所有カテゴリーをベースとして，譲渡不可能名詞のほか，ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець に関する仔細な分析を行っている[5]。

ベラルーシ語では，Heine（1997）の言う「譲渡不可能所有」のうち，(i) 親族名称や社会的関係を表す場合と，(ii) 身体部位を表す場合が，HAVE 動詞 мець によって表現が可能となる。なお，Mazzitelli（2012）では (ii) 身体部位のみを譲渡不可能所有として扱っており，親族名称を譲渡不可能所有とは扱っておらず，社会的所有という別の概念を立てて論じている。

ここでは，Mazzitelli（2012）の行ったベラルーシ語の HAVE 動詞 мець の研究うち，譲渡不可能所有の範囲に絞ってその用法をみていく。

3.2.1 мець の使用が許容される場合

(i) 人物を表す場合

Mazzitelli（2012）は，人物の「所有」を社会的所有（Social Possession）としている[6]。先に論じたように，Кравицкий et al.（1994）では人間を所有する場合には HAVE 動詞 мець は使用できないと述べたが，Mazzitelli（2012: 85）では母語話者の協力を経て，人間を表す語が мець の目的語となる文は容認可能であると結論づけている。

（5）	Цяпер	Наста	працуе	ў
	now	Nasta.F.SGNOM	work.3SG.PRS	in
	рэкламным	бізнэсе	і	мае
	advertising.M.SG.LOC	business.M.SG.LOC	and	have.3SG.PRS
	трохгадовага	сына.		
	three-year-old.M.SG.ACC	son.M.SG.ACC		

[4] Mazzitelli（2012）では，ベラルーシ語の例文は全てラテン文字に転写される形式で表されている。本論文では，Mazzitelli（2012）に掲載されている例文を引用する場合は全てキリル文字で表記することとする。

[5] Mazzitelli（2012）は，コーパスによる調査やアンケート調査によって例文を収集している。

[6] しかし，Mazzitelli（2012: 85）は，社会的所有の全てを譲渡不可能所有であるとは考えていないようである。

「今ナスタは広告業で働いていて 3 歳の息子がいる。」（Mazzitelli 2012: 85）

（6）	Ёсць	жа	яшчэ	горшыя	за	мяне.	[...]
	be.PRS	PART	even	worse.PL.NOM	for	I.SG.GEN	
	Палюбоўніц	маюць	і	не	па	адной.	
	lover.PL.ACC	have.3PL.PRS	and	not	by	one.F.SG.LOC	

「私よりももっとひどい人がいる［…］彼らには恋人がいるが 1 人だけではない。」（Mazzitelli 2012: 85）

Mazzitelli（2012）の調査では親族名称（Mazzitelli（2012）の用語に従えば Inalienable Social Possession）を調査しているものの，どのような親族名称を調査したのかが明確になっていない。例文では「息子」と「恋人」しか挙げられておらず，「息子」の一例だけで判断することは困難であると言える[7]。

(ii)　身体部位を表す場合[8]

ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець は，主語の身体的特徴を示すために使用することは難しい。だが，所有関係が前提ではない場合には使用される。例文（7）ではラズミアン人（宇宙人）の身体描写を表しているが，ここでも HAVE 動詞 мець が出現している。以下の例文の場合は所有が前提となっていない。

（7）	Ён	уважліва	азірнуў	разумян.	Яны
	he.SG.NOM	attentively.ADV	look.SG.PST	Razumian.PL.ACC	they.NOM
	мелі	доўгія	цыліндрычныя	тулавы,	тонкія
	have.PL.PST	long.PL.ACC	cylindrical.PL.ACC	trunk.PL.ACC	thin.PL.ACC
	кароткія	рукі	і	ногі.	
	short.PL.ACC	arm.PL.ACC	and	leg.PL.ACC	

「彼はラズミアン人を注意深く観察した。彼らは長い円筒形の胴体と細く短い腕と脚があった。」（Mazzitelli 2012: 86）

---

[7] ベラルーシ語と系統的に近いロシア語の HAVE 動詞 иметь の研究（田中 2024）において，息子を表すロシア語の сын は，親族名称の中でも譲渡可能性が高い語とみなされている。

[8] 特定のグループに対する身体描写を表す際にも，HAVE 動詞 мець が用いられる。これは一般的な特徴を述べているだけに過ぎず，具体的な人物の身体特徴を描写していないと Mazzitelli（2012: 149）は推測している。

しかし，母語話者によると以下の例文（8）は容認可能であると示している。ただし，これは一時的な性質よりも，永続的に認められる特徴を表す場合である。泣いて，青い目が一時的に赤くなっている場合に（9）のような HAVE 所有構文を使用すると，容認度は低下すると Mazzitelli は主張している。

（8） Ён　　мае　　сінія　　вочы.
he.SG.NOM　have.3SG.PRS　blue.PL.ACC　eye.PL.ACC
「彼は青い目をしている。」（Mazzitelli 2012: 86）

（9） ?Ён　　мае　　чырвоныя　　вочы.
he.SG.NOM　have.3SG.PRS　red.PL.ACC　eye.PL.ACC
「彼は赤い目をしている。」（Mazzitelli 2012: 86）

3.2.2　мець の使用が許容されない場合

(i)　病気を表す場合

HAVE 動詞 мець は，病気を患っていることを表す時には用いられず，BE 所有構文によって表される。なお，BE 所有構文である（10b）では，BE 動詞が省略されている。

（10a） *Ян　　мае　　грып.
Jan.M.SG.NOM　have.3SG.PRS　flu.M.SG.ACC

（10b） У　　Яна　　грып.
at　　Jan.M.SG.GEN　flu.M.SG.NOM
「ヤンはインフルエンザである。」（Mazzitelli 2012: 148）

ただし，以下の例文（11）のように，病気の症状を描写する際は，HAVE 動詞が許容される。

（11） Ян　　мае　　высокую　　тэмпературу　　ды
Jan.M.SG.NOM　have.3SG.PRS　high.F.SG.ACC　fever.F.SG.ACC　and
іншыя　　сымптомы　　грыпа.
other.PL.ACC　symptom.PL.ACC　ful.M.SG.GEN
「ヤンは高熱とインフルエンザの症状がでている。」（Mazzitelli 2012: 148）

(ii)　感情を表す場合

感情や心理社会的な状況を表す語彙―不幸や幸福，郷愁などの語―は HAVE 所有構文によって表現することはできない。これらを所有する場合は BE 所有構文によって表される。なお，BE 所有構文である（12b）では，BE 動詞が省略されている。

（12a）　*Я　　маю　　бяду.
I.SG.NOM　have.1SG.PRS　misfortune.F.SG.ACC

（12b）　У　　мяне　　бяда.
at　　I.SG.GEN　　misfortune.F.SG.ACC
「私は不幸である。」（Mazzitelli 2012: 148）

(iii) 所有者（主語）の身体的特徴を描写する場合

所有者（主語）の身体的特徴を描写する際に HAVE 動詞 мець の使用を嫌う母語話者がいたことが，Mazzitelli（2012: 148）の調査で判明している（例文 13）。

（13）　?Ён　　меў　　маладыя　　і　　добрыя　　вочы.
he.SG.NOM　have.M.SG.PST　young.PL.ACC　and　good.PL.ACC　eye.PL.ACC
「彼は若くて良い目をしている。」（Mazzitelli 2012: 148）

3.2.1 の (ii) において，HAVE 動詞 мець は所有が前提となっていない状況下において，身体部位が мець の目的語となることができると述べた。しかし，所有者の身体的特徴の描写と，所有が前提となっていない場合の区別を本論文で行うことは難しいと考えている。

3.3　まとめ

ここまで，ベラルーシ語における HAVE 動詞 мець の用法を詳しくみてきた。本論文では譲渡不可能所有を扱うものなので，譲渡可能所有における мець の用法に踏み入ることはしなかった。本章では主にКравицкий et al.（1990, 1994）と Mazzitelli（2012）による論を参考に мець の用法を記した。Mazzitelli（2012）における体系的な調査の結果，概ね以下の状況において мець が使用できると結論づけることができる。なお，以下の表における〇は完全に使用できることを意味し，△は文法的には正しいが通常は使わない表現であり，×は非文を表している。

表 2　HAVE 動詞 мець が表現できる譲渡不可能所有

所有の種類		可否
社会的関係		○
抽象的所有	病気	×
	感情	×
身体部位	身体的特徴を描写を表す場合	△
	所有前提がない場合	○
	一時的な状況を表す（例文 9）[9]	△
	永続的な性質を表す	○

この表から読み取れることは，HAVE 動詞 мець は身体部位を所有する場合には制約が多いということである。Кравицкий et al.（1990, 1994）は，身体部位を所有する場合には HAVE 動詞 мець は用いられないと論じていたが，これは教科書の性質上，初学者に混乱を与えないためにあえて上記のような記述にとどめたとも考えられる。

Mazzitelli（2012）は，親族名称が HAVE 動詞 мець の目的語となり得ることを論じているが，調査対象となった親族名称がどのようなものであるかを明確に示していない。これは，身体部位にも同様のことが言える。例えば，親族名称を考察している例文（５）では「息子」が現れているが，その他の親族名称である「父」や「母」などといった親族名称の状況が判然としない。本論文では，４章各節の冒頭で調査した名詞の一覧を掲載し，その調査に基づいた詳細な分析を行うこととする。

４．譲渡不可能所有の分析

本章では，コーパスを用いてベラルーシ語の譲渡不可能所有の分析を行う。ベラルーシ語の所有表現について総合的に論じた Mazzitelli（2012）では，譲渡不可能所有にあまり重点をおいていなかった。親族を表す所有表現はもとより，身体部位や家畜を表す所有についての深い考察も，あまりなされていなかった。そのような不足を補うことを目的として，本章ではベラルーシ語における譲渡不可能所有を分析する。なお，ここでは現在形のみに限定して調査を行うものとする。

譲渡不可能名詞をコーパスで調査する上で，筆者は１）мець＋名詞，２）мець＋形容詞＋名詞，３）мець＋数詞＋名詞という３つの語結合のレベルで調査した。

[9] 「一時的な状況を表す」とは，例えば泣いて目が赤くなっているような状況を指している（例文９）。

4.1　調査の概要と調査方法

本論文では譲渡不可能所有のうち，身体部位，属性，親族および家畜を対象として調査を行い，計量的な分析も同時に行なった。なお，分析対象となる言語データは，すべてベラルーシ語ナショナルコーパス[10] から収集した。調査する名詞は，各節の冒頭に示されている。

調査した所有構文は全部で 371 例である。そのうち，親族名称は 324 例，身体部位は 33 例，家畜が 11 例，そして属性が 3 例であった。その総数に対する割合は図 1 の棒グラフで示されている。

表 3　譲渡不可能所有の区分別の用例数

譲渡不可能所有の区分	例数
親族名称	324
身体部位	33
家畜	11
属性	3
総数	**371**

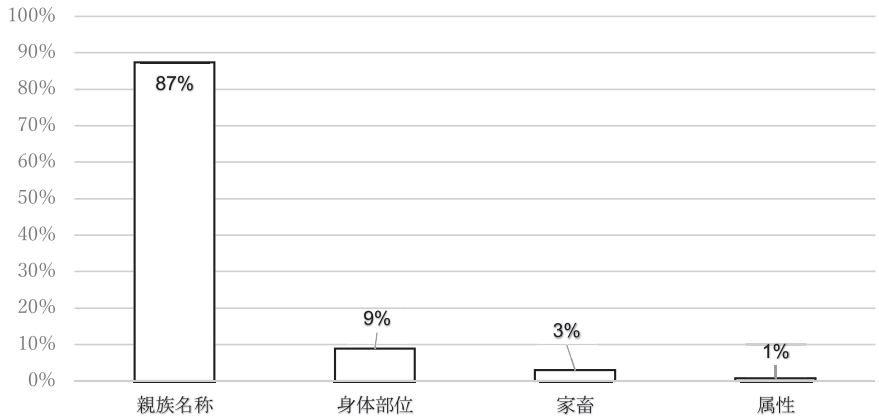


図 1　譲渡不可能所有の用例数の割合

4.2　親族名称の所有を表す場合

ここでは，親族名称を表す語が мець と共起している状況について，コーパスから判明した

[10] ベラルーシ語ナショナルコーパスにはいくつかのサブコーパスが存在するが，今回は web コーパス（Корпус вэб-рэсурсаў）を使用した。web コーパスには，合計 1 億 1200 万語収録されている。なお，web コーパスに掲載されているテキストは，ベラルーシ系政府サイト（zviazda.by や tve.by）などから引用されている。

ことを示し，その分析を行う。

表 4　親族名称が мець の目的語となっている頻度数

日本語	ベラルーシ語	件数（名詞単体）	件数（形容詞＋名詞）	件数（数詞＋名詞）	合計
親族名称					
祖父	дзед	0	0	0	0
祖母	баба	0	0	0	0
母	маці	0	0	0	0
父	бацька	0	1	0	1
姉・妹	сястра	1	1	2	4
兄・弟	брат	0	1	1	2
おば	цётка	0	0	0	0
おじ	дзядзька	0	0	0	0
孫（男）	унук	16	1	19	36
孫（女）	унучка	2	1	1	4
子供	дзіця	135	30	57	222
息子	сын	5	3	15	23
娘	дачка	11	3	4	18
妻	жонка	5	1	2	8
夫	муж	6	0	0	6
総数		**194**	**43**	**103**	**324**

調査対象となる 4 つの譲渡不可能所有のうち，親族名称の割合は一番高い結果となっている。その中でも，孫や子供，息子や娘の所有を表す表現が他の親族名称よりも多いことが表 4 からわかる。反対に，祖父，祖母，母，おじやおばといった親族が мець の目的語となっている例は見られなかった。しかし，父を表す бацька に関しては，例文が 1 件存在した（例文 14）。

（14）［...］ іншая　　мае　　заможнага　　бацьку［...］
another.F.SG.NOM　have.3SG.PRS　wealthy.M.SG.ACC　parent.M.SG.ACC
「一方には裕福な父親がいる…」（zviazda.by）

祖母や祖父，父や母などの親族名称は，所有者が生まれた時点には既にいることが確実であり，一般的に所有の事実を改めて強調する必要がないと考えられるため，コーパスにおける例数が少ないと思われる。なお，この例文（14）の例では，限定詞が бацька を修飾している。

兄弟姉妹を表す語が мець の目的語となっている例を見てみよう。

（15）Досця, дарэчы, мае сястру [...]
Doscja.F.SG.NOM by the way have.3SG.PRS sister.F.SG.ACC
「ところで，ドースチャには妹がいる…」（zviazda.by）

（16）[...] вы маеце паўналетніх брата і
you.NOM have.2PL.PRS adult.PL.ACC brother.M.SG.ACC and
сястру [...]
sister.F.SG.ACC
「あなたには成人した兄/弟と姉/妹がいる…」（zviazda.by）

兄弟姉妹を表す語が мець の目的語となっている例は，親族名称全体の中でわずか 6 例しか存在しない。なお，コーパスから最終した言語データのほとんどに限定詞が付されており，その語結合が мець の目的語となっているものが大半である。一方，限定詞がついていないものは例文（15）の 1 例のみであった。

子供や息子，娘，孫などを表す親族名称が мець の目的語となっている例の例を見てみよう。

（17）Мае дачок, унукаў [...]
have.3SG.PRS daughter.PL.ACC grandchild.PL.ACC
「彼/彼女には娘と孫がいる…」（zviazda.by）

（18）[...] жанчыны і адзінокія мужчыны, якія
woman.PL.NOM and single.PL.NOM man.PL.NOM who.PL.NOM
маюць дзяцей [...]
have.3PL.PRS child.PL.ACC
「子供がいる独身男性と女性は…」（zviazda.by）

（19）Ён [...] мае чатырох дзяцей [...]
he.SG.NOM have.3SG.PRS four.N.ACC child.PL.ACC
「彼には 4 人の子供がいて…」（zviazda.by）

（20）Мае сына, дачку, двух унукаў.
have.3SG.PRS son.M.SG.ACC daughter.F.SG.ACC two.M.ACC grandson.PL.ACC
「彼/彼女には息子，娘と 2 人の孫がいる。」（zviazda.by）

子供，息子，娘，孫などを表す親族名称が мець の目的語となっている例は数多く見受けられ，特に子供を表す дзіця に関しては，222 例存在した。これらの親族名称は，父や母，祖父や祖母といった親族とは異なり，所有者が生まれた段階では存在しないということができる。

最後に，結婚相手―妻と夫が мець の目的語となっている例を見てみよう。

（21） Баксёр　　мае　　жонку［...］
boxer.M.SG.NOM　have.3SG.PRS　wife.F.SG.ACC
「ボクサーには妻がいる…」（zviazda.by）

（22） ［...］ дзяўчына　　ўжо　　мае　　мужа　　і　　дзіця.
girl.F.SG.NOM　already　have.3SG.PRS　husband.M.SG.ACC　and　child.N.SG.ACC
「その女の子にはすでに夫と子供がいる。」（zviazda.by）

妻や夫を表す親族名称が мець の目的語となっている例は，子供や息子，孫などの例に比べると数は劣るが，合計で 14 例見られた。

上記の調査結果を踏まえ，筆者はベラルーシ語の所有表現の分析に最適な親族分類を提案したい。それは（i）尊属，（ii）兄弟姉妹，（iii）卑属と（iv）結婚相手である。（i）尊属とは主語（所有者）よりも年上の親族を指ししめし，（iii）卑属とは主語（所有者）よりも年下の親族を指し示し，（iv）結婚相手とは妻や夫を指している。親族の譲渡不可能性について考えると，ここでは（i）尊属を表す親族名称が一番高いと思われる。そして，譲渡不可能性が比較的低いと考えられるのは，（iii）卑属や（iv）結婚相手を表す語であると考えられる。（ii）兄弟姉妹に関しては，その中間に位置していると思われる。

この親族分類に依拠すると，HAVE 動詞 мець は（iii）卑属や（iv）結婚相手など，譲渡不可能性が低い語と共起する可能性が高いことがコーパスによる調査で判明した。4 章で見た Кравицкий et al.（1990, 1994）の議論では，мець の目的語として取ることができるのは，譲渡可能な具体的名詞であり，譲渡不可能な名詞を目的語に取ることはできないと述べている。実際に譲渡不可能性の高い（i）卑属が мець の目的語となっている例は少数であり，譲渡不可能性が比較的低いと思われる（iii）卑属や（iv）結婚相手に関する語は мець の目的語となる例が（i）尊属や（ii）兄弟姉妹よりも多い結果となった。

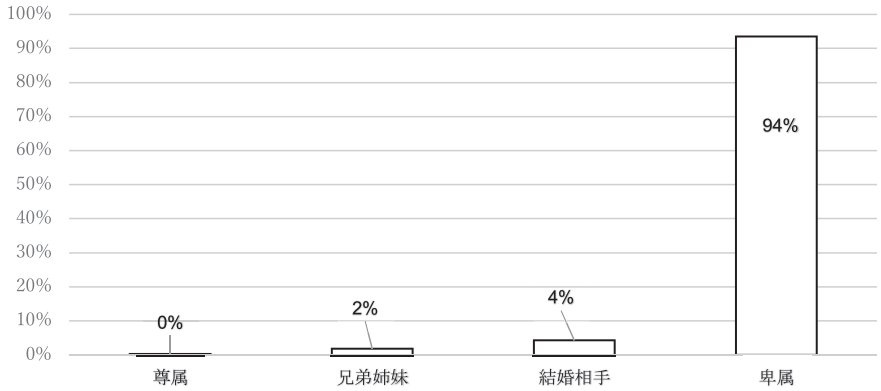


図 2　親族名称が мець の目的語となる割合

先行研究である Mazzitelli（2012）では，親族名称が мець の目的語となっているものについて深い考察などがなされていなかったが，本研究では親族名称が мець の目的語として共起する際に，譲渡不可能性が高くなるにつれて，その動詞の使用可能性が弱まることを示した。

4.3　身体部位を所有する場合

ここでは，身体部位を表す語が мець と共起している状況について，コーパスから判明したことを示し，その分析を行う。

表 5　身体部位が мець の目的語となっている頻度数

日本語	ベラルーシ語	件数（名詞単体）	件数（形容詞＋名詞）	件数（数詞＋名詞）	合計
身体部位					
頭	галава	4	2	1	7
目	вока	3	2	0	5
鼻	нос	0	0	0	0
耳	вуха	6	0	0	6
口	рот	0	0	1	1
髪の毛	волас	0	2	0	2
首	шыя	0	0	0	0
手/腕	рука	2	3	1	6
足/脚	нага	4	2	1	7
総数		**19**	**11**	**4**	**34**

身体部位は全体の中で 9 % を占めており，これは親族名称についで大きい値である。身体部位の中でも，口と首，乳房に関しては，目的語となっている例は見受けられなかった。これは

おそらく，この 2 つの所有を描写することが難しいことに起因するものであると言える。

身体部位には，普通所有物と非普通所有物とに分けることができる。前者は先天的に保有していることが明白なものであり，後者は人によって有無が分かれるものを指している（角田 2009：158）。本稿で扱うものは全て普通所有物である。そして，前者の普通所有物は所有されていることが当たり前であるから，通常は形容詞を付けなければ特別な意味を帯びる（角田 2009：163）。ここでは，形容詞や数詞などの限定詞がつく場合と，限定詞がつかず，身体部位が単独で мець の目的語となっている場合とに分けて論じようと思う。

4.3.1　形容詞＋身体部位が мець の目的語となっている場合

（23）Чалавек, які мае здаровыя рукі,
people.M.SG.NOM who.M.SG.NOM have.3SG.PRS healthy.PL.ACC hand.PL.ACC
ногі, галаву [...]
leg.PL.ACC head.F.SG.ACC
「健康な手，足，頭をしている人は…」（zvaizda.by）

（24）Гаспадар мае ўмелыя рукі [...]
husband.M.SG.NOM have.3SG.PRS skilled.PL.ACC hand.PL.ACC
「主人には器用な腕がある…」（zviazda.by）

（25）Калі вы маеце доўгія валасы, [...]
if you.PL.NOM have.2PL.PRS long.PL.ACC hear.PL.ACC
「もしあなたに長い髪があるのなら…」（zviazda.by）

「形容詞＋身体部位」が мець の目的語となっている例は 11 例であった。以上で挙げた例文は，いずれの場合も単純にどのような手を有しているのか，について描写している。しかし，中には以下のように「形容詞＋身体部位」に比喩的な意味があると思われるものがある。

（26）[...] для тых, хто мае
for those.PL.GEN who.M.SG.NOM have.3SG.PRS
духоўныя вочы [...]
spiritual.PL.ACC eye.PL.ACC
「霊的な目を持つ人のために…」（zviazda.by）

（27）［...］ але яшчэ маюць светлыя галавы.
but also have.3PL.PRS bright.PL.ACC head.PL.ACC
「そしてさらに彼らは明るい頭を持っている。」（zviazda.by）

（26）の духоўныя вочы は霊的な目，つまり真理や精神世界を見通す目のことを指しており，（27）の светлыя галавы は輝いている頭，これは聡明さや賢さを示している。「形容詞＋身体部位」の中で，このような比喩的な用法と思われるものは，11 例中 4 例存在した。このような用法は，所有の前提がないことを念頭に置かねばならない。

4.3.2　数詞＋身体部位が мець の目的語となっている場合

通常，人体に付着している身体部位の数は決まっている。しかし，身体部位が数詞によって修飾される場合，その所有者は，我々人間にとって未知の存在であり，その特徴を描写している可能性がある。例文（28）の文の主語 ён は，文脈によると粘着質な怪物 ліпучная пачвара を指している。

（28）［...］ ён мае два рот.
he.SG.NOM have.3SG.PRS two.M.ACC mouth.M.SG.ACC
「彼には 2 つの口がある。」（zviazda.by）

また，以下の例文（29）は，文脈によると HERMES はロボットであり，その身体特徴を描写するために「数詞＋身体部位」という語結合が мець の目的語となっている。

（29） HERMES мае дзве нагі і дзве
HERMES.SG.NOM have.3SG.PRS two.F.ACC leg.F.PL.ACC and two.F.ACC
рукі, [...]
hand.F.PL.ACC
「ヘルメスには 2 つの足と 2 つの腕がある…」（zviazda.by）

我々人間にとって未知の存在を描写する際に，数詞＋身体部位の組み合わせが мець の目的語となる可能性があることが，コーパスによる調査によって判明した。

4.3.3　身体部位が単独で мець の目的語となっている場合

身体部位が単独で мець の目的語となっている時は，「мець＋身体部位」という組み合わせが慣用句的に用いられる場合や，未知の生物やロボットなど，動物以外の特徴を描写する際に用

いられていることが，例文から判明した。

（30） Адметнасць [...] крычаўскай качкі-каня ў
distinctiviness.F.SG.NOM kryčaŭ.F.SG.GEN kačka-kanja.F.SG.GEN in
тым, што яна мае галаву.
that.M.SG.LOC what.NOM she.F.SG.NOM have.3SG.PRS head.F.SG.ACC
「クリチャウのカチカ＝カニャの特徴は，それに頭があることである。」（zviazda.by）

（31） [...] яго нядаўняя распрацоўка “МіксБот”
his.SG.NOM recent.F.SG.NOM development.F.SG.NOM MiksBot
мае галаву, [...]
have.3SG.PRS head.F.SG.ACC
「彼の最近の開発品の「ミックスボット」には頭があり…」（tvr.by）

（30）では，この世には存在しない動物「カチカ＝カニャ」の特徴を描く際に用いられている。（31）ではロボットが手を持っていることを示している。これらの文は動物の一部分としての身体部位の所有・存在を描写する文ではないため，形容詞がつかなくとも，単純に所有を示していることがわかる。このような場合は，身体部位に関しては所有が前提とはなっていないため，このような言い方が可能である。

しかし，「мець＋身体部位」という組み合わせが慣用表現的に用いられる場合や，比喩的に用いられる場合がある。なぜなら，調査した身体部位の全ては普通所有物であり，мець を加えなくとも初めから所有・存在していることが明確だからである。

（32） [...] мае галаву на плечах [...]
have.3SG.PRS head.F.SG.ACC on shoulder.M.SG.LOC
彼には肩に頭がある（＝しっかりとした考えがある）…」（Zviazda.by）

（33） Сцены маюць вушы і вочы.
wall.PL.NOM have.3PL.PRS ear.PL.ACC and eye.PL.ACC
「壁は耳と目を持っている（＝壁に耳あり障子に目あり）。」（Zviazda.by）

例文（32）と（33）は慣用表現の例である。（32）では，мае（不定形 мець）галаву на плечах はロシア語の иметь голову на плечах に相当する表現であり，しっかりした考えを持っていることを表している。例文（33）の сцены маюць（不定形 мець）вушы і вочы はロシア語の и у

стен уши есть に相当し，日本語の「壁に耳あり障子に目あり」を意味している慣用句である。

角田（2009：163）では，普通所有物が修飾要素なしで用いられると，特別な意味を持つほか，普通ではないという意味が付されるという。そしてこのような現象はベラルーシ語においても見られる。

（34）［...］ хто мае вочы, той убачыць.
who.NOM have.3SG.PRS eye.PL.ACC that.M.SG.NOM look.3SG.PRS
「目を持っている者は，見る。」（zviazda.by）

通常，人間には目があって当たり前であるが，（34）ではあえて мае вочы という形式が使われている。この場合，しっかりとした視点や視座があるということを指すものと思われる。

（35）［...］ Той, хто мае вушы, почуе.
that.M.SG.NOM who.NOM have.3SG.PRS ear.PL.ACC hear.3SG.PRS
「耳のあるものは聞くだろう。」（zviazda.by）

人間には耳があるのは当たり前である。そして，例文（35）で出現している мае вушы に関しては，理解力や傾聴力のある人を指していると思われる。

身体部位が単独で мець の目的語となっているもののうち，実際の所有を表しているものが 5 例，慣用的表現が 3 例，そして特別な意味を表す表現が 11 例あった。

4.3.4　まとめ

本章で行った数量統計を割合にすると，以下の図 3 の通りになる。

コーパスに基づいた調査の割合を示した図 3 によると，特に際立っているものが身体部位が単独で мець の目的語となって特別な意味を表しているものと，形容詞＋身体部位の組み合わせが мець の目的語となっているものである。Mazzitelli（2012）の研究では，形容詞などの限定詞がある場合と，限定詞がない場合における差異については言及していない。本論文では限定詞がある場合と，ない場合の違いや，慣用的用法などが存在することを示した。

その他，本論文では限定詞などがつく場合と，つかない場合の頻度数の調査も行っている。形容詞＋身体部位の組み合わせが мець の目的語となっているものでは，単純な所有を意味する用法が比喩的な用法に比べて多いことが図 3 からわかる。一方で身体部位が単独で мець の目的語となっている場合，単純な所有を意味する用法が，特別な意味を表す用法よりも少ないことがわかる。

Mazzitelli（2012）が指摘しているが，身体部位を目的語にとる表現は，話者によって大きく

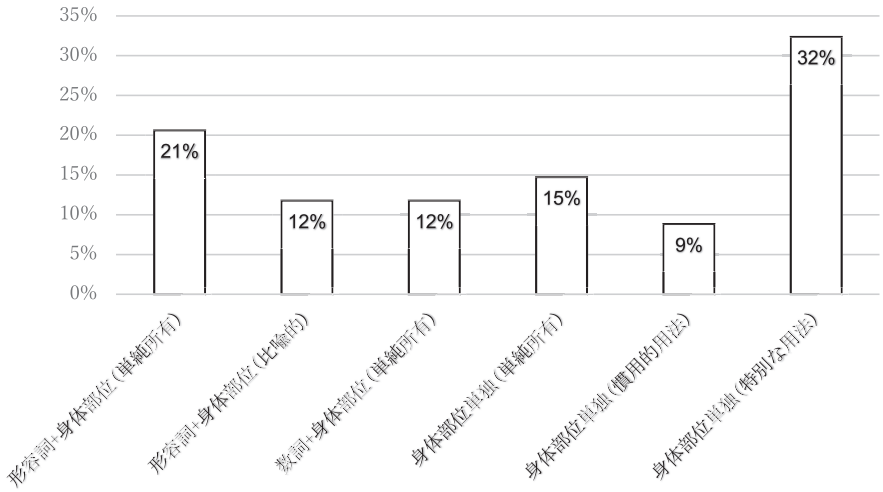


図 3　身体部位が мець の目的語となる割合

開きがある。このような開きは，話者の言語環境に左右される可能性がある。この点はコーパスでの調査は難しいため，今後大規模なインタビュー調査を行い，話者の言語環境を明らかにした上での記述が必要となる。

4.4　家畜を表す場合

ここでは，家畜を表す語が мець と共起している状況について，コーパスから判明したことを示し，その分析を行う。

表 6　家畜が мець の目的語となっている頻度数

日本語	ベラルーシ語	件数(名詞単体)	件数(形容詞＋名詞)	件数(数詞＋名詞)	合計
家畜					
犬	сабака	5	0	0	5
牛	карова	2	0	0	2
馬	конь	4	0	0	4
豚	свіння	0	0	0	0
羊	авечка	0	0	0	0
やぎ	каза	0	0	0	0
猫	кошка	0	0	0	0
鳥	птушка	0	0	0	0
総数		**11**	**0**	**0**	**11**

家畜の類は，HAVE 動詞 мець の目的語になることができるが，属性に次いで確認された例

数が少なかった[11]。猫，豚や羊，やぎに関しては，参照したコーパスにおいて例文が全く見受けられなかった。また，限定詞（形容詞や数詞）がついたものも全く見受けられなかった。なぜ，家畜を表す名詞が мець の目的語となる例が少ないのかは，本調査において明らかにすることができなかった。

（36）［...］ кожны гараджанін, які мае
everyone.M.SG.NOM citizen.M.SG.NOM who.M.SG.NOM have.3SG.PRS
сабаку, ［...］
dog.F.SG.ACC
「犬を飼っている一人一人の市民は…」（zviazda.by）

（37）［...］ калі маеш карову.
if have.2SG.PRS cow.F.SG.ACC
「もし君が牛を飼っているならば。」（zviazda.by）

（38）Акрамя таго, людзі маюць коней, ［...］
besides that.M.SG.GEN person.PL.NOM have.3PL.PRS horse.PL.ACC
「それに，人々は馬を飼っていて…」（zviazda.by）

なお，動物を飼育（管理）していることを示す語として трымаць「飼育・管理する」という語がある。しかし，Mazzitelli（2012: 91）はこの語を単純な所有動詞ではないと結論付けている。それは，所有の意味のほかに，管理や導くといった，所有を超える意味をも含意していることがその理由である。

4.5　属性を所有する場合

ここでは，属性を表す語が мець と共起している状況について，コーパスから判明したことを示し，その分析を行う。

Mazzitelli（2012）によれば，属性を表す語（病気や精神状態）に関しては，基本的に HAVE 動詞 мець の目的語とはならないとされている。しかし，筆者が行ったコーパスによる調査では，ガン，うつ病といった語が мець の目的語となっている例が全部で 3 例見つかった。ここ

[11] 今回の調査で対象としたコーパスは，そのほとんどの例文が zviazda.by というニュースサイトから引用されている。そのため，今後は文学コーパスなどを調査し，例文調査を行うことも課題であると考えている。

ではそのうちの 2 つを紹介する。

表 7　属性が мець の目的語となっている頻度数

日本語	ベラルーシ語	件数（名詞単体）	件数（形容詞＋名詞）	件数（数詞＋名詞）	合計
属性					
インフルエンザ	грып	0	0	0	0
がん	рак	1	1	0	2
うつ病	дэпрэсія	1	0	0	1
不幸	бяда	0	0	0	0
総数		**2**	**1**	**0**	**3**

（39）Калі пацыентка мае рак малочнай
if patient.F.SG.NOM have.3SG.PRS cancer.M.SG.ACC breast.F.SG.GEN
залозы, [...]
gland.F.SG.GEN
「もしも女性患者が乳がんを患っていたら…」（zviazda.by）

（40）[...] ў тых, хто мае дэпрэсію, будзе
in those.PL.LOC who.NOM have.3SG.PRS depression.F.SG.ACC be.3SG.FUT
пагаршэнне стану.
deterioration.N.SG.NOM state.M.SG.GEN
「うつ病を患っている人の中には，状態の悪化が起こりうる（人もいる）だろう。」（zviazda.by）

一方で，Mazzitelli（2012: 148）で述べられているとおり，心理社会的な意味を持つ語（бяда「不幸」）が мець の目的語となっている例は見受けられなかった。

本章で提示されている例文を見ると，мець の主語となっているのは固有名詞ではなく，集合的な性質を持つものとして理解することもできるだろう。例文（39）では，пацыентка「女性患者」が特定の女性患者を示してはいない[12]。そして，例文（40）の文の主語は хто「誰」であり，

[12] この前の文では以下のことが言及されている。
Тут найперш увага аддаецца лячэнню розных паталогій прадраку, напрыклад, такіх, як фібраадэномы. Такім чынам ствараюцца ўмовы, каб яны не пераходзілі ў злаякасныя новаўтварэнні. Трацічная прафілактыка — папярэджанне рэцыдываў метастазаў.

さらに所有文が関係詞節となっている。

4.6　調査結果の考察

ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець は，親族名称＞身体部位＞家畜＞属性の順に使用できる可能性が低くなることが，今回のコーパス調査によって判明した。

属性に関しては用例がほとんどなく，僅かにがんとうつ病を表す名詞が мець の目的語となっているのみであった。家畜に関しては，犬と牛，馬を表す語が мець の目的語となっているものが存在したが，限定詞によって修飾されている例は 1 件もなかった。身体部位では，「形容詞＋名詞」が мець の目的語となっている例は，身体部位を表す名詞が単独で使用される例に比べて少ない。しかし，身体部位においては慣用的な表現や特別な意味を表す場合も多く，純粋な所有を表しているものはそのうちの 5 例であった。親族名称では，譲渡可能性の低い祖父や祖母，母や父といった親族名称が мець の目的語となることは稀であり，それ以外の親族名称では мець の目的語となる例が数多く見受けられた。

5．まとめと今後の課題

5.1　まとめ

本論文では，ベラルーシ語の譲渡不可能所有―特に HAVE 動詞 мець の用法について，コーパスから採集した例文をもとに分析を行った。従来の先行研究（Mazzitelli 2012）にて深く考察されることのなかったベラルーシ語の HAVE 動詞 мець による譲渡不可能所有について，深く考察することができた。

親族名称は，調査した他の譲渡不可能所有の中で一番割合が高く，その値は 87％であった。筆者が提案した親族分類（4.2 参照）を導入すると明確な差が出ることが確認された。さらに，親族名称の中でも，子供を意味する дзіця と卑属を指す親族名称が мець の目的語となることが，他の親族名称よりも多いことがわかった。コーパスによる調査の結果，мець と共起することのできる親族名称に階層があることがわかった。それは，卑属＞結婚相手＞兄弟姉妹＞尊属の順に мець と共起しにくくなるというものである。

身体部位は，親族名称の次に多かったが，その割合は 9 ％であった。身体部位が HAVE 動詞 мець の目的語となる場合には，単純に特定の身体部位を所有する用法もあるが，そのほかにも

「ここではまず，線維腺腫のような前がん病変のさまざまな病理の治療に重点が置かれる。こうして，それらが悪性新生物へと移行しない条件がつくられる。三次予防とは，再発や転移を防ぐことである。」

以上のような文脈から，例文（41）にて出現する пацыентка「女性患者」は特定の女性患者を指示していないと判断した。

慣用的な用法，身体部位が単独で мець の目的語になると，特別な意味合いを帯びることがあることを示した。家畜では犬，牛，馬以外の例はなく，属性に至ってはわずか 3 例のみであった。このことから，ベラルーシ語の HAVE 動詞 мець が共起する可能性（コーパスでの調査による）は，親族名称＞身体部位＞家畜＞属性の順に弱まることがわかった。

ベラルーシ語の所有表現の先行研究である Mazzitelli（2012）では，HAVE 動詞 мець がどのような場面において使用できるのか，については調査を行っていたが，使用の程度の問題には踏み込んではいなかった。本論文では，HAVE 動詞 мець がどのような場面で使用可能性があるのかについて考察できた。

先行研究の Mazzitelli（2012）では，どのような親族名称が мець の目的語となることができるのかについての詳しい調査は行っていなかった。本論文の新規性として，上記の階層を提示できたことであると思われる。

5.2　今後の課題

今回はベラルーシ語の HAVE 動詞 мець のみの分析にとどまった。しかし，ベラルーシ語には BE 所有構文も存在しており，この構文の所有対象として共起する譲渡不可能所有の仔細な分析は，管見の及ぶ限りなされていない。今後の課題としては，BE 所有構文と共起することのできる譲渡不可能所有をコーパスや母語話者からのアンケート調査によって調査し，ベラルーシ語の 2 つの所有構文の違いを記述することにある。なお，今回の HAVE 動詞 мець の調査では，家畜と属性を表す語彙が目的語となっている例数が少なかった。なぜこれらの語彙が мець の目的語とならないのかについては，BE 所有構文との対照や母語話者へのアンケートを実施する必要があるだろう。

また，今回の調査は，主にコーパスの言語データのみを参考にしたが，その言語データを作った話者の属性情報は考慮されていない。特に，ベラルーシ語は周辺のロシア語やポーランド語の影響を強く受けており，話者の言語環境がベラルーシ語の文法に影響を与える可能性がある。

Mazzitelli（2012: 150）によると，ベラルーシ語話者の間には，幼少期からベラルーシ語とロシア語の双方の言語に触れていた話者と，成人期になってからベラルーシ語を身につけた話者とにおいて，所有表現に対する意識が異なっているという。特に，後者は「よりベラルーシ語らしい」表現を好むといい，過剰修正として HAVE 動詞 мець を多用すると指摘している。HAVE 所有を「ベラルーシ的」，一方の BE 所有を「ロシア的」とする対立である。このような対立では，話者は純粋な母語運用能力だけではなく，よりベラルーシ語らしい表現を取捨選択して用いている可能性があると Mazzitelli（2012: 151）は言及している。

特に，身体部位に関する表現は話者の間でかなり差がある（Mazzitelli 2012: 150）。コーパスのみでは，そのような「個人の意見」に注意を向けることはできない。また，今回の調査ではタラシケヴィチ規範には触れなかったが，ポーランド語との言語接触を踏まえる観点からは，

今後検討が必要である。タラシケヴィチ規範には，少なからぬポーランド語の要素がある。タラシケヴィチ規範を支持している話者が，HAVE 所有と BE 所有のどちらを選択するかについては，未だ答えが出ていない問題である。

謝辞

本論文を作成するにあたり，指導教員である菅井健太先生に多大なご支援・ご助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

（そん　たくみ・言語科学研究室）

参考文献

Danylenko, A.（2009）. The East Slavic ‘HAVE’: between the *be-* and *have-* patterning? Available at: https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/pdf_seminar/20090619Danylenko.pdf（最終閲覧日 2025 年 7 月 31 日）

Heine, B.（1997）. *Possession: cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge; New. York: Cambridge University Press.

Isačenko, A.（1974）On ‘have’ and ‘be’ languages（a typological sketch）. In Michael S. Flier（Eds.）, *Slavic Forum: Essay in Linguistics and Literature*（pp.43-77）. Paris: The Hague / Mouton.

Langacker, W.（1995）. Possession and possessive construction. In J. R. Taylor & R. E. MacLaury.（Eds.）, *Trends in Linguistics. Studies and Monographs 82*（pp. 51- 79）, Berlin: Mouton De Gruyter.

Mazzitelli, F.（2012）. *The expression of Predicative Possession in Belarusian and Lithuanian*. Tesi di Dottorato: Università degli Studi di Roma “La Sapienza”.

Mrázek, R.（1973）. Funkční distribuce habere a esse v slovenské větě. *Československé přednášky pro VII: Mezinárodní sjezd slavistů ve Varšave*. Praha: Akademia.

Nichols, J.（1988）. On alienable and inalienable possession. In Shipley W.（Eds.）, *In Honor of Mary Haas: from the Haas Festival Conference on Native American Linguistics*（pp. 557-609）, Berlin; New York: Mouton De Gruyter.

Stassen, L.（2009）. *Predicative Possession*. Oxford: Oxford University Press.

＊＊＊

Мразек 1990 — *Р. Мразек.* Сравнительный синтаксис славянских литературных языков : исходные структуры простого предложения. Vyd. 1. Brno.: Univerzita J.E. Purkyně, 1990.

Кравицкий et. al 1990 — *А. А. Кравицкий, А. Е. Михневич, А. И. Подлужный.* Белорусский язык для говорящих по-русски. Минск.: Вышэйшая школа, 1990.

Кравицкий et. al 1994 — *Кравицкий А. А., Подлужный А. И.* Учебник Белорусского языка для самообразования. Минск.: Вышэйшая школа, 1994.

＊＊＊

清沢紫織（2012）.「なぜベラルーシ語は危機言語なのか」『スラヴィアーナ＝Slaviana』，4，69-89.

————（2021）.「現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立」『スラヴ研究』，68，1-43.

田中春菜（2024）.『BE 型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 иметь の使用範囲』東京外国語大学総合国際学研究院修士論文（未刊行）

角田太作（2009）.『世界の言語と日本語』くろしお出版

森田耕司（2022）.「ポーランド語における所有・存在表現」『語学研究所論集』27，149-159.

10.14943/rjgshhs.25.l 129

be willing to の語法に関する考察：コーパスによるアプローチ

池　田　拓　誉

要　旨

本稿で取り上げる現代英語の be willing to は「喜んで～する」や「進んで～する」というほどの強い積極性は持たないとされている。しかしながら，辞書が持つ用例の中には be willing to が積極的な意味で用いられていると考えられるものも存在する。be willing to に積極的な用法が存在するかについて，コーパスを用いた調査を行い，その結果から，積極的な用法の be willing to も存在することを主張する。

1．はじめに

be willing to を「喜んで～する」や「進んで～する」と捉えることに対し，これまでいくつかの批判がなされてきた。例えばクラフト（2016：174）は，「辞書や参考書の中には，“be willing to do”は『喜んで～する』と書いてあるものがありますが，この表現にはそうした能動的な積極性はなく，『～するのは苦ではない』というニュアンスで用いられるのがふつうです。古い日本語に『～するのもやぶさかではない』という表現がありますが，それにピッタリなのが“be willing to do”なのです」と述べている。

上述のような指摘がなされる be willing to であるが，willing には a willing helper（自ら進んで手助けする人）のように，限定用法として用いられる場合は「自ら進んで～する」や「喜んで～する」という意味になることが指摘されている（安井・安井 2022：762）。このような側面を持つ willing であるが，本当に be willing to という表現に積極性はないのだろうか。

本稿ではコーパスを用いて be willing to の使用状況，特に積極的な意味で用いられる可能性について調査を行い，その結果を分析する。

本稿は以下の通り構成される。2 節は be willing to に関する辞典の記述・先行研究を概観する。3 節では Corpus of Contemporary American English を利用した be willing to の量的調査につ

いて，４節ではコーパスから得られた be willing to の積極的用例について報告する。５節では全体のまとめを行う。

２．辞典の記述・先行研究

本節では be willing to の意味がどのように捉えられているかについて，辞書の概観を行う。その後，be willing to に関連した先行研究をみていく。

2.1　Oxford English Dictionary の記述

be willing to について，まずは Oxford English Dictionary（以下，OED と略記）の willing の記述を概観する。OED による willing の説明と叙述用法（be willing to）の説明を（１）に示す。OED の定義では willing が「特にためらう理由･反対する理由がないからある行為を行う用意がある」といった，積極性の程度が低い定義になっていることがわかる。

（１）　a.　Disposed to consent or comply; ready to do something (specified or implied) without reluctance, having no objection; (also, without mention of a particular task or requirement) disposed to do what is asked or needed, ready to be of use or service.

（OED: willing, adj., sense 1.a.　下線は筆者による）

b.　In predicative use with to and infinitive, with clause, or without complement

（OED: willing, adj., sense 1.a.i.）

ただし，OED の用例内には積極的な意味として解釈可能なものも存在した。（２）をみてみよう。

（２）　There is only a small group of people willing to pay high prices for first-generation technology.

（OED: 2003　下線は筆者による）

（２）が「第一世代の技術に喜んで/進んで高いお金を払う人は少数派だ」という意味だとすると，積極的な意味で用いられていると解釈が可能である。

さらに，１節でも述べたように，限定用法の用例では willing が明らかに積極的な意味で用いられていると考えられる例がある。

（３）　Work is done rapidly by willing hands, in the midst of a willing people.

（OED: 1858　下線は筆者による）

詳細な文脈はないものの，（３）は仕事を進んでやる人たちによって仕事が素早く終わることが述べられ，willing hands/willing people は「進んで行う人々」を指すと考えられるのではないだろうか。この推測の下では，willing は積極的な意味を含意していると考えられる。

（２），（３）を踏まえると，be willing to に積極的な意味はないと断じることはできないのではないだろうか。

2.1.1　英英辞典

本節では OED 以外の英英辞典の記述を概観する。willing/be willing to に関する記述内容と例文は表１にまとめた（例文中の下線は筆者による。辞典には略語を用い，引用文献内の辞典の項にて詳述する）。

表１　英英辞典の記述

辞典名	willing の定義・be willing to の例文	辞典から読み取れること
COBUILD[10]	If someone is willing to do something, they are fairly happy about doing it and will do it if they are asked or required to do it. ・The military now say they're willing to hold talks with the political parties. ・There are, of course, questions which she will not be willing to answer.	頼まれたり，必要であれば行うといった受動的な意味になっており，積極的な意味はもたない記述になっている。
LDOCE[6]	［not before noun］prepared to do something, or having no reason to not want to do it. ・How much are they willing to pay? -quite/perfectly willing ・I told them I was perfectly willing to help.	何かをする心構えがあり，ある行為をしたくない理由はないという意味で記述されている。
MWALED	not refusing to do something：READY - followed by to + verb ・I'm perfectly willing to try. ・They are always willing and eager to help. ・We're ready and willing to make the trip.	何かをする上で反対する理由はないこと，ready と同義であることが示されている。 二つ目の例文は eager と，三つ目例文は ready との等位接続になっている。
OALD[10]	not objecting to doing sth; having no reason for not doing sth ・Many consumers are willing to pay more for organic food. ・They are willing and able to share their knowledge and experience.	何かをする上でそれに反対しないことや，しない理由が特にないといった意味に留まっており，積極的な意味はもたない記述になっている。

英英辞典の記述を踏まえると，be willing to にそれほど積極的な意味はないように推察される。「頼まれたり，必要であれば行う」，「反対する理由やしたくない理由がないから行う」というのは，どちらかといえば受動的な意味合いを持ち，積極性はあまり示さないだろう。

2.1.2　英和辞典

本節では willing/be willing to について英和辞典の記述を概観する。記述内容と例文は表 2 にまとめた（表記・レイアウトは原文と異なるが，定義・解説・例文は原文のまま。例文中の下線は筆者による）。

表 2　英和辞典の記述

辞典名	willing の定義・be willing to の解説・例文	辞書から読み取れること
アクシスジーニアス英和辞典	［be ～ to do］…するのをいとわない，…してもかまわない ◇（前略）be willing to は，自分から積極的になにかをしたいという意味を表しません。特に反対する理由もないので同調する場合に「‥してもかまわない」という意味で用いる表現です。強調する副詞の perfectly や quite をつけても，そのことは変わりません。 ・I'm（perfectly［quite］）willing to do that，but it may take several days．（それをしても別にかまわないけど数日かかりますよ） ◇「喜んで‥する」の意味は be ready［glad］to で表します。glad の方が「喜んで」の気持ちが強くなります。 ・I'm ready［glad］to drive you into town any time you want to go．（あなたが行きたい時にいつでも車で町までお送りします） ◇ただし，willing が名詞を修飾する場合，また副詞形の willingly や名詞形の willingness は，「喜んで」という意味を表します。	be ready/glad to との比較を通して積極的ではない意味で定義されている。
ジーニアス英和辞典	［be ～（for）O to do］（O が）…するのをいとわない，…してもかまわない ・She was willing to study hard to pass exam．（試験に合格するため彼女は猛勉強することをいとわなかった） ・I think that I would be willing for my husband to move on another job．（夫が別の仕事に移っても私はいいと思う） ◇ be ready to などと違い，自分から積極的にしたいというのではなく，特に反対する理由もないので同調の態度をとる時に用いる。ただし，willing が名詞を修飾する場合，また副詞形の willingly や名詞形の willingness は，「喜んで」という積極的な意味を持つ。	be ready to との比較を通して積極的ではない意味で定義されている。 副詞の willingly と名詞の willingness に関する言及もあり，それらは積極的な意味を持つと述べられている。
スーパー・アンカー英和辞典	（人が）…する用意がある；（be willing to do）（必要ならば）…するのをいとわない，…してもかまわない ・Many people are willing to pay a premium for quality．（良質のものには割増金を払うことをいとわない人が多い） ・I am willing to help you．（（おっしゃってくだされば）いつでもお手伝いします） ◇（1）be willing to do は通例必要なこと・頼まれたことなどを他人の希望に添うようにするときに「してもかまわない」という意味合いで用い，積極的な気持ちは希薄。（2）be ready to do はそのような場合にも，自発的に快くやる場合にも用いる。 ◇「喜んでお手伝いします」を（×）I'm willing to help you．という人がいる。willing は積極的な気持ちは表さず，手を貸すのが務めだから手伝う，くらいのニュアンスになる。ほんとうに「喜んで」という気持ちであれば，I'd be glad to help you．とする。	be ready to との比較を通して積極的ではない意味で定義されている。 「（おっしゃってくだされば）いつでもお手伝いします。」は「頼まれたり，必要であれば行う」といった受動的な意味に通ずる。

辞典名	willing の定義・be willing to の解説・例文	辞書から読み取れること
ライトハウス英和辞典	…するのをいとわない，…してもかまわない，…する用意がある ◇ be ready to…ほど積極的な気持ちはない ・If you'd like me to go with you，I'm quite willing.（もしいっしょに行ってほしいのならお供してもいいですよ） ・We were disappointed by the outcome of the election，but we're willing to accept it.（我々は選挙の結果に失望したがそれを受け入れる気だ）	be ready to との比較を通して積極的ではない意味で定義されている。
ルミナス英和辞典	…するのをいとわない，…してもかまわない，…する用意がある ◇ be eager to…ほど積極的な気持ちではない ・If you want me to go with you，I am quite 〜.（もし一緒に行ってほしいのなら行ってもいいですよ） ・We were disappointed by the outcome of the election，but we are 〜 to accept it.（我々は選挙の結果に失望したがそれを受け入れる気だ）	be eager to との比較を通して積極的ではない意味で定義されている。

以上，英和辞典でも英英辞典の時と同様に，be willing to に関してそれほど強い積極性はない記述となっている。積極的な気持ちを表したい場合は，be eager/ready/glad to の表現を用いるべきことが指摘されている。ただし，安井・安井（2022）の指摘と同様，willing が名詞を修飾する場合には積極的な意味を持つことを認めている辞書も存在する。

2.2　先行研究

本節では初めに be willing to に関して言及のある Palmer（1990），Westney（1995）を紹介する。その後 be willing to と関わりのある willingness に関して言及のある Leech（2011），be willing to の意味論的・語用論的研究である衛藤（2019）について概観し，最後に渡辺（2023）をみていく。

2.2.1　Palmer（1990）

Palmer（1990: 164）は be willing to が生じる複数の例を提示し，be willing to の機能について分析した。

（4）　He's very reluctant at the moment but when he realizes what it's for, he'll be willing to take part.

（Palmer 1990: 164　下線は筆者による）

（5）　... and that yes, of course, I would be willing to come into the common room.

（ibid.）

Palmer（1990）は（4）の例では will，（5）の例では would（would be willing to の代わりに）を

用いることが可能だと述べている。be willing to が用いられるのは will/would によって“volition”を単純に表すよりも，“willingness”という考えを正確に表現するためであると主張している。Palmer はモダリティにおいて，be willing to は will と関連があることを認めつつも，詳細な議論は行っていない。

2.2.2　Westney（1995）

Westney（1995: 204）は be willing to の意味が“willingness”という意味を明白に表し，will が表す“intention”とは異なると述べる。この点に関して Westney は複数の例を挙げながら対比を試みた。

（6）　He wasn’t willing to open the files, but he did so in the end.
（7）　* He wouldn’t open the files, but he did so in the end.
（Westney 1995: 204　下線は筆者による）

be willing to は willingness あるいは“readiness”という限定的な意味を表すというのが Westney の主張である。議論の前提となっている willingness については，意味は明白であるとして，Westney は具体的な定義づけをしていない。ただし，Westney は一貫して強い感情を示唆する will の対比として be willing to を挙げている。ゆえに Westney にとって，willingness はそれほど強い意志を表さないと考えていることが推察できる。これを踏まえると，（6）はそれほど強い意志ではなかったため，心変わりがして最終的に開けてしまったという解釈になるのであろう。

一方，（7）の例がなぜ非文であるかの説明について，Westney は wouldn’t が強い気持ちを示す will の否定過去形であるから，拒絶（refused to）を示すと主張する。つまり，拒絶するほどの強い気持ちがあるのに，それに反した行動をするというのは特別な文脈ではない限りは不自然であるということを主張したいのである。

2.2.3　Leech（2011）

be willing to に関する直接の言及はないものの，Palmer（1990），Westney（1995）と同様に Leech（2011）も intention や willingness に関して取り扱っている。Leech（2011: 87）は助動詞としての will の用法の中には volition と関係するものがあると主張し，それらを“insistence”（strong volition），“intention”（intermediate volition），“willingness”（weak volition）の 3 つに分類した。Leech は willingness の例として（8）のような例を挙げた。

（8）　a.　What will you pay me if I mend this radio?
　　b.　Jim’ll help you – he’s always ready to oblige a friend.
　　c.　Give it to the dog – she’ll eat anything.
　　d.　I’ll lend you some money, if you like.

（Leech 2011: 87）

Leech（2011）は intention が volition の中で最も一般的なタイプであるとし，weak volition（willingness）を quite common，strong volition（insistence）は rare という，頻度に関しての言及もおこなっている。ただし，上記３つの用法に関する具体例とそれに基づく統語的特徴に関しては述べられているものの，be willing to が同様に分類できるかは述べられていない。

Palmer（1990），Westney（1995），Leech（2011）までの議論で分かることは willingness という概念があることである。そして，Westney（1995），Leech（2011）では willingness が弱い意志を表すことが指摘されている。また，be willing to が表すのは willingness であることが，Palmer（1990），Westney（1995）で述べられている。これらのことから，be willing to が willingness という弱い意志を表すとまとめることができる。ただし，いずれの研究においても「willingness が表す弱い意志」とはどのようなものであるか，明確な定義はなされていない。

2.2.4　衛藤（2019）

Palmer（1990），Westney（1995）や Leech（2011）の議論を踏まえたうえで willingness の意味規定を試みた研究に衛藤（2019）がある。衛藤は Westney と同様に，be willing to の使用例を観察した。さらに，be willing to を語用論的に観察し，語法上の特徴も指摘した。

衛藤（2019：82）は be willing to に関する定義について調査し，Cambridge Advanced Learner's Dictionary の定義（９）と Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary の定義（10）を引用した。

（９）　to be happy to do something if it is needed

（10）　If someone is willing to do something, they are fairly happy about doing it and will do it if they are asked or required to do it.

（衛藤 2019：82　下線は衛藤による）

衛藤は（９）の下線部から，「もし客観的な要因によって必要が生じれば」（p.82）という意味であることがわかると主張している。また，定義（10）の下線部にある「もし依頼や規則などの客観的な外的要因があれば」（p.82）が（９）の下線部と同趣旨のことを指していると述べている。これらの解釈から，衛藤は willingness とは「話者が自らそうしたいと思っているわけではない」（p.82）ことであると主張した。また衛藤は（10）に関して，“fairly happy about doing it”の fairly を「文主語が好意的に感じていないことを表す」（p.82）と解釈した。（９），（10）の記述を踏まえ，衛藤は willingness が積極的意志をもって何かをおこなうというよりは，むしろ「自分としてはそうするつもりはないが，もし必要ならそうしてもよい」（p.82）という意味と同義であると見なした。

先行研究や上記の辞書の記述を踏まえ，衛藤は willingness を（11）のように規定した。

（11）　willingness とは，規則などによって生じる必要性や他者からの依頼など客観的な外的要因があるという条件下で，文主語がある行為を行おうとする意志，および，自分の意志に反して当該の行為を強制されないことを示す概念である。

衛藤（2019：82）

この裏付けとして，衛藤（2019）は（12）の実例を挙げた。（12）の下線部は，上記の（11）で規定した，条件等の外的要因にあたると衛藤は述べる。そのような外的要因があってある行為を遂行することを be willing to は表すと衛藤は主張する。

（12）　The firm was willing to pay a lot of money to avoid two things: further humiliation, and the spectacle of a trial that could cause serious financial damage.

（J. Grisham, *The street lawyer*；衛藤 2019：83　下線は衛藤による）

会社としては恥の上塗りになること，裁判沙汰になることを避けたいと考えていることがわかる。そのような外的要因から，大金を払っても構わないと会社は考えている。そのような要因さえなければお金を払おうなどと会社は微塵も考えていない点で，文主語の意志を表す will とは意味的に異なると衛藤は主張している。

ここまでの議論のまとめを図 1 によって示す。

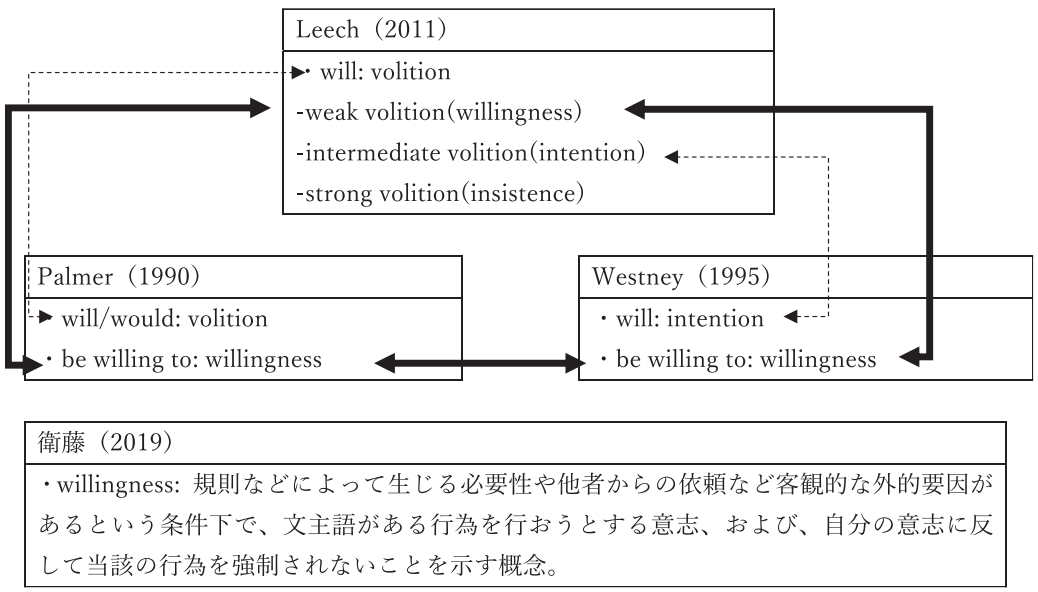


図 1　先行研究の関連性

実線の矢印からわかる通り，先行研究のいずれも willingness という概念を導入している。波線の矢印は will/（would）に関して Palmer と Westney の唱えた概念が，Leech の唱えた概念と関連していることを示している。そして，衛藤はそれらの先行研究に基づき，willingness の規定を試みた。

最後に 2.1 節で取り扱った辞書の記述との関係についてみていこう。be willing to が willingness を表し，それが強い積極性を示さないとする先行研究の考えは，2.1 節で示した英和辞典・英英辞典の記述と一致していることがわかる。

2.2.5　渡辺（2023）

渡辺（2023）は近代英語期に用いられた近接未来表現としての be ready to の用法を調査した。渡辺は研究の中で，ready and X to あるいは X and ready to というワードペアの形における共起語について調査した。通時コーパスである Corpus of Historical American English（COHA）を用い，ready and X to のパターンで最も多かったのは willing であることを明らかにした（300 例中 144 例）。また，語順を入れ替えた X and ready to の形式についても調査し，willing が最多であるものの（320 例中 23 例），他にも多種多様な形容詞が出現しているため，圧倒的優位性はないことも主張している。ただし，渡辺（2023: 139）は，Early English Books Online（EEBO）の調査では，いずれの形式においても willing が突出していることから，これらを慣用的コロケーションとみなせるほどであると評している。渡辺は複数の実例を挙げて，それらの例では ready と willing が全体として「〜する意志と用意がある」という意味になると論じている。willing and X to と X and willing to というワードペアの形における共起語についての調査は 3 節で取り扱う。

先行研究から be willing to は willingness を表し，それは強い積極性を持たないということが分かる。しかし，本当に be willing to は積極的な意味で用いることはできないのだろうか。be willing to の積極的な意味の可能性については 4 節で言及する。

3．量的調査

本稿ではコーパスによる検証を行う。世界英語のコーパスである，Global Web-Based English（GloWbe）で be willing to を検索すると，アメリカ英語で最も使用されることが分かる（be willing to の全用例数 77072 件のうち，アメリカ英語は 22728 件，次いでイギリス英語は 12946 件であった）。この結果を踏まえ，本研究では Corpus of Contemporary American English を（以下 COCA）使用する。COCA は現代アメリカ英語のコーパスであり，アメリカ英語に関する調査・研究において有益である（滝沢 2017：23）。

本節では実際に使用された用例を基に be willing to の語法について調査を行う。具体的には以下の点を検証する。

① COCA による全般的傾向

② COCA を用いた be willing to と共起する動詞，形容詞，副詞

③ COCA から得られた積極的な意味で用いられる be willing to の用例観察

3.1　コーパスによる全般的傾向

COCA 全体を通して be willing to の使用傾向について調べた結果を表 3 に示す。

表 3　COCA による be willing to の検索結果

SECTION	ALL	BLOG	WEB	TV/M	SPOK	FIC	MAG	NEWS	ACAD		1990-94	1995-99	2000-04	2005-09	2010-14	2015-19
FREQ	44324	8320	6673	4568	8080	2838	4893	5314	3638		5346	5038	4979	4651	4704	4613
WORDS (M)	993	128.6	124.3	128.1	126.1	118.3	126.1	121.7	119.8		121.1	125.2	124.6	123.1	123.3	122.8
PER MIL	44.64	64.69	53.70	35.67	64.06	23.99	38.81	43.65	30.37		44.14	40.24	39.95	37.80	38.14	37.58
SEE ALL SUB-SECTIONS AT ONCE																

COCA による be willing to の全用例数は 44324 件であった。ジャンルに関しては BLOG と SPOKEN での使用が多く，FICTION での使用が一番低かった。また，年代ごとの be willing to の使用に関しては，劇的な使用の増減は見られず，一定の使用例が見られた。

3.2　be willing to と共起する動詞

初めに be willing to と共起する動詞にはどのようなものがあるかを見ていこう。なお，全ての調査においてレンマ検索（すべての活用形を検索する方法。本稿の場合は，be willing to のすべての be 動詞のすべての活用形を検索する）を用いた。具体的には BE willing to VERB という検索式によって検索を行った。表 4 はその検索によって得られた，be willing to と共起する高頻度の動詞上位 20 番目までを表したものである。

表 4　be willing to と共起する高頻度の動詞（COCA）

pay	2824	help	582
take	2315	talk	579
give	1723	let	552
go	1445	risk	523
accept	1055	sacrifice	507
work	1035	try	432
make	1007	share	422
put	875	admit	391
bet	844	say	381
spend	635	listen	375

上記の検索結果だけでは be willing to と共起する動詞の特徴を見いだせなかったため，Collocates モードによる検索も行った。Collocates モードでは相互情報量の値の順で検索結果を表示することが可能である。相互情報量とは，中心語と共起語が互いに相手の情報をどの程度持っているかを示す値である（石川 2021：127）。検索手法は中谷編（2024：207–208）を参考にし，中心語を BE willing to，VERB を共起語に設定した。共起幅は右 3 語，SORTING は RELAVANCE とし，MINIMUM の項目で FREQUENCY を選択・チェックし，閾値は 100 とした。

表 5 は上述の検索結果に基づき，be willing to と共起する動詞を相互情報量の高い上位 20 番目までを並べたものである。

表 5　相互情報量に基づく be willing to と共起する動詞（COCA）

sacrifice	5.94	testify	4.82
bet	5.84	invest	4.79
concede	5.54	admit	4.73
tolerate	5.47	forgive	4.53
compromise	5.43	risk	4.33
accept	5.39	participate	4.25
negotiate	5.25	commit	4.04
cooperate	5.18	spend	4.03
pay	5.17	settle	3.89
overlook	5.10	listen	3.80

「犠牲にする」を表す sacrifice や risk，「譲歩する」を表す concede，「妥協する」を表す compromise など，一般的には進んで行わないと考えられる動詞と be willing to が共起していることがわかる。

3.3　be willing to と共起する形容詞の頻度

形容詞に関しては willing の後に形容詞が後続する場合（be willing and X to）と willing の前に形容詞がくる場合（be X and willing to）とに分けて検索を行った。まずは willing の後に形容詞が後続する場合の全検索結果を表 6 に示す。検索式は BE willing and ADJ to で検索を行った。『ライトハウス英和辞典』や『ジーニアス英和辞典』では，be ready to ほど積極的な気持ちはないとされ，be willing to と be ready to の態度の差が指摘されていたが，COCA の検索結果からは be willing to と be ready to が共起する場合が一定数あることが分かる。

他にも「熱心な」という積極的な意味を持つ eager や「喜んで」という肯定的な気持ちを示す happy が上位に位置しているのは興味深い点である。

次は形容詞が willing よりも先にくる場合の全検索結果について表 7 に示す。検索式 BE ADJ and willing to で検索を行った。

表 6　be willing to と共起する形容詞（COCA）

able	325	unafraid	2
ready	27	responsive	1
eager	18	grateful	1
happy	7	free	1
anxious	3	eligible	1
available	2	courageous	1
desirous	2	capable	1
likely	2	accustomed	1
unwilling	2		

表 7　be willing to と共起する形容詞（COCA）

ready	171	supportive	2	anxious	1	great	1
able	113	tough	2	approachable	1	happy	1
open	18	passionate	2	apt	1	hard-working	1
available	10	unarmed	1	articulate	1	hawkish	1
eager	8	unwilling	1	assertive	1	excited	1
interested	8	valuable	1	big	1	faithful	1
capable	6	vulnerable	1	bisexual	1	helpful	1
patient	5	welcoming	1	bookish	1	fun	1
honest	4	well-intentioned	1	calm	1	lazy	1
flexible	4	sympathetic	1	caring	1	literate	1
aware	4	tenacious	1	civil	1	living	1
desperate	3	proud	1	clever	1	mature	1
courageous	3	rational	1	contrite	1	mobile	1
comfortable	3	sophisticated	1	dependable	1	nice	1
knowledgeable	3	spontaneous	1	dishonest	1	hopeful	1
friendly	2	stoical	1	earnest	1	hypocritical	1
healthy	2	strong-willed	1	coachable	1	imaginative	1
eligible	2	receptive	1	active	1	immune	1
energetic	2	relaxed	1	compassionate	1	impartial	1
generous	2	responsive	1	competent	1	industrial	1
close	2	ruthless	1	concerned	1	patriotic	1
consistent	2	self-aware	1	conscientious	1	personable	1
adaptable	2	sensitive	1	conservative	1	positive	1
reasonable	2	afraid	1	considerate	1	pregnant	1
serious	2	alert	1	genuine	1	kind	1
single	2	alive	1	gracious	1	open-minded	1
proactive	2	amiable	1	grateful	1		

BE willing and ADJ to の時とは異なり，こちらの検索結果は共起する形容詞が分散していることが分かる。共通している点は ready，eager が上位に位置していることである。ready が一番多い頻度であること，つまり ready and willing のパターンが最も多かったことは渡辺（2023）の調査結果と一致する。

3.4　be willing to と共起する副詞の頻度

最後に be willing to と共起する副詞についてみていこう。副詞は文の様々な位置に存在することができるが，本稿では一般的な配置である be 動詞の直後に副詞が置かれる場合について調査した。得られた検索結果のうち，上位 20 番目までを表 8 に示す。検索式 BE ADV willing to で検索を行った。

表 8　be willing to と共起する高頻度の副詞（COCA）

more	912	now	132
perfectly	291	only	85
always	284	really	82
so	232	often	70
less	222	too	67
still	206	certainly	63
quite	165	actually	61
also	159	just	54
very	143	increasingly	46
even	140	as	44

more，perfectly，very など，be willing to の積極性を強化しているのではないかと考えられる副詞が上位に存在している。ただし，副詞の perfectly については，『アクシスジーニアス英和辞典』の解説で，強調する副詞の perfectly がついたとしても，「…してもかまわない」という意味は変わらないと述べられている。

4．質的調査（用例分析）

本節では 3 節の検索結果を基に，積極的な意味を持つ be willing to の用例がないかを観察する。紙幅の都合上，本稿では be willing to と共起する形容詞を取り上げる。用例内の下線は筆者による。

4.1　BE willing and ADJ to パターンの用例分析

まずは be willing and の後に desirous が来る用例を観察しよう。

（13）　Onesimus had withdrawn, to his master's injury; but now he had seen his sin and repented, he was willing and desirous to return to his duty.

（COCA, 2012, WEB）

オネシモという人物は自分の罪を鑑み，悔い改め自分の務めに戻ることを望んでいる。自身の欲求を表す desirous という形容詞との共起から，ここでの be willing to は積極的な意味を持つと考える。

次に be willing and の後に happy が来る用例を観察する。

（14）　The Kaczor-Setter wedding last Saturday in Port Huron, Mich., was literally one of convenience. Oh, make no mistake, the couple were willing and happy to be there - Cassandra Kaczor in full-length gown and carrying a bouquet of flowers, and groom Kerry Setter attired in a tuxedo. It's just that the setting wasn't exactly traditional. While guests looked on, they exchanged vows at a 7-Eleven store where she's an assistant manager.

（COCA, 1998, NEWS）

ここでは Kaczor と Setter の結婚式についての内容が述べられている。彼らの結婚式は伝統的なものではなく，新婦がアシスタントマネージャーとして働いているコンビニエンスストアで行われた。「間違えないでほしいのだが」との記述もあることから，結婚式を挙げるために彼らが望んでそのコンビニエンスストアにいると判断でき，be willing to が積極的な意味で用いられていると考えられる。

次に be willing and の後に eager が来る用例を観察しよう。

（15）　The Borders stores carry a nice range of musical periods, but the staff is not hired to tell you about them. On more than one occasion, the name "Brahms" drew looks of bewilderment, but at the same time they were willing and eager to jump on their computers to provide further assistance.

（COCA, 2007, NEWS）

ここでは The Borders という店に関する話である。そこでは幅広い時代の音楽を扱っているが，雇われている店員はその時代の話ができるわけではない。客にブラームスについて尋ねられて

困ってしまったスタッフだが，すぐさまコンピューターで調べてくれたことが書かれている。店員のサービスのよさを表す文脈なので，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

ここからは be willing and の後に ready が来る用例を観察する。

（16） The company is one that boasts amazing customer support that is willing and ready to help you out no matter what day or what time it is.

（COCA, 2012, BLOG）

ここではある会社について述べられている場面である。書き手は，素晴らしい顧客サポートを有する会社であると記述しており，その会社のことを肯定的にみていることが伺える。ここから，書き手はいつでも顧客を助ける用意がある会社の積極性を評価していると判断できるだろう。よって，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

4.2 BE ADJ and willing to パターンの用例分析

ここからは BE ADJ and willing to パターンの用例分析を行う。まずはは（be） willing to の前に desperate が来る例を見る。

（17） For many patients, the bulk of their meals consists of grains（like pizza dough or crackers）, cheese, fatty meats and sugar. Unless they suffer from severe conditions, and are desperate and willing to try just about anything, sticking to paleo can be a stretch.

（COCA, 2010, NEWS）

ここではパレオダイエットに関する話がなされている。多くの患者にとって，食事の大部分は穀物，チーズ，脂肪の多い肉，砂糖で構成されており，彼らが深刻な健康状態に苦しんでいて，何でも試してみようとする気にならない限りはパレオダイエットにこだわることは困難なものであることが述べられている。多くの患者にとっては何でもしようとする強い気持ちがなければパレオダイエットは難しいという解釈ができるので，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

次に，（be） willing to の前に supportive が来る例を見る。

（18） “Why are people asking us to teach their children under these circumstances?” Despite the shortages, teachers agree that things are better at Washington than at many other schools. They say their administration is supportive and willing to fight for its teachers, to get them as many

materials as are available.

（COCA, 1992, NEWS）

ここでは学校が抱える問題に関する話がなされている。教材の不足が深刻な中，ワシントンの学校は他の学校よりは比較的良いことが述べられている。学校の運営陣が協力的であり，可能な限り多くの教材を手に入れようと教師のために戦ってくれていることが述べられている。学校の運営陣が教師のために動いていることが分かるので，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

今度は，（be）willing to の前に energetic が来る場合を見てみよう。

（19）In November 1999, the paper promoted Mr. Blair to intermediate reporter, the next step toward winning a full-time staff position. While reporting on business for the metropolitan desk, editors say, he was energetic and willing to work all hours.

（COCA, 2003, NEWS）

ここではブレアなる人物が昇進し，正社員採用への一歩を踏み出したことが述べられている。編集者たちは，彼が精力的で，いつでも働ける姿勢を示していたと述べている。昇進や正社員採用という背景を踏まえると，ブレアは長時間働く意欲があることをアピールしようとしていたことが伺え，それを編集者たちも感じ，そのような態度を評価していたことがわかる。よってここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

次に，（be） willing to の前に helpful が来る例を見る。

（20）When I recovered from my injuries, they permitted me to stay. I was helpful and willing to work, and I soon became a familiar figure in the monastery. They gave me a new name, and set me simple tasks, which I willingly performed. And the years passed. I found serenity in my new life. My memory did not return, but my mind cleared, and I began to read and engage in discourse with the monks.

（COCA, 2003, FIC）

ここでは I なる人物が修道院にいる場面である。I が怪我から回復したときも，they なる人物たちはそこにいることを許した。I はそこで役に立とうと，仕事をしたことが述べられている。I なる人物が修道院に対する恩義から役に立とうとしていたことが伺えるので，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

ここでは（be）willing to の前に amiable が来る例を見る。

（21）“My mother is the musician,” Nachef says. “She is a glorious soprano – so the love of music came from her.” When Nachef’s parents married, her father gave her mother a piano. “She always had a gorgeous voice,” Nachef continues. “And so, when she had me, she said she’d like to fulfill her dreams, as a musician, in me. “She smiles.” And I guess I was amiable and willing to do that.”
（COCA, 2014, NEWS）

ここではナシェフなる人物とその母に関する話がなされている。ナシェフの母は音楽家としての夢をナシェフを通して実現したいと言っていたことが明かされている。音楽への愛が母親によるものであることと，母親の願いに対して自分がどのように応えたかを笑顔で語っていることから，ナシェフがそれを喜んで実現しようとしたことが判断できるだろう。よって，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

次に（be）willing to の前に strong-willed が来る例を見る。

（22）The second group are those people who want to go to the timeshare sales pitch only for the benefits, willing to give up a couple hours of time for free tickets to Disney, a show, or hotel nights. They are strong-willed and willing to deal with high-sales pitches and will say no whatever the reason.
（COCA, 2012, WEB）

ここではタイムシェアのセールスピッチに関する話がなされている。グループの人々は特典のためだけにセールスピッチに行きたいと思っており，売り込みについては毅然とした態度で断ることが strong-willed から判断できる。したがって，ここでの be willing to は積極的な意味で用いられていると考えられる。

5．まとめ

本稿では，辞書や先行研究ではあまり積極性を表さないとされる be willing to について，コーパス（COCA）に基づく分析を行った。具体的には，be willing to と共起する動詞・形容詞・副詞の頻度について量的な調査を行った。また，本稿では質的調査として，be willing to が積極的な意味で用いられていると客観的に判断できる，be willing to と共起する形容詞の用例を抽出し，考察した。無論，これは辞書や先行研究の記述を否定するものではない。しかしながら，これまで be willing to に強い積極性はないとの指摘で留まっていた従来の記述を再考する意義を示せたと考える。

今後は be willing to の一般的な用法とされるものに対してどの程度の割合で積極的な用法が

存在するかなど，さらなる調査に努めていきたい。

（いけだ　ひろたか・言語科学研究室）

参考文献

Leech, G.（2011）*Meaning and the English Verb*.（3rd ed.）Tokyo: Hituzi Syobo.

Palmer, F. R.（1990）*Modality and the English Modals*.（2nd ed.）London: Longman.

Westney, P.（1995）*Modals and Periphrastics in English: An investigation into the semantic correspondence between certain English modal verbs and their periphrastic equivalents*. Tubingen: M. Niemeyer.

石川慎一郎（2021）『ベーシックコーパス言語学 第 2 版』東京：ひつじ書房.

衛藤圭一（2019）「Be willing to に関する意味論的・語用論的一考察」赤野一郎先生古希記念論文集委員会編『言語分析のフロンティア』pp.80–91. 東京：金星堂.

キャサリン・A・クラフト（2016）『先生，その英語は使いません！』東京：DHC.

滝沢直宏（2017）『ことばの実際 2　コーパスと英文法』東京：研究社.

中谷健太郎編（2024）『パソコンがあればできる！　ことばの実験研究の方法
容認性調査，読文・産出実験からコーパスまで 第 2 版』東京：ひつじ書房.

辞典

COBUILD[10] =*Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary*, 10th edition（2023）, London: Longman.

LDOCE[6] =*Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th edition（2014）, London: Longman.

MWALED=*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*（2008）, Incorporated Springfield, Massachusetts: Merriam−Webster.

OALD[10] =*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 10th edition（2020）, Oxford: Oxford University Press.

OED=*Oxford English Dictionary*（https://www.oed.com/）

竹林滋（2005）『ルミナス英和辞典 第 2 版』東京：研究社.

竹林滋・東信行・赤須薫編（2012）『ライトハウス英和辞典 第 6 版』東京：研究社.

中邑光男編（2019）『アクシスジーニアス英和辞典』東京：大修館書店.

南出康世編（2022）『ジーニアス英和辞典 第 6 版』東京：大修館書店.

安井稔・安井泉（2022）『英文法総覧 大改訂新版』東京：開拓社.

山岸勝榮編（2021）『スーパー・アンカー英和辞典 第 5 版［新装版］』東京：学研プラス.

コーパス

COCA=*Corpus of Contemporary American English 1990-2017*, Brigham Young University, U.S.A.（Mark Davies）.

GloWbe=*Global Web-Based English*, Brigham Young University, U.S.A.（Mark Davies）.

10.14943/rjgshhs.25.l 147

数量詞の付加に伴う限界性解釈による動詞の分類

張　　琴琴

要　旨

本論は，数量詞の付加に伴う限界性解釈の変化という観点から，日本語動詞の新たな分類体系を提案するものである。従来ほとんど注目されてこなかった開始限界を取り入れ，動詞には開始限界と終了限界という２つの限界が存在すると想定する。その上で，従来の限界動詞・非限界動詞の二分法に代わり，両限界の有無に基づく理論上の４類型を設定する。さらに，数量詞の付加が限界性（telicity）の解釈を変化させる可能性を分析し，この４類型が理論上９類型まで拡張できることを示す。各類型について，成立可能性・文脈依存性を詳細に検討し，数量詞が動詞のアスペクト的特性に及ぼす多様な作用を明らかにした。

１．はじめに

限界性とは，ある種の動詞は必然的な終了点を有する出来事を表す。「（洗濯物が）５分で乾いた」などの場合，５分でその終了点に達したといえる。このような点を，限界点（telic point）といい，限界点を持つ動詞を限界動詞（telic verb），持たない動詞を非限界動詞（atelic verb）という（『日本語学大辞典：18』）。数量詞の付加によって動詞に限界性が生じる現象は，北原（1998），畠山（2008），加藤（2010），三原（2022）などの先行研究において論じられている。張（2025）では，動詞は本来的に，開始限界と終了限界の両方を有するもの，いずれか一方のみを有するもの，あるいは限界性を欠くものという４分類に整理されると指摘した上で，数量詞の付加によって，動詞の限界性解釈が当初の４分類から最大で６分類に拡張可能であることを示している。ただし，同研究においては，その拡張に関する詳細な分析は未だ十分に行われていない。

本論では，張（2025）の指摘を踏まえ，特に他動詞に焦点を当てつつ，数量詞の付加に伴う限界性解釈の変化を手がかりに，日本語動詞の新たな分類体系の構築を試みる。

2．先行研究

従来，日本語の動詞は限界性の観点から限界動詞と非限界動詞に分類されてきた（工藤 1995，金水 2000 など）。数量詞との共起による限界性の分析は，北原（1998）および三原（2022）が取り上げられる。また，数量詞などを用いて動詞の限界性を判定する試みとして，畠山（2008）の研究が挙げられる。

北原（1998）は，主として語彙意味論の立場から，移動動詞と数量表現との共起関係を検討した。数量詞を意味的に位置変化量を表す数量詞と期間を表す数量詞に区別し，それぞれが限界動詞（来る・行く・戻るなど）および非限界動詞（歩く・走る・飛ぶなど）とどのように共起可能かを分析している。例を以下に示す。

（1）　太郎が 200 m 歩いた。　（位置変化量 Q＋非限界 V）[1]
（2）　太郎が仙台駅まで 200 m 歩いた。　（マデ＋位置変化量 Q＋非限界 V）
（3）　花子が 100 m?* 入った／??行った／?戻った。　（位置変化量 Q＋限界 V）
（4）　花子が大学まで 2 km 戻った。　（マデ＋位置変化量 Q＋限界 V）
（5）　??花子が仙台駅まで 1 km 行った。　（マデ＋位置変化量 Q＋限界 V）
（6）　太郎が 1 時間歩いた。　（期間 Q＋非限界 V）
（7）　太郎が駅まで 1 時間歩いた。　（マデ＋期間 Q＋非限界 V）
（8）　??太郎が 1 時間駅まで歩いた。　（期間 Q＋マデ＋非限界 V）
（9）　花子が 1 時間?* 行った／??戻った。　（期間 Q＋限界 V）
（10）　??花子が家まで 1 時間戻った。　（マデ＋期間 Q＋限界 V）
（11）　*花子が教室まで 1 時間戻った。　（マデ＋期間 Q＋限界 V）

北原（1998：17–19）

これらの例に基づき，北原（1998）は数量詞の意味区分と移動動詞の共起可能性との関係を整理している。しかしながら，例えば「花子が家まで 1 時間で戻った」のように，期間を示す数量詞の後に格助詞「で」が付加されることで，文の自然さが著しく向上するという現象は，北原（1998）の理論的枠組みでは十分に説明されていない。

また，畠山（2008）は，「期間句テスト」，「V かけの」テスト，「てある」テスト，「ひと V する」テスト，「ついさっき」テスト，「いつ」テストという従来存在する複数のテストを指摘した上で，「てある」テストと，「ひと V する」テスト，「いつ」テストを組み合わせることで限界性をより正確に判定できると主張している。例を以下に示す。

[1] 各例文に続く説明は，すべて筆者によるものである。

（12） a. 花瓶を割ったのはいつ？／シチューを作ったのはいつ？
b. ??花瓶をひと割りする／??シチューをひと作りする

畠山（2008：36）

畠山（2008）によれば，「いつ」テストを単独で用いる場合，動詞の限界性が誤判定されることがあるという問題点を指摘している。例えば，（12a）に示される文では，「花瓶を割ったのはいつ？」や「シチューを作ったのはいつ？」といった表現は，発話時点での動作の進行を示すものではなく，むしろ完了した事態を指しているにもかかわらず，「いつ」テストの結果としてこれらの動詞が非限界動詞に分類される可能性がある。これに対し，「ひと V する」テスト（12b）は，こうした誤判定を回避する役割を果たしているとされる。すなわち，「ひと割りする」「ひと作りする」といった表現は，動詞の限界性をより的確に反映し，非限界動詞と限界動詞の識別を促進する効果を有する。ただし，必ずしも「ひと V する」テストを用いなくとも，「花瓶を 1 つ割った（ている）」のように数量詞を付加するだけで，「割る」という動詞が非限界動詞ではなく限界動詞として判定可能であると考えられる。これは，数量詞の付加が動詞の限界性解釈に直接的な影響を与え得ることを示唆しており，限界性の判定における重要な手がかりとなると考えられる。

さらに，三原（2022）は動詞の他動性に着目し，数量詞連結が可能か否かについて，日本語の動詞を「①強影響動詞」，「②弱影響動詞」，「③非影響動詞」，「④反影響動詞」という 4 種類に分類している。具体的には以下のような例が挙げられる。

（13） 彼はレンガを花壇に 6 つ積んだ。（強影響動詞）
（14） 僕は英単語を試験に備えて 200 個暗記した。[2]（弱影響動詞）
（15） ?校長先生は生徒を朝礼で 2 人誉めた。（非影響動詞）
（16） *菜穂子は親友をそれでも 2 人信じた。（反影響動詞）

三原（2022：90–92）

三原（2022）によれば，①の強影響動詞は必ず明確な終了限界を有しており，その限界点において動作の結果としての状態変化や位置変化が生じるとされる。一方，②の弱影響動詞および③の非影響動詞は，アスペクト的な性質において差異が認められ，これらは①の強影響動詞と④の反影響動詞との中間的な位置付けにある。特に④の反影響動詞は，明確な終了限界を欠くことが特徴である。また，三原（2022）は動詞の限界性を判定するための有効な手法として，

[2] 原文では「僕は英単語を試験に備えて 200 暗記した」となっているが，数量詞「200」の後に「個」が省略されていると考えられる。ここでは明確化のため「200 個」と補った。

「〜で」（完了点を示す）と「〜（の）間」（持続を示す）を用いたテストを提案している。具体的な例を以下に示す。

（17）　小屋を ｛2 時間で/* 2 時間の間｝ 壊した。　（限界動詞）
（18）　同僚を ｛* 2 年間で/ 2 年間｝ 信じた。　（非限界動詞）
三原（2022：93）

これらの先行研究を踏まえると，動詞の限界性は共起する目的語にも影響を受けるが，「〜で」や「〜間」を伴わずとも，数量詞の付加によって限界性が付与される場合があることが示唆される。そこで本研究では，数量詞の付加によって動詞の限界性が変化・付与される現象に焦点を当て，この観点から日本語動詞の分類を試みる。

3．理論的なパターン

張（2025）は，動詞の中には終了限界だけでなく，開始限界を持つものがあることを指摘している。本論もこの立場を採用し，開始限界と終了限界という 2 つの観点から，日本語動詞の理論的パターンを以下のように整理する（「○」は限界を有することを，「—」は限界を欠くことを示す）。

表 1　動詞の理論的なパターン

		①	②	③	④
理論的なパターン	開始限界	○	○	—	—
	終了限界	○	—	○	—

しかし，張（2025）では，どの動詞がどのパターンに属するかについての具体的説明が見られない。そこで本節では，各パターンの特徴と例を挙げながら，その理論的背景を説明する。まず，パターン①は，開始限界と終了限界の双方を備える動詞である。

（19）　ケーキを作った。
（20）　レポートを書いた。
（21）　リンゴを食べた。
（22）　コーラを飲んだ。

張（2025）の分類によれば，「作る」「書く」は作成動詞に含まれる。この種の動詞は，動作

の遂行によって，それまで存在しなかった対象物が新たに生成・出現する事態を表す。すなわち，動作主が作業を開始し，一定の過程を経て終了することによって，初めて対象物が具現化するというプロセスを持つ。したがって，「作る」「書く」には，行為の開始時点と終了時点の双方が明確に設定されており，開始限界と終了限界の双方を備えると考えられる。

これに対し，「食べる」「飲む」は消滅動詞に分類され，既に存在している対象物が動作の遂行によって消失する事態を表す。この場合も，動作の開始点と終了点が時間的に特定可能であるため，両限界を有する点で作成動詞と共通する性質を持つと考えられる。

次に，開始限界のみを有するパターン②について検討する。

（23） ゲームを始めた。

「始める」という動詞は，その語彙的意味からして，ある行為や活動の開始を明示的に表すものであり，開始限界を本来的に備えていると言える。しかし，例（23）からは，その後の活動がいつ終了したのかについては何ら情報が与えられていない。言い換えれば，「始める」という行為の遂行は確認できるものの，その後の進行過程や終了時点は文中で特定されない。したがって，この動詞は終了限界を欠き，開始限界のみを有する動詞として位置づけられる。

続いて，終了限界のみを有するパターン③について検討する。

（24） ゲームを終えた。

「終える」という動詞は，その語彙的意味からして，ある行為や活動の終了点を明示的に表すものであり，終了限界を本来的に備えている。この限界は，事態が進行している最中では成立せず，あくまで完了時点で初めて確定するものである。したがって，例（24）においても，「ゲーム」が既に終了していることは明確である。しかし，この文からは，その活動がいつ，どのような経緯で開始されたのかは読み取れない。言い換えれば，終了時点に関する情報は明示されている一方，開始時点に関する情報は不明確である。これは，パターン②の「始める」との対照をなす関係であり，両者は意味的に逆方向の限界性を有する動詞であると言える。さらに語用的観点から見ると，「終える」は多くの場合，行為の進行過程を含意するため，文脈によっては開始点の存在が暗示される場合がある。しかし，その開始点は必ずしも文法的にコード化されておらず，発話者が明示しない限り特定できない。この点で，「終える」は開始限界を持たず，終了限界のみを持つ動詞として位置づけられる。

最後に，開始限界と終了限界のいずれも持たないパターン④について検討する。具体例を以下に示す。

（25）　犯人を疑った。

（26）　恋人を思う。

三原（2022）によれば，「疑う」は反影響動詞に分類され，限界性を持たない動詞の典型例とされる。また，張（2025）では，「思う」や「疑う」を「その他の動詞」として位置づけている。これらの動詞は，事態の開始点や終了点が時間的に特定できないという共通の性質を有する。例えば，（25）の「犯人を疑った」からは，その疑念がいつ生じたか，あるいはいつなくなったかを特定することはできない。同様に，（26）の「恋人を思う」においても，その思考や感情が始まった時点や終わった時点は文脈上明示されない。意味的には，これらの動詞は心理的な状態や態度を表し，しばしば一定期間持続する事態を記述する。しかし，その持続は外的要因によって明確に区切られる性質を備えていないため，開始限界も終了限界も言語的にコード化されない。この点で，パターン①～③の動詞がいずれかの限界性を必ず備えているのに対し，パターン④の動詞は限界性を全く欠くという点で際立っていると考えられる。

4．数量詞付加によるパターン

張（2025）は，数量詞によって動詞の限界性解釈は本来の 4 通りから 6 通りまで増やすことが可能であると指摘している。しかし，限界性が具体的にどのように変化し，6 通りはどのように発生するかについて論じられていない。本論は，張（2025）と異なり，4 通りから 6 通りまで増やすのではなく，理論上 9 通りまで増やすことが可能であると考えられる。そのため，数量詞の付加によって，以下の 9 通りになると仮説する（「○」は本来の限界を表し，「●」は数量詞付加によって生じる限界を表し（あるいは限界性を明確させる），「—」は限界を欠くことを示す）。

表 2　数量詞の付加によるパターン

数量詞の付加によるパターン		①	②		③		④			
		①	②	A	③	B	④	C	D	E
	開始限界	○	○	○	—	●	—	—	●	●
	終了限界	○	—	●	○	○	—	●	—	●

4.1　パターン①

本節では，具体例を通じて前節で示した 9 通りのパターンが実際に存在し得るか否かを検証する。まず，パターン①に該当するのは，開始限界および終了限界を本来的に持つ動詞である。この種の動詞においては，数量詞を文中に付加した場合でも，限界性の解釈に本質的な変化は

生じないことが確認される。具体例を以下に示す。

（27） カップケーキを 5 個作った。
（28） みかんを 3 個食べた。
（29） イノシシを 2 頭殺した。

まず，（27）の例において，数量詞「5 個」を付加しても動詞「作る」の限界性解釈に変化は見られない。これは，「作る」という動詞が，生成の完了という終点を本来的に含意する作成動詞であり，数量詞がなくとも自然かつ明確な終了限界を有しているためである。一般に，数量詞は限界性を持たない動詞に対して量的な終点を付与し，その結果として限界性を生じさせる機能を担う。しかしながら，既に開始限界および終了限界を備える動詞においては，数量詞の役割は新たな終了点を作り出すことではなく，既存の終了点を数量的に具体化し明示するにとどまる。具体的には，カップケーキを作り始めた時点で開始限界が成立し，5 個すべてを作り終えた時点で終了限界が確定するという構造が成立するため，数量詞の付加は限界性の有無を変化させるのではなく，その限界の範囲を数量的に明示化する役割を果たすと言える。

一方，（28）の例における動詞「食べる」は，消滅動詞の典型例である。前節で論じたように，「食べる」という動詞は対象の消失および摂取の完了を本来的に含意しており，数量詞を伴わなくても自然な終点を持つ。したがって，「みかんを 3 個食べた」のように，数量詞「3 個」を付加したとしても，限界性の解釈に本質的な変化は生じない。このことは，消滅動詞が本質的に限界性を内包するため，数量詞によって新たに限界性が付与されるわけではないことを示唆している。

しかし，張（2024）で指摘しているように，「みかんを 3 個食べている」のような「テイル」を伴う文では，本来完了用法を表す「テイル」においても，終了した動作の量によって変化していくことになる。すなわち，数量詞が逐次追加されるにつれて，全体的なアスペクト解釈も変化する。この場合，みかんの総数が明示されていないため，動作主体は理論的には無限に動作を継続することができる。その結果，動作の最終的な終了点（終了限界）を確定できなくなる。つまり，文脈によって（28）の終了限界が不明確になる可能性がある。

4.2 パターン②

パターン②に該当するのは，開始限界のみを有する動詞である。典型例としては，「始める」のように語彙的意味から明確に事態の開始を表す動詞が挙げられる。この種の動詞が数量詞と共起した場合，以下のような用例が観察される。

（30） ゲームを 2 つ始めた。

（30）の文は，同時に 2 つのゲームに着手した状況を表すと解釈できる。数量詞を伴わない「ゲームを始める」という表現は，行為の開始直前の局面を指し，過去形の「ゲームを始めた」は，その開始限界を越えた直後の局面を表す。一方で，語彙的特性上，この動詞は事態の終了については何ら含意しないため，終了限界は設定されない。したがって，「始める」は開始限界のみを持つ動詞であると言える。数量詞を付加した場合でも，事態は依然として開始点のみを越えた段階にあり，この限界性の解釈は変化しない。ただし，数量詞の付加により，開始の対象が複数であるという情報が新たに付与され，出来事の量に関する解釈が具体化される。つまり，パターン②－②においては，数量詞の有無にかかわらず，限界性解釈がそのまま維持されるため，無標であると考えられる。

一方で，理論的には数量詞の付加によって新たに終了限界が付与されるタイプ，すなわちパターン②－A の存在も想定し得る。しかし，日本語の動詞を概観した限りでは，この条件に適合する明確な例は確認できなかった。これは，日本語の開始限界を持つ動詞が本質的に終了点の含意を持たないため，数量詞の付加のみでは終了限界を設定できないことを示唆する。

4.3　パターン③

パターン③は，パターン②とは対照的に，終了限界のみを有する動詞を指す。終了限界のみを有する動詞の代表例として，「終える」が挙げられる。この動詞は語彙的に事態の終了点を意味し，開始点については何ら含意しない。このタイプの動詞に数量詞を付加した場合，開始限界が新たに付与されない場合と，付与される場合の双方が理論的に想定される。本節では，その可能性を検討するため，以下の具体例を挙げながら説明する。

（31）　レポートを 3 本終えた。

（31）で述べられているのは事態の終了点を越えたことのみであり，開始限界は明示されない。数量詞「3 本」を加えた（31）は，開始限界を語彙的に付与するわけではなく，単に終了した対象の数を明示しているにすぎない。しかし，文脈によっては数量詞が提供する量的情報から開始点が推論される場合がある。

（32）　今日はレポートを 3 本終えた。

この場合，聞き手は「3 本すべてを完了するために，それぞれを最初から着手した」という推論を行う可能性がある。このような解釈は，語彙的アスペクトによるものではなく，数量詞が提供する量的情報と世界知識に基づくアスペクトによるものであると考えられる。したがって，数量詞が直接的に開始限界を付与するわけではなく，あくまで話し手・聞き手の認知的推

論を媒介として間接的に開始の存在が想定されるにとどまる。

また，「仕上げる」も「終える」と同様に，終了限界のみを持つ動詞の典型例である。

(33)　プロジェクトを１つ仕上げた。
(34)　今月は１つのプロジェクトを仕上げた。

(33) は，プロジェクトが完成し終了点を越えたことのみを表し，開始点に関する含意は語彙的に存在しない。数量詞「１つ」は，完了した対象の数を明示する役割にとどまる。つまり，数量詞は動作の終了による達成量として解釈できる。一方で，(34) は「今月は」という時間を表す文脈情報が付加されることにより，聞き手は「１つのプロジェクトを完成させるにあたり，最初から取りかかった」という推論を行う可能性がある。そうなると，文脈依存的な推論を介して開始限界が間接的に想定されると考えられる。

したがって，パターン③においては，数量詞のみの付加ではパターン③－③の解釈に限られるが，時間を表す文脈を付与することで，パターン③－B の解釈も成立し得ると言える。ただし，このような最小限の文脈で成立する事例もあれば，十分な文脈を付与しても成立しにくい事例も存在し，その実態は単純に整理できるものではないと考えられる。そのため，今後は，文脈の種類や付与の程度と解釈成立との関連を，語用論的観点からより精緻に検討する必要がある。

4.4　パターン④

本パターンでは，数量詞の付加によって理論上動詞の限界性解釈が，パターン④－④（開始限界・終了限界ともに欠如），パターン④－C（終了限界のみ持つ），パターン④－D（開始限界のみ持つ），およびパターン④－E（開始限界・終了限界の双方を持つ）の４類型のいずれかに変化し得る可能性が想定される。以下では具体例を示しつつ，その可能性を検討する。

(35)　友達を２人殴った。
(36)　私はクラスメートを２人疑った。

「殴る」は瞬間的な物理的行為を表す動詞であり，本来非限界動詞に属する。このため，数量詞を付加すると，「殴った対象が２人である」という量的情報が付与されるが，事態の開始限界や終了限界が文中で明示されるわけではない。特に，殴るという動作が同時に行われたか，時間的に間隔をあけて行われたか，またそれぞれの行為がどの時点で開始・終了したかは不明であり，限界性の解釈は不確定のままである。

一方で，「疑う」は継続的な心理的状態を表す動詞であり，非限界動詞に属する。この種の動

詞に数量詞「２人」を付加しても，対象化されるのは「疑い」という心理状態が向けられる相手の数であり，事態の開始限界や終了限界が自動的に付与されるわけではない。たとえば (36) の場合，２人を同時に疑い始めたか，異なる時点で順次疑いの対象となったかは文脈からは明確でなく，時間的範囲や限界性の構造は依然として曖昧なままである。

このように，「殴る」のような瞬間動詞においても，「疑う」のような心理動詞においても，数量詞の付加は事態の量的情報を明示する役割を果たすが，開始限界や終了限界といったアスペクト的区切りを語彙的に付与する機能は持たない。したがって，この場合は，数量詞を付加しても限界性解釈に変化が生じないパターン④－④に分類される。

(37) スーパーでぬいぐるみを１つ買った。

数量詞「１つ」を付加した (37) の場合，「買った対象の数量が１つである」ことを明示するにとどまり，開始限界が新たに付与されるわけではない。つまり，「ぬいぐるみの購入」という出来事の終了点は数量詞によって明確になっているが，購入のための準備行為（店に行く，選ぶ，支払う前の状態など）がいつ開始したかは，数量詞からは特定できない。したがって，パターン④－C に分類することができると考えられる。ただし，「今日，ぬいぐるみを１つ買った」のように，時間という情報が付与される場合，聞き手は「その日に購入行為を開始した」という推論を行う可能性がある。この場合の開始限界は，数量詞そのものの意味効果ではなく，文脈的に付与されるものになる。そうなると，パターン④－E に分類することも可能である。

一方で，理論的には数量詞の付加によって新たに開始限界が付与されるタイプ，すなわちパターン④－D の存在も想定し得る。しかし，日本語の動詞を概観した限りでは，この条件に適合する例は確認することができなかった。これに対し，パターン④－E については，以下の例文を通じて分析を行う。

(38)　家で映画を２本見た。
(39)　言語学の本を２冊読んだ。

「見る」や「読む」は，行為が一定の持続期間を伴う動詞に分類される。これらの動詞に数量詞を付加した場合，複数の対象物に対して行為が行われたことを示す量的な情報が付与されるものの，実際に開始限界や終了限界を明確にするには至らない。(38) において，「映画を２本見た」という場合，それぞれの映画の視聴開始点や終了点は明示されず，また連続して視聴したか，時間的に間隔を置いて視聴したかも文脈依存である。同様に，「言語学の本を２冊読んだ」という場合も，読書行為の開始および終了限界は数量詞によって決定されるものではなく，複数の読書対象の存在を示すにとどまる。

しかし，例えば以下の（40）のように時間的範囲を示す文脈を追加すると，限界性解釈に変化が生じる。（40）では，「昨日の夜」という時間範囲があるため，その時間範囲内で２本の映画を連続して見た可能性が高い。視聴の開始・終了点は「昨日の夜」という時間範囲に収まり，開始限界および終了限界が明確に設定されやすいと考えられる。一方，（41）のように「昨日の昼休み」といった時間では，映画を２本視聴するには十分な時間幅が想定できず，その解釈には違和感が生じる。この差異は，文脈的知識（例えば，映画１本は約２時間，昼休みは約１時間，夜の自由時間は６～７時間程度など）に基づく推意の成立によるものである。

（40） 昨日の夜，家で映画を２本見た。
（41） # 昨日の昼休み，家で映画を２本見た。

さらに，（42）の例では解釈が異なる。複数の映画視聴が述べられているものの，２本目の映画は視聴が途中で終了しており，完了していないことが明示されている。この情報の追加によって，通常成立する「２本すべて視聴した」という数量詞「２本」の強い推意は無効化される。具体的には，１本目の映画は視聴が完了したと推定される一方，２本目は終了点を越えていないため，終了限界を持たない部分的な行為であることが示される。このような場合，数量詞「２本」が示す対象の数自体は変わらないが，対象ごとの限界性は異なるため，動詞句全体のアスペクト的解釈は多層的になる。

（42） 映画を２本見たが，２本目は途中までしか見られなかった。

要するに，パターン④－Ｅとして成立するためには文脈が必要であり，文脈によって限界性の解釈が変化することがあると言える。

５．まとめ

本論では，数量詞が日本語動詞の限界性解釈に及ぼす影響について詳細に検討した結果，数量詞は単なる数量の明示にとどまらず，動詞に新たな開始限界や終了限界を直接または間接的に付与し得ることが明らかになった。分析の結果を表３に示す。

表 3

数量詞の付加によるパターン		①	②		③		④			
		①	②	A	③	B	④	C	D	E
	開始限界	○	○	○	—	●	—	—	●	●
	終了限界	○	—	●	○	○	—	●	—	●
成立可否		成立	成立	不成立	成立	文脈必要	成立	成立	不成立	文脈必要

※ここで言及する「文脈必要」とは，解釈成立に不可欠な最小限の文脈を前提としている。

表 3 が示すとおり，これら 9 類型のうち自然な用例として確認できたのは 7 種類であり，残り 2 種類（②－A, ④－D）は成立例が見られなかった。また, 成立する 7 種類のうち 2 種類（③－B, ④－E）は，数量詞単独では限界性が付与されず，文脈情報が必要となることが確認された。このように，数量詞付加は動詞の限界性解釈に多様な変化をもたらすが，その効果は動詞タイプと文脈条件によって大きく左右されることが分かった。

しかし，本論は主として他動詞を中心に分析を行ったため，自動詞における数量詞付加の効果については十分に検討できていない。今後は，自動詞を含む多様な動詞類型を対象に，数量詞付加が限界性解釈に及ぼす影響を体系的に明らかにする必要がある。

（ちょう　きんきん・言語科学研究室）

参考文献

加藤重広（2010）「外的アスペクトと内的アスペクト」北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座（編）『言語研究の諸相 研究の最前線』北海道大学出版会.

北原博雄（1998）「移動動詞と共起する二格句とマデ格句―数量表現との共起関係に基づいた語彙意味―」『国語学』195 集，pp.84-98.

金水敏（2000）「時の表現」仁田義雄・益岡隆志（編）『時・否定ととりたて（日本語の文法 2）』，pp.1-92.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

工藤真由美（2004）「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16 号，pp. 1-17.

張琴琴（2024）「数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化」『日本語文法学会第 25 回大会発表予稿集』pp.129-136.

張琴琴（2025）「他動性の観点からみた日本語動詞の区分の再検討」『北海道大学大学院文学院研究論集』第 24 号，pp.219-239.

日本語学会（編）（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版.

畠山真一（2008）「動詞の限界性を判定するテストセット」A．人文・社会科学編『尚絅学園研究紀要』第 2 号.

三原健一（2022）『日本語構文大全 第Ⅰ巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版.

【謝辞】

本稿は，言語学フェス 2025（オンライン）におけるポスター発表の内容を加筆・修正したものです。発表の際に貴重なご助言を賜った先生方に御礼申し上げます。また，本稿の執筆にあたり多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げます。本文における誤りや不備はすべて筆者の責に帰するものです。なお，本研究は，JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。

10.14943/rjgshhs.25.l 161

台湾華語における語順類型

── 目的語の認定と動詞述語文を中心に ──

中　村　真衣佳

要　旨

普通話と台湾華語は共に北京語を基盤とすることから，同一言語と一般にみなされている。しかし，台湾華語は，普通話と統語的に異なる特徴をもつ。本稿の目的は，台湾華語の動詞述語文の語順にはどのようなものがあるかを明らかにすることである。本稿では，台湾華語の映像作品の台詞，台湾で出版された書籍，コーパスから動詞述語文の用例を収集して動詞述語文の語順を整理し，台湾華語にみられる動詞述語文には，有標と無標の対立を示すかのような語順の類型があること，また，「有‘you’」が多くの語順に伴うことを示す。そして，台湾華語では，「有＋動詞句（VP）」が頻繁に使用されており，普通話と異なる特徴があることを指摘する。

1．はじめに

現代標準中国語には，「普通話」と「台湾華語」がある。普通話と台湾華語は共に北京語を基盤とすることから同一言語と一般にみなされている。また，「相互理解可能性」の観点から「1つの言語（の中の2つの方言）」（加藤 2007：35）と考えられている。しかし，台湾華語は，普通話と異なる特徴をもつ。それは，標準語として制定される過程が普通話と異なることにより生じた，漢字の字体や発音表記の異なりだけではない。統語的にも独自の特徴をも持つことが指摘されている。その要因は，台湾本土語の台湾語（閩南語）の影響によると言われている。筆者が初めて中国語を学び始めた1999年は，日本国内においては，「台湾華語」を学ぶという選択肢が用意されていない環境だったが，近年は日本国内においても「台湾華語」という名称がタイトルに含まれている書籍が見られるようになった。数は多くはないものの，普通話との比較から台湾華語の特徴に言及している張（2021）や林・吉田（2022）もある。本稿の目的は，台湾華語の動詞述語文の語順にはどのようなものがあるかを明らかにすることである。先に述

べたように，台湾華語は普通話と同一言語であるとみなされることが多いが，台湾華語のデータをもとに動詞述語文の語順を整理することは意義があることである。さらに，データを整理することで，台湾華語独自の特徴も明らかになると考えられる。本稿では，台湾華語の映像作品の台詞，台湾で出版された書籍，コーパスから動詞述語文の用例を収集して台湾華語における動詞述語文の語順を整理する。そして，台湾華語にみられる動詞述語文には，無標と有標の対立を示すかのような語順の類型があること，また，「有‘you’」が多くの語順に伴うことを示す。さらに，台湾華語は，普通話と異なる特徴があることを指摘する。

本稿は以下の流れで議論を進める。第 2 節では，台湾華語の概要について述べる。第 3 節では，現代標準中国語の基本語順と目的語の考え方を確認したうえで，台湾華語に見られる動詞述語文のデータから語順の類型を整理する。第 4 節は結論である。

2．台湾華語の概要

2-1　台湾の複雑な言語環境とその要因

台湾は複雑な言語環境下にある。この複雑な言語環境は，歴史的背景により生じたものである。台湾社会は，原住民，本省人（清朝時代の福建省や広東省にルーツを持つ人たち），外省人（第二次世界大戦後に中国から台湾へ移住した人たち）と呼ばれる属性の人々が共存している。林・吉田（2022）によると，1995 年の調査では 4 大族群（原住民，閩南人，客家人，外省人）の人口比率は，原住民 1.7%，閩南人 73.3%，客家人 12%，外省人 13%であるという。このデータが示すように台湾は漢族（閩南人・客家人・外省人）が多数派である（このうち，閩南人と客家人は本省人に含まれる）。このような台湾社会の漢人社会と漢人文化は，2 度に渡る大規模な中国からの漢人の移住により築かれた（林・吉田 2022）。

このように台湾の漢人社会・漢人文化が築かれた歴史的背景について，主に林・吉田（2022）により概観する。文献で確認できる限り，16 世紀にポルトガル人の水夫が台湾島を見つけて「Ilha Formosa!（美麗島）」と叫んだことが台湾の発見である。以降「フォルモサ」は台湾の代名詞となっている。17 世紀になり，台湾はオランダ・スペイン領有期に入る。1624 年から 1662 年までオランダは南部，1626 年から 1642 年までスペインは北部を領有し，その間，中国東南部沿岸地域から漢人が開墾のために台湾へ移住した。その後，鄭成功がオランダを打ち負かし鄭氏統治期となり，再び中国から漢人が開墾のため台湾へ移住した。この 2 度にわたる大規模移住により台湾に移り住んだ漢人の属性は，閩南人と客家人である。彼らは中国の出身地が異なるため使用する言語も異なり，閩南人は閩南語，客家人は客家語を話す（さらに閩南人の話す閩南語は，漳州訛りと泉州訛りに分かれる）。これにより，当時の台湾では，オーストロネシア語系の原住民と閩南語系の漢民族と客家語系の漢民族の 3 大族群が共存することになる。その後，台湾は清朝統治期（1683 年～1895 年），日本統治期（1895 年～1945 年）を経て中華民国期

となる。そして，1949 年に国共内戦に敗れた国民党政府が台湾へ遷ったことで，多くの中国人が中国から台湾へ移住する。この頃から，それまでに台湾に移住していた閩南人と客家人を「本省人」，1949 年以降に中国から台湾へ移住した中国人を「外省人」と呼ぶようになる。この出来事は 20 世紀の台湾で，もともと一般名詞であった中国語の「本省人（本県出身者）」「外省人（他県出身者）」という言葉に特別な意味を持たせることとなる。「本省人」も「外省人」もどちらも漢民族だが，両者の間では話す言葉が異なる。少なくとも 1945 年からしばらくの間，外省人は国語である中国語を話し，台湾本省人は台湾語（閩南語）や客家語，日本語を話していた（新井 2019：20）。以上のように，台湾には複雑な歴史的背景があり，その影響により言語環境も複雑である。そして近年は，東南アジアからの移住者が増加していることにより，言語環境はより複雑化する見込みである（林・吉田 2022）。

2-2　台湾の現代標準中国語「台湾華語」

「中国語[1]」という名称は，多義的である。言い換えると，「中国語」に相当する言語は，文脈により異なる場合がある。例えば，中国語非母語話者が外国語として「中国語」（現代標準中国語）を学ぶ場合には，どこで学ぶかによってその意味するところが異なる。一般的に日本国内，中国大陸で学習する場合は，「中国語」のことを“汉语”と言うように指導される。この“汉语”（漢語）が意味するのは，「普通話」である。一方，台湾で学ぶ場合は，「中国語」のことを“國語”と言うように指導される。この“國語”（国語）が意味するのは，「台湾華語」である。

台湾の「台湾華語」「國語」と中国の「普通話」「漢語」の違いについて確認しておこう。台湾華語と普通話は同一言語と認められながらも異なる点がある。その要因は主に 2 つある。1 つは，両者が国民党と共産党という異なる政権下で異なる言語規範に基づき制定されたものであること，2 つ目は，約 30 年間もの間，台湾と中国の間に自由往来がなく，台湾華語は台湾本土語と言語接触をする環境にあったことである。

1 つ目の台湾華語と普通話では規範とするものが異なるという点について述べる。台湾華語の前身は，普通話が制定されるよりも前に存在する。1911 年，孫文による辛亥革命で清朝が倒れた翌年の 1912 年に台湾華語の前身「標準国語」が中国で国民党により制定される（林・吉田 2022）。一方，普通話は 1949 年に中華人民共和国が成立した後，1950 年代に共産党により制定される（木村 2017：70–72，林・吉田 2022）。

次に，2 つ目の台湾華語が台湾本土語と言語接触する環境下にあったという点について述べる。台湾は 1950 年から 1980 年代末期までの約 30 年間，中国との自由往来が禁止されていた。

---

[1] 中国には政府が認定しているだけでも 55 の少数民族が存在し，圧倒的多数を占める漢民族言語を指して「中国語」という場合もある。漢語自体の中にも上海語や福建語，広東語などの諸方言があるが，これらは互いに通じないほど大きく異なる（風間・山田編 2021：223）

そのため，言語的にも中国と相互に影響しない時期が続いたことで，台湾華語は台湾本土語（閩南語）の影響を受けて独自の変化を遂げて現在に至ると考えられる。

台湾華語と普通話で異なる点について具体例をみてみよう。先に述べたように，台湾華語と普通話は主に 2 つの面で異なる。ひとつは，前身となる規範が異なることにより生じた違いである。具体的には，台湾華語においては漢字の字体は繁体字を使用し，発音表記は注音符号[2]を使用している。普通話では漢字の字体は簡体字，発音表記は拼音を使用している。音声に関しては，“研究”（台：yán jiù 中：yán jiū）“認識”（台：rèn shì 中：rèn shí）“垃圾”（台：lè sè 中：lā jī）“質量”（台：zhí liàng 中：zhì liàng）などが台湾華語と普通話で発音と声調に違いがある。また，慣習的に使用している語にも異なりがみられるという。例えば「自転車」を台湾華語では“腳踏車”，普通話では“自行车”と言う。台湾華語話者のインフォーマントによると，台湾で“自行車”と聞くと，競輪などで使用される自転車を想像するという。普通話話者のインフォーマントは，“腳踏車”と聞いても何のことだかわからなかったという。

もうひとつは，台湾本土語（閩南語）の影響を受けて生じた語彙と統語的な異なりである。例えば，「伴手禮」（ちょっとしたお菓子，手土産）という言葉は，台湾語と中国語が合体して台湾で作られた語である（林・吉田 2022）。また，選好される語順にも違いがある。以下，台湾華語の統語的特徴が表われている例をいくつか挙げる。1 つは，（1）のような前置詞（介詞）「给・給‘gei’」の統語的位置の問題がある。張（2021）によると，（1a）は台湾華語で好まれ，（1b）は普通話で好まれるという。実際，筆者が台湾華語話者と普通話話者に（1）のどちらがより自然かを尋ねた時も，台湾華語話者は（1a），普通話話者は（1b）と答えた。また（1a）（1b）に関しては，台湾では世代差もあるという。1980 年代生まれの台湾華語話者は，（1b）を使用することも，きくこともなかったと話していた。つまり，台湾華語と普通話では語順の選好が異なると考えられる。

（1）a. 我　買　　了　一　本　書　給　　她。［台湾華語］
　　私　買う　-た　1　CL　本　gei　彼女
　　「私は彼女に本を 1 冊買った」

[2] 注音符号は 1918 年に公布され，字形は古漢字と篆書に由来し，一字母一音素のローマ字表記とも，一文字一音節の日本語の仮名とも異なる漢語音韻学の伝統に由来するものである（林・吉田 2022）。中華民国成立後に公布された注音符号は中華民国が台湾に撤退したことで存続し，台湾ではパソコンや携帯電話の文字入力，学校や図書館の検索システムなどで広く使用されている。中国語教育においても 2000 年代前半に筆者が台湾に語学留学した際は，注音符号による教授方法が採用されていた。しかし，2017 年に台湾へ語学留学した日本人の話によると，台湾でも拼音による教授方法がとられていたという。拼音が世界的に浸透しているのに対して，注音符号は台湾独自のものという扱いであるため，世界的に多数派である中国語教育の教授方法に合わせた結果であると考えられる。

b. 我　给　他　　买　　了　一　本　书。［普通話］
　私　gei　彼女　買う　-た　1　冊　本。
「私は彼女に本を1冊買った」　（張 2021：61）

また，「給」に関して，文法の面では（2a）の誤用といわれる（2b）が台湾華語では使用されるという。

（2）a. 他　打　我
　彼　叩く　私
「彼が私を叩いた」
b. 他　給　　我　打
　彼　gei　　私　叩く
「彼が私を叩いた」　（林・吉田 2022：134）

2つ目は，台湾華語では「有」を助動詞として使用する特徴があり，「～したことがある」という経験を表す場合，①「動詞＋“過”」（普通話と同様）②「“有”＋動詞＋“過”」（普通話にない，方言の影響と言われているもの）の2つの構造が使用され，②は口語に多い（張 2021）。具体例は（3）（4）である。

（3）a. 你　　去　　过　台北　　妈？［普通話］
　あなた　行く　経験　台北　　か
「台北に行ったことがありますか」
b. 你　　有　　去　　過　　臺北　嗎？［台湾華語］
　あなた　ある　行く　経験　台北　か
「台北に行ったことがありますか」　（林・吉田 2022：134-135）
（4）a. 我　　查　　过。［普通話］
　私　　調べる　経験
「私は調べたことがある」
b. 我　有　　查　　過。［台湾華語］
　私　ある　調べる　経験
「私は調べたことがある」　（張 2021：94）

3つ目は，台湾華語の「會」の使用である。台湾華語の「會」の使用は特徴的であり，普通話では（5a），台湾華語では（5b）の表現が用いられ，「會」で未来の意味を表す（林・吉田 2022：135）。

（5）a. 明天　　你　　去　台北　　妈？［普通話］
　　明日　あなた　行く　台北　　か
　　「明日あなたは台北に行きますか」
　　b. 明天　　你　　會　　去　臺北　嗎？［台湾華語］
　　明日　あなた　hui　　行く　台北　か
　　「明日あなたは台北に行きますか」　　（林・吉田 2022：135）

以上のように，台湾華語は普通話と異なる統語的な特徴が見られる。次節では，台湾華語の動詞述語文の用例を考察する。そして，台湾華語の動詞述語文の語順の類型を整理する。

3．台湾華語の動詞述語文の類型

3-1　基本語順

本節では，基本語順を確認する。普通話と台湾華語の基本語順は同様に［主語＋動詞＋目的語］（以下 SVO と記す）である。台湾華語の動詞述語文について，張（2021：19）では以下（6）から（9）のように示している。

（6）我　　買　　書。
　　私　　買う　　本
　　「私は本を買う」
（7）我　　不　　去　　圖書館。
　　私　NEG[3]　行く　図書館
　　「私は図書館に行かない」
（8）她　　是　　老師。
　　彼女　　だ　　先生
　　「彼女は教師だ」
（9）她　　不　　是　　學生。
　　彼女　NEG　だ　　学生
　　「彼女は学生ではない」

基本語順とは，一般的に他動詞文の語順である。台湾華語の基本語順は普通話と同様に目的語が動詞の後ろに置かれる SVO である。しかし，中国語は，自動詞と他動詞の区別が難しい場

[3] ‘NEG’は‘negative’（否定）を表す。

合がある。例えば，（7）の「去」は自動詞であるが，移動先は動詞に後置して SVO 形式となる。（8）の「是」は，コピュラ文を作る要素であるが，中国語では動詞である。この「是」の後の要素を目的語と捉えると SVO 形式である。木村（2004）は，中国語は自動詞であるか他動詞であるかの明確な判断が難しく，有力な判断基準として動詞の後に目的語がとれるかどうかということがあるが，自動詞であっても構造的に目的語がとれることがあると述べる。木村（2004）で挙げられている SVO 形式をとる自動詞の例をみると，形式的に動詞に後置する目的語に相当する要素として，①「移動する場所を表すもの」②「経過を表すもの」③「移動の相対的位置を表すもの」④「経過する時間を表すもの」⑤「時間的経由点を表すもの」⑥「基準となる境界線を表すもの」⑦「離脱点を表すもの」⑧「不在の場所や不参加の催しを表すもの」⑨「「何を～（か）」の形で，問題の原因・理由を聞くもの」がある[4]。木村（2004）によると，中国語における自動詞と他動詞の区別方法という問題に関しては，これまで様々な論争がなされてきたが結論は得られていないという。また，中国語の目的語の特徴としては，体言的な要素（名詞句）に限らず，用言的な要素（動詞句/節）も目的語の位置に置くことができることが指摘されている（朱 1995 など）。

3-2　中国語における自動詞・他動詞の区別と目的語の範囲

本節では，中国語における自動詞と他動詞の区別とどのような要素が目的語であると考えられているかについて述べる。日本語では，自動詞と他動詞に相当する区分はある程度可能だが，完全に区別できないところもある。加藤（2006：31）によると，問題になるのは格助詞の「を」のついた名詞句のうちどこまでを目的語としてみるか，他動詞用法をどこまで認めるかということである。加藤（2006）によると，一般的に場所格に用いた「商店街を歩く」のような場合は目的語とせず，対象格である場合に目的語と認定するが，両者は連続的関係にあるという。例えば，「ジルバを踊る」のヲは対象格に分類でき，「字を間違える」「友人を訪ねる」「難関を

---

[4] 形式的に SVO の自動詞（木村 2004）
①移動する場所を表すもの「他跑了几个城市」（彼は街をいくつか駆け回った）
②経過を表すもの「游行队伍正经过大桥」（デモ隊はちょうど大橋を渡っている）
③移動の相対的位置を表すもの「四百米接力二班跑第一。」（400 メートルリレーで 2 組は 1 位を走った）
④経過する時間を表すもの「我们全家过了个春节」（私たち一家は旧正月を過ごした）
⑤時間的経由点を表すもの「我们的友谊已经过了漫长的时间」（私たちの友情は果てしない年月を過ぎた）
⑥基準となる境界線を表すもの「他的月收入超过了 500 元」（彼の月収は 500 元を超えた）
⑦離脱点を表すもの「这个代表团都离开了北京」（この代表団はもう北京を離れた）
⑧不在の場所や不参加の催しを表すもの「不上课，不上班」（欠席する）
⑨「何を～（か）」の形で，問題の原因・理由を聞くもの「哭什么？」（何を泣いているの）

突破する」などのヲをどう分類するかで動詞の分類も変化する（加藤 2006）。中国語は孤立語であるため，膠着語である日本語のように目的格を標示する「を」のような言語形式はない。したがって，語順が名詞や動詞の文法関係を表すことになる。

類型論的観点から見ると，中国語の他動詞文の典型的な語順は，SVO であり英語と同じである。しかし，中国語の自動詞と他動詞の区別や目的語の認定は，英語と同じように捉えられるものではない。本節では，中国語における「動詞＋目的語」（VO 構造/動目構造）の目的語にはどのような要素が置かれるのか，また，目的語と動詞の意味関係にはどのようなものがあるかを確認する。

中国語の VO 構造の動詞が表す動作に対する目的語の意味をまとめる。表 1 は，動詞と目的語の意味的関係についての記述を輿水・島田（2009）と北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004），朱（1995）の 3 つで比較したものである。これら 3 つの文献では，「動作の受け手」「動作により生み出された成果・結果」「動作の場所・移動先」「動作主，存在・出現するもの」においては目的語と捉えている点で共通している。

表 1 ［動詞＋目的語］構造における目的語の意味

目的語の意味	VO 意味関係	1. 輿水・島田（2009）	2. 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）	3. 朱（1995）
1. 動作の受け手 2. 受動者 3. 対象	を	吃面包 食べる- パン 喝咖啡 飲む-コーヒー	洗衣服 洗う-服	擦玻璃 拭く-窓 吃苹果 食べる-りんご
1. 生み出された成果 2. 生産された結果 3. 生み出す結果であるもの	を	做菜 作る-料理 写信 書く-手紙	写信 書く-手紙	盖房子 建てる-家 写信 書く-手紙
1. 場所（帰着点） 2. 場所や方位 3. 移動先	へ・に	去上海 行く-上海 进教室 入る-教室	坐地上 座る-地面 站门外 立つ-ドアの外	上广州 行く-広州 进医院 入る-病院 （入院する）
1. 存在・出現するもの 2. 動作主 3. 動作者	が	有人 いる-人 下雨 降る-雨	来客人 来る-客 晒太阳 照る-太陽 住人 住む-人	来客人（了） 来る-人 住人 住む-人
2. 動作行為の道具 3. 動作の拠り所となる道具	で		抽烟斗 吸う-パイプ 写毛笔 書く-筆 吃大碗 食べる-どんぶり	洗冷水 洗う-冷水 抽烟斗 吸う-パイプ

表 1 ［動詞＋目的語］構造における目的語の意味（つづき）

目的語の意味	VO 意味関係	1. 輿水・島田（2009）	2. 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）	3. 朱（1995）
1. 主語との関係・主語との属性	コピュラ だ・である	是学生 である-学生 姓王 姓とする-王		
2. 動作行為と関係のある事物の数量 3. 動作の持続時間	副詞		买了三斤 買った-1.5 kg 再住三天 住む-3 日 看了一下 見る-ちょっと	住三天 住む-3 日間 等一会儿 待つ-短時間

上記 3 つの文献で見解が異なるのは，「動作行為の道具」を表す具格と「主語との関係・主語との属性」を表すコピュラ，「動作の持続時間」を表す要素である。「動作行為の道具」に関しては，北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）と朱（1995）では，目的語として扱う。コピュラ文を作る要素の「是」は，動詞であることから，輿水・島田（2009：70）では動作と目的語の関係として記述されていると考えられる。「動作の持続時間」に関しては，これを目的語に入れるか入れないかは，文法書により記述が分かれるところである。ひとつの考え方として，このようなものを「数量目的語」などと呼び，動作の行われる時間や量を表す目的語と捉えるものがある（朱 1995，北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004，沖森・蘇 2014）。もうひとつは，動作量，時間量，比較数量を補語と捉える考え方があり，輿水・島田（2009）によると，教室文法ではガイドラインも含め補語[5] として見る考え方が一般的であると述べている。つまり，中国語学における研究文法としては，目的語と捉える考え方が優勢であり，中国語教育文法としては補語として考えるのが一般的であると考えられる。北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）では，動作量，時間量について以下のように述べている。

> 多くの文法書はこれらの目的語を補語の中へ入れているが，本書ではそのような意見は採用しない。なぜなら，文法パターンの上で見たとき，“看一天”〔1 日読む〕，“看一次”〔一度読む〕，という形は，典型的な動目構造である“看一本”〔一冊読む〕とかなり近いからで

[5] 中国語文法の補語について，北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004）の説明を以下にまとめる。補語とは，動詞あるいは形容詞の後ろに置かれて補充説明をする成分であり，例えば，“洗干净”〔洗ってきれいになる（→きれいに洗う）〕の“洗”〔洗う〕は動語，“干净”〔きれいな〕は補語であり，補語“干净”は動語“洗”を補充説明している。しかし，補語には“我吃饱了”〔私は食べて満腹になった。（←私が満腹だ）〕のように主語になっている動作主の状態を説明するものもある（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：297）。

ある。（中略）名詞量を含む“一本”〔一冊〕は他動詞の目的語にしかなれないが，時間量を含む“一天”〔１日〕や動量詞を含む“一次”〔一度〕などは，他動詞のほかにも自動詞や形容詞の目的語になることもできる。（中略）我々は時量詞や動量詞によって構成された目的語を準目的語（“准宾语”）と呼んで，名詞量からなる数量目的語と区別することとする。

（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：295-296）

以上のように，中国語の目的語の判断基準は，その他の言語と異なる点が多い。このことは，中国語において，自動詞と他動詞の区別が困難であることにも影響している。多くの印欧語では，能動態（active verb）と対をなす受動態（passive voice）がつくられることが他動詞の目印とされ，目的語を必要とする動詞だけが受動態をつくりうる（亀井ほか 1996：890）。しかし，中国語は，“烧热水”（お湯を沸かす），“写字”（字を書く）のような明らかな目的語を持つような他動詞文であっても“＊热水被烧了”（お湯が沸かされた）“＊字被写了”（字が書かれた）のような受け身文にすることができない（“被”は受け身を表す介詞であり，“被＋実行者”という構造で使用されるが，実行者は省略する場合がある）。守屋（1995：283）によると，中国語の受け身文に求められる条件として，動詞は動作・行為の対象を表す目的語を従える他動詞でなければないない。したがって，動作の結果生じるものが目的語となる場合は受け身文にできないという。つまり，中国語においては，能動態と対をなす受動態が作れるかどうかにより他動詞を判断することは有効ではないと言える。木村（2004）では，中国語の他動詞を他動性の観点[6]から判断している。

中国語において，どの範囲までの要素を目的語として認めるかという問題に関しては，先行

---

[6] 木村（2004）で他動詞としているもの
①主体の動作・作用が直接及ぶもの
A. 目的語が外的変化を伴うもの「我们要打倒封建主义」（我々は封建主義を打倒しなければならない。）
B. 目的語が内的変化を伴うもの「丈夫改正了吸烟的毛病」（夫はタバコを吸う癖を直した）
C. 目的語自体が変化を伴わないもの「老师报告了一个好消息」（先生は１つのよい知らせを告げた）
②精神的働きかけの対象となるもの「他忘记了电话号码」（彼は電話番号を忘れた）
③その動作・作用によって結果的に作り出されるもの「他们树立了较高的威信」（彼らはかなり高い威信を打ち立てた）
④使用・操作する対象としての道具（道具目的語）「他操纵着那台机器」（彼はその機会を操作している）
⑤主体の演じる役割（役割目的語）「陈刚扮演反面人物」（陳剛は悪い人物を演じている）
⑥動作・作用の向かう対象としての場所（場所目的語）「值日生在擦黑板」（日直が黒板を消している）
⑦動作・作用の向かう対象としての方向（方向目的語）「这间房间向东」（この部屋は東向きだ）

研究においても見解の異なりがあり，議論の余地がある問題である。本稿では，目的語の認定基準として，VO 構造という形式に依る判断ではなく，動詞が要求する項がいくつあるかにより判断することにする。目的語が動詞の後方に置かれるかという形式的な基準を採用しない理由は，動詞に前置する目的語があるからである。目的語が動詞の前方に置かれる文は台湾華語にも普通話にもみられる。目的語が動詞の前方に位置する例は次節で示す。

3-3　基本語順以外の動詞述語文

3-3-1　目的語が動詞に前置する語順

本節では，台湾華語に見られる基本語順以外の動詞述語文を示す。前節で述べたように，台湾華語の基本語順は普通話と同様に SVO である。しかし，普通話も台湾華語も目的語が動詞に前置する場合がある。

中国語はグリーンバーグ以来の他動詞文の語順の類型に分類するのが難しい（Li & Thompson 1981: 19–27）。文中の各成分（主語（S），動詞（V），目的語（O））の配列順序[7] は言語類型学の 1 つのパラメーターであり，早期の系統的な研究である Greenberg（1963）は中国語を分類しなかったが，語順類型学形成後に中国語の語順がどの類に属するのか議論となる（徐・劉 2017：328）。徐・劉（2017）によると，Tai（1973）は中国語を SVO 言語と分析するのが比較的適切であると考え，Li & Thompson（1973a, 1973b, 1975）は，通時言語学的角度から，ここ二千年来の中国語が SVO 言語から SOV 言語へ変わったという提案をし，Tai（1973）もそれを支持している（徐・劉 2017：328）。このように中国語の語順は類型論の観点で捉え難いものである。その要因として Li & Thompson（1981）は，主語の概念はマンダリン（普通話）の文法において構造的に十分に定義されないこと，語順が文法的機能（grammatical functions）よりも意味機能（semantic factors）により大きな範囲で支配されること，グリーンバーグの類型論の VO と OV の特徴に合致せず修飾構造では OV の特徴（主要部右方型）に合致することを指摘している（Li & Thompson 1981: 19）。Li & Thompson（1981）が述べている語順を左右する意味機能（semantic factors）とは，動詞前置（preverbal position）の主題，主語，目的語は定（definiteness）であり聞き手と話し手がすでに知っている既知情報であるということである（Li & Thompson 1981: 19–20）。したがって，中国語の語順は，話し手と聞き手の知識の共有の有無やその場の状況といった語用論的な要因にも影響を受けている。

本節では，台湾華語に見られる目的語が動詞に前置する用例を示す。台湾華語の目的語が動詞に前置する語順は（10）のようなパターンがみられる。これらはすべて，目的語が動詞の前方に位置する語順である。（10a）（10b）（10c）は，目的語の主題化（topicalization）の例である

[7] SOV，SVO，VSO，VOS，OVS，OSV という 6 つ配列があり世界の言語の大部分は前の 3 つのタイプに属し後ろの 3 つのタイプは少ないという（徐・劉 2017）。

と考えられる。（10d）（10e）は，特定の構文を使用して，目的語を動詞の前方に配置して，目的語をとりたてる文である。

（10）a.［目的語＋主語＋動詞］（OSV）
　　b.［主語＋目的語＋動詞］（SOV）
　　c.［目的語＋動詞］（OV）
　　d.“連～也／都”構文
　　e.“把”構文

台湾華語の（10）に示した語順の具体例を以下に示す。（11）下線部は，（10a）の語順パターンの例である。（12）は（10b）の，（13）は（10c）の語順パターンの例である。これらは，すべて目的語の主題化（topicalization）であると考えられる。（14）は（10d）の「連～都構文」である。この場合の「連・连‘lian’」は，前置詞であり，「～さえも」という強調の意味をもつ（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：374）。（15）は（10e）の「把構文」である。前置詞「把‘ba’」の文法的な機能は，「人や事物に対する処置を表すこと」である（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：362）。「把構文」は，その人や事物にどのような処置をしたか聞き手に伝えようとする場合に使用され，とりたてて処置を表す必要がなければ把構文を使う必要はない（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：362）。つまり，（14）（15）は目的語をとりたてる文である。

（11）　我看你也累了一個晚上了先到我家吃個飯，
　　其他　的　事　我們　路上　說
　　その他　の　こと　私たち　道中　話す
　　「その他のことは，私たち，道中で話す」
　　「大変だったな，ウチで何か食べよう，行く途中で話すよ」（台湾映画『瀑布』）
（12）　我　飯　已經　做　好　了。你趕快出來吃　不然等下要涼了。
　　私　食事　すでに　作る　補語　PART
　　「私はご飯をすでに作った」
　　「早く食べないと冷めるわよ」（台湾映画『瀑布』）
（13）　醫生　交代　的　藥　一定　要　按時　吃
　　医者　説明する　～の　薬　必ず　する必要がある　時間通りに　食べる
　　「医者が説明した薬は必ず時間通りに飲む必要がある」
　　「薬は必ず飲むんだぞ」（台湾映画『瀑布』）
（14）　乙松傾吐了半個世紀來的怨言和驕傲，

能　　想到　的　毎　　一　　椿事　都　　說　　了，
できる　思いつく　の　ごと　ひとつ　のこと　全て　言う

連　　他　　自己　　都　　感到　　意外。（『鐵道員』「鐵道員」p.37）
さえ　　彼　　自分　　みな　　感じる　意外である
「思いつくひとつひとつのこと全て話した，彼自身でさえ意外に感じる」
「自分でもどうかしていると思いながら，乙松は半世紀分の愚痴や自慢を，思いつくはしから口にした」（「鉄道員」『鉄道員』p.37）

（15）他　把　昨天　那個　　小　　女孩，　　還有　　小　　女孩　姊姊，
彼　ba　昨日　あの　小さい　女の子　そのうえ　小さい　女の子　姉
看成　　了　　無緣　　的　女兒。（『鐵道員』「鐵道員」p.25）
見なす　　縁がない　の　娘
「彼は昨日のあの小さい女の子と姉を縁がない娘と見なした」
「なんだかゆうべの妹も，この姉も，死んだユッコのような気がしてならなかった」（『鉄道員』「鐵道員」p.25）

目的語を主題化，或いは，特定の構文により動詞の前方に置き，とりたてるという操作は，無標となる基本語順に対立する文を作る理由が存在するということである。基本語順 SVO が無標であるなら，（10）に示した目的語が動詞の前方に配置される文は有標である。本稿では，無標の語順と有標の語順に着目するために，目的語が動詞に前置するか後置するかという基準にもとづいて，台湾華語の用例をもとに語順の類型を整理する。

3-3-2　動詞が複数ある動詞述語文

本節では，動詞が複数ある動詞述語文をみていく。中国語には複述構造〔“复谓结构”〕とい

---

[8] 複述構造〔“复谓结构”〕の具体例を北京大学中国語言文学系現代漢語教研室（2004：316-317）にもとづいて以下に示す。①から④は連動構造（連動式），⑤から⑦は兼語構造，⑧⑨は連鎖構造のように分類できる。「連動構造」が表す意味は複雑であり，並立構造とは異なるため動詞の順番を入れ替えると意味が変わる。「連鎖構造」は，前後２つの動詞/形容詞が接続機能を持つ“越-越-”などの要素（虚詞）により結びつけられる。
①背着书包/上学校（ランドセルを背負って学校に通う）
②去北京/看望我姑父（北京へ行っておじさんを見舞う）
③有可能/下雨（雨が降る可能性がある）
④吃过午饭/喝茶（お昼ご飯のあと，お茶にする）
⑤请你/去一下（あなたに行ってもらう）
⑥通知王老师/来办公室（王先生に事務室へ来てくれるように知らせる）

う 2 つあるいは 2 つ以上の用言（述詞〔“谓词”〕）性の語句が連用された構造[8] がある（北京大学中国語言文学系現代漢語教研室 2004：316）。ここでいう「用言」とは，述語ではなく，動詞と形容詞のことを指している。本稿では，このような構造のうち，「有」を伴う動詞述語文と coverb を伴う動詞述語文を中心にみていく。coverb の説明は，後述する。

3-3-2-1 節では，「有」を伴う複数の動詞からなる文を考察する。中国語の「有」は存在や所有を表すが，「有」の後に節や動詞句を続けて，連続する一連の動作行為を表す「連動文」を形成する。「連動文」とは「文の謂語に 2 個の動詞連語を連用しているもの」（李 1993：407）と説明されている。言い換えると，文の述語に 2 個の動詞句があるものであると考えられる。李（1993：325-326）は，「有」を含む連動文として，１．「“有”＋賓語（目的語）が原因を表すもの」，２．「“有”＋賓語（目的語）が仮定を表すもの」，３．「“有”の賓語（目的語）を後に移せるもの」の 3 つに分類している。例えば，１．「原因を表すもの」は，“他有病不能来上班（彼は病気で出勤して来ることができません）”のような例であり，２．「仮定を表すもの」は，“你们有什么事给我打电话（みなさん何か用事があれば，私に電話してください）”のような例である（李 1993：325-326）。３．「“有”の賓語を後に移せるもの」とは，“我们有信心战胜困难（我々には困難にうち勝つ自信があります）”の“信心”を文末に移動して“我们有战胜困难的信心”とすることができるということである（李 1993：326-327）。このように，李（1993）では，「有」を含む連動文について言及があるものの，意味的な分類と構造的な分類を混在させている。

関連する構文として，「兼語文」と呼ばれるものがある。これは，前方の動詞の目的語が後方の動詞の主語でもある構造の文である。張（2021）の「兼語文」の説明を以下にまとめる。“老師要我們練習寫字”「先生が私たちに字を書く練習をさせる（先生は私たちが字の書き方を練習するよう（私たちに）求めている）」は“我們”が“要”の目的語であり，“練習”の主語でもある。多くの兼語文は使役の意味を持つが，単なる存在を表す「有」も不特定の人物の動作行為について述べるとき，“（外面）有人找你”「外にお客さんがいます（外にあなたを訪ねる人がいます）」のように兼語文が使われる（張 2021：108）。本稿では，「有」の後にどのような要素がどのような語順で並んでいるかに注目して整理する。

3-3-2-2 節では，coverb を伴う文を考察する。“coverb”とは，動詞と同音異義の前置詞の両方を表現しているとみなされる欠如動詞（不完全な動詞）クラスの要素である（Matthews 2006: 70-71）。ここで言う「欠如」「不完全」とは，本動詞の意味が希薄化しているという意味である。中国語の coverb は，動詞から文法化している語の品詞を示す（wang 2025: 1）。つまり，現代標準中国語文法では，coverb を動詞から文法化した前置詞（介詞）として扱う（Wang 2025: 1-2）。

---

⑦选他/当我们的代表（彼を我々の代表に選ぶ）
⑧一看/就懂（一目見てわかる）
⑨越说/越糊涂（話せば話すほどわけがわからなくなる）

（16）の coverb“用”が動詞の場合には「箸を使って」という解釈になり，前置詞の場合には「箸で」という解釈になる。前者の解釈の場合は，連動文と考えることができる。中国語では，文法化した要素は軽く発音されるため，動詞の場合，第四声で“yòng”と発音され，前置詞の場合は軽く発音される。

Wang によると，これまで中国語研究において，積極的に議論されてきたのは“verbal groups”であり，“coverbal phrase”の研究はきわめてまれで，時々大雑把に議論されるだけであった（Wang 2005：3）。本稿では，この“coverbal phrase”に着目して，動詞述語文を類型化する。

coverb とみなされる要素は，典型的に動詞の前方に置かれる（Wang 2025：9）。例えば，（16）は coverb“用”が動詞‘夹了’の前方にある（Wang 2025）。一方で，Wang（2025）は，動詞の後方にも配置可能な coverb“在”“自”“到”“给”“向”“于”についても指摘する（Wang 2025：13）。Wang は（17）を挙げて‘落’が過程（Process）を表す“verbal group”であり‘在这些伧夫手里’が場所（Location）を表す“place coverbal phrase”であると分析する。

（16） 严志和　**用　筷子**　夹　了　一　根　咸菜（Wang 2025: 9）
　　Yazhihe　yong　箸　挟む　1　CL[9]　漬物
　　「yanzhihe が箸で/を使って漬物を挟む」
（17） 宝物　落　**在**　这些　伧夫　手　里（Wang 2025: 14）
　　宝物　落ちる　zai　これら　粗野な男　手　中
　　「宝物が粗野な男の手の中に落ちる」

本稿では，coverb が他の動詞の前方に位置しているか，後方に位置しているかに注目する。coverb の語順について，Wang（2025）は，情報構造との関係を指摘しているが，本稿ではその点については立ち入らず別稿に譲る。また，「有」と coverb を両方伴う複数の動詞からなる文に関しては，coverb を伴う文として扱い 3-2-2-2 節で検討する。

3-3-2-1 「有」を伴う複数の動詞からなる文

本節では，「有」を伴う複数の動詞からなる文をみていく。まず，このような例は，以下（18）の a から e に示す 5 つの語順のパターンがみられる。（18a）は「有」の後に「主語＋自動詞」構造がある語順であり，［有 S Vi］と示す。（18b）は，「有」の後に「主語＋他動詞」構造がある語順であり，［有 S Vt］と示す。（18c）は，「有」の後に「他動詞＋目的語」構造がある語順であり，［有 Vt O］と示す。（18d）は，「有」の後に「目的語＋他動詞」構造がある語順であり，［有 O Vt］と示す。（18e）は，「有」の後に「動詞＋補語」構造がある語順であり，［有 V C］と示す。

[9] ‘CL’は，‘classifier’（類別詞）を表す。

（18）a.［有 S Vi］
　　b.［有 S Vt］
　　c.［有 Vt O］
　　d.［有 O Vt］
　　e.［有 V C］

（18a）の［有 S Vi］の例を示す。以下（19）（20）（21）（22）は，主語である（19）“黒髪”，（20）“許多人”（多くの人），（21）（22）“鷺鷥”（鷺）が統語構造上は動詞「有」の目的語であり，後方の動詞の主語でもある例である。（23）も“外國人”が「有」の目的語であり，動詞“走過來”の主語でもある。言い換えると，これら（19）から（23）は，先に述べた現代標準中国語文法で従来から指摘がある兼語文である。

（19）眼前　　就　有　黒髪　　飛　来　（『夢十夜』高訳，p.202）
　　目の前　すぐ　ある　黒髪　　飛ぶ　来る
　　「目の前に黒い髪の毛が飛んでくる」
　　「（中略）黒い毛が飛んでくるので（中略）」（『夢十夜』原文 p.32）
（20）有　　許多　人　早　一　　歩　　到　　来　（『夢十夜』高訳，p.194）
　　いる　多い　人　早く　1　あゆみ　着く　来る
　　「多くの人が集まって来る」
　　「（中略）大勢集まって（中略）」（『夢十夜』原文，p.25）
（21）因為　有　　白　鷺鷥　在　　叫　　啊。（『夢十夜』高訳，p.184）
　　いる　白い　鷺　　ている　鳴く
　　「白い鷺が鳴いている」
　　「だって鷺が鳴くじゃないか」（『夢十夜』原文，p.15）
（22）不時　有　　白　鷺鷥　掠過。（『夢十夜』楊訳，p.27）
　　ある　白い　鷺　　かすめてすぎる
　　「度々白い鷺が掠めてすぎる」
　　「鷺の影が時々闇に差す」（『夢十夜』「第三夜」原文，p.14）
（23）有　個　外國人　走　過來　問　我　憧　不　憧　天文學（『夢十夜』陽訳，p.45）
　　ある　CL　外国人　歩く　くる　きく　私　わかる　NEG　わかる　天文学
　　「外国人が歩いてきて私に天文学がわかるか質問する」
　　「一人の異人が来て，天文学を知っているかと尋ねた」（『夢十夜』原文，pp.29–30）

（18b）の［有 S Vt］の例を示す。（24）（25）（26）には，小説の引用部分がある。（24）は，

発言の内容が目的語に相当し，文頭に位置して動詞に前置している。(25) は基本語順に従い，動詞の後に目的語に相当する発言の内容がある。(26) も発言の内容が文頭に位置している点で (24) と同様である。しかし，(26) は“人這麼說”とあるので，「有」以降は (10b) の SOV 構造であると考えられる。“這麼”が照応するのが文頭の発話内容の引用であることから，“這麼”を目的語と捉えると (10b) が「有」に続いている例である。

(24) 「好大一尊啊！」有　人　説。(『夢十夜』陽訳，p.40)
　　いる　人　言う
　「「大きなもんだな」と言う人がいる」
　「「大きなもんだな」と言っている」(『夢十夜』原文，p.25)
(25) 聴到有　個　男人　説：「哦，仁王像啊！(中略)」(『夢十夜』陽訳，p.40)
　　いる CL　男性　言う
　「「へえ，仁王だね」と男が言うのが聞こえた」
　「「へえ仁王だね。(中略)」といった男がある」(『夢十夜』原文，p.25)
(26) 「好大呀！」有　人　這磨　説。(『夢十夜』周訳，p.25)
　　いる　人　このように　言う
　「「大きいな」このように言う人がいる」
　「「大きいもんだな」と言っている」(『夢十夜』原文，p.25)

他にも (27) (28) の下線部は，「回家」(帰る) という VO 構造の動詞が「有」に続いている。(28) 下線部は，「罵＋N」で「N を叱る」という意味だが，“罵她”(彼女を叱る) が「有」の後に続いている。(28) は，“她”が“罵”の目的語であり，“是”の主語でもある兼語文である。これらは，(18c) の［有 Vt O］の例である。

(27) 你　知道　前　幾天　爸爸　有　回　家　嗎？
　　あなた　知っている　前　何日　お父さん　ある　帰る　家　か
　「あなたは何日か前にお父さんが家に帰ったことを知っていますか」
　「最近　家に行ったんだ」　(台湾映画『瀑布』)
(28) 那　你　有　罵　她　是　“賊人”　嗎？
　　あなた　ある　叱る　彼女　である　悪人　か
　「それなら，あなたは彼女は悪人であると叱りましたか」
　「“クソ女”と言ったのか？」　(台湾映画『瀑布』)

(18d) の［有 OVt］の例を示す。(29) (30) は，(10c) の OV 構造が「有」に続いている。(29)

の目的語“這東西”，（30）の目的語“很多事”は，動詞「有」と後方の動詞である（29）“用”，（30）“處理”で共有されている目的語である。

（29）都忘了 還　有　這　東西　能　用，（『鐵道員』「情書」p.69）
　　まだ　ある　この　もの　できる　使用する
　「まだ使用できるものがある」
　「うっかり忘れてたけど，これ，役に立ちますよ。」（『鉄道員』「ラブ・レター」p.68）
（30）我們 還　有　很多　事　要　處理，（「情書」『鐵道員』p.75）
　　まだ ある たくさん こと しなければならない 処理する
　「まだたくさんしなければならないことがある」
　「まだやることいっぱいあるんですよ」（『鉄道員』「ラブ・レター」p.74）

最後に，（18e）の［有 VC］の例を示す。（31）は，「動詞＋補語」の構造である“看見”が「有」の後に続いている。

（31）「先生，您 有 看見　門 外 賣　金魚 的 小販　嗎？」（『夢十夜』周訳，p.33）
　　あなた ある 見える ドア外 売る 金魚 の 行商人 か
　「門外で金魚を売る人が見えますか」
　「旦那は表の金魚売を御覧なすったか」（『夢十夜』原文，p.33）

この構造は，先述の台湾華語の特徴として張（2021）が指摘する「有＋動詞＋過（経験を表すアスペクト）」に似ているが，（31）は「有＋動詞＋補語」の例である。

3-3-2-2　coverb を伴う動詞述語文

本節では，台湾華語における coverb を伴う動詞述語文を考察する。coverb を伴う動詞述語文は，大きく分けて 2 種類に分けられる。ひとつは，［coverb＋名詞（N）＋動詞（V）］，もうひとつは，［動詞（V）＋coverb＋名詞（N）］である。つまり，coverb が動詞の前方に位置するか，後方に位置するかにより 2 つに分けられる。

［coverb＋名詞＋動詞］の例を以下に示す。（32）（33）（34）は coverb「在‘zai’」を伴う動詞述語文である。（32）の coverb の後の動詞“坐下”は自動詞であり，（33）（34）の coverb の後の動詞である（33）“散發出”，（34）“貼”は，他動詞である。これらは，Wang が「coverb とみなされる要素は，典型的に動詞の前方に置かれる」（Wang 2025：9）と述べていることからも coverb を伴う文の典型的な語順，つまり無標の語順である。

(32) 我 在 青苔 上 坐下，望 著 圓圓 的 墓碑，(『夢十夜』周訳，p.8)
私 zai 青いコケ 上 座る みる ている まるい の 墓石
「私は青い苔の上に座って，丸い墓石を眺めている」
「自分は苔の上に座った。(中略) 丸い墓石を眺めていた」(『夢十夜』原文，p.10)

(33) 純白色 的 百合 在 我 鼻 前 散發出 濃烈 芳香。(『夢十夜』周訳 p.9)
真っ白 の ゆり zai 私 鼻 前 ばら撒く 濃厚 良い香り
「真っ白い百合が私の鼻の前で濃厚な良い香りをばら撒く」
「真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った」(『夢十夜』原文 p.10)

(34)(35)(36)(37) は，「有」を伴う文である。前節で示したように「有」を伴う文は，coverb の例にもある。(34) は，「有」に coverb“在”が後置し，coverb の後方にある動詞の動作主“你”は「有」に前置している。

(34) 那 你 有 在 你 房間 門口 貼 一 張。
あなた ある zai あなた 部屋 入り口 貼る 1 CL
「あなたは部屋のドアに一枚貼りましたか」
「“距離を置け”と書いた紙をドアに貼った？」(台湾映画『瀑布』)

(35)(36) は，「有」の後に置かれる名詞である (35) “老爺爺”，(36) “人”が，coverb の後方の動詞の動作の主体である。(37) は，「有」の後に置かれる名詞“話”が coverb の後方の動詞の動作の対象，つまり，目的語である。

(35) 有 位 老爺爺 在 角落裡 擺出 一張 方型 的 小餐桌，
いる CL 爺さん zai 隅 並べる 1 CL 四角 の 小さい食卓
自飲自酌，(『夢十夜』高訳 p.188)
「爺さんが隅で四角い小さな食卓テーブルを並べる。手酌で飲む」
「片隅には四角な善を前において爺さんが一人で酒を飲んでいる」(『夢十夜』原文 p.18)
(36) 有 人 朝 篝火 裡 添 薪柴 (『夢十夜』高訳 p.193)
いる 人 chao 篝火 の中 追加する 薪
「篝火に薪を追加する人がいる」
「誰かが篝りを継ぎ足したので」(『夢十夜』原文，p.23)
(37) 我 有 話 跟 你 説
私 ある 話 gen あなた 話す

「私はあなたに話す話がある」
「話があるの」（台湾映画『瀑布』）

（34）と（35）（36）の違いは，動作主が「有」に前置しているか，後置しているかの違いである。この違いは，意味的な異なりを生じさせる。（35）（36）は兼語文であり，兼語文は，「不特定の人物の動作行為について述べる」（張 2021：108）ことから，（35）（36）は不特定の動作主について述べている。一方で，（34）は動作主が「有」に前置しており，“你”で示されていることから特定されている動作主の動作行為について述べている。つまり，（34）は特定の動作主の動作について述べる文である。（34）の場合，特定の動作主“你”が「有」以降に示される動作を行なったか否かを訪ねる文脈で話し言葉として使用されている。したがって，台湾華語の統語的特徴の例として先に挙げた「～したことがある」（“有”＋動詞＋“過”）という経験を表す「有」の用法に類似すると考えられる。

次に，［動詞＋coverb＋名詞］のように動詞の後方に coverb が置かれる例を示す。先に述べたように，Wang（2025：13）は，動詞の後方にも配置可能な coverb として‘在’‘自’‘到’‘给’‘向’‘于’を挙げている。このような例は，台湾華語にも同様に見られる。（38）は，自動詞「坐‘zuo’」に coverb「在‘zai’」が後置している。（39）（40）は自動詞「走‘zou’」「來‘lai’」に coverb「到‘dao’」が後置している。（41）は自動詞「出現‘chuxian’」に coverb「到‘dao’」が後置している。これらは，全て自動詞の後方に coverb が置かれる例である。

（38）我　雙手　交臂，　坐　在　床　邊（『夢十夜』楊訳，p.19）
　　座る　zai　ベッド　方
「私は両手を肘と肘とが接して，ベッドの方に座る」
「腕組みをして枕元に座っていると」（『夢十夜』原文，p.7）
（39）老爺爺　走　到　外面，（『夢十夜』周訳，p.19）
　　爺さん　歩く　dao　外
「爺さんが外まで歩く」
「爺さんが表へ出た」（『夢十夜』原文，p.19）
（40）老爺爺　來　到　大　門　外。（『夢十夜』高訳，p.189）
　　爺さん　来る　dao　大きい　門　外
「爺さんが大きい門まで来た」
「爺さんが表へ出た」（『夢十夜』原文，p.19）
（41）不時　有　白鷺鷥　的　身影　出現　在　黒暗　當中。（『夢十夜』高訳 p.184）
　　ある　白い鷺　の　影 出現する zai　暗い　中
「白いサギが暗い中に出現する」

「鷺の影が時々闇に差す」（『夢十夜』原文 p.14）

他動詞の後に coverb が後置する例もある。（42）（43）は，他動詞「放‘fang’」に coverb「在‘zai’」が後置している。しかし，（42）は「星を置く」と解釈できるが，（43）は「人形が置かれていた」のように自動詞的に解釈される。（42）は目的語となる「星」の前に“拾起”（持ち上げる）という動詞があり「星を持ち上げる」という動作に続いて「星を土の上に置く」という動作が続き他動詞的解釈につながると考えられる。

（42） 我　　拾起　　一　片　星辰　放　在　泥土　上。（『夢十夜』楊訳，p.20）
私　持ち上げる　1　CL　星　置く　zai　土　上
「私はひとかけらの星を拾い上げて土の上に置く」
「それから星の破片の落ちたのを拾って来て」（『夢十夜』原文，p.9）

（43） 塑料　　人偶　就　放　在　長椅　上。（『鐵道員』「鐵道員」p.29）
プラスチック　人形　　置く　zai　ベンチ　上
「プラスチックの人形はベンチの上に置く」
「セルロイドの人形がベンチの上に置かれていた」（『鉄道員』「鉄道員」p.29）

以上の（42）のような例は（44）（45）のような coverb「給‘gei’」が「遞‘di’」「交’jiao’」という「渡す」を意味する動詞に後置する場合にもみられる。（44）は「拿來」，（45）は「把」で目的語に処置を施したということを標示することで，後方の動詞の他動詞的な解釈を支えていると考えられる。

（44） 拿來　　一　只　牛奶瓶　遞　給　　喬凡尼（『銀河鐵道之夜』「喬凡尼的鐵道」p.140）
持つ来る 1　CL　牛乳瓶　渡す　gei　ジョバンニ
「牛乳瓶を持ってきてジョバンニに渡す」
「一本の牛乳瓶をもってきてジョバンニに渡し」（『銀河鐵道之夜』「喬凡尼的鐵道」p.246）

（45） 乙松　把　人偶　交　給　　少女，　少女嫣然一笑（『鐵道員』「鐵道員」p.23）
乙松　を　人形手渡す　gei　　少女
「乙松は人形を少女に手渡す，少女は美しくにっこり笑う」
「セルロイドの人形を手渡すと，少女はにっこりと笑った」（『鉄道員』「鉄道員」p.24）

以上の他にも，（46）のように「有」と「走‘zou’」で主体の「人‘ren’」を共有している例において，動詞の後方に coverb「向‘xiang’」が置かれる場合がある。

（46）忽地　有　人　走　向　前　（『夢十夜』高訳，p.193）
　　急に　ある　人　歩く　xiang　前
　　「急に人が前に歩く」
　　「すると誰やら来て」（『夢十夜』原文，p.23）

また，「給」は「動詞 1 ＋目的語＋給＋名詞＋（動詞 2 ）」という語順が頻繁にみられる。（47）（48）（49）（50）がその例である。これら「給」は，語順は同じであるが，（48）（49）（50）は，「給」に前置する目的語を「給」に後置している受益者に移動する解釈ができ，この「給」は，動詞であると考えられる。しかし，（47）の場合は，目的語が移動する訳ではないため，「給」は前置詞と考えられる。このように，語順が同じ場合でも動詞 1 と目的語の性質により異なる構造となる場合がある。

（47）我　介紹　梅蘭　給　你　認識。（中央研究院）
　　私　紹介する　梅蘭　gei　あなた　知り合う
　　「私はあなたに梅蘭を紹介しあなたは知り合う」
（48）發　聘書　給　各　委員。（中央研究院）
　　出す　招聘書　gei　各　委員
　　「各委員に招聘書を出す」
（49）我　買　了　一　本　書　給　他。（張 2021：60）［再掲］
　　私　買う　-た　1　CL　本　gei　彼
　　「私は彼女に本を 1 冊買った」
（50）我　買　泳装　給　她們　穿。（『鐵道員』「情書」p.66）
　　私　買う　水着　gei　彼女たち　着る
　　（私は彼女たちに水着を買って彼女たちは着た）
　　「水着買ってやって」（『鉄道員』「ラブ・レター」p.65）

3-4　考察

本稿で示した用例を考察すると台湾華語にみられる動詞述語文には，有標と無標の対立を示すかのような語順の類型があることがわかる。つまり，基本語順とされる無標の SVO に対して動詞の前方に目的語が置かれる有標の語順があること，また，coverb が動詞の前方に置かれる無標の語順に対して，coverb が動詞の後方に置かれる有標の語順があることが有標と無標の対立であると考えられる。また，これら有標と無標の語順には「有」を伴うことができる。

以下，表 2 において本稿で示した台湾華語の動詞述語文の語順の類型を示す。表 2 の無標①の基本語順に対して有標①の主題化と「とりたて」がある。そして，無標②の coverb が動詞前置する語順に対して，有標②の coverb が動詞に後置する語順がある。そして，無標①と有標①，無標②と有標②に対して「有」を伴う文である有標③がある。このことから，台湾華語では「有」を伴う［有＋動詞句（VP)］の使用が頻繁にみられることがわかる。したがって，台湾華語には，従来台湾華語の特徴として指摘されている経験を表す文での使用以外にも様々な文脈で「有」が用いられることがわかる。

［有 VP］の使用は，普通話と異なる台湾華語の特徴である。「有」を用いた動詞述語文に関して，朱（1995）では「動詞“有”からなる述連構造」として，いくつかのタイプをあげているが，これらは全て「“有”＋N＋V」の語順で異なる意味を表すことに言及している。つまり，朱(1995)では，(27)(28)の(18c)［有 Vt O］や(31)の(18e)［有 VC］のような，「有」の後に動詞句が置かれている例については述べていない。台湾華語話者のインフォーマントは，(27)(28)の用例の「有」が無ければ，容認度が下がると述べる。また，(31)の用例の「有」がない場合

表 2　本稿で扱った動詞述語文の語順類型

<table>
<tr><th>無標①
基本語順</th><th>有標①
主題化
/とりたて</th><th>無標②
Coverb 動詞前置</th><th>有標②
Coverb 動詞後置</th><th>有標③
“有”を伴う文</th></tr>
<tr><td rowspan="2">SVO
(6)(7)
(8)(9)</td><td>主題化
OSV (11)
SOV (12)
OV (13)</td><td rowspan="2">Coverb＋N＋Vt＋O
(33)</td><td>N＋Vt＋Coverb＋N
(43)</td><td rowspan="3">【無標①と対立】
有＋SVO
(25)
有＋VO
(27)(28)
有＋VC
(31)
【有標①と対立】
O＋有＋SVt
(24)
有＋SOV
(26)
有＋OV
(29)(30)
【無標②と対立】
有＋Coverb＋N＋Vt
(34)
有＋N＋Coverb＋N＋Vt
(35)(36)(37)
【有標②と対立】
有＋N＋Vi＋Coverb＋N
(46)</td></tr>
<tr><td>V＋O＋Vt＋Coverb＋N
(42)(44)(45)</td></tr>
<tr><td>SVi</td><td>とりたて構文
(14)(15)</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>SVi</td><td></td><td>Coverb＋N＋Vi
(32)</td><td>Vi＋Coverb＋N
(38)(39)
(40)(41)</td><td>兼語文
有＋Svi
(19)(20)(21)(22)(23)</td></tr>
</table>

は，非常に不自然な文であると判断したうえで，「台灣人不太會這樣講話，中國人比較多的感覺（台湾人はあまりこのように言いません。中国人は比較的多い（多く言う）感じがします）」と述べている。このことからも［有 VP］の使用は，台湾華語の特徴であると言える。

本稿での考察の結果，台湾華語では「有」を使用した動詞述語文が頻繁にみられ，従来台湾華語の特徴として指摘されている経験を表す文で用いられる「有」の使用以外にも，様々な文脈で「有」が用いられることを指摘する。台湾華語話者は，日常的に（51）[10] のように「有」の後に動詞句が続く動詞述語文を使用する。このことから，「有」を伴わない動詞述語文と「有」を伴う動詞述語文［有 VP］という対立があるなかで後者が選好されていると考えられる。

（51）　我　昨天　有　去　大通　跳舞
　　私　昨日　ある　行く　大通　踊る
　「私は昨日大通に行って踊りました」
　　你　有　去　參加　這個　活動　嗎？
　　あなた　ある　行く　参加する　この　イベント　か
　「あなたはこのイベントに参加しましたか」

また，本稿では無標の自動詞文については扱わなかったが，無標の自動詞文［SVi］は，「有」を伴い兼語文となることを示した。

4．結論

本稿では，台湾華語の動詞述語文の語順の類型はどのようなものかを明らかにするために，台湾華語の映像作品の台詞，台湾で出版された書籍，コーパスから動詞述語文の用例を収集して語順を整理した。そして，台湾華語でみられる動詞述語文には，有標と無標の対立を示すかのような語順の類型があることがわかった。また，「有」は多くの語順類型に伴うことを確認し，普通話と異なる台湾華語の特徴を示した。台湾華語にみられる動詞述語文の語順の類型は，意味機能，情報構造とも関わることが予想される。この問題に関しては今後の課題とする。

（なかむら　まいか・言語科学専攻）

参考文献

新井一二三（2019）『台湾物語：「麗しの島」の過去・現在・未来』筑摩書房

[10]（51）は台湾華語話者の友人から筆者に送られてきたメッセージである。

沖森卓也・蘇紅（2014）『日本語と中国語』朝倉書店
風間伸次郎・山田怜夫（2021）『28 言語で読む「星の王子さま」世界の言語を学ぶための言語学入門』東京外国語大学出版会
加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社
加藤重広（2007）『ことばの科学』（学びのエクササイズ）ひつじ書房
輿水優・島田亜実（2009）『わかる中国語文法』大修館書店
木村英樹（2017）『中国語はじめの一歩』（新版）筑摩書房
木村裕章（2004）「中国語における自動詞と他動詞の分類について」『東亜大学紀要』（３），pp.37-51.
徐烈炯・劉丹青，木村裕章訳（2017）『主題の構造と機能』日中言語文化出版社
朱德熙，杉村博文・木村英樹訳（1995）『文法講義：朱德熙教授の中国語文法要説』白帝社
張佩茹（2021）『もっと知りたい台湾華語』白水社
沈家煊，古賀悠太郎・李夢迪訳（2018）「「処置文」をどう処置するか？―“把（BA）”構文の主性について―」『認知と中国語文法』日中言語文化出版社，pp.183-225.
林初梅・吉田真悟（2022）『台湾華語』（大阪大学外国語学部世界の言語シリーズ 18）大阪大学出版会
北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編，松岡栄志・古川裕訳（2004）『現代中国語総説』三省堂
守屋宏則（1995）『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店
李臨定，宮田一郎訳（1993）『中国語文法概論』光生館
Greenberg, Joseph H.（1963）“Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements.” In Joseph H. Greenberg（ed.）, *Universals of Language*. Cambridge MASS: MITpress.
Li, Charles N & Sandra A. Thompson（1973a）“An explanation of word order change from SVO to SOV” *Foundations Language* 12, pp.201-214
Li, Charles N & Sandra A. Thompson（1973b）“Historical change of word order: a case study of Chinese and its implication” In John M. Anderson & Charles Jones（eds.）*Historical Linguistics*
Li, Charles N & Sandra A. Thompson（1975）“*The Semantic function of Word Order: A Case Study in Mandarin*” in Charales N. Li.（ed.）
Li, Charles N & Sandra A. Thompson（1981）“*MANDARIN CHINESE A Functional Reference Grammar*” University of California Press.
Matthews, Stephen（2006）“On Serial Verb Constructions in Cantonese” *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*,（ed.）by Aikihenvald, Alexandra Y. & Dixon, R. M. W. pp.69-87. Oxford & New York: Oxford University Press.
Tai, H.-Y. James（1973）“Chinese as a SOV language. In C. Corum et al” *paper from the Nineth Reginal Meeting of Chicago Linguistic Society* Chicago: Chicago University Press.
Wang, Pin（2025）“Chinese coverbal phrases and coverbs: a systemic function account” *Lingua*, 321, pp.1-23.

辞書類

三省堂『言語学大辞典』（第 6 巻：述語編）1996，亀井孝・河野六郎・千野英一（編）

用例出典

浅田次郎（2000）『鉄道員』（集英社文庫）集英社
淺田次郎，葉挺昭訳（2023）『鐵道員』圓神出版社
中央研究院『現代漢語平衡語料庫』https://asbc.iis.sinica.edu.tw/
夏目漱石（1986）「夢十夜」『夢十夜：他二編』（岩波文庫）岩波書店

夏目漱石，周若珍訳（2020）『夏目漱石短篇小說集』笛藤出版
夏目漱石，楊明綺訳（2021）『夏目漱石短篇集 夢十夜與永日小品』三友圖書
夏目漱石，高詹燦訳（2015）『少爺與夢十夜』好讀出版
Netflix 台湾映画『瀑布』
宮澤賢治，徐宇甄訳（2023）「喬凡尼的鐵道」『銀河鐵道之夜』八方出版

付記

本稿の執筆にあたり 4 名の台湾華語話者（台湾から北海道内にある大学に交換留学中の大学生と大学院生：1990 年代から 2000 年代生まれ）を対象にインフォーマント調査を実施した。4 名の台湾華語話者のうち 3 名の母方言が閩南語，1 名の母方言が阿美語である。調査は，2025 年 7 月上旬から 8 月下旬にかけて，札幌市内（北海道大学内・大通のカフェ）で個別に計 4 回に分けてアンケートとインタビューを行った。調査に協力いただいた 4 名の台湾人留学生に感謝申し上げる。

10.14943/rjgshhs.25.l 187

日本語のヴォイス体系における再帰態の妥当性の検討

黄　　銘　君

要　旨

本稿は，日本語におけるヴォイス体系の中で再帰態が占める位置とその有効性を検討するものである。従来研究においては，能動・受動・使役を中心とするヴォイスの枠組みは概ね共有されているものの，自他対応，可能態，再帰態といった周辺的カテゴリーの扱いについては議論が分かれ，日本語のヴォイス記述に一貫性を欠いてきた。さらに，能動は形態的に無標であるため，受動や使役と同列に論じることの妥当性にも問題がある。

本稿ではまず，能動・受動・使役を中心とする従来のヴォイス定義と分類を先行研究に基づき整理し，自他対応，可能態，再帰態など周辺的カテゴリーの扱いに揺れがあることを指摘する。次に，一般言語学の枠組み，とくにShibatani（2006）やZúñiga & Kittilä（2019）の理論を参照し，ヴォイスを形態的変化に限らない概念的カテゴリーとして再定義し，再帰態を中動態の中核として位置づける立場を確認する。

日本語では形態的な再帰標識や再帰動詞は存在せず，再帰性は意味や文脈によって解釈されるため，伝統的なヴォイスの定義（形態変化・格交替）に基づいては再帰態を明確に区別できない。しかし，意味論・認知意味論的視点を導入することにより，再帰態をヴォイス体系に含める理論的基盤を構築することが可能であることを示す。

1．はじめに

本稿では，日本語における「ヴォイス（態）」の概念とその体系的構成に焦点を当て，とりわけ再帰態の有効性とその分類上の位置づけについて検討する。

ヴォイスとは，動詞の形態変化と格構造の変化に関わり，事態において関与する要素のうち，どの関与者が文の焦点として表現されるかを示す文法的カテゴリーである。

一般に，日本語では受動態・使役態が中心的なヴォイスとして広く認識されてきたが，それに加えて，可能態，自発態，自他対応，さらには再帰・相互構文などをヴォイスの現象として論じる立場も存在する。また，能動態の扱いについては，中心的ヴォイスと同列に置くか否かについて先行研究間で揺れがある。能動は形態的に無標であることから，受動や使役と同列に論じることの妥当性には疑問が残る。

さらに，再帰態の扱いについては，先行研究において見解が分かれており，その体系内での位置づけは多様である。たとえば，村木（1991）や高橋（1985）は，動作主体が自ら作用を及ぼすような表現を再帰態（reflexive voice）と捉え，ヴォイスの一種に含めている。一方，早津（2005）は，再帰態を日本語においては文法カテゴリーとして認めがたいとし，これを「対応自他動」の問題に帰属させる立場を取っている。

本稿ではまず，日本語におけるヴォイスの定義に関する先行研究を概観し，再帰態がどのように取り扱われてきたのかについての議論を整理する。さらに，一般言語学におけるヴォイスの議論を踏まえ，ヴォイスの概念および再帰態の起源を明らかにした上で，日本語の態体系に再帰態を含める妥当性を再検討することを目指す。

2．日本語におけるヴォイスの定義

本節では，ヴォイスに関する従来の先行研究を概観する。これまでの先行研究では，ヴォイスをめぐって多様な議論が展開されてきたが，主に以下の二つの側面に注目が集まっている。すなわち，「格構造の変化に伴って，動詞の形態が変化する」という形態的な側面と「ある事態において動作や作用がどの関与者を中心として表現されるか」という意味的側面である。

先行研究において，ヴォイスの分類や捉え方には相違が見られるものの，能動態，受動態，使役態が中心的なヴォイスとして位置付けられている点はほぼ共通している。ここでは，先行研究を取り上げ，その特徴と相違点を整理していく。

2.1　金田一春彦（1954）

金田一（1954：235）はヴォイス（相）とは，動詞の表す動作・作用に対して主語がどのような関係に立つかを区別して示す語形変化であると定義している。また，ヴォイスの分類として，一般的に能動態，受動態，使役態と中相態[1] が設けられているとし，さらに，自然可能態[2] も中

[1] 金田一（1954）は中相態について，インド・ヨーロッパ語では受動態が発達する以前に存在した形式であり，「受動的な意味をもった，受動態ならざる自動詞」という意味であると述べている。例えば，英語の“The book sells well”における“sell”が「売れる」という意味で用いられる点はその典型的な例である。また，日本語では「中相態」という用語が好まれる傾向にあり，「中相動詞」と呼ぶべき語として，「煮エル（煮た状態になる），売レル（売った状態になる），クズレル（くずれた状態になる），

相態に類似したものとして挙げている。

（1） 書ク（能動態）
（2） 書カセル（使役態）
（3） 書カレル（受動態）
（4） 書ケル（コナン字ガ書ケテシマッタノ書ケル）（中相態）

（金田一 1954）

2.2 鈴木重幸（1972）

鈴木（1972）はヴォイスを「たちば」という用語で説明し，「動詞にはうけみのたちば，つかいだてのたちば，できるたちばがある」と述べている。鈴木（1972）はヴォイスを以下のように論述している。

動詞のたちば（voice）とは，動詞のあらわす動き・状態の主体・対象やそれに関係する第三者と主語・対象語との関係をあらわす文法的なカテゴリーである。すなわち，動詞のたちばによって，動詞の語い的な意味としてしめされる動き・状態の主体・対象やそれになんらかの関係にある第三者などの，どれを主語とし，どれを対象語としてあらわすかがきめられるものである。たとえば，接尾辞「れる／られる（-are-ru ／-rare-ru）」「せる／させる（-ase-ru ／-sase-ru）」などをつけてつくられる文法的な派生動詞によってあらわされる。

（鈴木 1972：275-276）

2.3 仁田義雄（1981）

仁田（1981）はヴォイスに関して，以下のように論じている。

「『態』とは，動詞の形態的な範疇であるとともに，動詞の表す動作や作用の成立に関与する関与者のどれを中心にして，その動作や作用の実現を把握・表現するか，といったことにかかわるものである。動作や作用は，その実現に必要な関与者が決まっている。それが「格」である。態は，そういった動作や作用の語彙的意味によって決まってくる関与者間の相互関係の図式を，何を中心として把握・表現するか，それがいかなるありかたを取る実現であるといった，動作図式，作用図式の把握の仕方にかかわるものである。一般に，日本語の態としては，能動，

キマル（きめた状態になる）」などがあるとされている。

[2] 金田一（1954：240）は「心なき身にもあわれは知られけり（西行）という例ををあげ，「自然可能態」の特徴は「動作・作用が自然に行われること」にあり，「状態の変化」を表す中相態とは意味的に区別されるべきであると指摘している。

受動，使役，可能，自発などの態があげられる。能動や受動や使役の態と自発や可能の態とは，基本的な性質を異にしている。敬譲や希望は態ではない。敬譲は待遇性の問題であり，希望は表現意図の問題である。狭義では，態は能動・受動・使役に限定するほうがよいだろう。更に，態の体系の基本は，能動態と受動態の対立である。」

仁田（1981：110）

なお，仁田（1981）によるヴォイスの分類は以下のように整理できる。

狭義のヴォイス：能動態，受動態，使役態
広義のヴォイス：能動態，受動態，使役態，可能態，自発態など

2.4　寺村秀夫（1982）

寺村（1982：208）は日本語のヴォイスを「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と規定している。また，格の移動に伴い，述語に予測可能な形態素の変化が現れる場合は「文法的な態」とされ，そうでない場合，すなわち辞書的に個別に記述されるようなものは「語彙的な態」として扱われている。

（5）　太郎ガ浜辺デ亀ヲツカマエタ。
（6）　亀ガ浜辺デ太郎ニツカマエラレタ。
（7）　亀ガ浜辺デ太郎ニツカマッタ。

（寺村 1982）

（5）は太郎を主語とする能動文であるが，（6）のような直接受身文では（5）の述語「つかまえる」の語幹に「-areru」という接辞が付加され，「亀」が主語となり，「太郎ガ→太郎ニ」，「亀ヲ→亀ガ」といった格の移動変化が見られる。このような構造は「文法的な態」の一つの型とされている。寺村（1982）は「格の移動と動詞の形態の相関関係」は重要であり，無視すべきではないと主張している。

一方，（7）のように自動詞句構文に転換される場合，これは規則的な派生ではなく，「語彙的態」として扱うべきだとされる。「捕まる」のような自動詞表現と（6）のような受動態表現の間には意味的な連続性が存在し，単に形態上の規則性や生産性が高いという記述だけでは不十分であると指摘している。

さらに，以下のような例に見られる相互動作や授受表現についても検討されている。

（8a）　太郎ガ花子ト結婚シタ。

（8b）　花子ガ花子ト結婚シタ。
（9a）　小津ガ篠田ニ影響ヲ与エタ。
（9b）　篠田ガ小津ニ影響ヲ受ケタ。
（10a）太郎ガ猿ニミカンヲヤッタ。
（10b）猿ガ太郎ニミカンヲモラッタ。

（寺村 1982）

（8a）（8b）のように，格の構成要素が変化しても述語形態は変化しない場合，それはヴォイスのカテゴリーには含まれない。また，（9a）（9b），（10a）（10b）のように格の移動を伴っても述語が変化しない場合，これらは語彙的な対立に過ぎないとされ，ヴォイスとは異なる現象であると論じられている。

以下，寺村（1982）によるヴォイスの捉え方を整理する。

文法的な態：受動態，可能態，自発態，使役態
語彙的な態：自他対応

2.5　村木新次郎（1991）

村木（1991：1）はヴォイスの定義について，次のように述べている。「ヴォイスは動詞の文法範疇のひとつではあるのだが，動詞自身の形態的な対立関係を問題にする点に，他の文法範疇と区別される特徴がある。というよりも，むしろ，ヴォイスにとっては，文の関与者のうちどのメンバーを中心にのべるかという文の意味構造が主役で，動詞の形態は文の意味構造にもとづく統語論的な側面と，述語になる動詞がどのような形態をとるかをいう動詞の形態論的な側面の相互関係の体系であるといえる」。つまり，村木（1991）によれば，日本語におけるヴォイスとは動詞の形態と文の意味構造の相互関係に基づく体系[3]であると捉えることができる。

また，村木（1991：2-3）は，ヴォイスと関係する文のタイプとして，次の八つの文型を挙げている。「受動文」「使役文」，「自動詞文と他動詞文」，「相互文」，「再帰文」，「可能文，希望文，自発文」，「授受文」「てある文」。

2.6　益岡隆志・田窪行則（1992）

益岡・田窪（1992：101）はヴォイスを次のように定義している。

[3] 村木（1991）によれば，言語使用において，文脈・場合・状況に応じて話し手が選びとる文の意味構造を実現する役割を担っているのが動詞の形態であり，その動詞の形態は「文の意味統語論的な機能に対応して分化している」とされる。

「接辞の付加に伴って補足語の格が規則的に変更する現象にかかわる文法形式」。

たとえば，「子供が叱られる」のような受動表現では，接辞「(r)areru」が付加されることにより，「を」格が「が」格に変化する。また，「子供を寝させる」のような使役表現では，接辞「(s)aseru」が用いられ，「が」格が「を」格へと変化する。これらのように，格の交替を伴う構文がヴォイスの代表的な表現であるとされている。

さらに，益岡・田窪は，接辞「(rar)eru」を付加する可能表現についてもヴォイスの一種として位置づけている。特に，もとの動詞が他動詞である場合には，「を」格が「が」格に変更されることがその特徴として挙げられる。

2.7　早津恵美子（2005）

早津（2005：35）はヴォイスを次のように定義している。

「動詞の表す動きの成立に関わるいくつかの要素のうちいずれを主語として述べるかを，動詞の語形変化によって表しわける文法カテゴリー」

また，早津（2005）はヴォイスを以下のように分類している。中心的なヴォイスには「原動[4]」「使役」「受身」および「対応自他動」が含まれ，周辺的なヴォイスとしては，「シテモラウ-スル」「シテヤル／シテクレル-シテモラウ」のほかに，「可能」「自発」「シテアル」が挙げられている。さらに，早津（2005）によるヴォイスの分類は以下のようにまとめることができる。

中心的なヴォイス：能動態，使役態，受身態，自他対応

周辺的なボイス：「シテモラウ-スル」，「シテヤル／シテクレル-シテモラウ」，可能態，自発態，「シテアル」

2.8　佐藤琢三（2005）

佐藤（2005）は，仁田（1981）および寺村（1982）の立場を踏まえ，仁田が述べた「ヴォイスの体系の基本は能動と受動の対立である」という見解を概観しつつ，寺村（1982）の見地に立って，受動だけではなく，使役や自他対応もヴォイスの体系の枠組みに含まれると主張している。

さらに，佐藤（2005）はプロトタイプ論の観点からヴォイスを次のように定義している。

[4] 早津（2005）が用いる「原動」という術語は接辞がつかない「能動」に相当する用語である。

概念規定：主語を中心とした事態の関与者と述語の表す動きとの意味的関係を示すカテゴリー。

（a） 形態：二つの文に格の交替を伴いうる述語の形態的対立が認められる。
（b） 統語：二つの文の主格の名詞句が義務的に異なる。
（c） 意味：二つの文がともに動きを表す。

（佐藤 2005：193）

このような定義に基づき，佐藤（2005）は以下のような例を取り上げ，可能態がヴォイスのプロトタイプから逸脱していることを示している。

（11a） 雅子さまがフランス語を話す。
（11b） 雅子さまがフランス語を話せる。
（11c） 雅子さまにはフランス語が話せる。
（12a） 選挙民が細川氏を選出した。
（12b） 細川氏が選挙民によって選出された。

（11b）では（11a）と主格の名詞句が同じであり，（11c）では異なっている。したがって，統語条件（b）が常に満たされているとは言えず，プロトタイプ的なヴォイスの定義から逸脱していると考えられる。

加えて，（11b），（11c）はいずれも主体の非意志的状態を表す点で，（7a）の能動文とは性質が大きく異なっており，ヴォイス体系には含まれにくいとされる。

一方，（12a），（12b）では，関与者と述語を表す動きという意味的関係が明確に捉えられ，プロトタイプの条件を満たしている。

2.9 林青樺（2009）

林（2009）はヴォイスの定義について次のように述べている。

ヴォイス（態）というのは，事象に関わる参与者が文においてどのような役割を果たしているのかという点に関わる文法的な概念であり，二つの文が互いに形態的（文の述語）・統語的（文の必須要素である名詞句）・意味的な対立関係を成すことを表わすものである。

（林 2009：17）

2.10　日本語記述文法研究会（2009）

日本語記述文法研究会（2009：207）はヴォイスを次のように記述している。

ヴォイスとは，事態の成立に関わる人や物を表す名詞が，どのような形態的なタイプの動詞とともに，どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリーである。

この定義において，ヴォイスの中心的な表現としては，無標の能動文および有標の受身文と使役文が挙げられている。さらに，以下のように分類されている。

中心的なヴォイス表現：能動文，受身文，使役文
周辺的なヴォイス表現：可能構文，自発構文，相互構文，再帰構文
（日本語記述文法研究会 2009：208-209）

（13）　田中が佐藤をたたいた。（能動文）
（14）　佐藤が田中にたたかれた。（受身文）
（15）　鈴木は田中に佐藤をたたかせた。（使役文）
（16）　私はインド料理が作れる。（可能構文）
（17）　私にはふるさとが懐かしく思い出された。（自発構文）
（18）　私は思わず山本さんと見つめあっていた。（相互構文）
（19）　私は舌をかんでしまった。（再帰構文）

また，日本語記述文法研究会（2009）は再帰構文について，「対象を表すヲ格名詞をとる他動詞が対象に対する働きかけを通して，主体自身に対する働きかけも行うというもの」と定義している。以下の例は対象を表す名詞として身体部位あるいは付着物をとっている例である。（21）のように，着衣動詞を用いる例では，「他動詞でありながら自動詞に近い意味関係をもっている」と指摘されている。

（20）　手を上げて，横断歩道を渡る。
（21）　私は浴衣を着た。

ただし，この定義はヴォイスを格・意味的側面から規定しており，ヴォイスをまず形態的な文法範疇として捉える立場からは妥当性に疑問がある。日本語におけるヴォイスは接辞「-rare」（受動）や「-sase」（使役）によって標示され，能動は形態的に無標であるため，これらを同列に扱うことは理論的に問題が残る。この点については，第 3 節で改めて問題点として整理する。

2.11　金水敏（2014）

金水（2014：43）はヴォイスについて次のように述べている。

ヴォイスとは，欧米語では能動相に対して受動相（passive），中相（middle）等の動詞の形態を総称する概念である。これを動詞の形態と項構造の対比に関する範疇と捉えるなら，日本語では（ラ）レル形（受動，自発，（尊敬））に加えて，（サ）セル形（使役）もヴォイスの枠内で捉えるのが適切である。

さらに，日本語では自動詞と他動詞に形態的対立が存在するため，動詞の自他（他動性）もヴォイスと連続的な関係にあると考えられる。

加えて，可能動詞（「書ける」「読める」等）および，いわゆる「ら抜きことば」と呼ばれる「見れる」「食べれる」などの形式もヴォイスの系列に含まれるものとして捉えることができると論じている。

3．日本語にけるヴォイス研究の問題点

前節では，日本語におけるヴォイスの定義や分類に関する代表的な先行研究を概観し，その分類が多岐にわたっていることが観察された。以下では，それらの先行研究に見られる主な問題点を整理する。

まず，ヴォイスをどのように定義するかについては，研究者の立場によって大きな差が見られる。例えば，日本語記述文法研究会（2009）の定義に代表されるように，ヴォイスを意味的・統語的な観点から説明する立場がある。しかし，このような立場はヴォイスを形態的な文法範疇とみなす観点からは十分ではない。意味や格シフトの変化はヴォイスに伴って派生的に生じることが多いが，ヴォイスそのものは本来，テンスやアスペクト，ムードと同様に，形態的側面に基づいて区別される文法カテゴリーとして捉えられる。日本語においては接辞「-rare」（受動）や「-sase」（使役）がヴォイスを標示しており，能動は形態的に無標として理解されるため，これらを単純に同列に並べて分類することは適切とは言い難い。さらに，林（2009）もヴォイスを意味的観点に基づいて規定しており，日本語記述文法研究会（2009）と同様に，形態素に基づく文法範疇としてのヴォイスの性質を十分に捉えているとは言い難い。

また，「自他対応」をヴォイス体系の枠組みを含めるか否かという点で，先行研究の立場に違いが見られる。寺村（1982）は自他対応をヴォイスに取り込むべきであると最初に提唱したが，これに対しては，ヴォイスに含める立場（村木 1991，早津 2005，佐藤 2005，金水 2014）と含めない立場（益岡・田窪 1992，日本語記述文法研究会 2009）がある。

特筆すべきは「文法的な態」と「語彙的な態」を区別して検討する立場が少数である点である。その中でも，早津（2005）は自他対応を中心的なヴォイスの一種として捉え，村木（1991）

はヴォイスの枠組みに含めており，佐藤（2005）は原型的ヴォイスの類型として位置付けている。

次に，可能態をヴォイスとして認めるか否かという点にも議論の余地がある。多くの先行研究が可能態をヴォイス体系に入れているが，佐藤（2005）のようにプロトタイプ条件を満たさないとして除外する立場も存在する。また，早津（2005）が扱った授受表現や「シテアル」文のような周辺的ヴォイスに関する議論は他研究ではあまり見受けられないようである。

さらに，再帰態，相互態などの扱いに関しても，立場の分岐が見られる。例えば，村木（1991）や日本語記述文法研究会（2009）はこれらをヴォイスの一種として扱っているが，他の研究では体系的に検討されていない。本稿では，再帰態の有効性を主題として扱うため，再帰態に関する議論に焦点を当て，先行研究における見解の相違や問題点を考察する。

ヴォイスの一形態として再帰態を認める研究には，村木（1991）や髙橋（1985）などがある。村木（1991：25）は他動詞用法の中に動作主体みずからに向けられる動作を意味する再帰性[5]を持つものがあると指摘し，以下のような動詞を再帰動詞の例として挙げている。

「浴びる」「着る」「（靴下を）はく」「（肩）をすくめる」「（首を）かしげる」「（まゆを）しかめる」。

例えば，次の例に見られるように，「浴びる」（22a）は自分自身に対して用いられる再帰的な動詞であるが，「浴びせる」（22b）は他者への動作を表し，再帰性を持たないとされている。

（22a）　太郎は（頭から）冷水を浴びた。　（村木 1991：25）

（22b）　太郎は花子に冷水を浴びせた。　（村木 1991：25）

ただし，村木（1991）が挙げた再帰動詞の例の一部については，用法の妥当性に検討の余地がある。例えば「眉をしかめる」は，基本的には「顔をしかめる」の転用と考えられ，他の身体部位（「目」「口」など）を目的語とすることはできない。このような用例は再帰動詞の典型とみなすには慎重さを要するだろう。

また，村木は「（自分の）手をたたく」「（自分の）足を折る」「腰を痛める」などの表現にも再帰性が認められると述べ，さらに，「風邪をひく」，「下痢をする」「くしゃみをする」，「汗をかく」といった病理・生理現象に関わる表現についても，他動性を欠きながら再帰性の特徴を持つと指摘している。

一方，髙橋（1985）は「花子が足をおった」のような文を例に，「再帰態（reflexive voice）」をヴォイスのカテゴリーの一種として挙げているが，早津（2005）はこれに対して，「言語によっ

[5] 村木（1991）は再帰性とは他動詞でありながらその動詞の意味する運動が動作主体自身に向けられるという性質を指すとされる。

ては文法カテゴリーとして再帰態を認め得る言語もあろうが，日本語ではむずかしい」と批判的である。また，「足をおった」が「花子は足がおれた」のような自動詞文と同様，主語が変化を被る主体であるという点で，「対応自他動」の問題とも関わっていると述べるが，具体的な考察はなされていない。

以上のように，日本語におけるヴォイス研究では，自他対応の扱いや可能態・再帰態の位置づけに関して明確な扱い方がなされておらず，その定義や分類にも大きな揺れが見られることが明らかになった。こうした課題は，ヴォイスという概念自体に対する理論的枠組みの相違が関係していると考えられる。そこで次節では，一般言語学におけるヴォイスの捉え方に目を向け，先行研究を概観することで，日本語におけるヴォイス現象を捉えるための理論的枠組みの再検討を試みる。

4．一般言語学におけるヴォイスの概念

4.1　亀井ほか（編）（1996）

亀井ほか（編）（1996：865）によれば，態（voice）とは，動詞が表す動作と動作主・受動者の関係を文法的に標示する範疇であり，印欧語では主に能動態と受動態の対立として実現される。また，古代印欧語における中動態の存在は，受動態や再帰動詞の発展に重要な役割を果たしているとされる。

また，亀井ほか（編）（1996）は態について次のように記している。

態（voice）は印欧語の動詞の文法範疇の一つであり，英語などでは，能動態（active voice）と受動態（passive voice，被動態ともいう）の区別として表わされている。これは，動詞の表わす動作と，その動作を起こす者（動作主 agent），および，その動作を受ける者（受動者 patient）との関わり合いを示すもので，その動作を起こす者が主語となる場合は，その動詞は能動態の形をとり，その動作を受ける者が主語となる場合は，その動詞は受動態の形をとる。たとえば，英語で，Jack hit Paul.「ジャックはポールをなぐった」の hit は能動形（active form），Paul was hit by Jack.「ポールはジャックになぐられた」の was hit は受動形（passive form）である。この２つの表現は，同じ事態，すなわち，ジャックがポールをなぐったことを述べているが，主語の選択が違っており，受動態では，能動態の目的語が主語に転換している。

そして，受動態が起こるのは，印欧語のような，主語を必ず明示する両肢言語（→単肢言語と両肢言語）においてはじめて可能である。大体，受動態の表現は，その動詞が目的語を要求する他動詞に限られるのであるが，能動態の表現で目的語となるものに焦点を合わせて主語と見立てることによって，動詞の方を受動形に変えなければならなくなる。しかし，日本語のような単肢言語にも，態に類似する現象は観察される。

受動形は，印欧語全体の長い歴史の発展の中で，はじめからあったものではないらしい。ギリシア語やサンスクリットのような古い印欧語には，受動態とは違う，中動態（middle voice）とよばれるものがあって，能動態と対立していた。この対立を，diathesis とよぶ。中動態とは，動詞の表わす動作が主語となるもの自身に戻ってくる場合である。たとえば，ギリシア語で，λούω は「私は洗う」で能動形であるが，λού-ομαι は「私は私自身を洗う」で中動形（middle form）であり，人称語尾を異にする。この中動形が受動態に用いられるようになったのであるが，これは中動態では主語のさすもの自身が動作の目的になるので，その中に目的語の主語への転換の契機が含まれているからである。後世の多くの印欧語にみられる再帰代名詞（reflexive pronoun）を伴う再帰動詞（reflexive verd）は，この中動態の延長上にあるもので，この再帰動詞も，しばしば受動的な意味に用いられる。なお，サンスクリットには，第二次活用として受動語幹（-ya-）があり，ギリシア語の中動活用の一部に受動を示す要素（-θη-）がみられる。

4.2　Shibatani（2006）

Shibatani（2006：229–230）は，従来のヴォイスの定義が主に統語的変換（主語と目的語の入れ替えなど）に基づいており，意味の変化を伴わないことを前提としている点に問題があると指摘する。たとえば，Crystal（2003）の定義[6] では，ヴォイスとは「主語と目的語の関係を変える文法カテゴリーであり，意味は変わらない」とされているが，Shibatani（2006）はこの定義がヴォイスの本質を捉え損ねていると批判し，ヴォイス現象は単なる文法的操作ではなく，人間の行為に対する認知に根ざした概念的な枠組みとして理解されるべきであると主張する。

この立場に基づき，Shibatani（2006：217）はヴォイス現象を人間の行為に対する認知に根ざした概念的基盤をもっており，行為の「進化的特性（evolutionary properties）」，すなわち行為の起源，発展，終結を基盤とする概念として再定義する。Shibatani によれば，言語は文法的対立の体系を通じて，話し手が伝達の目的に応じて重要だとみなす行為の進化的特性に関する概念的対立を表す手段である。

Shibatani（2006）は，これまでの能動・受動の対立という限定的な枠では説明できなかった，再帰・中間・自発・意志・使役・逆受動・能格・分裂格標示（split case-marking）といった多様

---

[6] Shibatani（2006: 264）では Crystal（2003）によるヴォイスの定義が次のように説明されている。「態（Voice）」とは，文や節の構造を文法的に記述する際に用いられるカテゴリーであり，主に動詞に関して，文が動詞の主語と目的語の関係をどのように変化させ得るかを表すために使われる。このとき，文の意味そのものは変わらない。主要な区別は「能動態」と「受動態」の間にある。…他の言語では，さらに別の態の対立が見られることもある。たとえば，ギリシャ語の「中動態」には「再帰的意味」をもつ動詞（She cut herself「彼女は自分自身を切った」）が含まれる。また，言語において態と関連するいくつかの構文（たとえば，「再帰」「使役」「非人称（impersonal）」構文なども存在する。」

な現象を詳細に分析し，これらもヴォイスの一形態として捉えるべきであり，能格態／逆受動態の対立，使役構文，再帰構文，中動態，分裂格標示などもヴォイスの領域に含まれるべきだと論じる。これは，印欧語中心の定義が恣意的にヴォイスの範囲を限定してきたことへの批判であり，たとえばインド・ヨーロッパ語族における能動態と中動態の対立は，「行為が行為者の個人的領域にとどまるかどうか」という概念的対比に基づいているとされる。

とりわけ再帰文に関して，Shibatani（2006: 218）は Crystal（2003）の定義が再帰をヴォイスのカテゴリに入れていない点を批判し，再帰構文を中動態の一部として明確に位置づける。再帰文は「ヴォイスに関連する構文」とは認識されているものの，「適切なヴォイス構文」とは見なされておらず，中動態との関係性も不明瞭であると指摘されている。たとえば“John hit himself”という表現は，「行為が行為者の個人的領域（自身の身体）内で完結する」という点で，“John hit Bill”のように領域外に作用が及ぶ通常の能動文とは明確に区別される。また，古代ギリシャ語の“loúô khitôna”（シャツを洗う）と“loúomai khitôna”（自分のシャツを洗う）の対比に見られるように，項構造が変化せず，同一でも意味的差異が生じうることを示し，意味に基づいたヴォイスの理解の重要性を強調する。（Shibatani 2006: 232–236）

以上より，Shibatani（2006）では，ヴォイスは必ずしも動詞の形態変化や統語構造の項の変化を伴う必要はないとし，行為の意味内容や参与者の関与の様態こそがヴォイスの中核であると考える。たとえば，再帰態や中間態は行為の始点と終点が一致する事態型（participant merger）と見なされ，また能格構文・逆受動・自発・意志の区別も，意図性や制御性といった概念的パラメーターにより説明される。

さらに Shibatani（2006: 217）は，Hopper and Thompson（1980）が特定した「他動性パラメーター」の多くが，行為の「起源」「発展」「終結」といった進化的な特性に関係していると述べている。Shibatani（2006: 222）は，この行為の進化的な特性が主要なヴォイスパラメーターの基盤となると提唱している。Shibatani（2006）が提示するヴォイスの概念的パラメーターは，以下の問いの形で表現される。

行為の起源：行為はどのようにして引き起こされるか，どこで起源を持つか，動作主の性質は何か。

行為の発展：行為は動作主の個人的領域を超えて広がるか，それともその領域内に限定されるか。また，明確な受動者に意図された効果を達成するか，失敗するか。

行為の終結：行為は通常の過程を超えて発展し，事態の直接の参加者を超えて追加の実体で終結するか。

こうした立場を踏まえて，Shibatani（2006: 222）はヴォイスの概念的パラメーターを提示し，通言語的な枠組みにおいて多様なヴォイス現象を分析している。

Ⅰ．行為の起源に関するパラメーター：

意志性／自発性の対立（Volitional/Spontaneous Opposition）：「行為は意図的に引き起こされるか。」名詞の形態によっても表現されることが強調され，ヴォイスが動詞カテゴリーに限定されないことが示されている。

例えば，日本語やインドネシア語では，自発的な行為を表現するために特定の形態素（例：日本語の「-re/-rare」，インドネシア語の“ter-”）が使用されまる。この対立は，従来の定義ではヴォイス現象として広く認識されていなかったが，柴谷はこの区別が世界中の言語で広く見られることを示し，ヴォイス現象であると主張している。

（23a）　僕はよく昔のことを思う。（意志性）
（23b）　最近昔のことがよく思われる。（自発性）
（24a）　Ali memukul anak-nya.（意志性）（Ali hit his child）
（24b）　Ali ter-pukul oleh anak-nya.（自発性）（Ali accidentally hit his child）

（Shibatani 2006: 224）

使役／非使役の対立（Causative/noncausative Opposition）：行為が主たる行為の行為者から生じるのか，それとも行為連鎖の先頭に立つ別の行為者から生じるのか，という起源に関する対立である。使役構文は，新たな行為の起点となる追加の存在を伴うため，動詞の項の数を増やす機能を果たす。使役は形態論的な概念ではなく，意味的な概念として捉えられ，語彙的使役，形態的使役，迂言的使役といった多様な表現タイプが含まれる。

Ⅱ．行為の発展に関するパラメーター：

このパラメーターは，行為がどのように発展するか，行為者の個人的な領域を超えて広がるか，またはその領域内に限定されるか，意図された影響が明確な受動者に達成されるかどうかに焦点を当てている。

能動態／中動態の対立（active/middle voice opposition）：

Shibatani（2006）は能動態と中動態の対立は，古代ギリシャ語やサンスクリット語といった古典インド・ヨーロッパ語の研究において最もよく知られており，行為が行為者の個人的な領域を超えて広がり，明確な受動者に影響を与える場合が能動態，行為の発展が行為者自身の個人的な領域内に限定され，その効果が行為者自身に蓄積する場合が中動態であるとされる。

Shibatani（2006）の枠組みでは，再帰構文，典型的な中動態，単一参加者事象（自動詞的行為）のすべてが，行為が行為者の領域内に限定されるという共通の概念的特徴を持つ「中動態」の領域に含まれる。これは，形式的な標識の有無ではなく，行為の概念的性質に基づいてヴォイ

ス現象を統一的に捉えるものである。

例えば，再帰構文（Reflexive Constructions）は，行為が行為者自身の個人的な領域内に限定される最も明確なケースの一つであり，紛れもなく中動態タイプに含まれるとされている。英語の例では，“John hit himself”（ジョンは自分を叩いた）が挙げられる。この場合，叩くという行為はジョン自身の個人的な領域内で完結している。バリ語の例では，“nyagur awak”（自分自身を叩く）がある。これは迂言的な（periphrastic）中動態の形として示されている。ロシア語の例では，“Ivan ubi-l sebj-a.”（イワンは自身を殺した）」が挙げられる。これらは再帰代名詞を使用することで行為が行為者自身に限定されることを示している。

典型的な中動態は，中動態接辞などによって形態的に表現される中動態を指すとされる。行為が行為者の身体の手入れなど，個人的領域内で行われる場合が多いと指摘している。例えば，バリ語の例では，“ma-cukur”（ひげを剃る）は形態的な中動態の例として挙げられており，古代ギリシャ語の例“loúomai khitôna.”（私は自分のシャツを洗う／私は自分のためにシャツを洗う）」などが挙げられる。これらは形態的な中動態であり，項の配列を変更せずに意味の対立を表現すると述べている。

また，中動態の標識を伴わず自動詞を語彙化された中動態形式とみなされるバリ語の例，“negak”（座る）をあげながら，これは動作の発展が行為者の領域内に閉じ込められる場合に，自動詞として語彙化されるものであるとされる。

さらに，このパタンーの対立は意味的な対立を伴い，必ずしも項の統語的配列を変化させない。

（25a） *John hit Bill.*

（25b） *John hit himself.*

（Shibatani 2006: 232）

能格／逆受動の対立（ergative/antipassive opposition）：

行為が完全に発展し，受動者に対して意図された効果を達成するかどうかに焦点を当てる。逆受動文は，受動者への意図された影響が達成されない状況，または動作主に全体的な影響を与えない状況を示す。逆受動態は，受動者の談話上の関連性が低いことを示すため，動詞の項の数を減少させる機能がある。

Ⅲ．行為の終結に関するパラメーター：

このパラメーターは，行為が通常のコースを超えて発展し，イベントの直接的な参加者を超えて追加の存在（受益者／被害者）に終結し，新たな終点としてその影響をもたらすかどうかを問う。

（受益／被害／適用）（Benefactive/Malefactive/Applicative）の対立：

これらは行為が対象となる受動者を超えて，追加的な第三の参与者に影響を及ぼす状況を表すため，談話場の関連性を持ち，動詞の項の数を増加させる機能がある。

以上の 3 つの種類の対立に加えて，Shibatani（2006）は語用論的に動機づけられたヴォイスシステムの検討も行った。上述の 3 種のタイプを行為の起源と，「順行（Direct）/逆行（Inverse）対立」と「能動（Active）/受動（Passive）対立」を終結することに対する相対的な談話上の位置づけとして捉えている。

これらの概念的パラメーターは，ヴォイスが単なる形態論的・統語論的な現象ではなく，人間の行為認知に基づく普遍的な概念的意味を持つことを強調し，能動態／受動態の対立にとどまらない広範な言語現象を統一的に説明するための枠組みを示している。つまり，Shibatani（2006）は通常の能動／受動のような形式的な区別に限られず，行為がどのように始まり，どのように展開し，どのように終わるかという認知的観点から理解されるべきであると主張している。

4.3　Zúñiga and Kittilä（2019）

Zúñiga and Kittilä（2019: 9）はヴォイスについて次のように説明している。

Voice as understood in the present study Voice as understood in the present study is based on semantics and syntax. It defines diatheses as mappings of the roles of the semantic arguments of predicates onto grammatical relations in clauses, and voices as diatheses formally marked on predicates.

つまり，Zúñiga and Kittilä（2019）は意味論と統語論に基づき，述語の意味的項（semantic arguments）を節内の文法関係へと対応づけるものとして定義し，ヴォイスとは，述語に形式的に標示された態として定義している。

Zúñiga and Kittilä（2019）の議論で明らかになったのは，再帰文が単に「主語と目的語が同一である」というだけでなく，受動態や逆受動態など他の態へと文法化・発展する動的なプロセスを含んでいるということである。Zúñiga and Kittilä（2019: 225）は再帰代名詞に由来する受動構文への発展パターンは特にインド・ヨーロッパ語族（ロマンス語，バルト・スラヴ語，スカンジナビア・ゲルマン語）に広く見られ，フランス語の“se”，ポーランド語の“się”，ロシア語の“-sja/-s’”，スウェーデン語の“-s”などが挙げられている。ただし，このような再帰形式の受動化はヨーロッパ以外の言語では比較的まれである。また，ポーランド語の“się”は動詞の逆受動化にも転用されており，ティルマガ語（スーダン）の相互接辞“-ínɛn”も逆受動マーカーとして再分析された例が示されている（Zúñiga and Kittilä 2019: 227）。

また，Zúñiga and Kittilä（2019: 229–231）は再帰標識（reflexive markers）の起源について，以

下の 4 つのタイプに大別している。再帰標識としてよく用いられる名詞には身体部位名詞が多く，モルドヴィン語やカーボベルデ・クレオール語では「頭」，アラビア語では「魂」，ブーラ語では「体」を表す語が起源となっている。また，「自己」を意味する名詞（フィンランド語 itse など）もこうした起源となる。

次に代名詞が起源となる場合もあり，強調代名詞（アイルランド語“é féin”）や人称代名詞の目的語（ドイツ語“mich”）などが該当する。また，動詞が再帰標識の起源となることは稀だが，サヌマ語の“ko-”「return」（戻る）という意味の動詞が再帰動作を表すことがある。

さらに，副詞や前置詞が再帰標識になることも稀にあり，Ute（ユート語）では“nanǫ́ǫs”「alone」（一人で），ビスラマ語では“nomo”「only」（だけ）などの副詞や“tì”「on」（〜の上に）などの前置詞が用いられる。一方，ザンデ語の“Mį́-ɟįmí tì-rɛ”（私は自分を殺す）のように，前置詞“tì”（on）が再帰標識として用いられる事例は珍しいとされる。

このように再帰標識の起源は多様であり，再帰性という概念が意味的にも形式的にも複雑であることを示している。そして，再帰構文の研究には通時的かつ類型論的な視点が不可欠であることを強く示唆している。

5．日本語における再帰態の有効性の検討

前節の一般言語学からの考察に基づき，ヴォイスは単なる構文的変化にとどまらず，行為の意味的性質や参与者の認知的関与に深く根ざした，概念的かつ言語普遍的な現象であることが明らかになった。

Shibatani（2006）は，従来の印欧語中心の「能動／受動」対立に代わり，「能動／中動」，「使役／非使役」，「意志性／自発性」，「能動／逆受動」の対立などを含む拡張的なヴォイス理論を提示する。その立場では，再帰態は中動態の中核を構成し，意味構造および参与者の関与性質に基づき理論的に再定義される。

一方，Zúñiga & Kittilä（2019）は，再帰構文をヴォイス体系の中で文法化や派生的変化の起点となる構造と捉え，再帰標識の起源や機能に焦点を当てる。

5.1　再帰態と類似概念

なお，日本語における再帰態の有効性を検討するにあたっては，まず再帰態と混同されやすい用語である再帰中間態や中間態（中相態）との実質的な違いを明確にしておく必要がある。

国広（1995）は，本来は他動詞であるが，表面的には自動詞のように振る舞う用法を再帰中間態と呼んでいる。例えば，「寄せる波」という表現に対応する「波が寄せる」という表現は「波がみずからを寄せる」という意味低層が想定される。そのため，このような他動詞の形を取りながら自動詞的な用法を持つ表現が再帰中間態に該当するとされる。ほかに「腹が張る」，「熱

がひく」などの用法も再帰中間態の例として挙げられている。

また，国広（1995）は「中間態」についても次のように述べている。日本語の中間態研究は主に英語の中間態（middle voice）研究に触発し，展開されてきたものである。両言語ともに，元の動詞は他動詞であるが，英語では動詞の形を変えずに自動詞的な用法として用いるのに対し，日本語では可能形に派生させることによって自動詞的に使う傾向がある。2.1 節で述べた中相動詞はこれに相当する。代表的なとしては，「このナイフはよく切れる」とか，「この本はよく売れる」などがある。

さらに，国広（1995）再帰中間態と中間態の違いについて次のように分類している。

中間態の特徴：

（A）　主語の属性を表わす（眼前に動きは見られない）

（B）　外部動作主を含む（表現されないが，意味的に存在する）

（C）　述語が新情報を含む。

再帰中間態の特徴：

（D）　主語は動作主で同時に目的語である

（E）　特定の主体の特定の出来事についても用いられる。

先行研究では再帰態は中動態の延長線に位置づけられる共通点が指摘されている（亀井ほか（編）1996，shibatani 2006）。また，通時的観点から，インドヨーロッパ語族においては，中動態が受動態や再帰動詞の発達に不可欠な役割を担い（（亀井ほか（編）1996），再帰態が受動態・逆受動態の発展に影響を及ぼすとされる（Zúñiga & Kittilä 2019）。

ただし，印欧諸語では中動態・再帰態の形態的体系が高度に確立しているのに対し，日本語では形態的カテゴリーの整備が十分に進んでおらず，もっぱら意味的側面で関与していると考えられる。本稿では，このような類型的差異を踏まえ，上述の再帰中間態および中間態は再帰態の検討対象から除外する。

5.2　日本語の再帰態の有効性

以上，再帰中間態と中間態は一見類似しているが，実際には異なる概念であることが確認された。次に，再帰態として扱われる表現の特徴について考察する。

5.2.1　日本語における再帰文の文法特性

日本語においては再帰性を形態論的に示す仕組みが存在せず，意味や文脈に依存するという言語特性がある。[7] 再帰構文は統語的には通常他動詞文と同様「X が Y（を）V」の構造をとるが，その再帰性は形態的にではなく，意味的に読み取られる。

（26） 花子はワンピースを着る。

（27） 花子は顔を洗う。

本稿では（26）～（27）のような他動詞句のうち，行為の対象が行為者自身の身体部位あるいは付着物である文を再帰文と呼ぶこととする。これらの表現においては，花子が行為者であると同時に，その動作によって影響を受ける対象でもある。以下では，このような表現は再帰態としてヴォイスの体系に含められるかどうかについて検討を進める。

一般にヴォイスは，動詞の形態変化と格構造の変化を伴って，事態の関与者のうち，どれを文の主たる焦点として取り上げるかを示す文法的カテゴリーとされている。この観点から見ると，（26）～（27）の文は対応する自動詞句を持たず，また，典型的な二項構造の他動詞句でありながら格シフトが起こらないため，格構造や動詞の変化という伝統的な態の定義を認定基準とするなら，再帰態というカテゴリーを設けることには慎重な検討が必要である。次に日本語の再帰標識をめぐって再帰態のあり方を検討する。

5.2.2 日本語の「自分」から見る再帰標識

4節で述べたように，Zúñiga & Kittilä（2019）は言語類型論の観点から再帰標識の起源を検討し，その起源を「名詞」「代名詞」「動詞」「副詞・前置詞」の4種類に分類している。

日本語の「自分」については，黄（2025）はHirose（2014）などの先行研究を踏まえ，「自分」には再帰的用法（reflexivity），視点的用法（viewpoint），および話者指示的用法（logophoricity）の三つの機能があることを確認している。

従来，「自分」を再帰代名詞として認める立場がある[8]一方で，黄（2025）は主として再帰的用法に焦点を当て，「自分」の文法機能を考察しているが，「自分」が再帰標識としての有効性を直接検証してはいない。それでも，現代日本語では「自分」が主語という先行詞と対応する用法を持つだけでなく，自称詞として，さらには関西方言における「どうしたん，自分」のような対称詞としても用いられることを指摘している。

---

[7] 黄（2024）（2025）を参照されたい。黄（2024）は日本語における再帰性の概念は動詞によって決まるわけではなく，目的語を取るその動詞句で決まるということを主張した。黄（2025）では，フランス語を代表とする西欧言語における再帰性の特徴について論じて，「フランス語における再帰性は，再帰代名詞が動作主と直接目的語の同一性を明示する点に特徴がある。」と述べた。例えば，“se lever”のような表現では，「自分自身を起こす」という意味が形式的に固定されており，対格再帰代名詞の使用によって再帰性が明確に示される。一方で，日本語には再帰性を明示する形態論的な仕組みが存在せず，再帰性の判断は文脈や意味解釈に依存する傾向が強いと指摘した。

[8] Hirose（2014: 3）は日本語には「自分」，「己」，「自ら」，「自身（特に「自分自身」や「彼自身」のような形で）」，そして「我」など英語の再帰代名詞に相当する様々な“self”を表す語が存在し，これらはいずれも再帰標識（RM）として使用することができると述べている。

以上から，日本語には形態的な再帰標識が存在しないと考えられる。

5.2.3　日本語の再帰文の意味論的分析

前述のとおり，日本語の再帰性は意味や文脈によって決定づけられる。本節では，こうした意味的な側面に注目し，再帰態の可能性を検討する。まず，再帰動詞や再帰性に関する既存研究を提示した上で再帰性の定義を概観する。

黄（2024）は「再帰性の概念を独立して設定する必要はない」という見解を再検討し，この立場に反論している。プロトタイプ論に基づき，自他動詞のプロトタイプ的意味特徴を踏まえ，再帰性の意味特徴を次のように定義した。

［A］関与している人物あるいは事物は二つあり（動作者と対象物は無生物の場合もある），行為者と対象物は同一の実体である。

［B］対象物は変化を被り，それと同時に働きかけが行為者にも変化を与える。

黄（2024）では權（1996）と李（2019）を参照していなかったが，両者も再帰性の有効性を論じており，ここではその点を補足し，研究の立場を整理しておきたい。權（1996）は他動性との比較から，動詞の「方向性」と「所有性」が再帰性に特有の重要な特徴であると指摘する。具体的には，「動作主を軸とする求心的な運動を表す」こと，および「動作主と対格との間に所有関係がある」ことを挙げている。權の見解によれば，一般的な他動詞文は遠心的な運動方向を示すのに対し，再帰文は求心的な方向性を示す。

李（2019）は再帰性の基準として，「動作主」，「動作主自身」，「変化」および「求心的」を挙げ，以下の特徴をまとめている，

（ⅰ）　参加者は動作主と対象の二つの要素がある。
（ⅱ）　動作主から対象に対して動作の働きかけがある。
（ⅲ）　対象が動作主あるいは動作主の一部である。
（ⅳ）　働きかけが動作主に回帰する。

李（2019）も自他動詞のプロトタイプ意味論を踏まえ，再帰性の有効性を検討しているが，黄（2024）の定義は主語が無生物の場合にも適用可能である点などで異なっている[9]。また，李

[9] 黄（2024）は再帰性のパラメーターを設定していないが，意味論・語用論的な側面に焦点を当て，後述するように，日本語には再帰動詞が存在せず，再帰性を論じるには句レベルの文脈が重要だと主張している。したがって，再帰動詞に関して，權（1996）および李（2019）とは異なる立場を取っている。

は以上の「事態に関与している参加者の数」,「動作主から対象に対して動作の働きかけ」,「対象が動作主あるいは動作主の一部」,「働きかけが動作主に回帰する」のようにパラメーターを設定した上で，再帰性を次のように定義している。

「動作主から発する働きかけが自分自身あるいはその一部分に回帰し，動作対象の変化によって，動作主に状態変化を引き起こす概念。」

以上の議論を踏まえると，意味論や認知意味論の観点から再帰性は一定の有効性を持つといえる。Shibatani（2006）が指摘する「行為が行為者の領域内に限定される」という意味特性を考慮すれば，再帰態というカテゴリを設定する可能性も認められる。

これに対し，黄（2024）は日本語には形態的な再帰動詞は存在せず，語彙的な再帰用法はあるものの，従来の着脱動詞や「浴びる」を再帰動詞とみなすのは不適切だとする。さらに黄（2025）では,「着る」「かぶる」なども文脈によって再帰性が失われる現象を指摘する。例えば「崩壊の波をかぶる」では，主体と目的語の同一性が保持されず，再帰性は認められない。

したがって，これらの動詞は必ずしも語彙的な再帰性を持つとは限らないと結論づけられる。この点から見ると，従来「再帰動詞」とされてきた動詞は形態的に判別できず，動詞自体の形態変化も伴わないため，ヴォイスの特徴を備えるとは言い難い。

6．おわりに

本稿では，日本語におけるヴォイス概念とその体系的構成を整理し，とりわけ再帰態の有効性と体系内での位置づけを検討した。先行研究の比較から，日本語のヴォイス研究は能動・受動・使役を中心としつつも，自他対応，可能態，再帰態などの扱いにおいて見解が分かれることが明らかになった。

一般言語学の視点からは，ヴォイスは単なる形態的変化にとどまらず，行為の意味的性質や参与者の認知的関与に基づく概念的カテゴリーであり，再帰態は中動態の延長線に位置づけられることが示唆された。

日本語の場合，形態的な再帰標識や再帰動詞は存在せず，再帰性は専ら意味や文脈に依存する。このため，再帰態をヴォイスの一形態として設定するには，形態・統語面だけでなく意味論・認知論的な基準を重視する必要がある。さらに，従来「再帰動詞」とされてきた語も文脈によって再帰性を失い得ることから，その語彙的な再帰性についても再検討が求められる。以上より，日本語における再帰態の有効性は限定的であるが，意味的・認知的観点を導入することで，ヴォイス体系の一部として理論的に位置づける可能性は残されている。

（こう　めいくん・言語科学研究室）

参考文献

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典（第 6 巻・術語編）』三省堂.

金田一春彦（1954）「時・態・相および法」『日本文法講座』 1，明治書院，pp.223-245.

金水敏（2014）「ヴォイス 2 」日本語文法学会（編）『日本語文法事典』大修館書店，pp.43-46.

黄銘君（2024）「日本語における再帰性の研究」『研究論集』23，北海道大学大学院文学院，pp.269-282.

黄銘君（2025）「着衣動詞の意味拡張――再帰性と比喩表現の考察――」『国語国文研究』第 164 号，北海道大学国語国文学会，pp.55-72.

黄銘君（2025）「「自分」の再帰的な用法に関する考察」『研究論集』24，北海道大学大学院文学院，pp.193-204.

国広哲弥（1995）「日本語の再帰中間態」『言語学林』1995-1996，三省堂，pp.417-424.

佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院，pp.184-199.

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.

髙橋太郎（1985）「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4，明治書院，pp.4-23.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』第Ⅰ巻，くろしお出版，pp.205-318.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法（改訂版）』くろしお出版，pp.104-106.

村木新次郎（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』仁田義雄（編）くろしお出版，pp.1-30.

早津恵美子（2005）「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」『日本語文法』 5 巻 2 号，くろしお出版，pp.21-38.

仁田義雄（1982）「再帰動詞，再帰用法― Lexico-syntax の姿勢から―」『日本語教育』47 号（初出），仁田義雄（2010）『語彙論的統語論の観点から』，ひつじ書房，pp.120-131.

日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法』2 第 4 部ヴォイス，くろしお出版，pp.207-300.

仁田義雄（1981）「ヴォイス」『日本文法事典』有精堂出版.

林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの諸相』くろしお出版.

權勝林（1996）「ヴォイスの体系における〈再帰性〉：日・韓対照研究」博士論文，大阪大学.

李静（2019）「日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的研究」博士論文，九州大学.（未公開）（2025 年 4 月閲覧）

Crystal, David (2003). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 5th ed. Oxford: Blackwell.

Hirose, Yukio. (2014) The conceptual basis for reflexive constructions in Japanese, *Journal of Pragmatics*, 68.

Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980). Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 2, pp. 251-299.

Shibatani, Masayoshi (2006). On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics* 44-2, pp.217-269.

Zúñiga, Fernando; Kittilä, Seppo (2019). *Grammatical Voice*. Cambridge University Press.

10.14943/rjgshhs.25.l 209

アラビア語シャーム方言における接辞の意味機能変化についての考察

── フスハーとの比較分析を通じて ──

アリ　ネスリン

要　旨

本研究は，シャーム方言における動詞接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形（ʔ○-，n○-，y○-，t○-[1]）の意味的・機能的変化を，Langacker（1977）および Eckardt（2006）の再分析理論に基づき検討した。フスハーでは接辞（ʔa-，na-，ya-，ta-）が直接法・接続法の双方に用いられ，識別は語末母音に依存する一方，シャーム方言では語尾母音が脱落し，ムードの識別が接辞の有無に委ねられることが知られている（榮谷 1995，仁一 2009，Cowell 1964）。さらに，ʕam- は進行形や反復的行為，b- は未来・習慣・可能性などを標示するが，従来研究では語用論的側面の検討が十分でなかった。本研究では，（１）b- 形とゼロ形の機能的対立，（２）ʕam- の語用論的機能，（３）複合形 ʕam- ＋b- の再解釈，（４）等位構文におけるゼロ形のテンス・アスペクト継承を分析対象とした。談話データに基づく分析により，ゼロ形は等位構文で先行動詞のテンス・アスペクトを受け継ぎ，形式的には無標でも文法的意味を帯びることが確認された。また，ʕam- と b- はテンス・アスペクト標示を超え，話者の感情・評価・丁寧さを表す語用論的意味を伴うことが明らかとなった。複合形では b- が人称標示として再解釈され，ʕam- が談話的・エモーショナルマーカーとして機能することも観察された。これらの結果は，接辞の再解釈と機能転換を通じた形態素の再構成と談話機能の変容を示し，方言文法の記述とともに，言語変化における談話的要因の重要性を浮き彫りにする。

キーワード：アラビア語，方言学，形態論，接辞，意味再分析

[1] 接頭辞（ʔ○-，n○-，y○-，t○-）の「○」は，フスハーにおいては一貫して/a/（舌を口の底に下げ，口を大きく開いて発音）に実現されるのに対し，シャーム方言では語頭の曖昧母音/ə/（舌の位置が中立的で，口をあまり開かず，力を抜いて発音）に変化する傾向があるため，母音の中立的記述として「○」で表記する。

1．はじめに

現代アラビア語の諸変種の中でも，シャーム方言（主にシリア・レバノン地域で話される口語アラビア語）は，テンスやアスペクト，ムードといった文法カテゴリをどのように表現するかという点で，標準アラビア語（フスハー MSA）と大きく異なる特徴を示している。特に，語頭に現れる接辞（ʕam-，b-）や接辞の欠落（ゼロ形 Ø-）が，文法的な意味だけでなく，話者の意図や文脈に応じて柔軟に機能を変化させるという現象は，言語変化および文法化の観点から極めて興味深い。

本研究の目的は，シャーム方言における動詞接辞の機能的変化および談話的再解釈のプロセスを明らかにすることにある。とりわけ，接辞 ʕam- および b- に注目し，これらが単なるテンス・アスペクト標示形式としてだけでなく，語用論的・談話的な機能へと拡張されている実態を明らかにする。たとえば，b- が時制表示を超えて「可能性」や「丁寧さ」のニュアンスを持つようになったり，ʕam- が強調や感情的関与のマーカーとして再解釈されるようなケースである。また，これらの接辞とは対照的に，接辞を持たないいわゆるゼロ形（Ø-）も，従来の叙想法的（subjunctive）用法を超えて，テンス・アスペクトの共有を担う談話構造的要素として再機能化されている可能性がある。たとえば，ʕam- を伴う動詞と同一文中でゼロ形が共起する場合，ゼロ形にも同じ時間的解釈が波及する現象が観察される。こうした用法は，接辞の表出がないにもかかわらず，文全体の文法的一貫性を保つために語用的に補完されていると捉えられる。

本研究ではこのような現象を，「再分析（reanalysis）」の枠組みに基づいて検討する。すなわち，言語形式の形態は変わらないまま，その機能が再解釈・再分節・再定式化されるプロセスとして理解するものである。

以上の背景を踏まえ，本稿では，シャーム方言における動詞接辞とゼロ形の機能的変化を，以下の 4 つの観点から論じる。

A. b- の潜在的意味（モダリティ）への再定式化
B. ゼロ形が等位接続構文中で時制・アスペクト情報を継承する構文的機能
C. ʕam-（ʕamma-）の強調標識への転用
D. ʕam-＋b- 複合形式における再分節と機能分化

これらの観点から，口語アラビア語における文法化と語用論的再解釈の具体的なプロセスを明らかにし，現代シャーム方言の動詞体系の変遷を理論的に位置づけることを目指す。

2．ダイグロシアとアラビア語変種について

アラビア語は世界で最も話されている言語のうちの一つであり，書き言葉と話し言葉が大きく異なるダイグロシア（二重言語）の例である。ダイグロシア（diglossia）とは，ファーガソン Ferguson（1959）によって提唱された社会言語学の用語で，日本語では「二言語変種使い分け」などと翻訳される。これは，２つの言語が一つの社会の中で共存し，それぞれの言語が特定の場面や状況で使い分けられている状況を示す。すなわち，２つの言語が互いに競合したり干渉したりせず，場面や状況によって使い分けの基準が明確に存在していることである。使い分けられる２つの言語には名前があり，片方を H 変種（高変種，High Variety），もう片方を L 変種（低変種，Low Variety）と呼ばれる。H 変種は社会的地位が高く，教育，報道，宗教などで用いられる言語変種であり，H 変種は公式な場面や書き言葉として用いられることが多い。一方，L 変種は社会的地位が低く，家族や友人との日常会話で使われる口語であり，書き言葉がない場合も多く，家族や友人との会話を通じて自然に習得されるのが特徴である。以下の図１のようになる。

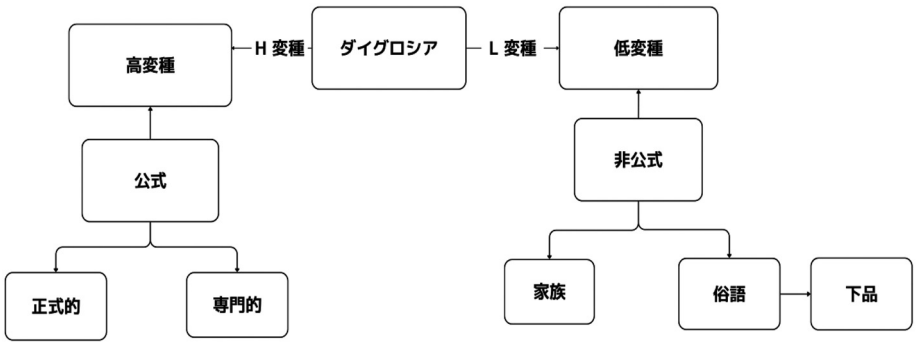


図１　二言語変種

Ferguson（1959）は，「ダイグロシア（diglossia）」の概念を通じて，一つの言語共同体において異なる社会的機能を果たす二つの言語変種，すなわち高位変種（High variety: H）と低位変種（Low variety: L）が併存する現象を明確に提示した。彼によれば，H と L は使用される状況によって厳密に使い分けられており，両者の重なりは最小限にとどまる（Ferguson, 1959: 328–329）。たとえば，H は公式スピーチや新聞記事，宗教的儀礼といった形式的場面に適しており，L は日常会話や市場でのやりとりなど，非公式な場面で主に用いられる。Ferguson は，流暢な L を話す外部者が正式な場でそれを用いた場合，または L 話者が非公式な場面で H を用いた場合には，聴衆から違和感や嘲笑を受ける可能性があると指摘している。例えば，新聞を H で音読し，内容を L で議論するという行為や，H による公式スピーチの後に L で質疑応答を行うと

いう慣習は，多くのダイグロシア社会において一般的な言語行動である。

Ferguson（1959: 333–335）は，H と L の違いが単なる使用域の違いにとどまらず，文法（grammar），語彙（lexicon），音韻（phonology）といった言語構造の各層においても体系的に区別されることを明らかにしている。

文法的側面では，H には L に存在しない格変化や動詞活用体系が存在し，L ではこれらの機能が簡略化，あるいは完全に消失している。たとえば，古典アラビア語には名詞の三格（主格・対格・属格）が存在するが，シャーム方言などの口語ではこの区別はほぼ失われている。

語彙の違いとしては，H には専門的・抽象的な語彙が多く含まれるのに対し，L は日常生活や地域文化に根差した語彙を多く持つ。両変種間では，同義であっても語彙形が異なるペア語が存在し，たとえば「見る」という意味では H の raʔā に対し，L では ʃāf が用いられる。これにより，話し手がどの変種を用いているかが直ちに識別可能となる。

音韻面では，H と L の体系は互いに類似している場合もあるが，発音における音の置換や簡略化が顕著である。たとえば，H の/θ/音は，シリアやエジプトの方言において/s/に置き換えられることが一般的である。

本研究では，こうしたダイグロシア的状況の下で，H に該当するフスハーと L に該当するシャーム方言における動詞接辞（特に接頭辞）の機能的変化に注目する。とりわけ，接辞の文法的役割の差異や意味的拡張のあり方に焦点をあて，再分析理論の枠組みに基づき，その言語変化のメカニズムを考察する。本稿では，フスハーとの比較を踏まえつつ，以降はシャーム方言に焦点をあて，その動詞接辞の機能的変化と談話的再解釈を詳細に分析する。

なお，本文中の転写は，アラビア語フスハーの IPA 転写を参考にした。アルファベットに以下の文字を用いる[2]。

ʔ, b, t, θ, dʒ, ħ, x, d, ð, r, z, s, ʃ, sˤ, dˤ, tˤ, ðˤ, ʕ, ɣ, f, q, k, l, m, n, h, w, y

この点において，シャーム方言は，アラム語と同様に/ð/，/θ/，/ðˤ/の 3 つの歯音音素は存在せず，代替音によって置き換えられる傾向がある。一方，現代標準アラビア語（MSA）には存在しない音素として/p/，/g/，/v/，/ç/の 4 音が確認されることがあり，これらは地域における民族言語（クルド語，アルメニア語，トルクメン語など）や，歴史的に接触のあった言語（トルコ語，ペルシア語など）からの借用語彙に由来すると考えられる。母音については，短母音

[2] アラビア語の文字はアラム文字にその起源を持ち，アブジャドという独特な文字体系に属している。右から左へと書かれ，文字が続け書きされるのが一般的で，主に子音を表す文字で構成されている。短母音は通常，文字で直接表記されず，「シャクル（shape/form）」と呼ばれる補助記号によって表される。アラビア語には 3 つの短母音（a，u，i）と長母音（a:，u:，i:）があり，それぞれアリフ（ア行），ワーウ（ワ行），ヤー（ヤ行）の文字が使用される。

標準アラビア語の子音音素

		唇音	強調なし 歯音	強調なし 歯茎音	強調音[1] 歯音	強調音[1] 歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音[2]	声門音
鼻音		م m		ن n							
閉鎖音	無声音		ت t		ط tˤ			ك k	ق q		ء ʔ
	有声音	ب b		د d		ض dˤ	ج dʒ[3]				
摩擦音	無声音	ف f	ث θ	س s		ص sˤ	ش ʃ	خ x ~ χ[4]		ح ħ	ه h
	有声音		ذ ð	ز z	ظ ðˤ			غ ɣ ~ ʁ[4]		ع ʕ	
ふるえ音				ر r							
接近音				ل l ~ lˤ[5]			ي j	و w			

として a，i，u，e，o，および中性母音(ə)を用い，それぞれの長母音を ā，ī，ū，ē，ō によって表記する（Cowell, 1964: 9 に準拠）。

なお，例文の語釈などで用いる略号は次の通りである。

IND：indicative mood（直接法．指示法） SUBJ：subjunctive mood（接続法．仮定法）

PERF：perfective（完結相） IMPF：imperfective（非完結相）

AP：active participle（能動分詞） IMPR：imperative（命令形） FUT：future（未来）

DEF：definite article（定冠詞） SG：singular（単数） PL：plural（複数） M：male（男性）

F：female（女性） 1，2，3：personal pronouns（人称） NEG：negative（否定）

Q：question particle（疑問辞） INF：infinitive（原形定詞）

3．シャーム方言におけるアラム語からの影響と形態的特徴

シャーム方言は，レバント地域におけるアラブ化の過程で形成された口語アラビア語であり，7 世紀以前にこの地域で話されていたアラム語やシリア語と，後に導入されたアラビア語フスハーとの接触と融合の結果として成立した。この過程により，シャーム方言にはアラム語由来の言語的特徴が多く残されており，それらは主に語彙・音声・文法の 3 つの側面に分類される。まず語彙においては，日常生活に根ざした多様な語彙がアラム語に由来しており，フスハーとは異なる独自の表現が多く見られる。これらは地域の文化的・歴史的背景および他言語との接触に起因する。例えば，barā（外），dʒwwā（内），zalamē（男の人／強い），mayy（水），mnīḥ（良

い）のような言葉はアラム語とシャーム方言の両方に存在するが，アラビア語フスハーには含まれない。

音声面では，特に語末音節に関して特徴的な違いが見られる。アラビア語フスハーでは語末に母音が付加されることが一般的であるのに対し，シャーム方言ではアラム語と同様に語末母音が省略される（例：CaCaCa → CaCaCØ）。たとえば，「書く」という動詞の三人称男性単数形（現在形）を例に挙げると，アラム語では yØ-ktob-Ø，アラビア語フスハーでは ya-ktob-u，シャーム方言では yə-ktob-Ø となる。ここから，フスハーでは語頭・語尾に母音が明確に現れるのに対し，アラム語およびシャーム方言では末尾母音が脱落し，語幹との結合がより簡略化されていることがわかる。このような形式的な類似は，シャーム方言がアラム語の影響を受けていることを示唆している。

文法的観点から見ると，非完結形の動詞は，語根の前に小辞（ʔ○-，n○-，y○-，t○-：ʔnyt أنـيـت）を接続することで形成されるという点において，アラム語，アラビア語フスハー，シャーム方言の三者に共通する構造が見られる。しかし，アラム語およびフスハーにおいては，これらの小辞が時制・人称・数・性を包括的に標示する統合的な文法形式として機能しているのに対し，シャーム方言では，それらの小辞は人称・数・性の標示に特化し，時制およびアスペクトの標示機能は著しく弱まっている。この機能的変化の結果として，シャーム方言では，時制・アスペクトの意味を補うために，ʕam- や b- といった語彙的接辞が動詞の前に付加される構文が発達し，それらの接辞が新たに文法的機能を担うようになっている。

4．アラビア語動詞の変化形と本稿で取り扱う言語現象について

上記（2．節）で言及したファーガソン（Ferguson）のダイグロシア理論に関連して，アラビア語の高変種（H）と低変種（L）との間には，さまざまな言語的側面において顕著な違いが存在する。本稿では，その中でも文法的側面に焦点を当てる。高変種であるアラビア語フスハーにおいては，動詞に付く接辞が主語の人称・性・数を示す文法的機能を担っている。これに対して，低変種にあたるシャーム方言では，これらの接辞の文法的機能，特に一致（アグリーメント）に関する役割が弱まっている。

その結果，シャーム方言では，主にテンスやアスペクトといった文法的機能を担う新たな接辞（例：ʕam-，b-）が発達した。従来の主語に関わる接辞（フスハー：ʔa-，na-，ya-，ta-/ シャーム：ʔə-，nə-，yə-，tə）は引き続き使用されているが，それらは新しい接辞とは明確に役割が分けられており，機能の混同を避ける構造となっていると思われる。

以下の例文は，フスハーとシャーム方言の簡単な比較を示している。例文（1）はフスハーの例であり，例文（2～5）はすべてシャーム方言の例である。

（1） a. **ta-** **qraʔ-u** sārā al-kitāb-a
3.SG.F- read-IND _____ DEF-book-ACC
「サラーは本を読んでいる。」 （進行中）

b. yadʒibu ʔan **ta-** **qraʔ-a** sārā al-kitāb-a
have to/ has to 3.SG.F- read-IND _____ DEF-book-ACC
「サラーは本を読まなければならない。」 （モダリティ）

（2） a. sārā **ʕam-** **tə-** **ʔ[3]rā-Ø** əl-kətāb-**Ø**
_____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
「サラーは本を読んでいる。」 （進行中）

b. **ʕam-** **b-** **ʔrā-Ø** əl-kətāb-**Ø**
IND- IND-1.SG - read DEF-book
「私は本を読んでいる。」 （進行中）

（3） a. sārā **b-** **tə-** **ʔrā-Ø** əl-kətāb-**Ø**
_____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
「サラーは本を読む。」 （未来の出来事）

b. sārā **b-** **tə-** **ʔrā-Ø** əl-kətāb-**Ø**
_____ IND- 3.SG.F -read DEF-book
「サーラは本を読まなければならない。」 （モダリティ）

（4） sārā **Ø-** **tə-** **ʔrā-Ø** əl-kətāb-**Ø**
_____ SUBJ- 3.SG.F - read DEF-book
「サーラは本を読まなければならない。」 （モダリティ）

（5） a. **ʕam-tə-** **drus-Ø** ū- **Ø-** **tə-** **ʃteɣel-Ø**
IND-3SG.F- study and SUBJ- 3SG.F- work
「彼女は勉強していて，働いている。」 （一時的な状態）

---

[3] アラビア語シャーム方言および他のいくつかの方言（エジプト）に共通して見られる音韻現象の一つとして，無声口蓋垂閉鎖音[q]が，声門閉鎖音[ʔ]として発音される傾向がある。

b. **ʕam-tə-　　drus-Ø　　ū-　　ʕam-　tə-　　ʃteɣel-Ø**
IND-3SG.F-　　study　　and　　IND-3SG.F-　　work
「彼女は勉強していて，働いている。」　　**（一時的な状態）**

まず，例文（1 a.）に示されるように，フスハーでは，動詞の接辞 ta- が人称・性・数を文法的に標示し，語尾の短母音 -u が直説法（indicative）を示す形式的なマーカーとして機能している。対照的に，例文（1 b.）では，文頭に情意的な表現（modality expression）が付加されるとともに，語尾母音が -a に変化し，接続法（subjunctive）への移行を示している。

このように，フスハーにおいては，語末の短母音の違いがムードの識別に直結しており，語末形態に依拠した文法体系が構築されている。一方，シャーム方言では，このような語尾中心の文法標識体系が大きく変容している。

例文（2 a.）では，ʕam- が進行中の動作を示すアスペクト標識として不可欠な役割を果たしており，tə- は依然として人称・性・数を標示するものの，テンスやアスペクトには関与しない。さらに，例文（2 b.）では，ʕam- に続いて現れる b- は，従来のテンス・アスペクト接辞ではなく，一人称単数を標示する人称接辞として再解釈されていると考えられる。

例文（3 a.）（3 b.）では，b- が未来志向の意味や話者の意志・判断を帯びるなど，文脈に応じてテンス標識，あるいはモダリティ的接辞として機能していることが確認できる。

また，例文（4）では，ʕam- や b- のようなテンス・アスペクト標識が用いられておらず，tə- のみが現れるが，このような構文では，発話全体が意志，義務，推量といったモダリティ的解釈へと傾斜する傾向が見られる。ここから，b- とゼロ形（接辞なし）は，文脈次第ではともにモダリティ的機能を担いうることが示唆される。

さらに，例文（5 a.）では，等位接続詞 ū- によって「勉強する」と「働く」という 2 つの動作が並列されており，最初の動詞に付された ʕam- が文全体のアスペクト解釈を先導している。2 番目の動詞には接辞が付されていないが，等位構造の中で前項のアスペクト的意味が波及し，ゼロ形が機能的役割を担っていることがわかる。一方，例文（5 b.）のように，2 つ目の動詞にも再び ʕam- が現れる場合，それはアスペクト表示というよりも，話者の感情的評価や談話的強調を表す語用論的マーカーとして機能している可能性が高い。

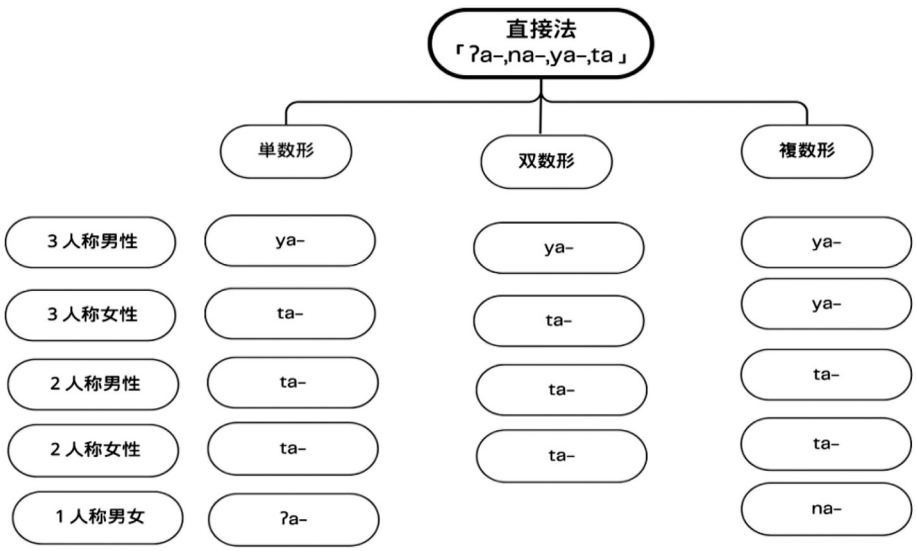
このように，例文（1）から（5）に示された観察からは，シャーム方言における接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形が，文法的・語用論的機能の両面において柔軟に再解釈されていることが明らかになった。とりわけ，これらの接辞がテンス・アスペクトのみならず，モダリティや話者の感情的態度にも関与する点は，従来のフスハー的視点とは異なる動的な構造の存在を示唆している。

5．先行研究の検討

5.1. 榮谷（1997）

榮谷（1997：105–107）によれば，アラビア語フスハーにおける現在形動詞は，動詞語幹の前に「現在の小辞（ʔaḥruf al-muḍāriʕa: أحرف المضارعة）」と呼ばれる接頭辞，すなわち「ʔa-」，「na-」，「ya-」，「ta-」のいずれかを伴って形成される。これらの接頭辞は，主語の人称・数・性によって使い分けられ，文法的機能を果たしている。具体的には，「ʔa-」と「na-」はそれぞれ 1 人称単数および複数に対応し，2 人称は性や数にかかわらず「ta-」を用いる。

一方，3 人称では，男性形に「ya-」が用いられるが，女性形では単数および双数の場合は「ta-」，複数の場合は再び「ya-」が用いられる。さらに榮谷（1997：107）は，欧米の研究者によるアラビア語の動詞活用の記述において，動詞が「完結相」と「非完結相」の二つに大別されている点を指摘する[4]。完結相では人称の区別が接尾辞によって示されるのに対し，非完結相では接頭辞によって人称が示され，さらに数および性を表す接尾辞が付加される場合がある。榮谷は，非完結相の直接法における諸形について，以下の一覧表[5]によって体系的に提示している[6]。



[4] 先行研究（榮谷，1997；仁一，2009）では，動詞を「完了形」と「未完了形」に分類しているが，本稿では，よりアスペクト（相）の観点からの分析に基づき，これらに対応する用語として「完結相（perfective）」および「非完結相（imperfective）」を用いることとする。

[5] 榮谷の表をもとにしながら，異なる形式で再構成したものである。

[6] アラビア語フスハーには多くの接尾辞が存在するが，ここでは説明を複雑にしないために，接頭辞のみに焦点を当てる。

5.2. 仁一（2009）

仁一（2009：72）によれば，アラビア語フスハーにおける非完結相は，まだ完了していない行為，現在も継続中の行為や状態，習慣的な行為，さらには近接未来の出来事を表す形式である。完結相においては主語の人称・数・性を接尾辞によって標示するのに対し，非完結相ではそれらを接頭辞によって表現する点が大きな特徴である。また，非完結相の一形態として位置づけられる接続形（subjunctive form）は，活用の形態そのものは非完結相と共通しているものの，語尾母音において差異がみられる。接続形は主に，可能性（能力），希望，目的，義務を表現する文脈，あるいは未来の否定表現などにおいて使用される。この接続形を伴う代表的な動詞や表現には，以下のようなものが挙げられる。

① ʔastaṭāʕa ʔan（～することができる）
② ʔarāda ʔan（～したい，～することを望む）
③ yadʒibu ʔan（～しなければならない，～すべきである）

これらの構文は，話者の意志や義務感，可能性の判断といったモダリティ（話し手の心的態度）を明示する上で重要な機能を果たしている。

5.3. Cowell（1964）

5.3.1. ʕam-[7] 接辞の意味

Cowell（1964: 320–322）は，ʕam- 接辞は，進行形，一時的状態，反復的な行為という意味で用いられる[8]。通常，この接辞は英語の -ing 形式に翻訳されるが，一部の心理状態動詞やその他の例外があるとも述べている[9]。

---

[7] Cowell（1964: 320）によれば，この語彙素にはいくつかの形態が存在し，最も一般的に用いられるのは ʕam- であるが，ダマスカスでは ʕamma- の形も聞かれ，さらに ʕamm，ʔam-，そして語源とされる完全形 ʕammal なども使用されることがある。加えて，ʕam- は一人称の主語と共起する際に b- を伴うことがあり，これは b- が非時制接頭辞（non-tense prefix）ʔə- で始まる動詞によく接続される傾向があるためである。しかしながら，Cowell（1964）は，ʕamma- が動詞と切り離されて単独で使用される場合があること，すなわち接頭辞 ʕam- の語源である ʕammal と同様に独立した語として機能しうる可能性については触れていない。

[8] 特定の種類の英語の動詞は（Modal Verbs：できる），実際に起こっていることを示すために通常 -ing 形で用いられる事は無いが，アラビア語の動詞は，適切な場合には他の動詞と同様に ʕam- 接頭辞活用形と共に用いられる。例えば，「māli **ʕam-bə-ʔder** bakkel əʔʃātˁ-ī（ベルトを締めることができない）」

[9] 筆者は，先行研究の Cowell の節において，接辞の意味を（1～10）の番号で示している。従って，本研究で新たに提示する例についても，改めて 1 から番号を付して示すことである。

（1） 進行中の行為を表す

a. ʾl-muʔadden **ʕam- yə- ʔadden** ʾl- ʔadān
The muezzin[10] IND-3.SG.M- give DEF- call to prayer
「ムエジンが祈りの呼びかけをしている。」

b. ʔəm-ī **ʕam-tə- stanā-nī**
mom-my IND-3.SG.F- wait- me
「ママが私を待っている。」（作例）

（2） 一時的状態を表す

a. **ʕam- ʔə- dros** taḥt iʃraf ʾl-professor Lī
IND- 1.SG-study under supervision of DEF-Professor Lee
「私は李先生の指導の下で勉強している。」（作例）

b. Mustafa **ʕam-yə- tʕalm** ʔalmmanī
mustafa IND-3SG.M-learn German
「ムスタファはドイツ語を学んでいる。」（作例）

（3） 反復的に起こる行為，または職業として通常行われる行為を表す

a. kəll marra **ʕam- ʔə- dʒī** la-ʕind-ō **ʕam-yə-kūn** maʃɣūl
Every time IND-1SG-come to-visit- him IND-3SG.M-is busy（these days）
「私が彼のところに行くと，彼はいつも忙しそうにしている。」

b. **ʕam-ʔə- ʃteɣel** muterdʒm -ē li-nesˁosˁ ʔaflām jaban-yēh
IND-1SG- work translator-SG.F for-text（PL） movie（PL） Japanese（F）
「日本映画の字幕翻訳者として働いている。」（作例）

5.3.2. b- 接辞の意味[11]

Cowell（1964：324–327）によれば，b- 接辞を伴う非完結相は，いくつかの異なる意味領域において用いられるとされる。具体的には，未来（future）の出来事やアナウンス的用法（an-

[10] ムアッジン（亜：مُؤَذِّن）は，モスクのミナレット（尖塔せんとう）から一日五回の礼拝（サラート）ファジュル，ズフル，アスル，マグリブ，イシャーの各礼への呼びかけ（アザーン）を行う人物である。ムアッジンは，ムスリム共同体にとって正確な礼拝時刻を知らせるうえで重要な役割を果たしている。

[11] Cowell（1964）は，1 人称複数の現在形動詞で発生する現象に関しては，シャーム方言の話者は b- 接

nouncement），さらには性質的可能性（potentiality，英語の can，would，will または形容詞的な傾向）を表す場合，そして「一般的・恒常的な事態」（general/habitual situations）などを表現する用法がある。具体的に，**b-** 接辞を伴う未完了形は，英語の単純現在形のように，ジェネラリゼーション（generalization）や非時間的なステートメント（時間に縛られていない普遍的な事実）という意味で用いられる[12]。

（4） 未来の出来事を表す

a. **b-** **Ø-** **kūn** ʕand -ak ʕal-ʔaktar baʕd sāʕa
IND- 1SG-be place -your at-latest after hour
「遅くとも 1 時間以内には君のところに行くよ。」

b. **b-** **Ø-** **ʃuf-ak** bukra
IND-1SG-see-you tomorrow
「それではまた明日。」（作例）

（5） ポテンシャルな意味を表す

a. ʔēmta ma kān **b-** **tə-** **dfaʕ** **-lī**
anytime IND-2SG.M-pay -me
「いつでも払ってくれていいよ。」

b. mā **b-** **Ø-** **ʃteɣel** maʕ hek nās
not/never IND-1SG-work with/for like this people
「こんな人たちのために働くなんて，絶対にありえない。」（作例）

（6） 一般的事実．恒常的事態（非時間的なステートメント）を表す

a. ˤl- dʒdʒādʒat **b-** **yə-** **bīdˤu** bēdˤ
DEF-hens（PL） IND-3PL.F- lay egg（PL）
「雌鶏が卵を産む。」

辞を m- 接辞に変化する傾向がると述べていた。特に，動詞が（m-，b-，l-，r-）で始まる場合は，1 人称複数の「-n-」の同化は任意であるとしている。例えば，「-buus（キスする），-muut（死ぬ），-luum（責める），-ruuh（行く）」という動詞は，「me-m-buus（キスする），me-m-muut（死ぬ），me-l-luum（責める），me-r-ruuh（行く）」のようになる。

[12] “Like the simple present in english, the simple imperfect is used to make generalization and non-temporal statements”（Cowell, 1964: 326）.

b. ʕlī [13] **b-** **tə-** **ʕref** tə- ħkī kurdī
Ali IND-3SG.F-know（v1） 3SG.F-speak（v2） Kurdish
「アリはクルド語を話せる。」（作例）

（7） 反復的に，あるいは周期的にに，あるいは習慣的に起こる行為，または職業として通常行われる行為[14]

a. **b- yə- nām -u** ʕ-al-ʔəsʕtʕūħ bi-ᵊ l-lēl bsabab ᵊ l- ʃʃōb
IND-3PL-sleep-they on-the- roof at -the-night because of DEF- heat
「暑いので，夜は屋根の上で寝る。」

b. Gulistan[15] **b- tə- ʃtɣl** məʕlem-ē bi-madrase ʔəbtedayī
_____ IND-3SG.F-work teacher-（F） in-school elementary
「グリスタンは小学校の教師として働いている。」（作例）

5.3.3. Ø- ゼロ形の意味

Cowell（1964：343–344）によれば，アラビア語の非完結相は，直接法（indicative），接続法.仮定法（subjunctive），および命令法（imperative）の３つのムードで活用される。

直接法においては，動詞に b-，ʕam-，raħ- といった接辞が付加されるのに対し，接続法（仮定法）では，これらの接辞が省かれ，「ʔə-，nə-，yə-，tə-」といった非完結形の基本的な人称接辞のみが残る形となる。

（8） ムード的な用法「祈願，示唆，間接的な命令」等を表す

a. ʔalla **Ø-** **yə -** **wafʔ** **-ak**[16]
God SUBJ-3SG.M-grant success -you
「神があなたに成功を授けますように！」 **（祈願）**

---

[13] アラブ諸国では通常『アリ（Ali）』という名前は男性に用いられるが，ここでは女性を指している。

[14] 榮谷（2002：267）『アラビア語エジプト方言の未完了形の用法』の表現である。

[15] Means “rose garden” in Kurdish and Turkish, ultimately from Persian.

[16] Cowell（1964: 344）では，同じ例文が接辞 b- を用いた形（ʔalla **b-yə-wafʔ-ak** :God will grant you success）で示されており，違いは確定的（assertive）な意味と願望的（optative）な意味に関連すると説明されている。動詞が Ø- ゼロ形で始まる場合には願望的な意味（願いや望み）を表すが，b- 接辞を伴う場合には確定的な意味（事実の陳述）を示す。また，Cowell（1964：347）によれば，シャーム方言には，直接法（indicative）と仮定法（subjunctive）のいずれを用いるかが一義的に定まらず，文法的にどちらも許容されるような曖昧で境界的な用法が存在するという。つまり，文脈や話者の意図，あ

b. **Ø-　ʔa-　ʕmol**　ʔahwe, wəlla　ʃāy　?
SUBJ-1SG-make　coffee or　tea
「コーヒーを入れようか，それとも紅茶を入れようか？」　**（示唆）**

c. **Ø-　nə-　rtaħ-ᵊllna**　nətfe　hōn　?
SUBJ- 1PL-　rest-　we　a bit　here
「ここで少し休もうか？」　**（間接的な命令）**

（9）　～かもしれない（yədʒōz/ yə-mkin/ʕal-ʔaɣlab），～しなければならない（lāzm）というモダリティ表現等の後に続く非完結相の動詞が接続法を表す[17]

a. ᵊl-waħed　lāzm　**Ø-　yə-　ħkī**　ᵊl-ħaʔ　mahmān　sˁār
the-one　must　SUBJ-3SG- tell　the-truth　no matter　happen
「何が起ころうとも，人は真実を伝えなければならない」（作例）

b. ʕa-ħakī　ᵊl-　dektōr ,　yəmkin　**Ø-　ʔə-　rdʒaʕ**　**Ø-　ʔə-　mʃī**
According to　DEF-　doctor　might　SUBJ-1SG-come back（$_{V1}$）　SUBJ-1SG- walk（$_{V2}$）
「医者によれば，自分の足で歩けるようになるかもしれない」（作例）

（10）　命令形の否定形（lā : don’t）や特定の表現の後に続く非完結相の動詞が接続法を表す

a. lā　**Ø-　tə-　ʕmōl**　maʃakel　maʕ-ōn
not　SUBJ-2SG.M-make　problem（PL）　with-them
「彼らと問題を起こすな！」（作例）

b. lā　**Ø-　tə-　ʕalī**　sˁōt-　ak　ʕal-ʔab- ōk
not　SUBJ-2SG.M-raise　voice-your　on-dad- your
「お父さんに向かって声を荒げてはいけない！」（作例）

るいは発話の微妙なニュアンスによって，用いられる法が異なることがあり，必ずしも文法規則によって一方が固定されるわけではないケースがあるという指摘である。

[17] 石橋（2021：143）のアラビア語カイロ方言の研究で述べられているように，このような用法はシャーム方言にも見られる。

6．先行研究のまとめと問題点

アラビア語フスハーに関する研究では，榮谷（1995）および仁一（2009）が，動詞の接辞（ʔa-，na-，ya-，ta-）が直接法（indicative）および接続法（subjunctive）のいずれにも共通して用いられ，両者の識別は主に語尾の短母音（-u：直接法，-a：接続法）によって行われる点を指摘している。つまり，フスハーにおいてはムードの識別は接辞ではなく，語末の母音形態に依存する傾向が強い（例文１参照）。これに対し，Cowell（1964）によるシャーム方言の分析では，b- やʕam- などの接辞が直接法を示す形式的指標として機能し，接続法においてはこれらの接辞が付加されない。この構造上の違いは，語尾母音が一般に発音されないシャーム方言において，ムードの識別が主に語頭要素，すなわち接辞の有無によって行われることを示している（例文２～５参照）。Cowell はまた，ʕam- が進行中の動作，一時的な状態，ある条件下における反復的な行為などを表すとし，b- には未来の出来事，習慣的な行為，告知，可能性（potentiality）といった機能があると述べている。加えて，接辞を伴わないゼロ形も接続法に対応する形式として扱われている。しかしながら，Cowell（1964）はこれらの接辞について，基本的な文法的用法を提示するにとどまり，話者の主観的意図や感情，態度といった語用論的側面との関係については十分に踏み込んでいない。

さらに，シャーム方言における接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形の意味的・機能的差異や語用論的展開に関する比較研究は，依然として限定的である。

とりわけ，ʕam- が話者の意識や態度をどのように反映するか，また複合形 ʕam-＋b- において b- がどのように再解釈されるかについては，依然として未解明である。そこで本研究では，b- 形とゼロ形の意味的および機能的比較，ʕam- の語用論的機能，ʕam-＋b- の複合形式に見られる再分節および再解釈，さらに等位構文における ʕam- とゼロ形の接頭辞の用法に注目し，より詳細な分析を行うことを目的とする。

以上のように，これまでの研究では接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形の基本的な機能はある程度明らかにされてきたものの，それらの意味的拡張や語用論的展開，特に話者の意図や文脈との関係性については十分に検討されてきたとは言いがたい。

このような問題意識を踏まえ，本研究では「シャーム方言において，接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形はどのように意味的・機能的変化を遂げてきたのか。また，その変化は再分析理論（Langacker 1977，Eckardt 2006）の枠組みにおいてどのように説明可能か？」の問いを中心に据え，実際の言語使用例をもとに検討を行う。

7．再分析理論（Reanalysis）の枠組みと本研究への適用

本節では，言語の表面的な形が変わらないまま，その機能や意味が変化していく「再分析（reanalysis）」という概念を取り上げ，シャーム方言における接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形（ʔ〇-，n〇-，y〇-，t〇-）に見られる意味機能の変化を，この枠組みを通してどのように説明できるかを検討する。再分析とは，言語形式の形自体（音や綴り）が変化しないにもかかわらず，その構造的役割や意味的解釈が変わる過程を指す。

Jarad（2010: 53）は，Langacker（1977: 58）の定義に基づき，再分析を次のように紹介している[18]。

> “Change in the structure of an expression or class of expressions that does not involve any immediate or intrinsic modification of its surface manifestation.”
> 「言語形式の表層形に変化が認められないまま，その構造や意味機能が内部的に再解釈されるプロセスである。」

Langacker（1977）は，この現象を次の 2 つの側面から説明している。

1．再分節（Resegmentation）

もともと一つの単位として理解されていた形態素が，別の区切り方で再解釈されることである。

2．再定式化（Reformulation）

語の見た目（形態）は変わらないまま，統語的あるいは意味的な機能が再解釈されることである。

さらに，Eckardt（2006）は，再分析における意味変化のプロセスを次の 3 つの観点から理論化している。

---

[18] 本研究では，著者はすでに Langacker および Eckardt の枠組みを，番号付きの例（1 ～ 5）を用いて紹介している。そのため，本稿で議論を継続する新たな例については，（6）以降の番号を付して示すこととする。

3．統語構造と意味の再配置

語や形態素の位置づけが変わることで，それに伴って意味解釈も変化することがある。

4．語用論的推論と意味の定着（Semanticization）

話者が文脈に応じて一時的に推測した意味が，繰り返されることで形式の一部として定着し，新たな意味として定義されるようになる。

5．意味変化が構造変化を促す

意味の再解釈は単なる副次的変化ではなく，統語的・形態的構造の変化を引き起こす中心的な要因にもなり得る。

このような理論的背景をもとに，本研究では ʕam-，b-，ゼロ形に見られる意味や機能の変化を，再分析の一形態として位置づけ，言語使用における具体的な事例を通して考察を進めていく。特に，形式が変化していないにもかかわらず，文脈によって意味や統語的役割が変化する現象に注目し，再分節と再定式化などの観点から詳細な分析を行う。

8．接辞の意味機能再分析

8.1. b- 接辞とゼロ接辞の潜在的．ポテンシャルな意味の比較分析

以上のように，Cowell（1964: 324）は，接辞 b- が直説法（indicative）および接続法（subjunctive）の両モードにおいて使用されることを「simple imperfective（b-）applies to both modes（indicative and subjunctive）」と述べている。また，同書（p.347）では，「there are borderline cases in which speakers may choose either indicative（b-）or subjunctive（Ø-）」とし，話者によっては文脈に応じて b- あるいはゼロ形（Ø-）を選択する境界的な事例が存在することを指摘している。しかしながら，Cowell の記述は b- と Ø- の対立を「assertive（直説的）」および「optative（希望的）」という語用論的枠組みに限定しており，接続法的意味を伝える文脈において，話者がいかなる条件下で b- の使用を選好するかという点については，体系的な分析が行われていない。

本節では，この点に注目し，接続法的文脈における b- 形とゼロ形（Ø-）の使用実態を比較検討する。とりわけ，話者の意図，発話の文脈，談話の機能といった語用論的条件が，形式選択にどのように関与しているかを，以下の用例を通じて説明する。

（7） **b-　yə-　dʒī　ū-　b-　yə-ʃ　teɣel**　maʕ -ī
IND-3SG.M- come　and-IND-3SG.M-work　with -me
「彼は私と一緒に働くことができる。」

（8） **Ø-　yə-　dʒī　ū-　Ø-　yə-　ʃteɣel**　maʕ-ī
SUBJ-3SG.M-come　and-　SUBJ-3SG.M-　work　with-me
「彼は私と一緒に働くことができる。」

両文（6 ～ 7）において，動詞は「～できる」「～する可能性がある」といった潜在的意味を共有している。しかしながら，意味の相違は命題的内容にあるというよりも，むしろ発話者が用いるポライトネス（丁寧さ／無礼さ）の方略に関係している。すなわち，接頭辞 b- は直説法の指標であると同時に，相手への敬意や丁寧さを表す語用論的機能を担うことがあり，特に発話者が年下で，相手が目上の場合に用いられる傾向がある。

一方，ゼロ形は，より直接的で感情的なニュアンスを持ち，発話者が年上である場合や，相手との距離が近いときに使用されることが多い。このように，両者はともに潜在的な意味を共有しつつも，対人的関係や話し手の態度の違いを反映している点で，語用論的な意味合いが大きく異なると考えられる。この点に関連して，Brustad（2000: 236–238）は，アラビア語における接続法が社会的相互行為における丁寧さを示す手段としてしばしば機能することを指摘している。とりわけシリア（シャーム）方言では，英語の “Would you like to...?” に相当する丁寧な依頼表現において，直説法の接頭辞 b- が一般的に用いられると述べている（例文 11 を参照に）。Brustad によれば，Cowell（1964: 344）はこのような文脈で接続法を用いることによって丁寧さを表そうとしたが（例文 8 を参照に），その用法はベイルートの話者によって否定されており，彼らはこのような状況では b- の使用こそが自然かつ適切であると主張している。このように，Brustad（2000）は文法記述と母語話者の直感との間に存在する相違を明らかにし，口語アラビア語におけるムードおよびモダリティの語用論における変異と複雑性を浮き彫りにしている。

この問題を考えるにあたり，筆者はシャーム方言の母語話者としての立場から意見を述べたい。とくに，Cowell（1964: 344）が丁寧な依頼の表現として接続法（Ø-）を用いている点について，Brustad（2000）が紹介するベイルートの話者が「この形は使われない」と否定していることに対して，筆者は異なる見解を持つ。以下に，自ら作成した用例（例文 8 ～10）を通じて，Ø- 形が丁寧さや話者の配慮を示す機能を持ちうることを検討する。

（9） **Ø-　ʔa-　ʕmol**　ʔahwe, wəlla　ʃāy ?　**（Cowell, 1964: 344）**
SUBJ-1SG- make　coffee or　tea
「コーヒーを入れようか，それとも紅茶を入れようか？」

（10） **Ø-　ʔə-　ktub**　muxatʕtʕ　ʾl-　baħes　hala wəlla　baʕden?　**（作例）**
SUBJ-1SG- write　plan　DEF-research　now　or　later
「今，研究計画書いたほうがいい？それとも後のほうがいい？」

(11) **Ø- ʔə- nzōl Ø- Ø- dʒīb** ˀl- ɣradˁ wəlla **Ø- Ø- ʔəstana** ʃeway?
SUBJ- 1SG- go SUBJ-1SG-bring DEF-stuff or SUBJ-1SG- wait a little bit
「荷物取りに行ったほうがいい？それともちょっと待ったほうがいい？」（作例）

(12) **b- tə- ʃrab-ī** ʃāy？ （**Brustad, 2000: 236**）
IND-2SG- drink- 2F tea
「お茶を飲みませんか？」

(13) **Ø- tə- ʃrab-ī** ʃāy？ （作例）
IND-2SG-drink- 2F tea
「お茶を飲む？」

例文（8～10）を分析すると，「wəlla（～それとも）」という接続詞が用いられており，これは二つの選択肢の間の可能性や代替を示す機能を果たしていることが分かる。したがって，この例文は敬意の高低を表すことを目的としているのではなく，むしろ聞き手に選択の自由を与えることに重点が置かれている。そのため，動詞の前には **Ø-** ゼロ形が用いられており，特に一人称（話者）が関わる場合に顕著である。

一方，Brustad の例文（11）を見てみると，そこでは飲み物として「お茶」という一つの選択肢しか提示されておらず，他の種類の飲み物との選択肢は存在しない。そのため，このような状況では接辞 b- の使用が好ましいとされる。実際，例文（12）に見られるように，シャーム方言では Ø- ゼロ形の使用も受け入れられており，特に発話のトーンが低くゆっくりしている場合にその傾向が顕著である。即ち，先行研究の Brustad 2000 では，接辞 b- は丁寧さや形式性と関連づけられているが，シャーム方言のデータは，これらの機能が韻律的および語用的要素によって文脈的に構成されることも示唆している。実際，（13～15）の例に見られるように，Ø- ゼロ形であっても，発話緩和のための表現が添えられることで，丁寧な機能を果たし得る。

(14) ħābeb **Ø- tə- ħkī** ʃī?
like SUBJ-2SG- say something
「何か言いたいことがあるでしょうか？」

(15) fīk- ī **Ø- tə- ssāʕd- ī- nī** bi-ħamel ˀl-ɣrādˁ?
could-you.2SG.F SUBJ- 2SG- help- you.2SG.F-me to-carry DEF-luggage（PL）
「荷物を運ぶのを手伝ってもらえませんか？」

（16）　maʕleʃ　**Ø-**　**tə-**　**dʒī**　　bi-waʔet　　tanī?
would　SUBJ-　2SG-come　　at-time　　another
「別の時間に来てもらえますか？」

上述したように，接辞 b- は特定の文脈において，Cowell（1964）および Brustad（2000）が指摘するように，接続法（subjunctive mood）に関連する意味を示すことがある。これは，b- がテンスやアスペクトに限定された接辞ではなく，可能性やムード（mood）に関係する意味も表現しうることを示唆している。この点において，b- 接辞の機能は Ø- ゼロ形と類似しており，直接法（indicative）と接続法（subjunctive）の両方にまたがる働きを有すると考えられる。丁寧さの観点から，Brustad（2000）は b- を丁寧表現のマーカーとして位置づけており，本研究の結果もこれを支持している。一般に，b- 接辞は丁寧さと結びつく頻度が高いのに対し，Ø- ゼロ形はより親密さや非公式性を帯びやすく，両者は文脈に応じて使い分けられていると考えられる。もっとも，これは Ø- ゼロ形が同様の機能を果たし得ないことを意味するものではない。むしろ，文脈やイントネーションによっては，Ø- ゼロ形も感情的あるいは親密な場面において，丁寧さを示すニュアンスを担いうる。

次節では，Ø- ゼロ形と接辞 ʕam- が同一文内に共起する場合に，それらがどのようにテンスやアスペクトの意味を表すかを検討する。

8.2. ʕam- 接辞を含む等位構文における Ø- ゼロ形の意味分析

榮谷（2002：268）は，エジプト方言におけるゼロ形（Ø-）の使用について，テンス的用法の一部として言及している。すなわち，「無標の未完了形は，直前の動詞と同じ時制をあらわす。動詞の未完了形が連続した場合に，接頭辞 bi- や ħa- が 2 番目以降の動詞で省略されたもの」と述べている。具体的には，動詞が連続する構文において，2 つ目以降の動詞からは接辞 bi-[19] や ħa- が省略され，その省略された形（ゼロ形）が先行動詞と同一のテンスを表すと解釈されている。しかしながら，榮谷の記述においては，このゼロ形の機能に関する主張を裏付ける具体的な言語資料や例文が提示されておらず，その用法が文法的・語用論的にどのように働いているかについては，詳細な分析は行われていない。

一方，Cowell（1964: 320）は，シャーム方言において，b- 接辞が付いた動詞が等位接続構文で連続する場合，一般的に両方の動詞に b- が付加されると指摘している。これに対して，ʕam- や ħa- のようなテンス・アスペクトを表す接辞は，構文上，しばしば最初の動詞のみに現れ，後続の動詞では省略される傾向がある。ただし，この分析においても，ゼロ形（Ø-）のテンス・アスペクト的機能についての明示的な説明はなされていない。

---

[19] エジプト方言では b- に短母音（i）が付加された形である。

本稿では，榮谷（2002）の分析枠組みを参考にしつつ，それをシャーム方言に応用し，ʕam- 接辞とゼロ形（Ø-）の相互関係に注目する。筆者自身が収集した言語データをもとに，ゼロ形の機能について改めて検討を行う。まず，フスハーとシャーム方言における等位接続構文の動詞接辞の使用を比較し，それぞれの構文において動詞の接辞がどのように用いられているかを確認する。

（17）（ʔinna-hu） **Ø- ya- drus- u** wa- **Ø- ya- ʕmal- u** （フスハー）
Indeed-he.3SG.M __-3SG.M-study-IND and __ -3SG.M-work-IND
「彼は勉強していて，働いている。」 （一時的な状態）

（18） **b- yə- drus** ū - **b- yə- ʃteɣel**
IND- 3SG.M-study and-IND-3SG.M-work
「彼は勉強もしながら，働くこともできる。」 （ムード的な用法）

（19） **ʕam- yə- drus** ū- **Ø- yə- ʃteɣel**
IND-3SG.M-study and-SUBJ-3SG.M-work
「彼は勉強していて，働いている。」 （一時的な状態）

（20） **ʕam-yə-drus** ū- **ʕam- yə- ʃteɣel**
IND-3SG.M-study and-IND-3SG.M-work
「彼は勉強していて，働いている！」 （一時的案状態）

（21） **Ø- yə- drus** ū- **Ø- yə- ʃteɣel**
SUBJ-3SG.M-study and-SUBJ-3SG.M-work
「彼は勉強もしながら，働くこともできる。」 （ムード的な用法）

フスハーとシャーム方言における等位接続構文を比較すると，フスハーの例文（16）では，1 番目の動詞および 2 番目の動詞の両方に現在形の標識となる接辞 ya- が付加されている。また，動詞語尾に現れる短母音 -u は，直説法（indicative mood）を明示する機能を果たしている。これは，ya- がフスハーにおいて直説法と接続法（subjunctive mood）の両方で用いられるため，語尾母音によってムードの区別が形態的に示されていることを意味する。さらに，この例文では等位接続詞として wa- が用いられ，文頭には強調表現 ʾinna が配置されており，文全体の内容に焦点を当てる役割を担っている。

一方，シャーム方言の例文（17）では，等位構文内で 1 番目の動詞および 2 番目の動詞の両

方に b- 接頭辞が付加されている点が特徴的である。この b- 接辞は，ゼロ形（Ø-）と意味的に近い潜在性（ポテンシャル）を示すが，より丁寧で控えめな表現として機能していると解釈できる（8.1. 節を参照に）。加えて，接続詞もフスハーの wa- に代わって ū- が用いられており，これは両変種間における統語的・語彙的差異の一端を示すものといえる。例文（18）では，ʕam- 接辞が 1 番目の動詞のみに付加されており，2 番目の動詞は頭辞を持たないゼロ形（Ø-）で現れている。このような場合，1 番目の動詞に ʕam- がすでに付加されているという条件の下でのみ，2 番目の動詞のゼロ形がテンス・アスペクト的な意味を継続的に担うことが可能になる（榮谷，2002：268 の説明を参照に）。

一方，例文（19）では，ʕam- が 1 番目の動詞と 2 番目の動詞の両方に付加されている。この場合，2 番目の動詞に現れる ʕam- は，テンス・アスペクトを明示するというよりも，動作そのものを強調する機能を持つと解釈できる。すなわち，2 番目の動詞の ʕam- は，フスハーにおける ʔinna- のように，文中の要素を強調する役割を果たしていると考えられる。さらに，例文（20）では，b- や ʕam- といったテンス・アスペクトの接辞が一切付されておらず，等位接続構文全体が叙想的（モーダル）な解釈を導く構造となっている。このような場合，発話は現実の出来事の描写というよりも，聞き手に対する「提案」「助言」「可能性の提示」といった語用論的意味を帯びることが多い。

以上のような等位接続構文に関する観察を踏まえた上で，本節の主題であるシャーム方言における接辞 ʕam- の語用論的機能，ならびにゼロ形（Ø-）のテンス・アスペクト的解釈に再び焦点を当てて検討を進めることとする。以下の例文（21～23）をもとに，さらなる分析を試みたい。

（22）**ʕam-ʔə-tʕaʃā**　ū-　Ø-　Ø-　**nām**　bakīr
IND-1SG-eat dinner　and-SUBJ-1SG-sleep　early
「私は夕食を食べて，早く寝る。」

（23）**ʕam-yə-tˤlāʕ**　ū-　**Ø-**　**yə-**　**fōt**　ʕa-fakef-ō
IND-3SG.M-exit　and-SUBJ-3SG.M-enter　as-want-he
「彼は好きなように出入りする。」

（24）**ʕam- tə-**　**kōl**　ū-　**Ø-**　**tə-**　**ʃrāb**　ū-　**Ø-**　**tə-**　**nām**
IND-2SG.M-eat　and-SUBJ-2SG.M-drink　and-SUBJ-2SG.M-sleep
「あなたはただ食べて，飲んで，寝ているだけの生活だ。」

上記の例文（21～23）は，1 番目の動詞に接辞 ʕam- が付加され，その後に接続詞 ū- を通じて

導かれる動詞がゼロ形で現れるという，動詞の等位接続構造の一例を示している。

このような構文において，テンス・アスペクトの解釈は１番目の動詞によって統括される。後続するゼロ形の動詞は，その意味的特徴を継承する。したがって，ゼロ形は単なる主語一致の形式にとどまらない。それは，等位接続を通じて先行動詞とテンス・アスペクトを共有する機能も果たしていると考えられる。

さらに，例文（23）では三つの動詞の連続が確認され，１番目の動詞「ʕam-tə-kōl」のみがʕam- によってアスペクト的にマークされており，２番目・３番目の動詞は接続詞 ū- の後にゼロ形で現れている。この構造は，先行する動詞のアスペクト的意味が後続の複数の動詞に拡張されることを明確に示している。

しかしながら，話し手が怒っている場合や不満を抱いている場合，あるいは驚きや困惑といった感情を伴いながら直前に得た情報に反応しているような語用論的文脈では，後続の動詞においてもʕam- が繰り返される場合がある。このような場合，繰り返されたʕam- は文法的な時制・アスペクトの標示としてではなく，話し手の感情や態度を強調する語用的要素として機能していると考えられる。

以下の例文（24〜25）は，まさにこのような用法を示している。ここでは，接辞ʕam- の異形（allomorphy）であるʕamma- が使用されており，語用的強調の観点から見ると，ʕamma- のほうがより適切な形式であると考えられる。

（25） a. **ʕamma-yə-bkī** ū-**ʕamma- yə-** **sˤarex** men dōn sabab!
IND-3SG.M-cry and-IND-3SG.M-scream for no reason
「彼は理由もなく泣いたり叫んだりする。」

b. **ʕamma-yə-bkī** ū- Ø- **yə-** **sˤarex** men dōn sabab!
IND-3SG.M-cry and-SUBJ-3SG.M-scream for no reason
「彼は理由もなく泣いたり叫んだりする。」

（26） a. **ʕamma- yə-** **dˤrb-ek** ū-**ʕamma- yə-** sseb- **ek** kamān?!
IND- 3SG.M-hit- you.2SG.F and-IND-3SG.M-bad mouth-you.2SG.F even
「彼はあなたを叩いたり，悪口まで言う！」

b. **ʕamma- yə-** **dˤrb-ek** ū- Ø- **yə-** **sseb-** **ek** kamān?!
IND- 3SG.M-hit- you.2SG.F and-SUBJ- 3SG.M-bad mouth-you.2SG.F even
「彼はあなたを叩いたり，悪口まで言う！」

例文（24 a.）および（25 a.）では，接辞 ʕamma- が 1 番目の動詞と 2 番目の動詞の両方に現れている。一方，（24 b.）および（25 b.）では，2 番目の動詞の直前においてその接辞が省略されている。この省略は文法的に必須ではなく，形態論的には選択可能であるが，文の意味内容や話者の態度に微妙な影響を及ぼしていることが観察される。たとえば，(24) の「叫ぶ」や (25) の「悪口を言う」といった動作において ʕamma- が省略されると，話者がその行動をすでに慣れ親しんでいる，あるいは日常的な行為として受け取っている可能性が高い。このことは，当該行動が話者にとって新たな情報ではなく，既知の事実や当然の出来事として処理されていることを示している。

言い換えれば，ʕamma- の繰り返しと省略の有無には，話者の談話的態度や，情報の新規性に対する認識が反映されている。行動を「新しい出来事」として強調したい場合には接辞が繰り返されやすく，逆にそれを「慣習的・既知のパターン」として扱いたい場合には省略される傾向があるといえる。

なお，次節では，接辞 ʕam- と b- が無中断で連続して共起する構文について，その形式的特徴および意味解釈を中心に考察する。

8.3. ʕam-＋b- の共起構造と人称標示機能

シャーム方言においては，動詞の前に現れる接辞が，文脈に応じて再分析され，本来の機能とは異なる新たな文法的・語用論的機能を担うようになる事例が観察される。その顕著な例として挙げられるのが，一人称単数文脈における「ʕam-＋b-」の複合構造である。

本来，ʕam- は進行相や一時的状態を示すアスペクト接辞であり，b- は未来・習慣・可能性といった時制・アスペクト・モダリティに関連した接辞として分析されてきた。

しかしながら，一人称単数における ʕam-＋b- の共起においては，b- が本来の機能を離れ，「一人称単数（1SG）」の主語標示要素として機能していると解釈される用法が見られる。実際に Cowell（1964: 320）は，「ダマスカス方言では，ʕam- に続いて b- が付加される形は一人称単数で最も一般的であり，他の人称では b- を伴わない形がより多く観察される」と述べている。この観察から，ʕam-＋b- という形態は一人称単数において，接辞 b- が主語人称標示的な機能を担うよう再分析されている可能性が示唆される。さらに，母語話者の直感的判断によれば，この b- には単なる人称標示機能にとどまらず，丁寧さや控えめな態度といった語用論的意味が含まれているとされる。つまり，ʕam- に続いて b- を用いることで，発話全体に柔らかさや謙譲的なニュアンスが加わることがあり，特に聞き手への配慮を含んだ発話スタイルとして機能している可能性がある。

第 8.1 節において述べたように，シャーム方言における b- 接頭辞は，文脈によっては丁寧表現のマーカーとして機能することがあり，ʕam-＋b- の構造はこの語用論的機能を一層際立たせるものと考えられる。とりわけ，一人称単数文脈においてこの形が現れる場合，話者の謙遜や

敬意といった態度が形式的に表現されていると解釈することが可能である。

以下に提示する例文をもとに，この構造が持つ文法的・語用論的機能の詳細を検討する。

（27） **ʕam-b- Ø- drus** luɣat əl-ʔinō
IND-IND-1SG-study language DEF-Aino
「私はアイヌ語を勉強している。」

（28） **ʕam-b- Ø- ʃteɣel** dawām dʒizʔī
IND-IND-1SG-work time（job） part
「私はアルバイトをしている。」

（29） **ʕam-b- Ø-ʔrā** kitāb ʕan ħayāt Steve Jobs
IND-IND-1SG-read book about life _____
「私はスティーブ・ジョブズの人生についての本を読んでいる。」

（30） əl-ʔustāz sato **ʕam-b- yə- dres** bi-ʔislōb sales
DEF-professor Sato IND-IND-3SG.M-teach with-style easy/clear
「佐藤先生は分かりやすい方法で教えている。」

（31） dʒāmiʕat hokkaido **ʕam-b- tə- ħāreb** əl-tanamur
University（F） _____ IND-IND-3SG.F-fight DEF-bullying
「北海道大学はいじめと戦っている。」

例文（26〜28）においては，話者が自身に関連する行為や状態について述べる際に，「ʕam-＋b-」という構造を用いることで，発話に謙虚さや柔らかさを加えている様子が観察される。この b- は形式的には省略可能であり，代わりに標準的な一人称接頭辞である ʔə- を用いることもできるが，その場合，語調はやや強く，断定的な印象を与える傾向がある。

これに対し，ʕam- の直後に b- を配置することで，発話はより控えめで丁寧な印象となる。一方，例文（29）および（30）では，「ʕam-＋b-＋人称接辞（２・３人称）」という構造が用いられており，この場合には b- が話し手から他者，または共同体に向けられる敬意の表示として機能している。また，ʕam- 自体はアスペクト的な意味に加え，強調を表す談話的要素（emphatic particle）として再分析されており，人物・集団・物事に対する断定的発話の文脈において，その効果が特に顕著に現れる。

さらに，１人称複数における「ʕam-＋b-」の共起は，音韻的な制約により使用頻度が低いとさ

れる。これは，b- に続く 1 人称複数の接辞 -nə- の連続が，音韻的に処理しにくいとされるためである。しかしながら，b- が発音上 m-（鼻音）へと変化する場合，この音韻的障壁は軽減され，結果として「ʕam-＋b-＋-nə-」という構造が使用されることもある。

この点について，Cowell（1964: 320）は，シャーム方言における 1 人称複数の現在形動詞において，接頭辞 b- が m- に交替する現象を指摘している。この現象は，音韻的調和（phonological harmony）や発話の容易さに基づく調整であると考えられ，接頭辞の形態変化と語用論的・談話的機能との関係を考察する上で重要な示唆を与える。

本章で取り上げた b-，ʕam-，ゼロ形の用法は，いずれも再分析理論の観点から，形式的な変化を伴うことなく，その意味機能が拡張・変容していると解釈できる現象である。

9．考察（再分析理論による接辞の意味機能変化の解釈）

本研究で取り上げた b-，ʕam-，ゼロ形（Ø-）の諸用法は，いずれも表層的な形態変化を伴わずに，意味や統語的機能が変化した事例であり，再分析（reanalysis）の枠組みにおいて説明可能である。再分析とは，言語形式が見た目には変わらないまま，その構造や機能が内部的に変化する現象である（Langacker 1977，Eckardt 2006）。

この理論に基づき，以下の 4 つの観察事項を再分析の具体例として解釈できる。

A. b- のモダリティ的再解釈（8.1. 節）

本来，b- はテンスやアスペクトを表す接辞であったが，文脈によっては「可能性」や「話者の判断」を示す機能を持つようになっている（Cowell 1964）。このような意味の拡張は，語用論的推論が形式の固定的意味として定着するプロセス（semanticization）と一致し，Eckardt（2006）の理論に沿う。また，ゼロ形との意味的な重複が見られる点は，Langacker（1977）が述べた「再定式化（reformulation）」の一例といえる。

B. ゼロ形の構文内での意味拡張（8.2. 節）

等位接続構文において，先行動詞に付加された ʕam- がテンス・アスペクトを標示し，後続動詞がゼロ形で出現する場合，このゼロ形は文脈的に先行動詞の情報を引き継ぐ機能を果たしている。つまり，ゼロ形が主語一致のみならず，統語的に時制・アスペクトを担う役割へと再解釈されている。これは構文的役割の再分析として，Langacker および Eckardt の両理論に整合する。

C. ʕam- のディスコース的転用（8.2. 節）

ʕam- は元々，進行相を示す接辞だが，文脈によっては強調マーカーとして再解釈される場合

がある。とくに話者が断定的に述べたい情報を提示する際に，ʕam- が談話的な機能を持つ。このような用法の変化は，語用論的意味の繰り返し使用による定着（語用論的文法化）として説明可能である（Eckardt 2006）。

D. ʕam-＋b- 複合形の再分節と機能分化（8.3. 節）

ʕam- に続く b- が，特に一人称単数文脈において，主語マーカー（1.SG）として再解釈される現象が確認される。この場合，b- はもはやテンス・アスペクトのマーカーではなく，人称標示へと機能が移行している。さらに，ʕam- は主観的な評価や丁寧さの含意を帯びたマーカーとして再機能化される場合があり，この複合構造は再分節（resegmentation）と再定式化（reformulation）の両プロセスを同時に含む，再分析の典型例といえる。

このように，b-，ʕam-，ゼロ形はいずれも，再分析理論（Langacker 1977，Eckardt 2006）に基づいて，文法的機能や語用的意味の再構成として説明可能である。シャーム方言のこれらの接辞は，単なる形態的マーカーにとどまらず，話者の意図や文脈的要請に応じて柔軟に機能する言語形式へと進化してきたと考えられる。

以上の議論を視覚的に整理すると，以下の図 2 のようにまとめることができる。

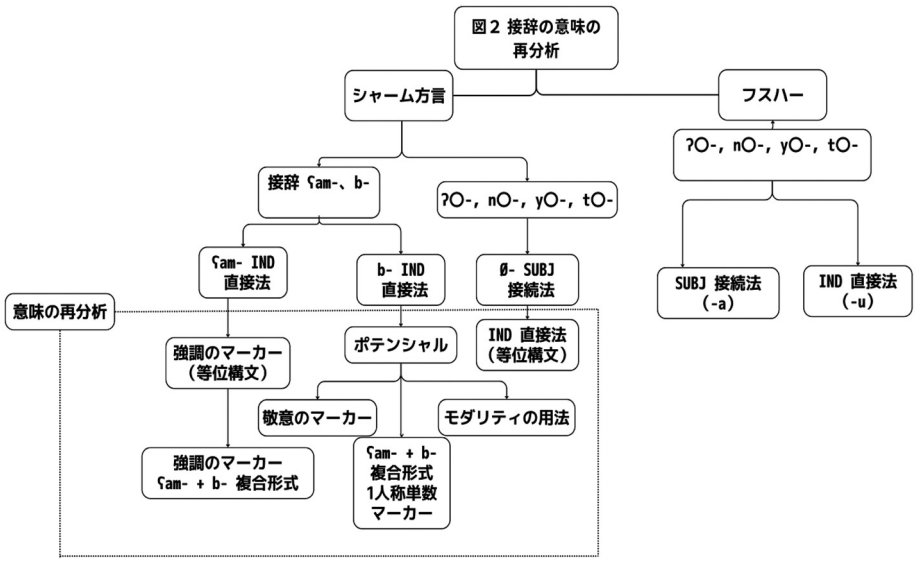


図 2　ʕam-・b-・Ø- 接辞の意味の再分析

10. おわりに

本研究は，シャーム方言における接辞 ʕam-，b-，およびゼロ形（ʔO-，nO-，yO-，tO-）の意味と機能の変化を，Langacker（1977）および Eckardt（2006）の再分析理論の枠組みに基づい

て検討したものである。とくに，各接辞がもつプロトタイプ的（中心的）な意味から，文脈に応じて生じる周辺的・派生的な用法への展開に注目し，形態と機能の再構成のプロセスを明らかにした。

従来，ゼロ形は単なる無標の接続法的形式として扱われてきたが，本研究では，ʕam- を伴う等位接続構文において，ゼロ形が先行動詞のテンス・アスペクトを継承する構造が観察され，そこには形式的無標とは異なる，明確な文法的意味が帯びていることを示した。

また，ʕam- や b- は，単なるテンス・アスペクト標示を超え，話者の感情・評価・丁寧さといった語用論的な意味を帯びるようになるなど，文脈依存的な意味の拡張が進んでいることも確認された。これらの変化は一見些細でありながら，再分析（reanalysis）という視点から見れば，文法形式が談話と密接に結びついて変化していく動的な過程であり，言語使用の中で語彙・文法・語用論がどのように連動していくかを示す好例である。

本研究を通じて，シャーム方言における接辞の再解釈と機能転換の実態が明らかになり，方言文法の記述だけでなく，言語変化における談話的要因の重要性が示唆された。今後は，より多様な話者や談話状況を対象とした分析を通じて，こうした再分析的現象がどのように自然会話の中で定着し，進化しているのかを追究していくことが課題となろう。

（あり　ねすりん・言語科学研究室）

参考文献

- Brustad, K. E.（2000）. The Syntax of Spoken Arabic: A Comparative Study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti Dialects. Georgetown University Press.
- Cowell, Mark W.（1964）. A Reference Grammar of Syrian Arabic with Audio CD:（Based on the Dialect of Damascus）. Georgetown University Press.
- Eckardt, R.（2006）. Meaning change in grammaticalization: An enquiry into semantic reanalysis. Oxford: Oxford University Press
- Hetzron, R.（Ed.）.（1997）. The Semitic Languages. Routledge.（Routledge Language Family Descriptions）
- Huehnergard, J., & Pat-El, N.（2019）. The Semitic Languages（2nd ed.）. Routledge.
- Jarad, N. I.（2010）. On the relationship between grammaticalization and reanalysis. Studia Anglica Posnaniensia, 46（1）, 51-70.
- Niitsuma, Jinichi（新妻仁一）（2009）『アラビア語文法ハンドブック』白水社.
- Sakaedani, Haruko（榮谷温子）（1997）「活用語尾か代名詞か―アラビア語の接続代名詞をめぐって―」『言語・地域文化研究』第 3 号，pp.103-119.
- _____（2002）「アラビア語エジプト方言の未完了形の用法」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 63 号，pp.265-301.

10.14943/rjgshhs.25.l 237

広東省東部掲陽方言の音韻に関する記述的研究

呉　　暁　輝

要　旨

中国広東省東部に位置する掲陽方言は潮汕方言群に属する一支であるが，潮州・汕頭方言に比べ，音韻体系と声調変化（連続変調）に関する体系的記述が著しく不足している。本稿は，方言資料の保存と理論的比較の双方に資することを念頭に，掲陽方言の音韻構造と二音節語における連続変調則を，記述言語学と実験音声学の両観点から明らかにすることを目的とする。調査では，現地母語話者数名から日常語彙を収録し，国際音声字母（IPA）により声母・韻母・声調の体系を記述し，標準中国語（普通話）との音素対応を検討した。声調分析では，八つの単字調（T1-T8）について Praat を用いて基本周波数（F0）を抽出し，話者間差の補正として対数変換後 Z スコア（LZ 値）による標準化を施し，五度式との対応に基づいて調値とピッチ輪郭を再推定した。

さらに，二音節語の 64 組合せ（８×８）に対応する語をピックアップし，非語末音節における変調の有無とパターンを精査した結果，（A）変化が生じない型，（B1）語末音節の声調に同化する型，（B2）語末音節の影響を受けず独立に変化する型，（C）語末音節で変化する型，の四分類を抽出した。

本研究は，掲陽方言の連続変調を体系的かつ定量的に記述し，未記述方言の記録保存に資するとともに，漢語方言の声調変化に関する比較研究および理論的枠組みの高度化に資する基礎資料を提示する。

キーワード：掲陽方言，方言学，音韻体系，声調，連続変調，音響分析

１．はじめに

本論文は，中国広東省東部掲陽方言における連続変調の規則を明らかにした上で，掲陽方言の音声データを整理し，当方言における特徴的な音声的事実を要点に纏め，言語保存の観点より方言のデータベースの構築を試みることを目的とする。

本論の研究対象は広東東部閩南語である。閩南語とは中国漢民族の一方言「閩語」の一つで

あり，狭義的には福建省の南部地方で使用されている方言を指す。広義的には台湾，福建省南部，浙江省南部，広東省東部及び西部，海南省で使用されている方言を指す。また東南アジアのシンガポール，マレーシア，インドネシア，タイ，フィリピンなどの中国系移民の間でも話されており，推定使用人口は 4900 万人である。広東東部の閩南語とは，潮州市，汕頭市，揭陽市，汕尾市及び梅州市豊順県の一部における閩南語のことを指す。潮州市，汕頭市の 2 市の頭文字を取り，この地域は一般的に「潮汕地区」と呼ばれるが，「潮汕地区」で話されている言葉は町ごとに差異が見られ，各地域における言語調査はミクロ的な視点から行う必要がある。先行研究の殆どは主として潮州市や汕頭市（汕頭方言を代表方言とする研究もある）が殆どであり，揭陽方言に関する考察も音声データも比較的に少ない。

博士前期課程の段階では，日本の常用漢字表から順番に 800 字ピックアップし，揭陽方言話者の発音のもとに音声記述データを作成した。それに基づき，揭陽方言における 6 つの基本的な構成素を立て，その共時的な音韻特徴及び中国語普通語（北京語）との対照関係より見た音韻構造を明らかにした。

1.2　揭陽市の概要

揭陽市（けいよう　し，ヂエヤン　シ，中国語例字：揭阳市（ピンイン：Jiēyáng Shì），中国語繁体字：揭陽市，英語：Jieyang city, Guangdong）は，中華人民共和国・華南地方の広東省東部（図 1 参照）にある都市（地級市）で，市政府所在地は榕城区（Rongcheng District）である。揭

図 1　揭陽市地図

陽市の人口は 712.71 万人（2023 年末時点，2016 年時点では人口 694.15 万人），広東省にある２副省級市･19 地級市では 8 番目に人口の多い街である。面積 5,265 平方キロメートル（2,033 平方マイル），海抜 8 メートル（26 フィート），北緯 23 度 33 分 04 秒東経 116 度 22 分 22 秒である。揭陽の下位行政区画は，２市轄区・１県級市・２県で構成され，市轄区は榕城区・揭東区，県級市は普寧市，県は揭西県・恵来県がある。

2．揭陽方言の音節構造

揭陽方言の音節の説明に入る前に，まず関連する漢語の音節について説明する。李（1995）によると，中国語の音節は，声調を考えに入れない場合は，４つの構成素からなるという。即ち，声調を入れると，５つの構成素があると考えられ，その５つの構成素を IMVF/T を用いて示すことが多い。I（initial）は声母，M（medial）は介音，V（vowel）は主母音，F（final）は韻尾，T（tone）は音節全体にかかる声調を表す。以下，北京官話の「片/pʰjen4/」を参考例として，下記の通りに表１に示した。また，本論における揭陽方言の音声記述については，上記音節構造をもとに C_1 SVC_2 T の５つの構成素を立て，国際音声字母を用いて記述する。揭陽方言の音節対応関係を下記の通り表１に示した。

表１　表記法の対応関係

例字	音節				
	声母	韻母			声調
		介音/韻頭	主母音/韻腹	韻尾	
	頭子音	半母音（**注**	主母音	半母音/末子音（注）	
	C_1	S	V	C_2	T
切	ʦ	j	a	k	7

揭陽方言については，主母音以外，頭子音，半母音，末子音のどれか，若しくはいずれも存在しない場合がある。例えば，北京官話の「偉/wei3/」，「倫/lun2/」，「安/an1/」，「衣/i1/」，揭陽方言の「王/waŋ1/」，「友/ju4/」，「叉/ʦʰe6/」などの例がある。ここで，声母がない音節をゼロ声母として，/Ø/を立て，音声を記述した結果，表２のように 18 種類の声母（子音）が観察された。

表２　揭陽方言の声母体系

pʰ	p	b	m	
tʰ	t		n	l
ʦʰ	ʦ	dz		s
kʰ	k	ɡ	ŋ	
Ø				h

2.1　掲陽方言頭子音 C_1 について

掲陽方言の頭子音 C1 においては，破裂音系列/p,pʰ,b/が存在する。中国語普通話では有気音と無気音が意味弁別に大きな役割を果たしているが，掲陽方言においてもこれに加え，有声音/b/との弁別的対立が観察される。以下に例を示す。

（1）　掲陽方言 C_1 /p,pʰ,b/

	例字	本考察	和訳
a.	八	pɔiʔ	はち
b.	飞	pwe	飛ぶ
c.	匹	pʰe$\overline{\text{k}}$	～頭（助数詞）
d.	皮	pʰwe	C
e.	万	bwaŋ	～万（単位）
f.	马	be	うま

掲陽方言には舌尖音/t, tʰ/が見られる。以下に例を示す。

（2）　掲陽方言 C_1 /t,tʰ/

	例字	本考察	和訳
a.	刀	tɔ	かたな
b.	大	tai/twa	大きい
c.	土	tʰou	つち・ダサい
d.	天	tʰjaŋ/tʰĩ	～日間

掲陽方言では舌根音/k, kʰ/に加え，有声音/g/との対立も見られる。

（3）　掲陽方言 C_1 /k,kʰ,g/

	例字	本考察	和訳
a.	九	kau	きゅう
b.	夹	kja$\overline{\text{p}}$	挟む
c.	齿	kʰi	きば・歯
d.	口	kʰau	くち
e.	牙	ge	きば・歯
f.	牛	gu	うし

揭陽方言の C1 においては鼻音/m, n, ŋ/も観察される。これらは中国語普通話にも存在するが，揭陽方言では 3 つ全てが頭子音として現れることが特徴的である。

（4） 揭陽方言 C_1 /m,b,ŋ/

	例字	本考察	和訳
a.	门	muŋ	ドア
b.	毛	mo	け
c.	女	nɤŋ	女
d.	宁	neŋ	安らかに・むしろ
e.	义	ŋi	正しい道理（接辞）
f.	元	ŋwaŋ	元朝・もと

揭陽方言の摩擦音/s/は，後続する母音が/i/の場合でも口蓋化しないことが一般的である。

（5） 揭陽方言 C_1 /s,h/

	例字	本考察	和訳
a.	三	sã	さん
b.	闪	sjam	躲わす・チカチカする
c.	凡	hwaŋ	一般的・世間
d.	云	huŋ	くも

揭陽方言の摩擦音/s/は，後続する母音が/i/の場合でも口蓋化しないことが一般的である。

（6） 揭陽方言 C_1 /ts,ts^h,dz/

	例字	本考察	和訳
a.	十	tsa$\vec{p}$	じゅう
b.	只	tsjaʔ	～匹（助数詞）
c.	厂	ts^{h}jaŋ	工場
d.	七	ts^{h}e$\vec{k}$	なな
e.	入	dzi$\vec{p}$	入る
f.	允	dzuŋ	許す・許可する

揭陽方言の C1 における接近音/l/についても以下の通り例を挙げる。

（7）　掲陽方言 C_1 /l/

	例字	本考察	和訳
a.	了	ljau	終わる・悟る
b.	历	leʔ	歴史・経歴
c.	内	lai	うち・中
d.	连	ljaŋ	連なる・連続

掲陽方言ではゼロ子音/Ø/の現れも特徴的であり，以下のような例が挙げられる。

（8）　掲陽方言 C_1 /Ø/

	例字	本考察	和訳
a.	为	wi	～ために・行う
b.	以	ĩ	～をもってする
c.	火	hwe	ひ・怒り

2.2　掲陽方言 C_1 と中国語普通話との対応関係

ここまで掲陽方言の C1（頭子音）について考察してきた。上記考察に基づき，掲陽方言の C1（頭子音）音素を/p,pʰ,b,t,tʰ,k,kʰ,g,m,n,ts,tsʰ,dz,s,h,ŋ,l/の 17 種類にまとめることができる。中国語普通話との対応関係については少ししか触れておらず，そのためこの節ではさらにより詳しく掲陽方言の C1（頭子音）が中国語普通話においてどのような対応関係を見せているか，以下では，破裂音系列を中心に具体例を挙げつつ詳細に分析する。

掲陽方言の無気破裂音/p/は，中国語普通話においても多くの場合/p/と対応する。しかし一部において，普通話の/pʰ/や/f/との対応も観察される。

（9）　/p/-/p/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	贝	pwe	pei	かい
b.	办	pãi	pan	行う・運営する
c.	本	puŋ	pən	～冊・・元金

このように，/p/はそのまま同じ子音で対応する場合が圧倒的に多いが，一部に異なる対応が見られる。

（10） /p/−/pʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	乒乓	peŋpɔŋ	pʰiŋpʰaŋ	卓球
b.	仆	pɔk̄	pʰu	下僕（接辞）
c.	爬	pe	pʰa	這う・登る

（11） /p/−/f/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	飞	pwe	fei	飛ぶ
b.	爸	pe	fu	父・父さん
c.	吠	pui	fei	吠える

揭陽方言の/pʰ/は，中国語普通話では主に/pʰ/と対応しており，両者間に音韻的な一致が見られる。

（12） /pʰ/−/pʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	扑	pʰɔk̄	pʰu	飛びかかる・ぶつかる
b.	平	pʰeŋ	pʰiŋ	たいら
c.	皮	pʰwe	pʰi	かわ

揭陽方言における有声音/b/は，中国語普通話において多くの場合ゼロ子音/Ø/に対応する。また，一部の例では/m/と対応している。

（13） /b/−/Ø/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	文	buŋ	Øwen	文章・おとなしい
b.	未	bwe	Øwei	まだ
c.	无	bo	Øwu	ない

このように，/b/がゼロ子音に対応する例は，子音の弱化または完全な脱落によるものであると考えられる。

（14）　/b/–/m/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	马	be	ma	うま
b.	木	bak̃	mu	木材
c.	买	boi	mai	買う

掲陽方言の舌尖音/t/は，中国語普通話では主に/t/と対応する。しかし，音環境によってはそり舌音/t͡ʂ/との対応も見られる。

（15）　/t/–/t/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	订	tĩã	tiŋ	予約する
b.	刀	tɔ	tau	かたな
c.	冬	taŋ	toŋ	ふゆ

（16）　/t/–/t͡ʂ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	丈	tɤŋ/tĩõ/tsaŋ	t͡ʂaŋ	長さ単位・測量する
b.	中	toŋ/taŋ	t͡ʂoŋ	なか・当たる
c.	长	tɤŋ/tsjaŋ/tsʰjaŋ	t͡ʂaŋ	長い・年上の・長ける

（17）　/t/→/tʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	同	taŋ	tʰoŋ	同じ
b.	坛	tau	tʰou	土石で造った台
c.	投	twã	tʰan	投げる・投じる

掲陽方言の舌尖音/t/は，中国語普通話では主に/t/と対応する。しかし，音環境によってはそり舌音/t͡ʂ/との対応も見られる。

（18）　/tʰ/–/tʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	土	tʰou	tʰu	つち・ダサい
b.	天	tʰjaŋ/tʰĩ	tjen	そら

c.	禿	tʰok̄	tʰu	禿げる・はげ

（19） /tʰ/-/t͡ʂʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	丑	tʰju	t͡ʂʰou	不細工・醜い
b.	虫	tʰaŋ	t͡ʂʰoŋ	むし
c.	传	tʰwaŋ/twaŋ	t͡ʂʰwaŋ/t͡ʂwaŋ	伝える・/伝承する・広まる

続いて無気破裂音/k/，/kʰ/について考察する。無気音/k/は中国語普通話においても同じく無気音/k/で発音されるものが一番多いことが観察された。次に多く見られたのは中国語普通話の/t͡ɕ/との対応である。

（20） /k/-/k/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	钙	kai	kai	カルシウム
b.	滚	kuŋ	kun	転がる・出ていく
c.	瓜	kwe	kwa	～ウリ・ネタ

（21） /k/-/ t͡ɕ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	己	ki	t͡ɕi	自分・己
b.	及	kip̄	t͡ɕi	及ぶ・及び
c.	旧	ku	t͡ɕjou	古い

有気音/kʰ/は，中国語普通話でも/kʰ/と対応するものが一番多く観察された。その次が中国語普通話の/t͡ɕʰ/との対応であることがわかる。

（22） /kʰ/-/kʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	口	kʰau	kʰou	くち
b.	开	kʰui/kʰai	kʰai	開ける・離れる
c.	孔	kʰoŋ/kʰaŋ	kʰoŋ	苗字・穴

（23）　/kʰ/–/t͡ɕʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	犬	kʰjaŋ	t͡ɕʰyen	いぬ
b.	气	kʰi	t͡ɕʰi	気体・怒る
c.	欠	kʰjam	t͡ɕʰjen	不足する・負債がある

掲陽方言における有声音/ɡ/は，中国語普通話において多くの場合ゼロ子音/Ø/に対応する。一部では/n/に対応する例も観察される。

（24）　/ɡ/–/Ø/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	艺	goi	Øi	芸術（接辞）
b.	月	gweʔ	Øye	つき
c.	玉	gek̚	Øy	石の美しく貴いもの

（25）　/ɡ/–/n/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	牛	gu	njou	うし

続いては鼻音系列/m/，/n/，/ŋ/についてみる。掲陽方言の C_1（頭子音）/m/は「网/maŋ/」「问/muŋ/」の 2 例を除いて中国語普通話の/m/と対応していることが観察された。

（26）　/m/–/m/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	灭	mek̚	mie	きえる・消す・消滅させる
b.	民	meŋ	min	たみ
c.	末	mwak̚	mo	～まつ・最後の

（27）　/m/–/Ø/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	网	maŋ	Øwaŋ	ネット
b.	问	muŋ	Øwən	尋ねる

歯茎鼻音/n/は「肉/nek̚/」以外，中国語普通話の/n/と対応していることがわかる。

（28） /n/−/n/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	年	ni	njen	年・～年
b.	女	nɤŋ	ny	女
c.	农	nɔŋ	noŋ	農（接辞）

（29） /n/−/ɻ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	肉	nek̄	ɻou	にく

それから揭陽方言 C_1 の/ŋ/についてみる。中国語普通話では脱落したため，ここでもゼロ子音/Ø/を用い両者の対応関係を示すことにする。

（30） /ŋ/−/Ø/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	五	ŋou	Øwu	ご
b.	严	ŋjam	Øjen	きびしい
c.	危	ŋwi	Øwei	あぶない（接辞）

次に揭陽方言の摩擦音グループ/s,h/についてみる。揭陽方言の C1/s/は，母音/i/が後続の場合でも中国語普通話のような口蓋化が起こらないことが調査の段階ではっきりした。例えば「尸/si/」を/ɕi/のように発音しても同じ言葉と認識される。ここでは意味弁別に役割を持たないとして，あくまでも個人差であり揺れとして認められるため，ここでは一括して/s/と記述することにする。揭陽方言/s/は中国語普通話との対応において一番多く見られたのはそり舌音/ʂ/である。

（31） /s/−/ʂ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	声	sjã	ʂəŋ	こえ・音
b.	山	swã	ʂan	やま
c.	术	suk̄	ʂu	ç

中国語普通話の/s/は，/i,j/や/y/後続の場合に口蓋化がおこるという現象を観察した。一方，前述したように揭陽方言は口蓋化の有無で特に言葉の意味が変わらないため，揭陽方言の/s/

が中国語普通話の口蓋化した時の/ɕ/との対応については以下の通りに示す。

（32）　/s/−/ɕ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	仙	sjaŋ	ɕjen	仙人（接辞）
b.	小	sjau	ɕjau	小さい
c.	先	sãĩ/seŋ	ɕjen	さきに・以前・元々

掲陽方言の C_1 /h/は，普通話で/f/または/x/に対応する場合が多い。

（33）　/h/−/f/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	夫	hu	fu	夫・成人男性（接辞）
b.	反	hwaŋ	fan	ひっくり返す・反対の
c.	分	huŋ	fən	分ける・見分ける

（34）　/h/−/x/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	互	hu	xu	互いに（接辞）
b.	化	hwe	xwa	溶ける・変化する
c.	户	hou	xu	～世帯・ドア

掲陽方言では，/h/の後続母音が/j/の場合に口蓋化が起きて，/ç/に近い音で発音されるということを考察した。この場合，掲陽方言も中国語普通話も例字で示すように，後続母音はいずれも/j/であることがわかる。

（35）　/hʲ/−/ɕ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	下	hʲja/e	ɕja	した
b.	兄	hʲjã	ɕjoŋ	あに
c.	凶	hʲoŋ	ɕjoŋ	凶暴

これから掲陽方言の破擦音グループ/ts,tsʰ,dz/についてみる。掲陽方言/ts/は中国語普通話のそり舌音/t͡ʂ/との対応が一番多く見られた。その次に多く観察されたのは/ts/との対応である。ほかにも中国語普通話/ʂ/との対応が4例観察され，4例においていずれも末子音 C_2 がついていることがわかる。

（36） /ts/→/t͡ʂ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	朱	tsu	t͡ʂu	朱色・苗字
b.	主	tsu	t͡ʂu	主・最も重要な（接辞）
c.	只	tsjaʔ/tsi	t͡ʂɨ	～匹・ただ～（副詞）

（37） /ts/−/ts/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	再	tsai	tsai	再び（接辞）
b.	早	tsa	tsau	早い・おはよう（挨拶）
c.	则	tsek̚	tsɤ	規範・規則

（38） /ts/−/ʂ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	十	tsap̚	ʂɨ	十
b.	舌	tsiʔ	ʂɤ	舌
c.	什	tsap̚/si	ʂɨ/ʂən	様々の（接辞）

掲陽方言 C_1 /tsʰ/は中国語普通話の/t͡ʂʰ/，/tsʰ/と対応している。中国語普通話/tsʰ/の後続母音が/i,j/の時に口蓋化が起きて/t͡ɕʰ/になることも観察された。

（39） /tsʰ/−/t͡ʂʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	厂	t͡sjaŋ	t͡ʂaŋ	工場
b.	川	t͡swaŋ	t͡ʂwan	川
c.	车	t͡sja	t͡ʂɔ	車

（40）　/tsʰ/–/tsʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	才	t͡sʰai	t͡sʰai	才能・やっと
b.	寸	t͡sʰuŋ	t͡sʰun	長さの単位
c.	从	t͡sʰɔŋ	t͡sʰɔŋ	従う

（41）　/tsʰ/–/t͡ɕʰ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	七	t͡sʰek̚	t͡ɕʰi	七
b.	千	t͡sʰãi	t͡ɕjen	千
c.	切	t͡sʰjak̚	t͡ɕje	きる

続いて掲陽方言の C_1 /dz/についてみると，中国語普通話と多く対応しているのは/ɻ/である。

（42）　/d͡z/–/ɻ/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	入	d͡zip̚	ɻip̚	入る
b.	人	d͡zeŋ	ɻən	ひと
c.	刃	d͡zeŋ	ɻən	やいば

掲陽方言の接近音/l/は，中国語普通話でもほとんどの場合/l/に対応している。一方で，一部の例では/n/に対応するものが観察される。この混同は，特定の調音的または歴史的な要因に起因している可能性があるが，現段階ではデータ不足のため明確な結論には至らない。

（43）　/l/–/l/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	六	lak̚	liu	ろく
b.	历	lek̚	li	経歴・経験
c.	流	lau	liu	流れる

（44）　/l/–/n/

	例字	本考察	中国語普通話	和訳
a.	内	lai	nei	なか・家
b.	弄	loŋ	noŋ	弄る

2.3 揭陽方言の末子音

本節では，揭陽方言の末子音を鼻音/m,ŋ/と内破音/p,ʔ,k/に分けて紹介する。中国伝統音韻学によれば，末子音に「入声」と呼ばれる内破音[p]，[t]，[k]と鼻音末子音[m]，[n]，[ŋ]がある。[m]: [p]，[n]: [t]，[ŋ]: [k]は，それぞれ同じ調音点の末子音である。揭陽方言では，鼻音末子音[n]の一部は母音に鼻音が帯びる形（鼻母音）として残り，多くは[ŋ]に合流したと考えられる。また，それと同じ調音点の内破音末子音[t]も[k]に合流している。[m]は推定中古音とほぼ一致しており，一部[m]が脱落し鼻音化した例も見られた。[ʔ]に関しては，[t]が脱落して，舒声調に合流するプロセスにおいて現れた過渡的な形であると考えられる。実際，語末の声門閉鎖音[ʔ]は弱く，一般的に聞き取ることのできる音ではない。特に，若年層の発音からは，語末の声門閉鎖音[ʔ]の発音が聞き取れない場合が多い。

（45） 揭陽方言 C_2 /m/

	例字	本考察	和訳
a.	今	kim	いま
b.	心	sim	心
c.	欠	kjam	借りがある・足りない

（46） 揭陽方言 C_2 /ŋ/

	例字	本考察	和訳
a.	巾	keŋ	タオル等の布製品
b.	犬	k^hjaŋ	犬
c.	见	kjaŋ	会う・見る

また，[m]か[ŋ]，[hŋ]のように子音のみで発音を構成されている字例も三つ観察されており，下記例（11）の通りに示した。

（47） 子音のみ

	例字	本考察	和訳
a.	姆	m	お手伝いさん・おば
b.	黄	ŋ	黄色・人の苗字
c.	园	hŋ	～園

末子音における[n]に関して馬（2021）は，宣教師によって記述された潮汕方言の音韻体系に関する考察において，少なくとも 20 世紀初頭までは[n]が存在していたと述べている。本考察

では，1 例も観察されなかったため，鼻母音化の形として現れたか，または[ŋ]に合流したと考えられる。

（48）　鼻母音化したと思われる[n]

	例字	中古音	本考察	和訳
a.	办	n	pãj	行う・造る
b.	扇	n	sĩ	扇子・うちわ
c.	满	n	mwã	満ちる

（49）　[ŋ]に合流したと思われる[n]

	例字	中古音	本考察	和訳
a.	观	n	kwaŋ	眺める・～考え方
b.	颜	n	ŋwaŋ	顔・色合い
c.	贫	n	p^heŋ	貧しい

掲陽方言の内破音/p,ʔ,k/に関して，前述した通り，[t]は一例も観察されておらず，「入声叙声化」の過程において過渡的な形である声門閉鎖音[ʔ]が現われる。

（50）　掲陽方言 C_2 /p/

	例字	本考察	和訳
a.	十	tsap	じゅう
b.	入	dzip	入る
c.	立	lip	たつ

（51）　掲陽方言 C_2 /ʔ/

	例字	本考察	和訳
a.	辣	laʔ	からい
b.	割	kwaʔ	切り落とす
c.	月	gweʔ	月

（52）　掲陽方言 C_2 /k/

	例字	本考察	和訳
a.	末	mwak	～まつ
b.	术	suk	手立て・～術

c.　　灭　　mek　　消える・消す

2.4　掲陽方言の韻母（母音＋末子音）

掲陽方言の韻母体系における二重韻母および三重韻母と思われるものについては，前述した通り，半母音 1 と半母音 2 ／末子音を用いて記述する。半母音 1 および半母音 2 には，[j]と[w]の 2 種類があり，例えば，[ia]を[ja]，[ui]を[uj]のように表記する。末子音には，鼻音系列[m, n, ŋ]および内破音系列[p, ʔ, k]を含む計 6 つ（4.2 節の内容を参照されたい）が存在する。これにより，掲陽方言の韻母体系において，28 個の音素（表 3 塗潰しの部分）を立てることが可能となる。

掲陽方言の末子音には[n]が存在せず，それと同じ調音点にある[t]もないことが判明した。同じ潮汕方言を話す潮州や汕頭では，[n]は依然として存在している。本考察では，掲陽方言を潮州や汕頭の[n]を含む単字データと比較し，潮州や汕頭における韻母[in]が掲陽方言では[eŋ]

表 3　掲陽方言の韻母体系

i	e	a	ɯ	u	o
		ia		iu	io
	ue	ua			
		ai		ui	oi
		au			
		iau			
		uai			
im		am			
	eŋ	aŋ	ɯŋ	uŋ	oŋ
		iaŋ		uaŋ	ioŋ
ĩ	ẽ	ã			õ
		iã		iũ	iõ
uĩ	uẽ	uã			
		ãi			—
		ãu			õu
		iãu			—
ip		ap			
	ek	ak		uk	ok
iok		iak			
iʔ	eʔ	aʔ		uʔ	oʔ
		iaʔ			ioʔ
	ueʔ	uaʔ			
oiʔ				auʔ	
				iauʔ	

に対応し，母音は狭母音[i]から半狭母音[e]に変化していることが分かった。さらに，中国語普通話では[in]と[iŋ]が対立しているが，潮州や汕頭，揭陽方言を含めたこれらの方言では[in]と[iŋ]の対立は見られなかった。また，潮州や汕頭における[eŋ]も揭陽方言では[eŋ]として対応している。その例を下記例（17），（18）の通りに示した。

（53）［in］－［eŋ］

	例字	揭陽	潮州	汕頭
a.	民	meŋ	min	min
b.	秦	tsheŋ	tshin	tshin
c.	印	eŋ	in	in

（54）［en］－［eŋ］

	例字	揭陽	潮州	汕頭
a.	丁	teŋ	teŋ	teŋ
b.	零	leŋ	leŋ	leŋ
c.	经	keŋ	keŋ	keŋ

3．揭陽方言の声調（単字調）

現代北京官話では入声が消滅し，中古入声字の発音が平声，上声，去声に統合された。また，平声は「陰陽」の 2 種類に分かれ，陰平（第 1 声），陽平（第 2 声），上声（第 3 声），去声（第 4 声）という高低の型のみをもつ。

3.1　先行研究と分析対象

揭陽方言の 8 声調は，袁（1960）や林・陳（1996）による先行研究で陰平（T1）・陽平（T2）・陰上（T3）・陽上（T4）・陰去（T5）・陽去（T6）・陰入（T7）・陽入（T8）として記述され，五度式表示法でそれぞれ 33，55，53，35，213，11，2，5 といった調値が報告されている（表 4，表 5 参照）。表 4 には潮州方言の声調体系（袁 1960）を示し，表 5 は揭陽方言について林・陳（1996）が提示した調値をまとめたものである。

表 4　潮州方言の声調体系［袁 1960：263］

陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
33	55	53	35	213	11	21	4

表 5　揭陽方言の声調体系［林・陳 1996：94］

陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
33	55	53	35	213	11	2	5

本稿では，この 8 声調を T1～T8 の記号で呼び，例字や MC（Middle Chinese）上の分類に沿って整理した（表 6 ）。分析対象としては，各声調を単字で発音する語彙を複数の母語話者から収録し，音響分析にかけた。

表 6　本稿における声調の表記［林・陳 1996：94］

本稿の表記	例字	IPA	調類（MC category）
T1	分	huŋ	陰平・Yinping
T2	云	huŋ	陽平・Yangping
T3	粉	huŋ	陰上・Yinshang
T4	混	huŋ	陽上・Yangshang
T5	训	huŋ	陰去・Yinqu
T6	份	huŋ	陽去・Yangqu
T7	忽	huk̚	陰入・Yinru
T8	佛	huk̚	陽入・Yangru

3.2　音響分析と調値の再算出

実験に先立ち，各音節の基本周波数（F0）を Praat で計測し，話者間の音高差を除去するために対数変換後の Z スコア（LZ 値[1]）を用いた標準化を行った。具体的には，まず各音節の先頭・末尾を除外し，残った発話区間を等時間点 9 つに区切って F0（基本周波数）を抽出する。その後，抽出した F0 に log 変換と Z スコア変換を施す際には，全データの対数平均（logX）と対数標準偏差（SlogX）を用いることで，個人差を正確に除去することができる。本稿では，この処理を MATLAB のスクリプトで自動化し，大量データであっても入力すれば速やかに LZ 値が得られるようにした。この自動処理によって，データ入力ミスの軽減，再現性の向上，解析プロセスの透明性・客観性を確保している。

---

[1] 朱曉農（2005）は『上海声調実験録』（52–61 頁）において，帰一化（正規化）手法が，まず母音の分類や比較に有効であることを指摘し，そのうえで声調研究にも導入可能であることを示した。同書では，具体的に 6 つの帰一化手法（Z-score 転換法，FOR 転換法，POR 転換法，対数半音距離比率法（LD 転換法），LZ（log z-score）転換法，LPOR 転換法）が詳細に解説されている。また朱（2005）は，これら 6 つの帰一化手法を「帰一化前後の標準値の分散係数の比率（normalization index: NI）」を通じて定量的に比較し，その分析結果から声調分析に最も適した手法として，LZ（log z-score）転換法を推奨している。

$$LZ = \frac{\log X - \overline{\log X}}{S_{\log X}}$$

上記の手順で各話者の単字調を抽出・標準化し，発話者全員（男性 3 名）の LZ 値を統合して平均ピッチを算出した（表 4 ）。続いて，得られた平均 LZ 値に基づいて単字調の折れ線グラフを作成し（図 2-1），横軸に実時間（秒），縦軸に LZ 値を示す形で可視化した。調値の算出は，この平均 LZ 値（表 7 ）およびピッチ曲線（図 2 ）を基に行い，LZ 値区間と五度式表示法の対応規則（表 8 ）を用いて最終的な調値について検討を行った。その結果を表 9 に示す。

表 7　単字調の平均 z-score ＆標準化後の時間

F0 / Z-score / T-category	F0-1	F0-2	F0-3	F0-4	F0-5	F0-6	F0-7	F0-8	F0-9
T1	0.525	0.530	0.497	0.497	0.460	0.423	0.400	0.387	0.399
T2	1.159	1.159	1.170	1.181	1.202	1.204	1.205	1.238	1.302
T3	1.369	1.306	1.115	0.811	0.412	0.014	−0.405	−0.947	−1.497
T4	−1.022	−0.989	−0.802	−0.670	−0.553	−0.384	0.043	0.523	1.457
T5	−1.251	−1.495	−1.601	−1.680	−1.560	−1.462	−1.284	−1.006	−0.722
T6	−0.156	−0.238	−0.266	−0.319	−0.358	−0.344	−0.331	−0.316	−0.330
T7	−0.803	−0.826	−0.876	−0.914	−0.966	−1.005	−1.018	−1.070	−1.248
T8	1.158	1.065	1.012	0.984	0.966	0.956	0.938	0.882	0.766

注 1）F0-1～F0-9 は抽出した 9 つの基本周波数サンプリング点を示す。

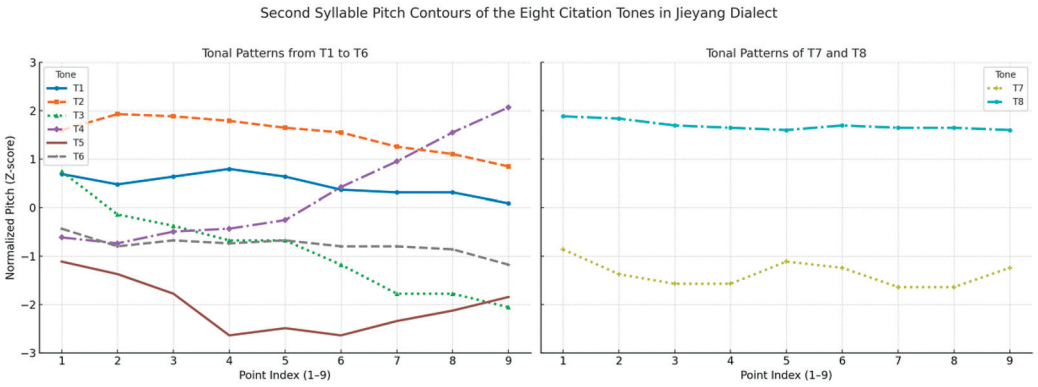


図 2　揭陽方言における 8 声調のピッチ曲線（実験値）

表 8　調値と z-score の対応

Tonal value	1	2	3	4	5
Z-score	−3＜x＜−2	−2＜x＜−1	−1＜x＜0	0＜x＜1	1＜x＜2

表 9　揭陽方言単字調の調値（実験値）

Tone category	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
Tonal value	44	55	42	35	212	33	2	5

表 10　揭陽方言単字調の伝統値と実験値

Tone category（先行研究）	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
Tonal value（伝統値[2]）	33	55	53	35	213	11	2	5
Tone category（本考察）	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
Tonal value（実験値）	44	55	42	35	212	33	2	5

3.3　単字調伝統値との比較

表 10 に示すように，伝統値と実験値は T1・T2・T6・T7・T8 でほぼ一致し，T3（[53] → [51]），T4（[35] → [25]），T5（[213] → [212]）といった屈折や上昇を含む調でやや差異がみられた。

揭陽方言における 8 つの単字調のうち，T1，T2，T6，T7，T8 に関しては，実験結果と先行研究（伝統的記述）との間に大きな乖離は見られず，音高変化の傾向および調型において概ね一致が確認された。これに基づき，本稿では T1（実験値［44］）を中高平調（middle-level tone），T2（[55]）を高平調（high-level tone）として分類する。

一方，T3，T5 については，実験データと従来の記述との間に一定の差異が観察された。T3 に関しては，伝統的には［53］とされているのに対し，実験値では［42］が得られた。しかし，いずれも高音域から低音域にかけて急激な下降を示す点で一致しており，音高の変動様式としては共通する下降調型である。したがって，本稿では T3 を下降調（falling tone）として分類する。

T5 に関しては，伝統的に［213］と記述されてきたが，本実験では［212］という調値が観察された。図 2-1 に示される通り，T5 は全体的に低音域に分布しつつ，発話中盤で一時的な下降を伴った後，やや上昇する屈折型の調型を示している。この調型は，中国語普通話における第 3 声［213］に近似する聴覚印象を与えるため，実験値を［212］に補正し，屈折調的性質を保

[2] 林・陳（1996）に基づく。

持した純粋なる低声調（pure low tone）として位置付ける。

T6 については，伝統的に［11］とされてきたが，実験値は［33］に近い比較的高めの値を示している。とはいえ，音高変動が極めて少なく，全体として平坦な調型を維持しており，調類としては依然として平調（level tone）に属すると判断される。本稿では，T6 を中低音域における平調として，低平調（low-level tone）と分類する。

T7 については，伝統的記述と実験値との間に絶対音高におけるわずかな違いが認められるが，いずれのデータにおいても短時間内に明確な下降傾向を示しており，入声特有の閉鎖的かつ急峻なピッチ変動を特徴とする。この点を踏まえ，T7 は短時下降調（short falling tone）と定義する。

T8 においては，高音域［5］から開始し，短時間内にやや低い音域［4］へと降下する特徴を持つ。この音高の推移は，時間的に圧縮された高下降調型と解釈されるため，本稿では T8 を短時高下降調（short high-falling tone）として位置付ける。以上に基づき，本稿では各単字調に対応する音調タイプを表 11 に整理して示す。

表 11　揭陽方言 8 種の単字調の音調タイプ

Tone category	MC tones	Tonal type	Tnoal value
T1	Yinping	Middle-level	44
T2	Yangping	High-level	55
T3	Yinshang	Falling tone	42
T4	Yangshang	rising tone	35
T5	Yinqu	Pure low tone	212
T6	Yangqu	Low-level	33
T7	Yinru	Short Falling	2
T8	Yangru	Short High-falling	5

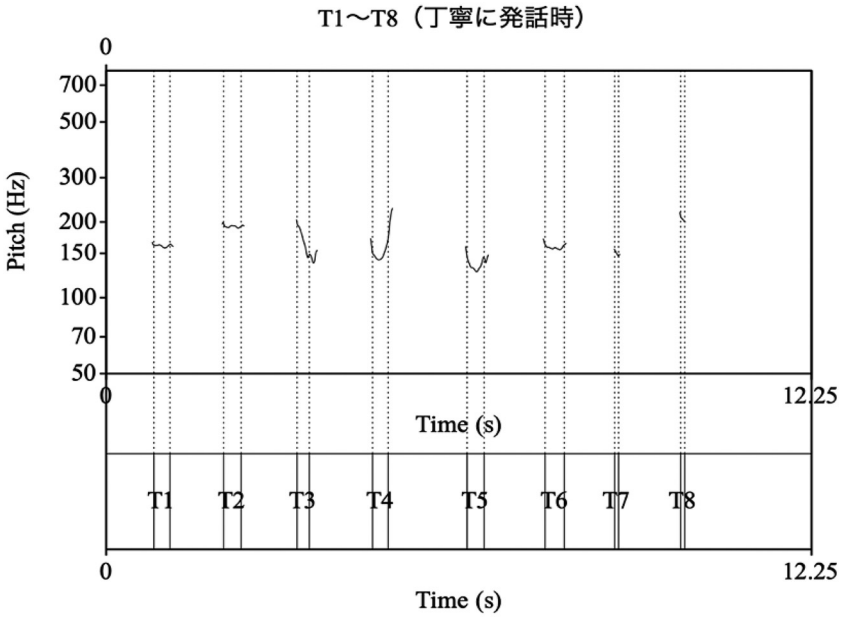


図３　掲陽方言における８声調のピッチ曲線（丁寧発話時）

４．二音節語における連続変調

4.1　調査項目と方法

掲陽方言における声調変化の顕著な特徴の一つとして，変調が主に非末位音節で生じ，末位音節では生じにくい，あるいは生じないという傾向が挙げられる。前述のとおり，本方言には単語レベルで用いられる声調（単字調）が８種類存在し，これらに基づいて二音節語を構成する場合，理論的には８×８＝64 通りの声調結合が可能となる。

本研究では，この 64 通りの声調組み合わせに対応する語彙を選定し，変調の生起有無およびその特徴を明らかにすることを目的として調査を行った。語彙の選定にあたっては，以下の基準に基づいて抽出を行った。

①　語彙的に一単位として成立していること
②　日常的に使用頻度が高く，実際に話者が聴取・発話する機会が多いこと

これらの条件を満たすものを，現地話者の運用実態に即して厳密に収集した。なお，軽声現象（いわゆる弱化した第２音節）を伴う語彙については，本研究の分析枠組みにおいては調査対象から除外した。

4.2　分析結果

本節では，揭陽方言における 8 つの基本調を基準とし，二音節語における第 1 音節（非末位音節）の変調の有無およびその様態に基づいて，調型の変化を 4 つのグループに分類する。変調が一切観察されないものを A グループとし，変調が認められるもののうち，第 2 音節（末位音節）の声調の影響を受けて同化的な変化を示すものを B1 グループ，影響を受けずに独立した調型変化を示すものを B2 グループとする。さらに，第 2 音節において調型の変化が観察されるものは C グループに分類する。なお，変調が認められる場合でも，その調型が 8 つの基本調のいずれかに一致すると判断される場合には基本調に含め，一致しないものについてのみ，新たな派生調として取り扱う。

4.2.1　A グループ

変調が観察されないものは A グループに分類される。今回の調査において，これに該当したのは T1 を第 1 音節に含む T1＋X の組み合わせのみであった。

4.2.1.1　T1＋X

表 3-1 に示す 8 つの語彙は，いずれも T1 を第 1 音節に含む T1＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 12　T1＋X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T1＋T1	蛟刀	ka to	ハサミ
2	T1＋T2	天时	tʰī̍ si	天気
3	T1＋T3	山顶	swã teŋ	山の頂
4	T1＋T4	新妇	seŋ pu	息子の嫁
5	T1＋T5	衫裤	sã kʰou	服
6	T1＋T6	衫袋	sã to	ポケット
7	T1＋T7	冬节	taŋ t͡ɕoiʔ	冬至
8	T1＋T8	中学	toŋ hak̄	中学校

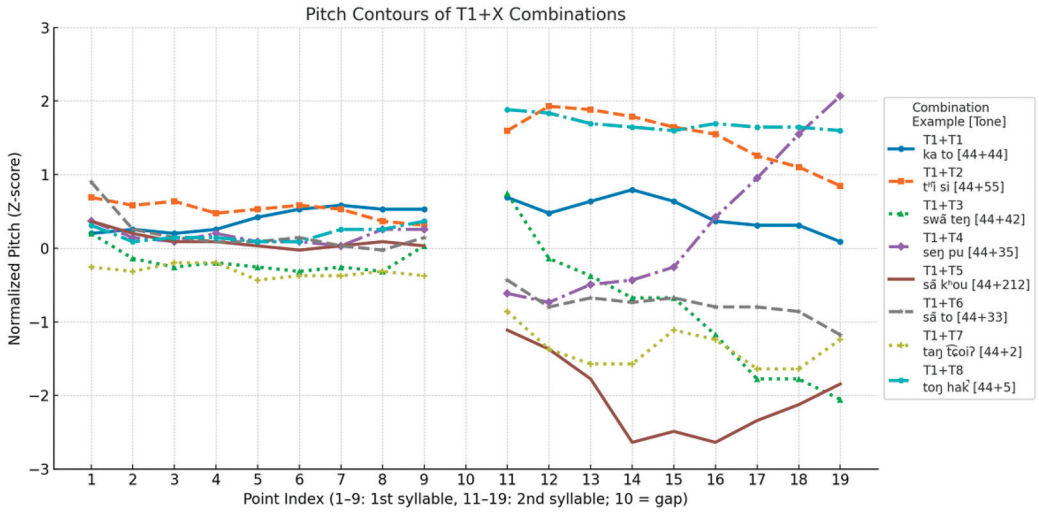


図 4　T1＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭[3]

図 4 に示されるように，T1 は第 1 音節として現れる場合においても，調型に顕著な変化が認められず，中高平調（middle-level tone）に相当する安定した音高で実現される傾向が確認された。この事実は，T1 が連続音環境下においても変調を受けにくい構造的特徴を有することを示唆している。以上より，（1）で示すように T1＋X における第 1 音節の T1 は，8 つの基本調の 1 つである T1［33］として位置づけることができる。

（1）　T1［44］＋　X　→　T1［44］（基本調）

T1＋T1　蛟刀　ka44 → 44　to44　　T1＋T2　天时　tʰĩ44 → 44　si55

T1＋T7　冬节　taŋ44 → 44　t͡coiʔ2　　T1＋T8　中学　toŋ44 → 44　hak̄5

4.2.2　B1 グループ

変調が認められるもののうち，第 2 音節（末位音節）の声調の影響を受けて同化的な変化を示すものを B1 グループに分類される。今回の調査において，これに該当したのは T3，T5，T7 を第 1 音節に含む T3＋X，T5＋X，T7＋X の三つの組み合わせであった。

[3] 図の左側に示されている 8 本の曲線は，いずれも第 1 音節に現れる T1 のピッチ輪郭を表しており，右側に示されている 8 本の曲線は，それぞれの組み合わせにおける第 2 音節（X）の声調に対応する。

4.2.2.1　T3+X

表 13 に示す 8 つの語彙は，いずれも T3 を第 1 音節に含む T3＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 13　T3 ＋ X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T3＋T1	水鸡	tsui koi	カエル
2	T3＋T2	粿条	kwe tjau	ライスヌードル
3	T3＋T3	手指	tsʰju tsai	指
4	T3＋T4	软垫	nɤŋ tjaŋ	マットレス
5	T3＋T5	手布	tsʰju pou	ハンカチ
6	T3＋T6	洗面	soi meŋ	洗顔
7	T3＋T7	粿汁	kwe tsap̀	ライスシートの細切れ
8	T3＋T8	饼药	pjã joʔ	せっけん

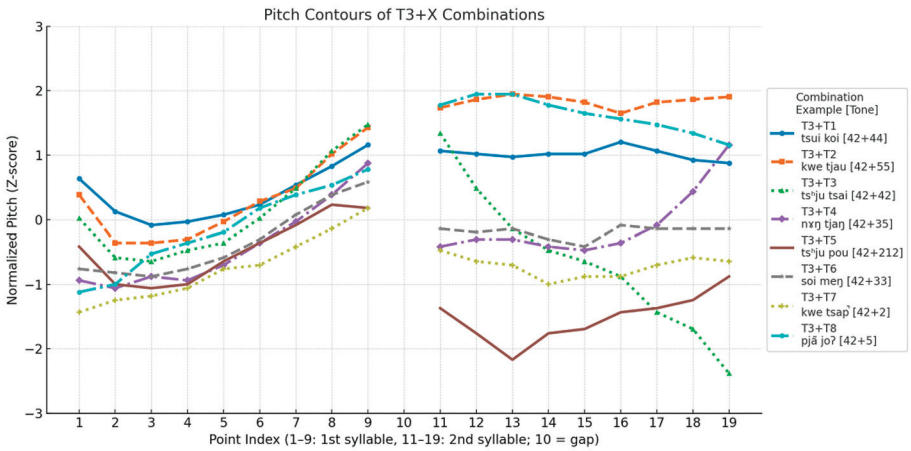


図 5　T3+X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 5 に示されるように，T3 は本来，下降調（falling tone）［42］として記述される声調であるが，第 1 音節として出現する際には，基本調 T4［35］に類似する音域で実現される例も確認された。一方で，一部の組み合わせでは，変調後の T3 が［2］付近から始まり，最終的に［4］付近まで上昇するパターンも観察されている。これらの結果から，T3＋X における変調パターンは，基本調 T4 に合流するものと，そうでない新たな音調タイプに分類する必要があると考えられる。本稿では，前者を基本調 T4［35］として記述し，後者については，新たな派生調 T4′［24］を立て，両者を区別することとする。

（2）に見られるように，第 2 音節に現れる声調はいずれも低～中程度の音高で実現されてお

り，変調後の第 1 音節の T3 もそれらに同化されるかのように，近い音域で発話されていると考えられる。これに対して，（3）では第 2 音節の声調はいずれも高音域で発話されるため，変調後の T3 もそれに呼応するように，［24］よりも高い［35］の音調で実現されている。

（2） T3［51］＋ X → T4［35］（基本調）

T3＋T2 粿条 kwe51 → 35 tjau55　　T3＋T3 手指 tsʰju51 → 35 tsai42-21

T3＋T8 饼药 pjã51 → 35 joʔ5

（3） T3［51］＋ X → T4′［24］（派生調）

T3＋T1 水鸡 tsui51 → 24 koi33　　T3＋T4 软垫 nɤŋ51 → 24 tjaŋ35

T3＋T5 手布 tsʰju51 → 24 pou212　　T3＋T6 洗面 soi51 → 24 meŋ33

T3＋T7 粿汁 kwe51 → 24 tsap̚2

4.2.2.2 T5＋X

表 14 に示す 8 つの語彙は，いずれも T5 を第 1 音節に含む T5＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 14 T5＋X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T5＋T1	臭酸	tsʰau sɤ̃ŋ	酸っぱくて臭い
2	T5＋T2	菜头	tsʰai tʰau	大根
3	T5＋T3	碎纸	tsʰwi tswa	細かいお金
4	T5＋T4	介绍	kai sjau	紹介する
5	T5＋T5	旷课	kʰwaŋ̃ kʰwe	授業をサボる
6	T5＋T6	清饭	tsʰeŋ̃ puŋ̃	残飯
7	T5＋T7	性格	sẽ keʔ	性格
8	T5＋T8	数学	sjau hak̃	数学

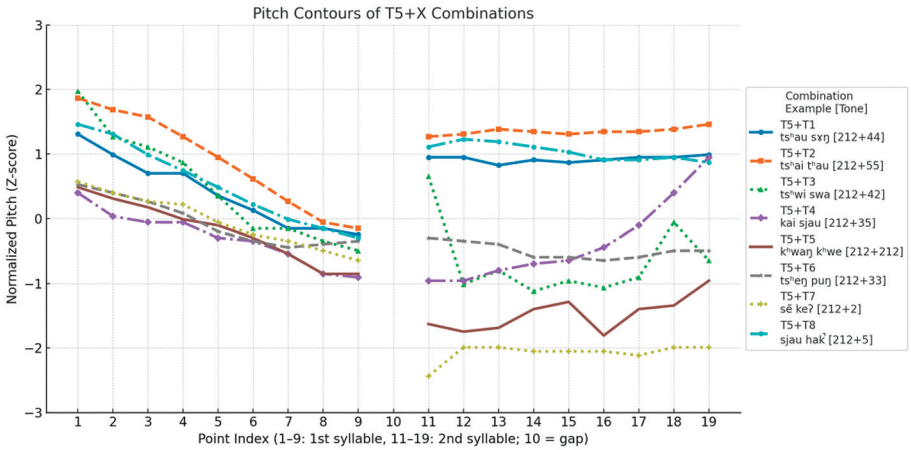


図 6　T5＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 6 に示すように，T5 は本来，屈折調的性質を帯びた純粋な低声調（pure low tone）［212］として記述される声調である。しかしながら，第 1 音節として出現する場合には，基本声調である T3［42］と類似した音域で実現される語彙が確認される一方，T3 とは異なる高めの出発点から徐々に下降するタイプも観察された。

このことから，T5＋X における変調パターンは，変調後に T3［42］に収束する型と，異なる音調に転化する型の二種に分類する必要があると考えられる。前者は，基本声調 T3［42］への合流として分析し，後者については，新たな派生調 T3′［53］を設定し，両者を体系的に区別する。実際に，例（4）および（5）に示されるように，T5＋X の構造においても，T3＋X と同様の同化的変調が確認された。

（4）　T5［212］＋　X　→　T3［42］（基本調）

T5＋T1　臭酸　tsʰau212 → 42 sɤŋ44　　T5＋T4　介绍　kai212 → 42 sjau35

T5＋T5　旷课　kʰwaŋ212 → 42 kʰwe212　　T5＋T6　清饭　tsʰeŋ212 → 42 puŋ33

T5＋T7　性格　sẽ212 → 42 keʔ2

（5）　T5［212］＋　X　→　T3′［53］（派生調）

T5＋T2　菜头　tsʰai212 → 53 tʰau55　　T5＋T3　碎纸　tsʰwi212 → 53 tswa42-21

T5＋T8　数学　sjau212 → 53 hak̃5

4.2.2.3　T7＋X

表に示す 8 つの語彙は，いずれも T7 を第 1 音節に含む T7＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 15　T7＋X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T7＋T1	客厅	kʰeʔ tʰjā	リビング
2	T7＋T2	节能	tsak̄ nɤŋ	エコ
3	T7＋T3	竹笋	tekʰ suŋ	筍
4	T7＋T4	烙卵	lwaʔ nɤŋ	卵焼き
5	T7＋T5	擦喙	tsʰek tsʰui	口をふく
6	T7＋T6	湿度	sip̄ tou	湿度
7	T7＋T7	失约	sek̄ joʔ	約束を破る
8	T7＋T8	乞食	kʰek̄ tsjaʔ	乞食

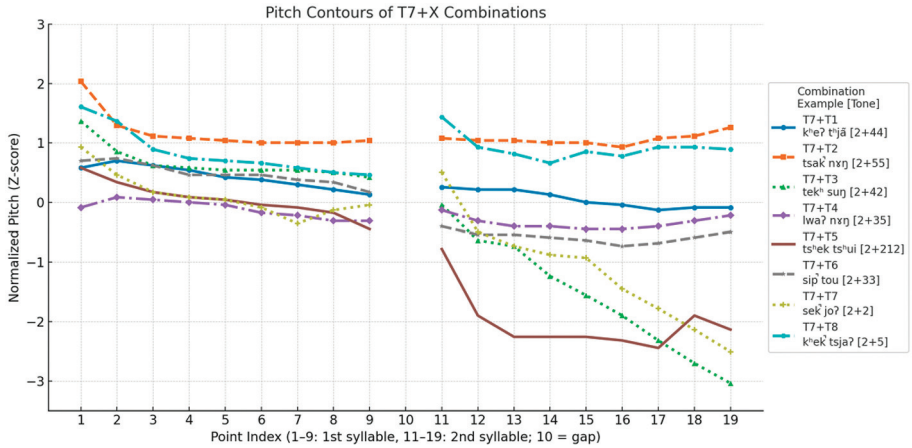


図 7　T7＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 7 に示すように，T7 は T1～T6 の基本声調とは異なり，入声に由来する短促な音節として，調値［2］をもって記述される。T7 は音節末の閉鎖による特有の短さを備えているが，第 1 音節として出現する場合には，T3＋X や T5＋X のように，第 2 音節の声調に同化的な影響を受ける現象が観察された。

具体的には，例（5）および（6）に示されるように，T7＋X の変調後の調型は大きく二種に分類される。一方は，調値［5］をもつ T8 と同様の音域で実現されるものであり，これは基本声調 T8［5］への合流とみなされる。他方には，T8 ほど高くない音域で発音されるものがあり，これについては派生調 T8′［3］を新たに立て，両者を体系的に区別する。

（6）　T7［2］＋　X　→　T8［5］（基本調）

T7＋T2　节能　tsak̄2 → 5 nɤŋ55　　T7＋T3　竹笋　tekʰ2 → 5 suŋ42-21

T7＋T8　乞食　kʰek̄2 → 5 tsjaʔ5

（7）　T7［2］＋　X　→　T8′［3］（派生調）

T7＋T1　客厅 kʰeʔ2 → 3 tʰjã44　　T7＋T4　烙卵 lwaʔ2 → 3 nɤŋ35

T7＋T5　擦喙 tsʰek2 → 3 tsʰui212　　T7＋T6　湿度 sip̄2 → 3 tou33

T7＋T7　失约 sek̄2 → 3 joʔ2

4.2.3　B2 グループ

前節までに述べたように，変調が観察されるもののうち，第 2 音節（末位音節）の声調の影響を受けず，独立した調型変化を示す型を本稿では B2 グループと定義する。今回の調査において，このグループに該当したのは，T2・T4・T6・T8 を第 1 音節に持つ以下の四つの組み合わせ，すなわち T2＋X，T4＋X，T6＋X，T8＋X であった。

4.2.3.1　T2＋X

表 16 に示す 8 語は，いずれも第 1 音節に T2 を含む T2＋X の組み合わせに基づいて選定されたものである。各例における調値の変化は，基本声調からのずれがある程度認められるものの，変調後の調型はいずれも特定のパターンに収束しており，第 2 音節の声調に大きく左右されないという共通性が確認された。

表 16　T2＋X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T2＋T1	楼梯	lau tʰui	階段
2	T2＋T2	眠床	meɲ t͡sɤŋ	ベッド
3	T2＋T3	肠粉	tɤŋ huŋ	チョンファン
4	T2＋T4	莲厚	nai kau	蓮根
5	T2＋T5	长裤	tɤŋ kʰou	長ズボン
6	T2＋T6	红豆	aŋ tau	あずき
7	T2＋T7	蚝烙	o lwaʔ	牡蠣オムレツ
8	T2＋T8	牛肉	gu nek̄	牛肉

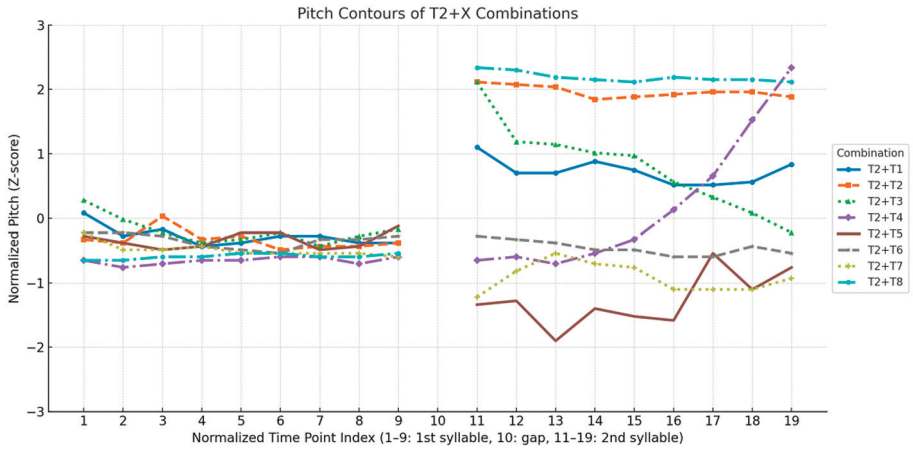


図 8　T2＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 8 に示すように，T2 は単独で用いられる場合には，高平調（high-level tone）［55］として分類される。しかしながら，語中で第 1 音節として出現する際には，調型が著しく下降し，しばしば低音域で実現される事例が多数確認された。例（8）で示すように T2 が非末位音節に置かれることにより調型の安定性を失い，結果として基本声調 T6［33］に近い音調へと収束する傾向があることを示唆している。

（8）　T2［55］＋　X　→　T6［33］（基本調）

T2＋T1　楼梯　lau55 → 33　tʰui44　　T1＋T2　眠床　meŋ55 → 33　t͡sɤŋ55

T2＋T7　蚯烙　o55 → 33　lwaʔ2　　T2＋T8　牛肉　gu55 → 33　nek̄5

4.2.3.2　T4+X

表 17 に示す 8 つの語彙は，いずれも T4 を第 1 音節に含む T4＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 17　T4+X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T4＋T1	象征	sjaŋ teŋ	シンボル
2	T4＋T2	卵仁	nɤŋ dzeŋ	黄身
3	T4＋T3	父母	pe bo	両親
4	T4＋T4	右耳	iu çĩ	右耳
5	T4＋T5	后悔	au hwe	後悔する
6	T4＋T6	頷链	am ljaŋ	ネックレス
7	T4＋T7	老叔	lau tsek̄	父の弟
8	T4＋T8	上落	sjõ loʔ	往来する

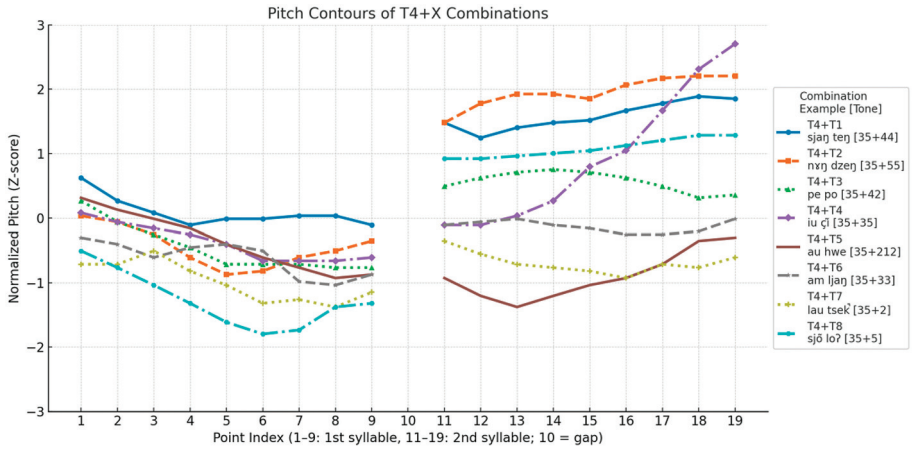


図 9　T4＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 9 に示された結果から明らかなように，T4 が第 1 音節として出現する場合，本来の上昇調としての性質は明確には保持されず，相対的に低い音域において実現される傾向が観察された。特に T4＋T5 の語彙においては，調型として T5［212］と類似した特徴を示すものの，T5 のように中間点で屈折して再上昇する動きは認められず，全体として連続的な下降を示す点で本質的に異なっている。

このような違いは，両者を互いに置き換えた際に不自然な発音となることからも確認されるため，本稿では，T4＋X の変調後の調型を既存のいずれの基本声調や派生調にも属さない独立した型と判断し，下降調としての特徴に基づいて新たな派生調 T3′［21］を立て，分析上これを他の声調と区別することとする。

（9）　T4［35］＋　X　→　T3′［21］（派生調）

T4＋T1　象征　sjaŋ35 → 21　teŋ44　　T4＋T2　卵仁　nɤŋ35 → 21　dzeŋ55

T4＋T7　老叔　lau35 → 21　tsek̚2　　T4＋T8　上落　sjõ35 → 21　lo?5

4.2.3.3　T6＋X

表 3－7 に示す 8 つの語彙は，いずれも T6 を第 1 音節に含む T6＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 18　T6＋X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T6＋T1	豆干	tau kwã	硬い豆腐
2	T6＋T2	豉油	sĩ iu	醤油
3	T6＋T3	饭碗	puŋ wã	お椀
4	T6＋T4	大舅	twa ku	母の兄
5	T6＋T5	面布	meŋ pou	顔拭きタオル
6	T6＋T6	地豆	ti tau	ピーナッツ
7	T6＋T7	面色	meŋ sek̄	顔色
8	T6＋T8	树叶	tsʰju hjoʔ	木の葉

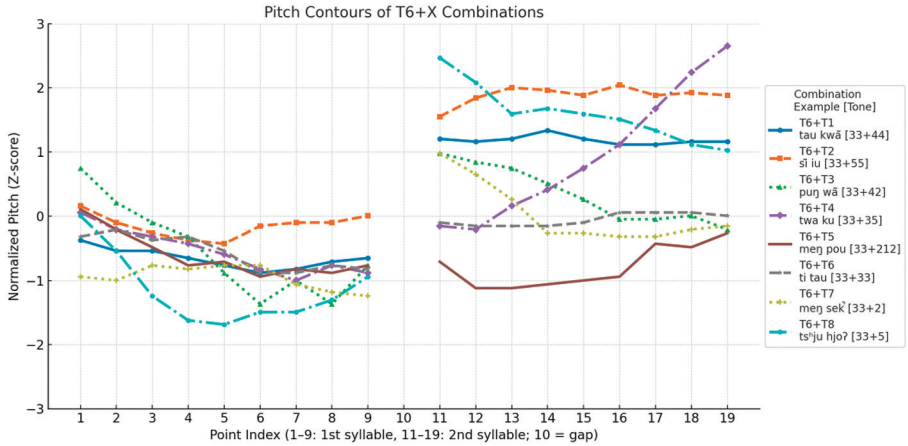


図 10　T6＋X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

T6＋X における非末位音節 T6 の変調は，T4＋X における変調傾向とよく似た挙動を示す。T6 は本来，中低平調（mid-low level tone）［33］として定義されるが，他の声調と結合した際には，調型が段階的に下降し，T3 や T5 に近い音域で実現される例が観察された。ただし，T6 の変調は完全に T3 あるいは T5 の基本声調に合流するわけではなく，比較的緩やかな下降や独自の音調的移行を伴う点で両者と区別される。これらの特徴から，本稿では T6＋X の変調パターンを T4＋X と同様の型に属するものと捉え，分析上同一のカテゴリーとして扱うこととする。

（10）　T6［33］＋　X　→　T3′［21］（派生調）

T6＋T1　豆干　tau33 → 21　kwã44　　T6＋T2　豉油　sĩ33 → 21　iu55

T6＋T7　面色　meŋ33 → 21　sek̄2　　T6＋T8　树叶　tsʰju33 → 21　hjoʔ5

4.2.3.4　T8+X

表 19 に示す 8 つの語彙は，いずれも T8 を第 1 音節に含む T8＋X の声調組み合わせに基づき選定されたものである。

表 19　T8+X における二音節語の例（8 声調の組み合わせ）

	組み合わせ	語彙	発音	意味
1	T8＋T1	蜜蜂	bek˥ pʰaŋ	はち
2	T8＋T2	日头	dzek˥ tʰau	お日様
3	T8＋T3	日本	dzek˧˥ puŋ	日本
4	T8＋T4	的士	tek˥ si	タクシー
5	T8＋T5	白菜	peʔ tsʰai	白菜
6	T8＋T6	食饭	tsjaʔ puŋ	ご飯を食べる
7	T8＋T7	目汁	dzek˥ tʰau	涙
8	T8＋T8	学习	hak˥ sip˥	勉強する

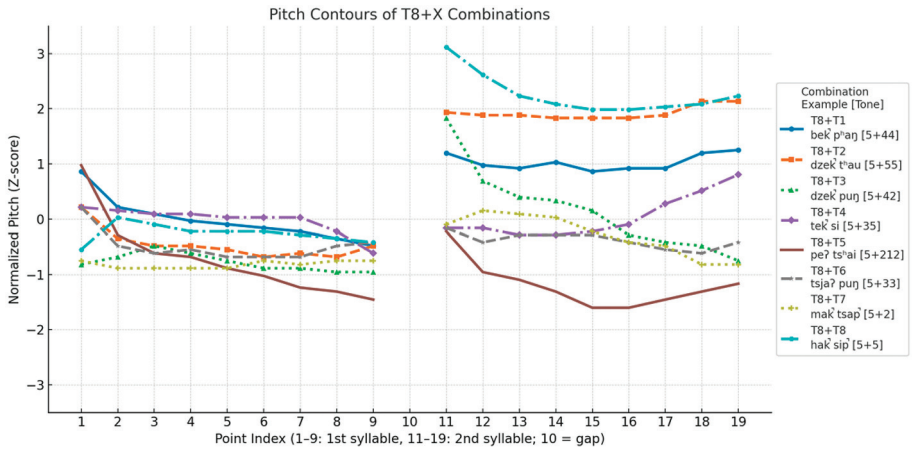


図 11　T8+X の 8 つの組み合わせのピッチ輪郭

図 11 に示された結果によれば，T8 が第 1 音節として出現する場合，いずれの声調との組み合わせにおいても，調型は基本声調 T7［2］に近い低音域で実現される傾向が認められた。これは，T8 が非末位音節に置かれる際に，原調である高声調としての性質を維持できず，T7 と類似した下降調型へと変化することを示唆している。

（11）　T8［5］＋　X　→　T7［2］（基本調）

T8＋T1　蜜蜂 bek˥　5 → 2　pʰaŋ44　　T8＋T2　日头 dzek˥5 → 2　tʰau55

T8＋T7　目汁 dzek˥　5 → 2　tʰau2　　T8＋T8　学习 hak˥5 → 2　sip˧˥5

4.2.4 C グループ

第 2 音節において調型の変化が観察されるものは，本稿では C グループに分類する。今回の調査においてこの型に該当したのは，T3 を第 2 音節に含む語彙のうち，第 1 音節が T3・T4・T7 である場合に限られた。

これらの語彙では，第 2 音節の T3 が，組み合わせによって本来の調型［42］ではなく，低く下降する別種の音調として実現される例が確認された。調型変化が起きた場合でも，既存の基本声調には該当せず，T4＋X や T6＋X において確認された派生調 T3′［21］と類似の音調であることが明らかとなった。

（12） T3［42］＋ X → T3［42］（基本調）

T1＋T3 山顶 swã44 teŋ42 → 42　T2＋T3 肠粉 tɤŋ55-33 huŋ42 → 42

T4＋T3 父母 pe35-21 ^{m}bo42 → 42　T6＋T3 饭碗 puŋ33-21 wã42 → 42

T8＋T3 日本 dzek̄5-2 puŋ42 → 42

（13） T3［42］＋ X → T3′［21］（派生調）

T3＋T3 手指 ts^{h}ju42 → 35 tsai42 → 21　T5＋T3 碎纸 ts^{h}wi212 → 53 swa42 → 21

T7＋T3 竹笋 tek^{h}2 → 5　suŋ42 → 21

5．まとめ

本稿では，揭陽方言における 8 つの声調を対象に，音響音声学的手法を用いた分析を行い，単字調（基本声調）の実験値が先行研究とどの程度一致するかを検証するとともに，二音節語における連続変調の具体的パターンを明らかにした。以下に，得られた主要な知見をまとめる。

第一に，単字調の実験値は，全体として先行研究（袁，1960；林・陳，1996）と整合的であった。ただし，T3 および T4 のような下降・上昇を含む声調においては，数値的なずれが若干観察された。

第二に，二音節語における第 1 音節の変調パターンは，音調変化の様態と音響的特性に基づき，以下の四つのグループに分類される。

A グループは，T1＋X の組み合わせのみから構成され，変調が生じない型である。

B1 グループには，T3＋X，T5＋X，T7＋X の三つの組み合わせが含まれる。これらは第 2 音節の声調からの影響を受けやすく，変調後に基本調に収束する場合のほか，新たな派生調が形成される例も確認された。

B2 グループは，T2＋X，T4＋X，T6＋X，T8＋X の四つの組み合わせから成り，第 2 音節の影響を受けず，いずれの場合も変調後には基本調に合流するか，あるいは特定の派生調（例：T3′

[21]）へと転化する。全体として，比較的規則的な変調が特徴である。

C グループは，T3 が第 2 音節に現れる場合であっても変調が生じる可能性を示唆するものであり，例外的な変化として位置づけられる。

今後の課題としては，より自然な談話や会話における連続変調の挙動，および話者間・世代間における変異の実態を包括的に調査する必要がある。また，掲陽方言内部の地域差に加え，他の閩南語諸変種との対照研究を通じて，声調変化に関する普遍的メカニズムおよび地域固有の特徴の把握が進展することが期待される。

（ご　ぎょうき・言語科学研究室）

参考文献

和文

池田広昭（1984）「広東語の声調の実験音声学的研究」『金田一春彦博士古稀記念論文集・第 2 巻言語学篇』東京：三省堂.

上村幸雄（1992）「琉球列島の言語」『言語学大辞典世界言語篇 4（下-2）』東京：三省堂. pp.771-814.

加藤重広・安藤智子（2016）『基礎から学ぶ音声学講義』東京：研究社.

香坂順一（1974）『中国語学の基礎知識』東京：光生館.

佐藤進・濱口富士雄（2010）『全訳 漢辞海第三版』東京：三省堂.

菅原真理子（2017）『朝倉日英対照言語学シリーズ 3 音韻論』東京：朝倉書店.

下地理則（2018）『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（1979）『アジア・アフリカ言語調査票下』東京：東京外国語大学.

沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京：東京堂.

平山久雄（2022）『中古音講義』東京：汲古書院.

藤堂明保（1980）『中国語音韻論―その歴史的研究』東京：光生館.

呉暁輝（2016）「平成 28 年修士論文―基礎語彙を用いた中国掲陽方言の音声に対する考察」北海道大学文学研究科修士論文.

林志達（2020）「令和 2 年修士論文―漢語潮汕方言の連続変調の特徴」北海道大学文学研究科修士論文.

李思敬（1995）『音韻のはなし―中国音韻学の基本知識』（慶谷壽信・佐藤進訳）東京：光生館.

吉川雅之（2014）「レッグ編 Lexilogus に記される閩南語音の表記と体系」『東洋文化研究所紀要』巻 165 pp.206-244.

蒋垂東・舘野由香理・坂上智一（2008）「日本漢音と閩南方言―中古鼻音声母の鼻音化を中心に―」『文教大学 言語と文化』第 20 号. pp.44-69.

肖潔（2017）「平成 30 年修士論文―中国海南語万寧方言の音声・音韻についての考察」北海道大学文学研究科修士論文.

中文

陳寶賢・李小凡（2008）「闽南方言连续变调新探」『语文研究』No.2, pp.47-52.

陳寶賢（2010）「闽南方言两字组连读变调」『语言研究』Vol.30，No.2，pp.43-88.
高然（1999）『语言与方言论稿』暨南大学出版社.
蔣儒林（1931）『潮语十五音』汕頭文明商务书馆.
金健（2010）「广东方言和东海方言平调的感知研究」『方言』No.2，pp.145-155.
金健・施其生（2010）「汕头谷饶方言多个降调的声学分析和感知研究」『中国语文』No.6，pp.544-576.
林晴（2013）「潮州话古鼻音韻的音变历程」『暨南大学学报（哲学社會科学版）』第 9 號.
林春雨·甘於恩（2016）「粵东闽语声调的地理类型学研究」『汕头大学学报（人文科学版）』No.5, pp.160-165.
林道祥（1991）「潮州话的一种特殊变调」『学术研究』Vol.8，No.1，pp.51-54.
林倫倫（1992）「广东閩方言的分佈和语音特征」『汕头大学学报（人文科学版）』第 8 卷.
林倫倫・陈小枫（1996）『广东閩方言语音研究』汕头大学出版社.
林倫倫・潘家懿（2000）『广东方言与文化论稿』中国文联出版社.
李永明（1986）「潮汕方言语音的内部差别」『湘潭大学学报（社会科学版）』No.2，pp.93-97.
马重奇・马睿颖（2021）「近代传教士所撰八种潮汕方言著作音系综合比较研究」『北斗语言学刊』Vol.8.
石锋（1986）「天津方言双字组声调分析」『语言研究』第 1 期.
石锋（2009）『实验音系学探索』北京大学出版社.
宋益丹（2009）《南京方言中的入声喉塞尾实验研究》『南京师范大学文学院学报』第 2 期.
王育德（1972）『台湾語入門』台湾青年社.
徐宇航（2013）「十九世紀的潮州方言体系」『中国文化研究所学报』第 57 号．p.233.
袁丹（2013）《基于实验分析的吴语语音变异研究》复旦大学博士论文.
袁家骅（1960）『汉语方言概要』语文出版社.
趙元任（1987）『語言問題』台湾商務印書館.
朱晓农・洪英（2008/2010）Implosives came from voiceless stops: a case study of Chaozhou Min. Paper in 第八届中国语音学学术会议，北京，2008.4.18-20 Also in Chinese Journal of Phonetics『中国语音学报 2010』Vol.2: 103-107.
朱晓农（2010）『语音学』北京：商务印书馆.

欧文

Chao, Y.R.（1930）. *A system of "tone-letters"*. Le Ma: Treasure Netic, 1930（30）, pp. 24-27.
Chen, M.Y.（2008）. *Tone Sandhi: Patterns across Chinese Dialects*.（Revised ed.）. Cambridge University Press.（Cambridge Studies in Linguistics, Series Number 92）.

10.14943/rjgshhs.25.l 275

チャイコーフスキイの交響曲第１番における民謡旋律[1)]

── ソナタ形式における展開法の分析とその音楽的意味 ──

池　田　航　輝

要　旨

本論は，チャイコーフスキイ Пётр Ильич Чайковский（1840–1893）の交響曲第１番 ト短調 作品 13《冬の白日夢 *Зимние Грёзы*》（1868 年初演）の第４楽章における民謡旋律について，ソナタ形式の主題としての展開法を楽曲分析により明らかにし，その音楽的意味を示すことを目的とするものである。第１番第４楽章は，序奏とコーダの付いたソナタ形式で書かれており，ソナタ主部の副次主題として民謡《私は種をまく》に基づく旋律が用いられている。本論では楽曲中にみられる民謡旋律そのものの操作を中心に分析しつつ，ソナタ形式の観点から，楽曲全体の展開における主題としての民謡旋律の展開法を見ていく。

民謡旋律は，はじめに序奏で断片的な素材として提示された後，それが発展する形で旋律全体への提示に至る。ソナタ主部に入ると，提示部では全く性格の異なる第１主題が現れ，民謡旋律は第２主題として改めて提示される。重要なのは，序奏の民謡旋律と主部の民謡旋律ではリズムや構成音が異なっていることで，ここで民謡旋律には２つのパターンが存在することが明らかになる。展開部では，この２つの民謡旋律のパターンが，結末に向けて複合を見せる。

本楽曲のもう一つの大きな特徴として，２つの主題間にトニックとドミナ

1) 本論でのロシア人名のカナ表記は，力点位置（アクセント）にのみ音引き（ー）を入れ，力点位置が不明な場合，および力点位置以外の箇所には音引きを使用しないこととした。また，音楽作品名の表記については原則として『ニューグローヴ世界音楽大事典』（日本語版）の作品表を基本とするが，現在までに定訳が改められている場合などは適宜筆者の判断によって表記する。また，民謡などで慣例的な日本語表記のないものについては，特筆しない限り筆者の訳による。このほか年月日に関わる表記は，特筆しない限り全てロシア暦（ユリウス暦）に準じる。ただしいずれの場合も，日本語文献からの引用や書誌情報についてはもとの表記に従う。

ントの関係が構築されないことが挙げられる。ここに生じる調的緊張関係は，本来その解決が求められる再現部では解決されずコーダにおいて解決されるが，その際，第 2 主題である民謡旋律は対立項である第 1 主題の要素を取り込むことによって主調を獲得すると同時に，2 パターンの民謡旋律の共存が可能となる。

第 1 番第 4 楽章では，それ自体で完結している民謡旋律という素材をソナタの展開に適応させる試みが見られると同時に，民謡旋律はその弁証法的展開の中で様々に変容されながら音楽的な勝利を迎え，最終的に音楽全体を統一するものへと昇華されるのである。

1．はじめに：問題の所在

本論は，チャイコーフスキイ Пётр Ильич Чайковский（1840–1893）の交響曲第 1 番 ト短調作品 13《冬の白日夢 *Зимние Грёзы*》（1868 年初演[2]）の第 4 楽章における民謡旋律について，ソナタ形式の主題としての展開法を楽曲分析により明らかにし，その音楽的意味を示すことを目的としている。

チャイコーフスキイが生涯にわたって取組んだジャンルである交響曲は，彼の作品全体の中でも主要な位置を占めている。その中でも，作曲家活動の最初期に書かれた第 1 番は，ロシア初の専門的な音楽教育機関として設立されたペテルブルク音楽院（1862 年設立）を第 1 期生として卒業したチャイコーフスキイが初めて書き上げた大作であり，ロシアの作曲家による交響曲としては，アカデミックな書法を素地として書かれた本格的な交響曲の萌芽的存在ともいえよう。

そうした背景をもちながらも，この交響曲には既に「従来の慣例からの逸脱」（Brown 1978, 107）が認められる。この点について，Brown はソナタ形式で書かれた第 4 楽章を取上げ，提示部第 2 主題が中音短調（mediant minor）であることに言及している。後に詳しく述べるが，実際に第 1 番第 4 楽章では，提示部第 1 主題がとる主調（トニック）はト長調であるため，それに対応する第 2 主題は通常であれば属調（ドミナント）のニ長調に設定されるはずであるが，3 度調のロ短調に設定されている[3]。

他方，第 1 番第 4 楽章では，民謡《私は種をまく *Я посею ли, мулада Младенька*》に基づく旋律が用いられているが，ほかならぬこの民謡旋律こそが，まさにその逸脱を成す第 2 主題なの

---

2) 全曲初演に先駆けて，第 2，第 3 楽章のみが 1866 年に初演されている。

3) 基本的なソナタ形式では，原則として提示部第 1 主題（主要主題）が長調の場合，第 2 主題（副次主題）は属調（V）に設定され，短調の場合は平行調（Ⅲ）かごくまれに短調上の属調（v）に設定される（Hepokoski and Darcy 2006, 16）。

である。もちろん，同時代までの音楽作品において，第 2 主題が属調をとらないことそれ自体は際立って珍しいものではない。重要なのは，ここでの第 2 主題，すなわち民謡旋律が第 1 主題との間にトニックとドミナントの関係を構築しないという現象が，音楽が結末へと向かうプロセスの中でどのような意味をもつかということである。Brown の関心はこの現象にそれ以上深入りせず，民謡旋律についてもその存在に触れるのみにとどまっている。

とはいえ，チャイコーフスキイの作品全体を検討する上で，民謡旋律の扱い方は注目すべき要素である。ロシアの作曲家の作品のうち，民謡の旋律が用いられたものがまとめられている Бачинская 1962 によると，チャイコーフスキイは全 15 作品に民謡の旋律を用いている。それらを一瞥すると，1870 年代まではオペラから交響曲，室内楽，協奏曲に至るまで様々な性格の作品が見られるのに対し，1880 年代以降になると交響曲は見られず，特に晩年はオペラに偏っているなど，作曲されるジャンルの傾向に変化が見られる〔表 1〕。しかしこの創作傾向の変化の中で，作品と民謡旋律の関係がどのようなものであったのかは未だ明らかでない。

〔表 1〕チャイコーフスキイが民謡旋律を用いた作品[4)]

作品番号	作品名	編成	作曲年
76	序曲《雷雨》	管弦楽	1864
13	交響曲第 1 番《冬の白日夢》	管弦楽	1866（初稿）
	《オプリーチニク（親衛隊員）》	オペラ	1870–1872
11	弦楽四重奏曲第 1 番	室内楽	1871
17	交響曲第 2 番	管弦楽	1872（初稿）
12	劇付随曲《雪娘》	舞台作品	1873
23	ピアノ協奏曲第 1 番	独奏＋管弦楽	1874
24	《エヴゲーニイ・オネーギン》	オペラ	1877–1878
36	交響曲第 4 番	管弦楽	1877
39	《子供のためのアルバム》	ピアノ	1878
48	《弦楽のためのセレナード》	管弦楽（弦のみ）	1880
49	祝典序曲《1812 年》	管弦楽	1880
	《マゼーパ》	オペラ	1881–1883
	《チェレヴィーチキ（可愛い靴）》	オペラ	1885
	《魔女（魔性の女）》	オペラ	1885–1887

そもそも，チャイコーフスキイが民謡旋律を実際の音楽作品においてどのように扱っているのかという問題については，十分な検討がなされてきたとは言い難い。その大きな理由として，これまでのチャイコーフスキイ研究では楽曲分析に基づく作品研究が重視されてこなかったこ

4) Бачинская 1962 に基づき筆者作成。

とが挙げられる[5]。チャイコーフスキイの場合，多くの伝記的研究（前述の Brown 1978 も含む）が著されてきたが，そうした伝記的記述と関連して作品の考察がなされる一方，専ら楽譜に基づいて作曲技法などを明らかにしようとする作品研究の数はきわめて少ない[6]。

そうした中で，チャイコーフスキイの民謡に関する書法については，主に編曲の観点から論じられてきた。例えば Евсеев 1973 は，チャイコーフスキイが手掛けた民謡集に見られる和声法や対位法を取上げ，民謡集としての編纂にあたっての編曲技法を細かく検討している点で，貴重な先行研究といえる。ただし，Евсеев が着目しているのはあくまでも民謡集に収録された民謡の旋律と，編曲にあたって用いられた前述の西洋音楽理論との関係であり，実際の音楽作品の構成要素として扱われた場合については踏み込めていない。またそうした書法の問題が国民主義，すなわちナショナリズム（国民主義）の観点と結びつくと，いかに元々の民謡の性格を忠実に残しているかどうかが問題とされるばかりで，Taruskin はそうした態度を「作曲家の音楽様式の本質を『純粋な民謡』から直接的に抽出することに固執している」（Taruskin 1997, 50）と批判している[7]。

先に触れた伝記的情報や，国民主義といった音楽史上の問題が，作品の理解に貢献し得ることは確かである。しかしそれだけでは，作品の全貌は明らかにならない。そして実際の音楽作品では，民謡旋律はそれ単体で存在するのではなく，他の様々な要素と関わりながら音楽全体の展開を構成しているのであり，実際の作品の構造の分析なくしては，第 1 番の場合に限らず，チャイコーフスキイの作曲上の試みを見落とすことになろう。チャイコーフスキイは自身の作品において，民謡旋律をどのような素材として，どのような書法をもって扱っていたのだろうか。チャイコーフスキイが初めて世に問うた大作であり，かつ民謡旋律を用いた最初期の作品である 1 番での民謡旋律の扱い方は，彼の創作全体を辿る上でも有効な示唆を与えてくれるはずである。

---

[5] Dammann は，特に交響曲第 4 番，第 5 番，第 6 番のいわゆる後期三作を例に挙げて，「楽曲構造に注目し，難解な主題プロセスの理解を探求する学術的な言説からは，様々な理由からほとんど排除され続けたが，それはとりわけ，これらの作品は分析的な考察よりも『共感的な感覚』によってよりよく理解されるという，受容に蔓延した態度に基づく思い込み」（Dammann 1998, 198）によるものであったと述べている。

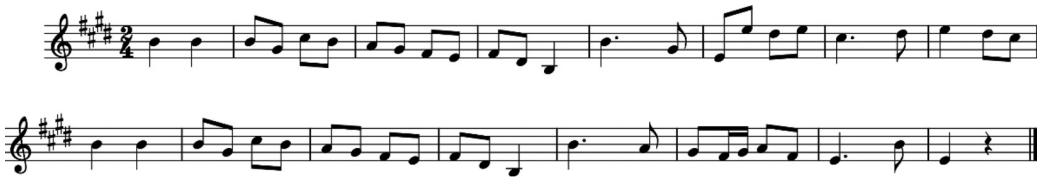
[6] チャイコーフスキイの作曲技法に関する研究として，Zajaczkowski 1987 を貴重な一例に挙げることができる。ただし，Zajaczkowski の分析では民謡旋律の書法に関する言及は見られない。

[7] ここで Taruskin が念頭においているのは，とりわけイギリスの音楽学者ブラウン David Brown（1929–2014）とガーデン Edward Garden（1930–2017）らによるチャイコーフスキイとナショナリズムに関する論である。なお，音楽史の観点から補足すると，Dahlhaus は「民俗音楽が常に何よりも国民の音楽であるという，19 世紀において自明の真理とされていた前提は，疑わしく正当性のないものである」（Dahlhaus 1989, 92）とした上で，「ただし，民俗音楽の国民主義的解釈について，現在の実証主義的研究によって訂正されている美的な誤りとして切り捨ててしまうこともまた間違いである」（Ibid. 95）とも述べている。

以上の点を踏まえ，本論では民謡旋律の扱い方を中心に第 1 番第 4 楽章を分析していく。なお，本作品には 1866 年に完成された初稿及び第 2 稿（Чайковский 1957 の巻末資料を参照）と，1874 年に改訂を経て出版された第 3 稿が存在するが，現在一般の普及を考慮し，本論の分析には最終的に出版された第 3 稿を扱う。具体的な分析に入る前に，まずは民謡旋律の基本的な情報について確認しておきたい。

2．民謡について

第 1 番第 4 楽章には民謡《私は種をまく》に基づく旋律が用いられている。この民謡は，プロクーニン Василий Павлович Прокунин（1848–1910）の編纂した『独唱のためのピアノ伴奏付きロシア民謡集 *Русские народные песни для одного голоса с сопровождением фортепиано*』（第 1 冊 1872 年，第 2 冊 1873 年出版）に収録されており[8]，〔譜例 1〕は同民謡集のものから旋律部分のみを抜き出して示した。実際の楽曲では若干の変形が施されているが，まずはこの旋律が基準となる。

〔譜例 1〕民謡《私は種をまく》

チャイコーフスキイの友人であるカシキーン Николай Дмитриевич Кашкин（1839–1920）の回想録には，この民謡と第 1 番の作曲の関係が詳しく語られており，当時この民謡がどのように受容されていたのかをうかがい知ることができる。少し長くなるが引用しよう。

> チャイコーフスキイは，作曲活動を始めた頃は積極的に民謡を使用し，交響曲第 1 番のフィナーレにも《花が咲いていた *Цвели цветики*》を選んだ。残念ながら，この歌は都市の人々のお馴染みの一曲になっていて，ひどい損傷を受けていた。特に，その結尾は明らかに非

[8] プロクーニンは，1871 年頃にモスクワ音楽院でチャイコーフスキイに師事していた学生で（Лопатин и Прокунин 1956, 75），民謡集には編者としてチャイコーフスキイの名前が記されている。チャイコーフスキイは，おそらく教員としてプロクーニンの作業を監修する立場にあったと考えられる。この点について Евсеев は，民謡の編曲を含め，民謡集の作成そのものをチャイコーフスキイが手掛けたのではないかと推測しているが，彼の著書の編者である Рабинович は，根拠となる資料がないとして否定的に捉えている（Евсеев 1973, 10）。

> 民謡的で，ピョートル・イリイチを非常に困惑させた。[……] 私がこのことを例として挙げるのは，《冬の白日夢》の作曲者が当初は民謡調の特徴や性格を何一つ理解していなかったのだと後世の人々に思われないようにするためである。彼はこの旋律が都市の教養ある愛好家たちに壊されていることを十分に認識した上で選んだのである。（Кашкин 1954, 35–36）

この回想を見るに，《私は種をまく》はフォークロアとしての民謡というよりも，むしろ都市の人々の間で流行していた歌謡のようなものであったと推測できる。チャイコーフスキイは，その後 1872 年にモスクワで開催される工業技術博覧会での音楽行事のために書いた《工業技術博覧会開会式のためのカンタータ *Кантата на открытие Политехнической выставке*》（1872 年初演）の中で，第 1 番第 4 楽章から民謡旋律を用いた箇所をほとんどそのまま流用しており，このことからも《私は種をまく》が同時代に広く受容されていたことがうかがえる。

以上のような事実を踏まえた上で，Taruskin は，この曲が現在に至るまで民謡として理解されてきたことについて次のような考察を加えている。

> [……] プロクーニンの民謡集に収録されているために，この歌は「真正なもの」だと認識されている。しかし，その民謡集が出版されたのは，交響曲第 1 番が完成してから 6 年後の 1872 年のことである。プロクーニンは，モスクワ音楽院でチャイコーフスキイに音楽理論を学んでおり，民謡集の出版にはチャイコーフスキイの手が加わった。つまり，チャイコーフスキイは，プロクーニンの民謡集の中からこの歌を見つけたのではなく，後からこの歌をそこに加えることで，いわば事後的に自分の交響曲の国民的資格を証明しているのではないかと考えられる。（Taruskin 2009, 128）

本論では，この民謡が選択された意図については深入りしない。むしろ注目すべきは，こうした素材をソナタ形式の展開に組み込んだ手法である。それでは次節より具体的な分析に移ろう。

3．第 1 番第 4 楽章の分析

第 1 番第 4 楽章は，序奏とコーダがついたソナタ形式で構成されている。既に確認してきたように第 2 主題が民謡旋律となっているが，まずは全体の構成について，民謡旋律が現れる箇所も含め確認しておこう〔表 2〕。なお以降本論ではドイツ音名を用い，〔表〕中の「調」において長調（Dur）は大文字アルファベットで，短調（moll）は小文字アルファベットで示す。「転」は転調を中心としたセクションである。

〔表 2〕第 1 番第 4 楽章全体の構成[9)]

小節	セクション	調	民謡旋律関係
1–46	序奏①	g	民謡旋律の提示
47–65	序奏②	G-D	民謡旋律の変容
66–125	提示部：第１主題	G-g	
126–177	提示部：第２主題	h	民謡旋律の提示
178–281	展開部	転	民謡旋律の変容
282–344	再現部：第１主題	G-g	
345–358	再現部：第２主題	e	民謡旋律の再現・変容
359–370	序奏①の再現		序奏①の再現・変容
371–414	コデッタ	転	
415–430	序奏②の再現	G	序奏②の変容
431–466	コーダ①		民謡旋律の終結
466–610	コーダ②		

はじめに述べたように，第１番第４楽章ではソナタ主部で提示部第２主題（民謡旋律）が第１主題の属調ではなく，３度上のロ短調をとる。さらに，再現部でも第２主題は主調へ解決せず，今度は３度下のホ短調（平行調）へ向かっている。つまりこのソナタでは，２つの主題間にトニックとドミナントの関係を構築することが意図的に避けられていることに加え，本来再現部に求められるはずの調的解決さえも行われていない[10)]。

また民謡旋律は，ソナタ主部に加え，その前後に配置された序奏とコーダにも現れる。詳しくは以下で見ていくが，〔表２〕に示した計８セクションでは，常に同一の旋律型が現れるのではなく，全ての箇所において調，リズム，そして構成音といった諸要素が変容をみせるほか，旋律全体の提示はもちろんのこと，旋律の一部のみが抜き出された形で提示されることもある。

以上の点を踏まえると，第１番第４楽章では楽曲の各セクションと民謡旋律の変容がどのような関係を築きながら結末へ向かうかというプロセスが重要となる。以下本論では，民謡旋律そのものの操作を中心に分析しつつ，ソナタ形式の観点から楽曲全体の展開を追っていく。それでは序奏から順に見て行こう。

9) 以下，〔表〕は全て筆者の分析をもとに作成。

10) 通常，再現部には提示部で生成された調的緊張の解決が求められる。これは，主要主題と主調の二重復帰に続き，第２主題やその他の主調以外で提示されたあらゆる音群を主調で再現することによって達成される（Hepokoski and Darcy 2006, 19）。『ニューグローヴ世界音楽大事典』の記述を引用すると，「他調での重要素材の提示によって生じたこの微妙な緊張は，このように『安定した土台があたえられ』て，初めて楽章は終結することができるのである」（Webster, 1994, 93）。

3-1. 分析：序奏

第 1 番第 4 楽章の序奏は，序奏としては比較的長大なものとなっており，大まかにみて前半（序奏①）と後半（序奏②）の 2 部分から成っている。この 2 部分は，楽曲の構成上は共に序奏に位置するものであるが，その音楽的機能は大きく異なっている。まずは序奏全体の概観を〔表 3〕に示した。なお序奏①と序奏②の境目には二重線を引いている。

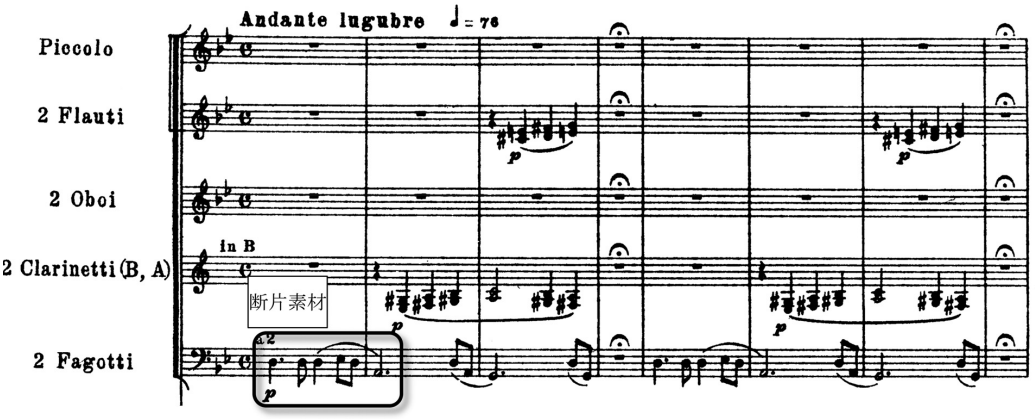
〔表 3〕序奏の構造

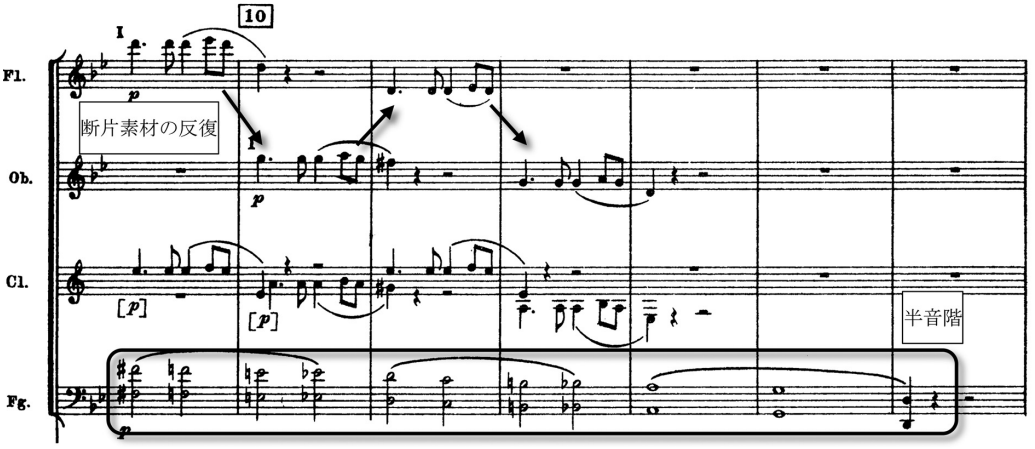
小節	下位セクション	調	民謡旋律関連
1–8	導入部	g	断片素材の提示
9–16			断片素材の反復
17–24	序奏主部		民謡旋律の提示
25–33			民謡旋律の反復・変容
34–42	導入部再現		導入部の再現／トレモロの追加
43–46	移行句	転	断片素材の反復
47–50	推移部	G？	民謡旋律の提示（長調）
51–56			民謡旋律の変容
57–62		D	断片素材の変容
63–65	連結句	D・転	↓

序奏の前半にあたる序奏①は，さらに 3 部分の下位セクションに分かれており，そのうちの主部にあたる箇所は楽曲中で最初に民謡旋律の提示が行われる部分となっている。ただし元の民謡が長調（〔譜例 1〕はホ長調）であるのに対し，ここでは短調に移調された形で提示される。このとき，主要主題の（ト長調）の同主短調（ト短調）となっていることに注目しておきたい。

まずは導入部でファゴットが D・Es・A の 3 音から成る素材を提示する〔譜例 2〕。この 3 音素材は，民謡旋律の一部を抜き出したものであり，後述する民謡旋律の提示へと発展する。この音型は楽章内でしばしば現れるため，以降「断片素材」としておく。断片素材の提示が完了すると，その音型が様々な楽器に受け渡されるようにして反復される〔譜例 3〕。この反復では，断片素材の末尾の音に変化が見られるが，全体の機能としては，断片素材のもつ音型（D-Es-D などの刺繍音型）とリズム（付点 4 分音符と 8 分音符からなるリズム）の強調と捉えてよいだろう。また，新たに半音階の素材が同時に追加されていることにも注目しておきたい。

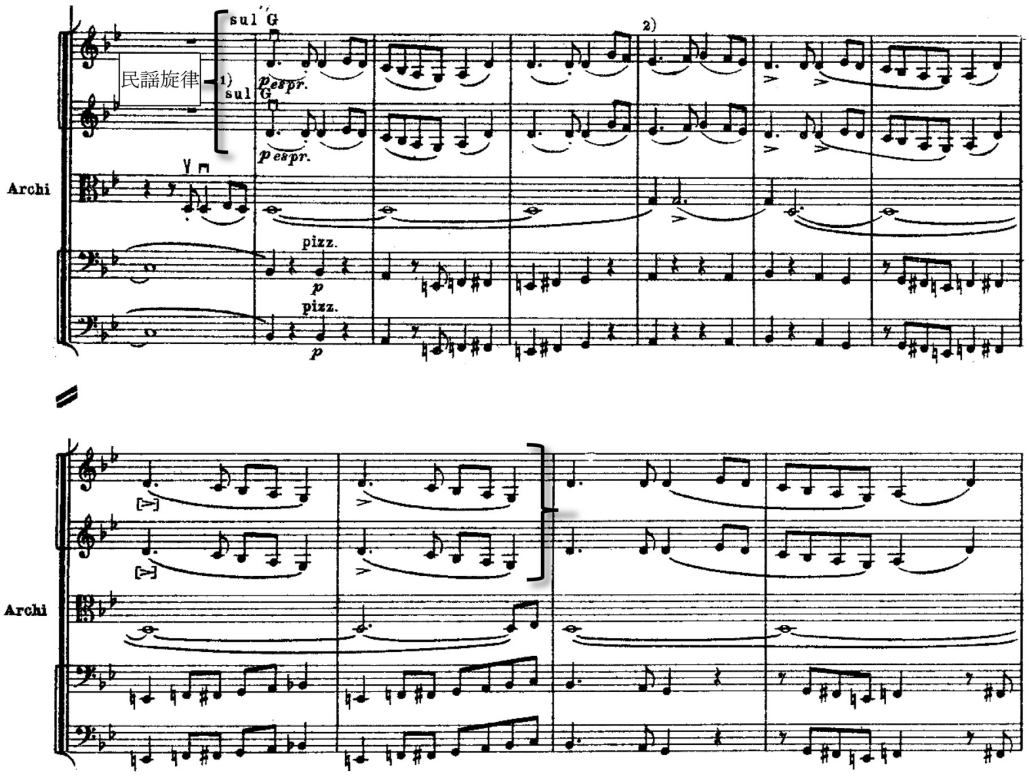
〔譜例 2〕序奏① 1–8 小節：断片素材の提示

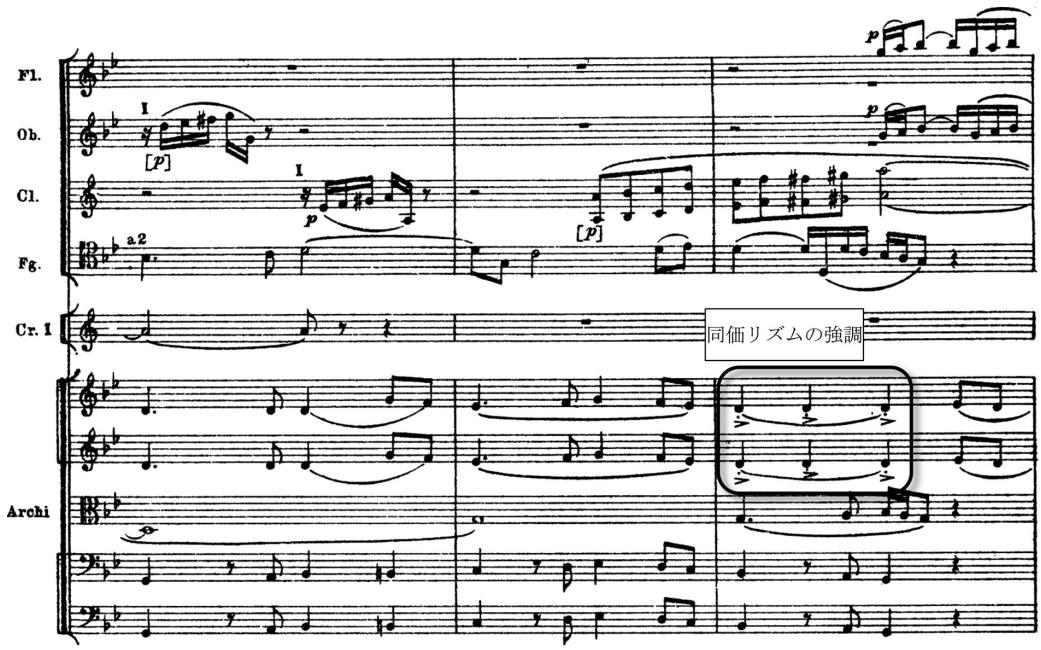


〔譜例 3〕序奏① 9–15 小節：断片素材音型の反復

ヴィオラが最後に念を押すようにしてもう一度 D-Es-D の刺繍音型を提示すると（16 小節目），そこから発展するようにして，17 小節目より民謡旋律全体の提示を迎える〔譜例 4〕。ここに見られる民謡旋律の結尾は，民謡集に収録されているものとは異なり，民謡旋律を構成する D-G の 5 度順次進行の部分を再構築したものとなっている。

断片的な音型から旋律の提示へと至るこの発展的なプロセスによって，導入部で提示され，反復されてきた動機的な素材（断片素材）が民謡旋律の構成音やリズムから成るものであったことが明らかになる。2 度の休止（フェルマータ）によってぶつ切りにされた動機的な断片素材の提示からよりはっきりとした輪郭をもつ旋律型へと発展していくこのプロセスは，単なる序奏ではなく，そもそも民謡という素材自体がそれ単体で完結した楽想をもつ主題としての性格を備えていることもあり，民謡旋律というある種の主題を既に提示している場と考えることもできる。断片素材の反復とともにその印象を楽曲冒頭で強調することで，民謡旋律が楽曲の

展開において重要な素材であることをはじめに予告しているのである。

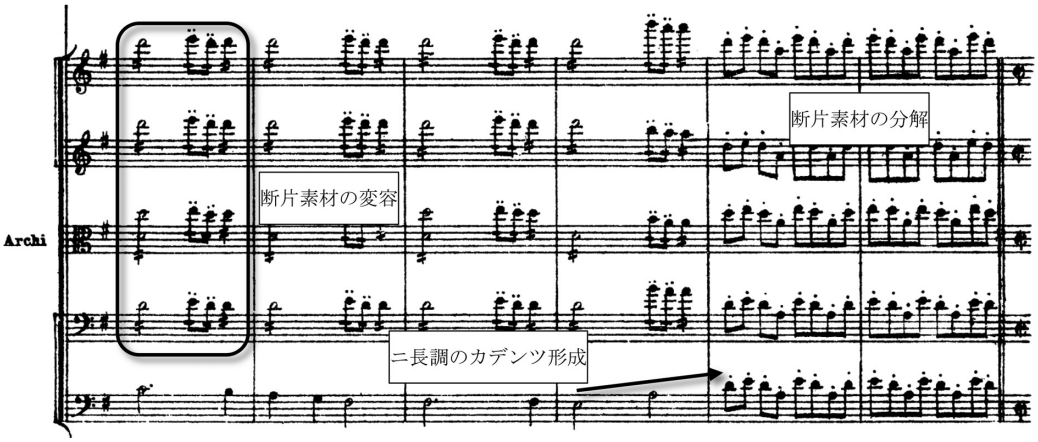
〔譜例 4〕序奏① 16–26 小節：民謡旋律の提示

さて，序奏①でもっとも注目すべき箇所は中盤の 29 小節目である〔譜例 5〕。断片素材を含め，これまでに提示された民謡旋律を改めて見てみると，その開始音は D 音（反復部分のみ一部 G）の同音反復から成っており，それらのリズムは全て「付点 4 分＋ 8 分＋ 4 分」音符の付点リズムで記譜されていることがわかる。ところが，29 小節目から再度提示される民謡旋律の冒頭部分は，それまでの民謡旋律とは異なり，また序奏①で唯一「4 分＋ 4 分＋ 4 分」音符による同価リズムとなっているのである。このリズムを際立たせるように付けられたアクセントを見るに，同価リズムによる民謡旋律は，付点リズムのそれとは明確に異なるものとして意図されていると見なすべきだろう。さらに深入りすると，この同価リズムは〔譜例 1〕に示した民謡集のものと同様のリズムであることから，むしろこれまで提示されてきた付点リズムの方が異化されたものであるという可能性も見えてくる。またテクスチュア全体を見ても，木管楽器群の追加により拡大されたポリフォニーの下に抗うようにして同価リズムの強調が配置されている。

〔譜例５〕序奏① 27–29 小節：同価リズムの出現

さて，民謡旋律の提示と反復はそれ以上新たな展開へ向かうことなく，再び断片素材が提示されることで解消され，再び導入部の音楽が現れる。この導入部再現によって，付点リズムを含む断片素材および民謡旋律に改めて注意が向けられるわけだが，ここでは元々の導入部に見られなかったティンパニのトレモロが挿入されており，まるで嵐の到来を告げる雷鳴のように，さらなる展開の布石が打たれる（譜例なし）。

47 小節目からは，それまでの重々しい雰囲気から一転して快活な Allegro moderato となり，調号上でト長調へ転調する。しかしこの場面転換においては引き続き民謡旋律が提示されており，また他の声部にも順次上行音型が加わるのみで，主題らしい主題は現れない。また序奏② 開始時点の転調は，あくまでも調号上で見た場合の転調であり，ト長調の主和音やカデンツも一切現れない。むしろその響きとしては，52 小節目で提示される A-D の 5 度順次下行素材の反復や，D 音の同音反復などから，属調のニ長調に近いものとなっている（譜例なし）。この調の不安定さから見て，この部分は未だ序奏が継続していると考えるべきである。

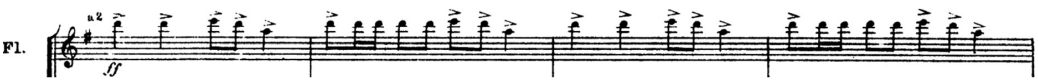
序奏②の終わり（57 小節目から）では D の同音反復素材が強調されるが，これは断片素材の新たな変容形で，A 音が省略され，さらに E 音が装飾的なものとなっている（〔譜例６〕は 59 小節目から）[11]。

[11]〔譜例６〕における断片素材の同音反復における変容では A 音が省略されてしまっており，単なる D-E-D の刺繍音型となっているが，本来この部分には E 音から A 音への跳躍音型が含まれていた↘

〔譜例 6〕序奏② 59–64 小節：断片素材の変容・ニ長調への転調

ここで序奏結尾，つまりソナタ主部直前の調の動きに言及しておきたい。移行句以降にもたらされた調的不安定は，この同音反復素材の強調によって安定がさらに要求される。そしてこの同音反復素材が 62–63 小節目で実際にニ長調のカデンツを形成することで，音楽は一度ニ長調に解決する。しかし，このカデンツで得た安定は直接ソナタ主部にはもち込まれない。具体的には，ニ長調の主和音がト長調の属音とみなされて提示部第 1 主題が導入される形となっており，この調の動きが後にコーダの導入と深く関わってくる。最後に断片素材は D・E・A の 3 音の並列（序奏①での Es が転調により E となっている）に分解され，そのままなだれ込むようにして提示部第 1 主題へとつながる。

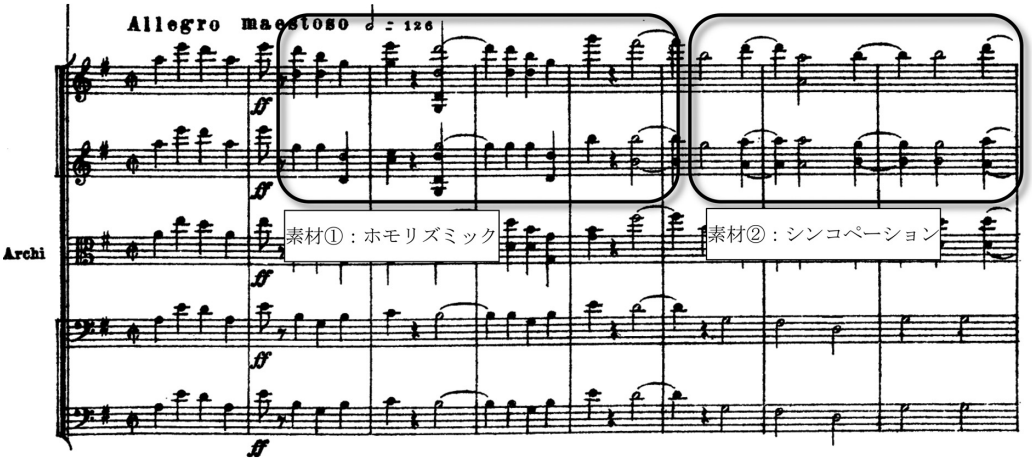
3–2. 分析：提示部

序奏で強調された民謡旋律の展開と，直前で安定したニ長調への転調を同時に裏切るかのようにして提示部へと転換する。提示部の構造は以下の通りである〔表 4〕。

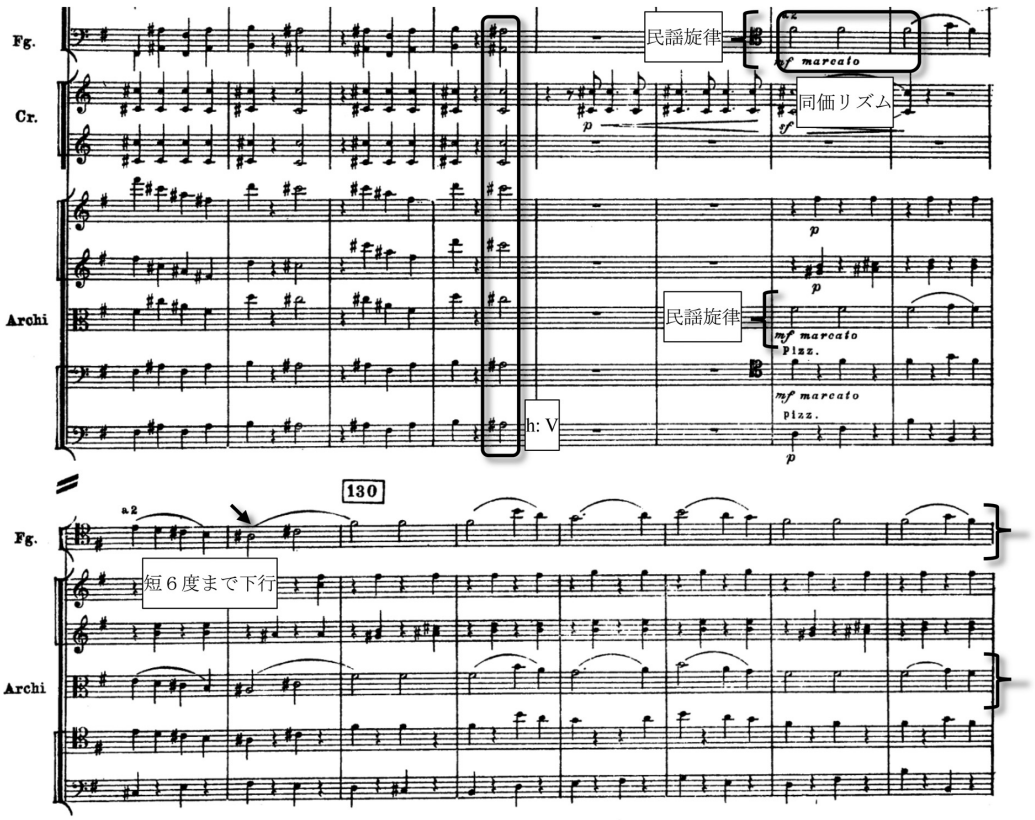
↘（1866 年の初稿および第 2 稿の時点，Чайковский 1957 の巻末資料を参照）。したがって，57 小節目以降に現れる当該の素材は，当初より断片素材の変容を意図して書かれたものであると見なせる。以下に実際の譜例を示す。

〔表 4〕提示部の構造

小節	下位セクション	調	民謡旋律関連
66–69	第１主題提示①	G	アルペジオ素材
70–80	第１主題提示②		シンコペーション素材
81–88	主題反復		
89–112	主題変容	g	
116–123	推移	転	ロ短調属和音の提示
124–125	中間休止		
126–141	第２主題提示	h	民謡旋律の提示
142–153	第２主題反復		
154–180	結尾部	転	民謡旋律の変容と解消

新たに現れる第１主題は，２つの要素の組み合わせによって構成されている〔譜例７〕。一つはホモリズミックな和音から成るアルペジオ風の素材，もう一つはそれに続くシンコペーション素材である。とりわけ前者はト長調の主和音を提示し，第１主題に主調を確立する機能を果たしている。この両者の特徴として，和音による縦の動きを中心としている点が挙げられる。序奏の民謡旋律と比較すると，その性格の違いが明らかである。

〔譜例７〕提示部第１主題 65–72 小節： ２つの素材の提示

結尾でロ短調の属和音が提示されると，Fis 音を保続しつつ問題の第２主題に入る〔譜例８〕。

〔譜例 8〕提示部第 2 主題 120–135 小節：民謡旋律主題



既に何度も述べた通り，民謡旋律による第 2 主題は第 1 主題の 3 度上に位置するロ短調となっており，主要主題との間にトニックとドミナントの関係を構築しない。しかし提示部に見られる現象として重要なのは以下の点である。

まずはテクスチュアである。序奏では民謡旋律が対位法や木管楽器の装飾的な旋律と組み合わされたポリフォニーの中にいたのに対し，提示部で副次主題として現れる際には，民謡旋律をシンプルな伴奏音型が支えるホモフォニーとなっている。次に，旋律の構成音の変容である。序奏での民謡旋律は，音程素材の提示によっても強調されていたように，開始音 D から最低音 G までの 5 度順次下行する旋律となっていた。一方，第 2 主題としての民謡旋律は，開始音 Fis からロ短調の導音である Ais まで，すなわち短 6 度へと音程が拡張されている。この音程は元の民謡旋律の構成音と同様である（〔譜例 1〕では，開始音 H から Dis までの短 6 度が下限の音程となっている）。そして最後に，リズムである。第 2 主題として提示される民謡旋律は，開始音 D が付点リズムをとらず，先の 29 小節目にて僅かに暗示的に現れていた同価リズムによるものである。前述の構成音も含め，提示部では調こそ短調であるものの，その様相はもっとも本来の民謡の音型に近いものとなっている。テクスチュアがホモフォニーであることも考慮す

ると，第２主題では民謡のもつ声楽的性格が強調されており，第１主題はもちろんのこと，序奏の民謡旋律とも少なからぬ対照性を有している。

この第２主題の登場により，民謡旋律には大きく２つのパターンが存在することが確実となる。一つは付点リズムと完全５度を有するパターンで，その際のテクスチュアはポリフォニーをとる。もう一つは，同価リズムと短６度を有するパターンで，こちらはホモフォニーの主声部として現れる。したがって，これら２つの民謡旋律の音楽的意味は，似て非なるものと見なさざるを得ない。これは楽曲全体の構成において非常に重要な部分であるはずだが，この点について言及する先行研究は見当たらない。この第２主題の意味するものは何か。そしてこの２種類の民謡旋律は，展開部を経てどのような結末に至るのだろうか。

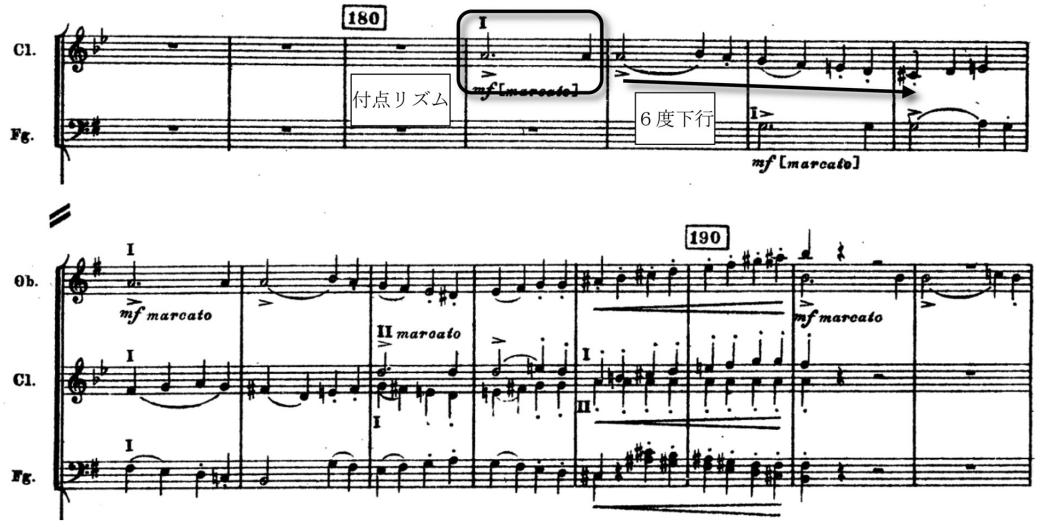
3-3. 分析：展開部・再現部

提示部に引き続き，展開部では 181-200 小節目にかけて民謡旋律の反復を模したような，カノン風の掛け合いが行われる。この際，民謡旋律は第２主題として存在が明らかにされた同価リズムではなく，再び付点リズムによるパターンに戻されているが，他方構成音に着目すると，順次下行部分は６度の下行を有しており，「付点リズム＋６度」という２種類のパターンが複合された民謡旋律となっており，これまでにはなかった新たな変容の形が披露されている〔譜例９〕。

このことから，第１番第４楽章のソナタにおいては，主要主題（第１主題）と副次主題（第２主題）の対立ではなく，この２パターンの民謡旋律による弁証法が音楽の展開を構成しているのではないかという可能性が浮かんでくる。展開部では第１主題と第２主題の登場の場が確かに分けてられており，そして非相補的な関係による調的緊張が保留される一方で，２種類の民謡旋律は独自にその統一を図ろうとしているのである。

しかしここで登場した民謡旋律の複合的な変容は保留され，第１主題のアルペジオ素材を基にして対位法的な展開に移る。展開部後半について，本論では詳しく触れないが，Brown はここに見られる対位法的技巧の披露を音楽院教育の成果であると捉えている（Brown 1978, 108）。

〔譜例 9〕展開部 178–192 小節：付点リズム＋ 6 度の民謡旋律



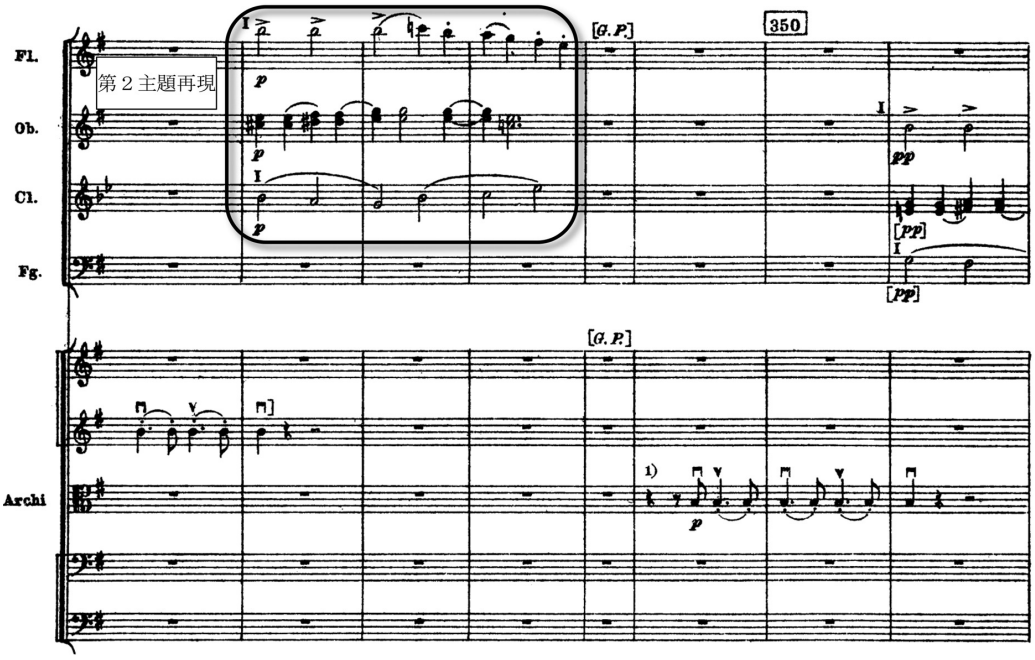
第 1 主題の展開が取りまとめられると，シンコペーション，順次上行，同音反復の諸要素によるポリフォニーが再現部への準備をする。再現部全体の構造は以下の通りである〔表 5〕。

〔表 5〕再現部の構造

小節	下位セクション	調	民謡旋律関連
282–285	第 1 主題再現①	G	アルペジオ素材
286–296	第 1 主題再現②		シンコペーション素材
297–304	主題反復		
305–334	主題変容	g	
335–342	推移	転	ホ短調属和音の提示
343–344	中間休止		
345–358	第 2 主題再現	e	民謡旋律の一部のみ

再現部の開始は，慣例に従って主要主題と主調の二重復帰となっている。その一方で，第 2 主題である民謡旋律の再現は冒頭の 3 小節のみが僅かに 2 度繰り返されるのみとなっており，オーケストレーションも大幅に縮小されている。はじめはフルートがピアノ（強弱記号）で，次にオーボエが 1 オクターヴ下をピアニシモで演奏し，再現部に期待される音楽的な解決からは程遠く，あたかも音楽がフェードアウトしてしまうかのようである〔譜例 10〕。また調的に見ても，提示部以降の不協和は解決されず，平行調のホ短調となっている。ただしこの時点でもまたホ短調のカデンツは形成されておらず，調的には不安定な状態になっている。主題的にも，調的にも不安定な状態が残されたまま，音楽は序奏へと巻き戻される。

〔譜例 10〕再現部第 2 主題 344–351 小節：不完全な第 2 主題再現



3–4. 分析：序奏の再現からコーダ

これ以降，楽曲の終結に至る構造は〔表６〕に示した通りである。

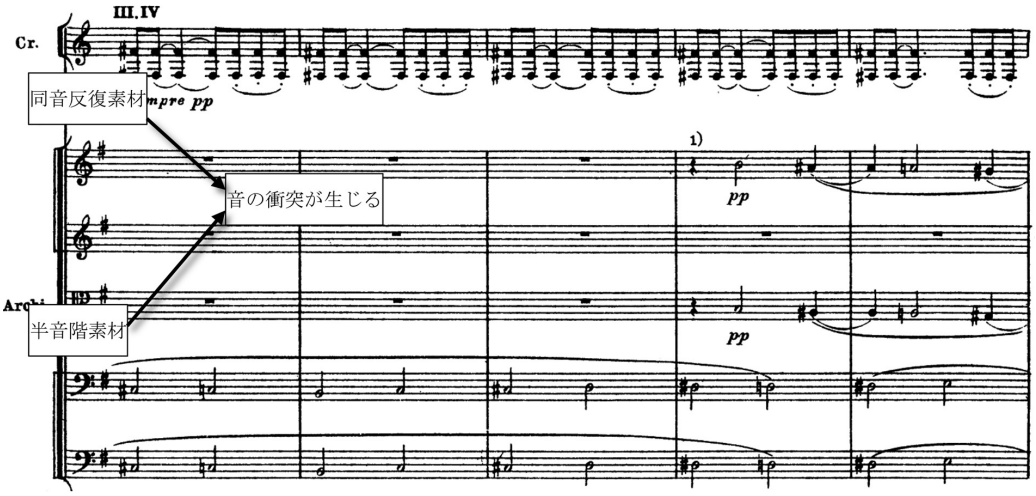
〔表 6〕序奏の再現以降の構造

小節	下位セクション	調	民謡旋律関連
359–370	序奏①の再現	e	断片素材の提示・反復
371–410	コデッタ	転	半音階＋同音反復
411–414	推移		
415–430	序奏②の再現	D・転	断片素材の変容
431–446	コーダ①	G	民謡旋律（付点リズム＋５度）
447–466			民謡旋律（同価リズム＋６度）
467–610	コーダ②		

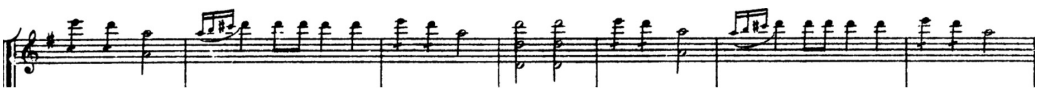
不完全な再現部は，いずれにせよ主題間，とりわけ民謡旋律の調的解決を保留にしたまま，突如として序奏の導入部に回帰する。それまで快活に進んできたソナタ主部から再び Andante lugubre へテンポを落とし，序奏導入部と同様の断片素材提示，そして E-A の５度の２音に沿った反復が続く。この序奏の再現では断片素材は付点リズムによるものであり，再び同価リズムが否定される。この巻き戻しが意味するものは何か。

コデッタでは，これまで既に存在していながらも目立った展開を見せてこなかった素材，すなわち同音反復と半音階の組み合わせによる不協和のパッセージが音楽をさらに不安定な状態

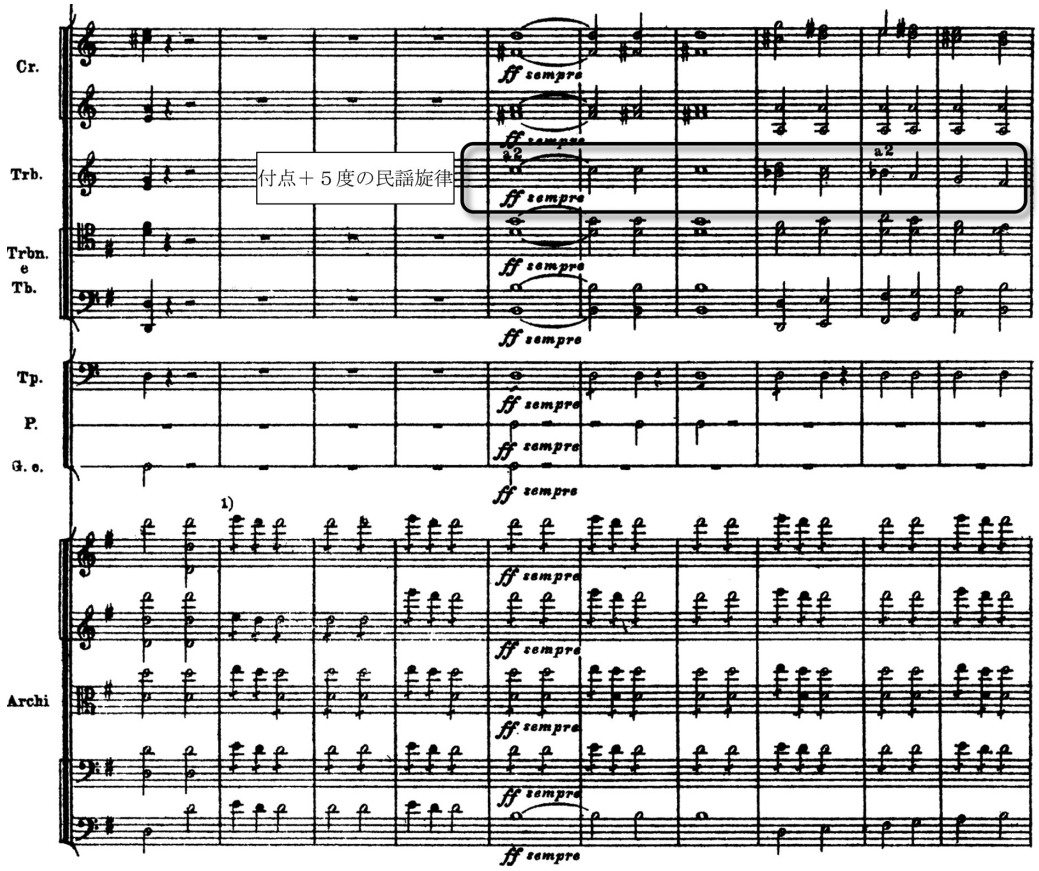
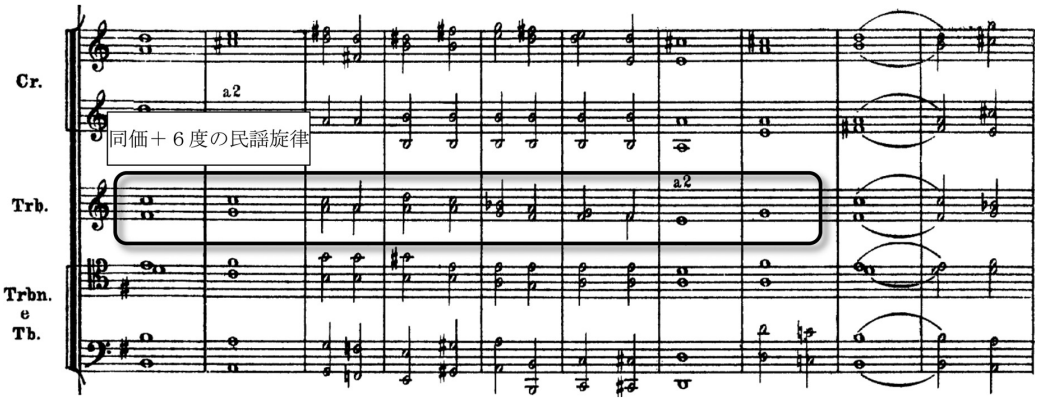
へと引き込む〔譜例 11〕。

〔譜例 11〕コデッタ 372–376 小節：同音反復と半音階による不協和

Brown の分析では，序奏再現とこのコデッタを含め，本論が第 2 主題再現と捉える 345 小節目以降を第 1 主題再現と第 2 主題再現の中間に挿入されたもう一つの「慣例からの逸脱」を示すパッセージとして捉えているが，本論の解釈はそれとは異なる。第 2 主題の再現は，慣例通り第 1 主題再現に続く 345–358 小節間で行われており，序奏の再現は文字通り音楽のやり直しとしてソナタ主部における音楽の展開を否定し，この楽曲の目的を今一度確認し直すセクションなのである。加えて Brown は本論でいうコデッタ部分について，チャイコーフスキイにとって対位法的技巧の披露は有機的に音楽を発展させることができなかった彼の弱点を補完するものであったと解釈しているが（Ibid. 108–109），これはそうした見せかけのために置かれているのではなく，明確な意図をもっている。それを示すのが，これまでに陰ながら提示されてきた同音反復ととりわけ半音階の順次進行素材である。2 つの素材の衝突による強い不協和のパッセージの中で，本来序奏から向かうべきであった場所がどこなのか，どのような素材が音楽的な勝利をもたらすのかを聴者に問いかけると同時に，その答えを模索しているのである。

そしていよいよ，これまでの全ての布石を回収する準備に入る。415 小節目より序奏②の断片素材変容と共に再びニ長調の響きが現れ[12]，民謡旋律には「同主短調→属調→主調」という

[12] ここでも序奏②のときと同様に，当初は断片素材に基づく 3 音の素材が配置されていた。以下は該当部分のヴァイオリン・パートを抜き出したものである。

調的解決が再現部に遅れて，独立する形で設けられる。この調的な解決を可能とし，かつそれを強調するのが，提示部および再現部第２主題に見られた非慣例的な調設定である。提示部のロ短調は属調ニ長調の平行調にあたり，つまり直接主調へは進行しないものの同一の構成音にある。そして再現部のホ短調は主調の平行調であるが，これはすなわち主調ト長調と共通の構成音をもつ調であり，ト短調からの解決を保留しつつ主調に成り代わる準備がなされていたと見なすことができる。

そして主題対立の結末である。コーダ①では，付点リズム＋５度のパターン（ソナタ主部とコーダでは拍子が異なるため実際の記譜は付点ではなくタイで結ばれている）と同価リズム＋６度のパターンが主調の獲得によって統一される。この時の民謡旋律は，これまでのどのセクションでも見られなかったホモリズミックなテクスチュアをとっており，民謡という素材のもつ声楽的性格に関連して，コラール風のテクスチュアと捉えることもできよう。このテクスチュアは本来第１主題が有していたものである〔譜例 12〕〔譜例 13〕。

〔譜例 12〕コーダ① 427–436 小節：付点リズム＋５度・ホモリズミック＋主調

〔譜例 13〕コーダ① 447–456 小節：同価リズム＋ 6 度・ホモリズミック＋主調

最終的に第 1 番第 4 楽章におけるソナタは，民謡旋律による弁証法によって，これまでの様々な変容を経て，第 2 主題（民謡旋律）が第 1 主題の要素を勝ち取ることによって結論付けられる。ここに調および主題による対立が二重の解決をみることによって，2 種類の民謡旋律は共存し，両者の饗宴によって音楽は大団円を迎える。そしてコーダ②では，残された第 1 主題のシンコペーション素材がまるで大団円を祝福するかのように，主題としての役割を終えてバス声部へと移っている（譜例なし）。

4．おわりに

Dahlhaus は，ベートーヴェン以降の交響曲の主要主題には 2 つの機能があると唱えている。すなわち，主要主題は「小片に分解された場合は展開部の素材として機能し，再構成された場合には勝利的な目的と到達点として機能する」（Dahlhaus 1989, 266）。第 1 番第 4 楽章において，チャイコーフスキイはこの機能を民謡旋律にもたせており，さらにそこに独自の弁証法的展開を作り出しているという点で，慣例的なソナタ形式を踏まえた上での彼の作曲上の試みの一つと見なすことができる。

そして，そこで行われていたのは，民謡旋律というそれ自体で既に完結している素材を，ソナタの有機的な展開の中でいかに展開させるかという試みでもあった。第 1 番第 4 楽章において，民謡旋律は，ソナタ形式のもつ調的，および主題的対立という構図を利用するだけでなく，そこにおいて音素材やテクスチュアとの組み合わせを駆使しながら様々な変容の可能性を披露し，最終的に音楽全体を統一するものへと昇華されるのである。

（いけだ　こうき・スラブ・ユーラシア学研究室）

参考文献

Brown, David. 1978. *Tchaikovsky: The Early Years 1840–1874*. New York: W. W. Norton & Company.

Dahlhaus, Carl. 1989. *Nineteenth-Century Music*. Translated by J. Bradford Robinson. Berkeley: University of California Press.

Dammann, Susanne. 1998. “An Examination of Problem History in Tchaikovsky’s Fourth Symphony.” Translated by Alice Dampman Hunmel. *Tchaikovsky and His World*, edited by Leslie Kearney, 197–215. Princeton: Princeton University Press.

Hepokoski, James and Warren Darcy. 2006. *Elements of Sonata Theory: Norms, Types, and Deformations in Late-Eighteenth-Century Sonata*. New York: Oxford University Press.

Taruskin, Richard. 1997. *Defining Russian Musically*. Princeton: Princeton University Press.

———. 2009. *On Russian Music*. Berkeley: University of California Press.

Webster, James. 1994.「ソナタ形式」 小林達子（訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第 10 巻：92–100。

Zajaczkowski, Henry Stephen. 1987. *Tchaikovsky’s Musical Style*. Ann Arbor: UMI Research Press.

Бачинская, Н. М. 1962. *Народные песни в творчестве русских композиторов.* Москва: Музгиз.

Евсеев, С. В. 1973. *Народные песни в обработке П. И. Чайковского.* Под ред. Б. И. Рабиновича. Москва: Музыка.

Кашкин, Н. Д. 1954. *Воспоминания о П. И. Чайковском.* Москва: Музгиз.

Лопатин, Н. М. и В. П. Прокунин. 1956. *Русские народные лирические песни.* Под ред. В. Беляева. Москва: Музгиз.

参考楽譜

Чайковский, П. И. 1949. *Русские народные песни для одного голоса с сопровождением фортепиано, собранные и переложенные В. Прокуниным, Под редакцией профессора П. Чайковского.* Под ред. Б. В. Асафьева. Полное Собрание Сочинений П. И. Чайковского, Т. 61. Москва: Музгиз.

———. 1957. Первая Симфония “*Зимние Грёзы*” Соч. 13. Под ред. Б. В. Асафьева. Полное Собрание Сочинений П. И. Чайковского, Т. 15 А. Москва: Музгиз.

10.14943/rjgshhs.25.l 297

ソーシャルメディアが現代の母親に与える影響

── フェミニズム視点による欧米の研究動向 ──

比　嘉　麻　理

要　旨

現代の社会生活においてソーシャルメディア利用の重要性は高まり，母親業においてもソーシャルメディアは情報収集や感情共有の手段として不可欠な存在となっている．日本国内でもその有用性に関する研究は進んでいるが，フェミニズムの視点からソーシャルメディアが母親業にもたらす影響について論じたものは少ない．ソーシャルメディアは，母親という経験を自らの言葉で語ったり，母親同士で交流し支え合ったり，母親に課せられた社会規範を問い直したりする場になり得る．日本国外，特に欧米ではフェミニズムの視点を取り入れたソーシャルメディア研究が数多く存在し，母親のソーシャルメディア利用に焦点を当てたものもある．

本稿では，フェミニズムやジェンダーの視点が，母親のソーシャルメディア利用の研究においてどのように取り入れられているかを整理し，そこから得られる有用な視座を提示する．母親がオンライン空間にて自ら母親業を語ることの重要性に焦点を当てたもの，母親同士の助け合いやコミュニティを評価しているもの，「ジェンダー実践（doing gender）」の概念を用いソーシャルメディア上で表現される母親の在り方に着目したもの，そして私的空間の商業化について論じるもの，最後に，交差性の視点を持った研究群についてレビューする．これらの知見を整理し，日本における母親業とソーシャルメディア利用の今後の研究に資する視座を提示する．

キーワード：母親，育児，フェミニズム，ソーシャルメディア，SNS

1．はじめに

現代の母親業においてソーシャルメディア[1]，特にソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の利用は重要性を増している．妊娠，出産，育児に関する情報収集や母親同士の情緒的サポートが行われ，核家族化や少子化の進行により繋がりを作ることが困難な女性たちにとり，ソーシャルメディアは重要な役割を果たしている．日本における SNS 利用率は高く，Instagram は 20 代女性の 8 割以上，30 代女性の 7 割以上が利用しており，X（旧 Twitter）[2] は 20 代で 7 割以上，30 代で 5 割以上が利用している（サイバーエージェント 2023）．乳幼児を持つ母親の多くが Instagram，Twitter（現 X），Facebook を利用していることも，母親を対象とした調査から明らかになっている（田井 2024）．

日本における母親とソーシャルメディアの研究においては，主に利用方法や有用性に焦点が当てられてきた．例えば，中島千英子ら（2020）は母親を対象としたアンケート調査を通じ，SNS が育児情報源として広く利用されている現状と，情報リテラシー向上の必要性を明らかにした．また，SNS が育児中の孤独感の緩和（Mandai et al. 2018）やストレス発散（粕井 2007）に有効であると評価する研究も存在する．さらに，特別なニーズを持つ子どもの育児においても，母親に対するソーシャルサポートとしての可能性が示唆されている（水内ら 2018；片田ら 2016）．これらの知見から，ソーシャルメディアは多様な子育てを支える有力な手段であることが分かる．

SNS をコミュニティ形成の観点から分析した研究もある．武市久美（2014）はアンケート調査を通じ，既存のママ友とのコミュニケーションにおける SNS 利用について，多くの母親が既存のママ友と SNS 上で繋がることに消極的であることを明らかにしている．SNS 利用者のうち，既存のママ友と繋がっている人は 3 割程度にとどまり，自身のプライベートや価値観の共有がママ友とのコミュニケーションにそぐわないと感じる傾向があると分析している．一方で，それぞれの人に応じた交流ができるデジタルコミュニティが構築された場合には，「SNS はママ友コミュニケーションの力強いツールになり得る（武市 2014：87）」としている．武市（2014）は実社会とは関係のないオンライン上での出会いや繋がりについては調査の対象としていないが，2022 年のインターネット調査によると，現代の 10 代，20 代の SNS ユーザの半数以上が同一プラットフォーム内で複数のアカウントを使い分けしており（マクロミル 2022），

---

[1] ソーシャルメディアとは「インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し，相互のやりとりができる双方向のメディア（総務省 2015：199）」と定義づけられている．SNS はソーシャルメディアの中でも，ネットワーキングを促進するサービスを提供する特定のプラットフォームを指す．

[2] 代表的な SNS の一つである X は，旧名称を Twitter という．2023 年に名称が X に変わった（Musk 2023）ため本稿中は X と表記するが，引用する文献内の表記が Twitter である場合には Twitter と表記する．

実生活でのママ友や友人との付き合いと，目的に沿ったオンラインでの交流を分けることが叶うようになっている．武市（2014）が議論する，それぞれの人に応じた関係の築き方は，SNSの利用方法の移り変わりとともに実現しつつある．

実社会とは関係なくオンライン上で出会う母親同士の交流について，高谷邦彦（2019）は，Twitterがユーモアを交えた気軽な交流の場として機能しており，居心地の良いサード・プレイスとして評価している．このように，既存のママ友との関係強化にも，匿名での気軽な交流にもSNSは利用することができ，現代の母親の多様なニーズに応えていると考えられる．

以上のように，日本の研究はソーシャルメディアの利用実態や母親同士の交流の在り方の一部を捉えてきたが，これらのメディア利用が母親の実践にどのような影響を与えているか，母親の社会規範に対してどのように挑戦してきたか等，フェミニズムの文脈においては十分に議論されていない．この点は欧米の研究がより踏み込んで論じており，本稿にて詳しく議論していく．

本稿ではまず，オンライン空間にて母親自身が実際の母親業を語ることの重要性についてなされてきた議論を整理する．次に，母親同士の連帯や助け合いの観点から議論された研究を紹介する．そして，「ジェンダー実践（doing gender）」の概念を使い，ソーシャルメディアが新たなジェンダー実践の場となっていると論じる研究をまとめる．加えて，私的領域や母親業が市場に取り込まれ商品化されていると指摘する研究をレビューする．最後に，母親のソーシャルメディア利用研究における交差性の議論を整理する．これらの研究群から，日本の研究に活かせる視点を提示し本稿のまとめとする．

論文の収集はGoogle Scholarにて「mother，motherhood，mothering，parenting，pregnancy，pregnant」のいずれかのキーワードと，「social media，SNS，blog，blogging，Twitter，X，Instagram，Facebook」のいずれかのキーワードを組み合わせて検索し，タイトルや要約からジェンダーやフェミニズムの視点が含まれていると判断したものを取得した．性的少数者や障害者等，マイノリティ性をもつ母親に関する論文については，上記キーワードに「LGBT，sexual minority，disability，disabled，minority group，people of color，black，Asian」のいずれかのキーワードを加えた．収集した論文中に引用されている論文についても，本稿のテーマに沿ったものを取得するという「スノーボール・サンプリング」を模したアプローチも用いた．論文の検索は2025年6月から8月にかけて行われ，22本の論文を分析のために取得した．分析した論文は，英語で執筆したものに限られている．

2．母親が自分の経験を語ること

主要なメディアにおける母親表象や，完璧な母親を求める社会規範への抵抗は，母親とソーシャルメディアに関する研究において主要なテーマである．等身大でリアルな母親の在り方

を，当事者である母親が自ら語ることの重要性を評価する研究は多く存在する．母親のソーシャルメディア研究において最も蓄積が多いのは，育児ブログに関するものである．スマートフォンを介して手軽に利用できる SNS が普及する前に人気を集めたブログは，多くの母親が日々の出来事を記録し，他の女性たちと共有するツールとして使われてきた．全盛期であるおおよそ 2005 年から 2015 年（Gibson 2019: 8）の間，「マミー・ブログ」は社会現象として多くの関心を集めた．

その議論の中心となったのは，オンライン空間における母親の存在そのものである．つまり，私的領域とされる育児や家事についての個人的な実践や感情を，公的なオンライン空間に向けて発するという公私境界への挑戦についてである．そして，母親が自身の経験について自らの言葉で語ること，多様な育児の経験が共有されることが評価された．しかし，オンライン空間における女性の発信が，彼女らをオンライン上の家庭領域に押し込んでしまう危険性についても論じられている．

次に，Sharon Hays（1996）による「徹底した母親業（Intensive mothering）」や Susan Douglas and Meredith Michaels（2005）による「新母親主義（New momism）」といった，母親がすべての労力と資源をつぎ込み子ども中心の生活をするといった母親規範への抵抗と限界に関する議論もなされている．同様の視点は，Twitter の母親コミュニティを巡る研究にも表れている．

2.1　オンライン空間で母親が自身の経験を語ることの意義

オンラインで育児について発信する母親について蓄積が多いのは，「マミー・ブロガー」に関する研究である．「マミー・ブログ」と称される母親による育児ブログは，あるブロガーによる「マミー・ブログはラディカルな行為（Mommy blogging is a radical act）」という宣言がきっかけとなり，主にアメリカを中心に，その政治的な意味合いがブロガーや研究者により議論されることとなった．Lori Kido Lopez（2009）は，「子どもについてブログを書く女性たちは，困難や挑戦に関する彼女らの個人的な語りを他の母親との会話へと変容させていくなかで，母性，女性ブロガー，そして公的空間における母親の位置づけについての私たちの認識を広げ始めている（Lopez 2009: 744）」と評価している．Lopez（2009）は，ブログ空間が男性中心的に語られてきた経緯を踏まえ，アメリカにおける「マミー・ブロガー」たちについて，彼女らが主要メディアを支配する「良い母親」像に挑戦する存在であると同時に，男性中心的なブログを巡る言説に立ち向かいオンライン空間での居場所を要求するラディカルな存在であると論じている．

May Friedman（2013）も同様に「マミー・ブログ」を高く評価しており，様々な母親たちの実践が公的に書き記されることで，「母性的主体性の理解に変化をもたらし始めている（Friedman 2013: 27）」と述べている．Aimée Morrison（2010）は，「マミー・ブログ」と呼ばれるジャンルが，単なる母親たちの経験の集合体ではなく，「目的意識を持った意図的な社会関与（Morrison 2010: Introduction section, para. 1）」であるとし，社会的に忘却されがちな母親という経験を公的

なものにする実践として評価している．「私的生活と公的な著作物の間に引かれた境界線に挑み続け，同時に作家として，そして母性を自己像に統合する女性としての声を育てながら，実践と支援の共同体を築いている（Morrison 2010: Conclusion section, para. 1）」という主張は，オンライン空間にて母親がナラティブを構築することと，私的領域において個別に育児をしている母親たちにとっての共同体を築いていることの両方を評価するものである．

しかし，「マミー・ブロガー」という呼び名が常に育児についてブログを書く女性たちから歓迎されたわけではないことは，オンライン空間における母親を論じるうえで重要である．「マミー・ブログ」はラディカルであるという宣言自体が，「マミー・ブロガー」に批判的な女性ブロガーに対抗する形で発せられたものである（Lopez 2009）．歴史的に，女性が私的な出来事について書いた著書は，文学や自伝において下流とみなされてきたことと同様のことがブログのようなオンライン空間でも起こっていると Lopez（2009）は指摘する．女性であるがために，家庭での出来事についてブログに書くことで自らの意思に関係なく母親役割と関連付けられやすいことに対する抵抗感や，母親の書いたものを取るに足らないものとして軽視する風潮により，女性が母親アイデンティティと自らを関連付けることに困難を感じる背景がある点について検討が必要である（Lopez 2009）．

また，テクノ・フェミニズムの視点から「マミー・ブログ」を論じる Gina Mashullo Chen（2013）は，家庭についてブログを書く女性を「マミー」と呼ぶことは，彼女らをデジタルな家庭領域へ押し込むことであると述べている．女性たちが家庭や家族について書くという行為がエンパワメントになり得るとしたうえで，Chen（2013）は「マミー」という呼び方が，特定の母親像にしか当てはまらず，その母親像に当てはまらない女性にとり抑圧的であると述べている．母親を「マミー」と呼ぶのは主に幼い子どもであり，「マミー・ブロガー」という呼び名は，家庭に籠り，手のかかる幼い子どもを育てる母親を想起させる．Chen（2013）は，Judith Butler（1993）のパフォーマティビティの概念を用い，「マミー・ブロガー」という言葉が，ヘゲモニックな母性の台本を反映しており，多様な母親のアイデンティティや主体性を奪うものであると議論している．一方で，「マミー・ブログ」や「マミー・ブロガー」という呼び方は既にブログ空間における一つのジャンルとして確立しており，市場におけるネームバリューがある点や，ブログにアクセスするためのキーワードとして既に広く知られていることから，「マミー・ブログ」という呼び名を変えることは現実的ではないとしている．Chen（2013）は，マミーという呼び名が中立的なものではなく文化的な意味合いを持った言葉であると理解し，抑圧的になり得ることに気づくことが，母親がヘゲモニックな母親役割から解放される力になると結論付けている．

2.2 「徹底した母親」に対抗する「悪い母親」

母親ブログの中には，「悪い母親（bad mommy）」を自称するブログが多く存在する．社会が求める完璧な母親像を批判的に捉え，完璧ではない母親実践をさらけ出すのが「悪い母親」ブ

ログの特徴である．現代の母親業は，Hays（1996）によって「徹底した母親業（intensive mothering）」と名付けられた通り，育児にすべてを捧げることを要求されている．「悪い母親」ナラティブは，この「徹底した母親」への抵抗を試みるものである．

フィンランドにおける母親ブログを研究した Mari Lehto（2019）は，「悪い母親」ナラティブを，母親への過度な期待と実際の母親業の間で生じる摩擦や矛盾を理解しようとする試みであり，生存戦略と位置づけている．そもそも「悪い母親」としてブログで告白される行為自体が，抱っこ紐やオムツの選択に関することや，子どもに 100％感情的エネルギーを注げないといった程度の「悪さ」でしかなく，些細なことで批判されがちな母親業について自虐的に書くことで，いかに完璧な母親像というものが現実とかけ離れているか告発している．そして，そういったナラティブが読者から受け入れられることにより，「悪い母親」という「文化的ファンタジー」を提供することに成功している（Lehto 2019）．

「悪い母親」というファンタジーは「良い母親」の理想が社会で共有されていることを前提としたものであり，「悪い母親」像の提供が「完璧な母親」の神話を壊すものではない．しかし，「完璧な母親」の神話を壊すことが出来なくても，「完璧ではない母親」という存在を普通化していると，Lehto（2019）は一定の評価を与えている．

一方，イギリスを中心とした英語圏において，「悪い母親」，「だらしない母親」を自称するブログの読者たちをインタビューした Kate Orton-Johnson（2017）は，特定のブロガー間の対立への読者らの反応から，ユーモアをもって発信される逸脱した母親の告白が，読者にとって解放的であると同時に，母親の語りが社会的な監視のもとにあるという緊張感を与えると論じている．読者たちは，「自分たちの母親としての実践を振り返るための対象物として，心地よいと感じたり挑発的だと感じたりする声を注意深く追いかけている（Orton-Johnson 2017: 8）」と同時に，「こうした声が持つ，公的でネットワーク化され，さらけ出された性質に居心地の悪さを感じ，これらの声に反論がなされると，自身の立場も損なわれたように感じる（Orton-Johnson 2017: 8）」と議論している．

ブロガー間の対立は，ある「悪い母親」ブロガーが，自分の時間が取れないことのフラストレーションを，子どもの顔にワインをかけたくなった等と表現したことについて，この発言をユーモアと受け取らなかった他の母親ブロガーから非難された出来事だが，これに関して，母親が他の母親を批判することに対する失望や，子どもに対する影響については配慮されるべきだという意見，子どもへの影響を引き合いに出し母親の自己表現が制限されることへの拒否感等，様々な読者の反応が分析されている．Orton-Johnson（2017）は，「悪い母親」ブログとその読者が浮き彫りにするのは，「何を開示して良いのかの基準（Orton-Johnson 2017: 9）」であり，子どもについて公にどう表現するか，子どものアイデンティティがどう表現されるかに関しては，「良い母親」であることが求められると議論している．ブログが母親としての新しい表現のためのプラットフォームではなく，「長い間保持されてきた母親の性質，アイデンティティ，そ

して役割に関する規範的な考えに対する表現と葛藤が強化され固定される，新しいプラットフォームとして機能していることを示唆している（Orton-Johnson 2017: 8）」と結論付けている．

「悪い母親」ブログを巡る議論は，母親が自らの物語を書くことの有効性とその限界を示している．理想の母親像とは異なった現実を示すことは，解放的であり，オルタナティブな母親像を提供することでもある．一方で，理想の母親像を破壊することはできず，子どもに関する懸念に対しては「良い母親」でいることが求められ，母親像を巡る葛藤自体が強化され固定化される．

一方，母親同士の結束の強い Twitter 上の母親コミュニティに関する研究では，現実的な母親像を表現することの力をより肯定的に捉えている．上記のブログ研究と同様に，母親たちの声がオンライン空間に存在することの意義を，「徹底した母親」への対抗として分析した Twitter に関する研究を紹介する．

Elza Lāma and Gatis Lāma（2023）による，ラトビアにおける Twitter 上の母親コミュニティについての研究では，母親たちが Twitter を使う理由をインタビュー調査から明らかにし，母親コミュニティ内の実際の投稿を分析し，彼女らの利用動機を裏付けている．インタビュー調査からは，母親たちが自分の経験を，失敗談も含めて共有できる安全な場所であり，母親という経験が多様であることを学べる場所という語りを得ている．Lāma and Lāma（2023）は，現代の理想である「徹底した母親」規範を，「親としての役割に完全に満足し，あらゆる問題に対して無自覚な，異性愛規範の中産階級の『幸せな』カップルのみを認める（Lāma and Lāma 2023: 266）」もので，母親たちの Twitter 投稿は，「すべての感情，複雑さ，そして勝利を尊重する（Lāma and Lāma 2023: 266）」ものとして位置づけている．

Lāma and Lāma（2023）の分析は，SNS における母親同士の交流が，単なる情緒的なサポートやストレス緩和といった機能にとどまらず，リアルな母親，多様な母親の多様な経験を包括するプラットフォームとして機能していることを示している．また，匿名性が高いことで安全な場所として機能し，ネガティブな感情や経験を共有でき，「一人じゃない」「同じ問題を他にも多くの人が抱えている」と感じられるのである．「女性たちの語りは，これらの異なる意見が，多様な母親業のスタイルや，スティグマ化された，そしてタブーとされる気持ち，行いをいかに普通化することを助けているかを明らかにしている（Lāma and Lāma 2023: 262）」．

2.3　日本のオンライン空間における母親のナラティブ

本章で見てきた海外の母親ブログや Twitter コミュニティに関する研究は，オンライン空間に母親が自らのナラティブを構築することの意義，母性規範への挑戦やその限界，ラベル付けによる役割強化の危険性，逸脱した母としての自己表現が読者や社会に与える影響等を明らかにしてきた．これらの知見は，日本における母親のソーシャルメディア利用を分析する上で多くの示唆を与える．

まず，現実的な母親像や，多様な母親像がオンライン空間に存在することの意義や，ソーシャルメディアが形作る母親像，完璧ではない母親像が読者や社会に与える影響についても日本社会の文脈で議論されるべきである．日本における母親規範について母親たちがどう解釈し，実際の育児との間に生じる葛藤についてどのように表現しているのか，育児ブログや SNS での発信から考えていくことが出来る．日本においても「徹底した母親」の理想は強固であり，母親の自己犠牲を当然視する文化的期待が存在する．こういった期待は，母親たちによってどのように解釈され，交渉され，抵抗され，または再生産されていくのか，ソーシャルメディアにおけるナラティブから読み解くことが出来ると考える．

また，「悪い母親」や逸脱的な母親表現が，日本の文脈においてどのように受け入れられ，または拒絶されるのかという点を検証することで，日本における母親像を巡るポリティクスに迫ることが出来る．たとえば X では，育児中に起こるアクシデントや育児のフラストレーションについて，しばしばユーモアを持って語られ，「# 名画で学ぶ主婦業」のようなトレンドを形成することもある（田中 2018）．同時に，育児に対するフラストレーションや，家事育児の「手抜き」をユーモアとともに表現することは，ユーモアを解さない読者によって批判され，広く拡散され「炎上」してしまうリスクも有する．

逸脱した語り，完璧ではない母親の語りはどの程度可能で，読者からどのように共感され，または拒否されるのかは，オンライン空間において母親が自身のナラティブを構築するのがどの程度可能なのか調べる指標になり得る．また，コミュニティの結束力の強さが，オンライン上で何を開示できるのかの基準に与える影響があるのかなど，深く掘り下げて研究していくことで，母親の自由な語りが可能になる条件等が明らかになると考えられる．

3．ソーシャルメディアを介して助け合う母親たち

母親達の助け合いについては，育児や妊娠に特化したオンライン掲示板やウェブサイトに関する研究蓄積があり，母親たちの育児フォーラム上の助け合いや知識の共同構築は，社会関係資本の構築でありエンパワメントと高く評価する研究もある（Drenta and Moren-Cross 2005）．ブログ，Facebook，X に関する研究でも，母親たちの相互の交流をコミュニティとして論じるものは多い．

3.1　安心できるコミュニティ

SNS の代表的な存在である Facebook では，既存の友人や知人と繋がり交流するだけでなく，趣味やライフスタイルに関したグループを作成し，オンライン上で新たな繋がりを作ることもできる．Facebook 上には多くの母親グループが存在し，母親たちが母親役割を獲得し変化に適応するための重要なコミュニティを提供していると議論されている（Bîră et al. 2020; Gleeson et

al. 2022）．Danielle M. Gleeson et al.（2022）はオーストラリアにおける Facebook 上の母親グループ，特に小規模で閉じられたグループを対象にインタビュー調査を行い，こうした交流が現代の母親にとっての「村」として機能していると論じている．ここでいう村とは，「子どもを一人育てるのには村が一つ必要（It takes a village to raise a child）」という諺に由来し，子どもを育てるために必要な社会的支援やネットワークを指している．小規模のグループ内では，プライバシーが保たれている，深い共感が得られると感じ，プライベートな事柄も共有しあうようになり，特に，社交に困難を抱えている女性や孤独な女性にとり重要なサポートとなっている（Gleeson et al. 2022）．

Monica Bîră et al.（2020）は，ルーマニアの母親たちによる Facebook の母親グループでの交流を分析し，母親同士の助け合いがどのようにオンラインで展開されているかを明らかにした．母親，特に新たに母親となった女性は孤独感や不安を抱えやすいが，オンラインでの交流が困難を和らげている．この論文では，グループ内の社会的支援を，情報的，情緒的，肯定的，道具的の 4 つに分類して検討している．母親たちは，育児情報や生活上の工夫を共有するだけでなく，悩みに共感し励まし合うことで孤独を軽減し，育児にまつわるあらゆる選択に対して肯定的な言葉がかけられ，「自分は一人ではない」という安心感を得ている．さらに，必要な人への物品の提供や寄附といった具体的な援助も見られ，Facebook のプラットフォームを介して互助関係が形作られている（Bîră et al. 2020）．

これらの交流は，拡大家族から得られるサポートの代替として機能しており，伝統的な母親観から距離を置き，新しい母親観を構築しようとする母親を助けていると論じている．例として，理想化された母性を拒否し，子どものニーズだけではなく，自分自身のニーズも大事にするといったことや，心理療法等の専門的なケアを受けることをスティグマ化しないといったことが挙げられている（Bîră et al. 2020）．

また，女性に特化した Facebook グループが，彼女らにとり安全な場所として機能し，パートナーからの暴力に関する話題がしばしば投稿されることについて調査した Elizabeth Tadman-Kickham（2024）は，カナダを中心とした英語圏の文脈において，こういった母親コミュニティが暴力を受けたメンバーへの情報提供や情緒的サポート，そして彼女が経験したことが暴力であるという認識にも役に立っている点を指摘している．家族や友人から孤立し，公的機関に相談することの心理的ハードルが高い女性にとり，匿名化機能を利用して相談できるインフォーマルな繋がりは重要であるとしている．多くの場合，同様の経験をした女性たちからの共感のメッセージが寄せられ，ピアサポートの場として機能している．しかし，具体的なアドバイスを求める投稿に対して共感や励ましがなされたり，地域や国の違いから法制度が異なる中でアドバイスがなされたり，安全対策の提案をせずに「彼から逃げて」「なぜ別れないのか理解が出来ない」というコメントがされるなど，相談者にとり有益ではないやり取りも多い．専門的な知識を持った公的支援がこういった Facebook のグループのメンバーとなったり，グループの主

催者と連携を取ったりするなどの介入が望ましいと Tadman-Kickham（2024）は提言している．

3.2　団結して変化を求める

先に紹介した Lāma and Lāma（2023）による Twitter の研究で，Twitter の母親コミュニティが共感や励まし合いを超えて，「抗議の場」にもなっていることが明らかになっている．例えば，本来ならば国から支払われるべき麻酔の費用を産婦が払わされている現状について社会に認知させるために Twitter が有効であったケースが紹介されている．Twitter がラトビア社会において影響力をもつプラットフォームである点と，母親コミュニティの結束力が語りの中で言及されており，ツイッター・ママ（Twitter moms）を自称する女性たちは「必要があれば（会話に）割って入り，追加の証拠や経験談，あるいは単に強いサポートの言葉を提供する（Lāma and Lāma 2023: 263）」．こういった結束の強さが，ある問題に直面しているのは自分だけではないのだと母親たちが感じ，重要なエンパワメントになっていると論じられている（Lāma and Lāma 2023）．

3.3　日本におけるオンラインの助け合い

日本においても，SNS での繋がりが母親の孤独の緩和に有効であることが明らかになっている（Mandai et al. 2018）．しかし，実際にどのような交流が行われ，母親たちがそれらの交流をどう意味づけているのかについては，まだ十分に研究されていない．Facebook のオンライングループのように，メンバー承認制でプライベートな側面の強い母親グループや，X のように匿名性の高い SNS におけるやり取りが，日本においてどのように安心感や帰属意識を生み出しているのか検討することが重要である．特に，少子化や核家族化が進む日本において，孤独を回避し，育児の知識や情緒的サポートが得られるコミュニティを求める母親の実践は重要な研究テーマとなる．

さらに，ソーシャルメディア上での交流は新しい母親像の模索や構築の場としても機能している．ルーマニアの事例で示されたように，時代にあった母親像の探求は日本にも共通する課題である．育児と仕事の両立や，パートナーと協力し合って育児をすることは祖母世代とは異なる母親の在り方であり，オンライン・コミュニティは母親像の構築を助ける役割を果たすものと考えられる．また，寄付や物的支援のような物理的な支援に繋がる事例もあるのか，母親たちがコミュニティから得られる支援の特徴や程度についても検証し，現代の母親がもつオンライン・コミュニティの有用性と限界についても調査することで，母親が求める育児支援の在り方をアップデートすることも可能だと考える．

家庭内暴力のような，周りに相談しづらい性質の問題に対しても，匿名性の高く，共感が得られることが分かっているコミュニティが存在することは重要である．日本においても，インターネット上で親密な相談がなされることは多くある．日本の SNS 上の母親コミュニティが，

情報的，情緒的支援を得る場所として機能しているか，善意であっても危険性の高いメッセージが発信されていないか等は検証される必要がある．

母親達が互いに助け合い，社会に変革を求める可能性にも注目するべきである．ラトビアの事例にみられるような結束の強いコミュニティは，日本の X 上でも観察され，情報的サポートや共感的サポートを通じて連帯を強めている．例えば，無痛分娩の費用助成や，妊婦健診・分娩費用の公的補助拡充を求める声は，母親コミュニティでたびたび議論されているテーマである．こうした声がどの程度社会に影響を与えているのか，また母親たち自身がどのように影響力を感じているのか調査をすることは重要である．彼女らが，妊娠出産というプライベートな経験を共有することの動機として，日記のような記録や，共感し合いたいだけではなく，社会と繋がり，母親という経験を社会的な会話に繋げたいという側面があると考えるからである．

4．「ジェンダー実践」の場としてのソーシャルメディア

母親のソーシャルメディア利用について，Candace West and Don H. Zimmerman（1987）の「ジェンダー実践（doing gender）」概念を用いた分析を紹介する．Facebook に新たに母親になった女性たちが赤ちゃんの写真を投稿することや，Instagram においてエコー写真やベビーグッズの写真をシェアすることについて，「母親実践（doing mother）」や「妊婦実践（doing pregnancy）」という視点から論じている研究がある．これらは，社会から承認されるジェンダー実践がオンライン空間において再生産される様子について論じている．

4.1　Facebook 投稿とジェンダー実践

Sarah J. Schoppe-Sullivan et al.（2017）は，Facebook が「ジェンダー実践（doing gender）」の新たな舞台になっていると指摘している．Schoppe-Sullivan et al.（2017）によると，新たに母親になった女性たちは，「母親実践（doing mother）」として，家族や友人と繋がりのある Facebook に写真等を投稿する．Facebook 利用には個人差があるが，母親としてのアイデンティティを確認したい気持ちや，社会から求められる理想的な育児へのこだわりを持っている母親ほど，Facebook の利用頻度が高く，投稿に対する周囲の反応に敏感であることを明らかにした．背景には，社会が母親に課す役割と規範が存在し，「ジェンダー実践」，「母親実践」を通して外部から承認を得ることで良き母親であることを証明しようとするが，そういった承認への依存が幸福感を低下させるとしている．また，投稿に対するポジティブな反応は，女性が「母親をする」と賞賛する社会の在り方がオンライン空間に持ち込まれたものであり，母性規範を再生産し強化していると議論している（Schoppe-Sullivan et al. 2017）．

4.2　Instagram において可視化される妊娠

Instagram は写真共有を特長としたソーシャルメディアであり，人気を集めたユーザがインフルエンサーとして多くのフォロワーに影響を与えるソーシャルメディアである．また，女性を中心として人気が高いプラットフォームであり，多くの母親が利用している．

Katrin Tiidenberg and Nancy K. Baym（2017）は，Elena Neiterman（2012）の「妊婦実践（doing pregnancy）」の概念を用い，妊娠中の女性が Instagram 上でどのように妊娠を表現し，既存の社会規範に追従するのかを分析している．そして，現代の妊婦が自らを徹底的に管理することを「徹底した妊娠（intensive pregnancy）」と呼び，Instagram に投稿される写真，キャプション，ハッシュタグを分析し，「学ぶ」「買う」「魅せる」の 3 つのカテゴリーに分けて論じている．

まず，「学ぶ」ことは，妊娠に関する医学的知識や情報を積極的に学び，共有することが強調される．超音波画像の投稿や，妊娠週数や体重の記録など，医学的な言葉や指標が頻繁に使用され，妊娠を医療化し管理する様子が分かる．

次に，妊娠中の女性は，出産準備や育児に必要な商品を購入することが推奨される．Instagram では，これらの商品を紹介する投稿が多く見られ，消費を通じて「良い母親」をしていることが示されている．また，妊娠中においても魅力的な女性であることが求められるため，ファッションの選択が強調され，外見を通じて自己表現が行われている．これらの投稿は，妊娠中の女性の行動や身体に対して社会からの期待があること，そして女性たちが Instagram 投稿を通してそれに応えていることを示している．こうして，母になる前から，「妊婦実践」を通して自己管理や子ども中心の生活を体現していく（Tiidenberg and Baym 2017）．

4.3　Instagram と自分を比べない母親たち

一方で，SNS 上でのジェンダー実践やジェンダー表現が周りに与える影響について，Eloise R. Germic et al.（2021）は，Instagram のインフルエンサーが母親に与える影響を調査した．Instagram インフルエンサーを，完璧な母親像を発信する「アルファ・ママ（Alpha-mom）」と，散らかった部屋や母親が感じる困難を編集せずに発信する「リアル・ママ（Realistic mom）」に分け，それぞれの投稿を見せられた被験者の自己効力感が，投稿を見る前と見た後で変化するかを調べた．ソーシャルメディア上のイメージと自己を比べ，アルファ・ママの投稿と接すると自己効力感が下がり，リアル・ママの投稿と接すると自己効力感が上がると仮説を立てたが，この調査においてはこの仮説が棄却されている．この結果が示すことは，ソーシャルメディアで理想化された投稿を見ると自分と比較してしまうという従来の SNS 研究が，そのまま母親のソーシャルメディア利用に当てはまらない可能性である．この結果の分析に，Germic et al.（2021）はフェミニズム理論を用い，Julia E. Timmins（2019）や Sara Ruddick（1989）が，母親という経験において強さやエンパワメントを経験したのは，母親コミュニティの中にいたときであったという点を引用し，実験に参加した多くの被験者がソーシャルメディアの母親グループ

に属していた点から，母親たちは既に自らの強さを見つけ，他者との比較等のネガティブな影響を受けなかったのではないかと論じている（Germic et al. 2021）．

しかし，先に紹介した「悪い母親」ブログに関する研究が示すように，ソーシャルメディア上で表現される母親像がどのように他者から受け取られるか，特に批判の対象になる場面等を目撃した場合には，表現して良い母親像とするべきではない母親像についての考えが強化される可能性がある．例えば，「リアル・ママ」の投稿に共感している場合に，その投稿にネガティブなコメントが付いたりネットミームのように晒されたりするような出来事があれば自信が損なわれることも考えられ，コミュニティに属する女性がどのような条件下でエンパワメントされ，どのような条件下で自信を損なわれるのかについて更なる検証が必要である．

4.4　日本の母親実践や妊婦実践

「ジェンダー実践」「母親実践」という枠組みは，日本の母親のソーシャルメディア利用について議論する際にも有用である．ソーシャルメディア上で，どのように「母親実践」がなされているか，特に Facebook のように実社会との繋がりの強い実名利用のメディアにおいて，どのような母親実践が行われ，また強化されているのかは興味深いトピックである．

そして，エコー写真，マタニティフォト，妊娠記録アプリのスクリーンショットの共有等により，日本の SNS 上においても妊娠は高度に可視化されている．妊娠期から既に「良い母親」規範の内面化が始まる過程は日本にも共通するものと考えられる．それらを分析することは，日本の母性規範を研究する上で重要である．そして，これらの投稿が，同様に医療化された妊娠管理や消費行動，外見維持といった社会的期待に沿って行われているのか，またはオルタナティブな表現が存在するのかも検討したい．

次に，SNS 研究やメディア研究が想定する「理想化された投稿との比較」や「比較による自己肯定感や自己効力感の低下」が，母親集団では必ずしも当てはまらない可能性があることが示唆されているが，日本の文脈においても，母親同士のコミュニティに属することが，SNS によるネガティブな影響の緩和に役立つ可能性があるのか興味深い．影響を受けやすい条件や，受けにくい条件などがあるのか掘り下げることが出来れば，ソーシャルメディア利用全般についても応用できるような議論ができると考える．

5．商業化された母親業

ソーシャルメディアと母親業を議論するにあたって，新自由主義とポストフェミニズムが家庭領域に及ぼす影響を検討する必要がある．母親がソーシャルメディア上で自身の経験を語り，母親業に関する葛藤を表現し，コミュニティ形成を志向する営みが，市場の論理に巻き込まれ，個人的な経験が商品化されている．新自由主義は，政治的な課題を個人の努力や工夫に

帰属させ，ポストフェミニズムは構造的な不平等を不可視化することで，母親たちに家庭と仕事の両立を自己責任として担わせる傾向を強めている．家族中心の生活を送りながら収入を得られるブロガーやインフルエンサーを，個人的なことの商品化や新たな不安定労働として論じる研究を紹介する．

5.1　個人的なことの脱政治化と商品化

Kara Van Cleaf（2015）は，マミー・ブログ現象と 1970 年代の第二派フェミニズムにおける「個人的なことは政治的なこと」との違いについて議論する中で，マミー・ブログを Adrienne Rich（1976）による『of woman born』と比較しながら，ブログというプラットフォームが母親の生み出す価値を吸収し，同時に彼女らの声を脱政治化させていると批判した．

Van Cleaf（2015）によると，第二派フェミニズムにおいて，個人的なことを共有することは，構造的な差別や男性による支配に対する批判と結びついていた．しかしマミー・ブログにおける個人的な経験の共有は，感情的，そして経済的な価値生産のために掘り起こされている．個人の経験が，データ収集，広告，アクセス数などによって利益を生む近代の生産様式となったと Van Cleaf（2015）は指摘する．マミー・ブログは「母親によって価値が生み出され，メディア・プラットフォームによって吸収される，同時的に起こる母親業の商品化と脱政治化の様相を明らかにした（Van Cleaf 2015: 249）」と議論している．

Van Cleaf（2015）は，新自由主義的な強靭性の言説がマミー・ブログによって表現され，政治的なことを個人化し，構造的不平等を脱政治化すると議論している．母親たちがブログにアクセスすることに経済的価値があるため，困難を乗り越える物語，育児が社会的に支援されず，経済的に過小評価され続けることで発生する困難を乗り越える強靭性の物語は，母親業の価値を取り戻そうとする女性たちのオンライン上のコミュニティへの参加を促す．個人的な経験をさらけ出すラディカルさは，新自由主義的な環境と，プラットフォームを介して市場に入ることにより，その政治性を奪われている（Van Cleaf 2015）．

5.2　母親の不安に付け込むマーケティングと不安定労働

ソーシャルメディアを通して収入を得ることは，家庭と仕事の両立を迫られた母親たちの不安定な労働と捉えられる（Archer 2019; Banton and Brady 2024）．Cydney Banton and Miranda J. Brady（2024）は，Instagram の母親インフルエンサー（マムフルエンサー）の投稿を分析し，彼女らの提供するコンテンツが，多様で現実に即した母親という経験ではなく，プラットフォーム上の露出が高くなるよう計算された演出に置き換わっていることを指摘している．現代の母親業が新自由主義的な枠組みの物で機能し，家事育児に対する責任だけでなく，柔軟に働き経済的にも家庭に貢献することが要請されるなかで，家庭生活を収益化するマムフルエンサーたちがいる．家事育児に関する写真や動画を作成し Instagram にアップロードして広告収入を得

るものだが，Banton and Brady（2024）は，こういったマムフルエンサーのコンテンツは，ソーシャルメディアの仕組み（いいねや拡散等の反応を得ることで露出が増える）と，アフィリエイトの仕組み（露出に応じて広告収入が得られる）が組み合わさり，誰もが憧れるような均質化された母親業や，限定的な家庭像や役割を表現するように要請されていると指摘している．こうして，「利益が『良い母親』に対する共通認識と，それが持続させる価値を規定してしまう（Banton and Brady 2024: Conclusion section, para. 2）」．SNS のプラットフォームは，孤独の中から共感できるコミュニティを求める母親たちに対して，母親の理想化されたイメージを提供し，不安に付け込む形で収益を得ている．

しかし，Banton and Brady（2024）は，マムフルエンサー自身を責めることは出来ず，彼女らもプラットフォームから搾取されていると論じている．マムフルエンサーらもまた，不安に付け込まれ，規制が無く不安定な労働に動員されている．Banton and Brady（2024）は，SNS 収益化をマルチ商法に例え，アフィリエイト・マーケティングは，「子育てをしながら有償労働にアクセスしたいという，彼女らの非常に妥当な欲望を食い物にしている．しかし，この新自由主義的モデルは，母親が自らの労働において柔軟であり，かつ不安定であることに依拠している（Banton and Brady 2024: Conclusion section, para. 4）」としている．

同様の議論は，オーストラリアの母親インフルエンサーと PR プランナーの双方に存在する葛藤について論じる Chatherine Archer（2019）によってもなされている．母親ブロガーは，「遊び（プレイ）」と「労働者（レイバー）」が交錯する「プレイバー」として活動し，自己表現やコミュニティとの繋がりを求めつつ，収益化の圧力にも直面する．PR プランナーは彼女らを消費者や潜在的なコンテンツ作成者としか考えておらず，母親たちが自らの声やコミュニティを重視している点について理解がない．オーストラリアの文脈においては，子育てを機にパートタイムで働く女性が増えることから，自宅から収入を得られるインフルエンサーが，子ども中心に仕事をしたいという女性たちのニーズ，そして家庭も仕事も自己実現もすべきだという新自由主義の枠組みに合致する一方，自由な自己表現が制限されることによる葛藤を母親たちは経験する．新自由主義の枠組み，そして母親ブロガーを消費者かコンテンツ制作者としかみなさない PR プランナーによって，母親ブログが「商品化されていない公共圏から市場（Archer 2019: 106）」へと変化してしまったと議論している．

Archer（2019）は，母親ブロガーらは人生の転換期にいることや，それぞれが個別に働いていることなどから脆弱な立場に置かれているという倫理的な問題も指摘する．一方で PR プランナーらもまた，従来のテレビや雑誌から視聴者や読者がソーシャルメディアに移行したことに伴い，プロフェッショナルではないインフルエンサーたちに頼らざるを得ない状況に直面しており不安定な状態である．インフルエンサーによる PR は，Instagram 等のイメージ共有型のソーシャルメディアを中心に今後も増加することが予想されることや，子どものインフルエンサーが増えてきていることなどから，Archer（2019）は今後の展開を注視する必要性を説いて

いる．

5.3　日本における母親インフルエンサー

ソーシャルメディアの商業化が現代の母親業にどのように結びつくのか，日本の文脈においても様々な視点から研究ができると考えられる．母親インフルエンサーによる商品のプロモーションや，母親にインフルエンサーになって SNS 収益化を目指すように呼び掛けるコンテンツ等，個人的な経験を商品化し，オンラインでの繋がりを金銭的価値へ交換するプレッシャーは，母親のソーシャルメディアの現場において既に存在している．

長時間労働を前提とした働き方が依然として主流である日本において，子育て中の女性が仕事と育児の両立に困難を抱えている．同時に，自身の創意工夫によって柔軟に労働して経済的に自立することを新自由主義の枠組みの中で求められている．そんな中，既に存在する母親インフルエンサーや SNS 収益化の「チャンス」は，母親たちにとり新たな抑圧となり得る．

また，そういった母親インフルエンサーが広げる母親像や，それによって読者が受ける影響についても調査が必要である．育児の孤独からソーシャルメディアにコミュニティを求める女性たちが受け取るメッセージが，等身大の母親の多様な声ではなく，編集された理想的な母親像だとしたら，オンライン上に存在していた母親自身のナラティブではなく，主要メディアが繰り返してきた「理想の母親」規範の再強化の場がオンラインに移行しただけということになってしまう．Archer（2019）が指摘するように，動画系のメディアが人気を集め私的領域の商品化はますます進んでおり，子どものインフルエンサー化も進む中で，SNS が子育てや母親の実践にもたらす影響は大きな研究テーマとなる．

6．交差性の視点から母親とソーシャルメディアの関係を議論する

母親とソーシャルメディアの関係を議論する上で，交差性の視点を持つことが不可欠である．オンライン上における母親たちの語りは，理想化された母親像に対抗し，現実の母親像を提示しているという点で有意義である．しかし，その語りが社会における多数派の経験に偏っている場合，結果としてオルタナティブな母親像もまた特定の層に限定され偏りを帯びる可能性がある．さらに，オンライン・コミュニティが誰にとって有効に機能し，誰にとってそうでないのかを問わなければ，社会的にもっとも脆弱な立場にある母親―　性的少数者，若年層，障害を持つ母親など―を取り残してしまう．

ソーシャルメディアに寄せられる「誰もが自己表現できる民主的なメディア」という期待は，母親という文脈において果たして妥当なのだろうか．たとえば，非白人や多様な社会経済的背景を持つ女性たちがブログ空間において「不在（Lopes 2009: 754）」であるとされ，「白人，既婚，異性愛の女性の声が母親ブログ空間を占有している（Orton-Johnson 2017: 4）」との指摘も

ある．一方，Friedman（2013）は白人中産階級女性に限らず，若年や未婚の母親や，異なる民族的背景を持つ母親のブログがオンライン空間に存在する点を肯定的に評価し，「規範的でない母親たちが，繋がりを見つけ，そして一般的に無視されているアイデンティティや子育て実践の側面に光を当てる力（Friedman 2013: 87）」を持っていると高く評価している．

母親のソーシャルメディア利用を論じる際には，交差性の観点を取り入れ，様々な立場の母親の経験を可視化することが求められる．本章では，そのような交差性に基づいた研究の一部を紹介する．

6.1　非白人の不可視化と白人の孤独

アメリカにおける母親ブログと Facebook の母親グループについて論じる Charity L. Gibson（2019）は，白人中産階級女性がブログ空間やオンライン・コミュニティ空間を占有している状況について，彼女らが余暇に費やす時間が多いことや，仕事においてパソコン等のテクノロジーを使い慣れている点などを理由の一部として述べている．

加えて，非白人の母親が書くブログが「マミー・ブログ」と見なされない可能性について議論している．「人種」に関する言及があると政治的であるとみなされ，「マミー・ブログ」ではなく「人種」や民族アイデンティティに関するコンテンツであると解釈されることがあるためである．加えて，自身のバックグラウンドに言及していないコンテンツについては白人のものと解釈され，不可視化されてしまうという指摘も重要である．

また，ブログや Facebook における母親コミュニティに白人女性の参加が多くみられる点について，そもそも母親業における「孤独」自体が白人の問題である可能性についても Gibson（2019）は言及している．黒人コミュニティに見られるような疑似親族からのサポートや，アジア系，ラテン系母親たちが親族から受けるサポートを白人女性が受けておらず，白人女性がオンライン・コミュニティを頼らざるを得ない文化的な背景について論じている．

6.2　「有色人種の母親（mothers of color）」のブログ

Chandra V. Reyna（2022）が行った，アメリカにおける有色人種の母親のブログの内容分析は，彼女らの母親業が，Gibson（2019）が指摘する「白人特権により無視できる形で存在する，人種や階級の政治に深くかかわっている（Gibson 2019: 6）」ことを明らかにしている．Reyna（2022）によると，有色人種の母親のブログは，彼女らがどのように「マルチレイシャル（multiracial）」な子どもを社会化させているかについての知見を提供する．子どもが自らのルーツに誇りを持てるよう教育を行ったり，多様性について教えたり，人種差別についての会話を通して公平性の価値観を身に着けさせるなど，マルチレイシャルな社会化を促す育児実践について共有している．人種差別的な扱いに子どもたちを備えることや，特に黒人の母親においては自身の息子が「黒人男性」として見なされることの危険性についても重要なテーマとして扱っており，母

親としての日々の苦労を共有するだけのブログとは異なる意図，機能を持っている（Reyna 2022）．

分析の対象となったブログの多くは成功し影響力を持っているが，その影響力をマルチレイシャルな家庭にとって重要な課題のために使っている．しばしば批判される「マミー・ブログ」の収益化の問題に関しても，多様性に関する本や，有色人種をモデルとした人形を買って支援するように呼び掛けるなど，多様性の主流化を促すための宣伝以外はほとんど行わず，一般に議論される「マミー・ブログ」の商業化とは異なる意図を持っている（Reyna 2022）．

彼女らのブログは，「すべての人種的背景を持つ親たちにとってのマルチレイシャルな知識の場…マクロレベルの文化生産に寄与し，またそれを形作る力を持っている（Reyna 2022: 1525）」と高く評価されている．また，こういったブログや，増加傾向にある動画系メディアでの発信が，人種やジェンダーに基づく暴力事件等が起きた時にどのような会話を提供するのかに関して，コミュニティ全体に重要な知見を与える可能性があるとして重要視している．

家族の多様性は，子どもが必要とする社会化のプロセスが多様であることを示しており，母親の家族に対する関わりが多様であり，多様な思考や努力が求められるものである．Reyna（2022）の研究がもたらす知見は，他のマイノリティ性を持つ家庭で行われる母親実践に関しても共通点が見出せるものと考える．母親ブログが母親という経験について多様なナラティブを提供するものであるが，それぞれの母親が持つ交差性に注視して，ブログ空間を独占するナラティブとは異なる声が持つ力に注意を払うことは重要である．

6.3　性的マイノリティの育児と情報開示における葛藤

育児を巡るソーシャルメディアの利用には，子どものプライバシーの問題が常に存在する（Brosch 2016; Chalklen and Anderson 2017; Kumar and Schoenebeck 2015）．育児をしている性的マイノリティ当事者にとり，自分のアイデンティティの開示が，パートナーや子どものプライバシーの問題と関係しており，ソーシャルメディアにおける投稿にも葛藤があることが明らかになっている．

Lindsay Blackwell et al.（2016）の研究における，性的マイノリティ当事者として子育てをしている親たちのインタビューでは，SNS において自身のセクシュアリティを開示することに伴う負担が語られている．主に Facebook グループや X の利用に言及があったが，既存の友人や家族に対してカミングアウトする前に，多様なセクシュアリティに対する理解があるかを見極めるというプロセスが発生する．LGBT 関連の記事や投稿に「いいね」をしていたり，LGBT の権利を擁護するアイコンを使用している等を確認し，安全な環境であることを確認してからカミングアウトをしていることが明らかになった．

次に，子育てや自身のアイデンティティについて公にすること，子育てについての日々の投稿ですら，望まずして「啓蒙者」となってしまう点が議論されている．この，啓蒙者という立

場は負担にもなり得るし，自身の経験が誰かの希望になるという自己肯定にも繋がり得ることが当事者の語りから明らかにされている．

最後に，LGBT 当事者のセクシュアリティ，アイデンティティは本人だけに帰属するものではなく，現在のパートナーや過去のパートナーのプライバシーも含む複雑なものであり，カミングアウトには常に慎重さが求められることも指摘されている．そのため，複数のプラットフォームで，開示/不開示を使い分ける不便も生じている（Blackwell et al. 2016）．

6.4　障害児を持つ母親と障害を持つ母親

性的少数者の子育てにおける投稿が，「啓蒙」となってしまう点について，障害児を持つ母親においても共通している．障害児を持つ母親は，子どものニーズを社会に伝える必要性に迫られ，しばしば活動家にならざるを得ない．たとえば，自閉症の子どもを持つ母親のブログについて Daena J. Goldsmith（2021）は，母親はブログを通して自閉症受容を勧めるアライとなり得ると議論している．自閉症を巡る言説は変化を迎えており，治療や予防が出来るはずの「悲劇」として扱われてきたが，近年では多様な神経発達によるものとして見られている．必要なのは治療ではなく受容と配慮である．

Goldsmith（2021）は，母親ブログは自閉症の受容を促す活動の場になり得ると議論している．家庭の中で家族と関わりながら暮らす子どもをブログ等で発信することで，ステレオタイプや障害カテゴリーではなく個人として受け入れてもらうこと，他の親と互いにサポートしあうこと，自閉症の子どもについて読者を教育することや，自身が学ぶ様子を共有することを通して，母親ブログは自閉症者の最大のアライになり得ると Goldsmith（2021）は訴えている．また，大人になった自閉症当事者のブロガーとの対話の場ともなっており，当事者と親の相互理解に役立っている．

一方で，障害を持つ母親についてはソーシャルメディアにおけるプレゼンスが低い点を Jessy Erin Fletcher-Randle（2022）は指摘する．障害児育児についてではなく，育児をする障害者についてオンラインのリソースはほとんどなく，存在するものについては，子どもが自閉症と診断されたことをきっかけに自身も診断を受けた自閉症の女性が，自閉症の子どもを育てているものに偏っている．初めから自閉症であることが分かっていて子どもを持った母親のケースや，自閉症の女性が定型発達の子どもを育てているケース等は見過ごされている．また，自閉症や障害を持った母親に対するステレオタイプを覆すために，困難を乗り越えられたり，自身の特性を育児に活かしたりできるというような枠組みで障害の特性が語られ，能力主義を再生産するような言説も多くみられる（Fletcher-Randle 2022）．

6.5　子どもを失った母の語り

Astrid Joutseno（2018）は，「マミー・ブログは，トラウマ，恐怖，障害，喪失，病気，そして

死を語ることで，規範に抗う言説に関与する」と述べる．マミー・ブログに登場する出産体験記に焦点を当てた Joutseno（2018）は，出産は「赤ちゃんの誕生」として語られるが，マミー・ブログでは「母親の誕生」が語られ，そこには流産や死産も含まれる．Joutseno（2018）は，マミー・ブログの出産体験記を，Sara Ruddick（2003）による概念である母的実践（maternal practice）や母的思考（maternal thinking）への入り口と解釈しているが，喪失の中で書かれる出産体験記は，「喪失，死，障害のない物語として出産を構築する見方に対抗し……母的思考の概念を拡張する（Joutseno 2018: 82）」としている．

6.6　日本の母親と交差性

日本の文脈においても，民族的背景に言及されない限り「日本人」「日本民族」であると解釈される可能性が高く，民族的な背景に言及した場合には単なる育児ブログとみなされない可能性がある．セクシュアリティについても同様に，言及がない場合は異性愛者とみなされる可能性が高く，言及した場合には「望まぬ啓蒙者」となってしまうことは十分に考えられる．そして，カミングアウトをする場合には，そのオンライン空間が安全かを精査しなければならないという負担が存在する．少数者としての背景に言及しないまま，必要に応じた情報交換や情緒的交流を行うことも可能であり，性的少数者の親のように「使い分け」をしている当事者も多くいると考えられる．そういった負担や，使い分けの実践が，母親としての経験にどのような影響を与えるのかも研究が必要なテーマであると考える．

また，障害児を育てている母親は特に孤独に陥りやすく，移動に制限が生じる場合も多いため，オンライン上のピアサポートは重要なコミュニティとなり得る．実際に，障害児を育てる親のコミュニティは様々な SNS 上に存在し，ブログ等も豊富に存在する．一方で，障害者として子育てをする女性たちもまた孤独に陥りやすく，移動に制限が生じる場合が多いため，オンライン空間は貴重な交流の場となり得る．ただし，単純なオンライン検索では障害児を育てる母親に関連する検索結果ばかりが表示されるなど，コミュニティを見つける際の課題がある．

そして，母親としての経験の中で，喪失の語りはしばしばタブーである．しかし，ブログや SNS であれば同じ経験をした人の語りを探すことができる．日本のブログ，コミックエッセイ，SNS 上でも「出産レポ」と称する出産体験記は数多く存在するが，トラウマや恐怖に関する語り，死産の語りも含まれている．そういった語りは，妊娠出産を取り巻く「幸せな母親」という理想に対抗するものであり，母親という経験の現実に迫るものとして重要な研究のテーマとなり得る．

その他にも，日本語話者ではない母親や，若い母親や未婚の母親，宗教的マイノリティ等，様々な背景を持つ母親が，どのようにオンライン上で語り，彼女らの築くコミュニティがどのような機能を有するのか，そして，彼女らがオンライン・コミュニティにどのような意味を見出すのか，日本における多様な母親の経験を明らかにするために，彼女らのオンライン実践に

ついても注視したい.

7．おわりに

本稿では，欧米を中心とした母親とソーシャルメディアに関する研究を検討し，日本の母親業を分析するために有効な視座を提示してきた．先行研究からは，ソーシャルメディアが現代育児に欠かせない要素となり，母親業を特徴づける重要な側面であることが明らかになっている．ソーシャルメディアでは，これまで周縁化されてきた母親や，「完璧な母親」像から逸脱する母親たちに声を与え，共感やコミュニティの場を提供している．同時に，母親は絶えず批判や監視の対象となり，その発信は規範の強化・交渉・逸脱の場として作用している．こうした両義性は，ソーシャルメディア上において「良い母親」という規範が再生産されつつも，抵抗される過程を映し出している.

母親達の声は，非現実的な母親規範に達しない自らの実践に関する「告白」であると同時に，母親だけに過重な負担を強いる社会に対する「告発」として読むことができる．その一方で，母親たちは互いに語りを通じて連帯し，母親業を再構築している．ソーシャルメディア上の母親たちの営みは，現代の母親業を形作っており，その可能性と限界を日本の文脈においても探求していきたい.

本稿の限界として，英語文献のみを参照したこと，フェミニズムの視点から研究がなされているかをタイトルや要旨のみから判断してレビュー対象を限定したことが挙げられる．また，SNS の技術的仕様や文化は急速に変化しており，ここで参照した研究の一部は既に主流ではない利用形態に基づいている可能性がある．今後は，日々変化していくプラットフォームの特徴を捉えつつ，その中で母親業がいかに実践されているかを多角的に検討する必要がある.

以上を踏まえ，本稿は日本における母親とソーシャルメディア研究の出発点として，フェミニズムの視座を導入する意義を強調した．母親たちが直面する母親規範と，その中での主体的な実践を同時に捉えることが，今後の日本社会における母親研究を進展させるために不可欠である.

（ひが　まり・社会学研究室）

文献

Archer, Catherine, 2019, “Social media influencers, post-feminism and neoliberalism: How mum bloggers ‘playbour’ is reshaping public relations”, *Public Relations Inquiry*, 8(2): 149–166.

Banton, Cydney and Miranda J. Brady, 2024, “Definite Must-Haves and Amazing Finds: Insecure Motherhood and Affiliate Linking Momfluencers on Instagram”, *Joural of Mother Studies*, Issue 9 2024,（Retrived

August 22, 2025, https: //journs. org/definite-must-haves-and-amazing-finds-insecure-motherhood-and-affiliate-linking-momfluencers-on-instagram/）

Bîră, Monica, Corina Buzoianu, and George Tudorie, 2020, “Social Support Mediated by Technology. A Netnographic Study of an Online Community for Mothers.” *Romanian Journal of Communication and Public Relations*, 22(2): 57-71.

Blackwell, Lindsay and Jean Hardy, Tawfiq Ammari, Tiffany Veinot, Cliff Lampe, and Sarita Schoenebeck, 2016, “LGBT Parents and Social Media: Advocacy, Privacy, and Disclosure during Shifting Social Movements”, *CHI '16: Proceedings of the 2016 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems*, 610-622,（Retrived August 27, 2025, https://doi.org/10.1145/2858036.2858342）.

Brosch, Anna, 2016, “When the Child is Born into the Internet: Sharenting as a Growing Trend among Parents on Facebook”, *The New Educational Review*, 43: 225-235.

Butler, Judith, 1993, *Bodies that Matter: On the discursive limits of “sex”*, New York: Routledge.

Chalklen, Charlotte. and Heatherr Anderson, 2017, “Mothering on Facebook: Exploring the Privacy/Openness Paradox”, *Social Media + Society*, 3(2): 1-10.

Chen, Gina Mashullo., 2013, “Don’t call me that: A techno-feminist critique of the term mommy blogger”, *Mass Communication and Society*, 16(4): 510-532.

サイバーエージェント株式会社, 2023,「サイバーエージェント次世代生活研究所,『Z 世代の SNS 利用率』を発表！　Z 世代が最も利用している SNS は『Instagram』75.6％に　Z 世代の認知率が 5 割超えの SNS は『BeReal』57.1％,『Discord』56.6％,『SnapChat』56.6％」, 2023 年 12 月 19 日,（2025 年 8 月 14 日取得, https://www.cyberagent.co.jp/news/detail/id=29609）.

Douglas, Susan J. and Meredith W. Michaels, 2005, *The Mommy Myth: The Idealization of Motherhood and how it has Undermined Women*. New York, NY: Simon and Schuster, Inc.

Drentea, Patricia and Jennifer L. Moren-Cross, 2005, “Social capital and social support on the web: the case of an internet mother site”, *Sociology of Health & Illness*, 27: 920-943.

Fletcher-Randle, Jessy Erin, 2022, “Where are all the Autistic Parents? A Thematic Analysis of Autistic Parenting Discourse within the Narrative or Parenting and Autism in Online Media”, *Studies in Social Justice*, 16(2): 389-406.

Friedman, May, 2013, *Mommyblogs and the Changing Face of Motherhood,* Toronto, ON: University of Toronto Pres

Germic, Eloise R., Stine Eckert, and Fred Vultee, 2021 “The Impact of Instagram Mommy Blogger Cnotent on the Perceived Self-Efficacy of Mothers”, *Social Media + Society*, 7(3): 1-19.

Gibson, Charity L., 2019, “Enacting Motherhood Onine: How Facebook and Mommy Blogs Reinforce White Ideologies of the New Momism”, *Feminist Encounters: A Journal of Critiacal Studies in Culture and Politics*, 3(1-2), 06: 1-11.

Gleeson, Danielle M., Alison Craswell, Christian M. Jones, 2022, “It takes a virtual village: Childbearing women’s experience of a closed Facebook support group for mothers,” *Women and Birth*, 35(2): 172-180.

Goldsmith, Daena J., 2021, “Mom Blogging As Maternal Activism: How to Be an Ally for Autism Acceptance”, *Journal of the Motherhood Initiative for Research and Community Involvement*, 12(2): 7-21.

Hays, Sharon, 1996, *The Cultural Contradictions of Motherhood*, New Haven: Yale University Press.

Joutseno, Astrid, 2018, “Cyber Labour: Birth Stories on Mommyblogs as Narrative Gateways into Maternal

Thinking", *Journal of the Motherhood Initiative for Research and Community Involvement*, 9(2): 75-87.

粕井みづほ, 2007,「育児におけるストレス・コーピング ― SNS の利用について―」『畿央大紀要』(6)：1-8.

片田千尋・西村明子・藤井真理子・末原紀美代, 2016,「ダウン症児の母親が育児に前向きな気持ちになるまでの心理過程：医療者の支援とソーシャルメディアが母親の心理に与える効果」『兵庫医療大学紀要』 4 (1)：1-8.

Kumar, Priya and Sarita Schoenebeck, 2015, "The modern day baby book: Enacting good mothering and stewarding privacy on Facebook", *In Proceedings of the 18th ACM Conference on Computer Supported Cooperative Work & Social Computing*, 1302-1312, New York: ACM.

Lāma, Elza and Gatis Lāma, 2023, "Mothers on Twitter (X): Exchanging Support and Narrating Motherhood", *Culture Crossroads*, 23: 257-271.

Lehto, Mari, 2019, "Bad is the new good: negotiating bad motherhood in Finnish mommy blogs", *Feminist Media Studies*, 20(5), 657-671.

Lopez, Lori Kido, 2009, "The radical act of 'mommy blogging': Redefining motherhood through the blogosphere", *New Media and Society*, 11(5): 729-747

マクロミル, 2022,「3000 人に聞いてみた！ SNS アカウントの使い分け事情」, マクロミルモニタサイト, 2022 年 3 月 25 日,（2025 年 8 月 15 日取得, https://monitor.macromill.com/we_asked/20220325_sns-account.html）.

Mandai, Marie, Misato Kaso, Yoshimitsu Takahashi, and Takeo Nakayama, 2018, "Loneliness among mothers raising children under the age of 3 years and predictors with special reference to the use of SNS: a community-based cross-sectional study", *BMC Women's Health*, 18, 131.

水内豊和・丹菊美晴・佐藤克美・渡部信一, 2018,「知的・発達障害児をもつ母親におけるソーシャルサポートとしての SNS の有効性（2)― SNS の機能から見た利活用の実態―」『富山大学人間発達科学部紀要』13(1)：147-153.

Morrison, Aimée, 2010, "Autobiography in real time: A genre analysis of personal mommy blogging", *Cyberpsychology: Journal of Psychosocial Research on Cyberspace*, 4(2),（Retrived August 8, 2025, https://cyberpsychology.eu/article/view/4239）.

Musk, Elon, 2023, "Our headquarters tonight", X, July 24, 2023,（Retrieved August 26, 2025, https://x.com/elonmusk/status/1683378289031761920）

中島千英子・永井由美子, 2020,「母親の育児情報源としての SNS 利用に関する調査」『大阪教育大学紀要　人文社会科学・自然科学』68：41-49.

Neiterman, Elena, 2012, "Doing pregnancy: pregnant embodiment as performance", *Women's Studies International Forum*, 35(5): 372-383.

Orton-Johnson, Kate, 2017, "Mummy Blogs and Representations of Motherhood: "Bad Mummies" and Their Readers", *Social Media + Society*, 3(2): 1-10.

Reyna, Chandra V., 2022, ""You're biracial but...": Multiracial socialization discourse among mommy bloggers with Black and non-Black multiracial children", *Journal of Marriage and Family*, 84(5): 1507-1528.

Rich, Adrianne, [1976] 1986, *Of Women Born: Motherhood as Experience and Institution*, Repring, New York: W.W. Norton & Company.

Ruddick, Sara, 1989, Maternal Thinking, Beacon Press.

――――, 2003, “Maternal Thinking”, Dianne P. Freedman and Olivia Frey eds, *Autobiographical Writing across the Disciplines*, Duke University Press, 216–229.

Schoppe-Sullivan Sarah, Jill E. Yavorsky, Mitchell K. Bartholomew, Jason M. Sullivan, Meghan A. Lee, Claire M. Kamp Dush, and Michael Glassman, 2017, “Doing Gender Online: New Mothers’ Psychological Characteristics, Facebook Use, and Depressive Symptoms”, *Sex Roles*, 76(5): 276–289.

総務省，2015,『平成 27 年版　情報通信白書』.

Tadman-Kickham, Elizabeth, 2024, “We Got You, Mama: How Facebook Mom Groups support members experiencing intimate partner violence”, University of Alberta, Master’s Thesis.

田井りん，2024,「ママだけど,『ワタシも大事』～ママたちのメディア接触と消費行動」，ウェブ電通報，2024 年 12 月 6 日，（2025 年 8 月 14 日取得，https://dentsu-ho.com/articles/9142）.

高谷邦彦，2019,「サード・プレイスとしての Twitter ―子育て主婦ユーザの場合―」『名古屋短期大学研究紀要』57：1–13.

武市久美，2014,「子育てにおける SNS 利用について―『ママ友』コミュニケーションに着目して―」『東海学園大学研究紀要』19：79–89.

田中久美子，2018,『# 名画で学ぶ主婦業』，宝島社.

Tiidenberg, Katrin and Nancy K. Baym, 2017, “Learn It, Buy It, Work It: Intensive Pregnancy on Instagram: Intensive Pregnancy on Instagram”, *Social Media + Society*, 3(1): 1–13.

Timmins, Julia E., 2019, “‘Care’ from private concern to public value: a personal and theoretical exploration of motherhood, feminism, and neoliberalism”, *Women's Studies Journal*, 33(1): 48–61.

Van Cleaf, Kara, 2015, “*Of Woman Born* to Mommy Blogged: The Journey from the Personal as Political to the Personal as Commodity”, *Women's Studies Quarterly,* 43(3): 247–264.

West, Candace and Don H. Zimmerman, 1987, “Doing gender”, *Gender& Society*, 1(2): 125–151.

資　　料

（令和 6 年度）

リサーチ・アシスタント（RA）成果報告書

・文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について
・研究テーマ一覧
・研究成果の概要

博士論文題目一覧

修士論文題目一覧

特定課題研究テーマ一覧

リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は，博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより，学生を経済的に支援し，博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに，学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には，令和６年度，182 名の博士後期課程の大学院生が在籍し，そのうち７名がリサーチ･アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と，１年間の研究成果の概要報告を，『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和６年度

氏　　名	研　究　テ　ー　マ	頁
榎　本　歩　美	馬介在療法における北米先住民と固有種馬の関係性に関する文化人類学的研究	325
王　　泰　睿	中国第六世代映画監督賈樟柯の作品における金銭の表象に関する研究	326
郭　　如　梅	キャラクター消費による女性同性愛表象の表現機構 ── 2010 年代の専門誌『コミック百合姫』の関連作品を中心に	327
金　　雲　龍	ピーター・シンガーの立場からの感情と直観の位置づけ：ジョナサン・ハイトとジョシュア・グリーンを中心に	328
張　　力　丹	日本語モダリティの統語語用論的研究 ──「ものだ」「ことだ」「わけだ」の比較を通じて ──	329
沈　　嘉　琳	『1Q84』と村上春樹の翻訳作業	330
趙　　文　軒	武田泰淳論 ── 第一次戦後派における日中戦争	331

研究成果の概要

研究テーマ	**馬介在療法における北米先住民と固有種馬の関係性に関する文化人類学的研究**
RA氏名	榎本歩美（えのもと あゆみ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　文化多様性論講座　文化人類学研究室 博士後期課程２年
指導教員氏名	山　口　未花子

研究成果の概要

カナダ先住民社会では植民地支配の同化政策に由来するトラウマや，今も続く差別や抑圧により貧困や暴力，健康被害が深刻な問題となっている。その治療の一つとしてオジブウェ・ホースによる馬介在療法が注目されている。オジブウェ・ホースは過去に五大湖地域のオジブウェに季節的な労働力として用いられたが，植民地支配時の殺処分により関係は途絶えた。先住民の健康問題に関する人類学研究では，人間と自然の関係性が治癒や回復に有効であることが示されているが，「人間の健康に役立つ動物」という視点は未だ中心的で動物が受ける影響は注目されていない。本研究では，文化人類学における人間中心主義・西洋医学中心主義の脱却を目指し，先住民の動物観に基づく先住民と馬及び自然の諸存在の相互作用による回復力の生成・促進を明らかにすること目指す。

調査方法は，オジブウェに関する過去の民族誌と動物介在療法に関する文献調査，馬介在療法プログラムを実施する施設での聞き取りと参与観察に基づいてデータを収集する。

研究成果は次の三点である。まず，文献調査からオジブウェ・ホースの歴史と現状について把握した。馬は1960年代まで半野生で生息し，五大湖周辺地域の先住民と季節的な共生関係にあったこと，1940年代後半に始まる宣教師の到来に伴う数の減少，殺処分による絶滅危機の現況と北米での保護の状況を整理した。また，先住民の馬介在活動を通して断絶された関係の再構築が進んでいることを把握した。二点目は伝統的な医療とオジブウェの動物観の関連である。過去の民族誌の調査から，伝統医療において動物は多くの役割を保持し，健康と幸福のためには人間と動物を含む非人間の関係性が重要であると考えられていることが分かった。三点目は「治癒者としての馬」の認識について，セラピープログラムの代表者である先住民女性へのインタビューから検討を行った。馬は人間の健康のための道具ではなく治癒を与える存在であり，常に敬意と感謝を持って接していることが明らかとなった。以上の点を踏まえ，さらに具体的な馬と先住民の相互的なケアによる植民地支配からの回復について明らかにすることを今後の課題とする。

研究テーマ	中国第六世代映画監督賈樟柯の作品における金銭の表象に関する研究
R A 氏名	王（おう）　泰睿（たいえい）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	応　雄

研究成果の概要

【研究目的】

本研究は，中国第六世代の映画監督である賈樟柯（ジャ・ジャンクー）の映画作品における金銭の表象を考察することを目的とする。具体的には，以下の二つの点に焦点を当てる。第一に，賈樟柯の初期作品において，物語や映像表現の中で金銭がどのように描かれているかを明らかにし，特に素人俳優の出演との関係に注目する。第二に，これらの映像分析をもとに作品間の比較を行い，「作家論」の視点から考察を試みる。

【研究計画】

前期では，賈樟柯の長編映画デビュー作『一瞬の夢』（1997）における「金銭」の表象と，素人俳優の演技を分析する。また，賈樟柯の作家性の一側面である長回しのカメラワークに着目し，『プラットホーム』（2000）や『青の稲妻』（2002）にも言及しながら，初期作品における素人俳優による「歌唱」シーンにおける身体と金銭との関連性を考察する。

後期では，『長江哀歌』（2006）を分析対象とする。本作では，長江という水の環境を背景に，賈樟柯の初期作品に見られる「身体と金銭の交換」というテーマが，「筋肉と金銭の交換」として描かれている。特に，労働者の肉体運動を捉えた映像表現に注目し，その描写がどのように金銭との関係性を示しているのかを考察する。

【研究成果】

前期の成果として，賈樟柯の映画における香港映画の「音声の引用」がもたらす問題を指摘し，素人俳優による歌唱シーンの感動を肯定的に評価した。また，初期作品における「鈍感」な歌唱や行動を分析した。本研究成果は，中国・北京大学で開催された国際学会「International Doctoral Student Forum of Art Studies 2024」にて口頭発表を行った。

後期の成果として，賈樟柯の初期映画における「ロマン化された身体」が「筋肉映画」へと変化し，筋肉と金銭の交換を通じて暴力性が露呈することを明らかにした。本研究成果は，香港中文大学で開催予定の国際学会「Young Scholars' Forum in Chinese Studies 2025」にて口頭発表を行う予定である。

これらの研究成果は，博士論文の一章として組み込む予定である。

研究テーマ	**キャラクター消費による女性同性愛表象の表現機構** ――2010年代の専門誌『コミック百合姫』の関連作品を中心に
RA氏名	郭（クオ）　如梅（ルー　メイ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	押野武志

研究成果の概要

本研究はなもり『ゆるゆり』及び派生作品『大室家』を研究対象として，キャラクター消費の受容からうかがうことのできるレズビアン・セクシュアリティ表象の変容に着目し，2010年代の〈百合〉表象の構造を解明する。

従来のオタク論では，キャラクター消費は性差によって二分化され，「データベース消費」は男性向けで，「相関図消費」は女性向けと捉えられている。しかし，男性読者を想定する『ゆるゆり』では，データベース消費と相関図消費の混在によって，男性向け／女性向けのジェンダー・カテゴリーの境界線が揺れている。また，『ゆるゆり』は「相関図消費」を優先的に用いて，登場人物の妄想に伴い，読者の二次創作を積極的に喚起し，数多くのレズビアンの恋愛関係を作り上げる。

掲載誌『コミック百合姫』の編集部の言説と重ねれば，「相関図消費」などのキャラクター消費は，セックスやジェンダーとは関係なく，読者が習得することができる消費行動であることが示されている。このように，本研究において従来のオタク論における性別の本質化や男女の二項対立の再強化などの問題点を洗い出した。「男性向け／女性向け」，「データベース消費」と「相関図消費」の二項対立は，読者に要請されるジェンダー規範であることも明らかにした。それを踏まえ，〈百合〉表象は男性オタクが女性キャラクターを所有しようとする攻撃的なポジションから逸脱する可能性を提示した。また，〈BL〉と比較すれば，〈百合〉は「攻め／受け」という役割分担の紋切り型を撹乱した。「攻め／受け」の交換可能性により，〈百合〉の「相関図消費」は数多くの女同士のカップリングとレズビアンの恋愛物語が生産されている。

このように，『ゆるゆり』は作品外部における男性向け／女性向けというジェンダー・カテゴリーの規範性の露呈，作品内部における「データベース消費」と「相関図消費」の混在，「攻め／受け」の流動化を通じ，〈セックス／ジェンダー／欲望〉の首尾一貫性を撹乱しながら，多様な選択の可能性を明確に示した。この意味で，『ゆるゆり』はオタク文化のセクシュアリティの多様性に貢献した作品と位置付けた。

研究テーマ	**ピーター・シンガーの立場からの感情と直観の位置づけ**：ジョナサン・ハイトとジョシュア・グリーンを中心に
R A 氏名	金（キム）　雲龍（ウ ニョン）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	藏　田　伸　雄

研究成果の概要

本研究の目的は，ピーター・シンガー（Peter Singer）の道徳的正当化理論において，直観（intuition）と道徳的判断（moral judgment）の関係を分析することである。シンガーは直観的判断が道徳的正当化の根拠になることはできず，理性による合理的な正当化が必要だと主張する。しかし，道徳的判断から直観が完全に排除できるのかについての議論が必要である。したがって，本研究は，シンガーが直観をどのように解釈し，道徳的判断においてどのような役割を与えるかを分析し，彼の道徳的正当化理論をより体系的に理解することを目的とする。

本研究は三つの段階で行われる。まず，シンガーの道徳的正当化における直観の位置を分析する。彼は功利主義を提唱し，直観を超える合理的な正当化が必要だと主張する。第二に，道徳的判断における直観の機能を実証的研究と比較する。ジョナサン・ハイト（Jonathan Haidt）とジョシュア・グリーン（Joshua Greene）の研究を通じて，実際に直観が人間の道徳的判断にどのように作用しているかを提示し，シンガーの直観批判が現代の道徳心理学とどのように調和するか，または衝突するかを分析する。第三に，シンガーの道徳的判断理論が感情（emotion）と共感（empathy）をどのように扱うかを検討する。

本研究を通じて，シンガーの道徳的正当化理論において直観が占める位置をより明確に明らかにすることができる。第一に，シンガーが直観を排除しようとするが，実質的にこれを完全に超えることは非常に難しいことである。第二に，最近の道徳心理学研究と比較し，彼の立場が現代倫理学的議論とどのように調和できるかを分析する。第三に，感情と共感の役割を考慮し，シンガーの道徳的正当化理論を補完できる可能性を探る。その結果，シンガーによれば，ハイトとグリーンの研究は，人々が実際にどのように道徳的判断を下すかを説明することはできるが，どのような道徳的判断が正しいかを決定することとは区別される。道徳的判断の心理的プロセスと道徳的正当化（normative justification）は区別されるべきである。道徳的判断が単なる感情的な反応ではなく，普遍的な原則と理性的思考を通じて正当化されなければならない。

研究テーマ	日本語モダリティの統語語用論的研究 ──「ものだ」「ことだ」「わけだ」の比較を通じて──
RA氏名	張（ちょう）　力（りき）　丹（たん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　言語科学研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	加　藤　重　広

研究成果の概要

研究目的：

客観的な事柄を表す要素である「命題」と，主観的な態度・判断を表す要素である「モダリティ」は，文を構成する二大要素とされている。モダリティを表す形式のうち，形式名詞に由来して新たな意味用法を派生した言語形式は比較的注目を浴びていないようである。品詞性や意味用法，従属節での出現，ほかのモダリティ助動詞との複合など，様々な課題を残している「ものだ」「ことだ」「わけだ」を研究対象とする。それらを検討することで，モダリティの定義や範囲，体系化など本質に関わるものを考え直す。

研究計画：

形式名詞とコピュラの「だ」が結合してできた点で共通している「ものだ」「ことだ」「わけだ」を，①助動詞として認定可能か否か，②コピュラを伴わずに文を完結させる現象，③それぞれの否定表現及び否定表現間の相違点，といった3つの側面より展開していく。

研究成果：

①活用体系を持つかどうかを助動詞の認定にあたってのキーポイントだと考えられる。実例に合わせて考察したところ，いずれも規則的な活用体系を持つため，三者とも助動詞と認められる。②コピュラを伴わずに文を完結させる「もの」「こと」「わけ」について品詞性や意味用法などを考察したところ，「もの」と「こと」は，いずれも終助詞としての用法があるのに対して，「わけ」は助動詞の「わけだ」と形態的に分離しておらず自立性が弱いため，文を完結させる機能を有するものの，終助詞として認め難いことがわかった。③「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定表現に関しては，助動詞の未然形に由来する「もので（は）ない」「ことで（は）ない」「わけで（は）ない」と否定辞が先行する「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」という2種類がある。両者の異なりについて，「もので（は）ない」「ことで（は）ない」「わけで（は）ない」は全体的にモダリティレベルに入るのに対して，「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」は，「ものだ」「ことだ」「わけだ」がモダリティを担当する部分であるが，否定辞の「ない」は命題レベルに入ってしまう。

研究テーマ	『1Q84』と村上春樹の翻訳作業
RA 氏名	沈（しん）　嘉琳（かりん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	押野武志

研究成果の概要

村上春樹は多くのインタビューで，スコット・フィッツジェラルド，レイモンド・チャンドラー，トルーマン・カポーティの三人のアメリカ作家に同時に言及し，自分の一番好きな三人の作家であると明言する。村上は二〇〇六年十一月，およそ三十年間待ち続けた『グレート・ギャツビー』（1925）の翻訳をやっと上梓した後，二〇〇七年三月にチャンドラーの『ロング・グッドバイ』（1953），二〇〇八年二月にカポティの『ティファニーで朝食を』（1958）と，三人作家の代表作の新訳版を連続して出版した。本研究は『1Q84』（2009，2010）の創作背景として，村上春樹が愛読し，影響を受けた三人の作家の代表作を一気に翻訳した事実から出発し，村上春樹の翻訳作業の視座から青豆を中心に『1Q84』を解読する試みである。

『1Q84』での青豆と青豆にまつわる人物の描写では，トルーマン・カポーティの作品におけるイノセントなものへの志向と，レイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説との類似性と相違点がみられる。さらに，スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』の名場面を取り入れつつアレンジを施し，青豆を目的達成へと導く。

作家天吾の年齢は，村上が小説家デビューした時の年齢と同じである。また，天吾が『空気さなぎ』の書き直しをきっかけに新しい創作を始めることも村上が最初に英語で文章を書いた後，日本語に訳す形で小説を書き始めたこと一致する。天吾には村上が作家デビューした初期の面影がある。村上のデビュー初期の〈鼠三部作〉における，喪失の経験を繰り返す「僕」は，〈鼠三部作〉の延長線上で書かれた『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）では，好感を抱く女性と共に，将来に期待を寄せるようになる，という初期作品群の構図と展開は，『1Q84』でも見受けられる。『1Q84』で特異なのは，他の村上作品とは異なり，「僕」を救い出す女性を重点的に描くことである。そういった青豆の造形の特質を，アメリカ文学作品の翻訳作業と結び付けながら分析する。

研究テーマ	武田泰淳論 ── 第一次戦後派における日中戦争
R A 氏名	趙（ちょう）　文軒（ぶんけん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	水　溜　真由美

研究成果の概要

本研究は，武田泰淳の戦争および中国に対する関心に着目し，彼の反戦思想と人間観を浮き彫りにすることで，戦後文学における独自性を明らかにすることを目的とする。日中戦争を背景に，武田が抱いた中国へのこだわりを出発点として，〈中国もの〉と呼ばれる作品群を分析することで，戦後の創作と戦争体験との関係を検証したい。

本年度は研究計画に従って，まず「淑女綺談」（『改造』1951 年 5 月号）を取り上げ，これまでの〈上海もの〉に関する研究を踏まえつつ，武田文学における終戦前後の女性人物の描写とその女性観を考察した。次に，「冷笑」（『群像』1951 年 7 月号）と「勝負」（『群像』1952 年 4 月号）という自伝的小説を中心に，インテリ作家としての武田の問題関心に焦点を当て，彼の従軍小説における戦地表象について考察を行った。最後，武田の戦後文学の原点とされる「審判」（『批評』1947 年 4 月号）を対象に，その構造を詳細に検討した。

本研究の成果として，「淑女綺談」に関する論文「武田泰淳「淑女綺談」論 ── 終戦前後の上海における女性表象」を執筆し，『国語国文研究』第 163 号（2024 年 8 月）に掲載した。また，「冷笑」と「勝負」の考察をもとに，令和 6 年度北海道大学国語国文学会大会において「武田泰淳における戦地表象 ──「冷笑」と「勝負」を中心に」と題した研究発表を行い，その成果を発展させた論文「武田泰淳の従軍小説論 ──「冷笑」と「勝負」における戦地表象」が『層 ── 映像と表現』第 17 号に掲載される予定である。さらに，「審判」についての分析に基づき，第 8 回映像・現代文化論学会大会において「武田泰淳「審判」における〈記述行為〉の多層性」というテーマで研究発表を行った。同題の論文を執筆し，『国語国文研究』第 165 号へ投稿した。

博士論文題目一覧

令和６年度

氏　名	種　類	学　位　論　文　題　目	授与月日
ウゲット＝カニャメロ・エンリック	文学	Organ Transplantation Metaphors A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers （臓器移植のメタファー　―コーパスに基づいた，新聞における命の表現に関する比較研究―）	令和 ６．６.28
欧　陽　如　一	文学	身体・動作・空間―中華圏アクション映画に関する研究	６．６.28
豊　岡　正　庸	文学	An Investigation Into Addition of Classical Negation to First-Order and Generalized Intuitionistic Logic （一階および一般化された直観主義論理に対する古典的否定の追加に関する探究）	６．６.28
野　口　飛香留	文学	南北朝期官人陰陽師の研究	６．９.25
酒　井　駿太郎	文学	ウェブ小説研究 ―ネット社会における模倣的創造文化の可能性について	６．９.25
林　　大　智	文学	Formal Truth as Provability: Proof-Theoretic Studies （証明可能性としての形式的な真理：証明論的研究）	６．９.25
崔　文　ショウ	文学	大和屋竺論―「恐怖映画」を中心に―	６．９.25
坂　東　　泰	文学	清末新政期の鴉片政策と中央・省関係 ―政策評価の問題を中心として	６．９.25
土　田　修　平	文学	協力と罰の共進化：罰に対する感受性を中心とした理論的および実証的研究	７．３.25
稲荷森　輝　一	文学	Philosophical Intuitions in the Free Will Debate: Unraveling Boundaries and Insights （自由意志論争における哲学的直観：境界と探求と新たな視座）	７．３.25
金　　雲　龍	文学	直観と道徳的判断に対するピーター・シンガーの立場とその補完：道徳的正当化を中心に	７．３.25
長　坂　祥　悟	文学	共感する我 ―メーヌ・ド・ビランの心理学と道徳の基礎についての試論	７．３.25
宮　﨑　勝　正	文学	H.G.ガダマー『真理と方法』における存在の遊び ―芸術，伝承，言語の呈示的本性をめぐって―	７．３.25
吉　村　佳　樹	文学	Toward a Credible Form of Scanlonian Contractualism （スキャンロン的契約主義のもっともらしい形態の構築に向けて）	７．３.25
張　　易　臻	文学	後藤新平研究―「大日本主義者」の国家構想―	７．３.25
倉　田　　守	文学	幕末期加賀藩の政治と海防	７．３.25
コジェブニコワダリア	文学	第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活	７．３.25
朝　山　明　彦	文学	「関帝」の誕生へ―明中後期の関羽信仰	７．３.25
藤　原　秀　樹	文学	北海道における縄文時代の墓と社会	７．３.25

氏　名	種　類	学　位　論　文　題　目	授与月日
センレイシャン	文学	観光地を生きる人々 ―中国・貴州省西江（シ・ジャン）ミャオ寨の観光人類学的研究	7．3.25
魏ブン君	学術	利用者の主体性を促す展示に関する研究 ―都道府県立博物館の常設展示を事例として―	7．3.25
寺農織苑	学術	ミュージアムにおけるビデオゲームアーカイブズ考 ―展示評価実践によって顕在化した来館者のニーズと現状との差異―	7．3.25
何松延	文学	出土『日書』と先秦数術家の世界観	7．3.25
張瑩	文学	日本語と中国語における分配量化と全称量化の生成文法による分析	7．3.25
ヌルミ　ユッシ ヘンリ セバスティアン	文学	アイヌ語否定表現の語用論的研究 ―口承文芸テキストを中心に―	7．3.25
新井洋史	学術	北東アジアにおける国際協力を通じた地方振興に関する考察	7．3.25
貴堂雄太	人間科学	協力及びその文化差の起源を探る ―文化的集団淘汰理論に基づく理論・実証的検討―	7．3.25
段玉	人間科学	人口減少時代における中国農村地域と宗教団体 ―ソーシャル・キャピタルの視点から―	7．3.25
フリーマン ジェイソン ディロン	人間科学	Relational mobility as a socio-ecological foundation of prosocial minds and behaviors （向社会心理・行動における社会生態学的基盤としての関係流動性）	7．3.25
澤井啓	人間科学	社会的受容性の高い野生動物保全の課題：インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による　商業的野生動物猟の民族誌的研究	7．3.25
井出達郎	文学	Vulnerability as the Beginning of Care in Modernist Literature: F. Scott Fitzgerald, Raymond Chandler, Henry Miller, and J. D. Salinger （モダニズム期のアメリカ文学におけるケアのはじまりとしての傷つきやすさ ―― F.スコット・フィッツジェラルド，レイモンド・チャンドラー，ヘンリー・ミラー，J. D.サリンジャー）	7．3.25

修士論文題目一覧

令和６年度

専　攻	氏　　名	修　士　論　文　題　目
人文学	駒　田　珠　希	On Correspondence Pluralism（対応多元主義について）
	呉　　坤　鍵	想像は像性をもつか
	田　村　南　人	科学一般に関する田辺元の言説について―「常識」の概念に着目して―
	酒　井　絵　里	教育方法論の改革としてのカント哲学 ～知的徳（intellectual virtue）を手掛かりとして～
	大　山　和　依	PVS 患者に対する延命治療の倫理的妥当性の検討― AHN に焦点を当てて―
	味　田　結　花	「死への恐怖」の合理性を巡る考察 ―剥奪説の発展的解釈に基づく「死を恐れること」の根拠の検討―
	李　　宗　漢	On the Absence of the Cosmic Meaning（宇宙的意味の欠如について）
	趙　　凡　熙	内村鑑三の霊性の構造―「霊魂」「霊」「霊性」―
	倉　田　捺　那	現代における修行の形成と働き ── 曹洞宗安泰寺を事例として
	千　﨑　陽　菜	ロシアの死生学
	馬　場　泰　平	北海道開拓における「宗教的な移住団体」の実像
	佐　藤　拓　海	室町幕府・鎌倉府間の境界領域における越後守護上杉氏の位置づけ
	土　田　知　之	鎌倉末期における東寺領播磨国矢野荘例名の確立過程
	解　　進	明治憲法制定過程における君主権制限の一断面
	シン　　存　正	近代日本における司法官僚の行刑改革と国体思想
	今　井　隆　子	近世後期蝦夷地における松前藩の「国法」認識
	沈　　月　超	植林と植民：フランス領アルジェリアにおける外来熱帯植物順化運動
	曹　　錚　麟	宋代における梓潼信仰をめぐる儒家の立場
	山　口　萌　香	脱植民地期のフランス領西アフリカにおける黒人エリート
	小　森　双　葉	19 世紀ウィーンにおける音楽活動とナショナリズム

専　攻	氏　　名	修　士　論　文　題　目
人文学	前　田　拓　海	第２次世界大戦後のイギリスにおけるレイシズム
	柴　野　初　音	小樽市忍路土場遺跡出土種実の研究
	何　　金　蓉	共感と調和を結ぶ宗教舞踏―中国チベットにおける人と神霊の存在様相―
	倉　本　　優	さっぽろレインボープライドのエスノグラフィ ―連帯が拡大するプライドパレードと主催団体の今日的課題―
	劉　　坤	釧路とクジラ―クジラのまちづくりにおける鯨食文化の復興と伝承―
	齊　藤　大　介	山の存在と共に在るマタギの営み ―移住者マタギの山での活動とマタギの身構え―
	米　田　啓　祐	ヒグマとまなざし合う ―大雪高原温泉沼めぐり登山コースにおけるヒグマとの遭遇と歩行がもたらす生成変化―
	秋　山　美　香	ジェノサイド後のルワンダにおける二元論を超えた平和の探求 ―キガリ・ガサボ地区の土器コーペラティブの事例を通じて―
	川　口　侑　莉	乳幼児と保護者による美術鑑賞の可能性
	五十嵐　千　夏	ドナルド・ジャッドの芸術と哲学―領域横断的実践における〈翻訳〉の試み―
	田　中　駿一朗	須田国太郎が目指した「東西の絵画の綜合」―《犬》を中心にして―
	三田尾　有希子	J.M.W.ターナーの自然観における循環の意識と月の描写
	樋　口　凜太郎	17 世紀から 19 世紀後期におけるアイヌ民族の鯨類獲得方法 ―― 文献史料の分析による捕鯨説・寄鯨利用説の再検証
	鄒　　シ云	視覚障がい者の博物館参加がもたらす変容とその意義 ―兵庫県立美術館と神戸アイライト協会の事例を通じた関係性の考察―
	阿　部　リ　サ	対話型鑑賞のファシリテーターにおける熟達過程 ―暗黙知に着目したインタビュー分析―
	新　川　葉　菜	東日本大震災の伝承施設等設置の要因と地域への意義に関する研究 ―施設整備・運営担当者への聞き取り調査をもとに―
	白　木　涼　花	Tactile Imagination and a Militant Surrealist Attitude: Jan Švankmajer's Adaptations of Edgar Allan Poe（触覚的想像力と"戦闘的"シュルレアリストの態度―ヤン・シュヴァンクマイエルによるエドガー・アラン・ポーの翻案）
	山　内　雪　乃	Queer Consent in Violent Pornography: Questions Sexual Agreement through Harriet Daimler's Writings（暴力的ポルノグラフィーにおけるクイアな同意―ハリエット・ダイムラーの描写から性的同意を問う―）
	金　井　理　仁	近世前期テキストにおけるスサノヲの受容―牛頭天王譚を中心として―
	李　　果　然	日本古代王権神話における「草木言語」

専　攻	氏　　名	修　士　論　文　題　目
人 文 学	新　開　なつみ	『とりかへばや物語』の表現―〈光〉と〈きよら〉―
	王　　耀　瓏	『性自命出』における禮・楽・情について
	王　　玉テイ	『東坡易傳』による蘇軾の性命観の研究
	姜　　豊	『伝習録』における王陽明の死生観―朱熹の死生観と比較して
	徐　　正　丁	黄老思想と馬王堆漢墓『経法』等四篇について
	劉　　如　玉	『商君書』における「姦民」に関する研究
	胡　　宋語嫣	犬の表現から見たチベット現代文学
	呉　　越	撒尼人の阿詩瑪から新中国の阿詩瑪へ： 映画『阿詩瑪』の女性像と新中国の社会政策
	陳　　亦　瑶	師陀の小説『結婚』における「恋愛」
	句　　暁　晨	Life and Death in Shanghai の中国語訳本に関する調査と比較研究
	姚　　依　平	死生・情欲・諧謔 ── 明清文学における「馬桶」
	髙　橋　捺　津	太宰治作品における「家庭」
	劉　　雲　澈	周浩ドキュメンタリー作品の考察
	徐　　茹イ	『NEEDY GIRL OVERDOSE』研究―「インターネットエンジェル」の成立と展開
	成　瀬　真己杜	中島梓／栗本薫論
	劉　　媛	つげ義春マンガにおける内語研究
	楊　　昊	押見修造の反時代的マンガ『ぼくは麻里のなか』と『血の轍』を中心に
	粟　生　康　介	日本語の格助詞「に」と英語の前置詞の意味的対応関係
	陳　　詩テイ	現代日本語における形容詞の装定・述定用法の比較分析
	梁　　艶　莉	事象叙述と属性叙述の転換についての考察
	末　次　栄　子	副助詞バカリの意味について～〈限定〉〈程度〉〈概数量〉の共通性をめぐって～

専　攻	氏　　名	修　士　論　文　題　目
人 文 学	王　　煦	中国語における「把」構文に関する研究
	任　　馳	「怒り」と「悲しみ」に関する慣用句表現の日中英対照研究
	アリ　ネスリン アブド　アラー	アラビア語シャーム方言における語形変化 ―動詞の ʕam- 接頭辞活用形の意味をめぐって―
	小　川　優　理	滋賀県湖南方言における式の音調のゆれ
	郭　　彧シン	重慶方言母語話者による歯茎鼻音［n］と側面接近音［l］の混同について ―世代差を中心として―
	黄　　宇　軒	現代中国語隠語における造語法の分析 ―邵（2014）の分類法との比較を通じて―
	梁　　鳴　輝	中国語粤語方言における発音のユレ状況について
	飯　田　七　彩	アイヌ民族に関する学校教育と和人研究
	廣　澤　慎太郎	アイヌ語における証拠性形式の語用論的研究
	ハルチェンコ　ソフィア	北海道，樺太，アムール河下流域の諸民族の口承文芸に関する比較研究 ―口承文芸におけるクマを中心に―
	黄　　浩　然	アイヌの口頭伝承におけるトパットゥミ―歴史との接続
人間科学	畠　山　伶　寧	短時間動画の視聴経験におけるピーク・エンドルール
	牧　島　海　渡	言語的作業記憶負荷が情景画像の自由観察中の眼球運動に及ぼす影響
	山　口　翔　大	単純な繰り返しの刺激呈示が好ましさと瞳孔径に与える影響の再検討
	泉　　果　歩	聴覚情報の潜在記憶―測定方法による保持性質及び脳内基盤の違い―
	呉　　楊　楊	異なる言語表記を使うことがパッケージ・T シャツ・待ち受け画像の印象評価に及ぼす影響
	西　野　結　芽	色への好ましさと瞳孔径の関連
	李　　潤　梓	物体の典型色が指示忘却に与える影響
	日下部　春　野	Does relational mobility lead to social differences in positive and negative reputations? The examination in our daily lives（関係流動性はポジティブ・ネガティブ評判の社会差をもたらすか？日常の評判情報に着目した検討）
	中　村　　凜	飼育下のウマの母子における感覚的側方化 ―関連する要因・発達に伴う変化に着目して―
	佐　野　千　夏	斜行伝達による非適応的文化進化：シミュレーションによる生起条件の検討

専　攻	氏　　名	修　士　論　文　題　目
人間科学	石　　佳　欣	中国「女性離郷高齢者」の主観的ウェルビーイングに対する宗教の役割 ―四川省成都市の仏教寺院を事例に―
	劉　　宇　寧	現代中国都市における一人っ子家族の世代間関係 ―結婚・出産観についてのジェネレーションギャップから―
	張　　鼎　楠	中国の隔世育児における女性離郷高齢者の家庭苦境について ―母親業の視点から―
	王　　安　琪	双減政策の下における家庭資本と教育戦略の選好 ―中国合肥市における異なる階層の中学生の保護者を比較して―
	繆　　言	中国における現代宗教が失独高齢者に与える精神的な支援 ―ソーシャル・キャピタルの視点から―
	金　本　将　希	在日韓国人大学生の日常生活と民族団体の関係性 ―民団学生会参加者を事例として―
	藤　田　青　空	高齢化・固定化する森林ボランティアの活動における複層的な意味
	山　崎　正太郎	屋敷林「イグネ」のある暮らしと自立の論理
	尾　辻　朋　音	地域生態系保全を指向した動物園展示が来園者に与える影響 ―札幌市円山動物園・旭川市旭山動物園を事例に―
	髙　橋　宏　宜	エスポラーダ北海道の地域密着型運営に求められる役割と連携のあり方 ―スポーツ振興に関わる連携先の声に注目して―
	趙　　畢　丹	混合世帯の農村生活への適応要因―山口市阿東地域の移住世帯を事例に―

特定課題研究テーマ一覧

令和６年度

専　攻	氏　　名	特定課題研究テーマ
人文学	白　　亮	『論語』における「唯女子與小人爲難養也」の解釈に関する研究
	鈴　木　里　菜	江戸川乱歩における人物と語り―『パノラマ島奇譚』を中心に―
人間科学	市　村　風　花	マスク遮蔽による顔魅力の変化 ―魅力報酬性に基づく新たな魅力測定手法の検討―

10.14943/rjgshhs.25.r 1

『論衡』における漢事に関する考察

凌　玲

要　旨

本考察は、王充の『論衡』における漢代事象の記述を対象とする。劉盼遂や黄暉によれば、『論衡』が引用する資料には伝世の正史のみならず逸書や口承伝承も含まれ、正史と異なる記述が見られることが指摘されており、これにより『論衡』の記述も史料的価値を持つ可能性が示唆される。そこで、恢國篇・講瑞篇・宣漢篇・驗符篇の四篇に注目し、『漢書』『後漢書』との記述差異を比較した。その結果、『論衡』には王充独自の取材・取捨選択の視点や評価が反映されており、正史との齟齬を史料の補足的観点として理解できることが明らかになった。

はじめに

劉盼遂（一八九六～一九六六）は、王充が博覧強記であったことを述べるとともに、その参照した資料の多くが既に散佚し、記録された故事の出典が不明と述べている。たとえば、書虚篇・命義篇・刺孟篇に見える伍子胥が鼎中で煮られたとの記載は、正史には確認できないという[1]。その後、黄暉（一九〇九～一九七四）も、『漢書』との記述の齟齬を指摘している[2]。これらの指摘は、王充が『論衡』において引用した資料が、伝世の正史に限らず、当時流布していた民間記録や逸書、あるいは口承伝承などを含んでいた可能性を示唆している。実際、近年では『論衡』の記述に基づいて歴史考察の手がかりを見出そうとする試みも少なくない[3]。こうした観点に立てば、『論衡』における記述は、少なからず史料的な価値があると考えられる。

本考察では、王充が漢王朝を賛美した『論衡』の篇章のうち、特に正史として扱われる『漢書』『後漢書』[4]との記述上の乖離が顕著な恢國篇・講瑞篇・宣漢篇・驗符篇の四篇に注目する。これらの篇は、いずれも漢代に実在したとされる瑞祥や符命といった事象を

扱っており、漢代の事象を反映する資料としての価値を有すると考えられる。そこで、これら四篇の記述を精査し、正史との比較を通じて『論衡』における記録の補筆や改変を明らかにし、王充の独自の取材・取捨選択の視点や評価のあり方を明らかにすることを目的とする。

一、『論衡』と正史に見える漢事

『論衡』に見える漢事と正史とを比較すると、表のようにまとめることができる。

表のように、『論衡』と『漢書』『後漢書』の相違として、特に祥瑞に関する記述が詳しいか否かという点が挙げられる。たとえば、表の第二欄（『論衡』講瑞篇）の第一項目では、鳳凰が上林県や長楽宮に集まったことに加え、その姿まで詳しく描写され、さらに麒麟の出現にも触れている。一方、対応する『漢書』の記述は、「鳳凰がどこに現れたか」といった程度にとどまっている。また、祥瑞の出現した年にも相違がある。たとえば、表の第三欄（『論衡』宣漢篇）の第十一項目では、『論衡』では「其年三月」（それが五鳳四年に当たる）、一方で『漢書』では五鳳三年と記されている。このように、『論衡』と正史との間には多くの異同が見られるので、以下、代表的

『後漢書』
（章帝紀） 1、建初三年、零陵獻芝草。 2、甘露降泉陵、洮陽二縣。 3、該当箇所無し 4、建初五年、有八黄龍見於泉陵。
該当箇所なし
（光武紀） 1、中元元年二月辛卯、柴望岱宗、登封太山。
（明帝紀） 1、是歳、瀆湖出黄金、廬江太守以獻。（志　郡国五） 2、博南永平中置。南界出金。 （章帝紀） 3、是歳、零陵獻芝草。 4、是歳、甘露降泉陵。洮陽二縣。 5、零陵獻芝草。 6、有八黄龍見於泉陵。

『論衡』	『漢書』
(恢國篇) 1、三年、零陵生芝草五本。 2、四年、甘露降五縣。 3、五年、芝復生六本。 4、黃龍見、大小凡人。	該当箇所無し
(講瑞篇) 1、孝宣帝之時、鳳皇集于上林、後又於長樂之宮東門樹上、高五尺、文章五色。周獲麟、麟似麞而角。武帝之麟、亦如麞而角。如有大鳥、文章五色。 2、神雀、鸞鳥、皆眾鳥之長也。 3、王莽時有大鳥如馬、五色龍文、與眾鳥數十、集于沛國蘄縣。	(宣帝紀) 1、三月、詔曰、乃者、神爵五采以萬數集長樂、未央、北宮、高寢、甘泉泰畤殿中及上林苑。……十二月、鳳皇集上林。 2、神爵集雍 3、『漢書』に見えず
(宣漢篇) 1、治未平、氣未和。光武皇帝升封、天晏然無雲、治平氣應。 2、孝宣皇帝元康二年、凫皇集于太山、后又集于新平。 3、四年、神雀集於長樂宮、或集於上林、九真麒麟。 4、神雀二年、鳳皇、甘露降集京師。 5、四年、鳳皇下杜陵及上林。 6、五鳳三年、帝祭南郊。神光並見、或興子谷、燭耀齊宮、十有餘日。 7、明年、祭后土、靈光復至、至如南郊之時。甘露、神雀降集延壽萬歲宮 8、其年三月、鸞鳳集長樂宮東門中樹上。甘露元年、黃龍至、見於新豐、醴泉滂流。 9、明年、祭后土、靈光復至、至如南郊之時。 10、甘露、神雀降集延壽萬歲宮。 11、其年三月、鸞鳳集長樂宮東門中樹上。	(宣帝紀) 2、三月、詔曰、乃者鳳皇集泰山、陳留、甘露降未央宮。…三月、以鳳皇甘露降集、賜天下吏爵二級。 3、三月、詔曰、乃者、神爵五採以萬數集長樂、未央、北宮、高寢、甘泉泰畤殿中及上林苑。 4、二年春二月、詔曰、乃者正月乙丑、鳳皇甘露降集京師、群鳥從以萬數。朕之不德、屢獲天福、祇事不怠、其赦天下。 5、宣帝紀に見えず 6、朕飭躬齊戒、郊上帝、祠后土、神光並見、或興于谷、燭燿齊宮、十有餘刻。 7、宣帝紀に見えず 8、三月辛丑、鸞鳳又集長樂宮東闕中樹上、飛下止地、文章五色、留十餘刻、吏民並觀。 9、宣帝紀に見えず 10、宣帝紀に見えず 11、(五鳳三年) 鸞鳳集長樂宮東闕中樹上。
(驗符篇) 1、永平十一年、廬江皖侯國民際有湖。皖民小男曰陳爵、陳挺、年皆十歲以上、相與釣於湖涯。挺先釣、爵後往。爵問挺曰、釣寧得乎。挺曰、得。爵即歸取竿綸。去挺四十步所、見湖涯有酒罇、色正黃、沒水中。爵以為銅也、涉水取之、滑重不能舉。挺望見、號曰、何取。爵曰、是有銅、不能舉也。挺往助之、涉水未持、罇頓衍更為盟盤、動行入深淵中、復不見。挺、爵留顧、見如錢等、正黃、數百千枝、即共掇摝、各得滿手、走、歸示其家。爵父國、故免吏、字君賢、驚曰、安所得此。爵言其狀。君賢曰、此黃金也。即馳與爵俱往。到金處、水中尚多。賢自涉水掇取。爵、挺鄰伍並聞、俱競採之、合得十餘斤。賢自言於相、相言太守。太守遣吏收取。遣門下掾程躬奉獻、具言得金狀。 2、永昌郡中亦有金焉、纖靡大如黍粟在水涯沙中。 3、建初三年、零陵泉陵女子傅寧宅、土中忽生芝草五本、長者尺四五寸、短者七八寸、莖葉紫色、蓋紫芝也。太守沈酆遣門下掾衍盛奉獻。皇帝悅懌、賜錢衣食。詔會公卿、郡國上計吏民皆在、以芝告示天下。天下並聞、吏民歡喜咸知漢德豐雍瑞應出也。 4、四年、甘露下泉陵零陵洮陽始安冷道五縣, 榆柏梅李、葉皆洽薄、威委流漉、民噉吮之、甘如飴蜜。 5、五年、芝草復生泉陵男子周服宅上、六本、色狀如三年芝、並前凡十一本。 6、湘水去泉陵城七里、水上聚石曰燕室丘、臨水有俠山、其下岩塗、水深不測。二黃龍見、長出十六丈、身大於馬、舉頭顧望、狀如圖中畫龍。燕室丘民皆觀見之。去龍可數十步、又見狀如駒馬、小大凡六、出水遨戲陵上、蓋二龍之子也。並二龍為八。出移一時乃入。 7、宣帝時、鳳皇下彭城、彭城以聞。宣帝詔侍中宋翁一。翁一曰、鳳皇當下京師、集於天子之郊、乃遠下彭城、不可收、與無下等。宣帝曰、方今天下合為一家、下彭城與京師等耳、何令可與無下等乎。令左右通經者、語難翁一。翁一窮、免冠叩頭謝。	『漢書』に見えず

な例を取り上げて考察していく。

二、甘露降五県、延壽萬歲宮、鳳凰下彭城

表から明らかなように、『論衡』と正史の間には、同一の漢代の事象に関する記述において相違する箇所が多数存在する。以下、その中から比較的顕著な事例を抽出し、検討を加えたい。

『論衡』恢國篇には「四年、甘露降五縣」（四年、甘露、五縣に降る）とあり、『論衡』驗符篇には「四年、甘露下泉陵零陵洮陽始安冷道五縣」（四年、甘露、泉陵・零陵・洮陽・始安・冷道・五縣に下る）とある。つまり、王充は甘露が泉陵・零陵・洮陽・始安・冷道の五つの県に降ったという。しかし、『後漢書』の章帝紀では、「是歲、甘露降泉陵、洮陽二縣」（是の歲、甘露、泉陵、洮陽二縣に降る）とあり、同じ年に甘露が降ったのは泉陵と洮陽の二県のみであったという。また、謝承による『後漢書』では「吳郡沈豐為零陵太守。到官一年。甘露降泉陵、洮陽五縣、流被山表、膏潤草木」（呉郡の沈豊、零陵の太守と為る。官に到りて一年。甘露、泉陵・洮陽の五県に降り、流れて山表に被び、草木膏（うるお）してを潤す（『藝文類聚』九十八所引）とあり、呉郡の沈豊が零陵太守になってから一年後に、甘露が泉陵・洮陽など五つの県に降ったという。

また、『論衡』宣漢篇には、「甘露、神雀降集延壽萬歲宮」（甘露、神雀降りて延壽萬歲宮に集まる）とあり、甘露や神雀が延壽萬歲宮に降ったという記述が見られるが、『漢書』には載せられていない。龔自珍『瓦錄序』によると、前漢時代の瓦には多くの吉祥の文字が刻まれており、その中には「長生未央」や「延年益壽」といった言葉が並べられ、「延壽萬歲」もそのひとつとして記されている[5]。黄暉によれば[6]、「延壽萬歲」は秦漢時代の瓦当（屋根瓦の先端装飾）にも見られ、この記述が実際の建築物と関わっていた証拠とみなすべしとしている。「萬歲殿」や「延壽觀」の瓦という異説もあるが、この記録と合わせて見ると、「延壽萬歲宮」は実在した宮殿だと思われる。

さらに、『論衡』驗符篇にはこのような記述がある。漢の宣帝の時、彭城に鳳凰が現れたという報告があり、宣帝はこれを吉兆として受け止めたが、侍中の宋翁一は、鳳凰は本来、都である京師に降るものであるため、地方に現れても意味がないと反論した。すると宣帝は、天下は一家であり、彭城も京師と同じだと返し、経書に詳しい者を呼んで議論させた結果、宋翁一は論破されて謝罪することになった[7]。このことは、王充によりに詳しく記されているが、『漢書』には見受けられない。

この点について、『漢書』宣帝紀に残された記述を確認したい。神爵元年の改元のときに白虎や鳳凰といった瑞祥が多数現れたと記され、宣帝は「朕の徳ならず」と謙虚な姿勢を見せながらも、民に恩賞を与えた[8]。つまり、これは実際には瑞祥を政治的に利用して、皇帝の正当性を強調しようとする意図があったと考えられる。趙翼もまた『廿二史箚記』においてで、宣帝や章帝の時に瑞祥が多く現れたのは、政治的な利用目的が背景にあると述べている[9]。

このように、『論衡』と正史に見られる祥瑞の出現年や場所の相違が極めて多い。正史と他史料との相違について、『廿二史劄記』の〈小引〉（序文）において、趙翼は以下のように記している。

惟是家少藏書、不能繁徵博採、以資參訂。閒有稗乘脞說、與正史岐互者、又不敢遽詫為得閒之奇。蓋一代修史時、此等記載、無不蒐入史局、其所棄而不取者、必有難以徵信之處。今或反據以駁正史之訛、不免貽譏有識。
惟だ是れ家に藏書少なく、繁しくに徵し博く採りて以て參訂に資すること能はず。閒に稗乘脞說有りて、正史と岐互する者は、又た敢へて遽かに詫らかにして得閒の奇と為さず。蓋し一代、史を修むる時、此れ等の記載は、蒐めて史局に入れざるは無く、其の棄てて取らざる所は、必ず以て徵信し難きの處有り。今、或は反て據りて以て正史の訛りを駁すは、譏りを有識に貽すを免れず。

要するに、正史に採用された記述は、基本的にその信憑性が十分に検討されている点に特徴がある。一方で、『論衡』に記載される内容のうち、正史と異なる箇所については、史官によって十分に信頼に値すると判断されず、採録されなかった可能性が高い。このことは、史料の性質に応じて慎重に取り扱うべきであるという姿勢を示している。そこで本考察では、『論衡』を正史の訂正資料としてではなく、王充の独自の視点や評価を示す補助的史料として理解することを目的とする。以下の事例も、そのような補助的視角を示す例である。

三、天晏然無雲、張湯之父五尺

光武帝による泰山封禅に関する記述は、複数の史料に見られるが、当日の天候描写には顕著な違いがある。『論衡』宣漢篇には、「光武皇帝升封、天晏然無雲、太平之應也。治平氣應」（光武皇帝、升封す。天、晏然として雲無し。太平の應なり。治平の気応ずる）とあり、当日は晴で雲ひとつなく、これは治世の瑞兆であると述べている。『後漢書』光武紀では、「中元元年二月辛卯、柴望岱宗、登封太山」（中元元年二月辛卯、柴を岱宗に望げ、太山に登封す）とあり、記述内容は日付のみであり、天候や瑞祥に関する記述は見られない。晋の袁宏による『後漢紀』には「中元元年二月辛卯、上登封於太山、事畢、乃下。是日山上雲氣成宮闕、百姓皆見之」（中元元年二月辛卯、上に、太山に登封し、事畢はりて、乃ち下る。是の日、山上の雲気、宮闕を成し、百姓皆之を見る）とあり、雲が宮闕の形を成し、多くの者がそれを目撃したと描写されている。そこで、『封禪儀記』「建武三十二年、……車駕十九日之山虞、國家居停、百官布野。此日山上雲氣成宮闕、百官並見之。二十一日夕牲時、白氣竟一丈、東南極望致濃厚。時天清和無雲。瑞命篇岱嶽之瑞、以日爲應也」（車駕して十九日に山虞に之き、國家居停し、百官、野に布く。此の日、山上の雲気、宮闕を成し、百官並に之を見る。二十一日、夕牲の時、白

気、寛さ一丈、東南の極望に濃厚に致る。時に天、清和にして雲無し。瑞命篇、岱嶽の瑞、日を以て應と為すなり）によると、十九日には雲が生じ、二十一日には天が晴れ渡り雲はなかったという詳細な描写がある。このように、当日（または封禅期間中）の天候について、『論衡』は「晏然として雲なかった」、『後漢紀』と『封禪儀記』では「雲が発生し宮闕の形を成した」とあり相違する。

つまり、『論衡』には「晴天無雲」を瑞兆とし、『後漢紀』と『封禪儀記』には「雲気成宮闕」という現象を吉兆としている。両者の瑞兆の扱い方の相違が、史料の性格を際立たせている。

次に年号について、『論衡』全体では建武という年号が継続して使用されている。黄暉の考察によれば[10]、封禅の行われた年は「建武三十二年（＝中元元年）」に他ならないが、史料によって表記が異なる。『後漢書』本紀には建武は三十一年で終わり、翌年から「中元」に改元された。『後漢書』祭祀上には明確に「建武三十二年＝建武中元元年」と明記されている。尊楗閣碑や『蜀郡治道記』などは、「建武中元二年」と表記され。中元に改元されても「建武」の冠称が残っている。『漢官儀』には中元元年の事績は「建武」の一部と見なされる。要するに、このような元号の表記揺れは、改元移行期における習慣によるものであり、実際は同じ年を指している。

また、例外についても確認しておきたい。『論衡』講瑞篇にいう。

人見叔梁紇、不知孔子父也。見伯魚、不知孔子之子也。張湯之父五尺、湯長八尺、湯孫長六尺。孝宣鳳皇高五尺、所従生鳥或時高二尺、後所生之鳥或時高一尺、安得常種。

人、叔梁紇を見るも、孔子の父たるを知らず。伯魚を見るも、孔子の子たるを知らず。張湯の父は五尺、湯の長さは八尺、湯の孫の長さは六尺なり。孝宣の時、鳳皇の高さ五尺、従りて生ずる所の鳥、或いは時に高さ二尺、後に生ずる所の鳥、或いは時に高さ一尺なり。安んぞ常たる種を得んや。

劉盼遂や楊樹達は、「張湯」という名前は、実は「張蒼」の誤記としている[11]。というのも、「蒼」と「湯」は発音が似ていて、王充は書籍を持っておらず、市場で借りて読んで記録したので、間違えた可能性が高いからとしている。実際、『史記』[12]や『漢書』[13]には張湯の話は出てこないが、張蒼の父については「身長が五尺に満たなかった」と書かれている。ところが、王充の記述では「五尺」となっていて、ここには何らかの意図があったのではないかと考えられる。

『睡虎地秦簡』倉律にいう。

隸臣欲以人丁粼者二人贖、許之。其老當免老、小高五尺以下及隸妾欲以丁粼者一人贖、許之。贖者皆以男子、以其贖為隸臣。女子操敗紅及服者、不得贖。邊縣者、復數其縣。

隸臣、人の、丁粼なる者二人を以て贖（あがな）はんと欲すれば、之を許す。其の老なるものは當に免老とすべき、小さきこと高さ五尺以下なるもの、及び隸妾は、丁粼なる者の一人を以て贖はんと

欲すれば、之を許す。贖ふ者は皆男子を以てし、その贖を以て隷臣と為す。女子の跪紅を操り服するに及ぶ者は、贖ふを得ず。邊縣なる者は、復た其の縣を數ふ。

これによれば、隷臣（奴隷身分の者）が身体の丈夫な男子二人を身代わりとして差し出すことで、自らを買い戻すことを望む場合、それは許可される。ただし、年老いた者は免老とされる。五尺以下の者や隷妾（女性奴隷）については、身体の丈夫な男子一人を差し出すことで買い戻しが許可される。

つまり、「五尺」は法律上、寛容の基準とされていて、それ以下は非標準とみなされていたと考えられる。漢の時代にもこの「五尺」という基準が継承されていたとすれば、「五尺未満」は単なる小柄というより、労働能力の不足と見なされていた可能性がある。

改めて前述した講瑞篇の原文を確認すると、「見た目では人の価値は判断できない」ということが主題となっている。たとえば、「人見叔梁紇、不知孔子父也。見伯魚、不知孔子之子也」といったことがあり、さらに「張湯の父は五尺、本人は八尺、孫は六尺」とあり、世代によって身体的特徴に差があることも語られている。こうした文脈を踏まえると、王充はあえて『史記』や『漢書』に記録された「不満五尺」というのを取らず「五尺」と記したのも考えられる、「凡人からでも賢人が出る」という王充の主張により適っているからである。要するに、ここでは単なる誤記のほかに王充はあえて改変した可能性も十分あり得るのである。

四、滬湖出黄金

『後漢書』明帝紀は、「是歳、滬湖出黄金、廬江太守」という一文のみで、永平十一年（六十八年）の巣湖出黄金事件を簡潔について記している。一方、『論衡』驗符篇では、この出来事がきわめて詳細に描写している。

永平十一年、廬江皖侯國民際有湖。皖民小男曰陳爵、陳挺、年皆十歳以上、相與釣於湖涯。挺先釣、爵後往。爵問挺曰、釣寧得乎。挺曰、得。爵即歸取竿綸。去挺四十歩所、見湖涯有酒罇、色正黄、沒水中。爵以為銅也、渉水取之、滑重不能舉。挺望見、號曰、何取。爵曰、是有銅、不能舉也。挺往助之、渉水未持、罇頓衍更為盤盤、動行入深淵中、復不見。挺、爵留顧、見如錢等、正黄、數百千枝、即共掇擁、各得滿手、走、歸示其家。爵父國、故免吏、字君賢、驚曰、安所得此。爵言其狀。君賢曰、此黄金也。即馳與爵俱往、到金處、水中尚多。賢自渉水掇取。爵、挺鄰伍並聞、俱競採之、合得十餘斤。

永平十一年、廬江の皖侯國の［民］[14]際に湖有り。皖民の小男陳爵、陳挺と曰ひ、年皆十歳以上、相ひ與に湖涯に釣す。挺、先づ釣し、爵、後に往く。爵、挺に問ひて曰はく、「釣すも寧んぞ得んや」と。挺曰はく、「得」と。爵即ち歸りて竿綸を取る。挺の四十歩去る所、湖涯に酒罇有り、色正黄にして、水中に沒するを見る。爵以て銅と為すや、水を渉りて之を取らんとするも、

滑りて重くて舉ぐる能はず。挺、望見し、號して曰はく、「何をか取る」と。爵曰はく、「是に銅有るも、舉ぐる能はざるなり」と。挺、往きて之を助け、水を渉るも未だ持せず、鐏は頓衍して更に盟盤と為り、動行して深淵の中に入り、復た見えず。挺、爵留顧するに、錢等の如き、正黄なる、數百千枚（枝）[15]を見、即ち共に掇摭（摝）[16]し、各々手に満たすを得、走り、歸りて其の家に示す。爵の父國は、故免吏、字は君賢、驚きて曰はく、安れの所にか此を得ん」と。爵、其の狀を言ふ。君賢曰はく、「此れ黄金なり」と。即ち馳せて爵と俱に往き、金の處に到り、水中に尚ほ多し。賢自ら水を渉りて掇取す。爵、挺の鄰伍並びに聞き、俱に競ひて之を採り、合せて十餘斤を得。

『論衡』によれば、廬江郡皖侯国の少年陳爵・陳挺が湖畔で釣りをしていた際、陳爵が水中に酒壺のような物体を発見した。引き上げようとするも重く、陳挺が手を貸したところ、その壺は深淵に沈み、代わって多数の黄金色の欠片が現れた。二人がこれを拾って持ち帰ったという。陳爵の父・陳君賢が黄金と見抜き、現場に戻って回収した。さらに近隣の住民も加わり、合計十余斤が得られたという。この記事は、発見者の名前、金塊の形状や色彩、数量などが極めて具体的に記され、事件の全貌を詳細に再構成することできる。

続いて、事件の後半の記録を確認しよう。

賢自言於相、相言太守。太守遣吏收取、遣門下掾程躬奉獻、具言得金狀。詔書曰、如章則可。不如章、有正法。躬奉詔書、歸示太守。太守以下、思省詔書、以為疑隱言之不實、苟飾美也、即復因卻上得黄金實狀如前章。事寢。十二年、賢等上書曰、賢等得金湖水中、郡牧獻訖今不得直。詔書下廬江、上不畀賢等金直狀。郡上、賢等所採金、自官湖水、非賢等私瀆、故不與直。十二年、詔書曰、視時金價、畀賢等金直。

賢、自ら相に言ひ、相は太守に言ふ。太守、吏をして收取せしめ、門下の掾程躬をして奉獻せしめ、具に金を得るの狀を言ふ。詔書に曰はく、「章の如くならば則ち可。章の如くならずんば、正法あり」と。躬書詔を奉じ、歸りて太守に示す。太守以下、詔書を思省し、以て隱して之を言ふこと實ならず、苟くも美を飾るを疑ふと為すや、即ち復た因りて卻つて黄金を得るの實狀の前章の如きを上り。事寢まず。十二年、賢等上書して曰はく、「賢等、湖水の中に金を得、郡牧獻じて訖るも金（今）[17]直を得ず。詔書、廬江に下り、賢等に金の直を畀へざるの狀を上れと。郡、「賢等の採る所の金は、官の湖水自りし、賢等の私瀆に非ず、故に直を與へず」と上る。十二年、詔書して曰はく、「時の金價を視て、賢等に金の直を畀へよ」と。

陳君賢はこのことをまず郡の相に、次いで太守に報告した。太守は官吏を派遣して現地調査を行い、門下掾の程躬に命じて黄金を奉献させるとともに、発見経緯を記した報告書を朝廷に提出した。詔書のやり取りの中で、朝廷側は初報告の内容を疑い、事実確認を再

要求した結果、再調査報告が提出された。その後、事件は一旦放置されたが、翌年になって陳君賢らは改めて金直の支給を求め、最終的に詔により時価で支払われることとなった。

このように、驗符篇には地方から中央への情報伝達と報告書の往復過程が極めて具体的に記されている。講瑞篇・宣漢篇・恢國篇では上奏のやり取りが詳述されないが、『漢書』、『後漢書』の記述によれば、地方は出現した祥瑞を中央に報告する義務があり[18]、その際の上書は政府公文として定型化された体裁を有していたと考えられる。したがって、巣湖出黄金事件に関する上書もまた、正式な公文形式に基づき作成されたものであったと推測される。

王充は『論衡』自紀篇において、自らの官歴を以下のように記している。

○光武帝・建武二十二年（四十八年）　二十二歳
在縣位至掾功曹、在都尉府位亦掾功曹、在太守為列掾五官功曹行事。縣に在りては位、掾功曹に至り、都尉府に在りては位も亦た掾功曹に至り、太守に在りては列して掾五官功曹行事と為る。

なお、功曹は郡国の属官で、人事推薦・功労記録・文書事務を担当する[19]。

○章帝・元和三年（八十六年）　六十歳
充以元和三年徙家辟。詣揚州部丹陽、九江、廬江。
充は元和三年以て家を徙し辟けて、揚州部丹陽、九江、廬江に詣る

なお、従事は州刺史の属官で、文書管理・監察業務を司る[20]。

○章帝・章和元年（八十七年）　六十一歳
後入為治中、材小任大、職在刺割、
後に入りて治中と為り、材小くも任大し、職は刺割に在り。

なお、治中従事史は刺史府の中核で、各曹の文書を統括する[21]。

これらの官職はいずれも文書の収受・作成・伝達に深く関わるものであった。特に従事・治中は州レベルでの監察と記録管理を担当し、郡国から上奏された文書や事件記録に直接触れる立場であった。

巣湖は廬江郡に属し、廬江郡は揚州刺史部の管轄であった。王充は元和三年に揚州部の従事となり、丹陽・九江・廬江を巡歴している。事件発生（永平十一年）から約二十年後であったが、州治に保存される上奏文や事件記録（『後漢書』百官志の「功曹史」・「従事」職掌参照）を閲覧する機会はあったと考えられる。

また、重要事件の記録は蘭台などの中央文書庫にも保存され、閲覧には高位官の許可が必要であったが、州刺史部の従事・治中として管内文書を管理した王充は、管轄区域で発生した事件報告の原文や副本を閲覧する可能性が高い。

『論衡』驗符篇における巣湖出黄金事件の精緻な叙述は、官文書に基づいた再構成である可能性が高い。王充の長年にわたる功曹・従事・治中としての経歴があり、官文書の照合という実務経験を通じて、事実経過を詳細に記録することができたものと思われる。

おわりに

本考察においては、『論衡』四篇に見られる記述を正史における該当箇所と比較し、その差異を明らかにした。その結果、正史と異同を示す記述の存在は、『論衡』が史実を直接的に再現するというよりも、著者の取材・取捨選択の視点を強く反映していることを示している。すなわち、正史との齟齬は必ずしも誤りではなく、むしろ王充の思考と評価軸を示すものと捉えられる。特に、甘露降五県・延壽萬歳宮・鳳凰下彭城といった事例は、正史と異なる視点を与えている。また、巣湖出黄金のような詳細な記述は、『論衡』の史料的な個性を表している。以上の比較を通じて、『論衡』が同時代の正史に記された事象に対し、独自の選択と解釈を施している事例を確認することができた。

（りょう　れい・中国文化論研究室）

注

1 劉盼遂『論衡集解』「王氏多見古書、往往為後代所不傳。故論衡所言故事、多有不知其出典者。如書虚篇云「吳王夫差殺伍子胥、煮之於鑊」。案周秦、兩漢現存之書、絕不見子胥鑊煮之事。惟『論衡』此篇所言、及命義篇云「屈平、子胥、楚放其身、吳烹其屍」。刺孟篇云「比乾剖、子胥烹、子路醢」、是必王氏於子胥伏鼎一事、別有承襲、非出壁造、可知矣。兪曲園未能通較前後、遂詆為仲任誤記、蓋難免汚古之失」

2 黄暉『論衡校釋』「仲任述漢事、多不同漢書。班著漢書、與王作論衡同時、仲任不得據以為文。據終軍傳改此、失之」

3 たとえば、杨妍静氏「試論『論衡』的文献価値」（『図書館界』第一期、二〇一一年」、孫焯冉氏「兩個高句麗及東明神話辨析-『三國史記』與『論衡』吉驗篇的史料辨析（『域外漢籍研究集刊』第十八辑、二〇一九年）

4 『漢書』は前漢の正史。班固が中心となり編纂。もとを父・班彪が『史記』に続く歴史書として開始。班固は獄中の中断後、明帝の勅命で八十年頃に官選史書として完成。没後、妹・班昭や馬続が補筆し現在の形に。『後漢書』は范曄が中心となり先行史料（『東観漢記』『後漢紀』等）を取捨選択して編纂。本紀・列伝は完成したが志は未完。南朝梁の劉昭が司馬彪『続漢書』の志を併合、注釈を付して現在の形に。後漢末期の事績は『三国志』と重複するが、『三国志』は一世紀半先行。『東観漢記』は同時代編纂のため記述に制約・一貫性の欠如があり、民間の単独史家による『後漢書』編纂が試みられた。本考察では、信憑性が認められる『漢書』『後漢書』のみを対象とする。

5 龔自珍『瓦錄序』「漢氏宮殿之名、不可得而簿錄也。其瓦黝以溫、其文字多哀麗傷心者、觀其體、皆深習八體六技者之所為、非盡陶師之為也。夫後漢祠墓之刻碑、皆石工書。而前漢瓦文、乃兼大小篆。嘻、可以識炎運之西隆、窺劉祚之東替也矣。予所錄五十有五。曰長生未央……曰延年益壽。曰延壽萬歳。……其諸家箸錄有之、而予未見者三、曰衛屯。曰掩依中庭。曰黄山」

6 黄暉案：秦漢瓦當文字載有延壽萬歳瓦當、即此宮此物也。或以為萬歳殿或延壽觀瓦、據此文足證其非。

7 宣帝時、鳳皇下彭城、彭城以聞。宣帝詔侍中宋翁一。翁一曰、鳳皇當下京師、集於天子之郊、乃遠下彭城、不可收、與無下等。宣帝曰、方今天下合為一家、下彭城與京師等耳、何令可與無下等乎。令左右通經者、語難翁一。翁一窮、免冠叩頭謝。

8 『漢書』宣帝紀（神爵元年）「朕承宗廟、戰戰慄栗、惟萬事統、未燭厥

理。乃元康四年嘉穀、玄稷降于郡國、神爵仍集、金芝九莖產於函德殿銅池中、九真獻奇獸、南郡獲白虎、威鳳為寶。朕之不明、震於珍物、飭躬齋精、祈為百姓。……朕之不德、懼不能任。其以五年為神爵元年。賜天下勤事吏爵二級、民一級、女子百戶牛酒、鰥寡孤獨、高年帛。所振貸物勿收。行所過毋出田租」

趙翼『廿二史劄記』「按宣帝當武帝用兵勞擾之後、昭帝以來與民休息、天下和樂。章帝承明帝之吏治肅清、太平日久、故宜皆有此瑞。然抑何鳳凰之多耶。觀宣帝紀年以神爵、五鳳、黃龍等為號。章帝亦詔曰、乃者鸞鳳仍集、麟龍並臻、甘露宵降、嘉谷滋生。似亦明其得意者、得無二帝本喜符瑞、而臣下遂附會其事耶」

黃暉案：建武三十二年、即中元元年。範史本紀、建武止三十一年。次年改為中元、直書為中元元年。尊楗閣碑、及『蜀郡治道記』並云「建武中元二年是隨別為中元、猶冠以建武。又後漢書祭祀志載封禪後赦天下詔、言以建武三十二年為建武中元元年。故『漢官儀』以中元元年事屬之建武。『後漢書』祭祀志注「岱嶽之瑞、以日為應」時天清無雲、則日應也、故云。

劉盼遂案：楊樹達云、張湯為張蒼之誤。史、漢湯傳不見此事、惟史記、漢書任敖傳記張蒼父長不滿五尺、蒼長八尺、蒼子復長八尺、及孫類長六尺余。則此湯為蒼誤無疑。蓋仲任家貧無書、從市肆借讀、又蒼、湯音近、故誤記蒼為湯爾。

『史記』張丞相列傳「初、張蒼父長不滿五尺、及生蒼、蒼長八尺餘、為侯、丞相」

『漢書』張周趙任申屠傳「初蒼父長不滿五尺、蒼長八尺餘、蒼子復長八尺、及孫類長六尺餘」

「民」は下句の「皖民」に渉って衍す、『太平廣記』四〇〇引いて無し。（孫人和）

「枝」は「枚」の形近の誤り、「枚」に作るべし。（孫人和）

『太平廣記』引いて並びに「掇撫」に作る、是なり。（孫人和）

「今」は「金」と作るべし。（吳承仕）

『漢書』郊祀志に「自高祖以來、祥瑞屢見、皆有以告也」とあり、『後漢書』五行志に「光武中興、祥瑞屢見、郡國輒以上聞」とある。

『後漢書』百官志に「有功曹史、主選署功勞」とある。また、『通典』職官に「功曹書佐一人、主選用、漢制也。其司隸功曹從事史、兼錄眾事」とある。

『續漢志』に「郡國有從事、主督文書、察主非法、皆州自辟除、故通為百石」とある。

『通典』職官に「治中從事史一人、居中治事、主眾曹文書、漢制也」とある。

10.14943/rjgshhs.25.r 13

改作する安部公房「友達」

――その人物造形と共同体概念を巡って――

李　楚妍

要旨

自作の小説「闖入者」（一九五一）に基づき、安部公房は戯曲「友達」（一九六七）を書き上げた。その後の一九七四年五月・六月に安部は「友達」の改訂版を安部公房スタジオで上演し、一九八七年八月に改訂後の「友達」が文庫化された。「友達」の作品群を論じた先行研究において、「友達」と「闖入者」との比較、作品が発表された当時の時代背景、主人公と家族の人物像などの問題点はよく取り上げられてきた。

本稿においては、まず「友達」の改作過程を具体的に考察し、三作品の相違点を整理する。先行研究で着目されなかった「友達」改訂版の上演台本を取り上げ、戯曲の内容と安部公房スタジオとの関係性を明示する。次に作品の時代背景と安部自身の活動を視野にいれ、「闖入者」と「友達」の作者の二人は敵という安部の発言の意味を解明し、作品と安部の思想変容との関連性を明確にする。主人公、三男、次女の人物像をも分析する。主人公は気弱な人間でなく、三男と次女とは対照的で作品の二つの主題を前面に押し出している。三男と次女の物語から彼らの共同体観が読み取れ、作品における共同体への問いと繋がっている。最後には「友達」の共同体概念について探究し、家族は改訂を経て善意的になったが暴力性を持っており、共同体概念自体が脆弱性を持つと指摘する。

「友達」は改訂を経て共同体概念を相対化し、共同体についての再考を読み手に求めている。安部は頻りに自作を改稿する文学者であり、その改稿の理由は、安部が一定の枠組みに縛られずに思索し続けていることにある。

はじめに

一九六七年九月に安部公房の戯曲「友達」[1]（一九六七）は第三回谷崎潤一郎賞を受賞した。受賞作ではあるが、ほかの安部の名作と比べ「友達」の作品群に関する先行研究は少なく、照明を当てられていない部分が多い。

「『友達』について」（一九六七）において、安部は「この戯曲は、小説『闖入者』（一九五一年）をもとにして書いた」[2]と述べ、「友達」と自作の「闖入者」[3]との関連性に言及した。一九六七年三月に「友達」は『文芸』に発表され、同月に青年座において初演された。一九七四年五月・六月に安部は「友達」の改訂版を安部公房スタジオで上演した[4]。一九八七年八月に、改訂後の「友達」は文庫化された[5]。本稿では、特に説明がなければ、新潮社の『安部公房全集』に収録されたテクストを使用する。

「友達」の作品群を論じた先行研究において、「友達」と「闖入者」との比較、作品が発表された当時の時代背景、主人公と家族の人物像などの問題点はよく取り上げられてきた。「友達」が発表された当時に、武井昭夫[6]と羽山英作[7]は「友達」を「闖入者」と比較し、主人公や家族の造形について考察した。その後の一九七二年に、石沢秀二[8]も同じ問題点に注目し、次女の人物像などについて分析した。ただしこの三つの研究において、「友達」の評価や人物造形についての論説はやや画一的で、まだ検討する余地がある。近年の研究としては、友田義行[9]の論文があげられる。友田は「闖入者」と「友達」との比較だけでなく、一九八九年に日本で上映された映画「友達」についても考察したが、「友達」とその改訂版との相違点についてはあまり触れていなかった。

本稿においては、先行研究の問題点を踏まえた上で「闖入者」、「友達」、「友達」改訂版という「友達」関係の三作品を中心に考察し、三作品における人物造形や共同体などの問題点を解明する[10]。三男と次女の物語から彼らの共同体観が読み取れ、作品における共同体概念への問いと繋がっている。まず「友達」の改作過程を整理し、三作品の相違点を明らかにする。「友達」改訂版が上演された当時の上演台本の内容をも視野に入れ、安部公房スタジオの事情と関連づけながら考察を行う。次に「友達」の改作と安部自身の共同体観の変容との関連性を検討し、「友達」の作品群の位置づけを明確にする。さらに、作品の人物造形を具体的に分析し、主人公、三男、次女についての新しい読解を提示する。最後には「友達」とその改訂版における共同体の捉え方について探究し、安部の改作の意義を示す。

一、「友達」の改作過程

まず「闖入者」と「友達」を比較する。

二つの作品はともに主人公の男と闖入家族との物語を描いたが、主人公と家族の造形も結末も異なっている。「闖入者」に登場した暴力的で残酷な家族と比べ、「友達」に登場した家族は主人公に好意

を抱き、善良なように見えている。「闖入者」の主人公は最後まで家族に激しく反抗し、ビラをたくさんまき散らしたが、脅迫と餓えに疲れはて死んでしまう。それに対し、「友達」の主人公は家族に檻に閉じ込められ、次女に毒殺される。先行研究では、特に主人公の造形が注目された。武井昭夫は一九六七年に発表された論評において、「友達」の主人公は「後退につぐ後退、譲歩につぐ譲歩を続け」、「闖入家族の奴隷となり、はてはあっさりと毒殺されてしまう。K君の敢闘精神など、ここには微塵も見られない」[11]と批判した。この観点は多くの研究に踏襲された。羽山、石沢、辻合[12]なども「友達」の主人公を気弱な人間として捉え、主人公を批判した。しかし、主人公はそれほど気弱な人間ではないと考えられる。第三章でそれについて詳しく分析する。

「友達」と「友達」改訂版との最大の相違点は登場人物の変更である。「友達」改訂版において家族の祖母は祖父に変り、三男が新しく登場する。「友達」に登場した元週刊誌のトップ屋は改訂版に現れず、代わりに婚約者の兄が登場する。辻合は「戯曲が改訂されたといっても、もちろんその主題までもが変ったわけではない。筋の展開を含めて、これは正しく、われわれの知る、安部公房作『友達』である」[13]と述べた。友田も「物語の筋は改訂前とほぼ同じである」[14]と述べ、改訂前後の「友達」の相違点を具体的に論じていなかった。「友達」のほかの先行研究においても、「友達」とその改訂版の具体的な比較は見受けられない。

しかし、「友達」と「友達」改訂版は形式と内容が異なっている以上、その主題も変容するはずであり、二つのバージョンの相違点に照明を当てるべきではないだろうか。作品の内容面について言うと、改訂版に新しく登場する三男は重要な位置づけを持ち、改訂版の主題にまで影響を及ぼしたと考えられる。また、改訂版において家族は全体としてより礼儀正しく好意的になり、共同体そのものが問われている。この二つの相違点については後でさらに詳しく考察する。

作品の形式だけを見ても、改訂前後の「友達」はかなり異なっていると言える。改訂する前の「友達」が谷崎潤一郎賞を受賞した際に、選考委員のなかで三島由紀夫のようにこの作品を賞賛する文学者もいれば、舟橋聖一のように作品の短所を指摘する文学者もいた。三島は「友達」が「共同体原理のやさしく甘い残虐さを描き」、ダイヤローグは抜群で、構成的に間然するところのない戯曲だと「友達」を高く評価した[15]。それに対し舟橋は「作者の才筆が走りすぎ、余計な饒舌にわたってゐる部分もある」[16]と批判した。

舟橋の批判した通り、「友達」は黒い喜劇という側面を持ち、茶番のような場面が数多く存在している。特に家族内の喧嘩の一部が荒唐無稽で、観客を興ざめさせる「余計な饒舌」のところは多い。しかし改訂後の「友達」ではそのような短所がかなり改善され、言葉遣いはより簡潔明瞭になった。例えば、改訂前の作品では一幕と二幕の幕間において管理人が観客にビラをくばり歩き、主人公を助けない理由を説明する場面があったが、改訂版ではこの内容は完全に削除された。猫談義などの家族の冗長な喧嘩の部分も多く削減され

た。このような改訂によって、「友達」はさらに読みやすくなった。ただし、「友達」は戯曲として上演されたので、その改訂は安部公房スタジオの事情とも関係すると思われる。この辺について、友田は「主に上演劇団の配役上の都合で登場人物が変更された」[17]と指摘したが、その論拠は挙げられていない。実際、安部自身はこのことに言及していた。

> 『友達』の稽古も、いよいよ大詰をむかえ、台本の手直しも完了した。大半は、配役の都合上、祖母を祖父に変えたていどの改訂だが、一部かなりの変更を加えたところもある。その一例が『三男』の登場だ。[18]

安部のこの言葉から見れば、「友達」の改訂が安部公房スタジオの事情と関係するのは確かである。

「友達」（一九六七）、「友達」改訂版の上演台本（一九七四）、そして「友達」改訂版の文庫版（一九八七）を比較すると、さらに具体的な例が挙げられる。「友達」の管理人は女性であるが、「友達」改訂版の上演台本において管理人が男性に変更され、文庫版にはまた女性に戻った。このことは「配役の都合」と関わると考えられる。「友達」が上演されたときに管理人の役にふさわしい女性の俳優が見つからなかったので、管理人が男性に変更されたのだろう。

また、「友達」と「友達」改訂版の文庫本において次女が大根の皮を首にまくというシーンはあるが、上演台本には大根の皮が現れていない。大根の皮という道具を扱うのは困難なので、上演の時に割愛されたのだろう。さらに、「友達」と「友達」改訂版の文庫版の結末近くにおいて、檻に監禁された主人公の不安や孤独を表わし、彼の姿勢を生き生きと描いた一節があるが、上演台本においてそれは省略され、「舞台、暗黒の中で音楽」という一言に変更された。作品の分量を減らす必要があるため、安部はこの節を削除したのかもしれない。あるいは、舞台のスピーカーは「犬の遠吠え」をうまく放送できず、演出の出来栄えが良くないから変更せざるを得ないという可能性も存在する。

「友達」改訂版ではかなり細かい改稿が施され、人物のセリフとト書きなどにも修正が加えられた。特に長男、男、婚約者が公園で会話する場面において修正が頻繁に行われた。次の①は「友達」からの引用で、②は「友達」改訂版の上演台本からの引用で、傍線部は修正が行われた箇所である。

> ①男　（鋭く）何をしているんだ！
> 長　男　（始めて気付いたように、男を振り向くと、狼狽どころか、旧友に出会いでもしたような笑顔を浮べ）君、遅刻じゃないか、いけないねえ。
> 男　（女と、長男とを、見くらべながら、荒々しく進み出て）いったい、どういうことなんだ！
> 婚約者　（後ろめたさを、隠しきれず）ぜんぜん、偶然だったのよ……

長　男　ただし、当方としてはすばらしき必然のめぐり合いでしたな。

②男　（鋭く）何をしているんだ！

長　男　（平然と）君、遅刻じゃないか、いけないねえ。

男　どういう事なんだ！

婚約者　偶然なのよ。

長　男　そう、偶然。いかなる必然も、しょせん意識された偶然……じゃなかったっけ？

長男のト書きが大幅に削減され、男と婚約者のト書きは削除された。安部は俳優たちにより自由に人物を演じてもらい、作品の意味を増幅させるために、このような改変を行ったのだろう。改訂後の長男の最後のセリフも意味深くなった。長男は必然を強調するのではなく、必然を否定し偶然の普遍性を強調するようになり、彼の人物像はより複雑になっている。

以上のように「闖入者」は「友達」改訂版へと変容し、安部の様々な修正によって洗練された作品となった。その修正は作品自体を改善するためだけでなく、上演された際の安部公房スタジオの事情とも関連している。

二、「友達」の作品群から見た安部の思想変容

「友達」の作品群から安部自身の思想変容も窺える。

本稿の冒頭で引用していた「『友達』について」では、安部は次のように述べている。（「闖入者」と「友達」の）「テーマも、プロットも、まったくちがっている。もし、脚色と原作が同一人でなかったら、二人は生涯、許し合えない敵になってしまうだろう。私が、私自身であったことに感謝する」[19]。しかし、「闖入者」と「友達」のテーマは異なっているが、作者の「二人」が互いに許し合えないとはまだ言えない。安部のこの言葉の意味を解くために、彼の当時の活動や時代背景に触れる必要がある。

先行研究において、武井は「闖入者」の家族がネオ・ファシズムを表徴すると述べた[20]。それに対し羽山はその家族を、「政治的支配者に成りあがって居すわる保守的暴力と、彼らと結托するアメリカ占領軍」の象徴として読んだ[21]。また、友田は「闖入者」の家族がGHQによる占領期の表象と読めると指摘した[22]。確かに、「闖入者」の家族はアメリカ占領軍のイメージに近い。彼らは突然民主主義を説きながら主人公の家に闖入する赤の他人で、外国の軍隊を想起する。安部の当時の政治的立場も、この解釈を裏付ける。「闖入者」関係の先行研究において作品と安部の当時の活動と関連づける論文はないようだが、坂堅太は安部の一九五〇年代頃の運動について考察を行った。坂によると、一九五〇年頃から、安部の運動には政治的・マルクス主義的な〈革命〉の要素が強まっていく。安部の入党前後、

日本共産党はコミンフォルム批判に端を発する五〇年問題の影響により、急進的な反米民族主義へと旋回していた[23]。

「闖入者」が発表された一九五一年に、安部は日本共産党に加入した。安部の入党から見れば、彼は日本共産党が提唱した民族主義に共感した可能性が大きい。当時の彼は共産主義に惹かれ、民族主義に接近する傾向が強かった。このような民族主義的な作者が書いた「闖入者」に、アメリカ占領軍の表象のような闖入家族が登場するのもおかしくないだろう。

ただし、安部は共産主義や民族主義から影響を受けたものの、それらの思想に完全に縛られていない。一九五二年一月の「私はかく生きる」というアンケートへの回答では、安部は「私は何も信ぜず、何も頼りにせず、なんにも希望をもちません。とはいえ、決して不安でも絶望でもないのです」[24]と述べている。安部が述べたとおり、彼の思想はいつも変容し続けており、決して同じ枠組みに囚われてはいない。

一九五六年に安部は東欧に行き、共産主義についての再考を余儀なくされた。帰国後、彼の共産主義への関心は徐々に薄くなっていく。『砂の女』が発表された一九六二年に、安部は日本共産党から除名された。「友達」改訂版が発表された一九六七年には、安部の関心はすでに階級や民族から共同体の一般性に移っていた。一九六七年一月に発表された「都市について」では、安部は次のように述べている。

だが、隣人を受附けない、他者の組織の孤独に耐えられなくなったとき……無限の競争地獄に耐えられなくなったとき……はたして人は、まっすぐ死におもむくものだろうか。そんなことはない。人々はむしろ、偽の共同体にしがみつこうとする。（中略）おかげで現代の都市は、その冷酷な本質にもかかわらず、現象的にはむしろ、疑似共同体のスーパー・マーケットの観さえ呈している。[25]

すなわち、人間はよく共同体にしがみつくが、共同体自体が絶えず変容しているので、現代の都市に存在するのはむしろ疑似共同体である。このことは、「友達」に潜在する共同体概念の解体と共通している。「闖入者」の民族主義的な作者と対照的に、「友達」の作者は民族や国家の枠組みから脱出し、共同体の根底に潜む一般的なものを問い直す。この意味では、二人の作者はなるほど「許し合えない敵」であろう。

「友達」改訂版が上演された後の一九七八年に、安部はインタビュー「都市への回路」の中でさらに次のように述べている。

共同体はいくら否定したって消えるものではない。消えないからこそ、絶対に拒絶する必要もあるんじゃないか。共同体の破壊は、同時に共同体の再生産でもあるわけだからね。永久革命的な言い方になるけど、無限の拒絶に耐え得る共同体でなければ、それを許容することはできないという……[26]

ここでは、安部は自分の共同体観をさらに明確に示している。彼は共同体の永続性を認め、共同体を流動的なものとして捉え、共同体を無限に拒絶するような生き方の可能性を提示している。このような共同体への態度は、「友達」改訂版の三男の態度とかなり類似する。新しい人物である三男の登場は、安部自身の共同体観の更新とも繋がっているのだろう。

三、「友達」の人物造形

「友達」には多様な人物が登場し、そのなかで最も目立っているのは主人公の男、三男、次女の三人である。

前述のとおり、多くの先行研究において「友達」の主人公は気弱な人間で、「闖入者」の主人公のような敢闘精神を持つ人物ではないとされている。果たしてそうなのか。

「闖入者」の主人公の反抗として、主に四つの点が挙げられる。①自分で家族を追い出すこと、②管理人と交番に助けを求めること、③弁護士を訪ねること、④訴えのビラを貼ったりまき散らしたりすることである。改訂後の「友達」の主人公は①と②を行ったが、改訂前の「友達」の主人公は①と②だけでなく、③も遂行した。「友達」においても「友達」改訂版においても、④の反抗は見られないが、それは主人公の反抗精神が弱いと言うより、むしろ作品の状況設定が本来異なるからである。「友達」の主人公は突然家族に檻に閉じ込められ、翌日すぐ毒殺されるので、彼にはさらに反抗する余地がなかったのだ。

「友達」とその改訂版では、自分の家に居すわる家族に対し、主人公は「もう、一分だって容赦しないからな！」と怒鳴り、善良なように見える家族に気を許さず、必死に家族を追い出そうとしている。家族に哀願したこともあるが、それも家族を追い出すために行われた行為として理解できる。彼の哀願はそれなりに効果的で、それによって家族の態度は柔らかくなる。概して言えば、「友達」の主人公は「闖入者」の主人公ほど敢闘精神を持っていないが、気弱な人間でもない。そもそも主人公を批判し、反抗精神があるかどうかを追究すること自体はそれほど価値のあることではないかもしれない。「友達」関係の三作品において、主人公の反抗の姿勢よりむしろ家族の人物像のほうが興味深く、作品の主題と密接に関わっている。

三男は改訂版に新しく登場する個性的な人物である。三男の人物像を詳しく分析した先行研究はないが、特異な人物で考察する価値がある。和やかな家族に身を置く三男は時折家族に逆らい、主人公にも積極的に接近する。主人公は婚約者に理解を求めたが上手くいかず落ち込んでしまい、この時に三男は「人生には人間の数だけの道があるんだぜ」と述べ、人生の新しい過ごし方を主人公に教える。

三男はかつて友達とある賭けをした。それは大通りで死んだふりをしたら、何分以内に介抱してもらえるかという賭けだった。彼は一〇分以上と賭け、そして六時間二十五分も大通りで死んだふりを続けていた。それ以来彼の世界観は変り、「誰だって、賭のために死んだふりをしている、道端の男なのさ」と考えるようになった。三

男は自分の経験によって共同体の本質を見抜き、共同体が持つ残酷さ[27]を実感した。彼が持つ家族への不信感も、ここから生まれたと考えられる。その不思議な家族の一員である彼は、誰よりも共同体に近く、そして誰よりも遠いのだろう。彼がアラブ語の勉強を始めた理由も、家族からの脱出を期待し、異郷に憧れているからではないだろうか。しかし、三男はまだ希望を持っている。彼が主人公に伝えたいのは共同体の残酷さそのものではない。その残酷さを受け入れ自分で能動的に反抗し、ほかの生き方を探すことこそ、彼の哲学である。

次女[28]の共同体に対する態度は三男のそれとは対照的である。先行研究において石沢は「彼女の善は悪そのものとなる。この二面性が存在の両義性となるとき、次女は現代の狂信的巫女の役割を担う」[29]と指摘した。次女は「狂信的巫女」だと言えないかもしれないが、善と悪の両面性を持つことは確かである。特に主人公を毒殺する際の彼女の言動から、この両面性が顕著に現れる。石沢の観点によると、共同体にいることこそ幸福の原理で、次女はその原理を信じているから、善意が悪に変貌する。換言すれば、主人公の男が家族に反抗し共同体に入ることを拒んでしまい、次女はそのような男の裏切りを許せないから男を殺したのだ。しかし、次女の行動原理はそれほど単純なのだろうか。

まず次女の犯行過程を確認しよう。男が檻に閉じ込められた翌日に、次女は目が覚めた男に食事を勧める。この日次女以外の家族はほとんど家にいない。目撃者が少ないのは犯行に有利なので、彼女はこの日を選んだのだろう。男に与えたおかずは塩辛いということも彼女の計画の一環と思われる。次女はおかずに意図的に多くの塩を入れていたのかもしれない。そうしたら男は自然に甘い牛乳を飲みたくなり、犯罪がスムーズに成功する。毒が入った牛乳を飲み死んだ男を見て、次女はすすり泣く。次男は次女の様子を見て「なんだ、おまえ、またやってしまったのか！」と述べる。次男の話から見ると、次女は以前にも同じような犯罪を行い、犯罪を行った経験がある。以上のことから見れば、次女の犯罪は衝動に駆られた行為ではなく、計画的な行為と言えよう。

では、次女の動機は何だろうか。男に牛乳を与える前に、次女は「変だなあ。私の頭の中は、いつもあなたのことでいっぱい」と言い、男への恋心をほのめかす。彼女は男が共同体から脱出したいことを「よく分って」おり、男の心「が遠くに飛んで行ってしま」い、周囲の物事が「だんだん氷細工みたいに、融けはじめているんじゃない」と述べる。それに対し、男は「よく分るね」と答える。ここで次女が述べているのは共同体から逸脱する人間の体験と考えられる。彼女のこの話から見ると、彼女も昔共同体を離れようとし苦痛を覚えた。その苦痛は耐えられるものではないと理解できたので、彼女は共同体での生活を選んだだろう。その裏付けとして次女のこの言葉が挙げられる。男が共同体にしがみつくことの意義を理解できず反抗する際に、次女は次のように言っている。

でも、逃げ出すってことは、行方不明になってしまうことな

のよ。あなたが想像している以上に、恐ろしいことなのよ。分っていながら、あなたを、みすみすそんな危険にさらすだなんて、そんなこと、出来るわけがないじゃないの。

人間の共同体は永続的で、それに逆らうことは不可能だと次女はよく分っている。共同体に戻ることを拒否する限り、男は絶望と苦痛に浸ったまま死を迎えるしかない。その絶望と苦痛を取り除くために、次女は男を殺すことにする。次女の行動は能動的で、自分と家族のためではなく、恋する男のために彼を殺すのである。残虐な行為ではあるが、次女にとってこれ以外男を救う方法はない。男が死んだ後で次女は彼に「さからいさえしなければ、私たちなんか、ただの世間にしかすぎなかったのに」と言い、悲しくすすり泣く。次女は男に、自分と同じように共同体に順応すれば何の問題もなく普通に暮らせると伝えたかったが、男はそれを理解できず悲惨な結末を迎えてしまう。

三男も次女も共同体には逆らえないと分かっているが、相反する道を選ぶ。三男は永遠に共同体に対抗することを選ぶのに対して、次女は永遠に共同体に順応することを選ぶ。三男が希望を語り、次女は絶望を語り、二人が作品の二つの相反する主題を前面に押し出す。この二つの主題は相反するように見えるが、実際には表裏一体でもあり、概念自体が相対化される共同体の存在を読み手に暗示している。

四、「友達」における共同体概念

「友達」改訂版では、共同体概念自体が問われている。前述の通り、改訂版において家族は全体としてより礼儀正しく、男に対して好意的になっている。具体的な例を挙げると以下のようになる。

①男　ふざけるな。そっちがどう思おうと、とにかくここはぼくの部屋なんだ。
長女　当然じゃないの。さもなけりゃあ、あなたがここにいらっしゃるわけないでしょ。
次男　さもなけりゃ、第一、そんなへらず口を、いつまでも黙って聞いていてやったりするもんかい。
次女　およしなさいったら。
次男　これは失礼。ちっとばかり、ふつか酔いなのさ。ちくしょうめ！
②男　ふざけるな。そっちがどう思おうと、とにかくここはぼくの部屋なんだ。
長女　当然じゃないの。さもなけりゃあ、あなたがここにいるわけないでしょ。（笑う）
次男　（嘲笑的な高笑い）
次女　（小声で）およしなさいったら。
次男　ふつか酔いらしいよ、俺。

①の「友達」において、家族に反抗する男に対し長女は「いらっしゃる」という皮肉な表現を使う。②の「友達」改訂版においてそれが「いる」に直され、「(笑う)」というト書きを加えられた。このように、長女の男に対する態度が柔らかくなる。次男の態度についても同様のことが言える。①において次男は男を嘲笑し、「ちくしょうめ」のような罵言を吐く。②においてそれは「(嘲笑的な高笑い)」と変り、罵言も削除された。

男に対する態度だけでなく、改訂版では家族たちの相互の関係も改善された。「友達」において、警察に見離された後で男は引き続き家族を追い出そうとし、家族たちは次のように口論する。

長女　ふん、お上品ぶって。
次女　(がらりと態度を変えて)ひがむな、ひがむな。
父　おいおい、仲間割れや喧嘩は罰金ですよ!

この三行の内容は改訂版に見当たらず、家族内のこの揉め事は消去された。削除だけでなく、改訂版には家族の暖かいシーンも付け加えられた。改訂前の公園のシーンには婚約者、男、長男、末娘だけが登場するが、改訂版において父、母、次男、祖父は登場し、家族たちが静かに「春の名残を心ゆくまで味わ」う。

だがこの家族は主人公の家に闖入し、主人公の意思を無視してしがみつき、最後に主人公を監禁し彼を殺す人間たちで、強い暴力性と危険性を持っている。彼らが礼儀正しくやさしくなるほど、主人公と読み手に恐怖を与える。それに、家族の暴力性と危険性は彼ら独自のものではなく人間の共同体に遍在する性質と考えられ、普遍性を有している[30]。作品のなかでもこの普遍性に言及した箇所がある。主人公の婚約者は兄を呼び闖入家族の問題を解決しようとしたのに、兄は逆に家族に惹かれ家族に加入したがっている。意気込む兄に対し、家族の父は自分たちがしていることはありふれたことで、共同体に入ることは「世間なみの気持を持ってさえいれば、誰もがせずにはいられない」のだと述べる。「友達」改訂版の家族は、人間の共同体の縮図として理解できよう。

「友達」改訂版の家族は全体として普遍性を持つ一方、各々の構成員は強い個別性を有している。家族たちはそれぞれ異様でグロテスクなように見える。例えば奇声を出す末娘、ジャムに拘る祖父、善良なのに男を毒殺する次女など。ここには共同体概念の相対化が見受けられる。すなわち、共同体という概念自体が作られたものと考えられ、「共同体」は本来存在せず、われわれが見ているのは異なる個体にすぎない。「友達」改訂版の家族は共同体を成したように見えるが、読み手としては、家族のそれぞれの構成員のみに注目し、家族を全体として見ないという読み方も可能である。共同体に対し、三男のように反抗するか、次女のように順応するか、作品においてはこの二択しかないようである。しかし、読み手の視点からすれば、そもそも共同体という概念に拘らず、登場人物、しいては現実世界の人間を一人一人の個体として見ることは十分に可能ではないだろうか。共同体概念は、そもそも脆弱性を持っていると言わざ

るを得ない。

このように、「友達」改訂版は家族という疑似共同体を描出し、共同体概念自体が持つ脆弱性を現前させている。作品において家族はある日突然現れ、また突然消えてしまい次の家に侵入する。そのルートは不可解で予測できない。人間社会の様々な共同体もこの家族のように、概念上は脆弱なのに絶えず生成し変転し、暴力性を持つのに人を優しく引き寄せ、世間のどこにも浸透していき、未来永劫に存在している。「友達」改訂版は共同体概念そのものを相対化し、読み手に共同体の再考を求める作品である。

おわりに

本稿においてはまず「友達」の改作過程を具体的に考察し、三作品の相違点を整理した。先行研究で着目されなかった「友達」改訂版の上演台本を取り上げ、戯曲の内容と安部公房スタジオとの関係性を明示した。次に作品の時代背景と安部自身の活動を視野にいれ、「闖入者」と「友達」の作者の二人は敵という安部の発言の意味を解明し、作品と安部の思想変容との関連性を明確にした。主人公、三男、次女の人物像をも分析した。主人公は気弱な人間でなく、三男と次女とは対照的で作品の二つの主題を前面に押し出すと述べた。最後には「友達」の共同体概念について探究し、家族は改訂を経て善意的になったが暴力性を持ち、共同体概念自体が脆弱であると指摘した。

「友達」は改訂を経て共同体概念を相対化し、共同体についての再考を読み手に求めている。「闖入者」において、共同体概念自体はあまり問われず、アメリカ占領軍のような暴力的な共同体への批判が前面に押されていたが、「友達」において、家族は優しく描かれ、共同体の根底に潜む一般的なものが問い直されている。「友達」では次女の共同体への順応が描かれているが、「友達」改訂版では三男という新しい人物が登場し、共同体に対抗する可能性を提示している。順応か対抗か、この図式の成立によって共同体概念自体が浮き彫りになり、図式から逸脱する可能性はほのめかされ、共同体概念自体の脆弱性が暴露させられる。

「友達」関係の三作品は安部のそれぞれの時期の共同体観の投影としても読める。安部は頻りに自作を改稿する文学者であり、今回の「友達」の改訂過程の考察からわかるように、その改稿の理由は、安部が一定の枠組みに縛られずに思索し続けていることにある。古い枠組みを破壊しテクストの意味を増幅させ、より自由に読まれるのが、安部の改作の意義ではないだろうか[31]。

（り　そげん・映像・現代文化論研究室）

＊本稿は二〇二三年一一月一八日に、北海道大学で開催された第七回北海道大学映像・現代文化論学会大会における口頭発表の内容をもとに、若干の加筆を行ったものである。

＊本研究はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2119の支援を受けた。

注

1 安部公房「友達（二幕十三場）」（『文芸』一九六七年三月号、一九六七・三、河出書房新社）。

2 安部公房「『友達』について」（『安部公房全集』二〇、一九九九・五、新潮社）、四八七頁。初出誌は一九六七年三月号『文芸』（河出書房新社）で、初題は「〈作者付記〉」である。

3 安部公房「闖入者」（『新潮』一九五一年一一月号、一九五一・一一、新潮社）。

4 部数は限定されたが、上演する際の台本は安部公房スタジオを通じ発行された。安部公房『改訂版 友達 黒い喜劇 二幕（安部公房スタジオ上演台本）』（一九七四、安部公房スタジオ）。

5 安部公房「友達〈改訂版〉」（『友達・棒になった男』、一九八七・八、新潮社）。

6 武井昭夫「風化された批評精神―青年座上演『友達』評」（『新劇』第一四巻第五号、一九六七、白水社）。

7 羽山英作「『友達』をとりまく『友達』―青年座公演『友達』」（『新日本文学』第二二巻第五号、一九六七・五、新日本文学会）。

8 石沢秀二「友達―闖入する友達の恐ろしさ」（『國文學 解釈と教材の研究』第一七巻第一二号、一九七二・九、学燈社）。

9 友田義行「地下茎状の原作―安部公房『友達』論」（『文学』第一五巻第六号、二〇一四・一一、一二、岩波書店）。

10 紙幅の都合上、ほかの二作より、「友達」改訂版の考察に重点を置く。

11 武井昭夫「風化された批評精神―青年座上演『友達』評」、前掲、八六頁。

12 辻合敏明「暗喩の論理　劇評―西武劇場（安部公房スタジオ）『友達』」（『テアトロ』第三七七号、一九七四・七、カモミール社）。

13 辻合敏明「暗喩の論理　劇評―西武劇場（安部公房スタジオ）『友達』」、前掲、四三頁。

14 友田義行「地下茎状の原作―安部公房『友達』論」、前掲、五一頁。

15 三島由紀夫「『友達』と『万延元年のフットボール』（谷崎賞選後評）」（『中央公論』、一九六七・一一、中央公論社）、二三八頁。

16 舟橋聖一「虚実（谷崎賞選後評）」（『中央公論』、一九六七・一一、中央公論社）、二二八頁。

17 友田義行「地下茎状の原作―安部公房『友達』論」、前掲、五一頁。

18 安部公房「『友達』の稽古も―周辺飛行三二」（一九七四・六、『安部公房全集』二五、一九九九・一〇、新潮社）、三九頁。

19 安部公房「『友達』について」、前掲、四八七頁。

20 武井昭夫「風化された批評精神―青年座上演『友達』評」、前掲、八五頁。

21 羽山英作「『友達』をとりまく『友達』―青年座公演『友達』」、前掲、一一六頁。

22 友田義行「地下茎状の原作―安部公房『友達』論」、前掲、五三頁。

23 坂堅太『安部公房と「日本」―植民地／占領経験とナショナリズム―』（二〇一六・一〇、和泉書院）、一六～一七頁。

24 安部公房「〈何ものも信ぜず〉『私はかく生きる』のアンケートに答えて」（『安部公房全集』三、一九九七・一〇、新潮社）、一八一頁。初出誌は一九五二年一月号『婦人朝日』（朝日新聞社）である。

25 安部公房「都市について」（『安部公房全集』二〇、一九九九・五、新潮社）、三九九頁。初出誌は一九六七年一月号『新潮』（新潮社）である。

26 安部公房「都市への回路［インタビュー］」（『安部公房全集』二六、一九九九・一二、新潮社）、二二八頁。初出誌は一九七八年四月号『海』（中央公論社）である。

27 人間の共同体は本来、人間の安全を守り、人間が進歩するために結成されたものだが、現代社会において、それはかならずしも本来の目的

を果たしたものではない。特に日本社会では、社会全体を一つの共同体と見做さず、会社や家族など小さな共同体のみを認める傾向が見受けられる。その小さな共同体に属していない「赤の他人」であれば、排除するのはもちろん、目の前で死んでいても助ける気がしないのは、一部の人にとってすでに「常識」になっている。三男が抵抗を感じるのは、現代の共同体に見られるこのような残酷な「常識」にほかならない。

28 同じく「友達」改訂版の中の次女について検討する。

29 石沢秀二「友達―闖入する友達の恐ろしさ」、前掲、八八頁。

30 周知のように、人間の共同体は暴力性と危険性を持っている。レヴィナスは戦争によって共同体のこのような性質を深く認識し、『全体性と無限』（レヴィナス著、熊野純彦訳、二〇〇五～二〇〇六、岩波書店）を書きあげ、「全体性」にけっして包み込まれることのない「無限」について論究した。日常において、われわれは共同体の暴力性と危険性をそれほど感じていないかもしれないが、それは紛れもなく潜在しており、誰もが共同体に襲われる可能性を持っている。また、二章で論じたとおり、安部は常に共同体というものを問題視しているので、作品によって人間の共同体に存在する普遍的な問題を示す可能性は非常に高い。安部の『砂の女』、『燃えつきた地図』などの共同体を探究した作品もその傍証である。

31 「友達」は安部の死後にも度々上演された。二〇〇八年に『友達』が演出家の岡田利規によって再演され、二〇一二年にシェル・オーケ・アンデション監督の映画『友達』は東京で再上映された。「友達」はこれからも変容し、生き続けていくのだろう。

10.14943/rjgshhs.25.r 27

「レール」から「曠野の中」へ——北川冬彦「長編叙事詩」試論

寺本　真太朗

要　旨

本論では、北川冬彦の戦後詩集『氾濫　長編叙事詩』（１９４８）を対象に、従来ではほとんど論じられてこなかった「長編叙事詩」の特質を明らかにするものである。まず「短詩」から「新散文詩」への方法論的展開を跡づけ、初期の創作姿勢を確認する。その上で、『氾濫』収録作「曠野の中」を取り上げ、同じ題材を扱う平林たい子「敷設列車」と比較し、作品の独自性を検討する。さらに、戦前の小説「レール」から戦後「曠野の中」として再構成された経緯を分析し、改稿過程を見てゆくことで「長編叙事詩」の形式的側面と意義を明らかにする。これらの考察を通じて、「長編叙事詩」を映画と詩の交差としての「記録」や「歴史」の詩学に位置付け直し、彼にとって「アジア」を舞台に詩を描くことの意味を問い直すことを目的とする。

はじめに

戦後において、北川冬彦は「長編叙事詩」の試みとして詩集『氾濫　長編叙事詩』（草原書房、一九四八。以下、『氾濫』）を刊行した。これまでの先行研究は、大連の時代の『亜』（一九二四・一一創刊）など短詩運動に集中しており、中期から後期にかけての「新散文詩」運動、「シナリオ文学」運動、さらに後期の「長編叙事詩」や「ネオリアリズム」諸作品に触れるものは殆どない。わずかに藤一也の『北川冬彦　第二次「時間」の詩人達』（沖積社、一九九三・一一）や蔡宜静の「長編叙事詩」作品を対象にした論文[1]があるが、いずれも北川の「シナリオ文学」理論をそのまま『氾濫』に適応する方法をとっており、個々の物語内容の具体的な分析にまでは至っていない。実際、『氾濫』収録作品は、戦前に「小説」として雑誌や単行本などに発表や収録されたものを、戦後に「長編叙事詩」として再構成・再発表した経緯があり、この点は既存の分析で十分に考慮されていない。

本稿ではまず、初期の作品の「短詩」から「新散文詩」への移行を方法論的側面から検討し、それがいかにしてプロレタリア文学への接近をもたらし、さらに戦後の「長編叙事詩」へと展開していったのかを明らかにする。

次に、『氾濫』に収録されている「曠野の中」を代表例としてあげる。この作品は、中国大陸における植民地的侵略を象徴する満州鉄道の培養線の一つ洮昂線敷設工事と、張作霖と郭松齢との間で起こった「張郭戦争」を題材としている。ここでは、北川の作品と、同じく洮昂線敷設工事を題材にした平林たい子の「敷設列車」とを比較し、相違点を明らかにするとともに、作品の独自性を検討する。

さらに、戦前に小説として発表された「レール」が、戦後には「曠野の中」という「長編叙事詩」として再構成・再発表された点に注目する。ここでは、その改稿過程において加えられた変更を追跡し、テクスト間の異動を明らかにすることで、「長編叙事詩」の形式的特質を分析する。それは同時に、映画と詩とが交差する試みとしての北川冬彦の創作姿勢を浮かび上がらせるものである。

最後に、「長編叙事詩」の試みを新たに位置付けることで、北川冬彦にとって「アジア」を舞台にして詩を描くことが、いかなる意味を担っていたのかを考察する。

一、北川冬彦と「他者」の問題
――「短詩」から「新散文詩」へ

北川冬彦の詩業を考察する上で、まず注目すべきは理論と実作の並行性である。もちろん、それは北川に限ったことではない。例えば、モダニズム文学の嚆矢とも言える未来派詩人、フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティの「未来派宣言」（一九〇九）を皮切りに、第一次世界大戦の開戦前夜に叩きつけられたトリスタン・ツァラの「ダダ宣言」（一九一八）、さらにシュルレアリスムの祖アンドレ・ブルトンによる「シュルレアリスム宣言」（一九二四）など、当時はまさに「宣言」の時代であった。

これらの「宣言」は、単なる事実確認にとどまらず、行為遂行的に新たな詩の方法論を提示し、同時に文学運動体としての組織化を志向するという、二重の機能を持っていた。ゆえに、理論から実作へ、或いは実作から理論へという往還運動を検証する必要がある。

北川冬彦もまた、この理論と詩との往還を体現している。初期には、大連を拠点として、安西冬衛や滝口武士らと『亜』を発行、「短詩」という詩形を武器に文学運動を開始した。その方法論を端的に言えば、言葉を極限まで縮減し、空白の効果を最大限に活かした詩の設計である。

ビルディングのてっぺんから見下すと
電車・自動車・人間がうごめいている

眼玉が地べたにひっつきそうだ

（「俯瞰景」）

改札口で

指が　切符と一緒に切り取られた

（「ラッシュ・アワ」）

第一詩集『検温器と花』（ミスマル社、一九二六・一〇）にはこのような短詩が多く収録されている。まず指摘できるのは、対象を即物的に短い言葉へと縮減させてゆくことで、逆説的にイメージの豊穣さを達成している点である。例えば、「俯瞰景」では、ビルディングから街を見下ろす視線そのものを「眼玉」という語に凝固させることで、「地べた」に引きつけられるような目眩を誘う超現実的なイメージを提示している。「ラッシュ・アワ」では、改札で駅員が鋏で切符を切る場面を、「切符」と「指」とに凝固・短絡させることで、グロテスクな印象を生み出している。

加えて、「俯瞰景」という題名が、詩が描いている出来事（高層ビルディングからの眺め）を示しつつも、藤本寿彦が指摘するように「垂直方向の運動が語り手の身体内で瞬間的に結節し、分岐」する錯覚として表現している[2]。これに対して、「ラッシュ・アワ」では、題名によってラッシュアワ時の駅の改札のイメージをまず提示しながら、「俯瞰景」とは反対に、横方向の運動が身体の切断を思わせるイメージへと接続していると言えるだろう。こうした効果を可能にしているのは、梶井基次郎が評したように、北川の詩における「物質の不可視性を無視する」方法論である[3]。すなわち、題名によって規範的なイメージを提示し、その後に本文を通じて題名と強引な包含関係を結ぶことで、感覚的・知覚的な錯乱を生み出す形式的操作に他ならない。

このように初期の「短詩」を特徴づけているものは、（1）言葉の極限までの凝縮・凝固によって、一〜三行以内に収まる形式。（2）一行空けや紙面の空白を利用し、イメージの飛躍を印象付ける構成。（3）題名による本文の要約や、本文とのズレによる異化効果この三点に整理できる。初期の北川冬彦の詩は、何よりも形式面の厳密な設計によって特徴づけられる。

もっとも、『亜』から春山行夫主宰の『詩と詩論』（一九二八・九創刊）へと活動の場を移す頃から、「いかに詩を構成するべきか」という方法論的な関心から、「何を詩の中で描くのか」という主題的な関心へ転換してゆくことになる。

がらんとした税関倉庫のつめたいコンクリートの上で、わたしは一人の男を介抱している。この男は誰であるのか？　わたしはそれを知らない。わたしの腕は、男の一本の脚の上で油のない歯車のような軋音をたてゝいる。男の他の一本の脚はすでに墮ちて了った。朝から夜中まで、夜中から朝までわたしはひっきりなしに、男の残った一本の脚を撫でつゞけている。

わたしは、何故この男を介抱しなければならないのか？　見知らぬ男を、屍のような見知らぬ男を。夜が更け月の光が燐のように流れても曇った硝子のような眼球をかすかに見開いて「絶望、絶望だ、絶望していなければ生きてはいられない――」と呻きやめないこの見知らぬ男を。わたしには、判らない、判らない。判らない、判らない、判らない。

（「絶望の歌」）

この作品においては、短詩時代に見られたような、知的に構成された感覚は影を潜め、代わって実存的・内面的な側面が前景化している。ある一つの情景――すなわち、「税関倉庫」の「冷たいコンクリート」の上で、片足を失った見知らぬ男の介抱をする「私」の姿である。そこで「私」は、なぜ自分がこうしているのかを理解できず、混乱、悲嘆、苦悩、絶望といった感情を抱えながら、ただ「判らない」という言葉を繰り返すほかない。この詩を代表とする第二詩集『戦争』（厚生閣書店、一九二九・一〇）の諸作品は、『花と検温器』に見られたモダンな感覚を知的に構成する手法から大きく逸脱している。

北川冬彦は「新散文詩への道」というエッセイにおいて、「新散文詩」の具体的な方法論を、語と語、句と句、行と行を「煉瓦」とし、それらをつなぐ「セメント」のように設計することだと述べている。これは同時に「無闇に行をかへ、連を切ること」の必然性が失われることの自覚であり、「言葉の音楽」ではなく「言葉の結合」が生むメカニズムによって構成される詩作を意味していた[4]。このエッセイは、方法論を提示すると同時に、「短詩」における方法論の延長線上に「新散文詩運動」を位置付けようとする、戦略的意図を備えたテクストであるといえる。

しかし、「詩人の眼」というエッセイにおいては、「詩の形式の変革は、同時に詩人の精神」の変革であること、換言すれば「詩人が社会的に自覚」することこそが「新散文詩運動」の目的であるとされている[5]。これは、『詩と詩論』誌上で春山行夫が展開した「ポエジイ」論――すなわち、詩の内容を極力剥ぎ取り、逆説的に詩の枠組みや機能を浮かび上がらせようとする方法論――への明確な批判であった。

「新散文詩への道」における理論的／方法論的探究から、「詩人の眼」における詩人の社会的自覚という転回は、モダニズム的なメカニカルな方法論を突き詰めた結果、逆説的にその割り切れなさに直面したとも言える。

この視点から読むと、詩に登場する片足を失った見知らぬ男は、生々しい実在感を備えた「他者」として現れているとまず見ることができる。北川にとって、この「他者」――すなわち、どうしようもなく現前しながらも抱えきれない存在――は、短詩における「言葉の結合」というメカニカルな設計図には回収し得ない、不気味な裂け目として現れていたのである。

この裂け目をいかに埋めるのか――その問いへの模索こそが、「新散文詩運動」以後の方針を決定づけたのではないだろうか。第三詩

集『氷』（蒲田書房、一九三三・一一）や第四詩集『いやらしい神』（蒲田書房、一九三六・四）前後の時期にプロレタリア作家同盟に加入することになるのも、そのような意識からであったと考えられる。彼はこの時期のプロレタリア文学運動への参加について、「自分の思想を錬磨する」[6]ためであり、その活動が「私の視野をひろめ、生甲斐を感ぜしめた」[7]と回想している。しかし同時に、その活動には違和感を抱き、作品を創作することは出来なかったとも述べている。この違和感の核心には、決して自己の内部には回収することはできない「他者」にどう応答するかという問題であったのではないか。それは、同時に北川冬彦と「アジア」というテーマにも重なり合ってゆくことになる。

二、北川冬彦と平林たい子
――「洮昂鉄路」を巡るフィクションと現実

北川冬彦がプロレタリア作家同盟への加入の時期に紙筆した「レール」は、『中央公論』の一九三一年一二月号に掲載された。その後、『年刊プロレタリア創作集一九三二年版』（一九三二・三、日本プロレタリア作家同盟出版部）に収録される際、「一九二五年の記録」というサブタイトルが付されている。のちに、戦後『氾濫』に「曠野の中」と改作され、「長編叙事詩」として収録されることになる。ちなみに『氾濫』に収められた他の作品――「古い鏡」「早春」「狐」「氾濫」――はいずれも内蒙古を舞台としており、これらは共に『北方』（蒲田書房、一九三五・一〇）や『古鏡』（河出書房、一九四〇・一〇）に小説として収録されていたものを「長編叙事詩」として改作したものである。

「レール」と「曠野の中」は、結末部分を除けば内容面の大きな変更はない。物語は、一九二五年の張郭戦争を背景に展開し、中国東北地方と熱河省を含む地域――一九三二年に満州国として成立する地帯――を舞台としている。満州鉄道の培養線の一つである洮昂線敷設工事をめぐり、日本側の支配層、中国側の支配層、さらに工事に従事する苦力たちなど、階層の異なる登場人物たちの思惑が絡み合い、群像劇として物語が進行する。

物語の大きな枠組みの一つは、苦力の一人である劉のストライキ騒動がある。しかし、劉は同じ中国人で現場監督をしている王から連帯を得られず、無惨な最後を迎えることになる。さらに、このストライキの失敗の物語と並行して、満鉄・関東軍・張作霖の共謀によって郭松齢の反乱が鎮圧されるという歴史的事件が同時進行的に語られる。

小説「レール」の評価として、佐藤静夫は「ここには中国の地方軍閥の抗争をも利用しての、日本の軍、官、財による中国侵略と、中国人民の植民地的酷使が描かれている」と述べ、「満州は日本の生命線」という現実を告発したものとしている[8]。

一方、城侑は「無駄のない凝縮された詩的な言葉が、現実に起きている一つ一つの事件を一層重々しく伝えてくれる」ものとし、北川冬彦のその他の作品（「戦争」「大軍叱咤」）と比較しながら「ワイ

ロを使って侵略の野望をとげようとする軍部や満鉄を告発している様には思わ」ず、「むしろ、言葉数少なく、静かでさえもある。読んでいて言葉につまずくことはない。ただ、現実が静かに、しかし、しっかりした形で目の前に告発を受けてぶらさがっている」ものとして高く作品を評価している[9]。

ここではまず作品分析において重要な舞台装置として物語内に位置付けられる「満州鉄道」（以下、「満鉄」）について考察したい。意外なことに、「満鉄」を真正面から描いた文学作品は意外に少ない。仮にあったとしても、菊池寛（実際の執筆者は、山田清三郎と言われている）の『満鉄外史』（原書房、一九四一）に代表されるように、多くは「満鉄」創設の苦難、苦労を植民者である日本人側から一方的に英雄的物語として描いたものである。たとえば、『満鉄外史』の「自序」では、「満鉄」の意義を「東亜共栄圏の一大動脈であると共に、日本民族が大陸に獲得した最初の生命線」と位置付け、さらに「新興日本民族の最も進取的な血と情熱とが、永久に脈々と通っているような気がする」と述べている[10]。

ここで、「満鉄」と、それを文学がどのように描いているのかを考えるにあたり、対外侵略の尖兵としての「満鉄」を、単なる領土の侵犯や収奪の問題へと矮小化するべきではなく、より多角的な権力構造として捉える必要がある。

この視点に関連して想起させるのが、北川冬彦の中野重治の有名な詩「機関車」（『驢馬』一九二六・九）の評である。北川はこれを力作であると認めつつ、詩が「ファシズム」の詩へと転換する危険性を指摘している。すなわち、この詩には「機関車という盲目な巨人的機械」に対する洞察が欠けているというのだ。さらに彼は、「プロレタリア詩の立場から（…）汽車や機関車をかつて歌わなかった仕方で階級的に歌う」ことの必要性を主張している[11]。

では、この「巨人的機械」に内在する権力関係や構造を、北川冬彦は具体的にどのように描いたのか。

軍国の鉄道は凍った砂漠の中に無数の歯を、釘の生えた無数の歯を植えつけて行った。

突然、一かたまりの街が出現する、灌木一本ない鳥一匹飛ばないこの凍った灰色の砂漠に。

芋虫のような軌道敷設列車をめぐって、街の構成要素が一つ一つ集ってくる。例えば、足のすでに冷却した売淫婦。

一連の列車の中の牢固とした階級のヴァリアション。

軌道は人間をいためることによってのみ完成される。人間の腕が枕木の下で形を変える。それは樹を離れる一葉の朽葉よりも無造作である。

軌道の完成は街の消滅である。忽ち、一群の人間は散ってしまう。

砂漠は砂漠を回復する。一本の星にとどく傷痕を残して。

軍国はやがてこの一本の傷痕を擦りへらしながら腕を延ばすのである。

没落へ。

（「壊滅の鉄道」）

王中忱はこの詩の喩法について、「隠喩と換喩と錯綜している表現及び喩えられるものと喩えるものとの意味交換・生成」によって構成されているとした。すなわち、「軍国の鉄道」が、「軍国」の産物であると同時に、「軍国」そのものを隠喩的に表象している。また、その鉄道の「釘の生えた無数の歯」は、枕木を指すと同時に、「鉄道」と換喩的な隣接関係を指示しつつ、「軍国」の侵略的イメージに呼応している。このように、隠喩的表現は換喩的表現に二重に折り畳まれる形で構成されているのである[12]。さらに王が指摘するように、身体あるいは肉体を表現する語を軸とすることで、植民地的侵略のイメージと人間の身体の破壊・欠損のイメージとが二重化している点も特徴として挙げられるだろう。

ただ、ここでは敷設列車と共に姿を現す「一かたまりの街」に注目したい。周知のとおり、「満鉄」が半官半民の第三セクターとして機能し、鉄道業務にとどまらず、ホテルや倉庫の経営、鉄道附属地の管理、炭鉱と製鉄所の運営、大連港の経営と海運業、理・工・農の研究開発、経済政策の立案、高等教育や病院経営といった福祉運営などを含めた巨大コンツェルンであった。北川は、この多面的な実態を、重層的な喩法を駆使して詩的に描き出しているといえる。

北川自身、父親が「満鉄」創設期からこの国策会社の社員として勤務し、息子である彼にも「満鉄」への就職を望んでいた。しかし北川はその期待に背き、文学の道へ行った。そのため「満鉄」は、彼にとって父親の世代を代表とするような反抗の対象となっていたと考えられる。さらに、大連で幼少期を過ごした経験を持つことから、「満鉄」で搾取的に働かせられる苦力たちへ同情的な視線を持っており[13]、そのことも含めて「満鉄」の実態を正確に把握していた。その認識を裏付ける例として、彼の映画批評「満鉄映画」がある。そこでは、「英国が印度を植民地化するときに『東印度会社』を設立したやうに、対満政策具体化の第一戦に立たせたもの」[14]こそが「満鉄」であると論じ、資本主義的な欲望と帝国主義的な野心が結びついた複合的な権力の象徴として捉えている。

ここで、代表的なプロレタリア文学者である平林たい子の「敷設列車」（『改造』、一九二九・一二）と北川冬彦の「曠野の中」と物語内容・構造を比較することで、北川が目指した「汽車や機関車をかつて歌わなかった仕方で階級的」に歌うという試みの具体像を検討したい。

北川は、「支那を描いた小説」において中野重治の「戦争と文学」というエッセイに言及する[15]。中野はそこで「日露戦争後三十年になつても日本がそれと戦つたロシアについては勿論、日本軍が直接そこで戦ひ、そこで食ひ、そこで寝泊まりした国とその住民とについて日本文学は全く何一つ書いてゐない」と述べている。この批判に対して北川は、一面の事実を認めつつも、「今はロシア人と日本人とにわが大地、わが村で戦争されてゐる、支那住民のない」作品しかないという中野の議論には疑問を呈する。その上で、北川は黒島

伝治の諸策作や、平林たい子の「敷設列車」、さらに自身の「レール」「古い鏡」「氾濫」「曠野」を挙げ、「戦争の渦中」ではないが「平時の戦争」を描いているものだ反論している[16]。

平林の「敷設列車」は、北川の作品と同じく洮昂線敷設工事を題材とし、さらに敷設工事に従事する苦力のストライキを大きく描くなど、両者の共通点が見られる。前述のエッセイで、北川が平林の作品を意識していたことも、この関連を裏付ける一例となるだろう。したがって、両作品を比較することで、共通点を確認するだけでなく、むしろ両者の差異を通して北川作品の独自性を浮かび上がらせたい。

平林たい子の「敷設列車」について、川村湊は、「過酷な労働現場と、民族あるいは階級間の差別」や「鉄道建設の『敵』が、宗主国―被植民地の民族対立に根ざしたもの」を早い時期に提示した作品として評価している[17]。岡野幸江もまた、本作を「満州の最下層労働者に焦点を当てて、その民族的、階級的主体の回復を主題化」したものであり、「日本人が中国人に課した苛酷な労働や暴虐も細部のリアリティに支えられ可視化」したものと評している[18]。

「敷設列車」は、作者自身が満州に赴いた体験に基づき、帰国後に満鉄東京支社所蔵資料調査を経て執筆された。物語は、「満鉄」が奉天政府との契約に基づき鉄道の敷設工事を強行し、そのために工夫や苦力を過酷な労働に従事させる過程を描く。工事は「土匪」「鼠」「伝染病」「洪水」など多くの困難に直面し、それらへの不満から労働者たちは団結して現場監督に反旗を翻し、汽車を洮南へと走らせる――これが物語の骨格である。

ここで注目すべきは、平林と北川の両作品に共通して物語の背景を形成している歴史的事実が、洮昂鉄路の敷設という点である。日露戦争終結後、一九〇五年九月五日にポーツマス条約が締結され、翌一九〇六年には南満州鉄道株式会社成立が設立された。さらに二年後の一九〇八年一〇月二八日には、大連・長春間で急行列車の運行が開始される。その後、洮昂鉄路は、「満蒙鉄道建設借款予約大綱」に基づき建設されることとなり、一九二四年九月には、東三省自治政府総理・張作霖と南満州鉄道株式会社との間で建設工事請負契約が結ばれた。

洮昂鉄路は、四洮鉄路の延長線として、「培養線」を目的とする日本の借款鉄道であった[19]。この「培養線」は、「各地の農産物や鉱産物を自社の鉄道に取り込む」ことを意図したものであり、それは単に満鉄発展にとどまらず、中国進出をもくろむ日本政府にとっても使命を制する重要事業と位置付けられていた[20]。もっとも、この資源輸送という当初の目的は、張作霖との共謀を経て、次第に「対ソ作戦鉄道」という軍事的な性格を強くしてゆくことになる[21]。

平林たい子の「敷設列車」と北川冬彦の作品との大きな相違は、後者には洮昂鉄路敷設工事に張郭戦争という歴史的事件を絡めている点にある。北川は『氾濫』のあとがきで、「曠野の中」について「張郭戦争の真相について、執筆当時から教示されるところ少なくなかった」と記している。この「教示」を与えた人物として、藤枝丈夫の名前を挙げ、本作品を彼に捧げている[22]。

北川に張郭戦争の示唆を与えたとみられるのが、藤枝丈夫の「生きた新聞2郭松齢の贈り物」（『戦旗』一九二九・一）である。この一種のルポタージュでは、日本軍が張作霖と共謀することで郭松齢の反乱を鎮圧した事実が告発されおり、北川の作品構想における重要な手掛かりとなったと考えられる。

北川冬彦の作品と平林たい子の「敷設鉄道」は、ともに洮昂鉄路敷設という共通の舞台背景を持ち、さらに北川の作品には張郭戦争という事件が絡んでいることを先に見た。ここから、両作品の特色と相違点を確認したい。

第一に挙げられるのは、敷設工事の劣悪な環境における苦力の描き方の差異である。両作品とも、苦力が劣悪な環境で敷設工事に従事する姿を描いている。しかし、平林の作品では、例えば苦力たちが押し込められる住居について〈天幕の裾から幾株も転がり出たままになっていた。それがベタベタに腐りはじめて皮膚病みたいになっている〉[23]といった、生理的嫌悪感を呼び起こす隠喩を駆使し、労働環境の苛酷さを告発する。これに対し、北川は抑制的な筆致によって同様の状況を描き出している。

砂がパラパラと落ち　下にある顔にふりかゝった。／その顔は何の反応も起こさない。／開けっ放しの扉からは　凍った風が吹き込んでいる。／手足は痺れ／その痺れが睡さと入り交り、皆　うつらうつらとしていた。／劉は／顎を立てた両肱に乗せ、／前餅布団にくるまりゴロゴロ転っている苦力達の姿を見廻した。

（「曠野の中」）

語り手の注釈を極力排し、まるでカメラのレンズのように即物的な視線で捉えている。「曠野の中」におけるこの文体上の方法論については後に詳述するが、ここで指摘できるのは、対象を冷静かつ俯瞰的な立場で描こうとする意図が明確にうかがえる点である。

あるいは、鉄道敷設の請負契約が物語展開において果たす役割の違いにも注目できる。両作品とも、鉄道敷設の請負契約が重要な要素となっているが、その意味づけは異なる。平林の作品では、工事完了までのタイムリミットが物語の推進力となり、さらに苦力のストライキの遠因として作用する。一方、北川の作品では、物語の推進力だけでなく、「借款鉄道」という洮昂鉄路の位置付けそのものが問題化される。加藤聖文が指摘するように、「借款鉄道」という形式は、日本による中国への独占的な投資を牽制するアメリカの新四国借款団を回避するために考案された。すなわち、外交交渉によって敷設権を獲得し、日本側銀行団が建設資金を中国政府に貸与し、実際の建設は満州が行うという方式である。この方法は、中国側に主体性を持たせつつも、新四国借款団の制約を回避し、日本の権益拡大と米英との摩擦回避を両立させる唯一の手段として採用された[24]。こうした「借款鉄道」の契約形態は、日本側だけではなく中国側の支配層の思惑も複雑に絡み合い、物語に立体的な奥行き与えている。

最後に「借款鉄道」をめぐる日本側と中国側の複雑な思惑や対立という政治的な次元に加え、敷設工事に従事する苦力たちの民族内部における対立・葛藤が描かれている点にも注目したい。平林の「敷設列車」は、階級対立を民族内部の団結と日本帝国主義への反抗として構図化するのに対し、北川の作品は、階級対立が民族内部にも存在することを指摘し、むしろ連帯の不可能性を露呈させる。この差異は、歴史＝物語の描き方に関わる。

平林の作品においては、敷設工事に伴う苦難や過酷な労働環境、さらには日本人との対立が引き金となってストライキに至る経過が描かれている。ここでは、現場監督である日本人と苦力である中国人たちとの民族的対立が大きく前景化され、中国人苦力たちの民族的連帯が称揚されている[25]。物語は、〈「天亮了（テョリヤンヲ）！天亮了！」〉という〈「夜が明けた！」〉という歌が響き渡り、ストライキの成功と解放の喜びを象徴的に描き出している[26]。

一方、北川の作品においても、平林の作品と同様に、苦力たちがストライキに至る原因は劣悪な労働環境にある。しかし、それが挫折する原因として描かれるのは、同じ中国人内部での不和・仲違いがある。たとえば、登場人物の一人でストライキ首謀者である劉は、同胞の中国人でありながら、敷設工事の現場監督である王とストライキ成功のために共闘しようとする。しかし、最終的には、王の裏切りによってストライキは頓挫し、劉は拷問によって悲惨な最期を迎える。

ここで印象的なのは、王が連帯を決裂させた後に劉を激しく殴打し、〈しばらくでも劉に唆されて不甲斐なくも靡いたと思うと劉が憎くて仕方がない〉として劉を拷問死に至らしめる場面である。そこに描かれるのは、むしろ自分の利益や地位を守るために、より一層同胞を残酷に痛めつける姿である。

さらに、敷設工事現場におけるミクロな民族的対立の不和だけでなく、物語の背景として描かれる張郭戦争においても、自国の勢力・権力拡大のためであれば日本帝国軍の力をも借りて勝利する張作霖の姿が取り入れられている。北川がこの歴史的事件を作品に導入したのも、こうした構造を浮き彫りにするためであろう。

このように平林は苦力という存在を、日本と中国という二元対立構造の中に位置づけることで、日本の植民地的支配への批判的な視座を担わせる一方で、中国人内部の微細な差異を捨象してしまう。一方、北川はそのような過度な意味づけを回避し、複雑に絡み合う歴史をドキュメントとして描き出そうとする。この姿勢は、小説「レール」から長編叙事詩「曠野の中」への結末部分の書き換えによって、より具体的に結実している。

三、「レール」から「曠野の中へ」
――改稿の比較による「長編叙事詩」の方法論の分析

戦後において北川冬彦は、「長編叙事詩」の試みについて一連の理論的評論やエッセイを発表している。詩集『氾濫』の「あとがき」に始まり、「長編叙事詩の復興」（『詩の話』、宝文館、一九四九・八）、

「長編叙事詩の制作方法」「定型なき定型」（『第二詩の話』、宝文館、一九五一・一二）、「長編叙事詩と映画」（『映画への誘い』、温故堂出版、一九五二・一〇）、「長編叙事詩問答」「『長編叙事詩』批判に答える」「叙事詩制作の経験」（『詩と随筆集　カクテル・パーティー』、宝文館、一九五三・八）などで、体系的な整理を試みている。

まず、北川の『氾濫』の「あとがき」において「日本の現代の詩には長編叙事詩というものがない」と述べるとともに、「短い抒情詩」ですら文学の片隅に追いやられている現状を「散文万能時代」と規定している。さらに、「詩が文学に占める地位がこのようなものであってよいものであろうか」と問いかけ、「本格の文学支柱と云うものが、今日も往昔も詩であることを想えば、詩は新たに復興されなければならない」として、その復興の方途として「長編叙事詩」の意義を位置付けている[27]。

では、北川が意図する詩の「復興」としての「長編叙事詩」とは、具体的にいかなる方法論なのか。北川は「長編叙事詩と映画」において、叙事詩を「事件と物語」を含み、それらを展開する「行動描写」によって構成されるものと定義している。さらに、「映画をイメージするシナリオ」の形式を導入し、一つ一つのショットを接続してシーンを形成し、それらの集積としてのシークエンスを構成すべきだと論じる。こうした構成原理により必然的にテンポとリズムが生まれ、「全体の構成のために自己制約」が働き、その結果として分量が規定されるのだと説いている[28]。

やや唐突とも思える映画の「シナリオ」の形式の導入によって、「長編叙事詩」を現代に甦らせようとする北川の提言の背後には、「詩における定型」という問題意識がある。北川によれば、「長編叙事詩」は明治期に岩野泡鳴、薄田泣菫、蒲原有明、北村透谷らによって試みられたものの、最終的には挫折を余儀なくされた。その理由として、音律数定型の崩壊と口語自由詩への移行という歴史的経緯が「長編叙事詩」を不可能にしたことを挙げている。そこで北川は、音数律のリズムに代わるものとして映画の「ショット」、「シーン」、そしてそれの積層である「シークエンス」という映画的イメージによって詩を構成する方法を構想する。これにより、「定型なき定型」を創出できるのではないかと考えたのである。

北川冬彦は詩作だけでなく映画評論をも盛んに執筆し、生涯を通じて映画と詩の関係を思考し続けた人物である。したがって、「長編叙事詩」の試みは映画と詩という二つの異なるジャンルを融合させた試みとみなすべきであろう。ここで注意すべきは、北川が語る映画の「シナリオ」にも独自の考えがあったことである。

戦前、北川は「シナリオ文学運動」を主導した。この運動は、「映画」における「脚本」（＝「シナリオ」）を単なる制作のための筋書きとしてではなく、それ自体で完結しうる芸術的価値をもつものとして自立させようとするものであった。例えば、トーキーの登場に対して、友人である映画評論家の飯島正が登場人物の台詞を中心に作品を構成しようとしたのに対し、北川は「地の文」や「ト書き」といった「映画における環境描写」[29]を重要視していた。

具体的には、「可能な限りの具体的描写」、「心理描写よりも行動描

写」、「地の文よりも会話」[30]を通して、あたかもスクリーンで映画を観るかのような「スクリーン・イメーヂ」を構築することを目指したのである。この映像的構築法こそが、北川にとって、「シナリオ文学」の核心であり、また彼の「長編叙事詩」の方法論の基盤であった。

では、実作品において、「シナリオ文学」の方法論を如何に利用しているのか。蔡宜靜は「長編叙事詩」を読み解いている。つまり、蔡によれば、「シナリオ文学」における（1）「撮影テクニック」の指定の省略、（2）「散文構成」の精神、（3）「実写的・記録的」な立場、（4）「急所」の開示という方法論を踏まえつつ、「長編叙事詩」ではさらに、（1）「複数エピソードの結合」、（2）「情景描写」の設定、（3）「会話創出」、（4）「現在進行形」の「テンポ・リズム」として組み換えてゆくことで成立していると指摘する[31]。

もっとも「シナリオ文学」の理論から「長編叙事詩」を読む視点は有効である一方、『氾濫』に収められた「曠野の中」を含む諸作品が、元来は戦前に小説として雑誌や単行本に発表されたものを、戦後に「長編叙事詩」として改稿した事実は、蔡の分析には含まれていない。本稿では、この理論的枠組みだけに依拠するのではなく、小説から「長編叙事詩」への改稿過程に着目することで実態を明らかにする。

そこで、例として、同一の場面を取り上げ、「レール」から「曠野の中」へ、どのような改稿が行われたのかを検討してゆきたい。

（A）

冬になると、このへん一帯は、――終日頭の上に火山灰がおっ被さったのを経験した人があるだろう、くる日もくる日も、空と云えばあんな調子なのだった。

砂煙りがぱっぱっとあがっていた。風がふきつけたり、馬車がぽかぽかがらがら通ったりする度びばかりではなかった、人が静かに歩いて行ってもそうだった。乾いた砂埃りがぼこぼこ堆って足首がすっぽりもぐりこんで了うのだった。

その砂埃りを浴びながら、土壁の低い家並みの前で、眼脂で膏薬貼りをした子供が二人、いやにませた格好でふんぞりかえって斬り合いの真似をやっていた。

小さい方が『やっ』と斬り込むと、大きいのが凍った捨て水に脚をすくはれて仰向けに倒れた。わーんと大声を立てた。すると、扉のない家のうす暗い奥から白い息がほっほっと見え、出てきたのがめっかちの婆さんだ。

婆さんは、泣いているのの尻を蹴とばした。と、そいつはぴったり泣き止んで立ち上がり、べそを掻きながら、小さいのと並んで家の中へ這入って行った。べそを掻いているその突っ張った小さな肘を見送ると、婆さんは尻をふって歩き出した。馬車が砂埃りをぱっぱとと立て、通った、婆さんも足許からぱっぱっと埃りを立てた。負けずにやっている訳ではないが埃の方で立つのだった。

（「レール」）

冬になると　来る日も来る日も／火山灰がおっかぶさったような空である。／砂煙りがぱっぱっとあがる、／風が吹きつけたり／馬車がガラガラ通ったりする度びばかりではない、／人が静かに歩いて行ってもそうなのだ。／乾いた砂埃りが堆って　足首がすっぽりもくりこんでしまうのである。／土壁の低い家並みの前、／砂埃りを浴びながら／子供が二人――大きいのと小さいのが／いやにませた格好で芝居の立廻りの真似をやっている。／ひどい眼やにの目。／その小さいの「やっ！」と云って斬り込むと／大きいのが／凍った捨水に脚をすくわれ　仰向けに倒れた。／「わーん」と大声で泣く。／家の薄暗い奥から／白い息がほっほっと見え／出てきたのはメッカチの婆さんである。／婆さんは、／倒れたまゝ泣いている奴の尻を蹴とばした。／するとそいつは／ぴったり泣き止んで立ち上がる、／小さいのと並んで家の中へはいって行く。／べそを掻いている突っ張った肘。／婆さんは尻を振って歩き出した。／馬車が砂埃りをパッパッと立てゝ通る。／婆さんの足許から立つ砂埃り。／婆さんは負けずにやっているわけではないが　砂埃りの方で立つのである。

（「曠野の中」）

（B）

敷設機は活動しはじめた。材料車の脇の方へ、枕木がごごがんとほうりこまれた。片方の溝では、レールが、ががががんと鳴っていた。溝の下で歯車が廻って、それらをまえの櫓の方へ送った。櫓の下では、流れてくる枕木を苦力が一本ずつかつきあげて、築堤の上へほうり出した。熊手のような鉄の棒が、それを並べた。十五、六本ならぶと、レールが二本流れてきた。レールが四呎八吋の巾で継目板が締められ、犬釘が打たれると、櫓の上で青い旗がゆれた。と、汽笛がなって、敷設旗が押された。レール一本の長さだけ前進した。それが二分間かゝるか、かゝらないでなされた。

苦力たちを、機械があとからあとから追っかけていた。レールの前の方をかついでいた崖の足許へ、枕木がなげ出された。傍の寒さでしびれた虞の腕が云うことをきかず、その肩からすべり落ちたのだった。

左利きなのでレールを左肩にかついでいた崖は、ぐっと右へよけた。すると、うしろの右肩にかついでいたのが、ぶっ倒れた。レールで右耳の下をしたたか敲かれたのだった。

（「レール」）

施設旗は活動しはじめた。／枕木車の脇腹の方の溝へ／枕木が抛り込まれて流れてゆく。／片方の溝を／レール車から流れてきたレールが　動いてゆく。／溝の下で歯車が廻って押し出されてゆく仕掛けである。／突端に櫓があって／櫓の下で苦力たちが／流れてくる枕木を、／一本ずつ担ぎ上げて築堤の上へ抛り出す。／鉄の熊手でこれを手早く並べるのが居る。／十五本枕木が並ぶと　レールが二本流れてくる具合になっている。／

寺本「レール」から「曠野の中」へ

二本のレールが／四呎八吋の幅で　継目板が締められ、／犬釘が打たれると／櫓の上で青い旗が揺れる。／汽笛が鳴って／敷設列車が／レール一本の長さだけ前進する。／苦力たちを／機械があとからあとから／せき立てるように迫っていた。／レールの前担ぎの崖の足元へ　枕木が投げ出された／冷寒のため虞の腕が痺れ　その肩から辷り落ちたのである。／左利きなので／レールを左肩に担いでいた崖は　左へ除けた。／すると／右肩に担いでいた後担ぎがぶっ倒れた。／レールで右耳の下を敲かれたのである。

（「曠野の中」）

（A）と（B）には、「レール」と「曠野の中」における同一場面をそれぞれ引用し、両者の改稿過程を可視化した。傍線は、動詞表現における改稿の差異を示しており、「レール」における改稿前の表現を波線で、「曠野の中」における改稿後の表現を点線で示した。

小説「レール」から長編叙事詩「曠野の中」への変更点でまず目につくのは、行分けの導入である。行分けが前提とされる詩の形式が、必然的に一行ごとの圧縮／短縮を要求されて、イメージは明確化されている。北川自身も『氾濫』の「あとがき」で、もともと「詩的発想」を小説の形式を借りていたという齟齬が「レール」の読みにくさをを生んでいたと述べている。そして「曠野の中」への改稿を、「本来のあるべき姿への復元」であると位置付けている[32]。

そのような行分けを想定した言葉の選択によって、小説「レール」であったような語り手の注釈的な語りは大幅に削られている。例えば、（A）の場面における「レール」の〈このへん一帯は、――終日頭の上に火山灰がおつ被さったのを経験した人があるだろう〉という導入部は、「曠野の中」においては削除され、語り手の視点や感情を抑制するようなものに変化をしている。

加えて、（B）の場面におけるような〈ごごがん〉〈ががが〉などの擬音語や、時間的な経過を示す「と」「すると」などの接続詞、あるいは、登場人物の身体的感覚などに焦点化する描写などは削除されている。

このように、「曠野の中」においては、登場人物の感覚に寄り添うよりも、カメラのレンズ越しに事物を捉えるかのような記録的視点が導入されている。（A）の場面において、〈目脂で絆創膏貼りをした子供〉という説明的な描写から、〈目脂の眼〉という簡潔な提示へと置き換えられている。北川は、「シナリオ文学」論において、映画を見ているかのようにシナリオを組み立てる為には、具象的な映像を媒介とするフィルムに比べて、文字は抽象的であるがゆえに齟齬が生じると述べる[33]。換言すれば、文字によって映画的な感覚を喚起するには、記述を最小限に切り詰めることで、逆説的に読者の想像力を最大限に引き出す必要があるという方法論である。

実際、描写を圧縮してゆくことで、（B）の場面では、「レール」であれば、身体性を軸に説明的に展開されていた敷設工事の描写が、「曠野の中」においては、敷設工事それ自体を即物的な、メカニカルな動きそのものとして簡潔に提示され、読者の想像の中に再構成さ

れている。

以上の改稿過程から浮かび上がるのは、「レール」におけるやや過剰と言える人物焦点的・小説的語りから、「曠野の中」においては抑制的で客観的、記録的な映像断片を積み重ねることによる映画的な語りへの変化している、という点にある。

このような映画的な語りへの変化は、「……だった」（タ形）という過去完了的な語りの処理から、「……である」（ル形）という現在進行形の語りへの移行への変化と並行している。

橋本陽介はタ形とル形の差異を、「タ形がその動作の完結と客体の変化」を示すものであるのに対して、「ル形はその変化を起こさせる動作自体を捉え」ようとするものであると指摘している。つまり、ル形では、その動作の持続と変化の過程に焦点が置かれて、短い間ながらも時間が内部から継起的に捉えられるのだ[34]。

この文体的な変化は、「レール」におけるような、語り手がタ形によって時間の流れを制御して、物語を過去の出来事として確定的に語るスタイルとは対照的である。「曠野の中」において採用されたル形は、語り手の介入を後景に退かせ、カメラのレンズ越しに、出来事が現在進行形で次々と展開してゆくような印象を与える。

また、このタ形からル形への転換と並行して、句点が減少して読点が増加という文体論上の変化も見られる。これにより文がその場で意味を閉じずに、次の行へ、さらにその先への行へと、視線と意味をテンポ／リズムとして滑らしてゆく機能を持っている。

しかし、この文体の変化は、単に出来事を継起的に進行させるだけではない。そこには、櫻井智佳恵が指摘したような「シナリオ文学」の独自性――すなわち、先のイメージを引きずる形での同時化の問題が関わっている[35]。言い換えれば、「読む」行為の線状性を部分的に解体し、音響と視覚的情報を同時化させること、あるいは映画的な登場人物たちの並列性を生み出している。

例えば、（A）の場面では、子供が「泣く」という動作自体がまだ終わらないうちに、メッカチの婆さんが〈家の薄暗い奥〉から登場する。このように二つの出来事が並列化され、「レール」であったような「すると」という因果を示す接続詞は削除される。ここには、理由・出来事・結果という散文的な因果の鎖を前提とした語りから、タ形とル形を微細に使い分けながら音響と視覚の同時化を志向する語りへの転換が見られる。

また、（B）の場面では〈片方の溝〉や〈鉄の熊手〉といった説明を省いた換喩的な語りを媒介とすることで、人や物が映画の画面上でメカニカルに並列するかのような効果を獲得しているといえる。

北川冬彦にとって映画的であることはまず何よりも「文学に於いては個々別々にしか描きえないものなり人間なりを、同時に描き出し得ることであらう」としている[36]。例えば、「レール」においては、敷設工事に従事していた苦力に焦点を当て、彼らの身体感覚や臨場感を強調しているのに対して、書き換えられた「曠野の中」においては、敷設工事そのもののメカニカルな工程が前景化されている。すなわち、前者は人間が機械を使うという能動的な構図であり、主体としての人間が描かれている。これに対して、後者では機械のメ

カニカルな作動に人間が組み込まれ、巻き込まれていく様子が浮かび上がるのだ。

これまで見てきたように、「レール」から「曠野の中」への改稿によって、散文的な描写によって線的に読む受動的なものから、並列的・同時的に置かれた部分や断片を能動的につなぎあわせ、一連のシーンとして読者が再構成（モンタージュ）してゆくものへと変化したのである[37]。小柏裕俊が指摘するように、複数の「描写」＝ショットを結合するモンタージュは、それぞれの内部に潜んでいた全体性を揺さぶると同時に、新たな「イメージ」へと質的飛躍をもたらす。さらに、この「イメージ」は、もはや二つのショットの総和ではなく、まったく別の「第三のあるもの」へと変化をし、作品全体を規定するに至るのである[38]。

この読む行為の変化こそが、「レール」において近代小説的な主体として描かれていた人間を、「曠野の中」においては、非主体的にメカニカルな機械の作動や張り巡らされた事件・陰謀に巻き込まれる存在――すなわち新たな意味を帯びた「第三のあるもの」として提示し直すのである。

したがって、「レール」から「曠野の中」への改稿において、必然的に結末部分の描き方の変化と共に、作品の意味をも変容させることになったのである。

果てしない曠野に、新しいレールが日に日にのびていた。仕事は遅らしてはならぬ。いつどんな邪魔が這入らぬとも限らぬ、――地平線の向こうでは、共産ゲリラが自分たちの解放区を造っている。そして、その力はぐんぐんのびていた。

やつらの背後にまで！

（「レール」）

一望果て知れぬ曠野に／新しいレールは　日に日に延びていた。／どんな犠牲を払っても仕事は急がねばならぬ　いつどんな邪魔が這入らぬとも限らないからである。／地平の彼方では／ソビエート・ロシアが　腕を伸ばそうとしていた。

（「曠野の中」）

両者を比較すると、「レール」の結末部分は日本帝国主義や満鉄の横暴に対して、共産党勢力や共産党ゲリラがその植民地的な野望を打ち砕く希望の担い手として描かれている。

これに対して、改稿の「曠野の中」では、ソ連、共産主義勢力を単純に希望として描く視点は捉えられていない。

これは、単に「レール」を描いた当時、北川冬彦がプロレタリア文学運動に属し、戦後には政治的転向をしたからという側面だけでは説明できない。すでに見てきたように、「レール」から「曠野の中」への改稿は、主体的な人間像を中心に据える叙述から、さまざまな思惑や人間模様を含みつつも、権力のメカニズムに巻き込まれてゆく人間像を記録映画的に映し出す叙述へと転じており、その移行は結末の改変と密接に呼応しているのである[39]。

すなわち、「レール」では、マルクス主義的な解釈的フレームに基づき、物語は日本帝国主義の横暴を共産主義勢力の闘争が打ち砕くという構図が描かれている。しかし、改稿後の「曠野の中」では、日本帝国主義に当然与しないながらも、共産主義勢力に対しても批判的な距離を持っていることが示される。その為に「レール」であったようなプロレタリア文学運動の枠組みとしての抵抗史観・解放史観的な含意は抑制されるのである。

この志向は、題名を「レール」から「曠野の中」へと改題した点にも端的に表れている。「レール」では、敷設工の過程を描きながら単線的な階級闘争の推移とその挫折（および新たな希望）を線的に描き出していた。これに対し「曠野の中」では、さまざまな民族・権力・思惑という複数の線が交錯し、絡み合いながらも決して融合することのない空間として、中国大陸を捉えようとする方向へ変化しているのである。

ところで、北川冬彦は「シナリオ文学」において重要なのは、近代社会における複雑極まる事象や人間関係を「散文精神」[40]によって描くことであると述べる。すなわち、円や正三角形のような単純な構造として還元するのではなく、「精巧な時計のごとく、中心がいくつもできている」ことを示しつつ、それぞれが自律し合いながらも全体として一つの大きな円を構成することを求めている[41]。

この観点から考えれば、「シナリオ文学」の方法論を「長編叙事詩」に組み入れるというのは、単なる文体論的試みではなく、「散文精神」を物語構造に導入することであったと言える。したがって、「レール」から「曠野の中」への結末の改変は、複数の中心がそれぞれ自立しつつも、最終的に一つの中心に収束することなく、さまざまな利害や欲望が渦巻く空間＝「茫漠たるもの」[42]としての中国大陸＝「曠野」を、歴史（ドキュメント）として描き出そうとする試みであったと言えるだろう。

おわりに

小説「レール」から長編叙事詩「曠野の中」の改稿過程を見てゆくことで、「長編叙事詩」の意図が文体的な問題だけではなく、実は、歴史を如何に描くのかという叙述の方法論と密接に結びついていることが明らかになる。

「曠野の中」を収録した『氾濫』は、アジア、具体的には内蒙古周辺を題材にしている諸作品で構成されている。例えば、「古い鏡」は、日本人に下女がわりに使役されていた中国人の少年「ボーイ」の凶行を幻想的に描き、「早春」は、朝鮮と中国東北地方の境界に位置する間島にいた売春を糧に生活をする少女が事故で水死する顛末を悲劇的に描いている。「狐」では、モンゴルのとある荒野で引き起こされる牛糞の盗難事件を巡る顛末をコメディタッチで描き、「氾濫」では、中国で材木会社を営む日本人たちが氾濫した河のほとりで「宴遊会」の最中に起きる沈没事故に遭うさまを寓話的に表現されている。このように、内蒙古周辺という空間を舞台に、多様な事件の交錯を異なる視点を通して描き出している。

ここで最後に問うべきは、北川冬彦にとって「アジア」とは何であり、それをこのような「長編叙事詩」として描くことは、いかなる意味を担っていたのかという点である。

瀬尾育生は、北川冬彦と安西冬衛を共に、「外地」という辺境に自身を位置付けることで「アジア」という「アブジェクト」（クリステヴァ）――不快、おぞましさ、恐怖、罪障感――を作品空間にイメージとして取り込み、構築したと指摘している。だが同時に、日本＝「内地」の外部空間としての「アジア」＝「外地」が孕んでいた「混在郷（エントロピー）」とでもいうべき諸民族の共和と均質化のイメージに決定的な亀裂を走らせる契機から、かえって後退してしまったと批判している[43]。

確かに、瀬尾の批判は日本のモダニズム文学の脆弱性を鋭く突き、結局「アジア」という問題設定から北川も安西も後退したという事実の一面を言い当てている。ただ、ここで強調したいのは、確かに、両者は『亜』や『詩と詩論』の運動を共にし、中国大陸を舞台とする作品を描いたという点でしばしば並び評される存在であるにせよ、重要なのはむしろ両者の差異なのではないだろうか。

実際、両者の作品を比較すると、共通点以上に差異が際立つ。たとえば、同じく「満鉄」を題材とした安西冬衛の「北」（『大学の留守』、一九四三・一二）は、中国大陸における「満鉄」の位置付けに対する批判的視座を欠き、侵略的なイデオロギー無批判に媒介としている。同時に、それは自身の心情を増幅させて表象するための装置として機能しているのにすぎない。ある意味で、安西にとって「アジア」は、内面的に回収可能な対象にとどまっていたのである。

これに対して北川冬彦にとっての「アジア」は、自己の内部には容易に解消できない異質な存在であった。守屋貴嗣は安西冬衛との比較から、安西の場合は、「政治的社会的主題を正面から取り上げ創作することはな」く、一貫して「夢想のアジア」として仮構化していたと指摘する。これに対して、北川は、プロレタリア文学運動への加入前後を通じて、作品で描く「アジア」と現実の「アジア」との落差を埋められず、その葛藤が作品に横たわっているという[44]。

すなわち、北川冬彦にとって、容易には「アジア」が自己の内部に回収できない距離を伴う対象であったと言える。だからこそ「歴史の記録性と批評」[45]を媒介として、個人的心情や主観に還元・均質化されない多元的な歴史・現実として描こうとする「長編叙事詩」の方法論に接続しているのである。

しかし、北川冬彦は『氾濫』の出版の後に、「現実主義の詩」というエッセイにおいて、ルネ・ネリの「開かれた詩」と「閉ざされた詩」を引き合いに出し、現代において詩を書くことは物と物との間にある新しい関係を詩人によって再発見することであり、それを「内的神話」＝「詩的現実」という新しい現実主義（ネオ・リアリズム）として詩に再構成する営為であると論じた[46]。

換言すれば、「長編叙事詩」の試みからネオ・リアリズムの詩への展開は、外部としての「アジア」のモチーフが後退する一方で、内部としての戦後日本空間の歴史（ドキュメント）を記す方向へと移行していったと考えられる。それは同時に、戦前の作品と比して詩的強度が減退したのは、「アジア」という外部的な葛藤や緊張関係が失われてゆくこ

とであった。そして、「アジア」をいかに描くのかという問題は、未解決なまま戦後詩における課題として残されたのである[47]。

北川冬彦の詩作品の引用は、『北川冬彦全詩集』（沖積舎、一九八八・一）に、小説「レール」は、『日本プロレタリア文学集・20『戦旗』『ナップ』作家集（七）』（新日本出版、一九八五・三）に拠った。旧字体は適宜新字体に改めた。

（てらもと　しんたろう・映像・現代文化論研究室）

注

1 蔡宜靜、「北川冬彦のシナリオ版『阿Q正伝』の構成特色への分析 ――『長編叙事詩』の詩作との関連を探って」、交流協会 https://www.koryu.or.jp/Portals/0/nittaichiteki/fellow/2009/caiyijing2.pdf（2025/8/16 所得）

2 藤本寿彦「一九二〇年代の言語空間を旅する（二）―北川冬彦詩集『三半規管喪失』が表象した第四次元の世界」（『始更』二〇二〇・一〇）

3 梶井基次郎「詩集『戦争』」（『梶井基次郎全集1』、筑摩書房、一九九一・一〇）

4 北川冬彦「新散文詩運動への道」（『詩人の行方』、第一芸文社、一九三六・一一）

5 北川冬彦「詩人の眼」（『詩と詩論』第六冊一九二九・一二）

6 「北川冬彦氏に聞く」聞き手・鈴木沙那美（『早稲田文学』一九八一・一一）

7 北川冬彦「プロレタリア詩について」（『第二詩の話』、寶文館、一九五一・三）

8 佐藤静夫「解説」（『日本プロレタリア文学全集20『戦旗・ナップ』作家集7』、新日本出版社、一九八五・三）

9 城侑「北川冬彦『レール』」（『民主文学』一九八七・二）

10 菊池寛「自序」（『満鉄外史』、原書房、二〇一一・六）

11 北川冬彦『現代詩鑑賞上』、有信堂、一九七〇・二

12 王中忱「北川冬彦の植民地体験と詩法の実験―詩集『戦争』の時期を中心として」（『近現代詩の可能性』二〇一一・三）

13 例えば、大連埠頭で働く苦力を主人公とした詩に「汗」（『氷』収録一九三三、蒲田書房）という詩がある。苦力の「わたし」は、靴の先を節穴に引っ掛け、豆粕の荷を落としてしまい、その拍子に後方の仲間の苦力の舌を噛み切るという、グロテスクな事故の場面を描いている。ただ、和田博文（「大連のアヴァンギャルドと北川冬彦」『環』、二〇〇二）が指摘するように、北川は単純に同情的に苦力を描いているではなく、その事故の顛末を「主情的な言葉を排除する」ことによって、「フィルムのように言語化」しているのである。この手法は、のちの「レール」や「曠野の中」の苦力表象へとつながっていく。

14 北川冬彦「満鉄映画」（『純粋映画記』、第一芸文社、一九三六・一〇）

15 中野重治「漫談的月評――戦争と文学――」（『中野重治全集』第一〇巻、筑摩書房、一九七九・一）

16 北川冬彦「支那を描いた小説」（『詩人の行方』、前掲）

17 川村湊「植民地鉄道の夜」（『川村湊自撰集4巻アジア・植民地文学編』、作品社、二〇一五・五）

18 岡野幸江「満洲という最前線―「敷設列車」からみる一九二〇年代」（『平林たい子　交錯する性・階級・民族』、菁柿堂、二〇一六・六）

19 『南満州鉄道鉄道の発展と蒸気機関車』誠文堂新光社、一九七二・八

20 天野博之『満鉄を知るための十二章』、吉川弘文館、二〇〇九・三

21 原田勝正『増補満鉄』、日本経済評論者、二〇〇七・一二

22 藤枝丈夫は、義父の命令で中国に渡り軍関係のスパイ・浪人組織に従

事したが、郭松齢の反乱事件を契機に軍や権力との関わりに疑問を抱くようになった人物である。帰国後は東京でプロレタリア演劇運動や前衛芸術作家同盟に参加し、一九二九年一〇月には、プロレタリア科学研究所の創設に関与するとともに中国問題研究会を設立した。日中開戦までの期間を通して『中央公論』『プロレタリア科学』『文芸春秋』などに数多くの論文を発表するという、異色の経歴を有している。以下、「インタビュー　戦前のプロレタリア科学研究所の中国研究――藤枝丈夫氏に聞く」（『アジア経済』一九七四・一）を参考にしている。

23 平林たい子「敷設列車」（『平林たい子全集』第一巻、一九七九・四）

24 加藤聖文『満鉄全史「国策会社」の全貌』、講談社、二〇一九・七

25 郭璇「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象：プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし」（『比較文化研究』二〇二〇）に詳しい。郭璇が指摘するように、平林たい子の小説が単純な二項対立ではなく、むしろ苦力と日本人監督の立場の差異をなくし、最終的に両者の同一性を示しているとも読むことが出来る。しかし、同時に日本人現場監督と苦力との関係にフォーカスを強調したために、中国人内部における差異は捨象されることになる。

26 平林、前掲

27 北川冬彦「あとがき」（『長編叙事詩　氾濫』・『北川冬彦全詩集』、沖積社、一九八八・一）

28 北川冬彦「長編叙事詩と映画」（『映画への誘い』、温故堂出版、一九五二・一〇）

29 北川冬彦「シナリオの研究」（『シナリオ研究』一九三七・七）

30 北川冬彦「シナリオ詮議」（『シナリオ文学論』、作品社、一九三八・七）

31 蔡、前掲

32 北川「あとがき」（『氾濫』、前掲）

33 北川冬彦「シナリオの文章」（『シナリオの魅力』、社会思想研究会、一九五三・七）

34 橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学』、水声社、二〇一四・九

35 櫻井智佳恵「シナリオにおける独自性――北川冬彦『阿Q正伝』を中心に――」（『日本文学文化』二〇一一）

36 北川冬彦『現代映画論』、三笠書房、一九四一・九

37 北川冬彦「シナリオの研究」（前掲）において、小説とシナリオとの違いを、「作家の頭脳に反映させる現実の世界」であり、シナリオは小説とは違い、直接の反映ではなくて「スクリーイン・イメーヂ」という媒介を必然的に経由することで完成すると述べている。換言すれば、読者は映画を観るように、脳内で能動的に再構成する作業を要するのである。この読者の能動性はまた、「長編叙事詩」における言葉の縮減性や断片性、並列性においても要請されている。

38 小柏裕俊『モンタージュ小説論――文学的モンタージュの機能と様態』、水声社、二〇一九・一二

39 北川冬彦は戦前から記録映画についての関心を示しており、「シナリオ文学」における「環境」概念に大きな影響を受けている。戦後においても「記録」と「歴史」という側面からロベルト・ロッセリーニの映画『戦火のかなた』に代表されるネオリアリズモの方法論と、自らの「長編叙事詩」の方法論の親近性を語っている。

40 山本峻「北川冬彦の映画論――「純粋」と「散文」の背景など」（『FB』二〇〇二）。北川冬彦の「散文映画」について、横光利一の「純粋小説論」、広津和郎の「散文精神について」、アランの『散文論』と関連づけ、当時のトーキー映画への移行といった動向を踏まえて論じている。さらに、映画と詩の交差点として北川冬彦の詩を論じる必要性を指摘しており、示唆に富む。

41 北川冬彦『現代映画論』、前掲

42 北川冬彦「詩の悠久感」（『カクテル・パーティ』、宝文館、一九五三・八）

43 瀬尾育夫「寓意のなかのアジア　安西冬衛と北川冬彦」（『あたらしい手の種族　詩論1990–96』、五柳書院、一九九六・四）

44 守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、二〇一二・三

45 北川冬彦『詩の話　現代詩とは何か』、角川書店、一九六六・一〇

46 北川冬彦「現実主義の詩」（『現代詩十講』、宝文館、一九五一・三）

47 戦前、小熊秀雄もまた、アイヌや朝鮮人を主人公とする「叙事詩」を書き、抵抗の形式とした。この点における北川冬彦と小熊秀雄の共通性については、別稿に譲る。

10.14943/rjgshhs.25.r 49

玄鉄絢『少女セクト』論
――ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成――

郭　如梅

要　旨

本稿は玄鉄絢の「エロマンガ」と呼ばれる『少女セクト』（二〇〇三～二〇〇五年）を研究対象として、ゼロ年代の〈百合〉表象におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成について考察するものである。

女性同士の性表現を描くことには制限がある。男性同士の性愛を描く〈ＢＬ〉ジャンルと比べ、女性同士の連帯をテーマにする〈百合〉表象は性表現の許容範囲が厳格である。他方、「レズ」は従来の男性向けの性的消費物であるが、性表現のクライマックスを保証するペニスの射精という運動表現が描かれないため、レズビアンを主題として取り上げる「エロマンガ」作品は少ない。

それに対して、『少女セクト』は、マンガにおけるポルノグラフィの共通する表現手法を踏まえ、「エロマンガ」の「レイプ・ファンタジー」と、〈ＢＬ〉の「愛ゆえのレイプ」と「魅力の証明としてのレイプ」といった物語の紋切り型を用い、女性同士のレイプ表象を描き出す。また、女学校と寄宿寮という舞台設定を通じて「ハーレム」を描写する。

レイプ表象では、「攻めの被害者」と「受けの加害者」という女性同士ならではの力関係により、被害者の身体を女性化する機能が停止される。ハーレム表象では、積極的に能動性を放棄する支配者の主体性を通じ、支配と従属の権力関係が転倒される。グループセックスの描写を通して、日常生活と性生活の分離と、性役割と権力関係の不連続性を浮上させる。

このように、本作は「エロマンガ」というメディアの特性に基づき、レズビアンの性表現を開拓する。さらに異性愛規範への収斂に抵抗しようとする少女同士の親密圏を顕在化する『少女セクト』は、「エロマンガ」の例外としてゼロ年代の〈百合〉ポルノグラフィの可能性を切り開く。

第一節　はじめに

女性同士の性表現を指すカテゴリーには、異性愛男性をターゲットするポルノコンテンツにおいて、「百合」、「レズ」、「GL（ガールズラブ）」といった三つの言葉がある。媒体から見れば、マンガやアニメの作品には主に「百合」が使われる。「GL」は「百合」の類語として扱われる。AV（アダルトビデオ）の作品には、「レズ」が用いられ、男性の消費物としての性表現となる。一方、幅広い読者層を持つ「百合」作品には性表現が少ない。なお、「BL」と呼ばれる男性同士の性表現を描くジャンルと比べれば、「百合」作品では精神面の繋がりが強調される[1]。性描写があるが、精神面の要素を重視する。

このように、「百合」においては、性表現の許容範囲という問題点が浮かび上がる。ここでは、一旦「百合」というジャンルが形成された時期から変遷史を検討する。今野緒雪の少女小説・ライトノベル『マリア様がみてる』（一九九八～二〇一二年）が巻き起こしたブームにより、女性同士の連帯に対する消費の需要が高まった。それに応じて、専門誌『百合姉妹』（二〇〇三～二〇〇四年）及び後継誌『コミック百合姫』（二〇〇五年～）が創刊された。発信メディアの獲得に基づき、女同士の親密な関係を描くマンガの作品群は、誌名を反映し「百合」という名称で定着した。また、少女マンガの悲劇的なレズビアン像と異なり、『百合姉妹』と『コミック百合姫』が示したゼロ年代〈百合〉表象は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを横領し、レズビアンの「恋愛、セックス、事実婚」をラブコメディの形式を通じて描いている[2]。

一方、『マリア様がみてる』に用いられる女学校の擬似的な姉妹関係という紋切り型により、〈百合〉表象は戦前期の少女小説の水脈を受け継いだものと位置付けられる[3]。少女小説との繋がりに基づき、女学生に要請される性規範は〈百合〉表象にも押し付けられるようになった。ペニスを挿入する／されるポジションからの「攻め／受け」という役割分担を定義する〈BL〉と並べてみれば、性表現をめぐって議論される〈百合〉の定義問題は、マンガにおける同性同士の性表現に内包する男女の非対称性を照射する[4]。

マンガの性表現という点から〈百合〉とレズビアン表象を比較すれば、女性同士の性行為を描くことの困難さが浮上する。津雲むつみのレディースコミック「Moonlight Flowers 月下美人」（一九八九～一九九〇年）は、否定的なステレオタイプに反してレズビアンを肯定的に描いたことが評価される[5]。男女の性行為の暴力性を見せる動的な図像表現と対照的に、レズビアンの性表現は静的な表現技法を用い、キャラクターの安心感が強調される[6]。レズビアン表象として評価されるやまじえびねの『LOVE MY LIFE』（二〇〇一年）[7]も、レズビアンの性表現には静的図像表現が用いられ、性行為に伴う身体の運動表現が描かれていない。

専門誌『百合姉妹』及び『コミック百合姫』においては、「百合コミックスに十八禁ばりのものは収録していいものかどうか?」[8]という作家の配慮が示されている。『百合姉妹』三号では「裏・百合姉

妹」という企画があり、二頁の紙幅を割き、メディア横断で官能小説、成人雑誌、ゲームなどのポルノコンテンツを紹介する[9]。一方、「キスまでで十分！それ以上進むと十八禁雑誌のレッテルを貼られてしまう。（宮崎県／一向聴）」[10]という読者の意見が途絶えることがない。その結果、性表現に特化した姉妹誌『百合姫 Wildrose』の創刊は二〇〇七年まで待たなければならなかった[11]。

性表現に関わるこうした議論を踏まえると、玄鉄絢の「エロマンガ」『少女セクト』の特殊性が浮上する。二〇〇三～二〇〇五年に男性向けの成人コミック雑誌『コミックメガストア』に掲載されたものの、『少女セクト』は〈百合〉表象の代表的な作品として捉えられた[12]。読者層の違いに伴い、「エロマンガ」から〈百合〉マンガに移行するというジャンル横断がなされた。このジャンル横断の再評価は、女性同士の性表現に対する許容範囲の両極端も転倒する。そして、「百合」というカテゴリーが定着するゼロ年代において、『少女セクト』は女性同士の性表現の可能性を示した先見的な作品と言える。

こうして、発表時期の先駆性、異なる読者層の交差、ジャンルの横断といった特殊性から、「エロマンガ」と〈百合〉マンガの両方の例外と捉えられる玄鉄絢『少女セクト』を研究対象として取り上げる。そして作品内部における女性同士の性行為の描かれ方に焦点を定め、『少女セクト』はどのように「エロマンガ」の紋切り型と〈BL〉マンガの表現技法を複合的に用い、女性同士ならではのポルノグラフィを描き出すのかを考察することが本稿の目的である。

第二節　性表現の紋切り型

『少女セクト』[13]は女子校と女子寮を舞台にし、性行為を繰り返す女学生たちの人間関係を描く「エロマンガ」である。親族を含めて男性キャラクターが排除される性別隔離の特殊空間に合わせ、校外の世界や人間関係は殆ど描かれていない。主人公の一人である藩田思信が属する寮は、「ここの子はね、みんな私生児なの」、「親が今どこで何してるかも知らないわ、だからこの寮が自分の家、寮生が本当の家族よ」（一巻一七三頁）というセリフにあるように、作中の登場人物は定型的な家族像に縛れていない。

また、「少女」たちに課される性的抑圧が笑い要素として用いられる。桃子は男女共学の転校先で毎日男子学生からの恋文を迷わず全て処分する。それに対して、男子学生は「流石は女子校育ちだ！繊細な男心を全然わかってねぇ！」「女子校ってもっとウブでおしとやかな女ばっかりだと思ってたよ俺…」（二巻一五五頁）と落ち込む。純真無垢な女性像を転倒し、少女たちの性的欲望に関して男性を徹底的に排除する[14]。

物語の構成から見れば、一巻に収録されている各エピソードはそれぞれ独自のストーリーがある。もう一人の主人公の高校二年生の内藤桃子は風紀委員として、七組の登場人物の多様な性関係を進行させる役割を担う。その裏に、女学校の人気者で問題児でもある藩田思信の姿が現れる。同じ二年生の思信はハーレムのように寮生と愛情を共有しているが、桃子への恋愛感情を告白する。二巻に移る

と、桃子と思信が中心になった複数の三角関係が展開される。思信は桃子と学級担任との恋愛関係に嫉妬しつつ、上級生にレイプされる。その事件で、加害者に暴力を振るった桃子が転校させられ、思信の退寮に伴ってハーレムは解散する。その後、再会を果たした桃子と思信は継続的な恋愛関係を築き、モノガミーにとらわれない親密圏で共同生活を送る。

物語内容を分類すると、「恋愛」、「ハーレム」、「レイプ」といった三つのカテゴリーに分けられる[15]。「恋愛」ものが六篇で、「ハーレム」ものが七篇であるために紙幅はほぼ同様に見える。しかし、連続性のないストーリーが展開する「恋愛」ものに対して、「ハーレム」ものでは、主人公と無関係の九話を除いて他の六篇は全て思信関連の内容である。また、「レイプ」表象は主人公の人間関係に決定的な影響を与え、性的同意の有無をめぐり、ハーレム表象の権力関係と対照的に描かれる。本稿は権力関係の非対称性に着目し、「ハーレム」と「レイプ」のエピソードを主要な研究対象にする。そして「ハーレム」を性的同意のある支配／従属の関係性として、「レイプ」を性的同意のない関係性と捉える。

第二節第一項　ポルノグラフィのマンガ表現技法

「レズ」というカテゴリーの存在自体が示しているように、女性同士の性行為は異性愛男性の性的消費物である。ただし、「成人コミックジャンルでは、昔からレズものが敬遠されてきた歴史もある。女性同士のセックスゆえに、「射精」でフィニッシュができず、オカズ作品として男性読者に不向きとされていたからだ」[16]。また、〈百合〉表象をけん引した『マリア様がみてる』に関して、「シスター・フッドを描いた作品を楽しむ男性読者が増加しているにもかかわらず、その需要に応えるエロ漫画は玄鉄絢の女子学園もの『少女セクト』などが目立つもののまだまだエッジに止まっている」[17]。

他方、共通点を見れば、男女の性行為を描く男性向けの「エロマンガ」と女性向けのレディースコミック、そして男性同士の性描写をテーマにする女性向けの〈ＢＬ〉マンガは、読者のジェンダーやキャラクターのセクシュアリティにもかかわらず、「受け」という挿入されるポジションが構図の中心を占める[18]。加えて、「第三者的視点から攻めと受けがなす性行為を眺める体験である」[19]という共通点がある[20]。このように、ペニスと射精に関わる運動表現の欠落という女性同士ならではの身体的特徴があるものの、「受け」の中心化と流動的な読者の視点といったマンガ表現の共通点は、異性愛とは異なる性描写の可能性を育む。

第二節第二項　物語定型としての「レイプ」

物語内容の共通点を言えば、「レイプ」表象は議論の焦点である。レディースコミックでは、レイプ要素を採用していないとは言えないが、キャラクターの主体性と読者の安心感を重視している[21]。それに対して、〈ＢＬ〉と「エロマンガ」に描かれるレイプ表象は紋切り型を明確に形成した。

性暴力の責任を被害者に押し付けて消費する「レイプ・ファンタ

ジー」[22]について、被害者が「セックスによって心身が劇的に変化する」[23]展開と、加害者が「強制力行使によって支配・所有する／される」[24]快楽が「エロマンガ」の中核である。他方、溝口によれば、〈BL〉のレイプ表象は二つのパターンに分けられている。一つは「愛ゆえのレイプ」[25]と名付けられ、主人公の二人の間で生じるレイプで、性暴力ではなくて加害者の愛情を被害者に伝える行為と見なされる。もう一つは「魅力の証明としてのレイプ」[26]で、主人公と第三者の間で生じるレイプである。このパターンでは、主人公の性的な魅力を可視化しつつ、「女役」の性役割を与える機能が働く。このように、受けの客体化を娯楽として楽しむ「エロマンガ」と異なり、〈BL〉のレイプ・ファンタジーは異性愛規範の非対称な権力関係を露呈すると同時に、「攻め／受け」の形式を通して再強化してしまう一面がある。それでは、既存のレイプ表象の紋切り型と比較して、『少女セクト』はどのように女が女をレイプすることを描くのだろうか。

第三節　レイプ表現定型の転倒

第三節第一項「攻めの被害者」の創出

『少女セクト』において、レイプを描くエピソードは四話、五話、一二話がある。レイプ・ファンタジーの紋切り型の採用に基づき、三つのエピソードは異なる女性同士の性暴力を見せる。四話と五話の物語内容は主人公の二人と直接に関わっていないが、登場人物の関係性は思信をめぐる親密圏と対照的に描写されている。

四話では、養蓄部をハーレムとして多数の下級生を支配する三年生の鷲見雛が、二年生の弓梢朋衣をレイプして支配する。転校の初日に、朋衣は雛に誘われ部活を見学する。人気のない部室では朋衣は雛からのキスを積極的に受けるが、キス以上のスキンシップを拒否する。そして朋衣は雛に殴られ、「舐めろって言ったのよ」、「もっと奥まで舌を入れるの」（一巻九四頁）とオーラルセックスを強要される。朋衣は女性器に対して明確な恐怖感と嫌悪感を見せるが、オーガズムに達した雛の反応を見た朋衣は、表情が苦痛から困惑に移り変わる。そこから朋衣が消極的な姿勢から一変、雛からの命令を無視し、積極的に雛の乳房や膣に刺激を与える。その後、満足の表情で髪の毛を整える。翌日、制服のネクタイの代わりに首輪を付けている朋衣は、「犬も悪くないかなぁって思って」（図一）と桃子に養蓄部に入部したことを伝え、迎えに来た雛に連れて行かれる。

性行為への態度は途中で転倒するものの、雛が挿入される側で、朋衣が挿入する側であるという構図は変わっていない。図像表現から見れば、受けのポジションを担う雛の身体は「エロマンガ」の紋切り型に沿って構図化される。また、物語内容では、被害者の朋衣のセックスによる心身の変化は明瞭である。特に、朋衣が犬のペットプレイに積極的に参加することになる結末は、「脅迫が不要になる」[27]という「エロマンガ」の凌辱調教の典型的な展開に合致している。

従来のパターンに沿った図像表現と物語展開に反して、キャラク

図一　玄鉄絢『少女セクト』一巻（メガストアコミック、二〇〇五年九月）一〇一頁。

ターの権力関係では紋切り型にズレを与える力関係が描かれている。朋衣と雛の関係性は、「挿入する／挿入される」と「攻め／受け」という性行為の構図の上に、「被害／加害」と「服従／支配」というねじれた力関係を築く。このように、注目すべきなのは、膣に身体の一部を挿入する朋衣は性暴力の被害者である。挿入される側の雛は加害者である。これは、男性器が欠如しているからこそ成立する。「攻めの被害者」と「受けの加害者」という組み合わせは、挿入される側を被害者と捉える既存の認識と異性愛規範に基づく連続性に疑問を投げかける。

第三節第二項　「愛ゆえのレイプ」定型の転倒

五話では、「エロマンガ」の紋切り型に合わせ、〈BL〉の「愛ゆえのレイプ」が採用される。舞台になった桃子の寄宿寮の中では、桃子に片想いする三年生の鳰旦蕗は同じ三年生の犬吠崎雪華に求愛されている。旦蕗は雪華に寮の公共空間で拘束され、「他のみんなに聞こえるわよ」（一巻一一五頁）という威嚇に屈服し、性的刺激を強制的に喚起される。旦蕗は雪華を桃子の代用品としてオーガズムに達するが、加害者の雪華は涙とモノローグを通して失恋の悔しさを見せる。

旦蕗と雪華の権力関係から見れば、加害者は挿入する側で、被害者は挿入される側として設定されている。そのために、規範的なジェンダー秩序は揺らいでいない。しかし、被害者の旦蕗は朋衣と異なり、性行為以降も劇的な精神の変化がないという展開は、「エロマンガ」の紋切り型と〈BL〉定型とにズレが生じる。〈BL〉定型においては、キャラクターの恋愛成就に導く機能の停止に伴い、ロマンティックな描写に不可視化されるレイプの暴力性が露呈される。「エロマンガ」の紋切り型と比較すれば、被害者の旦蕗がレイプされても、桃子への恋愛感情の顕在化を通して性的主体性が再強化される。同時に、加害者の雪華は対人関係の承認欲求が満たされない。「エロマンガ」のレイプ・ファンタジーは支配／服従の権力関係を消費するものの、その中核には他者との関係性の希求が潜む。その意味で、失恋する雪華の結末は、従来のレイプ・ファンタジーと異なる濃密な感情を提供するように描かれている。

第三節第三項　性役割と権力関係の不連続性

一二話は主人公の思信の性被害を描くエピソードである。学園の人気者である思信はハーレムを持っているが、三年生の大神小百合からの求愛を敬遠する。ストーカー行為で思信の桃子への恋愛感情を知った大神は、桃子を転学させるように計画する。そして大神の予想通りに、思信の性被害を目撃した桃子は激怒して暴力を振るってしまう。その結果、桃子を転校させて、思信のハーレムは退寮と共に解体する。

レイプ表象の描かれ方では、一二話は、四話と五話に描かれている女性同士の性暴力表象に加えて、〈BL〉の「魅力の証明としてのレイプ」という紋切り型を採用する。

したがって、一二話では「他者を支配する快楽」という「エロマンガ」からの特徴と「過剰な愛情の可視化」という〈BL〉の要素が用いられる。ただし、被害者との関係性を一方的に作ろうとする四話と五話の加害者と異なり、大神の犯行動機は主に思信の対人関係と親密圏を妨害し、思信との恋愛関係を希求していない。その振る舞いは恋愛成就の妨害として捉えられ、「エロマンガ」の「鬼畜凌辱系」と呼ばれる作品群の破壊衝動に近似する[28]。救済のない鬼畜凌辱系の定型に及ばないが、性行為に関わる恐怖心と嫌悪感を消費物として描写する点は類似する。また、性表現の許容範囲が比較的緩い〈BL〉では、暴力描写を商品として特化する作品群は二〇一〇年代で形成された[29]。その点で、ゼロ年代前半に女性同士の性表現で対人関係を求めていない暴力行為に触れる『少女セクト』一二

話は先鋭性を示している。

また、思信と大神との性行為は「攻めの被害者」と「受けの加害者」という力関係を通して描写される（図二）。風紀委員室に閉じ込められた思信の不安と不快の表情とは対照的に、思信の両手を掴んで自らの乳房に重ねる大神は笑顔を見せる。そして大神は思信の左手の指を自らの女性器に触らせるのみならず、「あなたも一緒に気持ちよくならなきゃ…」（二巻一一七頁）というセリフに合わせて思信にオナニーを強要する。

しかし、望まない性的刺激に泣き出した思信を一瞥もせず、大神は思信の指を道具のように扱い、一人で性的快楽を楽しんでいる。「もっと奥に…」「指を…」「全然痛くないよ…」という片言のセリフに加え、笑い声と喘ぎ声が混在する「あは」「はッ」「はぁッ」（二巻一一八～一一九頁）などの音声表記が写植から手書きの文字に移り変わる表現を通じ、大神の理性を失っている精神状態が示されている。数多くの効果線と共に配置される「わたッ、私ッ、ィあッ、あなたに、ひッ、思信に犯されて」（二巻一一九頁）というセリフは、大神の一人完結の性的快楽と狂気を通して、女性同士の性被害を四話と五話より暴力的に描き出す。

一二話の大神、思信、桃子の三角関係は〈ＢＬ〉の「魅力の証明としてのレイプ」という紋切り型を構成する条件を満たす。思信の性的魅力が可視化されるものの、「攻めの被害者」と「受けの加害者」という構図により、〈ＢＬ〉の紋切り型の「受けに女役の地位を与える機能」が成立しない。攻めの性役割と被害者との齟齬を通じて、〈ＢＬ〉における「加害＝男役＝攻め」と「被害＝女役＝受け」という異性愛規範の二項対立との差異を露呈する。

また、四話と五話の被害者と加害者の間では性役割分担が変わっていないが、被害者の態度が消極から積極になるという転倒的な展開が描かれる。それに対して、一二話では始終消極な態度を示している思信は、加害者の大神に性役割を「受け」から「攻め」に強要される。

大神は「そんなに私に触られるのが嫌？」「なら代わりにあなたが触ってくれる？」と言い出す（二巻一一三頁）。大神のセリフによれば、思信は攻めと受けの両方務めることができる。〈百合〉表象の特徴と捉えられる攻め・受けの交代可能性は提示されるが、一二話の思信の性被害は攻めのポジションを通して描かれている。思信はハーレムの「支配」者に与えられる「男役」と「挿入する側」の性役割と性的実践の遂行を強要される。

男からの身体的欲求と情緒的支援を担わされる女という力関係と異なり、支配者として振る舞っている思信は、常に身体的な接触を用いて少女たちの情緒的な要求を満たす。大神にレイプされた直後、桃子に「あなた程の人がなんであんな人のいいようにされてるんですか」と聞かれ、思信は「だって、女の子に手は上げられないよ」と答える（二巻一二六頁）。異性愛規範から逸脱する思信の主体性は、女性同士の大神に利用されてしまう一面が提示されている。

こうして一二話では、女の性的主体性の限界と異性愛規範に基づく「支配」、「男役」、「攻め」の連続性が浮上し、〈ＢＬ〉の紋切り型

図二　玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）一一三頁。

で特化された「暴力の宛先にされる女役・受け」という機能が働かない。『少女セクト』における女性同士のレイプ表象は、被害者の身体の性別化を可視化し、性役割分担と権力関係との不連続性を指摘している。そしてレイプ表象の紋切り型に内包されるジェンダー、性役割、性的実践の首尾一貫性にズレを与える。

第四節　〈百合〉ハーレムの形成

第四節第一項　恋愛関係の多様化

レイプという暴力的な性表現に対して、性的同意のある非対称な関係性はどのように女性同士の性行為と組み合わせて描かれるのだろうか。ハーレム表象については、思信が持つハーレムは少年マンガに描かれるハーレムと複数の相違点がある。例えば、高橋留美子の『うる星やつら』（一九七八～一九八七年）において、ヒロインのラムと三宅しのぶは排他的な恋愛関係を確保するために、主人公の諸星あたるをめぐって競合的な関係性になってしまう。登場人物の覇権的なモノガミーの親密性への追求を通じて、異性愛男性中心の権力関係が再強化される。

『少女セクト』の中のハーレム表象と比較すれば、朋衣の性被害を描く四話では雛は複数の下級生を支配して競争させ、養蓄部の部活という形式を通じてハーレムを持つ状況が提示される。他方、「今から私は思信様の犬です」（一巻四一頁）と宣言する燕条寺真弥は、既に思信に従属している諏訪部麒麟の勧誘により、思信のハーレムへの編入を決める。真弥は脅迫されることなく正気を保っている精神状態で、三回の問答を経て、思信との主従関係を確定する。

ただし、雛のような「いたいけな下級生を次から次へと毒牙にかける養蓄部部長」（一巻一〇三頁）という徹底的な悪役に及ばないが、思信の真弥に対する支配は「強請」と位置付けられる。同時に、真弥は「ご満足の様子」で「思信の忠実な犬」（一巻五五頁）と記されている。ここでは、暴力的な性表現と非対称な権力関係の複雑さが浮き彫りになる。人物紹介文によれば、謝罪としての性交渉の強要や主従関係の契約のみならず、思信が事前に真弥の性的同意を得られても、真弥が認識不足の状態で身体への虐待やグループセックスなどを行うのは、暴力行為として意味付けられる。その半面、真弥と思信のロマンティックなキスシーンに合わせ、真弥の献身的な愛情は繊細に描き出される。このように、思信と真弥の関係性では、暴力的な性表現と少女の儚い恋愛感情が織りなされている。

主従関係になっても、思信は真弥の恋愛感情の欲求に丁寧に対応しようとする。こうして、思信、真弥、桃子の三角関係は覇権的なモノガミーの形式と異なる恋愛関係を示している。思信の桃子への恋愛感情に嫉妬してしまう真弥に対して、思信は「私がまーや達に気を払えなかったから」、「ごめんね、自分の事ばっかりで…でもお願い…もうちょっとだけ頑張らせて」と謝る（二巻六三頁）。思信は「どうかこれからも私のそばを離れないでいて」と要求するが、真弥はすぐ受け入れない。代わりに「でも私…彼女にまたヤキモチ焼くかも知れませんよ」と誠実に思信への独占欲を打ち明ける。「その

時はまた一緒に反省しようよ」と思信が提案し、二人は討議を経てそれぞれの関係性を調整し再確認する（二巻七六頁）。

二人の間での流動的な権力関係は性表現を通して可視化する。「触ってもいいですか」と確認する真弥に対して、「どこでも好きなだけどうぞ」という許可を得て思信の膣に指を挿入する（二巻六九頁）。受けのポジションで真弥がもたらす性的刺激と安心感を楽しんでいる思信は、真弥に自分の顔の上に座るようにと指示し、いわゆる顔面騎乗という性交体位を要求する。座られる側が呼吸などの行動を拘束される顔面騎乗では、支配者が従属者の顔の上に座るパターンが多い。その権力関係の反転に気付き、真弥は動揺と躊躇を見せる。そこで、思信は再び支配者のポジションをパフォーマンスし、「私の言う事が聞けないの？」（二巻七一頁）と真弥に甘える。こうして、二人は優位にいる従属者と劣位にいる支配者という姿勢でセックスを行う。

第四節第二項　権力関係の転覆

思信のハーレムのもう一人のメンバー、諏訪部麒麟の物語に移る。真弥と異なり、麒麟と思信の主従関係の土台は恋愛感情ではない。思信が桃子に拒否された夜に、麒麟は吉岡柴という同じ寮の後輩に求愛される。柴の恋愛感情を認識した麒麟は、思信との親密性を「思信様に服従している私が好きなの」、「思信様がいないと、私、ただれた生活しか出来ないから」（一巻一六三頁）と説明する。麒麟と思信との依存関係を知っても、柴は麒麟との性交渉を執拗に求める。柴の積極なアプローチに基づき、麒麟は柴を自らの従属者として思信のハーレムに編入させる。

麒麟と柴の親密性は思信と真弥の模倣である。ただし真弥の性生活に執着心を持たない思信と異なり、麒麟は柴への独占欲を明確に示している。柴とのグループセックスに興味を示している真弥に対して、麒麟は「思信様ひとすじだったんじゃないの？」「柴には手を出さないで頂戴」（一巻一八〇頁）と不満を言う。そこで、真弥は麒麟を拘束して受けのポジションにさせ、「本当はきーちゃん背中攻められるの大好きなの」と言いながら、柴を攻めのポジションにさせる（一巻一八二頁）。すると、柴の丁寧なキスを通じて背中からの性的刺激を得た麒麟は真弥の腕の中で脱力する（図三）。この女性器に関わらない性表現では、麒麟と柴の権力関係は性役割の交代によって転倒する。さらに真弥の主導により、三人のグループセックスは麒麟の受けを中心に展開する。

ここでは麒麟受けのグループセックスを二話の真弥受けのグループセックスと並べ、性表現を通して表出される権力関係を比較したい。二話のグループセックスにおいて、支配者の思信は攻めを担い、従属者の麒麟は従属者の真弥を拘束し、思信の指示通りに真弥の身体に性的刺激を与える。オーガズムに達した真弥を見て、「考えてみたら新入りが一人で気持ち良くなってるのは生意気ね」（一巻四八頁）と言い出す思信は、麒麟の乳房に性的刺激を与えるように真弥に命令する。従って、最も受動的な立場にいる真弥は、専ら受けを担うのではなく、攻めと受けの両方を行う。また、思信のセリフ

図三　玄鉄絢『少女セクト』一巻（メガストアコミック、二〇〇五年九月）一八三頁。

によれば、女性同士の性行為においては、受けという性役割は劣位ではなく、性的刺激を最も楽しめるポジションであることを示している。この点でも『少女セクト』の性描写は異性愛規範による「受け、女役、劣位」の連続性との距離を見せる。

二話を踏まえ、一巻のおまけはさらに柴の編入によってハーレムの権力関係が転倒される。支配者の思信が不在で、柴は最も従属的な立場で性交渉に参加し、二話の真弥のように攻めと受けを同時に担う。真弥は麒麟の行動を拘束して柴に指示を出すが、麒麟との親密性は対等な協力関係である。麒麟は真弥の思信への恋愛感情を理解し、真弥は麒麟の柴への独占欲に配慮する。こうして、真弥は三人の間の性交渉を主導するが、それは擬似的な支配者のポジションではなく、麒麟と柴の転覆的な性

的実践をサポートするための行動である。頭を真弥の股間に置く麒麟、麒麟の女性器をオーラルセックスする柴、柴の女性器を舐める真弥、三人の性交体勢が三角形を形成する。その錯綜的な絡みの中で、麒麟は真弥の顔と柴の女性器を見上げ、微笑みで「なんかちょっとしあわせ」（一巻一八五頁）という。このように、真弥と麒麟の性役割の交換と、支配者の思信と二重の従属者の柴の交代によって、性役割と権力関係の流動性、そして両者の不連続性がハーレムのグループセックスを通して示されている。

また、密かに嫉妬した真弥と異なり、麒麟は思信をエレベーターの中に閉じ込め、単刀直入に「内藤さんに会うためにわざわざ私を迎えに来てんでしょ」、「私に気を使って?」（二巻八九頁）と詰問する。「それでも私の事が好き?!」と泣き出した思信に、麒麟は「好きとか嫌いとかじゃない。思信は誰にも渡さない。」（図四）と答え、恋愛感情と異なる執着心を示している。その定型からはみ出る対人関係の欲求に、思信は「私にどうしろって言うの…?!」と動揺を見せる。

そこで、麒麟は理想とする権力関係を打ち明ける。「私はね……思信の召し使いになりたいの。そしたら思信は私に傅かれてお姫様みたいに暮らすの。着替えもお風呂もみーんな私がやってあげる。それで毎晩、裸で私を抱いて寝るの…！」「今日はお口でしてさしあげます…し・の・ぶ・さ・ま♥」（二巻九九頁）という長文の告白が、思信がオーガズムに達するシーンに配置される。つまり、麒麟は従属者のポジションを貫徹するものの、支配者の思信の能動性を日常生活から性行為まで奪うことを希求する。思信はその要求を受け入れ、能動性を積極的に放棄し、そして支配者としての主体性が回復する。

麒麟の恋愛とは異なる対人関係の欲求は、アナルセックスを通して特殊化される。「何でおしりなの」と困惑して質問する思信に対して、麒麟は膣への挿入を「思信の好きな人のためにとっといてあげる」と答える（二巻九八頁）。その意味付けは男女の膣性交に縛られているように見えるが、「内藤さんとの事は絶対ジャマしないよ」（二巻一〇〇頁）というセリフもある。両者を合わせて読めば、麒麟は思信の恋愛感情も尊重して共存しようとする。

第四節第三項　ハームレという親密圏

性被害の事件で、思信は寄宿寮を出て、女学校のハーレムは解体する。麒麟は従属者の証である私服を脱いで制服に着替え、ナレーションという客観的なポジションに移行し、思信のことを見守る。桃子と思信は一三話で再会を果たして恋人関係を築く。そして二巻のおまけで大人になった桃子、思信と真弥はハーレムを再構築する。

麒麟と交代してハーレムに編成された桃子は、思信にも真弥にも対等な関係性を持ち、排他的な独占欲も薄くなる（図五）。一三話の再会で、思信からの「私とまーやで一晩中可愛がってあげるから」というグループセックスの誘いを、桃子は「私は思信がいいの！」と断る（二巻一四九頁）。しかし、成人になった共同生活では、桃子は真弥と二人きりで性交渉をし、「事と次第によっては真弥ちゃん

図四　玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）九〇頁。

図五　玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）一八四頁。

と駆け落ちしてやるんだから！」（二巻一九三頁）と思信への不満を発散する。同僚からの猛烈な求愛を受けて救援を呼ぶ思信に、「ちゃんと家に帰って来てくれれば」（二巻一九九頁）と答える。

モノガミーではない恋愛関係を土台にし、桃子のポジションはこれまで一致してきた日常生活と性的実践にズレをもたらし、権力関係と性役割の不連続性を浮き彫りをする。桃子の人物像を振り返れば、担任教員との恋愛関係を描く八話では、桃子は隼砥先生に「桃子はしっかりものだからさ」と褒められる一方、「桃子がいつも私の事、子供扱いするんだもん」、「私の方が年上だし、背も高いし、車だって持ってるんだよ」と言われる（二巻一四〜一五頁）。そこで桃子は「どうやって甘えていいか、わからない」（二巻一六頁）と打ち明け、隼砥先生を性交渉を誘う。このように、教員／生徒の権力関係においても、桃子は能動性を示しながら受けの性役割を積極的に担う。

思信との恋愛関係が定着する一三話では、相互にオーラルセックスをする二人は攻めと

受けの役割を同時に担っているが、性行為に慣れている思信が主導する側として描写されている。他方、二巻のおまけでは、休日出勤の思信を玄関まで見送る桃子は男女の性役割をなぞるように見えるが、直ちに真弥からの性行為を受け、攻めのポジションを果たす。つまり、桃子は日常生活で常に能動的なポジションにいるが、性的実践では攻めと受けの性役割を流動的に担う。桃子がもたらす権力関係と性役割の非連続性によって、思信は愛される男役と支配者のポジションから解放される。大神の事件で男役を強要された思信は、会社の同僚に襲われても明確に拒絶し、身体の自己決定権を意識しはじめるように描かれている。

第五節　おわりに

本稿は玄鉄絢『少女セクト』を研究対象として、ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成について考察してきた。「レズ」という異性愛男性をターゲットするポルノコンテンツのカテゴリーに対して、少女小説と〈百合〉表象における性規範の要請、少女マンガにおけるレズビアン表象の少なさ、「エロマンガ」における女性同士の性表現の困難さ、といった制限がある。性表現の絶頂を保証するペニスの射精が描かれない一方、読者のジェンダーを問わずにマンガのポルノグラフィの共通点と捉えられる「受けの中心化」と「流動的な視点」が女性同士の性表現を支えている。マンガの図像表現を踏まえ、『少女セクト』では意欲的に他ジャンルの物語内容の紋切り型、特に「レイプ」と「ハーレム」の要素が複合的に用いられた。

暴力的な性表現を通して他者への支配を楽しむ「エロマンガ」の「レイプ・ファンタジー」に対して、『少女セクト』は女性同士ならではの「攻めの被害者」と「受けの加害者」を創出する。そして効果線というマンガ表現記号を通じて、これまで静的に描かれてきた女性同士の性交渉は過激で動的に描写されている。〈ＢＬ〉マンガからの「愛ゆえのレイプ」と「魅力の証明としてのレイプ」といった紋切り型に対して、加害者の失恋により、恋愛感情によって隠蔽された暴力性が露呈される。また、「攻めの被害者」と「受けの加害者」との組み合わせを通じて、性暴力を受けた被害者に女役のポジションを与える機能が停止される。従って〈ＢＬ〉の紋切り型に内包される性役割分担と暴力の宛先との連続性が浮かび上がる。

レイプ表象に対して、ハーレム表象は性的同意のある非対称な権力関係として描かれている。主人公の思信をめぐり、献身的な恋愛感情を持つ真弥と、恋愛ではない依存関係を求める麒麟が主要な登場人物としてハーレムの中核を形成する。そして真弥は思信への愛情は揺らいでいないものの、グループセックスに積極的に参加するようになった。麒麟は従属者の自分が支配者の思信の能動性を奪うという親密性を要求する。こうして、恋愛と性行為に不連続性を与え、支配／従属の権力関係を転倒的に描き出した。さらに、もう一人の主人公である桃子のポジションにより、日常生活と性生活が分離され、性役割と権力関係の不連続性も表出される。

このように、『少女セクト』は性的消費物とされる従来のレズビアン像を横領し、異性愛規範に縛られない親密圏と性的実践をレズビアンの性愛ファンタジーとして描いた。女学校と寄宿寮という特殊空間における少女たちの多感な悩みという特徴を取り組みつつ、結末では主人公の同性愛関係を一時期の性的逸脱に収斂させない。この異性愛規範に抵抗しようとする想像力は、『少女セクト』が「エロマンガ」の例外として評価された原因だろう。ただし、レイプ表象とハーレム表象の先鋭性に反して恋愛エピソードでは男女の性役割分担をなぞる一面がある。モノガミーの恋愛関係における攪乱的な身体行為や性的同意のある暴力的な性描写についての考察は、専門誌『百合姉妹』と『コミック百合姫』に託して今後の課題とする。

（くお　るーめい・映像・現代文化論研究室）

注

1 稀見理都（協力＝アオヤギミホコ）「百合・レズエロ漫画 百合とは違う女性同士のもう一つの性愛コミック」安田理央、稀見理都編『アダルトメディア年鑑二〇二四』（イースト・プレス、二〇二三年一二月）六二～六三頁。

2 郭如梅「少女マンガにおけるレズビアン表象の再編成」『日本近代文学会北海道支部会報』二八号（二〇二五年五月三一日）四二～五六頁。

3 久米依子『「少女小説」の生成』（青弓社、二〇一三年六月）二一一頁。赤枝香奈子「おめとエス」井上章一ほか編『性の用語集』（講談社、二〇〇四年十二月）二六七～二七四頁。赤枝香奈子「百合」井上章一ほか編『性的なことば』（講談社現代新書、二〇一〇年一月）二七七～二八六頁を参照。

4 郭如梅「ゼロ年代〈百合〉表象論」『層』一七号（二〇二五年三月）一二五～一四三頁。

5 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？』（朝日文庫、二〇〇八年六月）二七一頁。

6 郭如梅「ゼロ年代〈百合〉表象論」『層』一七号（二〇二五年三月）一二五～一四三頁。郭如梅「少女マンガにおけるレズビアン表象の再編成」『日本近代文学会北海道支部会報』二八号（二〇二五年五月三一日）四二～五六頁。

7 溝口彰子「同じ物語なのになぜレズビアンが疎外感を味わうのか」『ユリイカ』二〇一四年一二月号（青土社、二〇一四年一二月）一二四～一三二頁。溝口彰子「国際マンガ展の文脈で『青い花』を考える」『ユリイカ』二〇一七年一一月臨時増刊号（青土社、二〇一七年一〇月）一七〇～一七七頁。

8 蔵王大志作画・影木栄貴原作『春夏秋冬』完全版（一迅社、二〇二一年十月）二〇五頁。

9 『百合姉妹』三号（マガジン・マガジン、二〇〇四年四月）一四六～一四七頁。

10 『百合姉妹』三号（マガジン・マガジン、二〇〇四年四月）二〇五頁。最新刊は『百合姫 Wildrose』八号（一迅社、二〇一四年七月）。なお、二〇一一年に誌名が『Girls Love』に変更したことがある。

11 NOV執筆、中村成太郎構成「百合ヒストリー　アーカイブ」『コミック百合姫』二一号（一迅社、二〇一〇年七月）二〇〇～二〇三頁。綾奈ゆにこ「百合クロニクル」『ダ・ヴィンチ』二〇一八年三月号（KADOKAWA、二〇一八年二月六日）一七四～一七七頁。

12 本稿の引用は玄鉄絢『少女セクト』一巻（メガストアコミック、二〇〇五年九月）、『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年

五月）に拠った。

14 日本近代文学における女性同性愛の主要人物には、男との性的経験があるという設定が紋切り型のようにある。伊藤氏貴『同性愛文学の系譜』（勉誠出版、二〇二〇年二月）一六二～一六三頁を参照。

15 全一六篇のエピソードは次のように分類することができる。「恋愛」ものは一話、三話、六話、八話、一三話、「デイ・アフター・少女セクト」といった六篇がある。「ハーレム」を描くものは二話、七話、おまけ一、九話、一〇話、一一話、おまけ二といった七篇がある。「レイプ」をテーマにするものは、四話、五話、一二話といった三篇がある。

16 安田理央・稀見理都編『アダルトメディア年鑑二〇二四』（イースト・プレス、二〇二三年一二月）六三頁。

17 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二八〇頁。

18 守如子『女はポルノを読む』（青弓社、二〇一〇年二月）一三九頁。

19 守如子『女はポルノを読む』（青弓社、二〇一〇年二月）一八八～一八九頁。

20 三つのジャンルを比較する守如子の論考に加えて、永山薫の「エロマンガ」に対する考察と溝口彰子の〈ＢＬ〉への分析は一様な観点を示している。永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二七四頁。溝口彰子『ＢＬ進化論』（太田出版、二〇一五年六月）八二頁を参照。

21 守如子『女はポルノを読む』（青弓社、二〇一〇年二月）一一一～一一二、一七一、一七四頁。

22 宇野常寛は「レイプ・ファンタジー」を「セカイ系」という作品群の特徴として唱える。しかし、セカイ系はポルノコンテンツを含むものの、ポルノグラフィのジャンルとは言い難い。他方、本稿が多く参照している守・永山・溝口の論考では、守はロビン・モーガンのいう「ポルノは理論であり、レイプは実践である」を引用し、永山は「ポルノがレイプを準備する」という翻訳を採用し論述を展開した。溝口はキャサリン・マッキノンなどの反ポルノ運動の言説は引用しなかったが、性的同意のない性行為の描写を分析した。したがって、本稿が扱う「レイプ・ファンタジー」の文脈は宇野の問題関心と異なる。宇野常寛『ゼロ年代の想像力』（早川書房、二〇一一年九月）二三三～二五九、三一三～三三四頁。守如子『女はポルノを読む』（青弓社、二〇一〇年二月）二八頁。永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二一四頁。溝口彰子『ＢＬ進化論』（太田出版、二〇一五年六月）八三～八七頁。Morgan Robin, “Theory and Practice: Pornography and Rape.” *Take back the night*, edited by Laura Lederer, William Morrow & Co, 1980, pp.134-140.を参照。

23 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二一八頁。

24 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二一九頁。

25 溝口彰子『ＢＬ進化論』（太田出版、二〇一五年六月）八三頁。

26 溝口彰子『ＢＬ進化論』（太田出版、二〇一五年六月）八四～八七頁。

27 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二一九頁。

28 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補（筑摩書房、二〇一四年四月）二二四～二二九頁。

29 堀あきこ「第八章　ポルノとＢＬ」堀あきこ・守如子編『ＢＬの教科書』（有斐閣、二〇二〇年七月）一四七頁。

執筆者一覧

久保田琉惟（修士課程・哲学倫理学研究室）
菅野　裕暉（博士後期課程・哲学倫理学研究室）
深尾　紘平（修士課程・哲学倫理学研究室）
間宮　望恵（博士後期課程・文化人類学研究室）
日下　雅貴（修士課程・芸術学研究室）
王　　泰睿（博士後期課程・映像・現代文化論研究室）
孫　　拓未（修士課程・言語科学研究室）
池田　拓誉（博士後期課程・言語科学研究室）
張　　琴琴（博士後期課程・言語科学研究室）
中村真衣佳（博士後期課程・言語科学研究室）
黄　　銘君（博士後期課程・言語科学研究室）
アリ　ネスリン（博士後期課程・言語科学研究室）
呉　　暁輝（博士後期課程・言語科学研究室）
池田　航輝（修士課程・スラブ・ユーラシア学研究室）
比嘉　麻理（博士後期課程・社会学研究室）
凌　　玲（博士後期課程・中国文化論研究室）
李　　楚妍（博士後期課程・映像・現代文化論研究室）
寺本真太朗（博士後期課程・映像・現代文化論研究室）
郭　　如梅（博士後期課程・映像・現代文化論研究室）

研究論集　第 25 号

Research Journal of the Graduate School of
Humanities and Human Sciences

Vol. 25

編集・発行

北海道大学大学院文学院

Hokkaido University
Graduate School of Humanities and Human Sciences

2026 年 1 月 16 日発行

㈱アイワード